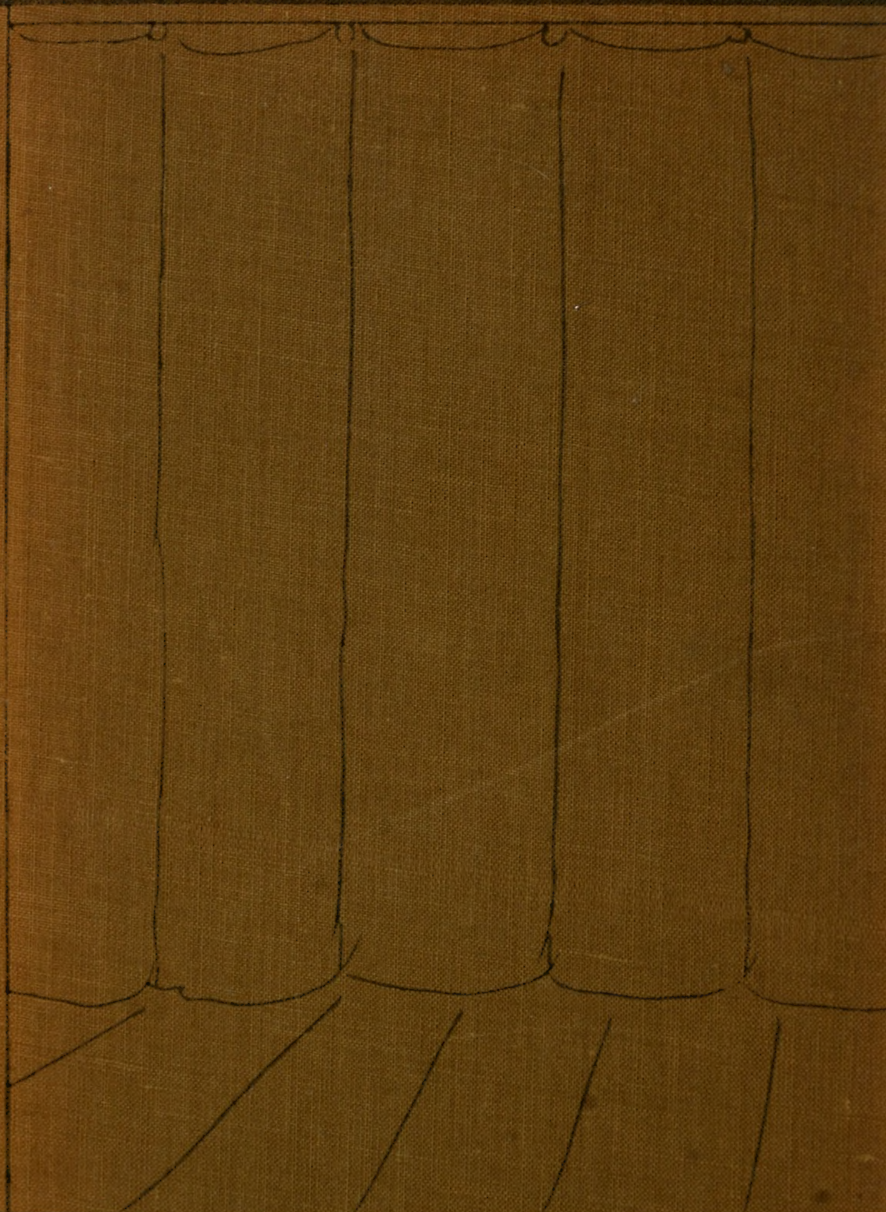


日本戲曲全集第三十二卷

河竹新七及竹柴其水集

東京 春陽堂版

日本戯曲全集 第三十二巻 目次

三世河竹新七篇

竹柴其水篇

三世河竹新七篇

御好に依る狂言は戸田の河原で次郎兵衛が殺すお清の怨念に悩みて其身も狂ひ死に扨光陰もたつか弓武藝を磨く本田家の左門之助の御前にて都築武助が武を顯はし槍に名を得し八重垣に勝負の試合が遺恨となり討し噂も高松の情に遁れ旅の空慕ふお千代に母親のおとしも慈悲の海山を越しかひなく憂別れ譲る記念が身を果す基に佐野の次郎左衛門遊里の酒に榮之丞の間夫と張合ひ深入りして附込む無心の權八も高を括りし長兵衛に恥しめられて八ツ橋の身受に邪を入れ智恵のあいそ盡しと白紙へ記す信女に空月が魔廻る因果の物語兄勘兵衛に後々を頼みに歸る故鄉も次六を聟にお賤が悦び今ぞ殘らぬ思出に恨みの刃覺えよと切た騷ぎも大屋根へ水鐵砲を機轉の捕物

其頃遊女井筒印

籠釣瓶花街醉醒

八幕

籠釣瓶花街醉醒（八幕）

序　幕

蕨宿八幡宮棟上の場
戸田川原お淸殺の場

役名＝佐野次郎兵衞。旅僧祭月。大工伊太郎。同六松。同半次。同仁藏。女乞食お吉。同お才。同お牛。同お長。茶店の亭主。神主左司馬。庄屋杢右衞門。百姓甲乙。旅人。田舎娘お米。同お種同お大。女乞食お淸實は次郞兵衞女房おせい。

本舞臺平舞臺、上の方丸木の大鳥居、注連を張りし青竹二本を建て、正面草土手、丸太の玉垣、鳥居の中に斜に松並木、下手に葭簀張りの茶店、門口に職人方貸切と記せし貼札、鳥居の前に八幡宮上棟二十五座神樂執行の建札、總て蕨宿八幡宮鳥居先きの體。爰に大工四人棟上げの印半纏、股引腹掛けにて、床几へ腰を掛け、棟上げの撒き餅を入れし籠を置き、煙草をのんで居る。茶店の亭主茶を出してゐる模樣、臺拍子の鳴物にて幕明く。

亭主　皆さん、お茶をおあがりなさいまし。

四人　アイ〳〵。

亭主　今日は八幡樣の棟上げだから、どうぞお天氣にしたい物と思つて居ると、昨日の申刻に大かい地震が揺りましたから、五七が雨で必定降りと思つたに、八幡樣のお庇で、天氣になりました。

伊太　今日降られたら棟上げを明日に延ばさにやアならねえが、一日延びるとどの位え物が掛かるか知れやアしねえ。

六松　神主樣も仕合なら、氏子の衆も大助りだ。何にしろ餅を拾ひに近在から、出て來た人は大層だ。

半次　お宮の前は人で埋まり、通る事も出來ねえが、撒いて終はにやア、アノ人達は歸らねえ。

仁藏　惣村方の世話人衆が揃つた上で祝詞を上げ、それから棟上げの式があつて、目出度く餅と錢を撒くのだ。

亭主　昨日から村中で二石から餅を搗きましたが、今日參詣に來た人へ、頭割りにしましたら、一つ宛にもなりま

すまい。

伊太　何れを見ても山家育ち、寺子屋の臺詞にあるが餅を拾ひ〻在方から、姉え達も出て來たが、平常つけねえ白粉を塗つ〻面見られねえのさ。

六松　さう惡く云はねえ物だ、今し方來た一群は色が白くてボッチャリと當世向きのよい娘、何と云つても此所等は江戸近え所だから、そんなに田舍臭くねえ。

半次　そりやア手前の云ふ通り、昨夜泊つた宿屋の娘は江戸に奉公して居たさうだか、水道の水を飲んだ爲だか、飯の給仕に出た女と較べて見ると雪と墨だ。

仁藏　よく噺し家が枕にふるが、日の本は岩戸神樂の昔より女ならでは夜の明けぬ國一寸斯うした噺しをするにも先きへ出るのは女の事だ。

亭主　女と申せば向うから、娘達が參りました。

ト向ふを見て云ふ。右の鳴物にて在所娘三人餘所行きの拵へにて出て來り舞臺へ來る。

伊太　オイ〱姉さん、お前達は何所へ行くのだ。

お米　八幡樣へ棟上げの餅を拾ひに行きまする。

お種　お午からと聞きましたが、

お大　モウ撒く時分でございますかえ。

六松　神主樣の祝詞が濟んで、それから餅と錢を撒くがなかなか社内は充滿で、おまへ達には拾へまい。

半次　怪我でもすると、つまらねえから、爰で噺して行きなせえ。其代り餅と錢とは爰にあるから上げやせう。

仁藏　お宮の前で押された上、巾着切りに簪でも拔かれた日にはつまらねえ、まア兎も角も掛けなせえ。

お米　そんなに込んでは行けませぬか、産神樣の棟上げ故、餅やお錢を貰はうと、友達連れで來ましたが、おまへさん方が下さいますか。

伊太　上げるとも〱、俺達が皆撒くのだから、今別當所へ持つて行くので、爰に一箱持つてゐる。

六松　是をお前方に上げるから、爰でゆつくり噺しなせえな。

お種　それではお宮へ行きませんから、餅とお錢を下さいまし。

お大　いゝお方にお目に掛かり、怪我をせずに濟みました。

伊太　さア餅が五つに錢が五文、紙へ包んで上げるから、是を持つて行きなせえ。

ト半紙を懷中より出して是へ包み、三人に一ツ宛やる。

お米　是は有難うござります。向うの家で拾つたら分けて呉れと云ひましたから、モウ一包み下さいまし。
六松　サア／＼幾個でも持つて行きなせえ。
ト又一ツ渡す。
お稻　私も隣家で頼まれましたから、迚もの事にお米さんと、
お大　同じ樣に私等にも、モウ一包みおくんなさい。
半次　上げるとも／＼、やり度くつてならねえのだ。
ト又一包づゝ二人にやる。
亭主　モシ、私にも下さいまし。
伊太　爺さんおめえは一包みだ。（ト一ツやる。）
亭主　モウ一ツ下さいな。
伊太　女でねえからやられねえ。
女三人　大きに有難うございました。
ト行きかけるを止めて、
伊太　まアお前方は何處の村だか、何れ爰らの近所だらう。
六松　田舍に稀な容貌よし、定めし田植の其時には村のせなアと手を取り合ひ、
半次　豐年祭りの夜るなんぞは、鎭守の森で樂しむだらう。
仁藏　モウ一包みづゝやらうから、其噺しを聞かして下せえ。
お米　有難うござんすが、そんな事は、
三人　知りませんよ。
伊太　ナニ知らねえ事があるものか。
六松　かう見た所が十七八、
半次　山茶も出花の年盛り、
仁藏　知つて居るに違えねえ。
ト四人娘を取り卷いて揶揄て居る。下手より女乞食四人出て來て、
お吉　棟上げの餅とお錢を、私共へも、
四人　下さいまし。
伊太　まだ棟上げの式も濟まず、家根で撒かねえ其中は錢も餅もやられねえよ。
お吉　そんな事を仰しやらずと、一包みづゝ下さいまし。
お才　隣家や向うで頼まれたと、餘計な事は申しません。
お半　タッタ一人でございますから、一包みづゝ下さいまし。
お長　其代り素人の樣に跡强請はいたしません。
六松　いくら呉れと云つたつても、式の濟まねえ其中は、やる事はならねえのだ。

お吉　それはさうでも御座りませうが、爰に居る娘ッ子に二包みづゝやんなすつたから、それでおねだり申しますのさ。
半次　夫ぢやア姉え達に餅をやるのを、手前達は見て居たのか。
おオ　其娘ッ子にやんなさるのを、鼻の下を長くして涎を流して見て居ました。
仁藏　此三人は世話人の娘だから、やつたのだ。
お吉　夫だから私共にもおくんなせえ、其代り土手下で青天井の草の上、乞食仲間の總噺し、
お牛　噺してお聞かせ申しますから、
お長　早く餅をおくんなせえまし。
伊太　エ、薄ぎたねえ、側へ寄るな。
六松　手前達にジタバタされると、
半次　寝臭つて堪らねえ。
仁藏　早く其方へ行つてくれ。
お吉　行くから餅を、
四人　おくんなせえ。
伊太　エ、しつッこい、遣らねえといふに。
お吉　夫ぢやアどうでも、くんなさらねえのか。

六松　やらねえと云つたら、やりやアしねえ。
おオ　呉れざア此方あ貰はねえ。
お牛　今の娘にやりながら、
お長　ホンニ惚けた野郎だナ。
伊太　どうしたと。
四人　鼻つたらしやアイ。
ト乞食四人は惡口しながら下手へはひる。此中亭主は娘三人に逃げろと目で知らせる。娘は窃と上手へはひる。
伊太　ウヌ、待ちやアがれ。
ト追つかけようとするを、三人は止めて、
六松　旅を稼ぎの宿無しめら、相人にしちやアつまらねえ。
半次　逃げて行つたは幸ひだ。
仁藏　打捨つて置くがいゝ。（ト娘の見えぬに心付き、）
六松　乞食は逃げて行つたはいゝが、
半次　手馴づけようと思つた娘が、
仁藏　何處へか逃げて行つてしまつた。
お吉　爺さん、おめえ知らねえか。
亭主　乞食の方へ氣を取られ、一向に存じません。
伊太　是といふのも乞食故、

六松　何にしろ今の娘を、
半次　社の中を探して見よう。
仁藏　忌々しい乞食めらだ。
ト臺拍子の鳴物になり、餅の箱を擔いで職人四人は鳥居の中へはひる。亭主見送つて、
亭主　いくら探したつて居るものか、疾に家へ歸つて居るワ。形は隨分氣が利いて居るが、女に惚い人達ちだ。ドレ、今の間に水でも汲んで來ようか。
ト手桶を提げて下手へはひる。向うより、庄屋杢右衞門羽織袴、百姓三人羽織着流しにて出て舞臺へ來る。是と同時に鳥居の中より神主左司馬烏帽子狩衣にて出て、
左司　是は庄屋の杢右衞門殿、先刻よりおいでをお待ち申して居りました。
庄屋　早く參らうと存じた所、村方の公用で、大きに遲くなりました。
百姓一　最早近村の衆は、
百姓二　參られましてござりまするか。
左司　先刻より殘らずお揃ひにて、お待ちなされてござります。

庄屋　夫はお氣の毒な事で御座つた。（ト床几へ掛け）
左司　扨當社も殊の外大破に及びましたを、氏子中の御丹精にて今般新たに造營いたし、今日は棟上げと差掛り、先づ以て祝着至極、村方の何れものお世話、殊に貴方のお骨折り一方ならず、他村と競べて御奉納も餘分にて、嘸かし八幡宮の神慮にも叶はせらるゝ事でかな御座りませう。
庄屋　是と申すも支配下の百姓衆が一致して、他村に負けては宮本で、外聞に拘はると張り込んでくれました故、御奉納も外々より高が登つた譯でござる。
左司　全く夫も貴方の御配慮、又世話役の二人の衆も、此度の奉納には多分のお骨折、有難うござります。
百一　産神樣の事だから、出來るだけはします心、
百二　併し小前の者なれば、高が少なうござります。
左司　イヤ／＼他村から見まするに、餘程多分で御座ります。何に致せ先刻より皆樣がお待兼ね、別當方へお出で下され、直ぐに祝詞に掛かりまして棟上げの式に移りませう。
庄屋　大きに遲刻をしましたから、
百一　他村の衆へ、

二人　詫びをしませう。

左司　左樣なれば別當方へ。

庄屋　ドレ、御一緒に、（ト立ち上がるを道具替りの知らせ。）參りませう。

ト寡拍子の鳴物にて、四人鳥居の内へはひる。
これにて道具廻る。

本舞臺平舞臺、正面柵矢來、後ろ松杉の林、上下藪疊、眞中に大きな角材を横に置き、此傍に八幡宮造營用材と記せし建札、總て八幡宮裏手の體、薄く臺拍子の鳴物にて道具止る。

ト時の鐘合方になり向うより次郎兵衛女房お清女乞食頭陀袋古き笠竹杖に縋り出て來り花道能き所へ止り。

お清　水の流れと人の身は何うなるものか知れぬもの、以前勤めをして居た時分は、譬にも云ふ苦界の勤め辛い事もあつたれど、又面白い事もあつて、明けても暮れても縮緬物にくるまつて居た此身體が、見る影もない今の姿ア、情ない事ぢやなア。

ト右の合方にて舞臺へ來て角材に腰を掛け、

こんな難儀を今するも永年勤めをした餘毒で、醜い姿に亭主に捨てられ、艱難辛苦をした果が乞食にまでなり下り、いつその事に身を投げて死なうと覺悟したなれど、何たる因果か死に兼ねて三度の食も碌々に喰べる事のならぬ身の上、今日は向ふの八幡樣に棟上げがあると云ふ故、後には餅を撒くであらう、午の御飯を喰べぬから、どうか夫を二つ三つ、拾つて歸りたいものぢやナア。

ト勞れし思入爰へ上手より以前の職人四人出て來て、

伊太　先刻の娘はどうしたらう、社の内を探しても、

大松　見えぬは直に歸つたか、こんな馬鹿な事はねえ。

半次　逃げられるなら此餅を、やらずにしまやアよかつたに。

仁藏　惜しい事をしたぢやアねえか。

ト　お清餅の箱を見て、側へ寄つて

お清　モシ若い衆樣、私に其餅を二三ッ下さいませんか、お恥しいがまだ今日は、お晝の御飯を喰べませぬ、お助けなされて下さりませ。

伊太　見りやア大分腫物が吹き出してゐるな。

お清　ハイ若い時分に勤めをした、餘毒で終に此樣な見苦しい姿になりました。

六松　以前勤めをした果ぢやア、云はずと知れた怨靈だら

う。
牛次　骨がらみと來た日にやア、容易な事ぢやア治らねえ。
仁藏　まづ大概な藥より草津へ行つた方がよからう。
伊太　何にしろ可愛想だ、棟上げの錢と餅をやるから、是を持つて早く行きねえ。
ト箱の中より錢と餅を出してやる。
お清　是は有難う御座ります、お庇樣で助かります。
ト頭陀袋を出して餅と錢を貰ふ。
伊太　夫はさうと先刻の娘は、何處へ逃げたらう。
六松　惡くしたら餅を取りに、狐が化けて來たのかも知れねえぜ。
牛次　まさか晝日中化けても來めえ。
仁藏　眉毛を濡らしてモウ一遍、
伊太　狐の尻尾を見出してやらう。
ト四人の職人以前の道（上手）へはひる。
お清　ア、世に人鬼はないものぢやナア。
ト合方しんみりとなり、
今の衆に棟上げの錢と餅を貰つたので、木賃宿で米を買ひ炊いて貰ふ世話がない、ア、有難い事ぢやなア。
ト嬉しきこなしにて立ち上がる、物蔭より（下手）以前の女乞食四人出て、お吉はお清の袖をつかまへて、
お吉　ヤイ、汝は何處から來やアがつた、こゝら邊りに見馴れぬ奴。
お才　仲間入りもしやアがらずに、
お牛　繩張り內をノソ〳〵と、
お長　貰つて步くとは太え奴だ。
お吉　一體汝は何處から來たんだ。
お清　ハイ私は御覽の通り、瘡毒を煩ひまして草津へ湯治に參ります、旅の者でござります。
お吉　なんだ瘡をかいて草津へ行く、夫は手前いゝ工面だ。
お才　斯う見た所がこちとらと、同じぼろッこを着て居るが、
お牛　乞食のくせに草津迄湯治に行くと云ふからは、
お長　此奴ア金を持つて居るぜ。
お清　イエ〳〵持つては居りませぬ、僅かなお錢をお貰ひ申し、漸く命を繫ぐ者、今日は朝から貰ひもなくまだ晝飯さへ喰べませぬ、夫故身體に力がなく步く事さへなり兼ねまして、爰に休んで居りましたら、今棟上げの職人衆が可愛さうだと仰しやつて、下さいました棟上げの餅とお錢が十文許り、外に何も御座りませぬ。

お吉　あるか無えか首に掛けた、其頭陀袋の中を見せろ。
お清　中には箸と缺け椀に今貰つた餅ばかり、外には何も御座りませぬ。
お才　何ねえ事があるものか、草津へ行くと云ふからは、
お牛　幾らかあるに違えねえ。
お長　其頭陀袋を振ッて見せろ。
お清　是は堪忍して下さりませ。
お吉　さう強情を吐かしやアがりやア、手込めにしても見にやアならねえ。
ト四人お清を押え附け、頭陀袋を取上げ、中より椀箸と以前の餅錢なぞを出し、
どうだ〳〵頭陀袋の中に何があつた。
お才　成程何も無えと云つたが、椀と箸と淺草紙、
お牛　棟上げ餅が十ばかり、撒き錢が十文ある。
お長　錢目な物は無えからは、餅を取るより爲方が無え。
お吉　先刻の奴等が奨れねえ代り、此奴の餅を取つてやらう。
三人　夫がいゝ〳〵。（ト餅と錢を取上げる。）
お清　折角私が貰つた其餅、せめての事に二ツ三ツ殘して行つて下さいまし。

お才　四人の頭へタッタ十個、一人前に二ツ半是を殘してやられるものか。
お牛　淺草紙も棟上げの錢も此方へ取り揚げ婆アだ。
お長　三ツ目の餅を食ふ代り、椀と箸は返してやらうよ。
（ト頭陀袋を叩き附ける。）
お清　エ、お前方は人の物を、手込めに取つて濟まうと思ふか。
お才　手込めに取つて惡いと云ふのか。
お清　惡くなくッて何うしよう、手込めに取れば盜人ぢや。
お吉　高の知れた棟上げ餅や錢を取つたを御大層に盜人呼はり。そんな事を吐かしやアがると、迚もの事にぼろッこも、引つ剝ぐからさう思へ。（トお清びつくりして）
お清　今、盜人と申しましたは私の過ち故、どうぞ堪忍して下さいまし。（ト詫びる）
お吉　インニヤ勘辨ならねえ、斯ういひ出したら引つ剝ぐから、きり〳〵裸に、
四人　なりやアがれ。
ト早き臺拍子になり、お清逃げるを四人引捕へて剝がうとする、上手より空月旅僧の拵へ網笠を持ち笈を負ひ出て中へ割つて入り、

空月　どういふ譯か知らないが、見れば女一人をば三人四人で何うさつしやる、まア〱待たつしやれ〱。

お吉　汚い容はして居ましても、淸い心の私等に盗人の名を附けたから、盗人なら盗人の樣に身ぐるみ剝いでやりますのさ。

空月　夫はさうでも御座らうが、通り掛かつた愚僧が仲裁、一杯酒を買ひませうから、堪忍してやつて下さい。

お吉　夫ぢやアお前さんが私等に、一杯買はうと仰しやるのか。

空月　少なからうが不承して、是で酒でも飲んで下さい。

　ト頭陀袋より銀玉を出し、紙に包み出す、お吉受取り開き見て、

お吉　コリヤ五匁銀でございますね。

お才　四人の頭へ五匁ぢやア、

お牛　たらふく酒は飲めねえぜ。

お才　併し通り掛りの御出家さんが、お止めなすつて下すつたんだ、爰は一番お頭に免じて圓く納めませう。

空月　夫は早速忝ない、人を助けるが出家の役故、見兼ねて止めにはひつたが、了簡して下されて、止めにはひつた甲斐がござつた。

お吉　お前さんがお止めなさらにやア、否か應でも引剝いで素ッ裸にしてやりますのに、

お才　瘡ッかきのボロッこは、此方も着るのは嫌だから、

お牛　屑屋かぼろ屋へ賣つた所が、僅か二百か三百ぐらゐ、

お長　お救ひの五匁銀で、淸く一杯飲みませう。

空月　サア早く行つて飲まつしやい。

お吉　こりやア大きに、

四人　お有難うございます。

　ト四人ワヤ〱言ひながら向うへはひる。お淸はこなしあつて、

お淸　お情深い御出家樣、貴方のお庇で助かりまして、有難う御座ります。

空月　何處の果でも野伏りは情を知らぬ者ばかり、手荒い事をした樣ぢやが、何處も怪我はさつしやらぬか。

お淸　向うは四人此方は一人、太く撲たれましたれど、仕合と怪我はいたしませぬ。

空月　夫は何よりようござつた、お前は江戸の詞だが、どういふ事で此樣な難儀な身にはならしつたナ

お淸　仰しやる通り私は江戸の生れで御座りまするが、夫に捨てられ此樣な、果敢ない身になりました。

空月　定めて深い譯があらう、袖振り合ふも他生の緣、見らるゝ通り雲水の先きを急がぬ旅の僧、斷してよくば其次第を、私に斷して聞かして下され。

お淸　お尋ねなくとも身の懺悔、只今お斷し申します。

空月　オヽ此の材木へ腰を掛け、（ト空月はお淸に材木へ腰を掛けさせ、自分も上の方へ腰を下ろし、）サア〳〵斷して聞かせなさい。

お淸　何をお隱し申しませう、元私は江戶の者で子供の折りに兩親共、亡りまして店受けの伯父の所へ引取られ育てゝ貰ふ其中に、伯父が病氣に差支へ十六の年吉原へ、賣られましたが始めにて、夫から品川新宿と諸所へ住替へ致した末流れ〳〵て深川の、家鴨新地に居ります時、野州生れの次郎兵衞と云ふ旅商人と馴染になり、年が明けて其人と夫婦になつて居ります中、勤めの中に受けました瘡毒が發しまして醜い姿となりましたら、邪險にも其夫は私を見限て衣類諸道具賣りこかし、立ち居も出來ぬ私を置き去りにして行方知れず、何ういたさうと存じた所、お慈悲深いお醫者樣が藥代もお取りなさらず、步ける迄に治して下され、夫を力に世帶を疊み夫を尋ねに出ましたが野州生れと聞いたのみ、委しい事を知りませねば、何處に居るやら行方が知れず、其中路用の金は盡き死なうと思ひましたのも幾度か知れませぬが、置き去りにした次郎兵衞に逢つて恨みが云ひたいばつかり、終には人の門に立ち、一錢二錢の手の內受け果敢ない命を繫ぎます恥を曝して居りまする。

空月　夫は悔しい事であらう、煩つて居る女房を捨て逐電した夫は、人の道に缺けた爲方、存命なれば末々は天の御罸を蒙つて、必ず非業の死を遂げん、斯る邪險の夫を持ち此方が難儀に逢ふと云ふも、是も前世の宿業にて親のなしたる惡事の報い、憂き目を見るも三世の因果我が身の業と諦めて、只一心に彌陀を念じ深く後生を願ひなば、親御の罪障消滅して、成佛得脫疑ひなし、第一親の菩提となれば夫を恨む念を去り、朝夕念佛を唱へられい、さすれば功力で末々は、安樂な身になられまするぞ。

お淸　有難い其お諭し、別れた時は子供にて、何も存じませなんだが、後に人に聞きますと親は心のよからぬ者にて、惡い事をしたとやら、永年苦界の勤めをして乞食に迄成り下りまするは、惡い事をいたしました親の報いでございませう。今私が難儀をいたし親の業が滅しまして

成佛得脱いたしますなら、此身の難儀は厭ひませぬ。
空月　親が成佛得脱するも、其報いにて難儀をするも、此方の心を第一に直して後生を弔らはれい。定めし憎くも御座らうが、其所を忍んで次郎兵衛殿とやらを、恨む念を捨てるが肝要。
お清　親の爲にならぬとあれば、恨む心を捨てねばならぬか。置き去りにした人でなし、どうも悔しうてなりませぬ。（トロ惜しき思入。）
空月　其悔しう思ふのは女の身では尤ぢやが、其所を思ひ斷たねばならぬ、其念のある中は自が心に己れが責められ、憂き艱難をせねばならぬ、計らず爰で出會つたは全く彌陀の御導き、佛の諭しと心を改め、念佛修行をなさるがよい。夫が卽ち親の爲め、此方の爲になりまする。
ト空月物靜かに說く。
お清　見ず知らずの私へお慈悲深い御出家樣が、事を分けてのお諭しは、阿彌陀樣のお導き有難いと存じますから憎しと思ふ一念を、愼みますで御座りませう。
空月　さうさつしやれば遠からず、幸ひが來て苦患を遁れ、安樂な身となられまするぞ。
お清　だん〳〵との貴方の御意見、身に沁々と有難う御座ります。
ト此内空月は頭陀袋より金を出して、
空月　コレ女中、僅かなれども此金を、愚僧が此方へ進ぜます。（ト紙へ包みて渡す、お清受取て、）
お清　貴方樣に此樣な、御心配を受けましては濟まぬ事では御座りますれど、實は一錢の貯へとても御座りませねば、此のお金はお貰ひ申して參ります。
空月　そちつと進ぜたいなれど、行方定めぬ沙門の身の上、ホンの心ばかりで御座る。
お清　野宿をいたす身分故、是丈あればどの位ゐ心丈夫か知れませぬ。
ト此時、時の鐘鳴る。
空月　愚僧は是から板橋迄行かねばならぬ用事がある故、是で此方に別れませう。
お清　何とお禮を申しませうか、有難う御座ります。（ト手を突いて一禮する。）
空月　そんなら旅の女中殿、
お清　お情深い御出家樣、
空月　御緣があらば、又逢ひませう。
ト時の鐘合方になり、空月向うへはひる。お清は後ろ

影を伏し拜みて、

お清　人を救ふは御出家の常とは云へど、お慈悲深いお情籠るお志し、御意見の上お金迄お惠みなされて下されたれば、置き去りをした次郎兵衞を、憎いと思ふ心をば愼しみまするで御座りませう。

ト此時合方にて上手より、次郎兵衞半合羽、脚絆一本差し、旅裝にて早足に出て來る、前を通るな、お清行き合ひ。

お清　ヤ、次郎兵衞さんか。

次郎　アツ、お清か。

お清　よい所で逢ひました。

次郎　南無三、逢つては、（ト逃げに掛るを縋り止め、）

お清　逃げようとて逃がすものか。

ト次郎兵衞振り拂ひ逃げようとするを逃がすまいとする立廻りよろしく、お清武者振りつき、放さぬ故次郎兵衞是非なく和め、

次郎　コレお清、腹も立たうが堪忍してくれ〳〵、

お清　おまへ、許りは此樣な、邪險な人とは思はなんだ、よくも置き去りにしなすつたな。

次郎　おめへを捨てる氣は無えが、商賣用で奧州へ行つた先きで俺も煩ひ、一年餘り難儀をして漸う江戶へ歸つて來たが、手前の居所が知れねえので、ツイ夫なりになつたのだ。

お清　そんな嘘を云つたとて、夫を誠に思ふものか、おまへに捨てられ誰一人、構つてくれる人はなし、とう〳〵こんな容姿になつたが、逢つて恨みが云ひたさに、死なうと思ふ命を存へ、艱難辛苦をしたかひあつて、思はず爰で逢つたのは神や佛の引き合せ、御出家樣のお諭しに憎いと思ふ恨みを捨てれば、元惚れ合つた仲だけに喰ひ附く心もなくなりました。

次郎　ソリヤ俺とても同じ事、何處に居るかと今日迄も手前の行方を探してゐた。

お清　さう云ふお前の心なら、憎い〳〵と思つたも水に流してしまふから、私を元の女房にして是から見捨てゝお呉れでないよ。

次郎　かうして廻り會ふからは何で手前を見捨てるものかな。

お清　夫では見捨てゝお呉れでないよ。（ト次郎兵衞の側へ寄り、）トハ云ふもの丶以前と替り、穢い容の女乞食、こんなになつても原の樣に、可愛がつておくれかえ。

次郎　夫は云はねえでも知れた事、可愛がられねえでどうするものか。

ト次郎兵衛隙を見て逃げようといふ科、お清次郎兵衛を試す心にて側へ寄り、

お清　ホンニ可愛がつておくれなら、今夜是から宿屋へ泊り、久し振りで次郎兵衛さん、寝物語りをしたいねえ。

次郎　寝物語りも僞様けれど、木賃宿でも其容ぢやア断わられるに違えねえ、宿場へ行つて古着を買ひ、湯へでもはひつて綺麗になり、夫婦連れで泊るとしよう

お清　夫は誠で御座んすかえ。

次郎　十九や二十歳の者ぢやアなし、此俺だつて四十を越し、分別盛りの年をして何偽りを云ふものか。

お清　こんな穢い私をば、見捨てぬお前の志し誠に嬉しう御座ります。さうしてお前は今何処に世帯を持つておいでだえ。

次郎　サ、俺の居所は。（ト一寸行き詰まり、）今では上州高崎で、太物を賣る小商人、江戸の問屋に用があつて遅くも今夜板橋迄明日の都合で行く心算だ。

お清　夫ぢやア早く宿へ行つて、古着を買つておくんなさいよ。

次郎　買つてやるから、一緒に來い。

お清　手を曳いて行つて下さい。

ト次郎兵衛是非なく手を曳き、四方へ思入あつて、お清の油断を見て上の方へ突き倒し、逸散に向うへ逃げてはひる。此時懐中の袋へ帳を落す。お清、起き上がり、

甘い詞で私を欺し、又もや捨てゝ逃げるとは言はう様ない人でなし、ウヌ逃ぐるとて逃がすものか。

ト裾をはしよりながら、行かうとして次郎兵衛の落せし帳面を拾ひ上げて、

野州佐野船越次郎兵衛、扨は野州の佐野に居るのか、コリヤよい物が手に入つたわえ。

ト時の鐘、早き合方にて、次郎兵衛の後を慕つて向うへはひる。これにて道具廻る。

本舞臺平舞臺、下手上手とも蘆原、正面低き草土手水際に杭、後ろ戸田川夜るの遠見、上手に葭簀張りの番小屋、三尺の入口に菰を下げ、詰所に樽の立木、總て戸田川北川岸の體、水の音、馬士唄にて道具止る。

ト上下より旅人四人出て來て、

旅一　昨日地震が揺つたから、今日は降りだと思ひの外、今朝ッからの上天氣、不思議な事と思つたら、遂々五七の雨になつた。

旅二　些とも早く戸田を越え、先づ板橋の定宿へ泊りについて悠然と、一杯酒でも飲みたいものぢやて。

旅三　私共は蕨泊りに戸田川を渡つて來ましたが、餘ッ程水氣でございますから、止るかも知れませんぜ。

旅四　晝さへ凄い大川に、雨氣で空が眞暗故、實に無氣味で御座いますから、早く渡しをお越しなさい。

旅一　有難うございます。モウ渡し場へ半町だから急いで行きませう。

旅二　渡しを越す迄大降りにならにやアいゝが。

旅三　ポツ〳〵やつて來ましたから、今にドッと降りませう。

旅四　夫にピカ〳〵光るから、初雷が鳴るかも知れねえ。

旅一　降るのは爲方がないけれど、

旅二　雷樣は眞ッ平だ。

旅三　だん〳〵光りが強くなるから、

旅四　降らない中に、

四人　行きませう。

ト上下へ別れてはひる。時の鐘になり、向うより次郎兵衞足早に逃げて來り、舞臺へ來て石に躓きて倒れ、起き上がつて、

次郎　アイタ、、草鞋の紐が切れたので、石に躓き轉ぶはずみに、イヤといふ程膝を打つたが、川原の砂利で擂り剝いたか、確かに疵が附いたと見える。何にして女の足で爰迄逃げたら追ひ付くまい、お清を捨てゝ逃げてから十年餘り逢はねえから、死んだと許り思つたに、彼奴に生きて居られては、うつかり旅も歩けねえ、歸途は少し廻り道でも、川越の方へ廻はつて歸らう。ドレ追つ駈けて來ねえ中に、早く川を越してしまはう。

ト次郎兵衞身支度をして、上手へ行く、下手の蘆原を押し分けてお清顏を出し、

お清　川を越すなら次郎兵衞さん、一緒に越すから待つておくれ。

次郎　ヤ、夫ぢやア手前、先きへ來たか。（ト吃驚する。）

お清　お前の來るのを蘆原で、先刻から待つて居たのさ。

次郎　どうして先きへ廻つて來たんだ。

お清　爰等は平常手の内を、貰つて歩いて近道を知つて居

るから先きへ來たのさ。

次郎　先きへ來ずといゝ事を。

お清　身體は瘡で腐つても、心はくさらぬ以前の女房、捨てられたのが思はずも斯うして此處で出逢つたからは、何處が何處迄おまへと一緒に死ぬ迄側は放れないから、嫌でも連れて行つておくれ。

ト次郎兵衞是迄といふこなしにて、

次郎　以前女房にした時は、四六長屋の女郎でも素人に優る灰汁抜けた、姿に一寸思ひ込み、年明けを待ち引き摺り込み、仲よく暮らした事もあるから、連れて行つてやりてえが、二目と見られぬ瘡ツかき、何處へ連れて行けるものか。

お清　夫ぢやア先刻おまへの口から、私を連れて行くと云つたは。

次郎　一寸遁れのみんな嘘だ。

お清　大方そんな事だらうと、初手から私やア思つて居たのだ、二目と見られぬ瘡ツかき故、お前が一緒に連れて行かずば、跡から勝手に一人で行くよ。

次郎　夫ぢやア先刻居所を手めえに噺した高崎へ、

お清　嘘ツパチの高崎へ、誰が尋ねて行くものか。

次郎　なんだと。（ト合方替つて、）

お清　二目と見られぬ此の容姿で、私が勝手に尋ねて行くは、當時おまへが住つて居る野州の佐野の船越へ。

次郎　何うして夫を。

お清　知つて居るのは外でもない、先刻此方を突き倒しお前が逃げる其時に、落して行つたこの手帳。（ト以前の帳面を出し、）所書きから名前迄、書いてあるので知つたのさ。（ト次郎兵衞困りし科。）

次郎　オ、そりやア俺の大事の手帳、拾つたならば返してくれ。

お清　イエ／＼是は放さない、亭主の物は女房の物、私に預けて置きなせえ。

次郎　二言目には女房々々と、厭がらせを云ふけれど、原より確と媒人があつて貰つた女房ぢやなし、謂はゞ手めえは月極めのお擦り代りに置いたのだ、瘡が吹き出て穢えから家財を付けて置き去りに、爲たのは暇を呉れたも同然、何を證據にふてぶてしい、女房なぞと吐かすのだ、路頭に迷ふと云ふからは、僅かの中でも假の夫婦、お擦り代りの事だから二分か三分は呉れてやるから、夫を路用に何處へでも行き當りに行くがいゝ。

お清　今迄ならば知らぬ事、お前の居所が知れたからは、何處へも行くには及ばない、佐野へ尋ねて行きますから、可愛がつておくんなさいよ。

次郎　其尋ねて來られるのは、些と都合が惡いから、路用をやると云つたのだが、夫では斯う爲様、五兩金をやらうから、夫を持つて行つてくれ。

お清　イヽエ金は要りませぬ、是からおまへの世話になれば、モウ錢金は要りませぬ。

ト次郎兵衛は持てあまして、

次郎　さう不手勝手を云ふからは、此奴アいつそ。

お清　ムヽ、夫ぢやア私を殺す氣かえ。

次郎　サ殺す心はねえけれど、佐野へ尋ねて來られちやア今の女房に面目ねえ、背に腹は替へられねえ。

お清　今の女房に濟まねえとは、私を捨てゝ野州へ行き、お前は女房を持つたのか。

次郎　子供は一人あるけれど、容貌も手めえに優つた女で、田地もあれば金もある立派な家へ入夫にはひり、夫婦の仲へくさびになる、子まで一人出來た所へ、二目と見られぬ面をして、以前の俺の女房だと、云はれた日には今の女房や、隣家近所の人達へ外聞の惡い噺しだから、金で了簡するならよし、夫も嫌だといふからは、手荒い事もしにやアならねえ。

お清　五十と百呉れるなら、金で不肖もしようけれど、僅か許りの目腐れ金を、貰つた所が爲方がない、命も疾から身を投げて死なうと思つた體だから、殺す氣ならば殺しなせえ、息のある中野州へ行き、置き去りにした惡相目相、隣家近所へ聞えるやう、怒鳴り散らして腹を癒るのだ。

ト憎々しく云ふ、次郎兵衛も堪り兼れ、

次郎　さう云ふ手めえが心なら、生かしちやア置かれねえ。

（ト刀へ手を掛ける。）

お清　夫ぢやアいよ〳〵私を斬る氣か。

次郎　邪魔になるから不便ながら、爰で殺して仕舞はにやならねえ。

お清　殺すなら殺してくれ、生功のない體だから、サア殺せ、エヽきり〳〵と殺さねえか。

ト身體を次郎兵衛に摺り附ける、次郎兵衛も決心して、

次郎　モウ是迄だ、覺悟しろ。

ト道中差しの刀を抜き斬つて掛かる。お清は菅笠にて受ける、水の音をあしらひ、兩人立廻りになり、トヾ

お清の肩先きを斬る。

お清　オヽ、斬りやアがつたな。（ト凄き合方になり、）

次郎　宵にバラ〳〵降り出した、白雨めいた一降りに、往來稀な戸田川原、深い恨みもねえけれど、此身の邪魔故殺すのだ、爰に所も中仙道、冥途の旅の道連れは、後生參りの善光寺、枝道多い六道の辻駕に乘り迷はずに、彌陀の淨土の極樂でも戒檀巡りの地獄へでも、御印文の切手を持つて勝手な方へ往生しろ。

お清　邪魔になるから殺すなら、一思ひに殺して呉れ、一念此土に止まつて憎しと思ふおのれを始め、女房子迄も憂き目を見せ、取り殺すから、さう思へ。

次郎　オヽ、取り殺すなら殺して見ろ。

お清　取り殺さいで置かうか。

ト合方薄い念佛に水の音を冠せ、兩人立ち廻りよろしく、お清後ろ向きに土手へ上がる所を後ろより斬り附けしまゝ、川の中へ突き落す。此時小屋の中より、空月半身出して樣子を見て居る、次郎兵衞は刀を川水にて洗ひ、鞘に納めて手帳を拾ひ懐中へ入れる。

次郎　住居を知られたばつかりに、國へ尋ねて來られては、此身の邪魔故殺したが、今更思へば。

ト上手を振り返り空月の姿を見て吃驚するを、木の頭。

ア、止せばよかつた。

ト血の附きし手拭を取上げて見る。空月は小家の中にて珠數を繰り、回向する。早き合方、木の音にて

幕

二幕目

本田家稽古試合の場
同家中高松屋敷の場
同邸門馬見所の場
高松邸訣別の場

役名――本田左門之助、家老高松安之進、都築武助、八重垣紋太夫、神山五平太、石崎段右衛門、近習甲乙丙丁戊己、高松妻おとし、同娘お千代、同倅松太郎、同若徒佐吾平。

本舞臺五間高足の二重、本庇本緣付き、眞中書院階子、正面上の方九尺の床の間、續いて白地に紋散しの襖、二重の上下網代塀、松の立木、白地に立ち葵

の紋つきし幕張り、總て本田家庭前の體。二重眞中に左門之助羽織袴、領主の拵へ、下手に紋太夫繼上下指南番、此後ろに繼上下の近習四人、小姓二人控へ、平舞臺に稽古着袴形りの近習丙丁の二人、稽古槍にて試合ひをしてゐる。上下に甲乙戊己の四人同じ拵へにて見物してゐる見得、修羅囃子の鳴物にて幕明く。

ト丙丁は試合ひの立廻りあつて。丙は胸を突かれる。

近丙　まゐつた。

甲乙　ヤア、源吾殿お手柄々々。

近丁　是は大きに失禮いたした。（ト兩人扣へる。）

左門　門太夫の丹精にて、家中の者共追々に、上達いたすは悦ばしい。試合の儀は是迄にて一同休息いたすがよいぞ。

紋太　各々の試合相濟む上は、我が君へのお慰みに、今日は紋太夫が合氣の術を御覽に入るれば、何卒御覽下さりませう。

左門　合氣の術とは聞き及べど、其極意を見し事なし、何如なる術か所望いたす。

近甲　先生同士の立ち合ひに、合氣を以て勝負いたすと、承つては御座れども、

近乙　我々共は其術を、今日迄も拜見いたさず、

近丙　シテ其合氣と申さるゝは、

近丁　如何の法で御座りまするな。

紋太　試合の外に我君へ、お興を添ゆる氣合ひの術、只今御覽に入れるで御座らう。

左門　いかなる祕術を行ふか、

近甲　早く拜見したう御座る。

紋太　ハテ、何をがな。

ト四方へ思入、風の音になり、松ヶ枝へ雀五六羽飛び交ふ、紋太夫是れに目をつけて、

幸ひアレなる松ヶ枝に、群れ集まりし小雀を、合氣を以て庭上へ、突き落して御覽に入れん。

近甲　ナニ、あの雀を、

六人　お仕止めあるとナ。

紋太　我が君御覽下さりませう。

ト合方替り、紋太夫庭へ下り稽古槍を取り上げ、松ヶ枝の雀を目掛け、氣合ひを掛ければ、雀一羽庭へ落ち、餘は飛び去る。

左門　何樣其方が妙術にて、覘ひし雀羽を縮め、アノ庭前

に落ちたるは、天晴希代の其手術。

近甲　彼の相馬の將門は、空飛ぶ雁を睨み落せし噺しは兼て聞き及べど、

近乙　夫は過ぎにし昔語り、今目の前にて先生は、

近丙　合氣の術にて松ヶ枝へ、止まりし雀を、お仕止めありしは、

近丁　凡を離れし御妙術、

近戊　其の手練に我々共、

近己　驚き入つて、

六人　御座ります。

紋太　併し無益の殺生にて、命を取るも不便な小雀、合氣を以て助け得させん。

ト紋太夫氣合ひを込めて、槍にて雀を突き返すと、雀は蘇生して飛び去る。此時下手の幕張りの中にて、

五平　師匠を嘲ける都築武助、

段右　キリ〳〵御前へ出さつせえ。

ト幕張りの中より、神山五平太、石崎段右衛門繼上下にて袴形りの都築武助を引つ立てゝ出る、紋太夫見て

紋太　ナニ某を嘲りしとは、心得難き今のお詞、シテ其者は何者なるか。

ト武助は刀を後ろへ廻し、平伏して居る、五平太、段右衛門前へ出て、

五平　されば先生お聞き下され、我々兩人が幕の蔭にて、休息いたし居つたる所、是なる都築武助と申す、新參の小祿者、試合拜見いたしたいと、所望に由つて内見を、許し遣はしましたるに過言を申す憎くき奴、

段右　只事是にて先生が、合氣の術を施され、我々感心いたすを笑ひ、アノ槍術は鳥指しに似て居るなぞと雜言過言、取るに足らざる者とは申せ、捨て置き難く存じまして、

五平　是へ引つ立て、

兩人　參りました。

ト左門之助武助を見て、

左門　オヽ、彼は先き頃安之進が、目見得を願ひ出でたる故、小身ながら江戸詰めを、許し置いたる都築武助、扨扨無禮な奴ではある。

近甲　いかに勝手を存ぜざる、田舍侍なればとて、

近乙　御指南番たる先生を、鳥指しなぞとは奇怪千萬。

近丙　コリヤ御家老へ仰せ附けられ、

近丁　乾度御沙汰に及ぶ樣、

五平　お指圖あつて、

八人　然るべし

紋太　アイヤ各、暫く待たれい、身不肖ながらお目鑑にて二百石の禄を汚し、八重垣流の槍術を御指南の爲御當家へ、お召抱への某を鳥指なぞと申す程では、武術勝れし御家臣あると存ずる、假令小身なればとて、武術の心得なら推擧致すが役目の表、コリヤ我君へ願ひを上げ、門弟衆と其者と、試合いたさせ手並の程を、試した上にて御賢慮仰ぐが、私のなさいたし方、なんと左樣でござらぬか。

左門　コリヤ紋太夫が申す如く、小祿なれど彼が手並み、いか程鍛錬いたし居るか、余も未だ見た事なければ、幸ひ今日の試合ひの折柄相人を見立てゝ申し附けよ。

紋太　早速のお聞き濟み有難く存じます。コリヤ誰彼と申さうより、段右衛門殿彼の相人になりなされ。

段右　お見立てに預かる上は、いかで辭退いたすべき、イ[illegible]支度をさつしやい。

武助　御所望とござりますれば、未熟な手並もお笑ひ種御覽に入れるで御座りませうか、御指南番たる八重垣樣とも、存ぜずいたして過言の無禮、何卒御用捨下さりまして、此儘お下げ下さりますやう、偏へに願ひ上げまする。

五平　其詫びは後での事、未熟な手並と申せども大先生を鳥指しと嘲ける程では爪を隱す能ある鷹に相違ない、先づ何事も差し置いて、お許しのある上からは、石崎氏と試合して其後無禮の詫びをいたせ。

武助　スリヤ未熟なる手の中を、御覽に入れし上ならでは此お詫びは叶ひませぬか。

段右　シテ槍術が得手なるか、劍術が勝手なるか、其方の望みの品により、我等も相人をいたしてくれん。

武助　イヤ私は獲物に望みは御座りませぬが、木太刀を以て槍術の、お相人仰せ附けらるれば、夫が望みで御座りまする。

左門　ソレ、木劍を貸し與へい。

近甲　ハツ。（ト木太刀を武助の前へ置く。）

五平　望みに任せ石崎氏、八重垣流の槍術にて物の見事に試合ひを召されい。

段右　心得ました、イザ、雙方支度をしやれ。

武助　御免下され。

ト修羅囃子になり、双方支度をして左門へ一禮して立ち向ひ、

武助段右　イザ〳〵。

ト試合ひの立廻りよろしく、武助段右衛門を打ち込む。

左門　誠に見事な彼の手の中。コリヤ紋太夫、此度は其方相人になつて遣はせ。

紋太　委細承知仕つてござります。

ト立ち上がる、此時下手の襖より、高松安之進継上下家老の拵へにて出て、

安之　アイヤ其試合ひ、お見合はせ遊ばされませう。(ト下手へ住ふ。)

左門　安之進、何故試合を止めたのぢや。

安之　お止め申すは外でも御座らぬ、小藩の身を以て御指南番たる八重垣殿と、立ち會ふなぞとは、身の程存ぜぬ彼が振舞、いかに近頃出府せしとて、上へ御指南申し上ぐる八重垣に恐れもなく、立ち向はんとは盲蛇物に怖じざる無禮者、何卒試合にはお見合せある樣、只管お願ひ申し上げます。

左門　イヤ身が選ひと申せども、斯く天晴れなる手の中を嗜み居るを今日迄、知らずに居りしは予が不覺、彼に聊か不埒はない、是非に試合を申し附けよ。

安之　スリヤいか樣に申し上げても、お聞き濟みには相成りませぬか。

左門　武術を勵む我が家風、武藝に上下の差別はないぞよ。

(トきつと云放つ、安之進是非なく、)

安之　アイヤ八重垣殿、勝負は時の運と申せば、假令上の御指南番とて、萬一不覺を取られぬとも申されぬ、其節遺恨に思召さば相互ひの身の上故、御身分の儀を思はれて、勝負は此儘見合はさるゝ御所存は御座らぬかな。

紋太　其御心添へ忝なけれど、假令彼が何程の武藝熟練いたさうとも、拙者も八重垣紋太夫、槍術にては人が間敷知られし程の身の面目、萬一不覺を取らうとも、遺恨に存ずる小量ならねば、其御懸念には及び申さぬ。

安之　スリヤ、遺恨にばし思はずに。

紋太　御疑念あらば、まツ此如く。(ト小刀にて金打なして見せて)必ず御案じ下さるな。

安之　其御誓言承はれば、是にて安堵と申すもの、是にて檢分仕る。

紋太　御配慮故に暫時のひき入り、葛籠とやら支度をしやれ。

武助　今御家老のお詞を、うかゞひましては拙者め、此立合は只管に、御免を願ひ上げまする。

五平　其辭退は相成らぬ、我が君よりの御所望にて武術を試す此立合。
段右　時のはずみで某は、思はぬ不覺を取りしかど、今度は今の傳には及ばぬ。
近甲　御免なぞとは、
六人　卑怯至極。
左門　遠慮に及ばぬ、予が許す、晴の試合ひと心得よ。
安之　後日に遺恨を殘さぬ上は、辭退いたさずお受けをいたせ。
武助　ハツ。然らばお相人仕りませう。
ト修羅囃子になり、紋太夫襷をして槍を持て出る、武助木劍を構へ、
武助
紋太　イザ〳〵〳〵。
ト合方になり、双方互角なる試合ひの立廻りよろしくあつて、トゞ武助紋太夫の槍を卷き落し、其儘下手へ下つて平伏する。
左門　勝負は見えた、天晴れ〳〵。
安之　八重垣殿には輕輩の、都築を取り立て召されんと、わざと勝ちを讓られしは、奧床しきお志し、誠に恐れ入つてござる。（ト紋太夫無念を堪へて、）

紋太　イヤなか〳〵以て然にあらず、斯る手練の者とも知らず、不覺を取りしは面目なし、今日よりしてお暇賜はり、武術修行いたしたければ何卒今より拙者めへ、長のお暇下さりませう。
左門　イヤ夫にては遺恨を含みて宜しからず、左樣な事は取り置いて、是にて酒宴を催せば其方も是にて一盞過せ。
安之　仰せの通りお暇なぞとは、誓ひし詞に反く道理、武助は過言のお詫びいたせ。
武助　勝ちをお讓り下されて、身の面目となりましたも、八重垣樣の御情、過言の段は幾重にも御免なされて下さりませ。
左門　夫にて遺恨はよもあるまい、紋太夫是へ〳〵。
紋太　有難き其仰せ、試合ひに衣服も穢れ居れば、お次ぎに於て服改め、御禮申し上げますれば、暫し御用捨下さりませう。
五平　我々共も服改め、
段右　御前へ罷り出でますれば、
近甲　暫時御用捨、
六人　下さりませう。
左門　然らば服を改め參れ。

紋太　然らば御免を、
六人　蒙りまする。
ト合方になり、紋太夫先きに五平太、段右衛門近習甲乙、丙、丁、戊、己附いて下手へはひる。
武助　拙者も御免を。(ト一禮して立たうとするを、)
左門　其方は勝利の強者、服改めるにも及ぶまい、其儘許す、近う〳〵。
武助　ハツ、有難くは御座りますれど、
安之　お許しなれば辭退は恐れ、其儘お緣に。
武助　然らば御免下さりませう。
ト合方替つて、武助刀を舞臺下手へ置き、二重下手緣側へ住ふ。
左門　コリヤ、酒宴の用意。
近習　ハア――。
ト後ろの近習四人奥へはひる。
左門　扨安之進、能き家來を其方は、國より選み出したな。
安之　昨年お國詰めの其折り、彼が父武兵衛事病死いたし家督はいたせど小祿者、一生お國に暮らさすは誠に惜しき若者故、重役共評議の上江戸詰めの儀を申し附けしに、今日計らず御前にて、彼が手の中御覽に入れ、御意に叶ひて其身の大慶、安之進も諸共に有難く存じ上げます。
左門　斯る手練の侍を、家中の中より見出せしは、家に取つての悦びぢや、重役共にて評議の上、早々加増の沙汰に及べ。
安之　ハツ、有難き御掟の趣き、武助には御受けをいたせ。
武助　ハツ、冥加至極にござりまする。
ト此時奥より近習四人酒肴を持て出て、
近一　仰せ附けの御酒宴の用意、
近二　持參いたしてござりまする。
左門　不覺を取りし紋太夫、向後遺恨に存ぜぬ樣、是へ呼び寄せ一盞させん。コレ紋太夫に是へと申せ。
近一　ハツ。
ト立たうとする時奥より以前の近習甲、乙、丙、丁繼上下に着替へて出て、下の方に平伏して
近甲　ハツ、紋太夫儀は急病發し、
近乙　只今お小屋へ引き取りましたれば、
近丙　御前よしなに願ふと申し、
近丁　五平太段右衛門兩人が、
近甲　附き添ひ參つて、
四人　御座りまする。

安之　ナニ紋太夫が急病にて、此座へ不參と申すのぢやナ。

左門　扨は心に恥ち入つて、面目ないと相見ゆる。

武助　夫と申すも拙者故、相濟まぬ儀にござります。

左門　夫とても未熟の故ぢや、其方には褒美の杯遣はす。

安之　御前へ進め。

武助　ハツ。（ト前へ進む、隙を覗つて、）

近乙　其のお肴は。（ト武助へ組附くを武助は體を交して投げ退ける。）

左門　柔道迄も勝れし手の中。見事。

ト褒める、武助杯を受けて平伏するを、道具替りの知らせ、張扇の合方にて、道具廻る。

本舞臺三間常足の二重、正面石摺の襖、上手一間塗骨の障子家體、下の方書院に玄關口、上下黒塀にて見切り、總て本田家中高安住居の體、二重上の方にお千代、家中娘の拵へにて針仕事をしてゐる、下手に左吾平若黨袴形りにて、息の切れしこなし、眞中に弟松太郎前髪袴形りにて、見臺の書物を片寄せ氣遣ふこなし、合方にて道具止る。

千代　左吾平には慌たゞしい、何事か出來ましたか。

松太　お供待ちにて口論でも、いたして歸つて來たのではないか。

佐吾　イエ左樣ではござりませぬ、悦ばしい儀がござりまして、お供待ちの其間に、お知らせ申しに參りました。

千代　ナニ、悦ばしい事とはえ。（ト合方になり。）

佐吾　御存じの通り今日は、八重垣樣が御前へ召され、御門弟衆の槍術試合の御當日、表長家の都築樣が拜見したいとのお頼み故、拙者が手蔓をお教へ申し、お幕の蔭から見せましたが、八重垣樣が御前にて、氣合の術だと廣言して雀を一羽突き伏せたを、都築樣が鳥指しの藝だと云つて笑つたを、門弟衆の耳に入り、無理に御前へ引き出され、八重垣樣と都築樣の試合ひになると聞きまして拙者もお庭へそつとはひり塀から覗いて居りますと、物の見事に都築樣がお勝ちなされてゞ御座ります。旦那樣がお下りにならぬ前方にお知らせ申さうと御注進に參りました。

千代　都築樣のお手並みは、父上がお國許にてよく御存じにて、頼もしく思召しての常のお噂し。

松太　御指南番の八重垣樣に、勝ちをお取りなされし上は、御出世なさるに違ひない。

佐吾　大方是から都築樣が、御一家中へ御指南の、大先生

になりませうと、人の噂を聞くにつけ、旦那様にもお悦び、拙者も嬉しう御座ります、誰より一番お嬢様が、お嬉しう御座りませう。

千代　まだ其御様も極らぬに、滅多な事は云はぬものぢや。

松太　母上へ此事を、お知らせ申してお悦びの、お顔を見るといたしませう。

佐吾　御新造様へも貴方から、お早くお知らせ下さりませ。

ト上手の障子の中より、高安の妻おとし屋敷女房の拵へにて出て、

とし　様子は奥にて聞きました、悦ばしいは尤もながら餘り世間へ其事を、觸れ歩くのはよしない事、靜かにしたがよいわいなう。

佐吾　夫では人に噺しては、却てお悪うござりまするか。

千代　八重垣様へお氣の毒と、思召す故母上には、

松太　其御遠慮でござりまするか。（ト合方替つて）

とし　都築様は我夫が、御前へ推擧のお方といひ、八重垣殿は假染にも、御當家の御指南役にて御一家中の方々は大概師弟の間柄御前に於て其師匠が不覺を取りし事なれば、いかなる遺恨を含むやら、計り知られぬ後難あれば、試合ひの事は其方達は、知らぬふりにて此後は家中の衆に逢はうとも、口外してはなりませぬ。

千代　ホンニ左様に伺つては、滅多に口外いたされませぬ。

佐吾　嬉しいまぎれに拙者めも、お知らせ申しに參りましたが、其御意見に預かつては、迂濶に噺しは出來ませぬ。

とし　兎角うする中モウ夕景、お下りに間もあるまい、お迎ひに行つて來るがよい。

佐吾　左様なればお提灯の、用意をいたして參りませう。

（ト佐吾平奥へはひる。）

とし　針のけいこや學問も、夕景なれば終ふがよいぞや。

千代　夫では又も晩程に、

松太　稽古いたすでござりませう。

お千代松太郎は針箱見臺なぞを片附ける事あつて上手へはひる。跡合方替つて、向うより以前の五平太、段右衛門袴羽織にて出て、花道に止り、

五平　今日の儀がパッと致せば、先生ばかりの恥辱でなく我々共が一家中へ、肩身が狭いと申すもの、せめて先き頃兩人にて媒介の儀を頼まれし縁邊にても整ひなば、都築めの鼻をはぢき、恥辱を雪ぐ事も御座らう。

段右　薄々様子を承はれば、都築武助に行く〳〵は娘を遣る下心で此方の縁談を斷りしといふ噂もあれば、モシ他

く迄も此縁談を斷つても、都築へ娘を送らぬといふ、釘を差して置きまするが、後日の爲と申すもの。

五平　何にいたせ安之進が、御前を下つて居ればよいが、留守では埒が明きますまい。

段右　不在でござらば家内の者を、媒人口の方便に一に說き付けて歸りませう。

ト兩人舞臺へ來る、此時下手玄關の後ろより、佐吾平箱提灯を持つて出る兩人見て、

五平　オ、佐吾平、何れへ參る。

佐吾　是は神山樣に石崎樣、旦那のお下りが夜に入る樣子に、提灯を取りに參りました。

段右　扨はまだお留守であつたか。

佐吾　程なくお下りでござりませうから、御用ならお二人樣、宅でお待ちなされませ。

五平　然らばお留守に待つて居れば、

段右　早くお迎ひに行くがよい。

佐吾　大方試合ひの一件で、

兩人　エ、。

佐吾　お出での次第を申しませう。

ト佐吾平向うへはひる。兩人玄關へ來て、

五平　賴まう。（ト玄關の口にて、）

つた　どうれ。（ト奧より下女おつた出て、）是はお二人樣、ようお出でなさりました。

五平　まだお下りはないさうぢやが、御新造にお目に掛かり、お談じ申す事があつて、罷り越したと取次ぎ賴む。

つた　暫くお控へ下さいまし。（ト二重屋臺へ來て）何かお話しがござりますとて、神山樣と石崎樣がお揃ひでお出でなされました。

とし　まだ旦那樣がお上から、お下りがないと申すがよい。

つた　其事も御存じで、貴方樣にお目に掛かり、お話し申したいとの事で御座ります。

とし　夫では是へお通し申しや。

つた　ハイ。（ト玄關へ來て、）此方へお通り下さいまし。

五平
段右　然らば許しやれ。（ト奧へ通る、おとし出迎へて、）

とし　お二人樣にはお揃ひにて、ようこそお出で遊ばしました。

五平　夕けいに罷り出まして、お邪魔いたして恐れ入ります。

段右　承はれば御家老には、未だお下りないとの事、

五平　お留守ながらも其許へ、願ひ度き事あれば、

段右　御面談の儀を申し入れて斯くの仕合せ。

とし　いかなる御用でござりまするか、承はるで御座りませう。コレ、お茶を持つておぢや。

つた　畏りました。（ト奥へはひる。）

五平　イヤ／＼お構ひ下さるな。（ト合方になり、）扨早速に申し出だすが、先頃我々兩人より申し入れたる縁談の儀、何か外に御都合あつてお斷りに相成りしは、是非なき事と思ひ居りしに、薄々噂を承はるにお國許より近頃參りし、都築武助へ御息女を娶さんとの御心組みとやら、其聟がねの武助事は御前試合にお許しなくお庭へ踏み込み剰へ、八重垣殿に過言を申し、まぐれあたりに試合に打ち勝ち人も無げなる無道人、御指南番たる大先生が、彼等に負ける所謂はなしと、其心腹を承はりしに態と都築に勝ちを讓り、病氣を云ひ立て浪人すとて、無念を忍びお暇願ひ、

段右　さある時には家中の動搖、師弟の緣に我々共此儘捨て〻置けぬと申すは、遺恨重なる都築武助、いかなる返報なさんも知れず、其許御推擧の御當家の御迷惑をも懸念して、御相談は爰の事此儀を無事に納めるには、豫て八重垣先生には當家の息女に執心にて、申し込んだる緣邊なれば、異議なく息女を遣られなば譬に申す大象も女の綱へる黒髮には、引き止められる道理故、何卒枉げて御家老には御承知を下さる樣、我々兩人參りし次第、御新造より御執成しを願ひまする。

とし　事を分けたる此お頼み、安之進承はれば如何申すか存じませねど、先づ私が存じますには其儀は平にお斷りを申し上げねばなりませぬ。

五平　そりや御新造まで、

段右　御不承知とな。

とし　外の事とは違ひまして緣談許りは當人の、望みに任せにやなりませぬ、又親の身にも行く末の、世話をも賴む聟がね故、選んで緣を組みませねば親の役目が濟みませぬ、夫を御前で試合ひに負け、恥辱をお取りなされしを堪へる爲に八重垣樣へ、娘を遣れなんぞとは、以ての外なる御相談。トサ夫が居らば申しませうが、私にてはいか樣にも、御挨拶が出來ませねば、先づ御歸りとお二人樣には、お暇しなされて歸宅をば、まア／＼お待ちなさりませ。

ト取り合ぬに、二人は手持ち無沙汰にて、

五平　お待ち申して居りたけれど、只今申す八重垣先生病

氣の附け出し、お小屋に於てお暇の支度を急ぎ居らるゝ樣子。

段右　日頃の氣質に逸まりし、行ひなぞをいたされては、我々共が斯く迄に盡す心も水の泡、

五平　心急き故此儘に、

段右　お暇いたして又參らう。

とし　只今粗茶をさし上げますれば、

五平　イヤ今日は直樣お暇いたせば、

段右　お茶はお預けにいたします。（ト兩人立ち上る。）

とし　お客樣のお立ちぢやぞ。（ト奥より下女出て、）

つた　モウお歸りでござりまするか。

五平　御家老へよろしう。（ト玄關へ出て兩人花道へ行き）

アノ樣子では安之進が、戻つた所が冗な相談。

段右　媒人口も、出直しませう。

ト合方にて、向うへはひる。上手よりお千代出來り、

千代　ひよんな事をば申して參り、何と御挨拶遊ばすかと、お案じ申して居りました。

とし　其方も聞いて居やつたか、如何なる事を申して來樣と、心よからぬ八重垣なんぞに、なんで遣らるゝものかいなう。

千代　とあつて是を斷われば、都築樣のお身の上にいかなる事が出來やうも知れず。

とし　ハテ先方が無理難題、案じる事はないわいの。

ト奥よりおつた茶を持て出て

つた　お茶がはひりましてござります。

とし　お客に出さいで私が飲むとは、冗なお茶ではあるわいなう。

千代　あの樣なお客には、お茶を入れずとよい事を。

とし　ハテ何事も、愛想ぢやわいなう。

ト下女茶を注いで出す、此の模樣合方にて、道具廻る。

本舞臺平舞臺、後ろ奥深に練塀の裏を見せ、正面より左右に埒矢來のある草土手、諸所に柳の立木上下植込みの張物にて見切り、總て城内馬場入口の體、時の鐘にて道具止る。

ト下座の謠になり、上手より以前の佐吾平箱提灯を持ち、先きに立ち、安之進武助連れ立つて出來り、

武助　お提灯のお庇にて、お馬場の側も通り越せば、拙者がお小屋は裏お長家、是にてお別れ申しまする。

安之　御前體にて頂く御酒は、御前を下ると一時に醉ひが發するものなれば、明火がなうては足許が惡い、佐吾平を送らせませう。
武助　イエ夫にては恐れ入ります、お馬場脇さへ通り拔ければ、最早お小屋へ參りし同樣、お提灯には及びませぬ。
佐吾　此先きの井戸側は、下水の板が毀れて居ればお氣を附けなさりませ。
武助　モウ當節は勝手を覺えましたれば、お氣遣ひ下さるな。
安之　然らば何れ明日は、改めて御加增の御沙汰があるでござらうから、それ樂みに待つてござれ。
武助　是と申すも其許樣の、皆お執成による所、有難く心得まする。
安之　武助殿、お別れ申す。佐吾平參れ。
ト兩人花道へ行く、又謠ひになる。
安之　アノ謠ひは、近藤かな。
佐吾　御意にござります。
安之　彼も餘程上達ぢやな。
ト佐吾平案内して、安之進向うへはひる。
武助　無骨者の某も御家老樣のお取り立てにて、過分の祿を賜はるのみか、又もや明日御加增とは身に餘りたる事ではある。獨身者の氣安さには、小屋へ歸つて留守番の柔と共に寐る許り、アヽ思ひの外醉ひが出たわえ。
ト下の方へ行き掛ける、上手の植込みの蔭より、紋太夫大小裾をからげ、槍を持つて出て、
紋太　都築武助、まア待ちやれ。（ト武助立ち止り、）
武助　さいふは八重垣紋太夫殿、御病氣なりと承はりしに、いかゞ致して此のところへ。
紋太　御前に於て恥辱を受け、いかで再び君前に御酒の對手に出られんや、身共も牛込轉子坂にて、八重垣流の槍術に名を得し八重垣紋太夫、槍の穗先きの砥よりも、磨きし腕に劍學を、好む當家に召出され、殿は勿論一家中へ傳へる術の指南番、汝等如に後れを取り遺恨を胸に持ち鎗を、鞘へ納めて置かれねば、爰に待ち受け眞劍の勝負を望む果し合ひ、命は我等が申し受けたぞ。
武助　其遺恨の殘らぬ樣、御前に於て試合ひの節、誓ひし詞を反故にして、眞劍勝負を望まるゝは近頃卑怯な八重垣殿、拙者は事を好まねど眞劍勝負が望みとあれば、家に傳はる此一腰、拔けば霓めく稻妻を、闇の知邊に死出三途、彼世へ急ぐ引導は、只一刀が此世の別れ、覺悟極

めて、立ち會ひめされ。
紋太　小賢しき其一言、後ろの馬場に咲き出づる、タンポと名の附く稽古槍、夫とは變る眞劍の穂先き鋭き篠芒、我が鍛錬の眞槍が、受けらるゝなら受けて見よ。
武助　其八重垣の上を行く、鞍馬八流皆傳の刀の切れ味見せてくれん。イザ〳〵勝負を。
紋太　云ふにや及ぶ。
武助　イザ。
兩人　イザ〳〵〳〵。
ト下座の謠になり、兩人立廻りよろしく、トヾ武助紋太夫の槍の柄を斬り折る、紋太夫刀の柄へ手を掛けるな附け入つて脇腹を斬る、紋太夫は倒れる、武助は刀を引き、
武助　水も溜らぬ籠釣瓶、無銘なれ共此村正、ハテ能く斬れる。（ト刀の血を拭ふを、木の頭）業物ぢやなア。
ト月にかざして刀を見る、此模樣謠に風の音を冠せて、幕。ツナギにて引返す。
本舞臺四間中足の二重、本庇本緣付き、石の沓脫ぎ上手一間の障子屋體、二重正面上の方一間の床の間、續いて三尺地袋違ひ棚、下の方襖の出入り、平舞臺、下手枝折門の木戶、板塀四ツ目垣、生花、石燈籠なぞ、總て高安邸奧の間の體。二重能き處へ行燈を置き、上手に安之進下手におとし、茶を勸めてゐる、庭の樹木に烏澤山止まり、騷がしく啼いてゐる。此もやう時の鐘、竹本の送りにて幕明く。
竹本へ春の夜の初更を告ぐる時の鐘、俄かに啼き立つ闇烏庭の木立ちに閙しく、梢を見やる高松が凶事の知らせと打ち案じ、
安之　今日御前試合にて、都築が思はぬ勝利を得て、上の賞美に預かれど、不覺を取りし八重垣は病氣なりとて出仕せず、若し遺恨でもさしはさみ、刃傷にでもせねばよいがと、案じる折から庭中へ群れ來る烏の啼き立つは、コリヤ只事ではあるまいわえ。
とし　左樣な事のなき樣に扱ひたいと先刻も、神山石崎兩人が娘を所望に參りましたが、一旦斷る緣組みをいかなる仔細があればとて、八重垣方へやられませうと、斷り歸してござりまするが、娘もやらず八重垣も、遺恨に思ひませぬ樣、外に御思案ござりませぬか。
へ氣遣ふ折から庭先に、人音なせば啼き立つる烏は立

つて散亂せり、折りに此方の庭口より忍び入つたる都築武助、跡先き窺ひイめば高松外を打ち見やり、ト此内烏笛止んで烏は下手へ飛び去る。下の方より以前の武助出て、枝折戸の外へイむ、安之進透し見て、

安之　夫へ參りしは誰ぢや。

武助　都築武助にござります。

とし　ナニ武助殿が參りしとか。

安之　ム、仔細ぞあらん、開けてやりやれ。

とし　ハイ。

ヘハイと不審を建て切りし枝折りの戸口開くを待ち、ズツと入り來る面色も變る樣子の氣味惡く、トおとし枝折戸を開ける、武助平舞臺下手に住ふ、おとしは元の所へ來る、安之進此樣子をヂツと見て、

安之　都築殿遠慮は入らぬ、ズツと是へ通られい。

武助　然らば御免下さりませう。

ヘ物思はし氣に打ち通り、吐息と共に座につけば、おとしは態と何氣なく、

とし　粗茶でござります。（ト茶を汲んで出す。）

安之　面色とても常ならぬは、試合の遺恨に爭論でも、いたして是へ參られたか。

武助　御賢察の通り、紋太夫を討ち果してござる。

とし　エ、、、。（ト驚くを制して。）

安之　コレ、靜かにいたせ。（ト床の合方になり、）シテ討ち果したる次第はナ。

武助　先刻お別れ申してより、小屋へ引き取る折節に、お馬場の側の小蔭より、呼び掛け出でし紋太夫、試合ひの遺恨止み難く眞劍の勝負をせよと、槍突き附けて迫る故、是非に及ばず拙者めも拔き合して渡り合ひ、首尾能く對手は仕止めしかど、御指南番を討ちし上は、上の御不興目の當り、又門弟の人々にも敵と呼ばるゝ此武助、跡に遺恨の殘らぬ樣相果てんとは思ひしが、左ある時には此方樣に、受けし御恩を仇として此世を去るは殘念至極、兎にも角にもお指圖を願はんものと推參いたした、いか樣なりとも御家老の、仰せ通りにいたす所存、御思案の程お願ひ申す。

ヘ心動ぜぬ覺悟の臍、安之進感じ入り、

安之　御思慮深き武助殿、よくぞ是へ參られた、云はるゝ通り逸まる時は其身の悔、上の御恩を思ひなば此儘當家を立ち退いて、一旦浪人いたすとも、時節を待つて歸參致し益々忠義を盡すこそ、誠の武士の行ひなれば後々の

儀は我等に任せ、一と先づ邸を退身めされ。

とし　御時節參りお目出度く、御歸參なされし曉は約束通り娘の緣邊。

武助　元より武士に二言は御座らぬ、然はさりながら何年の後に歸參の叶ふやら、可惜盛りの御息女を。

とし　其儀は決して御懸念御無用、聊かながら女子の道で心得とてもござりまする、何國の果にござらうとも、落附く先きを內々にて、

武助　心得ましてござりまする。

安之　とは云へ斯る凶變さへ、出來せねば明日にも加增の御沙汰の都築氏、

武助　登庸なして御息女を、娶りて家も彌榮え、猶も忠勤盡さんに、

とし　身に降りかゝる大難は、退くに退かれぬ場合となり、

安之　對手は首尾よく仕止めても、

武助　其後難を避けん爲、

とし　今宵の中に立ち退くとは、

安之　花に嵐の、

三人　障りぢやナア。

ト早き合方になり、後ろの襖を開けて佐吾平出て下手に居て、

佐吾　オ、都築樣、御當家にござりましたか。

安之　佐吾平、彼の方の返事はどうぢや。

佐吾　其お返事は扨置いて、お馬場の口に紋太夫殿が只一太刀に斬り捨てありしを、門弟衆が見附け出し、都築樣の所爲と察し、敵を討たうとお小屋へ押し掛け、お留守と知つて行く先きを、尋ねて廻る眞最中、今に此方のお邸へも探しに參るでござりませう。

安之　オ、さうあらう／＼、然らば娘を是へ呼び、せめて女夫の杯なとさしてやるのが親の慈悲、只今の中早く早く。

とし　成程左樣いたさせませう。

安之　我等は佐吾平兩人にて、玄關先きに見張りをいたし、彼等が參らば追ひ返さん。

武助　又もや此方へ御迷惑を。

安之　ハテ、お案じあるな、佐吾平參れ。

〽妻は一間へ主從は玄關へこそ立つて行く、

トおとしは上手、安之進佐吾平奧へはひる。

〽あとに心も落ち附かず控へる武助一間には、樣子立ち聞く娘のお千代、父の情に杯をさすと云ふのを力草、

萎れながらも立ち出でゝ、
ト上手家體よりお千代出て、
千代　都築様、ひよんな事になりましたナア。
〔胸に餘りて一言も無量の思ひ泣き伏せば、氣毒さよと察しやり、〔ト双方愁ひのこなし。〕
武助　扨は様子をお聞きありしか、斯く御迷惑を掛けまする面目もなき此武助、一旦當家は立ち退くとも、必ず時節の至るを待ち歸參いたして親御にも、御安心をいたさせますれば、何うか時節をお待ち下され。
千代　ハイ千年が萬年でも、お待ち申して居りますれば、何うぞ貴方もお變りなう御無事でお在下さりませ、悲しい思ひを堪へまする心の中を武助様、お察しなされて下さりませ。
武助　只何事も時節を待ち、御辛抱を頼みまする。
千代　其の詞を樂みに、お待ち申して居りまする。
〔內氣育ちに何事も、堪へ居る程猶不便、母は猶豫のならざれば、弟と共に杯の支度とりどり立ち出でゝ、
ト上手よりおとし繻を着て、杯臺を持ち、松太郎銚子を持ちて出て、眞中に住ふ。
とし　急の事故嶋臺の用意とても整はねど、幸ひ床に掛け置きし高砂の繪の尉と姥、松は當家の高松の跡を續がせる松太郎、此座にあれば二人共、目出度う杯して下さい。
松太　お姉え様のお連れ合ひなら、拙者に取つてはお兄イ様、幾久しく願ひまする。
武助　ソリヤ此方より願ふ所、サ心も急けば早速ながら、
とし　娘、其方から聟殿へ。
千代　ハイ。〔ト嬉しきこなし。〕
松太　ドレ、お酌いたしませう。
〔いひつゝ銚子取り上げる二世の緣しは結びても色直しさへならぬ身に、互ひの心汲み交す三々九度の杯も、むせるを隱す思ひなり、
トおとし介添をして、松太郎酌に立ち、杯事よろしく
ト、武助はおとしに獻し、
武助　イザ、姑御にて御納杯。
とし　イヤ、一對揃ふ舅姑、父上を此お席へ。
松太　ハツ。
〔立たんとすれば安之進、〔ト安之進出て、〕
安之　目出度う杯いたすであらう。
〔座を占めさすが武夫の、折り目正しく杯の、順に巡る

や式作法、幾久しくと納める。

ト杯事よろしくある。

〽折りから佐吾平慌たゞしく、

ト奥より佐吾平出て、

佐吾　旦那様、お玄關へ多勢で押して參つてござります。

武助　スリヤ、八重垣の、

皆々　門弟たちが。

安之　其儀は拙者にお任せあつて、此庭口より少しも早う。佐吾平、そちは玄關を。

佐吾　心得ました。（ト奥へはひる。）

〽貯へ置きし二包、旅の用意と取り出だし、

ト袋戸棚の手箱より、金包みを二ツ出して、

安之　些少なれども聟引出、目出度く受納して下され。

武助　此の金子迄納めましては。

安之　ハテ舅に遠慮は、要らぬ事ぢや。

武助　ハツ。仰せに從ひ、（ト金を貰ふ。）

とし　とは言へ此儘別るゝは。

千代　お名殘り惜しうござりまする。

安之　隨分堅固で、

武助　御免。

〽別れてこそは

ト武助立ち上がる、一同見送る。床の三重にて、道具廻る。

本舞臺元の玄關の道具に戻り、式臺に佐吾平大手を擴げて立身、玄關前に以前の五平太段右衛門近習の甲、乙、丙、丁、戊、己奥へ踏み込まうと意氣込むを、佐吾平捨臺詞にて止めて居る模樣、合方にて道具止る。

五平　奥へ參るを止め立てするは、何とも怪しい當家の樣子。

段右　都築武助を殿樣へ、執り持ちありし高松氏。

近甲　其上ならず行く〳〵は、聟になされん心とか。

近乙　お庇ひあるに相違なければ、隱されるのでござらうか。

近丙　我々共の師匠と頼む、八重垣先生の當の仇。

近丁　討たねば師匠へ義理が濟まぬ。

近戊　さう〳〵是へお出しなされ。

近己　お隱しあつては、

五平　お爲に、

六人　なるまい。
　トワヤ〳〵いふ、奥より安之進出て、
安之　ヤア仰々しい、何事でござる。都築武助が八重垣を討ちしといふは心得難し、察する所紋太夫が御前に於ての誓言を、反故にいたして遺恨を含み、武助を討たんと計りしに、却つて其身が討たれしは、自業自得と申すもの、夫を各騒ぎ立ち、敵呼はりする時は、不義の武士との誹りを受けよう、後日の咎めを受けられても、宿意を果す所存で御座るか。
五平　其越度にならぬ様、武助を捕へ殿様へ願ひを上げし其上にて。
段右　お許し受けて尋常に、敵を討てば我々へ、お咎めあらう筈はなし。
近甲　どちらが討たんと計りしか、夫は死人に口なしにて
近乙　都築が跡へ生き残れば、勝手な事を申すであらうが
近丙　師匠の敵をオメ〳〵と、見遁し置くは武道の恥辱、
近丁　詮議を遂げたく存ずれば、疾く〳〵此場へ、
六人　お出し下さい。
安之　そりや隠してゞもござるなら、出してお渡し申さうが、承はるは今が始めて、都築を匿ふ覚えなければ、お渡し申す事は出来ぬ、見当り次第捕り押へ、拙者も詮議いたし申さう。
五平　イヤ彼是と仰せられ、奥へ参るを止めらるゝは、お隠しあるに相違ない。
段右　是へ呼び出し我々へ、お渡しなくば是非なきこと、
近甲　奥へ踏み込み家捜しなし、
近乙　連れ参らねば。
六人　相成らぬ。
安之　身不肖ながら当家にて、家老を勤める我が邸を、家捜しなぞとは無礼で御座らう。
　トきつと云ふ、奥より松太郎出て、
松太　母上の仰しやりますには、それ程迄に御胡乱なら、お奥へ一緒に各を、お連れある様なさりませとのお詞に御座ります。
　ト是を聞いて安堵の思入にて、
安之　然らば各御疑念晴しに、お望み通り家捜しをお為せ申すが、若し居らざる時は安之進、其分には置きませぬぞ。
段右　夫は元より覚悟の前、居るに相違はござらぬから、家捜しいたすと申すのだ。

近甲　假令重役なればとて、何の恐るゝ事はない。
近乙　師匠の敵を取り押へ、詮議いたすに遠慮があらうや。
近丙　然らば何れも、御一緒に、
近甲　一緒に奥へ踏ん込みませう。
段右　サア佐吾平案内しやれ。
　ト段右御門先きに奥へ行かうとする、五平太、考へ居て、皆々を制し、
五平　其家探しはお待ちなさい。
段右　デモ此儘にいたしては。
五平　ハテ家探ししろと申すのは、居らざる故に申すのでござる、夫を知らずに御家老の、邸へ踏み込み召さるゝは、自ら穴へ落ちるの恐れ、其所へ心の附かれぬとは、まだ了簡が若い／＼。
段右　何様夫も御尤も、然らば家探し止めにして、外を穿鑿するといたさう。
近甲　猶豫いたせば風を喰ひ、屋敷を逃げんも計られず、
近乙　御門の口々手分けして、逃がさぬ樣にいたすが肝要、
五平　夫が上策、各御座れ。
七人　心得申した。（ト立掛かる。）
安之　アイヤ各お待ちなされい。
五平　心急き故、
七人　失禮御免。
　ト行き掛ける。
安之　イヤ此儘では相濟むまい、玄關先きへ泥脚踏ん込み禮儀を亂す各方、此由上へ言上いたす。
五平　何卒其儀は、
七人　御宥免を。（ト一同詫びる。）
安之　然らば宥免いたす間、よく掃除をして、行かっしゃい。
五平　ア、是非がない、女中衆々々々。
　ト奥よりおつた出て、
つた　御用でござりますか。
五平　箒を拜借いたしたい。
　ト下女箒を持つて來る、八人は掃除をする可笑味あつて、一同手をつかへ、
段右　師匠の最期に、轉倒いたし、お玄關に込み入りしが、此事上へ聞えましては、我我共の身の大事、無禮の段は御内分に、只管願ひ、
八人　上げまする。
安之　いかに血氣に逸ればとて、餘りと申さば無禮千萬、

以後をきつと嗜み召され。
五平 早速の御勘辨、
段右 一同安堵、
八人 いたしまして御座りまする。(ト一同ホツと思入。)
五平 思はぬ事にて、餘程の暇入り。
段右 此間に彼奴め逃げねばよいが。
五平 然らば、御家老、
八人 御免下され。
ト合方きつぱりとなり、此人數足早に向うへはひる。
安之 白痴者め、歸り居つたワ。
ト奥よりおとしお千代出る。
漸々と追ひ返した。
とし 只今の間に庭口より、お落し申して御座りますれば、
千代 モウ今頃は御城下外れ、
佐吾 デハもう、御安心でござります。
安之 まづは安堵。さりながら、都築が俄かに浪人せしも
紋太夫が槍術を未熟なりと誇りし故、
とし 常の無口に何事も、控へ目にする御氣性も、
千代 好める武藝に身が入つて、ツイ口走る武術の御批判、
松太 夫が元にて御浪人、
佐吾 滅多に物は云はれませぬな。
安之 全く口は。(立上がるを木の頭。) 禍ひの門ではあるなう。
ト合方時の鐘にて、

幕

三幕目　野州千貫松原の場

役名 盗賊盲文次。手分赤目卯左吉。日兀山の松藏。土龍の石松　やらずの武太郎。腹太鯛七。都築武助。佐野次郎左衛門。

本舞臺平舞臺、後ろ奥深に下野の山又山を見たる在體の遠見、眞中に榎の大樹、其外諸所に松の立樹、上手に九尺程の風除け、後ろに葦下し、前に上竈を築し出茶屋の跡、下の方に石地藏、前に線香立ての石、古びたる幟、ずつと上下植込みの張物にて見切り、總て野州千貫松原夜の體、爰に盲文次賊の頭にて、廣袖、三尺帶一本差しにて、焚火にあたり、此

側に子分兀山の松蔵、やらずの武太郎、破落戸の拵へにて同じく焚火にあたりゐる模様、山颪の鳴物、合方にて幕明く。

松蔵　モウ二月も二十日過ぎ、江戸ぢやア桃の咲く時分だから、些とは暖かくなりさうなもんだが、寒いが名代の千貫松原、泣面田圃とはよく云つたもんだ。

武太　寒い位は恐れねえが、斯うして宵から網を張つて、空を踏んぢやアつまらねえ、よもや昨夜の椋鳥が、當てズッポウを云やアしめえな。

文次　さう手前達ちやア根がねえから、間夫な爲事に有りつかねえのだ、今夜一晩網を張つて空を踏んだら又明日爰へ來て頑張る分だ、安く積つて四五百は、持つて歸るに違えねえから、所の名に云ふ千貫から、上の爲事に有り付くのだ、首尾よく爲上げた其跡ぢやア、當分氣樂に遊べるのだ、寒いぐれえは我慢しろ。

松蔵　夫は頭のいふ通り、四五百兩の爲事をすりやア、八木の梁田へ巣替へをして、當分遊べる一件だ。

武太　骨は決して惜しまねえが、昨夜出會つた仲間の奴に知れねえ樣に三人で、早くせしめて仕舞ひてえ。

文次　大方今夜は彼奴等も、棒鼻あたりに頑張つて旨え爲事をする氣だらうが、腹太彌七の裾を搔き、爰へ出張つて捲き上げれば、盲目文次と云はれる俺も、まんが直つて目と出るのだ。

松蔵　どうで盗人にはひるなら、飯を炊いて喰つたり戸棚へはひつて寢る樣な、間抜けな野郎の揃つた奴等。

武太　下男が鈍痴で一緒になり、寢てしまつたから能いけれど、アノ間に何處かへ訴へられりやア、喰ひ込まにやアならねえ譯だ。

文次　仲間の奴等が寢て居るとも知らずにはひつて今夜あたりは、歸ると聞いた地獄耳。

松蔵　見る目嗅ぐ鼻牛頭馬頭の、此方等二人が網を張り、

武太　亡者の來るのを待受けりやア、爰は地獄の一丁目。

文次　閻魔の積りで頑張らうか。

ト此以前上手より、腹太彌七盗賊の頭分の拵へにて卯左吉、石松の子分を連れて出て、此咄しを風除けの蔭にて聞いてゐて、

彌七　裾を搔くとは太え奴だ。

ト前へ出る、三人吃驚して、

文次　夫ぢやア後で聞いて居たか。

彌七　下男と二人で塩を嘗め、手堅く暮して身上を仕上げ

た佐野の次郎左衛門、六道錢の一文から、溜めた小金も子が子を產み、千や二千は此頃ぢやア出來た樣子の石地藏、賽の川原で積む石を、鬼が崩して浚ふ氣で昨夜爲事にはひつたが金は全く他家へ預け、主人は江戶へ賣り込んだ懸取りに出て留守と聞き、其儘歸るも忌々しく、菩薩の米を引き摺り出し、手下の奴等に飯を炊かせ、腹を拵へ寢た所へ、又も仕掛けた盲文次、手前も盆の暗え奴と笑つて別れた腹太の俺の小股をすくはうとは、閻魔の心算か知らねえが、地藏馬鹿にしやアがるな。

卯左　留守居の下男が口が辷り、今夜は江戶から次郎左衛門が、歸つて來るといふ事を、聞き出したのは此方が先きだ。

石松　裾を搔かうとしやアがりやア、其方は仲間に入れねえから、其氣で早く歸りやアがれ。

文次　入れなけりやア這入るめえ、是から先きの松原に出張つて行つて頑張るから、手前達やア爰に居ろ。

彌七　夫ぢやア俺の裾を搔き、飽く迄邪魔をする氣だナ。

文次　そりやア云はずと知れた事だ、一つ御用と來た日には、娑婆にゐられず地獄へ行く、首が資本の盜人だ、仲間の義理や人情を思つて遠慮をして居ては、先祖の熊坂長範や石川五右衛門へ濟まねえ譯、其釜煎りの一ト釜を起す心算ではひつたも、向うが明き巢で空を踏み、塒へ歸る能い鳥が、爰へ懸ると知れて見りやア、手前を出し拔き網を張り、裾を搔いても取らにやアならねえ。

松藏　夫とも其方の仲間へ入れ、一緒に爲事をさせるなら

松太　此方も昨夜の約束だから、夫を彼是云やアしねえ。

卯左　イヤ此方が先きへ仕掛けた爲事、裾を搔かうとした奴等。

石松　一旦約束しやうとも、何で仲間へ入れるものか。

文次　入れざア此方は先きへ行かう。

卯石　なんで先きへやるものか。

松武　行かねえでどうするものか。（ト爭ふ。）

彌七　コレサ〱、靜かにしろ。

文次　夫ぢやア仲間へ入れる氣か。

彌七　成程手前が云ふ通り、首が資本の盜人は、義理人情のある奴が、此方等仲間の面よごし、淸く笑つて山分けに、爲事をさせてやらうから、其方も爰に居るがいゝ。

文次　さう又淸く出られりやア、裾を搔かうとした俺が、却つて此方に面目ねえ、恰度野州に降り積る、峯の雪せえ春は解け、山も笑えば此方等も笑つて仲能く頑張らう。

卯左　頭同士が解け合つたら、此方も文句は云へねえわけ。
松蔵　四五百両の為事をして、其分け口を貰つたら、
石松　互ひに何處かへくり出して、
武太　うめえ酒でも飲み合はうよ。
彌七　前祝ひに一升と、云ひてえ所だが此原中、
文次　酒の代り此焚火で、あたつて待つより外はあるめえ。
卯土　夫ぢやア其所へ割り込まうか。
松武　サア爰へ來てあたれ〳〵。
　ト一同車座になつて、焚火をする。馬士唄の合方にな
り、向うより佐野次郎左衛門、瘡のある顔、旅形りに
て三度笠、引廻し合羽、銅の小田原提灯を持つて出て
花道にて、
次郎　日の暮れぬ中に此原を、通り越さうと急いだが、な
んぼ私の早足でも、今日の道は無理であつた。（ト舞臺
を見て）なんだか向うに焚火をして、大勢あたつて居
る様だが、年中通る此原でも、金を持ては些と危險、と
あつて後へも歸られず、度胸で構はず通つて見よう。
　ト舞臺へ來る、舞臺の六人はアレではないかと見やる
次郎左衛門は氣味惡さうに上の方へ通り拔けるを、
彌七　オイ〳〵旅人、一寸待ちな。

次郎　エ、。（トぎつくりして立ち止り）是は皆さん、
夜中御苦勞様でござります。
彌七　些と待ち合はせる者があつて、斯うして大勢出張つ
てゐるんだ、何にしろ寒い晩だ、爰へ來てあたつて行き
なせえ。
次郎　有難う御座りますが、少々道を急ぎますから、あた
らずに參りませう。
　ト行きに掛かる、手下は笠の中を覗き込み、
四人　オイ一件者だ〳〵。（ト口々にいふ。）
文次　オイ〳〵次郎左衛門さん、まア待ちねえ。
　ト次郎左衛門猶オド〳〵して、
次郎　どうして貴方は私の名を。（ト合方になり。）
文次　お前の方ぢやア知ろめえが、俺の方ぢやア知つてゐ
る、佐野近在の遊び人、盲文次と云ふ者だ。
次郎　知らぬ事とて此方から、御挨拶もいたしませず、御
免なすつて下さいまし。
彌七　俺もこなたは知るめえが、腹太彌七と云ふ者だ。ど
うか見知つて貰ひてえ。
卯左　其子分の赤目の卯左吉。
松蔵　同じ仲間の兀山松。

石松　日の目の嫌えな土龍の石松。
武太　俺アやらずと仇名の武太郎。
文次　其方で知らざア爰へ來て、
彌七　どうか昵近になつて下せえ。

ト次郎左衞門惡い奴に逢つたといふ科あつて、氣を變へ、

次郎　これは皆樣御銘々に、御丁寧な其お詞、心急きでさへ御座りませずば、お昵近にもなりますが、家へ歸るを急ぎますので、御覽の通り夜道を掛け、此原を越します位ゐ、何れ其中ゆつくりとお詫びに出るで御座りますから、今夜は是でお別れ申します。（ト又行き掛ける。）
彌七　オイ〱次郎左衞門さん、まア待ちなせえ。何ぼお前は金持ちで、立派な佐野の商人でも、俺達ちが各自に名前を名乘つて挨拶するのに、笠も取らずに聞き流し、又悠然逢はうとは、大面にも程があらア、あんまり物を知らねえ爲方だ。
文次　こりやア彌七のいふ通り、物を知らねえ百姓でも道を聞くのに笠も取らず、教へてくれろと聞く時は、當てズツボウを教へるは、さもねえ時には空聾で、口を利かねえ筈のものだ、何ぼ歸りを急げばとて、笠も取らずに行くといふはあんまり人を見下げた爲方だ。
卯左　そんな奴なら笠を引つ剝ぎ、横つ顏でも喰はしてやれ。
松藏　化物七分に人間にやア、縁の遠い其面を、擲り曲げられたら痛からう。
石松　夫程笠が冠つて居たくば、
武太　化地藏にでもなりやアがれ。

ト次郎左衞門笠を脫ぎ、痘面を見せる。

次郎　仰しやる通り此樣な、見苦しい顏でござります故、笠を取るのも皆樣に、お恥かしう御座りまして、大きに失禮いたしました、此通りお詫びいたせば、どうぞ御了簡下さりませ。

ト丁寧に詫びる。

文次　手を突いて詫るなら、勘辨をしてやらうから、詫り賃を置いて行け。
次郎　澤山の事は出來ませぬが、二百文位ゐでよろしければ、お詫びの印しにさし上げませう。
彌七　べら棒め、夫ッ計りの端下錢は、欲しきやア此方で呉れてやらア、祝儀座頭と間違へるな。
次郎　さうして何程差し上げましたら、御勘辨下さいます。

文次　手前が江戸から取つて來た、金を殘らず爰へ出し、詫びたら勘辨してやらう。

ト次郎左衛門驚きしが氣を持へ、

次郎　イエ金なぞは一兩も纒めて持つては居りませぬ。みんな仕入れへ廻しまして、江戸から歸つて參りました。

彌七　コレサそんなに隱しなさんナ。お前が江戸から四五百兩、持つて歸るといふ事は、留守居の者から聞いてゐるのだ。

次郎　エヽ、そんなら次六が。

彌七　然も昨夜お前の留守に、態々尋ねて行つた所、下男の次六が一人居て、金は殘らず他所へ預け、家には無えが次郎左衛門が、江戸へ出て居る代呂物の、懸を殘らず取り集め、概と踏んでも四五百兩、持て歸ると云ふ事は、俺が詳しく聞いてあるのだ。

卯左　其上何も夢想がねえと、飯迄焚いて俺ッちに喰はしてくれた愛嬌男。

石松　主人が留守で淋しいから、泊つて呉れろと頼まれて到頭夜着を着て寝たが、外に蒲團の用意もなく、此方は戸棚へはひつて寝た。

文次　夫と知らずに此俺も、有金殘らず借りようと子分二人を供に連れ、夜中に尋ねて行つた所、飛んだ仲間の鉢合はせ、目から火の出る暗闇も、カチ〱云はせる火打箱に、世間で起きては面倒と夜の明けぬ中歸つたこちとら

松藏　今日は是非共夜に入つて、歸ると聞いて此原迄出迎ひに來た六人連れ、

武太　禮だと思つて懷の、金を殘らず爰へ出し、挨拶をして行けばよし、

彌七　ジタバタしたらお定まり、惨い料理を爲にやアならねえ。

文次　命が惜しくば次郎左衛門、金は元より身ぐるみ脱ぎ裸になつて、

六人　行くがいゝ。

ト是を聞き、腹の立つこなしにて、

次郎　そんな奴と知らずして、子供の時から家に置き丹精をしたアノ次六、よくも主人の難儀になる、賊の手引きを。

ト云ひかけて心附き、

イエ、そんな嘘を吐かしても、私は一兩でも纒めた金は江戸から持つては歸りませぬ。

ト云ひながら懷を押へてゐる。

文次　持つて居るか居ねえかは、身ぐるみ剝ぎやア分る事だ。

彌七　人が通ると面倒だ、早く皆で剝いで仕舞へ。

四人　サア裸になつて仕まへ。（ト押へ附ける。）

次郎　誰ぞ來て下されませ。

彌七　聲を立てると、ぶつた斬るぞ。

ト刀を拔いて脅す、此時向うより都築武助、旅裝束菅笠を持ち出て、舞臺の樣子を見てツカ〳〵と駈け寄り、

武助　旅人を惱ます盜賊共、命が惜しくば立去り居らうぞ。

六人　邪魔な奴が來やアがつた。

ト次郎左衞門武助を見て、

次郎　貴方は今朝方鳩ヶ谷にて、お目に掛つたお武家樣、

武助　オヽ今朝別れた佐野の御仁、よい所で出逢ひました。

文次　ウヌも殺らして金にする。

彌七　侍覺悟をしやアがれ。

ト文次彌七斬つて掛かる、武助笠にてあしらひ、トヾ兩人の刃物を打ち落し、彌七の刀にて六人をむね打ちにする事、トヾ彌七の眉間を斬る、彌七疵口を押へ、

彌七　人殺し、盜賊々々。

といひながら向うへ逃げてはひる。文次手下も同じく上下へ逃げ込む、次郎左衞門起上り、

次郎　おかげ樣にて大難を脫れましてござります。

武助　何も盜られし物はないか。

次郎　貴方がお出で下すつたので、手拭一筋盜られませず、無難に脫れまして御座ります。

武助　夫は重疊、さりながら、其方の足の達者は、實は驚き入つたものでござる。拙者も自慢の早足なれど、

次郎　今朝程お目に懸つた時、奧州筋へお出でになると、仰しやりまして御座りますが、シテ今晩はお武家樣には何れへお泊りで御座ります。

武助　夫に就いてお手前をお見掛け申して賴みがあるが、なんと聞いては下さるまいか。

ト次郎左衞門氣味惡きこなしにて、

次郎　ヘイ命の親のお武家樣、命を取られたと思へば、金子位ゐは決して惜しくは思ひませぬ、殘らずお禮にさし上げます。

武助　イヤ〳〵金子の事ではござらぬ、身共も是に二百金程懷中の用意はいたし居れど、仔細あつて主家を立退き、寄る邊定めぬ浪人に、奧州筋を志し參つて見ようと存ずれど、何處を標ぐ的もなく、當惑いたして居る某、是

を御緣にお手前のお宅へ、お置き下さるまいか、御迷惑なら、お口添へにて、何れの宿へか言ひ入れて、當分其所に居るゝ樣、お世話をお願ひ申し度く、夫が一つの頼みで御座る。

次郎　へエ左樣なお頼みで御座りまするか。（ト安心して）其お頼みなら私も、命の御恩のお武家樣、身に引き受けていか樣とも、お世話いたすで御座りませう。

武助　早速の御承知忝い、然らば當分錦宅へ、

次郎　併し賤家同樣な、宅へお置き申すのも、

武助　其儀は聊か厭ひませぬ、偏屈者でござる故、其處は何卒お含みあつて、

次郎　其上貴方に劍術でも、敎へてお貰ひ申したら夫こそ此方の大仕合せ、

武助　先づ兎も角も爰は往還、夜更けぬ中に、

次郎　夫では是から、私方へ。

ト兩人身支度して落ちてゐる刃物を見て、

エ、氣味の惡い、是は拔身だ。

武助　今の奴等の鈍刀刃、

次郎　此儘置いては、往來の妨げ、

武助　斯うして終へば、

ト膝に掛けてへし折り、田の中へ捨てゝ、

是で安心。

次郎　ドレ、御案内を、

ト荷物を肩に掛けるを、木の頭。

いたしませうか。

ト山おろし、馬士唄の合方にて、

幕

四幕目

佐野宅筐迯の場

枝川堤高札前の場

役名――佐野次郎左衞門。下男次六。醫者藪垣寒竹。屋婆お百。百姓米八。同麥六。盲文次。高安妻おとし。同娘お千代。兀山の松藏。やらずの武太郎。都築武助。腹太の彌七。赤目の卯左吉。土龍の石松。高松の若黨佐吾平。

本舞臺四間常足の二重、藁葺の庇、上手一間の落間、正面上手一間中仕切りのある押入れ戸棚、此前帳場、

眞中一間大阪格子の出はひり、下手一間板羽目、此前に細物の入りし葛籠積んであり、上手落間、折廻しの板羽目に劍術の道具つるしてある、いつもの所藁葺きの門口、總て野州佐野宿次郎左衞門内の體。爰に上手に下男次六竹刀を振上げ、立ち懸り、下手に藪垣寒竹田舍醫者の拵へ、眞中に百姓米八、麥藏雇ひ婆お百止めてゐる見得、在鄕唄機織の音にて幕明く。

米八　コレ〳〵次六どん、腹の立つのは尤もぢやが、マアマア下に居さつしやい。

麥六　醫者に怪我をさせた所が、やつぱり此方の厄介だ。

次六　見立て違ひで人を殺す、いけつ太エ藪醫者め、何うしてかやらなきやア腹が癒ねえから、捨てゝ置かつせえ。

寒竹　仁術を以て人を助ける、長袖の醫者を捕へ、人殺しなぞとは怪しからぬ。サア打てるなら、打つて見ろ。

お百　マア〳〵先生了簡しなせえ、醫者の見立てが違つたらうが、斯なお醫者に掛けるのが、家の旦那が見立て違えだ。

寒竹　此方なぞが同じ樣に、怪しからぬ事を云つたものだ、いくら良劑を施しても、病人が惡くなるのは、壽命づくで爲方がない。

次六　乾度治すと請合つて、壽命づくもねえものだ、彼れでいよ〳〵病人が死にでもしたら只は置かねえ、汝が匕で盛り殺したのだ。

寒竹　ナンデ愚老が盛り殺すものか。

米八　イヤだん〳〵病人が惡くなるから、次六どんが怒るも尤もだ。

麥六　爰等近所に碌な醫者が、無いのが此方の不運だと、諦めるより爲方がねえ。

寒竹　こんな亂暴な所に居て、どんな目に逢はうも知れぬ、見立が違ふか違はぬか、外の醫者に見せさつしやい、愚老はモウお斷りぢや。

次六　汝逃げるなら禮代りに、是を一本喰つて行け。

ト竹刀を振り上げるを、止めて、

米八　コレさ、打つのはよくない事だ。

麥六　こんな醫者でも人一人、

お百　頭が慈姑で竹の子醫者、

次六　藪から棒をくはしてやらう。

寒竹　アヽくわい事〳〵。

ト寒竹は下手へ逃げてはひる。次六は止められて見送

る、奥より次郎左衛門羽織着流しにて出て來て、

次郎　コレ／＼次六、靜かにせぬか、二人の衆大きに有難う御座ります。

米八　次郎左衛門殿、聞かつしやつたか。

麥六　御心配で御座りませう。

次郎　アンナ醫者を頼んだのは、次六よりも私が殘念、併し向うで斷つたとて力を落すに及ばぬ事、此近所にこそ藪醫者許りで、頼りに思ふ醫者はないが、館林へでも行つたなら、名醫もあらうし夫で行かずば神の力や信心でも、乾度治して見せるから、奥に寢てゐる病人の耳へ入れては能くない噂し、見舞に御座つた二人の衆に、とんだ御厄介を掛けました。

お百　ホンニ旦那さんの仰しやる通り、大病人には何事も聞かさぬもので御座ります。

米八　私等も奥の病人が、よくなる樣に家へ歸り、

麥六　村中集めて相談の上、お焚き上げでも仕て見ませう。

次郎　是は二人の衆御深切に、能う見舞に來て下さりました。

米八　又明日の朝見舞に來ませう。

麥六　夫では病人を大事にさつしやい。

ト在郷唄になり、兩人下手へはひる。

お百　ドレ今の中奥へ行つて、藥を煎じて置きませうか。

次六　藪醫者の寒竹が、盛つた藥は的にならぬ、毒になるから止さつしやい。

次郎　イヤ／＼藥を上げぬ時は、扨は醫者が斷つたかと、氣を落してはよくない事だ。

お百　冗な藥も飲みよい樣に、煎じ詰めずに上げませう。

ト　お百奥へはひる。

次六　あんな醫者でも斷わられては、氣が揉めて爲方がねえが、どうか爲樣はねえかしらん。

次郎　館林に江戸から來た、名醫があるといふ事で名前と居所を書いてあるから、夫を持つて尋ねて行き、頼んで來ては呉れまいか。

次六　都築先生の爲なれば、何所へなりと行つて來ます、夫ぢやア書き附けを書いて下さい。

ト次郎左衛門帳場へはひつて所書きを書き、

次郎　駕籠賃人用は此方持ちで、何程でも差し出しますからと云つて、直ぐに是から行つてくれ。

次六　知れせえすりやア今夜にも、一緒に連れて來ますべえ。

次郎　モウ彼是暮れ合ひだ、飯を喰つて行くがいゝ。
次六　ナニ飯なぞは行つて來て、ゆつくりと喰ひませう。
ト身支度をする。
次郎　夫ぢやア次六、大儀ながら、
次六　ドレ、一ト走り行つて來ませう。
ト在郷唄の合方になり、次六足早に向うへはひる。後見送つて、
次郎　十六年後私の親父が、死靈の爲に狂ひ死、其祟りにて私迄が產れも付かぬ此の惡相、一生女房は持つまいと男世帶で暮す中、追々仕出す身代も小金があると附け込まれ、千貫原での大難も、危ふい所を救はれた、命の恩の都築先生、夫が緣にて家へ置き、お弟子となつて劍術迄教へてお貰ひ申して見れば、此身に取つては大事のお師匠、どうぞしてアノ病氣を治して上げたいものなれど、田舍醫者でも寒竹が藥を盛らぬと斷わられては、十に八九は冥土の者、扨て困つたものではある。
トちつと考へる、右の合方唄入りにて、向うより前幕の文次、半合羽一本差し旅形りにて、前幕のおとし、お千代同じく旅拵へにて出て來り、花道にて舞臺を見て、

文次　モシお二人さん、お尋ねなさる次郎左衞門さんは、向うの家でございます。
とし　夫ではアレが都築といふ浪人が厄介になる、次郎左衞門樣のお宅で御座りますか。
千代　少しも早くお尋ね申し、お目に掛り度う御座ります。
文次　私も久しぶりで此方の方へ參りましたが、去年の春からお侍が、向うの家にお在の事は確に聞いて居ります、まア兎も角も御案内いたしませう。
とし　御深切なお方樣、
千代　宜しうお願ひ申しまする。
ト合方唄入にて、三人舞臺へ來て、
文次　御免下さい。（ト門の中にはひる。）
次郎　ハイ〳〵誰方で御座ります。（ト文次を見て、）ヤ貴樣は、（ト身構へる。）
文次　ア、モシ次郎左衞門さん、定めし俺を見なさつたら、あつかましい奴とも思ひなさらうが、私も其後さつぱりと、心を改め堅氣になり、折りがあつたら詫び旁々、此方の家へ尋ねようと思ふ矢先きに惡者に、出會つて難儀の女中連れ、途中で助けて樣子を聞けば、此方の家に去年から泊つて御座るお侍を尋ねるお人と分つたので、案

内をして詫び旁々、顔を出した文次郎、眞人間になつたから、以前の事は水に流し、どうぞ勘辨して下せえ。

ト尤もらしくいふ。

次郎　詫びる事なら私も又、去つた事はいふまいが、さうして私の家に居る、都築先生を尋ねる女中は何れから御座つたのぢや。

文次　今家内へ呼び入れるから、御當人から其譯を詳しく聞きなさるがいゝ、（ト戸外へ向ひ）モシお二人樣ズツとおはひりなさいまし。

とし　それでは御免下さりませ。

トおとし、お千代を伴れて家内へ入り、

左樣ならあなた樣が、次郎左衞門樣で御座りまするか。

（トお千代次郎左衞門を見て）

千代　テモ、氣味の惡い。

とし　コレ。（ト制す。）

次郎　シテ都築先生をお尋ねとは、誰殿樣で御座りまするな。

とし　私共は江戸表外神田にて本田の家中、高松安之進と申す者の妻と娘に御座りまする。

ト聞いて次郎左衞門容を改めて、

次郎　扨は常に都築樣がお噂ありし本田樣の、高松樣の、奧樣と、お嬢樣で御座りましたか。

とし　夫では豫々貴方樣には、お聞及びで御座りましたか。

次郎　昨年當地にお在になると、直ぐに貴方へ御文通なされましたので、夫で承知をいたし居ります。

千代　承はれば此程では、病氣でお在なさる由、御容體は如何で御座りますか、お聞かせなされて下さりませ。

次郎　何うして夫を貴方々には。

文次　其樣子は此近所で承はつて今此方へ、御案内旁々道でお噺し申したのでござります。シテ都築樣の御病氣は、どんな樣子でございますね。

ト次郎左衞門一寸こなしあつて、

次郎　世間で噂をする程の御大病では御座りませんが、何を申すも江戸と違ひよい醫者樣もございませんので、手に手を盡せど捗々しく、御全快にもなりませんから、今も宅の若い者を館林迄やりまして、よい醫者樣を迎へる心算、夫は差し置きあなた方には、途中に於て惡者にお出逢ひなされたと申す事、何う云ふ次第で御座ります。

とし　其仔細と申しまするは、是なる娘が昨年から兎角に勝れぬぶら〳〵病ひ、詮方盡きて後の月、上へ願つて三

迴程伊香保で湯治を爲せまして漸く全快いたしますれば夫より近々佐野とやらへ、尋ねて參り聟殿に、イエ、都築殿に逢はせませうと、家來を一人供に連れ、伊香保を立つて二日路にて、此方へ尋ねて參りし所、昨夜泊りし旅籠屋へ、忘れ物をしました故供を夫より取て返させ、立場で休んで居りますを、駕を勸めし惡者が無體の云ひ掛けいたしますを、是なるお方のお助けにて無事に是迄參りまして御座ります。

次郎　夫で樣子は分りましたが、其お供の御家來が此家を御存じ御座いませぬから、嘸今頃は困つてお在なさいませう。

文次　其お困りのない樣に、立場の亭主に此方のお宅をお敎へ申せと賴んであれば、追つ付け尋ねて參りませう。

次郎　夫は重々御深切、さうして此方は堅氣になり、今は何處に居さつしやる。

文次　飛んで步いた破落漢も、實家へ歸れば足利で人に知られた穀問屋、稼業の事で上州まで、出向いた歸りに當所を通り、此お二人を案內しました。

次郎　首尾よく實家へ歸られたら、何卒堅氣になり通し、身持ちを能くして下さいまし。

文次　憚りながら御病人へ、よろしく申して下さいまし。

次郎　此方の噺しを聞かせたら、嘸悅こびでござりませうよ、

文次　左樣ならお二人さん、是でお別れ申します。

とし　御深切に逢つて下され、

千代　何かと有難う御座ります。

文次　確かにお渡し申しましたよ。

ト在鄕唄になり、文次思ひ入あつて下手の生垣の蔭に隱れる、お千代は心遣ひのこなし。

千代　どうぞ母樣武助樣に少しも早うお目に掛かり、どの樣な御容體か、早う窺ひ度う御座ります。

とし　私も夫が心掛かり、憚りながら次郎左衛門樣御案內を願ひまする。

ト次郎左衛門は四方を憚りて、

次郎　奧へお連れ申しましたら、嘸御當人もお悅び、其前方にお二人樣に申し上げる事が御座りまする。

とし　其前方のお噺しとは。

次郎　只今是へ貴方々を御案內して來た奴は、油斷のならぬあぶれ漢、滅多な事は云はれぬ故、お案じなされる程ではないと、申しましたは僞りにて實は奧の都築樣は今日か明日かと申す位ゐの御大病でござります。

とし千代　エ、、、、。（ト吃驚する。）
次郎　時節を待つて歸參なし、高松樣へ御恩報じと、仰しやり暮らせし功もなく、此五月からお床に就いて此程では、醫者も見限る御大病、江戸お屋敷へお手紙でもと勸めましたが夫にては、却て御苦勞掛くろ道理と、何所が何所迄御全快をなさる心算でおいで故、お逢ひなされてお二人樣が此容體ではむづかしいと、仰しやつたなら御病人が力を落してガツクリ行かうも知れませぬから、其お心で力を附け御看覺をなさりませ。
　ト是を聞き、おとしお千代氣の揉めるこなしにて、
とし　何の御緣か知らねども、眞身も及ばぬ御心配、心得まして御座ります。
千代　幾瀨の思ひで漸々とお尋ね申したかひもなく、萬一の事でも御座りましたら、母樣、何といたしませう。
　ト泣き伏す。
とし　サ、夫故に次郎左衛門樣がお心添へをなさるのぢや、泣いては却て爲にならぬ、必ず共に泣きやんなや。
千代　ハイ。
とし　今から左樣に泣く樣では、側へは連れて行かれませぬぞ。

　ト嚴しく云ひ聞かす。
千代　モウ〳〵泣きはいたしませぬ、早うお連れ下さりませ。
次郎　御得心が參りましたら、サア御案內をいたしませう。
とし　夫ではどうか憚りながら、
次郎　斯うおいでなさりませ。
　ト在鄕唄になり、三人奧へはひろ。向うより前幕の松藏武太郎雲助の拵へにて出て來り、花道にて、
松藏　立場の亭主に邪魔をされ、爲事が旨く行かねえ所から、頭が態と仲へはひり、深切ごかしで次郎左衛門の家へ案內して行つたが、どんな樣子か門口から覗いて見たら分るだらう。
武太　盛りは過ぎてもいゝ年增、油が乘つて旨え喰ひ頃、娘の方は何處へ嵌めても、二百の値打ちはあらうといふ、極く飛び切りの上玉だ、あれを〳〵見のがしちやア手前も俺も先祖へ濟まねえ。
松藏　其所は頭の事だから、如才なくやるだらう。
武太　何にしろ向うへ行つて、家の樣子を覗いて見ろ。
　ト二人は舞臺へ來る、生垣の蔭より文次は竊と出て、
文次　二人共よく出て來た。

松蔵　頭、此所に居なすつたか。
武太　さうして先刻の上玉は、
松蔵　何ういふ爲事に、
武太　なりやしたね。
文次　深切ごかしに案内して、今では堅氣になつたと云つて、次郎左衛門に氣を許させ、今夜仕掛けて浚ふつもりだ。
松蔵　夫でも去年の浪人が、一緒に居ちやア危險だ。
武太　やり損なつて引つぱたかれ、又逃げるのも氣のねえ譯だ。
文次　其浪人は大病で、死り掛けて居る事を、聞き出したのが此方の附け目だ。何にしろ庭へ忍べ。
松蔵　そんなら後ろの此庭へ。
武太　忍んで爲事をするのかね。
文次　日の暮れ紛れの混雑に庭へ忍んで待つて居ろ、遺恨を晴らすは、六人で一緒にやらかす心算だから、其中俺は彌七を誘ひ、次郎左衛門を釣り出して、殺す手筈を爲にやアならねえ。
松蔵　恰度今方渡し場で、
武太　彌七兄いに逢ひやした。
文次　夫ぢやア忍んで待つて居ろ。
松蔵　そんなら頭、（ト大聲を立てる。）
武太　コレ。（ト制すを道具替りの知らせ、）
文次　彌七の奴に逢ひてえものだ。
ト文次向うへ早足にはひる。二人は忍ぶ。これにて、
道具廻る

本舞臺四間中足の二重、藁葺の庇、折廻し竹簀の子の本縁、眞中に丸木根株の沓脱き、二重正面、上手一間の床の間、此次ぎ一間の押入れ戸棚、下の方一間障子の出入り、二重の上手蹴へ下げて圍の入口、下の方一間の生垣、切り破る拵へあり、總て次郎左衛門宅奥の間の體。上の方に武助病人にて蒲團の上に起き直り、括り枕に凭れゐる、左右におとしお千代介抱してゐる、下の方に次郎左衛門控へ、お百は行燈を灯けてゐる。時の鐘、床の淨りにて道具止まる。
竹本へ暮告ぐる鐘のあはれも身にぞ知る、無常の風と誘ひ行く灯影小暗く病人を、いたはる浪嫁姑、次郎左衛門は氣を引き立て、

次郎　コレ〳〵婆アさん、そんな行燈なんぞでは陰氣でいけぬ、燭臺でも灯けて來なさい。

お百　どういふものか今晩は、いくら燈心を入れましても暗くつていけません。

次郎　夫だから燭臺を灯けておいでと云つて居るのぢや。

お百　ハイ〳〵、畏りました。

ト叱られていそ〳〵として立つて行く、跡には重き病人か、息切れなすを押しこらへ、

トお百奧へはひる、合方になり、

武助　只今も申す通り、受けし御恩も送らずして、此儘死するは殘念なれど、所詮今度の煩ひは助からうとは思ひませぬ、まだ〳〵斯うしてお二人に、今際のきはに思ひ掛けなく、お目に掛かるは如何ばかりか、悦ばしい儀で御座ります。

ト云ふも苦しき息遣ひ、娘は泣かぬ約束も堪へ兼ねてぞ伏し沈む、姑は心勵まして、

トお千代はワッと泣き伏す。

とし　コレ武助殿、其樣な氣の弱い事仰しやるな、年老朽ちた身ではなし、まだ年若の身を以て、死ぬるなぞとは思ひも寄らぬ、心を丈夫に持たしやつて、原の體に全快して江戸へ目出度う歸參して、都築の家名を立てぬ時は、親御の位牌に濟みますまい。

ト力付くればやう〳〵と、娘は淚押し隱し、

千代　私とても昨年から、貴方にお目に掛かり度く、思ひ餘つて病氣となり、兎角勝れず居りましたを、伊香保へ湯治に行きまして、僅か半月經たぬ間に、斯樣に健康になりましたれば、何卒貴方も其樣な、お弱い事を仰しやらず、少しも早う御快氣に、おなりなされて下さりませ。

ト常の內氣も玉の緖を繫ぎ止めんと搔き口說けば、

武助　イヤ所詮全快爲樣なぞとは思ひもよらぬ、盃交して二世の緣、結びしかひもなき別れ、死するはいかにも殘念ながら、力づくにも意地づくにも、勝たれぬものは病ひの業、鬼にも負けぬ拙者めも、張りも我慢も拔け果てゝ、覺悟極めたはよく〳〵と、思ひ諦め下さりませ。

ト後云ひさして賴みなき、命を胸に括枕、起き得兼ねてぞ打ち伏せば、次郎左衛門力を附け、

ト武助息苦しきこなし。

次郎　先生お案じなさいますナ、病ひを治すは醫者が賴み、夫を今迄賴りない此近邊の、下手なお醫者に掛けて居た

ので、捗々しくも驗も見えず、夫故次六を館林の上手なお醫者を迎ひにやり、直ぐにも頼んで連れて來る筈、今夜の中にも其お方が來れば、追々全快になりませうから、お心を丈夫に持つて下さいまし。

とし　又看病が第一故、娘と二人當分は此方のお宅へお頼み申し、置いてお貰ひ申したなら、屆かぬながら一心に、

千代　日頃念ずる神様へ水垢離を取り御全快を祈りましたら驗も見え、お治りなさるに違ひない。

次郎　夫は此方で願ひましても、當分お止め申し度く、三人四人が一心に、平癒を祈れば大丈夫、人の一念勢力でも能くなりませねばならぬ譯。

〽折から婆が燭臺に灯り照らして持出でゝ、

ト奥よりお百燭臺を持つて出て、

お百　ハイ、お灯りが參りました。

次郎　大層手間が取れたではないか。

お百　蠟燭が知れませんで、大きに遲くなりました。

次郎　見世に誰も居ないから、見世番をして下さい。

お百　ハイ／＼、畏りました。（ト奥へはひる。）

〽姑は勞れし様子を見て、娘が側に泣き入るも、よしなき事と察しやり。

とし　無理に起して病人に氣を揉ましてはなりませぬ、今日は何かと娘にも草臥て居ませうから、彼方で休息したがよい。

次郎　心附かずに居りましたが、伊香保からの二日路では、餘程お骨の折れる道、嘸お勞れで御座りませうから、先づ御緩りと今晩は御休息をなさりませ。

千代　イエ／＼道の草臥も、忘れた様でござりますから、今宵はどうぞ爰へ置き看病させて下さりませ。

とし　ハテ今宵から當分は、側を離れず居る其方、草臥休めをするがよい。

次郎　何かの事に取り紛れ、お茶も上げずに居りました。

〽立たんとするを、

武助　次郎左衛門殿、お待ち下さい。

次郎　何ぞ御用で御座りまするか。

武助　アノ押入れに藏ひある大小と紙入れを、憚りながらお出し下さい。

次郎　ハイ／＼、畏りました。

〽何心なく押入れより、二包みある金入れと祕藏の一腰取り出だし、枕邊へこそ並ぶれば、

ト次郎左衛門後ろの戸棚より、大小と胴卷を出して枕

許へ置く。

武助　各方の御配慮を無にする樣では御座れども、人は覺悟が肝要故、萬一の事のない中に、讓り置き度き此の品々。

次郎　ナニ、其品々を讓らうとは。

ト蟲笛の入りし床の合方になり、

武助　此金子は去年の春、邸を浪人いたす時、舅御のお情にてお惠み下さる二百金、是は此儘姑御へ、改めて御返納、又此刀は父武兵衞が末期の際に讓り受けたる筐の一腰、都築の家は本田家の譜代の家來といふにあらず、以前は江州佐和山にて滅亡なせし石田の家臣、されば御當家禁制の、村正を所持なし居れど、幸ひにして無銘にて、水も溜らず斬れるといふ、所謂を以て籠釣瓶と名附けたる家重代、昨年よりの御介抱のお禮の印しに次郎左衞門殿へお讓り申せば、筐と思ひ守りとして、一生拔かずに祕藏なせば、其身に祟りは聊か御座らぬ、さりながら事に臨んで拔く時は、必ず其身に過ちあつて血を見ぬ中は納まらぬ、業物なりと心得て麁相なき樣いたされよ。又差添へは志津三郎、お千代殿への我が筐。

ト息つく／＼と打萎れ、漸く語り終るにぞ、三人は聞くも忌はしく、

ト品々を三人の前へ差出す。

とし　イエ其樣に筐ぢやの、返金ぢやのとの心配は却て此方が心苦しい、其方へ納めて置いて下され。

千代　御全快遊ばすを祈つて居ります私共、筐のなんどいふ事は假にも云うて下さりまするな。

次郎　又町人の身分にて、左樣な立派なお刀を持つては却て此身の害、是に藏つて置きませう。

ト刀を押入れへ藏ふ、奥よりお百出て、

へ元の如くに押入れへ、納めてしまふ其所へ、

お百　モシ旦那さん、先刻お出でのお方だと、文次さんといふ人が參りまして、今村境ひの渡し場で、お供の家來が惡者に、無體の喧嘩を仕掛けられ、難儀な樣子を知らせに來たと、お店に待つてゞございます。

とし　ナニ、佐吾平が又川で、

千代　難儀に逢うて居やるとか。

次郎　此界隈の破落漢が、澤山迂路附き歩きますから、何がどうやら知れません、まづ兎も角も私が、行つて樣子を見て來ませう。

武助　御苦勞ながら次郎左衞門殿、此方が行けば大丈夫、

追ひ散らして來て下さりませ。
次郎　何にしろ次次に逢つて、樣子を聞いて出掛けませう。
とし　夫どはどうぞ御苦勞ながら、
次郎　お氣づかひなさりますな、ドレ、行つて參りませう。
〽計ると知らで次郎左衞門、店の方へと出でて行く。
ト次郎左衞門奥へはひる。
〽跡に雇ひの田舍婆、村の自慢を饒舌り立て、
ト合方替つて、
お百　旦那が行けば大丈夫、モウお案じには及びませぬ、先生樣が此方の家へお在になつてと云ふものは、此村方へ盜賊だの強請騙りや無心者諸勸化押賣り破落漢が、立ち入りませぬが一つの自慢、夫といふのも去年から何處でも此處でもヤツトウ流行、月待ち日待ちの休みにも畑の中や野良へ出て、ヤツトウ參つたちやんばらと、竹刀の稽古をしますので、其所へ強請や盜賊どもがはひつた日には慘めなもの、半殺しの目にあひまする。オヤまア私とした事が旦那が外へ出さしつたのに、店へ行くのを忘れて居た。
〽とつかは店へ立つて行く。
トお百奥へはひる、時の鐘、風の音になり、

〽樣子窺ひ庭先きへヌッと出でたる腹太彌七、手下二人も僞すまし顏、
ト下手の生垣を破り、以前の松藏、武太郎先きに、前幕の彌七忍んで出て、
彌七　千貫松原の仕返しだ、都築武助覺悟しろ。
松藏　よくも去年の二月二十日、
武太　爲事の邪魔をしやアがつたナ。
とし　おのれは最前立場にて、
千代　云ひ掛けし居つた二人の者、
武助　去年確かに見覺えある、盜賊共であつたるか。
ト凄味の合方になり、
彌七　オ、あの時は滿足なウヌの手並みに後れを取り、折りがあつたら此遺趣を返してやらうと覗つても、手出しのならねえ劍學者、時節があつて足腰の利かなくなつた業つくばり、其煩ひが此方の附け目、サア立ち上つて勝負をしねえか、アノ時の樣に捩て見ねえか、不便や腰拔け罰當りめが、俺の足でも頂きやアがれ。
〽病苦に惱むを附け入りて、頭上を足にて踏み躙れば、
ト彌七足を上げて武助を踏み付ける、おとしお千代身構へて、

とし　女なれども武士の妻、
千代　其狼藉は許さぬぞ。
松蔵　どつこいジタバタ仕度からうか、
武太　其二人は連れて行き、
松蔵　弄み者に、
武太　爲にやアならねえ。
とし　エヽ穢らはしい、
兩人　放さぬか。
〽身を揉み焦れど女業、無念々々と泣くばかり、都築は
やつと兩の手に、踏まれし足を振り拂ひ、
ト武助病苦ながら彌七を振りほどき、
武助　いかに病ひに惱めばとて、おのれ等如きの土足に掛
かり、無念の最期を遂ぐべきや、病みほうけても都築武
助、イデ目に物見せてくれん。
彌七　エヽ、ふざけた事を吐かしやアがるな。
〽立たんとなせど腰立たず、氣の焦ら立つを後ろよりハ
ツタと蹴れば其儘に、ウンとノケ反り息絶えたり。
ト武助立たうとするを、彌七脇腹を蹴る、是にて武助
苦しみ這入る。
とし　テモ情ない、

千代　此の有樣、
彌七　ソレ、二人を早くふん縛れ。
松蔵
武太　合點だ。
〽無慘なりける。
トおとしお千代焦るを、彌七指圖して松蔵武太郎に縛
らせる模樣、床の三重にて、道具廻る。
本舞臺常足の二重、草土手の蹴込み、後ろ在體に川
を見たる書割の遠見、上の方に高札場、柳の立樹、
よき所に梵天の辨慶を建て、總て枝川堤高札前の體、
灯入りの月を出し、爰に次郎左衞門一本ざしにて立
ち身、上手に以前の文次、下手に前幕の卯左吉、石
松取り卷いてゐる、水の音、稽古囃子にて道具止る。
次郎　先刻改心したといつたは、扨はやつぱり僞りだやナ。
文次　曲つた性根がなんのツケ、此年になり直るものか、
去年の遺恨を返さうと二年此方附け覘へど、時節がねえ
ので爲方なく、今日迄我慢をしてゐたが、先刻立場で引
つ攫ふ、女の樣子を聞いて見りやア、手前の家を尋ねる
奴、深切振つて連れ込んだも、家の樣子を見ようが爲手
強く思つた侍が、大病人と知つたからは、恰度此方の思

ふ壺、女の家來が渡し場で難儀といつておびき出し、我れをば殺す網の魚遁れぬ所だ、覺悟しろ。

次郎　いつぞや出逢つた次郎左衞門なら、此場で汝等の手に掛かれど、彼れから俺も鍛錬し、劍術柔術を覺えたからは、滅多に負ける事ではないぞ。

卯左　畑の中で泳ぎをする、蛙の樣な面をして、生悧口な事を云やアがるな。

石松　いくら手前が二年越し、師匠を取つて習つても相場の知れた朴念人、

文次　腕に覺えはなくつても、膽と度胸で鍛ひ上げた、俺の大刀受けて見ろ。

次郎　受けねえでどうするものか、

文次　ソレ、疊んでしまへ。

兩人　合點だ。

ト三人一度に拔き連れ、斬つて掛かる、次郎左衞門よろしく三人を對手に立廻り、稽古囃子、合方にて三人は斬り立てられる、向うより次六出て來て、此體を見て、

次六　其所に御座るは、旦那樣か。

次郎　おゝ次六か。

次六　私にも手傳ひさせて下せえ。

次郎　イヤ危い、控へてゐろ。

文次　彼奴も一緒に殺らしてしまへ。

兩人　合點だ。

ト次六に斬つて掛る、次六は建てゝある梵天を拔いて立廻る、三人は叶はず後ろの川へ飛び込んで逃げる。

次郎　殺すは何の雜作もねえが、後の始末が面倒故川へ逃げれば幸ひだ。

次六　去年と違ひ旦那さん、大層強くなんなすつた。

次郎　是もやつぱり恩人の、先生の御丹精だ。

ト刀を納める、上手よりお百走り出て、

お百　旦那、大變な事が出來ました。

次郎　慌たゞしい、もし先生のお命に。

お百　お留守に盜賊がはひりまして、先生を殺した上二人のお客を縛りまして、何處へか連れて行かうとする所へお供の人が尋ねて來て、今大騷ぎでござります。

次郎　ナニ、先生が殺された。

次六　コリヤ斯うしては居られますまい。

次郎　ムヽ、次六一緒に來い。

ト浪の音、早き合方にて上手へはひる。これにて、道

具廻る。

本舞臺以前の奥の間の道具へ戻り、縁端に武助倒れてゐる、平舞臺に以前の彌七、松藏、武太郎、おとし、お千代に猿轡を嵌め、引つ立てようとするを、若黨佐吾平旅なりにて止めてゐる見得、早き合方にて道具止る。

彌七　邪魔な所へ一文奴、ジタバタすりやア此通り、汝も息の根止めてやるぞ。

佐吾　此家が知れねばつかりに、無慘や都築武助樣はおい等の爲にお果てなされ、御主人二人は既の事連れて行かれる其場所へ、俺が尋ねて來合はしたは、まだしも運の盡きぬ所、報いは目前敵討、片ツぱしから覺悟しろ。

松藏　駄三一の癖として、片腹痛え其云ひ草。

武太　命が要らざア剛次手に、汝も一緒に殺してやらうよ。

彌七　こんな對人は俺一人で片附けるのは造作もねえ、手前達は二人して、其奴を浚つて早くふけろ。

佐吾　ヤア、其お二人を何でわい等に。

彌七　奴め默つてくたばりやアがれ。

ト斬つて掛かる、佐吾平拔き合して立廻り、此內子分二人はおとし、お千代を引立つて生垣の破れより後ろへはひる。佐吾平是を追ひ駈けようとする、彌七引き戻す立廻り、此時下手垣の外にて、

兩人　助けてくれ〳〵。

ト聲聞える、彌七びつくりして、

彌七　ヤ、二人の奴の、アノ聲は。（ト氣遣ふ垣の外より、）

次郎　御家來、氣遣ひさつしやるな、お二人共に御安泰ぢやぞ。（ト是にて佐吾平安心して。）

佐吾　さう聞く上は百人力、叶はぬ所だ、觀念しろ。

ト早き立廻りになり、彌七を斬り倒す、爰に下手より次六、松藏武太郎に繩を掛け、引立て出る、續いて次郎左衛門おとしお千代の繩を解き介抱して出る、おとしお千代は武助の死骸の側へ來て泣き伏す、次郎左衛門も側へ寄つて、

次郎　モシ先生、モウ斯うなつたらお命は所詮助かりますまいが、四十九日の其間は魂魄屋の棟を去らぬと云ふ、佛の教へも御座りますから、息があるならモウ一遍お眼を開いて下さいまし、貴方の敵はアレに御座る、御家來さんが取りました、お悦びなさいまし。

とし　聟殿、どうぞモウ一度。

千代　息吹き返して下さりませ。

次郎　モシ都築様、お氣をたしかに持つて下さりませ。モシ、先生々々。（ト云へども答へなきに、）ア、情ない事に、

三人　なりましたナア。

次六　大事なお方を殺したも、みんなおのれの爲た爲業、今にどうするか覺えて居ろ。

兩人　命許りはお助け〳〵。

佐吾　敵は拙者が此通り、止刀を刺して仕止めましてござります。

ト彌七に止刀を刺す。

次郎　蟲が知らして最前の、お篋分けが誠となり、たうとう斯んな事になるとは。

次六　是もやつぱり汝等から。

ト松藏武太郎の横面を撲つ。

兩人　アイタ、、、、。

次郎　ア果敢ないものは。（ト涙を拂ふを木の頭、）命ぢやなア。

ト引取り三重、寺鐘にて、一同愁ひのこなしにて、

幕

五幕目　新吉原仲の町の場

役名――佐野次郎左衛門。同下男次六。立花屋長兵衛。白倉屋萬八。地廻り一、二、三、四。兵庫屋八ツ橋。同九重。番頭新造八重咲。同重の井。新造七越。初菊。遣り手おたつ。同お政。茶屋廻りの男四人。兵庫屋の若い者大勢。等。

本舞臺平舞臺、正面青竹の手摺、朝顏形の釣洞燈、此中は一面櫻の植ゑ込み、山吹の下草をあしらひ、後ろは奥深に仲の町の茶屋々々の軒を見たる灯入りの遠見、總て新吉原廓内夜櫻の體。爰に地廻りの若い者一、二、三、四の四人立ちかゝり、二挺鼓太鼓入りの吉原雀の唄にて幕明く。

地一　是サ、此廓へ繰り込んで、只歸る奴があるかい。

地二　錢が無ければ無い樣に、西河岸へでも押し上がらう。

地三　明日の朝迄割前を、貸してくれるなら否とは云はねえ。

地一　跡りてえ事は些ともねえが、實は二人共一文なしよ。

地一　女郎買ひの割前許りは、跡になりやア取れねえものよ。

地二　錢がなけりやア仕方がねえ、徒黨を漏れて早く歸れ。

地三　色にはなまじ連れは邪魔だ、除けて呉れりやア有難い。

地四　馴染の所へ押し上がり、彼奴に逢て引かして遊んで歸らう。

地一　誰が手前達に、達引くものか。

地二　又居殘りでもするんだらう。

地三　いゝ人に取られりやア、達引くのは當然よ。

地四　徒黨に漏れた宜い人達は、馬鹿に構はず早く來い。

ト三、四の下手へはひる。

地一　ヤイ色情狂め、待ちやアがれ。

ト、一、二は後を追つてはひる。鳴物賑かになり、向うより白倉屋萬八茶屋の男にて先きに立ち、次郎左衛門半合羽旅形り、次六大きな風呂敷包みを背負ひ出て來て、花道にて、

萬八　モシお二人さん、是が吉原の仲の町で、今潜つたのが大門口、何と立派で御座りませうな。

次郎　江戸の吉原と云ふ所は、噺しに聞いて居ましたが、こんな立派な所とは今迄知らずに居りやした。

次六　私も始めて來て見たが、あんちう事だと魂消ました。

萬八　其所でお二人さん、龍宮の乙姫樣は活きた辨天樣を見る樣な、美しい花魁を相方にして旅籠屋並みの宿賃でお賄ひ申すのは、ホンノ今夜は御緣繋ぎ、儲けづくでは御座いません。

次郎　イヤ〳〵ホンの見物に爰へ廻つて來たのだから、見さへすれば直ぐに定宿へ行きますから、決して夫には及びませぬ。

次六　二十里からの道を歩き、今日はえらく勞れたから、些とも早く泊りに附いて、飯を喰つて寢度う御座る。

萬八　そんな事を仰しやらずと、旅籠並みなら能う御座いませう、兎も角も私の店までおいでなさいまし。

ト勸めながら舞臺へ來る、此以前向うより立花屋長兵衛引手茶屋の亭主の拵へにて、後を尾けて舞臺へ來る、萬八は切りに勸めるを聞いて此中へはひり、

長兵　オイ〳〵萬八、一寸待ちな。

萬八　是は立花屋の親方さん、何ぞ御用で御座いますかえ。

長兵　今後ろで聞いて居れば、旅籠屋並みで此衆達ちを、

遊ばせると云ふが、さうしていくらで遊ばせるのだ。

萬八　モシ〳〵親方、何も彼も御存じの癖に、何卒見ねえ顔をしておくんなせえ。

長兵　イヤ見ぬ顔をしちやア居られねえ、大門外に網を張り、勝手を知らねえ人と見ると、噓八百で廓へ連れ込み悪玉仲間と馴れ合つて、金を貪るおめえ方、悪い風儀の止む様にと、會所からも茶屋仲間への言ひ渡しだ、俺と一緒に會所へ來い。

萬八　そんな野暮を仰しやつては困ります、見ぬ顔をして下さいまし。

長兵　イ、ヤ見ぬ顔が出來るものか、サア俺と一緒に會所へ來い。

萬八　エ、、忌々しい、

長兵　どうしたと。

萬八　イエ、今先きの家を極めて參ります。

ト上手へ逃げ込む。

次六　モシ〳〵、夫では爰で待つて居ますかな。

次郎　コレ〳〵次六、まア待て〳〵、今此旦那のお詞では何だか變な塩梅だぞ。

長兵　モシお前さん方も、あんな者に引つ掛つては大變だ、早く歸んなさるがいゝ。

次郎　夫では今のアノ人は、胡麻の蠅で御座りましたか。

長兵　胡麻の蠅も同樣な、アレが暴茶屋の悪玉仲間、どうして〳〵旅籠並みで、泊めるどころか行て見なせえ、臺の物や酒を勧め、明日の朝の勘定は吃驚する程絞り取る危険な奴さ。

次六　夫ぢやア江戸といふ所は、活馬の目を拔く所だと、能く聞いて居ますが、今のが目を拔く活馬仲間か。

次郎　さうとも知らず旅籠並みで、受合ふと云ひますから、石町の定宿へ夜に入つて着きますより、暫しに聞いた吉原で、一晩遊んで見ませうと思ひましたのでござります。

長兵　遊びなさるなら吉原の勝手を知つた人を頼み、出直してお出でなさい、どうして〳〵そんな容姿で、此吉原へはひつては、どんなに馬鹿にされるか知れねえ。

次郎　御深切な旦那様、よくお教へ下さいました。

次六　さうして、貴方のお名前は。

長兵　私は立花屋の長兵衛といふ、仲の町の茶屋の主人、茶でも飲んで行きなさるがいゝ。

次郎　お名前さへ知れて居れば、何れお禮に上ります。

長兵　禮に來るには及びません、必ず今夜は其容姿で、遊

ばうとは思はつしやるな。

次郎　其御意見に從ひまして、遲くも石町の定宿へ參りまするといたしませう。

長兵　夫ぢやア早くお歸りなせえまし。

ト前の唄入りの合方にて、長兵衛は上手へはひる。

次六　サア／＼旦那さん、ちつとも早く出掛けませう。

次郎　出掛けるはいゝが、今通つた彼所の門で、見張つて居たが出る時に、木戸錢でも取るのぢやアあるまいか。

次六　こんな立派な所だから、只は見せぬかも知れねえ。

次郎　今のお方に其事を聞いて置けばよかつたに、是がやつぱり下司の智慧ぢや。

次六　アノ門を出てしまはぬ中は、アンダカ安心がなりましねえ。

次郎　それぢやア次六、氣を附けて來い。

ト是な摺鉦入り太鼓地、傾城の出の鳴物になり、向うより若い者、大紋附きの大箱提灯を持つて先きに立ち兵庫屋の八ツ橋、伊達傾城三ツ齒の下駄、道中の揃へにて若ひ者に手を曳かれ、禿二人、後ろより若い者傘をさし掛け、番頭新造振袖新造二人、遣り手茶屋廻りの鳶二人鐵棒にて先きを拂ひ、續いて九重、同じく伊達傾城道中の揃へ、禿、番新、振袖新造、遣り手、若い者、茶屋廻り等前の通りの人數附添ひ、八文字にて出る。次郎左衛門次六は花道にて、此人數に行き逢ひ、びつくりして後じさりに舞臺へ戻る。

八橋　八ツ橋といふもどうやら恥かしい、お職はホンノ名のみにて、暖簾許りか假染の僞紫も四季咲きに、似たる菖蒲の杜若。

九重　分けてお詫びは九重の、都床しき名はあれど花の雪さへ振袖の、自分極めの道中に未だな運びの八文字。

禿一　文の稽古の玉章は、

禿二　口に紅さす濡れ燕、

禿三　便り嬉しき辻占は、

禿四　送る返事の歸る雁、

番新甲　交す盃に末掛けて、見捨てぬ花と約束も、立てし屏風の雀形、

番新二　比翼紋日の黒塗りの枕に掛かる移り香は、放れともなき籠の鳥、

新造○　其曉の鷄啼いて、恨む明日の後朝に、

新造△　別れを鴛鴦の衾湊る、風が身に沁む思ひ羽に、

新造□　憎くや鴉の口癖に、可愛といふも實と噓、



新造◎ 知らぬ諸訳に色里の、籬に並ぶ孔雀染、
八橋 夫は浮名を鳥蓋し、羽を伸す鶴の襠は、
九重 千歳祝うて道中も、松の位ゐの品定め、
甲 物云ふ花の夕霞、
乙 見世菅搔に引かされて、
○ いつもの茶屋へ、
皆々 少しも早う、
八橋 そんなら皆さん、
九重 まア〳〵お先きへ、
八橋 子供来や。
禿 アーイ。
ト右の鳴物にて皆々舞臺へ来て、次郎左衛門次六と行き違ひ、此人数殘らず上手へはひる。次郎左衛門は恍惚として八ツ橋を見送り居る、次六は側へ寄つて、
次六 旦那出掛けませう。
ト云へども返事なく、猶八ツ橋の行く方をヂツト見惚れてゐる。
旦那さん、ちつとも早く出掛けやんせう。モシ旦那さん。
ト背中を叩く。次郎左衛門心附き、
次郎 ア、宿へ歸るは、（トべた〳〵と坐る。）

嫌になつた。
ト腕組みをして考へる。これにてよろしく、　幕

六幕目

立花屋見世先の場
大音寺前浪宅の場
兵庫屋表二階の場
八ツ橋部屋愛想盡しの場

役名――佐野次郎左衛門。同下男次六。繁山榮之丞。釣鐘權八。立花屋長兵衞。絹商人丈助。同丹兵衞。遣り手お辰。お針女お夏。雇女お春。若い者與助。兵庫屋八ツ橋。同九重。同七越。同初菊。立花屋女房おきつ。下女お咲。藝者おいと。同おこと。新造。禿。たいこ持半中。同一八。兵庫屋の若い者。小按摩。

本舞臺四間常足の二重、本庇、正面中障子のある襖、上手三尺の落間、立花屋と印せし半暖簾、下手二重

の端一間の緣臺、平舞臺上手揚板、下手は出格子の窓、總て吉原仲の町、引手茶屋店先きの體。爰に若い者與助、箒を掃いて居る、下女は雜巾かけをしてゐる見得、吉原雀の唄、賑かに幕明く。

與助　今日は朝から風があつたので、幾度掃いても埃りだらけだ。

お咲　今に佐野さんがお出でだから、埃りにしても置けまいと、是で恰度五度拭くのさ。

與助　お咲どんはいつの間に、湯へはひつて來なすつた。

お咲　玉屋のお三人がお直しになつたから、一寸間を見てはひつて來たのさ。

與助　モウ彼是おいでになるだらう、コリヤア湯へはひつちやア居られねえ。

お咲　花魁がお仕舞ひになつて居るから、おいでになつたら、直ぐにお迎ひに行つておくれ。

與助　多く來るお客の中でも、田舍のお方に珍らしい切れ放れのいゝ佐野の旦那、先づ吉原中見渡しても、紀文此方のお客樣だ。

お咲　玉に瑾は男振りがあれだから、花魁の身になつたらあんまりよくもござんすまい。

與助　其代り丸印があるんだ、まア二ついゝ事はねえものさ。

ト右合方にて、向うより釣鐘權八、達て人の拵へにて出て來て、

權八　先刻臺屋の市が云ふにやア、立花屋の親方が家に居ると云つたが、どうか留守を喰はにやアいゝが。

ト舞臺へ來て、

ヘイ、今日は。

與助　オ、權八さん、お出でなせえ。

權八　親方はお宅かね。

與助　サア私は今玉屋から歸つた許りで、まだ奧へ行きませんが、お咲どんおまへ知つてゐるか。

お咲　私も今歸つたばかり、一寸見て來て上げませう。

ト奧へはひる。

與助　まア一服お上がりなせえ。

權八　眞平御免なせえ。（ト上げ緣に腰を掛けて）佐野のお客は相變らず、お宅においでなさいますかえ。

與助　旦那は益々御全盛で、三日にあげずお出でなさいますよ。

權八　そりやア皆さんお仕合せだ、しつかりお藏が建ちませ

うね。

ト奥より前幕の長兵衛、跡よりお咲茶を持つて出て、權八へ出す。

長兵　是は權八さん、おいでなさいまし。

權八　親方お宅でございましたか。

長兵　今方田圃の清正公様から歸つたばかりで御座います。さうして、何ぞ御用でも。

權八　ちつとお願ひの事があつて、暮れない中に上りました。

長兵　シテ、其用とは。

權八　外の事でも御座いません、佐野の旦那にお願ひ申して、金が借りたいのでございます。

長兵　エヽ。（ト合方になり、）

權八　此間借りたばかりで又かとお思ひなさいませうが、わつちも斯うして何日が何日迄、人の世話に許りなつては居られず、身體の方法を附けようと、目算をつけて居る所へ、噂に聞けば佐野の客が娘の身受けをするとの事夫なれば猶の事親父のわつちが堅氣になり、何ぞ商賣を初める心算で、其資金を五十兩ばかり借りてお貰ひ申し度く、夫で上つたので御座います。

長兵　そりやア權八さん、ちつと蟲がよからうぜ。

權八　へエ堅氣になる資金を借りるに、何が蟲がよう御座いますね。

長兵　此間旦那から三十兩借りた時に、何と書いて證文を入れなすつた、此後無心はいふまいと、立派な證文を入れながら、夫からまだ一月と經たない中、五十兩とは蟲がよからう。

權八　そりやア親方分らねえ、知つても居やうが八ツ橋の親判をした權八が、其娘が大盡へ身受けになると極つたからは、猶更遊んで喰ふのが通例、夫を向うの爲を思つて、堅氣になつて商賣を初めると云ふは感心だと、百や五十の資金位えは口を利いてくれてもいゝ筈だ。

長兵　其口を利けと云ふのは、モウ通り越して居ませうぜ。

權八　そりやアなぜだね。

長兵　此方が花魁の親判で、佐野の旦那が足近くお通ひなさる所から、親の病氣や新類の不幸と名をつけ是迄も、幾度御無心申したか、其度毎に快く下さる金は大した事。内證は假令苦しくとも表向きでは色を賣る、花魁からは云ひ憎からうと橋渡しをした此長兵衛、夫も何故お客様を大事に取つて貰はうばつかり、まだ十日も經たぬ中に、

又貸せなぞとは何の顔下げて云へますものか、まアお斷り申しませう。

權八　云へざアいゝわ、頼むめえ。聞けば此頃其客が江戸へ出て來て居るといふから、多分今日らは來るだらう、來ざア二日が三日でも此の店へ寢込んで待たう、當分置いておくんなせえ、ドレ一寢入りして待たうか。

ト揚げ緣の上へ大の字形りに寢る、與助は見兼ねて側へ寄つて、

與助　オイ權八さん、夫はお前無理といふものだ、是が一度か二度なら知らず、幾度無心を云つたか知れねえ、そんな事を云はねえで穩順く歸んなせえ。

權八　おめえも口を出すからは、此扱ひが出來るのか。

與助　そりやア私には出來ないが、寢て居られちやア困るぢやアねえか。

權八　イヤ出來ねえ中は、いつ迄も動かねえ。

與助　夫ならどうでも、行かねえのか。

權八　當然よ。

與助　親方、會所へ突き出しませう。

權八　ナニ會所へ突き出す、面白え、サア突き出せ、突き出してくれ。

ト双方爭ふ、奧より女房おきつ出て、

きつ　與助、まア靜かにおしよ。

權八　サア突き出しやアがれ。

きつ　モシ權八さん、人立がして見つともない、まア靜かにしておくんなさいナ。

權八　オ、お内儀さん、定めて譯は聞いて居たらう、押し借り強請に來やアしめえし、何の廉を以つて突き出すのだ、此しらちを付けてくんねえ。

きつ　委細は聞いて居ましたが、權八さん此間家の人が三十兩借りて上げた時、私に向つて云つたには、斯うして證文は入れるものゝ、半年も經つたら、又どうか譯を云つて借りてくれとの私へ頼み、半年所か十日も經たぬに現在私の亭主に向ひ、チト不理窟が過ぎませう、お前も釣鐘權八と洒落た仇名の遊び人、少しは目先きをお利かせなさいよ。

權八　イヤこいつは俺が惡かつた、何卒御免なすつてお呉んなせえ。其所で改めてお頼み申しやすが、實は今の譯だから、旦那へ云ひ出せずば立替えて置いておくんなせえナ。

長兵　冗談言つちやアいけねえよ、ナンボ花魁の方が寒か

つたつて、茶屋へ來ていたぶると云ふなア筋が惡いぜ。

きつ　今いふ半年も經つたら知らず、立替へても出所がありませんよ。

權八　其出所は明日が日にも、身受けになりやア五十と百附け懸けの出來る引手茶屋、貸してくれてもいゝぢやアねえか。

長兵　憚りながら仲の町で、立派に看板を掛けて居る、しら几帳面の引手茶屋、附け懸けをする暴茶屋と一つにされてたまるものか。

きつ　そんな事を云はれては、二朱のお金も出來ないから、早く歸つておくんなさいよ。

長兵　なアに歸るにやア及ばねえ、寢込んでゐると云ふからは、幾日でも寢かして置け。

權八　夫ぢやア是程頼んでも、金は出來ねえと云ひなさるのか。

きつ　當然さ、半年經つたら改めて顏を洗つて頼みにおいでよ。

權八　さう聞いちやア何日迄も、爰に寢ても居られねえ、顏を洗つて出直さう。

ト立ち上り、下手へ來て、

よく指をくはへさしたナ。此返報は覺えて居ろよ。

ト下手へはひる。

與助　あんな忌々しい奴はありやアしねえ。

お咲　親方、アノ人は花魁のなんで御座います。

長兵　八ツ橋さんにやア何でもねえが、親御の清水三郎兵衞といふ、元姫路の藩中で其頃使はれた中間ださうだ。

きつ　確か其お方がお亡りなすつた時、跡片附けのお金に困り、家來の縁でアノ人が、兵庫屋に親判で勤めに出して間もなく、又お母さんも亡つて、今は身一つの八ツ橋さんサ。

長兵　いゝ喰ひ物とアノ野郎が、親風を吹かしてゐるが、花魁の爲には油蟲だ。

與助　夫では折助でございますか、道理でおし賣りめいた奴だと思ひました。

きつ　與助どん、鹽花を撒いておくれ。

與助　へイ、畏りました。

ト與助鹽花を撒く、吉原雀の唄になり、向うより次郎左衞門羽織着流しにて先きへ立ち、後より丹兵衞、丈助同じ形り、絹屋仲間にて出て來り、花道にて、

次郎　なんとお二人さん、大分浮き立つて來ましたナ。

丹兵　金龍山の奥山より、又氣が變つてよう御座る。
丈助　今大門を潜つた時から、何だかいゝ心持になつて來ました。
次郎　此浮き／＼した所は、どうも云へぬ心地で御座りますナ。
丹兵　次郎左衞門さんは八ツ橋に、熱い／＼ぢやから猶更さうぢや。
次郎　ニヽおだてゝ下さるな、大分汗が出て來たて。
ト三人舞臺へ來る。
きつ　是は皆さん、よう入らつしやいました、まアお上りなさいまし。
ト三人二重へ上り、よき所へ住ふ。
長兵　先刻から、お噂申して居りました。
お咲　花魁もお仕舞になつて居ります。
次郎　今日は二人連があるので、奥山を見物して、夫で大きに遲くなりました。
與助　直ぐにおいでなさいますか、花魁をお迎ひに參りませうか。
きつ　一寸お待ち、お二人さんはお馴染がございますかえ。
次郎　二人は兵庫屋は初めて故、よい花魁を出して下さい、夫に次六も來るから、いゝのを出してやつて下さい。
きつ　左樣なら九重さんに七越さん、初菊さんが宜うござんせう。
與助　ヘイ／＼畏りました。ちよつと行つて參ります。（ト上手の方を見て、）オヽ、恰度花魁がおいでに成りました。
きつ　夫では待ち兼ねて、おいでに成つたので御座いませう。
兩人　ヨウ／＼、色男樣々々。
次郎　此の工合は實に無類でござりますナ。
ト悦ぶ。上手より八ツ橋、部屋者の拵へ、番頭新造、禿二人若い者一人附き添ひて出て、
番新　オヤ佐野さん、大きに遲くなりました。
きつ　花魁此方へおいでなさいまし。
八橋　御免なんし。
ト番新手を取つて皆々二重へ上り、若い者、下手へはひる。
佐野さん、ようお出でなんした。
丹兵　當時吉原の大籬で、其名の響いた八ツ橋太夫、初めて御面相を拜見したが、實に驚き入つたものだ。

丈助　是は在所にある錦絹より、正物の方が餘つ程いゝ。
次郎　皆さん、どうぞ察して下さい。
丹兵　是は次郎左衛門さんの、自慢をするが尤もだ。
きつ　貴方々も是からは、佐野さんと御一緒にチトお出でを願ひます。
丹兵　來るとも／＼、此八ツ橋太夫を見ては實に涎が流れます。
丈助　コレ／＼其樣に譽めてはならぬ。次郎左衛門さんが怒ると怖い。
次郎　イヤ夫は賣物買物だから、私の來ぬ時はお買ひなさい。
八橋　まアあの口の惜い事、ナンデ一座へ出ますものかね。
ト煙管にて次郎左衛門の手を突く。
次郎　アッ、、、
ト丹兵衛丈助是を見て、
丹兵　是では今夜兵庫屋で、
丈助　馳走になつても、仔細はござらぬ。
次郎　どうぞ察して下さいよ。
丹兵　イヤ察しるとも／＼、これ御馳走濃厚では、
丈助　幾個命があらうとも、續いたものではござるまいて。

丹兵　眉毛に唾でも、
兩人　附けて置かうか。
ト兩人眉毛へ唾をつける、次郎左衛門見て、
次郎　眉毛へ唾をつけるとは、モシ花魁、
ト兩人を指さすを、道具替りの知らせ、
廓には初でござるなう。
ト此の模樣吉原雀の唄にて、道具廻る。
本舞臺常足の二重、藁庇、上手三尺の床の間、續いて地袋戸棚、一間襖の出はひり、次ぎに臺所、勝手道具を置き、上手は腰掛け窓、二重の横手竹縁、いつもの所竹簀戸の門口、四ツ目垣の境界、此外田圃を見たる遠見、總て大音寺前繁山住居の體、爰におはる雇女の拵へにて、雑巾を刺してゐる、下手に吉原のお針女お夏半纏縞流しにて風呂敷包みを置き、煙草を喫んで居る、飴屋の鳴物にて道具止る。
なつ　まだ旦那はお歸りではないかえ。
はる　坂本迄お湯においでなすつたから、何日でも一時位ゐは掛りますよ。
なつ　八ツ橋花魁の情夫だけ、お湯へ行つても念入りと見

えるね。
はる　夫に若隠居の御身分だから、何時お歸りなさるか知れやアしないよ。
なつ　花魁の仕送りで、年中遊んで暮らすとは、いゝ御身分の繁山さん、男でも女でも顔はよく生れたいものさ。
はる　お前さんは年が若いから、西川岸位ゐは叩けるが、私なんぞは年が年だから買ひ殺しの雇ひ婆アで、吉原を見ながら一生奚で終つてしまふのさ。
なつ　そりやア私もお互ひさ、亭主に死なれたばつかりに兵庫屋さんの二階へ出はひり、お針で細くやつて居るから、女といふは名ばかりで、モウ私も揚りのからださ。
はる　旨く云つてるよ、二季に花魁方から仕着せを貰ひ、惣花の割りがはひりやア、こんな旨い事はありやアしない、おまけに家へ歸る時は夜具の仕立物迄持つて來るとは、お金の置き所があるまいね、お前の持つて來たのは何だい。
なつ　是は花魁から繁山さんへあげる着物さ、仕立が出來たから、持つて來たのだよ。
　ト風呂敷包みより、仕立物を出す。
はる　苦界の樂みといふものは、かうも實を盡すものかね、モウ二十年も若ければ、私も鶯啼かさうもの、焦れツたいねえ。（ト夢中になつて雜巾を摑み。）アイタヽヽタ、、オヤ針で手の掌を突ツ突いた。
　ト唄になり、向うより榮之丞浪人湯上りの心にて、濡れ手拭を持ち、後より以前の權八附いて出て來り、花道にて、
權八　繁山さん、お湯でございますか。
榮之　是はどちらへお出でだね。
權八　今お前さんの所へ行く所さ。
榮之　そんなら一緒に參りませう。（ト兩人舞臺へ來て内へ入る。）
なつ　お歸りなさいまし。お留守にお使ひがまゐりました。
榮之　夫は御苦勞で御座る。サア權八さん、お上んなさい。
權八　眞平御免下さいまし。
　ト下の方、二重へ住ふ、おはる茶なぞ出す、おなつは手紙を出して、
なつ　お屆け物でございますが、お差し合ひはございませんか。
榮之　權八さんだから、遠慮はいりませぬ。
なつ　そんなら花魁から、お屆け物でございます。

　ト榮之丞手紙の封を切つて讀み居る。

權八　お針さん、相變らず精が出ますね。

なつ　お前さんも久しく内證へお出でなさいませんぢやアありませんか。

權八　花魁にも借り盡くして、ツイ足が遠くなりますのさ。

なつ　ホンニ判方は、何所でもありうちですね。

はる　旦那、一寸買物をして參りたうございますが。

榮之　ム丶ゆつくり行つて來るがいゝ。

なつ　お返事が入りませんなら、直ぐに家へ歸ります。

榮之　着物を屆けると云ふ事だけで、別に返事にも及ぶまい。

なつ　夫ぢやア小母さん、一緒に行かう。

はる　一寸行つて參りますよ。

　ト兩人門口へ出て、

　旦那、履物を氣を付けて下さいまし。

なつ　權八さん、お暇しなさい。

　ト兩人下手へはひる。風呂敷包みの衣類を見やり、

榮之　能く八ツ橋から氣をつけてくれます。

權八　其八ツ橋の事につき、態々來たのでございます。

榮之　エ丶、何と言はるゝ。（ト合方替つて）

權八　お前さんは何にも知らず、情夫がつてお在なさるが、近頃八ツ橋の所へ來る佐野の大盡、男は一寸醜男だが、丸印に惚れ込んで今度いよ〳〵身受けの相談、モウ明日か明後日は、多分廓を出るかも知れません、大方こんな事だらうと蟲が知らして出て來たが、此方の家へ沙汰なしとは、並の客なら知らぬ事、素人の中から二世迄もと云ひ交して居るお前さんを、あんまり馬鹿にした爲方、不人情な女ぢやアございませんか。（ト氣を持たせる樣にいふ。）

榮之　此方は左樣云はるゝが、アノ八ツ橋に限つては針程の事でも私の所に、相談せぬ事はない、況てや身受けなぞと申さば、何とか今に便りが御座らう、大方是は人違ひで御座らうて。

權八　成程自惚れと何とやらで、自分の事は知れねえもんか、お前さんは大丈夫だと心に錠を下ろしても、花魁の方では佐野の客の、惚氣を云つて居りますぜ、二言目にはお前さんの事をあんな腰拔けに係り合つて居ると、一生苦界は浮かばれねえから、爰等が見切りの附け所だと惡く云つて居ましたぜ。（ト煽て上げる樣に云ふ。）

榮之　夫程に云はるゝには、何ぞ確かな證據でも。

權八　證據所ぢやア有りません、爰に居ちやア分らねえから五十軒あたりへ行つて御覽なせえ、辻駕迄が身受けの事で、大評判で御座いますぜ、アレ程の騷ぎを御存じなく、八ツ橋が打ち明けねえで身受けをされて行かうとは、あんまり呆れて物が云へねえ。

榮之　夫程迄に云はるゝからは、ヨモヤ是は間違ひでは。

權八　間違ひ所か旦那が行かざア、私一人で親判の廓で飛び出して行かうと、知らせに來たので御座います、私やア口惜くつて堪らねえ。

ト態と口惜しきこなし、榮之丞も思入れよろしくあつて、

榮之　ハテ、不人情なアノ女、何とか此方へ一と言位ゐ云つてよこしてもいゝ事を、そりやモウ其身の出世故、相談づくなら談合で何日でも緣を切つてやるに、素知らぬ顔で着物をよこし、突然に行かうとは、夢にも今迄知らなんだ。（ト口惜しきこなし。）

權八　さうして文には今夜にも、來てくれとでも書いてありますかえ。

榮之　そんな事は書いてない、いゝ柄があつたから、着物にしたと云ふ事ばかり、コレ此通りぢや。

ト手紙を見せる。

權八　夫だもの、油斷も隙もなりやアしねえ、モウ少し知らせが遲いと、野州の佐野迄行つて仕舞ふのだ、追掛て行つて晰しの付かねえ事もねえが、玉を上げられたら先きは大盡、所詮顔も合はされません、此奴ア手遲れにならねえ中、私ちと御一緒に廓へ行つて、ミッチリ一番掛け合はざアいけません。

榮之　そりヤ此方がいふ迄もない、向うがさう云ふ心なら後手にならぬ其中に、此方で緣を切らねばならぬ。

權八　夫ぢやア御一緒に參りませう。

榮之　斯う知つたらば雇ひ女を、使ひにやらねばよかつたに。

權八　錠を下してお出掛けなさい。

榮之　夫では婆アが困るであらう、早く歸つて吳れゝばよいが。

ト下手より以前のおはる出て、

はる　只今歸りました。

榮之　オ、待ち兼ねた、早く着物を出してくれ。

はる　どちらへお出でなさいます。

榮之　權八さんと同道にて、兵庫屋へ參るのぢや。

はる　花魁の所なら、恰度先刻の召物を。
榮之　エ、、あんな物は見るも嫌ぢや。
はる　此仕立御しをおいやとは。
榮之　早く外のを出してくれ。
はる　ハイ〳〵、畏りました。（ト下手の家體へはひる。）
權八　成程、どんなに困らうと、アノ着物は着られませんね。
　トおはる羽織と着附帶を持つて出て、
とら　ヘイ、お待遠樣でござりました。
　ト榮之丞着物を着ながら、
榮之　一體ア、いふ女と知つたら、初手から此手は喰はぬもの、廓の水が染み込んで、さういふ心になつたものか、全體外へ行くのなら先づ斯う〳〵と一ト通り、私に斷しをせねばならぬに、斯うも心が變るものか。
　ト急き込みながら、着物を着替へる。
權八　お支度がよけりやア、是から直ぐに、
榮之　行きますとも〳〵羽があれば飛んで行きたい位ゐぢや。今夜は歸らぬから、氣を附けてくれ。
はる　ハイ〳〵。
榮之　お待遠で御座りました。
權八　そんなら是からお供して、
榮之　御一緒に參りませう。
　ト以前の手紙を見て、取上げ、
見るも穢に障る此文、
文を丸めて抛る、是がおはるの額へ當る。
はる　ハツクショ。（トくしやみをする。）
榮之　エ、、碌な噂も、（トいふを道具替りの知らせ、）爲居るまいわえ。
　ト四ッ竹の合方にて　　道具廻る。

本舞臺一面の平舞臺、上手九尺の家體、内三尺神棚此下簞笥、家體の下手、三間家體、障子を建て切り引付け座敷の入口、欄間に灯入り、蒲鉾行燈、いつもの所二階の上り口、手摺を取り付け、總て兵庫屋二階遣り手部屋の體。部屋の中に長火鉢を置き、遣り手お辰住ひ、煙草を喫んでゐる見得、騷ぎの鳴物にて此の道具止まる。
　ト右の合方になり、階子口より下女お咲看板提灯と白鳥の德利を持ち、女房おきつ案内して次郎左衛門、丹

兵衛、丈助送られて來る心にて、出て來る。

お咲　お辰どん、佐野さんがお出でなさいましたよ。

お辰　是はよく入らつしやいました、先程からお待ち申して居りました。

次郎　三日程足を拔いたら、半年も來ぬ樣だや。

お辰　夫はこちらでも同じ事、久しくお出でなさいませんと、お噂申して居りました。

きつ　お咲どん、お座敷はいゝか、一寸見ておいで、

お咲　ハイ／＼。（ト上手へはひる。）

お辰　お座敷の宜しい迄、假に一寸何所かの廣間へ御案内いたしませう。

次郎　心易い中ぢや、爰ではなして待つて居ませう。

きつ　そんなら貴方、是へ入らつしやいまし。

丹兵　此の階子を上がつた所は、大門を潜つた時より又一倍云ふに云はれぬ氣持ちだナ。

丈助　樂みは後ろに社前に酒、左右に女と譬への通り、是から緩々飲み直すとは、此上の樂しみはござらぬて。

ト階子口より若い者一人、盃臺を持つて出る、後より九重七越襟形りにて出て、

若者　お辰どん、一寸お引き附け。

ト丹兵衛丈助九重七越引き附け座敷へはひり、引附けあつて、丹兵衛丈助座敷を出て、

丹兵　ナント美い玉ではないか、まるで人形の樣だや。

丈助　名は何といふか、遣り手に聞いて見よう。

次郎　聞かず共分かつてゐます、先きのが九重後のお七越といつて、八ッ橋の次ぎへ立つ上玉で御座る。

丹兵　流石は足の近い丈け、皆の名迄承知とは恐れ入つた

若者　へイ。お召替え。

ト若い者先きに、九重七越も座敷を出て、遣り手部屋の前へ來て、

九重　佐野さん、能く來なましたね。

次郎　花魁又厄介になりに來ました。

七越　引けたら遊びに、

兩人　行きますよ。

ト九重七越は上手、若い者は階子口へはひる。

次郎　ヤ有難う、來て下さい、二階が心易くなるとツイ面白くなつて來ますよ。

丹兵　モシお内儀さん、私達に出る花魁は、どれでござるの。

きつ　貴方のお相方は今先きへ行つた九重さん、後のが七

越さんで、貴方（丈助を指す）へお出し申すつもりで御座ります。
丈助　夫は有難い、實は次郎左衛門さんの八ッ橋と肩を並べて意氣地を立て、吉原の相場を狂はせる心算だ。
ト是を騒ぎの合方にて、階子口より若い者案内して、榮之丞權八出て來り、
若者　お辰どん、八ッ橋さんのお座敷はえ。
お辰　立花屋でお仕舞だから、六番へお連れ申しておくれ。是は貴方入らつしやいまし。
榮之　いつも繁昌で結構でござるの。
若者　只今お茶屋へ迎ひにやりますから、一寸あれへ入らつしやいまし。
ト此人數下手の廊下へはひる、おきつお辰は悪い所へ來たといふこなし、次郎左衛門は是を見送つて、
次郎　モシお内儀さん、今の二人は、八ッ橋の客で御座るか。
きつ　イエ彼れは確か八ッ橋さんの、一座のお方でござりました、ネエお辰どん。
お辰　八ッ橋さんの新造衆に出る、四谷のお客でございますよ。

次郎　夫では新造衆の客人か、夫で大きに安心した。
丈助　今のは却々いゝ男だ、嘸女が惚れるだらう。
ト上手よりお咲出て、
お咲　お座敷が宜しう御座ります。
お辰　夫ぢやア皆さん、彼方へいらつしやいまし。
丹兵　今の花魁の姿を見て、ゾッとする程身の毛が立ち、酒の酔が醒めてしまつた。
丈助　是から座敷で飲み直し、今夜はもてゝ貰ひたいものだ。
きつ　そんなら旦那、参りませう。
ト次郎左衛門下手の方を見て居て、
次郎　一寸六番の座敷へ行つて、
ト行かうとするを、
きつ　アモシ、廊下鳶はなりませんよ。
次郎　夫でも、モシヤ。（ト云つて氣を替へ、）成程、是は、粋な者は廊下鳶は、（ト突き袖をするを道具替りの知せ。）爲ぬものでござるナア。
ト踊り地の合方にて、

道具廻る。

本舞臺平舞臺、一間の床の間、續いて三尺の違ひ棚、下手藤り座敷の障子の前づら、欄間に大番と印せし掛け札、總て兵庫屋二階廻し部屋の體、燭臺を照し上手に榮之丞、下手に八ツ橋住ひ、靜かなる端唄の合方にて道具止る。

八橋　あいにく今夜は立て込んで、何處も座敷が閉がつて居りんすから、爰で我慢をしてくんなまし。

ト座布團を勸める。

榮之　イヤ私は座布團なぞを敷かずとよい、只おぬしに逢つて胸を聞けばよいのさ。

八橋　何を怒つて居なさんすか、茶屋衆が來ぬ故譯は知らぬが、布團ぐらゐ敷いたとて、萬吏罰も當りんすまいに。

榮之　不人情が移る故永く居ぬから、夫には及ばぬ。

八橋　永く居ぬといひなんすは、どういふ譯でありんすえ。

榮之　おぬしの胸に聞いたら分らう。

八橋　ナニ胸に聞けとはえ。

榮之　コレ八ツ橋、よく私を振り捨てゝ身受けをされて出る氣になつたナ。

八橋　エヽ、夫は何處から聞きなましたえ。

榮之　何處からでも大きにお世話だ、餘りそでない仕方だから、理窟を云ひに參つたのぢや。

八橋　そりやア形のない事でもなけれど、何で私が其お客に身受けをされて行きませう、情ないぢやアありませんか。

榮之　イヤ嘘ぢや、然も相人は佐野の大盡、次郎左衛門と云ふ名迄突き止めて來た榮之丞、サアたつた今取り交はした、起請を此方へ返してくれ、素人の時も勤めをしても、此方に變りはあるまひと思つたのが私の誤り、早く起請を返してくれ。（トきつと云ふ。）

八橋　誰にお前は智慧をかはれ、そんな事をいひなますか、夫とも外に情婦でも出來、切れる心にならんしたか、ソリヤ胴慾でござんすぞえ。

ト此時下手廊下より、權八出て障子を開け

權八　其證人は此の權八、おぬしやア餘つ程不人情だ。

八橋　そんならお前が身受けのことを。

權八　親ない後は親判が云はずと知れた親同然、其俺にも沙汰なしで、金に目がくれ受出されると聞いて、爰へ來て噂を聞けば違ひなく、此奴ア誰より榮山さんへ、お知らせ申さにやなるめえと、行つて見りやア案の定、旦那

は夢にも御存じなく、其大盡に受け出されりやア、俺は親判借かる事だが、素人の時から二世迄と云ひ交はした旦那に濟まねえ。サア此云ひ譯は何うする氣だ。

八橋　サア親判のお前の處へ、知らせないのが何より證據、そりやア此頃足を近くおいでなさる佐野のお客、其相談もありんすが、私は返事を爲ないが面晴れ、疑ひはらして下さんせ。

榮之　夫程迄に綺麗にいふなら、幸ひ今夜座敷に居る、佐野の客を斷つて綺麗に愛想を盡かしたら、夫で疑ひ晴らしてやらう。

八橋　そんなら是迄ひいきになつた、お客にみす／＼愛想づかしを。

權八　どうだこりやア云ひ惜くからう、おぬしは元より引手茶屋迄金儲けになる身受けの相談、第一茶屋が不承知だらう。

榮之　若し又向うが斷られずば、今夜限り起請を戻し、緣を切つて別れて仕舞はう。

八橋　夫ぢやと云つて、どうまア是が。

榮之　切れずば向うを斷るか。

八橋　サア夫は、

權八　夫とも綺麗に緣を切るか、

八橋　サア夫は、

三人　サア／＼／＼。

榮之　早く返事を。

ト急き込んで云ふを、道具替りの知らせ、

聞かせてくりやれ。

トきつと云ふ、八ツ橋泣き伏す。これにて、

道具廻る。

本舞臺平舞臺、上手斜に九尺の床の間、正面、櫺子窓の格子、此間より向う側の家根を見たる書割り、下手に一間の附家體、上は夜具棚、下は水屋を仕込みし次ぎの間、此外廊下の片遠見、總て八ツ橋部屋の體。爰に次郎左衞門、丹兵衞、丈助仕ひ、ズット上手に九重、七越、初菊部屋着にて控へ、下手、藝者お糸、お琴三味線を彈き、幇間半中一八の兩人踊つてゐる、下の方に女房おきつ、下女お咲、禿二人居並び、臺の物を置き、酒宴の模樣、太鼓地の合方にて道具止る。

丹兵　此衆の藝盡しを、早く次六どんに見せてえが、何を

してゐるだらう。
丈助　馬道通りで道に迷ひ、千住の方へ行きはせまいか。
次郎　此間一度吉原へ供に連れて來ました時、今度來たら花魁を買はしてやると云ひましたら、未だか〳〵と矢の催促に、據なく約束したれば、來るなと云つても今晩は、やつて來るに違ひ御座りませぬ。
きつ　ホンニ次六さんは、へうげておいでなさるから、二階にお出でなさいましたら、必定おいらん方に面白がられ、始終は情夫に取られませう。
丹兵　あんな田舍者が情夫に取られゝば、私等なぞは猶更に、二階中の相場が狂はう。
九重　同じ田舍のお人でも、始終江戸へ來なます爲か、本當に程がようござますね。
丈助　モシ〳〵花魁、丹兵衞さんが程が能ければ、私も程がいゝ筈だ。女に掛けたら何處へ行つても、何方がどうとも云へぬ腕前だ。
丹兵　イヤ戀路に掛けては丈助どんと、一つにされてたまるものか、是でも八木梁田へ行つて見ろ、丹兵衞さん〳〵と、兩側から女が出て、まるで芝居の助六の樣だぞ。
丈助　そりやア俺も同じ事だ、合戰場でも宇都宮でも、ひけを取つた事のねえ、絹賣の丈助樣だぞ。
丹兵　そんなに自慢を云はしつても、私の樣に情婦は出來まい。
丈助　ナニ出來ぬ事があるものか、モシモ口說いて嫌と云へば、腕づくでもオッ轉はすわ。
丹兵　エヽ、腕づくの情事が役に立つかえ。
丈助　無理こぢ付けでも、出來たら宜からう。
丹兵　向うの方で逃げて仕舞うわ。
丈助　夫だからトッ捕まへて、口說き落すわ。
丹兵　夫ぢやア數にはひられねえ。
丈助　何ではひられねえのだ。
ト口論の末、双方立ち上るを制して、
次郎　まアさう腹を立つては困る、爰は見得の場所ぢや、どうぞ靜かにして下さい。
きつ　お初會から野暮があると花魁方に嫌はれますよ。
丹兵　イヤ嫌はれては大事だ、一番爰は辛抱所だ。
丈助　私もそんなら我慢をしませう。
次郎　そんなら仲を直して下さるか。
丹兵　エヽ、直さいで、
兩人　なんとしませう。

丹兵　トキニ次郎左衞門さん、此方の花魁が來ぬが、早く爰へ呼んだがよい。
七越　長門屋の一座は今方お歸りになりんしたに。
九重　私と一緒に來なます筈、何をして居なんすか。
きつ　お咲どん、早くお呼び申しておいで。
お咲　ハイ〳〵。
ト下手廊下口へはひる。引違ひに與助出て、
與助　次六さんがおいでになりました。
次郎　待つてゐた、早く爰へ呼んで下さい。
與助　ヘイ〳〵。（ト下手へ向ひ）サア、此方へおいでなさいまし。
ト廊下より次六、羽織着附けにて出で、
次六　コレは旦那樣、皆樣、エラお早うござえました。
次郎　オ、先刻から待つて居た。
次六　私イ餘り急いだで、五十軒へ曲がるを間違えて、山谷通りへツン拔けて、彼所等を方々經巡て、漸々爰へ廻つて來ました。
丹兵　道理で遲いと思つたら、案の定山谷へ出たか。
次六　モシお二人さん、八ツ橋花魁を御覽じたか、アノ花魁が俺の旦那に、うつ惚れて居るとは偉い者でござりませうナ。
丈助　イヤモウ、聞いたよりは偉い全盛、先刻茶屋の店先きでは、八ツ橋さんが次郎左衞門さんへ煙管の雁首をオツ附けた工合は、傍しよりは能い出來だ。
次六　夫だもの石町の定宿へは寢られぬ筈、尤もだよ。
きつ　モシ貴方のお相方は、此の初菊花魁でござります。
ト初菊を次六に引き合せる。
次六　ナンダ、此花魁が私の相方かね、イヤ有難えこんだね。（ト一禮する。次郎左衞門見て）
次郎　コレ〳〵見ツともない、默つて居ぬか。
ト唄になり、廊下口よりお咲先きに、八ツ橋番頭新造一人附いて出で、
八橋　佐野さん、お待ち遠でござんした。
番新　長門屋のお客がお邸さんで、花魁をお放しなさらず漸々今歸しました。
次郎　夫は大きに御苦勞だつた、私は來ずとも能いと云つたを、此二人の衆が氣を揉んで、迎ひにやつたのだ、必ず惡く思つて下さるな。
ト八ツ橋へ心遣ひのこなし。
丹兵　同病相憐れむの譬の通り、亭主役の次郎左衞門さん

に、相方が參らぬ時は何とやら物足らぬから、私等が呼びにやりました。

次郎　さういうて下さると、私も甚助がましくなくて花魁にも惡う思はれぬ。コレ花魁、私だと思うて下さるな。

ト此中八ツ橋切なき思入にて、

八橋　私や逆上て居りんすから、口をきいて呉んなますな。

次郎　氣分が惡くばお辰どんにさう云つて、醫者を迎ひにやつて下さい。

お咲　ハイ〳〵。（ト立たうとするを。）

八橋　アモシ、お醫者には及びんせん、私や氣分に障る事が、たつた一ツありんすよ。

次郎　ナニ氣分に障る事がある、何だか早う云うたがよい。

八橋　云つてもようござんすかえ。

次郎　よいとも〳〵、さうして何が氣分に障るのぢや。

八橋　お前と口を利く度に、私や病ひが重うなりんす。

ト次郎左衛門心に止めず、

次郎　逆上る時はさうであらう、默つて居よう。モシ皆の衆、花魁の氣の鎭まる樣、口を利くまいぞ。

八橋　イエ〳〵さうでは有りんせぬ。

次郎　ナニ、さうでないとは。

八橋　お前と口を利きいすのが、私の病ひに障りんすのさ。

次郎　エヽ、そりや又なんで。

八橋　實に嫌でなりんせんのさ。

次郎　エヽ。

ト驚き、八ツ橋と顏見合はせ謎への合方になり、下手より榮八出て立聞く。

八橋　疾うから茶屋衆に斷り度いと、思つて居たがお世話になる、立花屋さんのお客故、ツイ一日と延ばす中、退引きならぬ身受けの相談、私や身受けをされるのは、元元いやでありんすから、お斷りを申しいす。どうぞ此後私の所へ遊びに來て下さんすなえ。

ト術なき思入にていふ、皆々不審の思入、次郎左衛門態と碎けて、

次郎　ハヽヽヽヽ、是や何か癇に障つたと見える、どうぞ許して下さい、夫に又身受けして佐野へ行くのがいやだと云ふなら、江戸の中へ世帶を持たせ、樂に暮らさせおかうから、マア〳〵今夜は何にも云はず、氣を落ち附けて寢たがよい。

八橋　寢るお世話にはなりんせん。是には深いっ イエ、深い譯も何にもない、只々お前が嫌だから、夫で斷り申し

いす。
きつ　モシ花魁、どう云ふ譯か存じませんが、夫では私共が困ります、今度身受けのお斷しに就いては、御内證へ渡つて萬事整ひ、モウ表向きになるばかり、さう手強く仰しやらずと、宜くお考へなさいまし。
九重　ツイに是迄佐野さんへ、愛想盡かしを云はぬお前が、何で急に云ひなますか、譯があるなら内々で、私に噺して呉れゝばよいに。
八橋　譯はなんにもありんせんが、身受けの二字が癪の蟲に障るが私の病ひの種、捨てゝ置いてくんなまし。
七越　そんなら外にかうといふ、仔細はないと云ひなんすかえ。
八橋　いやなお客を取る位ゐ、辛い事はありんせぬ。どうぞ察してくんなまし。
丹兵　コレ次郎左衞門さん、此間何と云はしつた、江戸へ行つたら先づ第一吉原へ案内するから、私の全盛を見てくれと、大層廣言を吐きなすつたが、今聞いた鹽梅ではどうやら振られる自慢の樣ぢや。
丈助　今吉原の兵庫屋で、飛ぶ鳥落す八ツ橋太夫、些と此方の醜男には、職過ぎると思つたが、モシヤと思つて來て見れば、矢ツ張り此方の入札通り、嫌がられ切つて居なさるのだナ。
次六　是だから云はねえ事ぢやア有りましねえ、女郎は客を欺すが商賣、惚れた〳〵と思つて居ると足許を掬はれますと、國に居る時旦那樣へ云つた事があつたつけ、ソレ見なせえひどい目に逢ひましたらう。
番新　モシおいらん、お前はんどうしたんざます、多くお客のある中で、身受けに迄ならうと云ふ爲になる客衆へチト手ひどいぢやアありんせぬかえ。
半中　佐野の旦那は失禮ながら、田舍のお客に珍らしい氣障ツ氣のない遊び方。
一八　隨分旦那へ岡惚れの、花魁方も藝者もございますに、其所を花魁一點張りで斯うして近くお出でなさるに、
お糸　惡性でもなすつたといふ噂を聞いた事もなし、どういふ譯でござりますえ。
お琴　御ひいきになるお客樣と花魁方の仲間が惡くなつては困ります。
番新　附いてゐる私達さへ、何だか樣子が分りんせぬ、心持ちが惡いなら、惡い樣に打ち明けて、どうぞ笑つて、
皆々　下さいまし。

八橋　ちと口臆うござんすが、仲の町を張る此八ツ橋、一旦いやと云ひ出したら、お前方が口を利いても勸めても、私や身受けはいやでありんす。

きつ　夫ならこんな宜い口を。

番新　身受けは嫌だと、

皆々　おつしやいますか。

八橋　私や錢では靡かぬ心、好いた所へ行く氣でありんす。

きつ　夫では見す／＼、

皆々　身受けの口を。

八橋　アイ私やつく／＼、いやでありんす。

ト　きつぱり云ふ、次六思入あつて、

次六　モシ八ツ橋さん、ソリヤ此方濟むめえぜ、旦那が此方を見初めてより、江戸へ出る度毎へ通ひ、身受けをさつしやる迄になつて、今夜スポリと斷るとは廓の習ひか知らねえが、ソリヤ手前勝手と云ふものだ、斷るなら斷る樣に是迄爰へ注ぎ込んだ、金を殘らず返さつしやい。

八橋　誰も此方から佐野さんに、來て下さいと頼みもせぬに、勝手に深みへ嵌つて置き、何ぼお前が主思ひでも、そんな理窟は通りんせん。

次六　イヤ通りやす、旦那を欺しておびき寄せ、恥を搔かせた返報は、理道で行かずば腕づくで、やる所迄やつて見せる、是でも能登の七尾在で五十貫目の石をさした、人に負けねえ此次六、サア金を返さずば出る所へ出て取つて見せる。

ト　腕捲りなして立ち掛かる、權八心掛かりのこなしにて出ようとする、次郎左衛門止めて、

次郎　コレ／＼何を騷ぐのだ、腹を立てれば立つ程恥ぢや、默つて其方へ引込んでゐろ。

次六　夫でもあんまり、業が煮えて。

次郎　エヽ、默つてゐろといふに。

次六　エヽ、忌々しい。

ト　控へる、次郎左衛門思入あつて、

次郎　花魁、夫はちつと袖なからうぜ。

ト　合方胡弓入り樣になり、

夜毎に變る枕の數、浮き川竹の勤めの身では昨日に優る今日の花と、心變りがしたかは知らぬが、モウ表向き今夜にも、身受けの事を取り極めようと、昨夕も宿で寢もやらず、秋の夜長を待ち兼ねて、菊見がてらに廓の露、濡れて見たさに來て見れば、案に相違の愛想づかし、ソリヤもう田舎者の私故に、恨みとは思はねど、斷られても爲

方がないが、ナゼ初手から云うては呉れぬ、江戸へ來る度吉原で佐野の誰とか噂をされ、二階へ來れば朋輩の花魁達や禿に迄、呼ばれる程になつてから、指をくはへて引つ込まれようか、爰の道理を考へて察してくれてもよいではないか。

ト此間八ツ橋は切なきこなしにて、

八橋　ソリヤお前さんが足近く、來たから二階で名を知られ、今更となり恥を掻くのさ、お氣の毒だが心柄、夫はお察し申しんすが、當分の中是に懲り、廓にはお出でなさんすな。

次郎　スリヤ夫程迄に、次郎左衛門を。

八橋　人騷がせに身受けをされ、夫から後で斷つてはお氣の毒故前以て、云ふのは私の達引きづく、爰等が實のある所さ。

トきつぱりと云ふ、此時權八内を覗き、次郎左衛門と顏を見合はせる、次郎左衛門扨はと心附く思入、權八下手へはひる。

次郎　ハ、ア、夫では先刻廊下で逢つた二人連れの客人は扨はおぬしの間夫であつたか。

きつ　イエ〱、アレは四谷邊の。

八橋　ア、モシ、何も隱すには及びんせぬ、お察し通りアノ人は、繁山榮之丞といふ御浪人、ハイ私の間夫でござんすわいナア。

丹兵　夫ぢやあそれで、

丈助　愛想づかしか。

次郎　オ、さうか、よく明かしてくれた、何にも云ふまい、身受けも思ひ止まつたわえ。

八橋　さう得心しなんしたら、モウ用のない此の座敷、私や晴々したわいナア。ドレ是から廻しへ。(ト立ち上がる。)

九重　夫ではどうでも佐野さんを。

八橋　ツク〲嫌になりんした。

九重　浮世の義理も振り捨てゝ。

八橋　アイ。(ト氣の毒なと思入。トヾ氣を替へ)　九重さん堪忍して下さんせ。

ト唄になり、愁ひを隱し、下手へはひる。丹兵衛、丈助呆れしこなしにて、

丹兵　宿で惚氣を聞いた時は、女郎の樣子は少しもなく、全體内端で取り廻はしが、一切女房氣取りだと、眞實らしい事を云つたが、

丈助　見ると聞くとは大きな違ひ、大方こんな事だらうと、思つた壺に相違なく、身受け所か此態では、いつも振られ通しと見える。

丹兵　二言目には佐野々々と、こんな奴に引つ掛かつてゐると、佐野中の者の恥ッ掻きだ座敷を替へて景氣よく、是から恥辱をすゝぐとしよう。

丈助　藝者も幇間も構はねえから、殘らず此方の座敷へ來い。

半中　有難うはございますが、

一八　佐野の旦那へ出て居りますから。

次郎　イヤ私に構はず、行つて上げるがいゝ。

お糸　夫では御免を蒙りまして、

お琴　お貰ひ申して參ります。

ト丹兵衞、丈助立上がるを、次六止めて、

次六　ア、コレお前方、旦那を振り捨て行かつしやるのか。

丹兵　振り捨てる所か恥を掻いた返報に、横つ面でも擲るんだが、

丈助　日頃の懇意に我慢して、穩便にして置いてやるのだ。

次六　そんな事を云はねえで、どうか共々力を添へ、

丹兵　エ、冗ごたくを、

丈助　吐きやアがるナ。

ト縋る次六の横顏を打ち、皆々下手へはひる。次六立ち掛かるを、次郎左衞門和める。九重おきつも共に止める。

次六　旦那樣、私やア口惜くつて堪らねえ、どうぞ見のがしておくんなせえ。

ト又行かうとするを、九重止める。

次郎　立ち騷いぢやア俺の恥だ、靜かにしてくれ。

九重　堪忍強いぬしの詞、腹も立たうが我慢して、

きつ　思ひ止つて下さいまし。

次六　エ、忌々しい事だナア。

ト廊下口より長兵衞出て、下手に住ひ、

長兵　委細は聞いて參りましたが、何とも申譯のない始末、一寸お詫びをいたした上、内證へ懸け合ひまして、どう共事は分けますから、暫くお待ちなすつて下さいまし。

次郎　決して行くには及びません、現在間夫の榮之丞と、打ち明け爰で云ふからは、所詮再び戻らぬ事、私はすつぱり諦めました。

長兵　夫は向うが太腐れ、春の積夜具花暖簾、太鼓持ちの惣羽織迄、都度々々なさる貴方へ對し、以ての外のいた

し方、どうにでも掛け合ひますから、どうぞ任して下さいまし。

次郎　イヤ／＼夫は止して下さい、幸ひ國に年回の、法事があると手紙が來たれば、一先づ明日にも歸國して、又出直して來るとしませう。

長兵　夫ではどうでもお歸りなさいますか。

次郎　振られて歸る果報者とは、私等の事でござりませう。

九重　どうぞ必らず此後共、來て下さらないと私等初め二階中が氣がゝりなれば。

次郎　花魁には心配をかけ、申し譯がありません。モシお内儀さん、駕籠を二挺云つて下さい。

きつ　ハイ／＼畏りました。

次六　勿體ねえ、私やア後から從いて行きます。

次郎　夜が更けたから、乘つて行きやれ。

長兵　何しろ宅へ這入らしつて、一口喫つてお歸りなさいまし。

ト此時子の刻の鐘鳴る、次郎左衛門羽織を着て立ち上る。

九重　そんなら佐野さん、きつと此後、

ト次郎左衛門ぢつと思入あつて、

次郎　殊によつたら今宵限り、

皆々　エヽ。（ト聞き咎める。）

次郎　イヤ、一先づ國へ、

ト煙草入を腰へ差すを、木の頭、

行つて來ませう。

ト此模様、合方、火の用心、大引けの拍子木にて、

幕

七幕目

佐野勘兵衛住居の場

役名――百姓佐野勘兵衛。勘兵衛弟次郎左衛門。下男次六。庄屋徳右衛門。組頭田十。同九根六。同睦七。旅僧宗月。勘兵衛姉娘おしづ。同妹娘お米。在所女房おくろ。

本舞臺三間常足の二重、四枚飾り、向う眞中一間障子の出入り口、上手一間押入れの戸棚、上襖、下板戸、下手一間低き戸棚、此上二段の棚、上の方一間障子屋臺、此中正面三尺の佛檀、阿彌陀の掛物、

佛具よろしく飾り、二重の下手に圍爐裡、自在竹に鑵子を掛け、下の方鄰下しの下家、繩暖簾の入口、いつもの所、藁庇の門口、此外藪だゝみ、在鄕の遠見、百姓勸兵衛住居の體。爰に庄屋德右衛門、組頭田十、羽織着流し、百姓九根六、畦六着流しにて住ひ、娘お米百姓娘の拵へにて、茶を出してゐる。在所女房おくろ客膳を拭いてゐる、碓の入りし臼挽唄にて幕明く。

お米　お茶をおあがりなさいまし。

德右　アイ〳〵、忙がしからうに構はつしやるな、田十どん見さつしやい、少し見ぬ内にお米坊が大層大きうなつたナ。

田十　春先きの麥畑で、一ト雨々々に背が伸び、立派な娘になりました。

九根　夫に又勸兵衛殿は畑仕事が上手と見え、二人が二人いゝ容貌だ。

畦七　村一番の娘故、若い者が心を掛け、寄ると觸ると噂ばつかり。

くろ　夫故諸所から聟にやらうの、嫁にくれのと云はれるので、勸兵衛さんも斷るに困ると云つてゞ御座ります。

德右　女はかりの事なれば、何れ姉に聟を取り、お米坊はいゝ所へ嫁にやるでござらうから、私が媒人してやりませう。

田十　私がモウ少し年が若いと、女房が死んで一人故、嫁に貰ひたいけれど。

くろ　そんな事を仰しやるな、お米さんが恥かしがつて、俯向いて居なさいます。

田十　夫は悪い事を云つたツけハ、、、、。

ト右の合方にて、奥より勸兵衛羽織着附、老たる百姓にて出て下手に住ひ、

勸兵　是は庄屋樣村の衆も、忙がしい所を、よく連立つて來て下された。

德右　今日の佛は久しい馴染、勸兵衛殿が御奇特に能く法事をさつしやるから、村の衆と同道して、馳走になりに參りました。

田十　組頭の私等を初め、

九根　五人組の者迄が、

畦七　今日の法事に呼んで下され、

三人　有難う御座ります。

勸兵　そんなに禮を云はれては、面目なうござります、お

くろどのを助けに頼み、娘二人が手拵へ喰る物も御座らぬが、お騒樂丈けに皆さんをお招ぎ申したので御座ります。

德右　此方の娘は二人とも、年はゆかぬが器用故、嘸旨い事でござらう。

田十　しつかり御馳走に、

三人　なりますぞや。

くろ　まだお料理が出來ませぬから、緩りお噺しなさいまし。

勘兵　おくろ殿は奧へ行き、共々傍から手傳つて、早く出來る樣にして下さい。

くろ　ハイ〳〵畏りました。ドレ、奧へ行つて手傳ひませうか。

トおくろ奧へはひる。此合方にて向うより序幕の旅僧空月、頭陀袋風呂敷包み網代笠を冠り、出て來り花道にて、

空月　今朝の宿屋の汁の鹽か、咽喉が乾いてならぬけれど、在の事故茶見世もなく、最前から困つて居るが、幸ひ、向うの百姓家、アレへ參つて湯を貰はう。（ト舞臺へ來て門口から、）チト御無心が御座ります、愚僧は諸國を修行いたす旅の僧で御座るが、御面倒でも白湯を一杯お振舞ひ下さいまし。

お米　ハイ〳〵お易い事でござります、只今お湯をさし上げます。

空月　夫は有難う御座ります。（ト勘兵衞空月を見て）

勘兵　見れば旅の御出家樣、どれへお出でなさるか知らぬが、是へ御座つて緩りと、御休息をなさいまし。

空月　お詞に從ひ、お湯を頂戴いたすうち、お緣をお借り申します。

ト合方にて笠を取り、序幕より十五年經ちし老たる拵へになり、内へ入り、緣へ腰を掛ける、お米は湯を汲んで出す。

お米　お湯をおあがりなさりませ。

空月　是は〳〵有難うござります。（ト茶碗を頂いて飲む）

勘兵　シテ御出家樣は、どれからどれへお出でなさります る。

空月　一所不住の沙門の身なれば、何れと申す目的もなけれど、諸國の靈場巡らんと、十五ヶ年以前より、旅で月日を暮らしまするが、未だに廻りきれませぬ。

勘兵　十五ヶ年が其間、旅をお廻りなさるとは、容易な事

では御座りませぬ、そうしてお歩きなさるゝ中には、所變れば品變るで、面白い事が御座りませうな。

空月　面白い事も御座れば、又難儀な事もござりまして、暫し種になる事は心覺えに旅日記に書入れて、置きまして御座ります。

勸兵　幸ひ今日は志しの、手前に法事がござりますれば、先きをお急ぎなさらずば、出來合ひました精進料理、御飯を上げ度うござります。

空月　夫は千萬忝い、別段先きを急ぎませねば、仰せに任せ休息いたし、お志しの御法事とござりますれば、御佛前へお經を上げ度うござりまする。

勸兵　只今夫を願はうと、存じました所なれば、まづ〳〵お上りなさりませ、お米水を汲んでお上げ申せ。

お米　アイ〳〵。

ト合方きつぱりとなり、お米中盥に手桶を提げて來て水を汲み入れる、空月は草鞋を脱ぐ。

ドレ、すゝいで上げませう。

空月　イヤお構ひ下さるな、手前が自由に洗ひます。

ト足を洗ひ、二重へ上り、下手に住ふ。

勸兵　まづ〳〵是へお通りなさりませ。

ト空月を上手へ招じ、

德右　シテ御出家樣の御生國は、何れで御座ります。

空月　愚僧は相州鎌倉の光明寺の所化で御座るが、我が日本國中の、諸宗の靈場巡らんと、十五年前に思ひ立ち、師の坊の許しを受けて、先づ近國の武藏より上總下總常陸を經て、奧羽を巡り鎌倉へ一旦歸り休息いたし、夫より再び東海道を京へ上り、久しく都に足を止め、中國四國九州と、巡りて今度木曾街道を鎌倉への歸り道、當所の佐野に所用あつて、今日是へ參つて御座る。

勸兵　諸國をお巡りなさいましたら、其お噺しを緩りと、お聞き申し度う御座りますから、今宵は一宿なさりませぬか。

空月　昨日無理な道を歩き、少々足を痛め居れば、お泊めなされて下されば、有難く心得ます。先づ今日の御法事の御佛前にお經なと上げませう。シテ佛樣はどういふ御緣合ひでござりまするな。

勸兵　義理ある親父で御座りまするが、戒名はアノ位牌に記してある、嚴譽寒山信士俗名次郎兵衛といふが、今日の佛で御座ります。

空月　嚴譽寒山信士俗名次郎兵衛殿とは、貴方の御親父で

御座りまするか。
勸兵　左樣で御座ります、幼年の折り育てられた、義理ある親父で御座りまするが、瘡毒が發しまして、二目と見られぬ姿となり、どういふ事か臨終際に、お淸々々と云ひ續けに、のた打ち廻り、狂ひ死をいたしました。
空月　狂ひ死をいたされたか、積惡の報いさもあるべし、南無阿彌陀佛々々々々々々
　ト珠數を爪繰る、勸兵衞不審のこなしにて、
勸兵　御出家樣の今の御樣子、何かお心當りでも御座りまするか。
空月　今日計らず當家へ參り、湯の無心より宿をいたされ寒山信士へ讀經いたすも、是もつながる因縁づく、今こなたが申されし、お淸と申す女の最期を、是にてお噺し申すでござらう。
　ト合方替つて、
今を去る事十五年前、中山道を下る折から、蕨宿にて出逢ひたる、年の頃は三十四五なる、見るも憐れな女乞食瘡毒故に面體くづれ、身には垢付きしつゞれを纏ひ、三度の食にも困る樣子に、いかにも不便に思ふ故素性を問へば其以前、勤め奉公せし者にて、女郎の折に馴染の客野州生れの次郎兵衞と云ふ、旅商人を亭主に持ち、仲好く暮らす其中に、勤めの折りの餘毒にて、瘡毒が身に發せしを、つれなく亭主が置き去りに、何れへ行つたか行方知れず、夫を尋ねて出ましたが、長の旅路に路用は盡き、終には乞食になりましたと、聞くも憐れな身の上噺し、見るに忍びず少々許り金子を惠んで別れましたが、其夜又々戸田の渡しで、女乞食が捨てられた、其亭主の次郎兵衞に、計らず出會ひ縋り付き、恨みを云ふと離れぬので邪險の刃に、（ト云ひ掛けて心附き、）
邪險な夫と爭ふ中、堤から川へ辷り落ち、早瀬の水に果敢ない最期、今日の佛の次郎兵衞殿がお淸々々と幾度となく云ふたを今に覺えて居ります、次郎兵衞殿が非業な死を遂げられたのはお淸と云ふ、女の怨みでござりませう。
勸兵　御出家樣のお噺しで、お淸々々と申した事が是でさつぱり分りました。
　ト空月因縁噺しをする。
　ト合方にて奧より姉娘のおしづ出て、
しづ　誰方樣も今日はようお出で下さいました。
德右　オ、おしづさんか、聞けば今日の法事の膳部は一切

此方の料理と云ふ事ぢやが、嘸うまい事であらう。

しづ　御存じの通りの不器用者、よい事は出來ませぬが、母さんが御座りませねば、據なく私が拵へまして御座りまする。不鹽梅で御座りませうが、奥へお出で下さりまして、召し上がつて下さりませ。

空月　此娘御が御總領か、お樂みで御座りまするな。

勘兵　召し上がる物も御座りませぬが、御飯を上げ度う御座りますから、庄屋樣と御一緒に奥へお通り下さいまし。

空月　御回向をいたしまして、お志しの御馳走を頂戴いたすで御座りませう。

勘兵　まア兎も角も皆樣と、

德右　さう云はれずと御一緒に、

四十　我等も相伴、

三人　いたしませう。

しづ　サアお出でなりませ。

ト臼挽唄にて德右衞門、空月、百姓三人、おしづ案内して捨ぜりふにて奥へはひる。勘兵衞一人殘り、

勘兵　人に因果の巡るのも、やつぱりこんなものか知らん、思ひ掛けない御出家の是へお寄りなされたので、親父が非業の死を遂げたも、死靈の祟りもさつぱり分つた、ドレ念佛でも唱へようか。

ト勘兵衞上手の家體へはひる。時の鐘打ち上げ、床の淨瑠璃になる。

竹本　〽山里は寒さ身に沁む木枯に、落葉の時雨さらさらと、軒端を埋む賤が家、疎遠の詫びに弟次郎左衞門は尋ね來て、

ト風の音をあしらひ、向うより佐野次郎左衞門羽織着流し、小さな風呂敷包みを持ち出て來て、直ぐに舞臺へ來て、

次郎　佛間で念佛を唱へてるは、確かに兄の勘兵衞殿、ドレ案内をして見ようか。頼みます〳〵。

ト上手家體にて、

勘兵　ハイ〳〵。（ト勘兵衞出て）誰方か知らぬが、はひらつしやれ。

次郎　久しう疎遠にしまして、はひり憎うござりまする。

勘兵　さういふ聲は、

〽不審立つれば、門を開け、

ト次郎左衞門簀戸を開けて、

次郎　次郎左衞門で御座ります。

勘兵　誰かと思つたら次郎左衞門か、兄弟仲に要らぬ遠慮、

次郎　サア〳〵内へはひるがよい。

勘兵　左樣なれば、御免なさい。

〽合釋をなして座に就けば、兄は隔つる心なく、

ト次郎左衞門二重へ上がり、下手へ住ふ。

次郎　何をそんなに遠慮をするのだ、モット前へ進みなさい。

勘兵　誠に久しく疎遠にいたし、濟まぬ事で御座ります、是といふのも今日命日の、親次郎兵衞が惡いから、一家の中に隔てが出來、ツイ夫故に此方へも、知りつゝ無沙汰になりました、どうぞ免して下さいまし。

ト手を突いて詫びる。

次郎　ナンノ免すの免さぬのと、そんな義理立てが要るものか、私も疾うから逢ひたかつたが、一人身體で暇がなく、夫故尋ねて行かなかつた。

勘兵　夫では兄さん是迄の、疎遠を免して下さりますとか。

次郎　免さないでどうするものか。

勘兵　夫は有難うござります。

次郎　其方に逢つたは此春年始に來たぎりだが、度々江戸へ行く爲か、いゝ男振りになつたナア。

ト次郎左衞門勘兵衞の顏をじつと見て、

次郎　兄さん、おまへは苦勞でもあるか知らぬが、去年に變り額の小皺、餘つ程年をとんなすつた。

勘兵　何と云つても取る年に、知つての通り喘息故一年まし に體が弱り、二人の娘も孝行に能く世話をしてくれるけれど、何と云つても女の事、表向きの役に立たず、田畑の爲事も己の手に未だにせねばならぬ故、何かにつけて苦勞勝ち、顏許りぢやアない身代も、今は餘ッ程疲れたわえ。

次郎　早くさうと知りましたら、力になつて上げようもの、惜しい事をいたしました、是からは私が何不自由のない樣に、心を附けていたしますから、必ずお案じなさりまするな。

勘兵　私と違つて身代も、確かな其方がそう云つて、吳れれば何よりも心丈夫、是も養父の次郎兵衞殿の導きでかなあらうわえ、今日は次郎兵衞殿の祥月故、心許りの膳部を拵へ憐り近所の人を呼び振舞ひをして法事をしました。

次郎　夫では私が親次郎兵衞の、忌日を弔ひ下さりましたか、子供の折りには邪險にされ、朝夕酷ひ目に逢つた、謂はゞ敵の次郎兵衞を、憎い共思はずに、跡を弔ひ下さ

る深切、實に感心いたしました。夫はさうと二人の娘は奥にでも居りますか。
勘兵　村の衆へ膳を出すので、奥で給仕をして居ますが、大概終つた時分だらう、今呼んで進ぜませう。（ト奥へ向かひ）コレおしづとお米、一寸爰へ來てくりやれ。
ト奥にて、
二人　アイ〳〵。
〽アイと返事も氣も輕く、納戸を出る二人の娘、
ト奥よりおしづお米出て、
しづ　オヽ、是は船越の叔父様、
二人　ようお出でなされました。
次郎　少し見ぬ間に二人とも見違える様な娘になつた、能く兄さんの世話をして孝行をするさうだが、だん〳〵年をとらつしやるから、大事にして上げてくれよ。
しづ　お母さんが御座んせぬ故、朝夕の事何やかやお世話をいたす心なれど、
お米　私は年がゆきませねば、何の役にも立ちませず、思ふ心の半分も、
しづ　屆かぬ勝ちで、
二人　ござりまする。

勘兵　シテ今日其方が態々來たは、何ぞ用でもあつての事か。
次郎　察しの通り今日來たは、兄さんお前に折入つて、頼みがあつて來ましたが、聞き屆けて下さいますか。
勘兵　どんな事かは知らないが、兄弟中の事なれば、身に叶う事なら、其頼みを聞きませう。
次郎　夫は早速忝い。
勘兵　シテ私への頼みとは。
次郎　只今お斷し申しまする。
ト合方替つて、
兼てお前も知つての通り、一昨年江戸から歸り掛け、千貫松原で賊に逢ひ既に金を盜られる所を、都築さまに助けられ夫が緣にて世話をして、私が村方へ道場を建てましたのは百姓でも、少しは柔術劍術の覺えがなければならぬものと、都築さんを師匠と頼み、日夜稽古をしましたが、一心故に忽ちに、免許皆傳受けまして、まア一人前になりましたが、師匠が歿後に西國方の、大諸侯より私が身を、二百石で召抱えようと、再應の使者を受け、今度武術のお庇護にて、四民の上たる武士の數に加はつて、立身出世を致すにつけてお頼み申す儀があつて、御

吹聴旁々參りました。
勘兵　スリヤ劍術の德により、其方は武士に出世するとか、夫は〳〵結構な事ぢや。實は劍術を習ふと聞き、百姓づれには要らぬ事生兵法は大疵の基、譬へにもいふ通り怪我過ちがなければよいと、蔭ながら案じて居たが、武士になるとは其業が勝れた事と思はれる。シテ西國方のお大名は、一體何處の御領主樣ぢや。
次郎　サ其仕官するお大名は、今は憚る事あつて、其お名前は明かされぬが、いよ〳〵出立いたす折りにお明かし申すでござりませう。
勘兵　シテ跡々はどうしやる。
次郎　夫をお前に賴みたいのぢや、一先づ家を取り片附け、田地有金諸道具共、此方にお讓り申します。
勘兵　何といやる。（ト床の合方になり、）
次郎　元私が親次郎兵衞は、當家に入夫にはひりし者にてお前を邪險にする所から、親類衆と折合惡く、田地家財を二つに分け、別家をしてから仕合せよく、田地も多く求めましたが、仕官をするには要なきもの、悉皆本家へお讓り申せば、お受けなされて下さりませ。
勘兵　私と違つて此方の家は、今は大した田地持ち元分家したとは云ひながら、なんで夫が受けられやう、當分の中預かれと云ふなら留守番同樣に、預かるまいものでもないが、讓るとあつては受けられぬ。
次郎　義理堅いお心では、さう云はれるは御尤もだがどうぞお納め下さりませ、則ち爰へ沽券狀を持つて來たれば庄屋樣へ、お話しなされてお前の名に、書替へて貰ひませう。
ト小風呂敷の中より、沽券狀を出す。
勘兵　夫ではどうでも田地をば、其方は俺に讓ると云ふのか。
次郎　心懸りになりますから、賴みを聞いて下さりませ。
〽思ひ入つたる弟の賴みに否といひ兼ねて、思案に餘る其中へ奥より出る庄屋の德右衞門、
ト勘兵衞思案の思入、奥より德右衞門出て、
德右　次郎左衞門殿、御座られたか。
次郎　思ひ掛けない庄屋樣、當家においでなさいましたか。
德右　今日の法事に呼ばれまして、樣子は奥で聞きましたが、此方も好きな劍術が役に立つて西國方へ仕官するとは結構な事、夫につけて田地其外、兄の事故勘兵衞殿へ讓つて行くとは天晴な、道を立てぬく此方の了簡、テモ

感心な事で御座る。
次郎　よい所へ庄屋樣、委細をお聞きなされし上は何分共
に書替へを、宜しくお願ひ申します。
德右　夫は私が承知しました。
勘兵　斯ういふ時に相談相手の、倅があつたらよからうに、
こんな困つた事はない。
へ正直面に現はれて思案に餘れば次郎左衞門、
ト勘兵衞當惑のこなし、次郎左衞門思入あつて、膝を
進め、
次郎　其相談對手になる、おしづの聟を世話をしたいが、
何と貰つては下さらぬか。
勘兵　其方が世話をするからは、定めて似合ひの緣であら
う、シテ其聟は何所の者ぢや。
次郎　予飼ひから私が使つた、次六でござります。
勘兵　世話をするのは、アノ次六か。
次郎　男も醜い事もなく、田畑の仕事は二人前、立派に出
來る其上に、只正直と心立てのよいのが持參でござりま
すが、併しおしづの氣に入るか、入らないかは分らぬが、
モシよいなればアノ次六を、聟に貰つて下さらぬか。
勘兵　私も疾からアノ男に、目を付けて居つたのだ。其方
が供に連れて行かずば、此方へ聟に貰ひたい。
次郎　夫では貰つて下さるか。
勘兵　元よりこつちは望む所ぢや。
德右　次六どんは正直で、蔭日向のない若い者、聟に貰へ
ば仕合ぢや、幸ひ來合せたが幸といふもの、私が媒人を
しませう。
勘兵　夫は何より忝い、庄屋樣が媒人をして下されば、
世間へ對し當人達の見得になります。
德右　併し肝心の當人が、氣に入らなくては、爲方がないが
おしづ坊おまへは何うぢやな。
へ問はれてハッと顏赤らめ、差俯向いてモジモジと、暫
し詞もなかりしが、
ト　おしづ恥かしき思入にて、
しづ　外ならぬ、叔父樣のお世話と申し、身に餘る庄屋樣
のお媒酌、父さんさへ宜しくば、決して否やはござりま
せぬ。
勘兵　夫ではおしづも得心か。
しづ　ハイ、宜しうお願ひ申しまする。
德右　大概是で取り極り、こんな目出度い事はない。
へ折りから奥より立ち出る百姓、

ト奥より田十、哇七、九根六醉うたるこなしにて出て、
田十　おしづどんに聟が極り、勘兵衛さんも嘸悦び、
九根　いつ婚禮になりますか。
哇七　早く祝ひ酒が、飲みたいものだ。
德右　こんなに舌も廻らぬ程、馳走になつて置きながら、まだ酒が飲みたいのか。
田十　汝等と違つて婚禮の、目出度い馳走に。
三人　なりたいものだ。
次郎　斯う物事が極ろ上は、出立前に婚禮をいたさせ度う御座ります。
〈暫し半ばへ下男の次六、刀携へ急ぎ來て、
ト向うより次六、着流し風呂敷包みの刀を持て出て門口へ來て、
次六　ハイ御免なさい、次郎左衛門方より參りましたが、主人は此方で御座りますか。
ト次郎左衛門見て、
次郎　オヽ次六、何ぞ用か。
次六　ハイ高崎の研屋から刀の研が出來たと只今持つて參りました。
ト云ひながら内へはひり、刀を出す。
次郎　使ひの者は歸つたか。
次六　歸りに寄ると預けて行きました、よいか惡いか、ちよつくら見せに來ました。
ト次郎左衛門は刀を拔いて見入る、田十は次六の側へ來て、
田十　此次六の、あやかり者め。（ト背中を打つ。）
次六　ア痛い、なんで俺を打ちなさるのだ。
田十　コリヤ、聟取りの、
百三人　石投げ代りぢや。（ト三人で次六を打つ。）
次六　コレ私が聟にでも行きはしまいし、そんなに打たれる譯はない。
田十　コレ此方は知らぬが、此美しいおしづ坊の聟になるのだ。
次六　エヽたはけた事を云はつしやる、冗談にも程がござるぞ。
次郎　イヤ冗談ではない、コレ次六、今兄さんにも相談して、お前をおしづの聟にするのだ。
次六　旦那樣迄同じ樣に、なんで私を嬲らつしやる。
勘兵　イヤなぶるのではない、眞の事だ。
次六　眞面目くさつた顏をして、よい加減に馬鹿にさつし

やれ。(ト次六腹を立つ。)
德右 コレ〳〵、そんなに腹を立つな、其方を馬鹿にするのではない、聟になるのは誠の事で、此庄屋が媒人をするのぢや。
次六 庄屋樣といふものは、村の束ねをするものだ、そんな嘘を云はつしやるナ。
次郎 コレ次六、貴樣は仕合者だぞ、庄屋樣が媒人でおしづの聟になるのだぞ。
次六 夫は眞實で御座りますか。
次郎 なんの嘘を云ふものか。
次六 コリヤこッ恥かしい事だなア。
ト天窓を押へて、恥かしきこなし。
勘兵 夫ともおしづは氣に入らぬか。
次六 滅相な事仰しやりませ、村一番の容貌よし、此次六には過ぎますだよ。
次郎 そんなら貴樣得心か。
次六 大得心でございます、こんな不骨な者だから、おしづさんがどうであらうか。
勘兵 おしづもお前がよいといつたぞ。
次六 エヽ(ト嬉しきこなしにて、)何だか私やクワックワッと、汗が出てなりましねえ。
〽汗押し拭ひ片隅へ、顏を反けて控へ居る、斯る所へ暖して奥より空月立ち出で、
ト奥より空月出て來り、
空月 お志しのお齋に逢ひ、御馳走に預かりました。
勘兵 召し上る物もなく、眞のお腹ふさぎでござります。
空月 一泊願ふ心算であつたが、お客來もある樣子、日足の高きを幸ひに、愚僧はお暇いたします。
勘兵 客來とても親類中、其御遠慮には及びませぬ。
德右 お氣が詰まれば私方で、今夜はお宿をいたしませう。
空月 然らば仰せに從つて、庄屋殿へ願ひませう。只今奥で承はれば、次郎兵衞殿の御子息は。
勘兵 ハイ、此者で御座ります。
次郎 私は次郎左衞門と申しまして、次郎兵衞の倅でござります。
〽旅僧顏をぢつと見て、
ト空月次郎左衞門を見て、
空月 御親子とて爭はれぬ、斯く迄よくも似るものか。
次郎 スリヤ、私の親共を、御存じで御座りまするか。
空月 十五ヶ年前戸田川原で、お見受け申した事が御座る。

次郎　いかなる事にて御出家には。

勘兵　仔細は後で、私から噺さう。

ト空月猶も次郎左衛門の相を見て、

空月　愚僧は以前相學を少々學びし事あつて、觀相をいたしまするが、次郎左衛門殿は濶達にて一旦斯うと思つた事は、何所迄も貫かねばならぬといふ、御氣質ぢやが、よく堪忍をなされぬと、其身に害を生じますから、お愼みが肝要で御座りまするぞ。

次郎　有難き其御教訓、萬事愼みますで御座ります。

德右　トキに媒人は宵の中、後に噺しもあらうから、此方は先きへドリヤお開きに、

三人　いたしませう。

〽旅僧先きにどや〳〵と、百姓共は立出でしが、

ト空月先きに、德右衛門、田十、九根六、畦七外へ出て花道へ行き、空月振り返つて見て、

空月　ア、惜しいかな、次郎左衛門殿は、遠からず身を亡ぼしませう。

德右　夫も祟りでござりませうか。

空月　所謂親の因果で御座る。

〽歎息してぞ旅僧は打ち連れてこそ歸り行く。

ト此人數向うへはひる。

〽あとは隔てぬ內端同士、次郎左衛門は兄に向ひ、（ト床の合方になり、）

次郎　田地萬端お前に讓り、次六をおしづの聟として、誠に是で私は心殘りはござりませぬ。

勘兵　シテ西國へ奉公に、何日頃出立する心算だ。

次郎　是から跡を取り片附け、小道具なぞは夫々に懇意な者に筐にやり。

勘兵　エ、筐とは。

次郎　イヤ筐ではない置土產に、諸方へ分けて遣はします、金は其中取り纏め、後より揃へて上げますが、只今家に有合はす二百兩の此金は、親孝行の褒美として、おしづお米に置土產。

〽夫と黃金のいはぬ色、仔細を包む二百兩、二人が前へさし出せば、

ト次郎左衛門金包みを出す。

しづ　スリヤ叔父樣には此お金を、私共姉妹へ。

お米　置土產に下さりますか。

しづ　父さん、なんと、

兩人　いたしませう。

勘兵　僅かな金なら知らぬ事、大した金を二人の者へ、コリヤ多過ろから返すがよい。

〈出だせし金を差し戻せば、

ト勘兵衛金を戻す、次郎左衛門思入あつて、

次郎　仕官いたして西國へ、參つて武士になりますれば、命は主人に捧げしもの、何日何時一命を、捨てまいものでも御座りませぬ、其時は逆縁ながら、弟の此次郎左衛門が亡き跡の訪ひ弔ひお頼み申し上げますする。

〈是が此世の別れぞと、口に云はねど餘所ながら、心の中の暇乞ひ、落つる涙を押し拭へば、お米は目早く、

ト次郎左衛門餘所ながら暇乞ひのこなしにて、涙をそつと拭ふ、お米は目をつけて、

お米　モシ叔父さん、何でお泣きなされます。

次郎　サア是から遠い西國へ、仕官をすれば兄さんにも、又姪達ちにも是切りに、逢はれぬ事か知れぬ故、名殘り惜しさに無常を感じ、ツイ涙がこぼれたのぢや。

勘兵　成程其方のいふ通り、武士は主人へ一命を差上げるのが御奉公、是が町人百姓なら命を捨てる事もない、其身の出世であるけれど、武士の倅といふではなし、元百姓の倅なれば仕官するのを思ひ止り、矢張り生涯鋤鍬取つて、どうぞ長生きして下され。

次六　コリヤ姪様のおつしやる通り、元より武士の生れなら、命を捨てるも仕方がないが田地田畑有金も澤山にある御身代、生涯樂に暮らせますに、命を捨てゝ侍になるのは譯が分らない、思ひ止つて下さいまし。

しづ　父さんとても取る年に、殊更弱い病ひ持ち、外に親類とてもなく、頼りに思ふは叔父さんばつかり。

お米　萬一の事のあつた時は、誰を力に頼みませう、年端も行かぬ私達を、不便と思うて下さりませ。

しづ　遙々遠い西國へ、お出でなされず佐野に居て、力になつて下さりませ。

お米　私等二人のお願ひを、

しづ　どうぞ叶へて、

兩人　下さりませ。

〈どうぞ叶へて下されと、右と左に取り縋り賴む心ぞ哀れなり、此方は袂を振り拂ひ、

トおしづ、お米よろしく賴む。

次郎　假令何と云はうとも、堅く約束した上は最早此身も侍故、今更變換へされやうぞ、一旦斯うと思つた事は後へ返らぬ私が氣性。（トきつぱり云ふ。）

勘兵　スリヤ、此樣に、

皆々　止めても。

ト四人は顏見合はせ、是非なきこなし、次郎左衞門刀を取つて、

次郎　命を捨てゝも武士になり、我が魂を研ぎ上げてまッ此通りでござります。

ト鞘を拂つて拔き放す、刀の光り皎々と見るさへ凄き希代の業物。

ト次郎左衞門刀を拔き、研ぎの工合を見る、勘兵衞も覗き見て、

勘兵　テモ物凄い、よく斬れさうな此刀は。

次郎　劍術の師匠たる、都築樣より僅に貰つた此刀は水も漏らさぬといふ心で、籠釣瓶と號けたる、無銘なれども千壽院村正との云ひ傳へ。

勘兵　まさかの時には其刀で、

ヘ心の中に怒りを生じ、

ト次郎左衞門きつと思入あつて、

次郎　此一刀で向う奴ばら、思ふ存分斬つて捨て、

次六　スリヤ、どうあつても旦那樣には、

次郎　疾くより決心して居るのぢや。

勘兵　ムヽ、さう決心の上からは、止めはいたさぬ、すつぱりと、

次郎　エヽ、

勘兵　イヤ、すつぱり跡は引き受けた。

次郎　死後を弔ひ、

ト刀を鞘へ納めるを、木の頭。

下さりませ。

ト宜しく思入、本釣鐘、早めたる合方にて、

幕

大喜利

仲の町立花屋の場
兵庫屋九重部屋の場
立花屋二階座敷の場
同　大家根捕物の場
大門口會所の場

役名——佐野次郎左衞門。繁山榮之丞。釣鐘權八。立花屋長兵衞。同若い者與助。同半次。幇間牛中。同一八。遣り手お辰。同心赤井泰助。鳶の者廓の

若い者多勢。兵庫屋の八ッ橋。同九重。立花屋女房おきつ。同下女おさき。藝者お琴。同お糸。番新八重咲。

本舞臺四間常足の二重、向う大門口より山口巴の側を見たる中遠見、後ろの方欄間は花暖簾の裏を見せ此下手一間の上げ緣、上下折廻ぼし紅葉流しの畫を入れたる襖壁、下手腰張りの茶壁、前側本庇、下手障子の仕切り、此外茶壁、平舞臺上下四ッ目垣、石燈籠、中庭の心。總て立花屋の見世を裏から見たる模樣、上手長火鉢の前に、長兵衞帳面を調べ、女房おきつ書き付けを見て居る、下手に若い者牛次、財布から金を出して算へてゐる、側に若い者與助と下女お咲、客の羽織をたゝみ居る見得、流行唄にて幕明く

與助　牛さん、今日は江戸向きの掛取りで、嘸草臥たらうの。

牛次　私よりはお前方が居續けの客人で、嘸忙がしかつたらう。

お咲　三浦屋のお三人も、玉屋の連初會も、どつちも御酒が强いから、隨分こつぱいでござんした。

きつ　大そう表が賑かだが、大神樂でも來てゐるのかえ。

與助　向うの二階でお客が丸一を呼びましたが、玉屋の花魁の思ひつきで、大騷ぎで御座います。

お咲　又今に大黑舞で、花魁達が血道を上げ、騷ぐことで御座んせう。

牛次　是で帳面通り、殘らずで御座います。

ト手帳を添へて出す、長兵衞は受取りて、

長兵　牛公珍らしく掛け先きが集つたナ。

牛次　江戸向き許りのお客先きで、オ、能く來た早く持つて行けと、お待ち兼ねでございました。

きつ　大晦日を待たないで、十四日で片付くとは、來年の春は緣喜がいゝね。

長兵　こんな目出度い事はねえ、今夜はみんなに一杯寄らう。

與助　慾には佐野の旦那がお出でなさりやア、猶能うございます。

長兵　二つ能い事はねえもので、帳〆高が餘ッ程違はア。

お咲　九月おいでになつたぎり、其後まるで廓の道切り、全く廓へおいでがないと見えますね。

長兵　花魁が悪いばつかり、家の懐中は大違えだ。義理堅いお方だから、外へお出でなさる氣遣ひはねえが、まだ解けずに居なさると見える。

きつ　花魁が多勢の前で、愛想盡かしを云つた時、大抵な者なら腹を立てゝ、大騒ぎになる所を、少しもお腹立ちの様子もなく、お歸りなすつたが隨分御勘辨強いお方さね。

與助　怒られた方が後腹が病めず、却つてよう御座います穩かだけに思ひ出すと、未だにお氣の毒の御座います。

長兵　アノ時急に花魁が、裏返つて終つたも、何か仔細のある事と、後でよく／＼考へると親判の權八が家へ無心に來た時に、俺が斷然斷つたが、何でも彼奴が榮之丞にソクラをかつて遣趣返しに、愛想盡かしを云はしたと、俺は疾うから思つてゐるのだ。

きつ　色戀では悧口な人も、能く間違ひをするものだが、了簡の大きいお人と見えて、怒らずに濟んだのは、まア萬人に一人でせうよ。

長兵　今更云つても爲方がねえが、こんな年は早く經つて、來年から能い福を入れたいものだ。

ト與助表の方を見て、

與助　モシ親方、御覽なせえ。大門で駕籠を下りたのは、佐野の旦那ぢやア御座いませんか。

ト皆々表の方を見て、

長兵　ム、佐野の旦那だ、何にしろ俺が行つて來ようよ。

ト羽織を引つ掛け、門の方へ行く。後ろの入口へ次郎左衛門一本ざしにて出て、

次郎　オヽ、久しく逢ひませぬナ。

長兵　コレは旦那様、能く入らつしやいました、まあお上り下さいまし。

ト皆々出迎へ、次郎左衛門を上手へ通す。

扨其後は打ち絶えまして、お詫びの申し上げ様も御座いませぬ、實は先頃お歸りの翌朝、石町の御定宿迄上りまして御座りますが、暗い中にお立ちになつたと申す事で御座りましたので、殘念ながら引き取りました。

次郎　アノ時には國に法事があつて、急いで歸りました、夫から何やかや用多で、漸く昨今夫を片附け、一寸立ち歸りに出て來ました。

きつ　何より此事を花魁に、お知らせ申したう御座いますが、旦那御立腹では御座いませんか。

次郎　私は何とも思つて居ぬが、花魁の方で來なからうぜ。

きつ　所が大違ひで御座ります、實はアノ時惡かつた、どうか元々通りお呼び申したいと、疾から花魁は云ひ續けて御座います、どうぞ行つて上げて下さいまし。
次郎　オヽ行くとも〳〵。實は内々逢ひたいのぢや。
きつ　何にしろ早くお知らせ申しておくれ。
與助　へい〳〵畏りました。

ト表の方へ出て行く。

長兵　爰は餘り見世先きで御座ります、二階へ入らしつては如何で御座います。
次郎　今日は恰度十四日だから、先頃の引き殘りの勘定をしませうから、附けを出して下さい。
長兵　どういたしまして、御勘定の引き殘り位ゐは宜しう御座います、何日でも餘計に頂きますから、夫は後になすつて下さいまし。
次郎　イヤ〳〵さうでない、勘定は形をつけて置かねばならぬ。
きつ　まア兎も角も、お二階へ入らつしやいまし。
次郎　久し振りぢや、何日もの顏を揃へて下さい。
半次　畏りました。
きつ　サア、入らつしやいまし。

ト皆々立上る、通り神樂の鳴物にて、　道具廻る。

本舞臺平舞臺、上手一間の床の間、續いて三尺違ひ棚、此下茶壁、次ぎの間、此内に夜具棚、水屋なぞある、障子の外、廊下の出入り、總て兵庫屋二階九重部屋の體、爰に番頭新造、新造と禿次の間に居る、流行唄にて道具止る。

新造　柳橋の突く羽根が菓子簞笥にありんすから出しなまし。
禿　アイ〳〵。（ト菓子簞笥を持つて來る。）
番新　つく羽根は辻占がありんすから、樂みざます。
新造　花魁にお客ざますかえ。
番新　山口巴のお馴染で、今座敷でありんすが、今日で三日居なますから、モウ歸る時分ざます。

ト唄になり、下手廊下より九重、部屋着にて出て來て

九重　八重咲さん、來てざますかえ。
番新　花魁おなじみでありんすかえ。
九重　今浮橋さんの座敷へ行つて、一緒に結つて來いしたが、髮結さんに撫で附けられ、逆上せ上がつてなりんせ

ん、オ、逆上ると云へば、八橋さんの心持ちはどうでありんす。

番新　まだ明瞭とは爲いせんが、此中からの彼事で氣が鬱ぐのでありんせう。

九重　八橋さんの事に就ては私も種々心配して、少し思つた事もあり、とつくり噺したうありんすから、都合が宜くば一寸いつてくんなまし。

番新　そんなら呼び申して來ませうから、どうぞとつくり異見をお頼み申しんす。

九重　夫は私も承知の事、そんなら早く八橋さんを、

番新　アノ呼び申して參りんせう。

ト番新下手へはひる。

新造　八橋花魁とお噺しの、お邪魔になるから私達ちは外へ行つて居りんせう。

九重　アイ、此子を連れてちつとの間、何處ぞへ行つてくんなまし。

新造　七越さんのお部屋に居りんすから、サアゆかりどん、一緒にお出で、

禿　アイ〳〵。

ト右の合方にて、新造禿下手へはひる。引違へて八橋出て、入口に立ち、

八橋　九重さん、其處へ行つても、ようござますかえ。

九重　八橋さん、待つて居りんした、まア此方へお出でなんし。

八橋　御免なんし。

ト八橋能き所へ住ふ。

大層寒いぢやアありんせんか。

九重　寒にはひつて僅か三日目、此寒さの増すにつけ、思ひ出しておまへの所へ呼びに上げたのでありんす。

八橋　ナニ寒さが增して思ひ出すとはえ。

九重　榮之丞さんと佐野さんの事をサ。

八橋　なんと云ひなますえ。

ト靜かな端唄様の合方になり、

九重　今年も僅かモウ半月、來る初春の積夜具から茶屋暖簾やら何やかや、ソリヤ全盛のお前故差支は御座んすまいが、榮之丞さんと云ふ叢雲に、包まれて居る故に逆ふ心の晴れやらず、忘れもせぬ九月の末、アノ佐野さんへ愛想盡かし、間夫は勤めの憂さ晴らしと、手前勝手な道理をつけれど、夫では義理が濟みますまい。其中お前も氣が附いて、茶屋衆を呼んで詫び言して、撚を戻す事か

と思へば、モウ今月で足掛け四月、何の便りをしなさんせぬが、どう云ふ心か知りせんが、花咲く春と諸共に心を改め佐野さんを、お呼び申さにやア爲になるまい、トサア、悧口らしうじいふもの〻、まだ枝青き私の異見、出過ぎ者とも思はうが、みんなお前を思ふ故、悪く思つてくんなますな。

八橋　九重さん、よう云つてくんなました、私もあの時退引ならぬ、意氣地になつて佐野さんへ濟まぬと知りつ〻愛想盡かし、勘辨強いお方故何にも云はずに歸んなましたが、其時の胸の苦しさ、一度はお詫びを仕ようと思へど、何ぼ勤めの身の上でも、厚顔しく便りも出來ず、今日は今日はと延び〳〵に、つい今迄になりました、日頃姉妹同樣なおまへの異見、私やどの樣にも詫びいす程に、詞を添へてくんなましよ。

九重　そんなら私の異見につき、詫び事をしなますかえ。

八橋　私やお詫びをする氣ざんすが、榮丈丞さんのある事を、明かしたからは元々に、來て下さりやアよいけれど。

九重　ソリヤアお前さへ其氣なら、其の詞を添へいせう。

八橋　どうぞお願ひ申しいす。

お辰　ト廊下口より遣り手お辰出て、
八橋花魁え、お喜びなさいまし、耳よりなことが出來ましたよ。

九重　耳よりな事とはえ。

お辰　今立花屋へ佐野さんが、お出でなさいましたと知らせて來ました。

八橋　アノ佐野さんが御座んしたとかえ。

お辰　是非花魁をと、おつしやいましたとサ。

八橋　アノ佐野さんが、私を呼びに。

九重　今噂をして居た所、恰度い〻八橋さん座敷のお客は。

八橋　モウ程なく歸りんせう。

九重　お辰どん、立花屋へよういうておくんなんし。

八橋　トハ云ふ物のノメ〳〵と、此儘顔を合はされいせう。

九重　ハテ來なんしたを幸ひに、私も共々詫びをしいせう。

八橋　そんならきつと、頼みんすぞえ。

九重　ハテ、私が胸にありんすよ。

お辰　夫では私は先きへ行き・お目に掛つて參ります。
ト　お辰下手へはひる。

八橋　九重さんの眞身の異見に、嬉しいと思ふその矢先きへ。

九重　佐野さんからの迎ひとは、時に取つてのいゝ辻うら。
八橋　願ひ叶うて待ち人を、大門口へ結ぶの神。
九重　丸く納まる煙草の畑に、嬉し御げんの元々へ。
八橋　歸るといふは嬉しいが、一つ叶へば又一つ。
九重　アノ榮さんが知つたなら、又もや積る苦勞の種。
八橋　妾らが苦界で、
　ト胸を押へるを、道具替りの知らせ。
ありんすねえ。
　ト兩人辻占を見る、合方にて、
　　　　　　　　　　　　　　　道具廻る。
　本舞臺平舞臺、据通り二階の手摺、此後ろ仲の町の向う側を見たる中遠見、上手一間の床の間、此褄茶壁、下の方階子の昇り口、總て立花屋二階座敷の體、爰に次郎左衛門、長兵衛、おきつ、下女お咲住ひ、太鼓入り騷ぎの合方にて道具止る。
次郎　久し振りで廓へ來たら、なんだか心が浮き〳〵して、いつそ生き返つた樣ぢや。
長兵　其後一寸御在所へ、お詫び旁々出ませうと、存じましたが私共が、上がりましても表向きお目にかゝる譯にも參らず、只每日お噂をいたす許りで御座ります。
次郎　さうであらうとも、折角尋ねて下すつても、アレは江戸の吉原の者ぢやなぞと、直ぐ近邊の噂になるから、却つて私が迷惑故尋ねて呉れぬが此方の勝手、高が賣物買物、身受けをしてから斷わられては、夫は腹も立たうけれど、身受けをせぬ前故に、何とも思つては居りませぬ。
きつ　さう思召して下さいますと、大きに安心いたしますが、斯うしてお出でになる迄は、實に途方に暮れて居りました。
　ト次郎左衛門懷中より金を出して、
次郎　少ないけれど、家の衆にやつて下さい。
　ト皆々よろしく禮をいふ、階子口より與助案内して番新とお辰出て來て、
與助　お辰どんと八重咲さんが參りました。
お辰　コレは旦那お珍らしい、八ッ橋花魁がお出での事を聞きましてどんなにびつくりいたしましたらう。
番新　直ぐにお迎ひに出ますのでありんすが、歸り掛けて居るお客があるので、申し譯ながら名代に參りんした。
次郎　私も昨夜江戸へ來て、實に八ッ橋に逢ひたいのぢや。

番新　佐野さんがさういふ思召しで居なんすと、却つて花魁が面目なう思ひんせう。

お辰　花魁は何をしておいでだか、一寸迎ひに行つて來ませう。

ト　お辰階子口へはひる。入り違つて幇間半中、一八藝者お糸お琴若い者下女酒の道具を持つて出てよろしく並べる。藝者幇間は下手に居て、

半中　思ひ掛けない旦那樣、彼限りお出でが御座いませぬので、落膽いたして居りましたが、

一八　只今お出でと承はり、噓だと思つて上がりました。

お糸　お目に掛かれまいかと存じました、佐野の旦那の座敷へ出るとは、

お琴　斯んな目出度い事はありませんねえ。

皆々　有難うございます。

次郎　九月から足掛け四月、江戸へ出て來たかつたが、漸漸此頃用が片附き、扨出て來て見ると思ひ出し、八ツ橋は云ふに及ばず、此方衆にも逢ひたいし、何だか宿に居ても、思ひ出して寢ても寢られず心の苦しさ、斯うと知つたらアノ時に、ふられて歸る果報者と、へらず口をきかねば宜かつたと、今更思へど返らぬ事と思ひ直して出て來ました。

半中　夫は旦那が內氣といふもの、アノ時御立腹なすつた上、大立廻りでも御座いますとか、又はテン／＼の早歸で、お歸りなすつたのなら、御尤で御座いますが、

一八　花魁のけんまくが恐しくつて、旦那の方が和めるといふ頓珍漢、花魁こそ面目なからうが此方は少しも引け手は御座いませんよ。

ト　此中酒宴なぞあつて、

次郎　暫く來ぬ中廓の樣子が、なんだかくらくなつた樣だが、月迫でも賑かでござるかなし

長兵　當年は每年の臘月と違ひ、上景氣で仕合でございます。

次郎　夫は結構、晝と夜るとは何方が賑かでござりますな。

長兵　夫は夜るの方が賑かで御座ります。

次郎　夫では夜るより、

ト　思入あつて氣を替へ、

成程晝の方が、ひつそりして居るで御座らうな。

ト　階子の口より、お辰先きに、八ツ橋新造禿付いて出て、

お辰　佐野さん、花魁が面目ないとて、顏向けの出來ぬと

いふを、やう〳〵お連れ申しました。

次郎　イヤ私の方は何とも思はぬ、どうぞ此方へ來て下され。

　ト八ツ橋次郎左衛門の下の方へ住ひ、

八橋　モシ佐野さん、來られた義理ではありんせんが、折角呼んでくんなましたを、出ぬは却て宜くないからと、お辰どんに連れられて、此座敷に來ましたが、どうぞ堪忍しておくんなんし。

次郎　さう改まつて云はれては、私が何とも物が云はれぬ、アノ時は恰度九月、モウ今では十月の菊で散らして仕舞ひ、今日からは初會になつて何にも云はずに遊ばして下さい。

八橋　そんなら今日から初會になつて、知らぬお客で八ツ橋を、

次郎　買ふのも名に負ふ全盛の、名の響いたるお職ゆゑ、

長兵　是からお裏お馴染と、度重なつて又元へ。

きつ　戻るといふは目出度いこと。

長兵　是で一同、

皆々　安心いたしました。

八橋　是で私も、重荷が下りんした。

　ト若い者階子口より、盆に祝儀包みを乘せて出て銘々に配り、

きつ　一寸皆さん、旦那へお禮を。

皆々　有難う御座います。（ト一同禮をいふ。）

次郎　モウ逢はれまいと思つて居たに、今日計らず毎度の顏で、斯う揃つて來てくれたは此上もない悦びで、日本晴れがしたやうだ。

番新　九重さんに七越さんが、佐野さんがお出での事は、嘘だと云ひなましたから、何ぞ奢らしてやりませう。

お辰　今夜おいでの事が知れたら、嘸吃驚しなさいませう、夫が今から樂しみでございます。

次郎　イヤ夫は面白い事ぢやが、今日は爰から歸る心算ぢや。

八橋　そりや又何故で御座んすえ。

次郎　實は今日爰へ來たは、喧嘩はせぬが仲直り、處で斯うして花魁初め、みなが揃つて事が濟めば、是から一先づ宿へ歸り、又改めて來ると爲よう。

八橋　イエ歸すのは否でありんす、アノ時の事を四月越し、お氣の毒だと思つて居る故、無理な願ひの待人掛け、神を祈つたかひあつて、今日來なましたを歸しては、濟み

んせぬ故一寸でも、二階へ行つてくんなまし。
番新　是は尤もでありんすよ、夫をおいでなさんせぬと、二階中へも聞えが悪るし。
新造　第一側につき申す、私共の無念になりんす、又花魁もどの位ゐ、聞えが悪いか知れません。
お辰　お茶屋限りでは遣手の私も、見世へ歸つて濟みませんから、
半中　是は旦那へ一同より、
一八　お願ひ申したう、
皆々　御座ります。
次郎　其代り八ッ橋に、一寸内密で噺しがあるから夫を濟まして一騒ぎ、カッと騒いで今日の處は、一旦歸つて又改めて出て來ます。
八橋　夫ではどうも氣が濟みいせん。
番新　是非ともお泊り。
皆々　なさいまし。
次郎　今日は是非とも歸らにやならぬ。
　ト皆々顔見合す、長兵衛思入あつて、
長兵　夫程仰しやるものを、お止め申すも悪い故、一寸階下へ行つて居ませう。

きつ　内密のお噺しがあると仰しやるから、粋を通して一同は一先づ階下へ參りませう。
お辰　御用が濟んだら、旦那様、
半中　お手をお鳴らし、
皆々　下さいまし。
　ト皆々捨臺詞にて階子口へはひる。次郎左衛門こなしあつて、
次郎　八ッ橋、一寸階子口を見てくりやれ。
八橋　アイ。
　ト八ッ橋階子の口を窺ふ、次郎左衛門四方を見廻して思入、八ッ橋元の所へ來て、
さうして、噺しと云ひなますは。
次郎　思ひ掛けなく又元へ、歸るといふは私が身に、斯んな嬉しい事はない、其悦びに此一杯、どうぞ受けて貰ひたい。
八橋　何の事かと思ひんしたら、打ち解けた其お詞、私や嬉しう受けませう。
次郎　オ、宜く受けて呉れた、私が酌をしてやらう。
八橋　憚りでありんすねえ。
　ト次郎左衛門酌をする、酒こぼれる。

アモシ、そんなには飮めえせん、ぬしが助けてくんなますか。

次郎　イヤ折角の私の酌ぢや、一杯飮んでくれたがよい。

八橋　夫でもこんなに滿杯では、

次郎　此世の別れぢや、飮んでくりやれサ。

八橋　エヽ。

ト吃驚して持つた杯を落し、逃げようとするを、次郎左衞門裾を押へ其上に坐り、

次郎　女郎は客を欺すものと、知つては居れど色香に迷ひ、度重なつて其揚句、身受けをしようならうと云ふ、相談迄も纏つて我が花にせん其際に、手折りし主の榮之丞故、滿座の中で惡口して、恩を仇にて次郎左衞門へ、よくも恥辱を與へたナ。

八橋　そんなら解けたと云はんしたは、誠の事ではありんせんか。

次郎　積る恨みも人目を厭ひ、今日迄胸を擦つて居たも四方を遠ざけ此二階で、われに遺恨を返さう爲だ。

八橋　サア其腹立は尤もながら、是には深い譯ある事、素人の中から榮之丞さんと、言交した私故、身受けを斷り申したは、みんな此身が惡いの故心解けぬは尤もながら、お氣を鎭めておくんなんし。

次郎　今更となり云譯聞かぬ、われが命は貰つたぞよ。

八橋　アレエ。

ト押し倒して逃げに掛るを、次郎左衞門は八ツ橋の髻を摑んで、床の間の所迄引き戻し、床にある刀を取り上げる、此間に八ツ橋は又下の方へ逃げて來るを、後ろより一太刀浴びせる、是にて八ツ橋はドウと倒れ、

誰か來てくんなまし。

ト叫ぶ、次郎左衞門は後ろより口を塞ぎながら一寸立廻り、袈裟掛けに斬り下げる、八ツ橋は立身にて苦しみ、倒れる。

次郎　おのれ八ツ橋、よくも恥辱を與へたナ。

ト止刀を刺し、尻へにドウとなる、此時階子口より、下女お咲は燭臺を持つて出て來て、

お咲　お明火を、持つて參りました。

トいひながら次郎左衞門の樣子を見て、

アレエ。

ト驚き、逃げに掛る後ろより、一太刀に斬り倒し、燭臺の灯で刀をかざし見て、

次郎　ハテ、籠釣瓶は、

ト拔身を逃すな、道具替りの知らせ、
よく斬れるなア。
トニッタリ思入、本釣鐘、合方にて、
　道具廻る。

本舞臺上手九尺の二階家、本庇、前側手摺り、戸袋を取り附け、一面に障子を建て切り、是より下手へ棟の變りし本家根、舞臺前忍び返し、正面廓内の家々の屋根を見たる中遠見、灯入り、切り出しの滿月、總て立花屋裏二階、家根上の體。風の音にて、道具止る。

ト本釣鐘、凄き合方になり、二階の障子を開け、次郎左衞門拔身を提げて窺ひ出る、手摺りを越え家根へ出る、後ろより與助そつと出て抱き止めるを振り拂ひ、立廻つて前の屋根より突き落す、與助起き上がるを眉間を斬られ倒れる、次郎左衞門手摺りへ踏みかけ、きつと見得、此時軒下の方裏手の方にて、「人殺し〳〵」と呼ぶ聲聞える、次郎左衞門家根傳ひに下手へ來る、此時上下より大勢出て、

鳶一　亂暴者が家根へ出たぞ、怪我をするな〳〵。

鳶二　辷る樣に水を上げろ〳〵。

鳶三　階子を此方へ廻せ。

鳶四　伏見町でも家根へ水を上げろ。

ト口々に叫ぶ、次郎左衞門は降り口に迷ふこなし、是と同時に諸方より龍吐水の水を上げる、二階の方より若者牛次、棒を持つて打つて掛る、一寸立廻つて斬り倒される、鳶六人手鍵を持つて上つて來て、

六人　ソレ、疊んでしまへ。

ト六人一度に打つて掛る、鐵棒の音をあしらひ、六人を相手に立廻りよろしく、ト、次郎左衞門足を踏み辷らして落ちる、是にて知らせなしに、
　道具廻る。

本舞臺上手土藏の張物、此續き黑板塀、見越しの松、江戸町二丁目と記せし用水桶、總て伏見町横手の體、爰に龍吐水を二つ置き、茶屋の若い者、鳶の者多勢長鍵六尺棒なぞ持つて立ち掛り居る、鐵棒の音にて道具止る。

若一　裏の方には見えなくなつたが、仲の町の方へ出やアしめえか。

鶯〇　モシ手に餘つたら爲方がねえ、家根をめくつて落しを拵へ、天井へ突き落してふん捕まへるより爲方がねえ。
若二　モウ大門は締め切つて、外から來る者はねえが、仲の町は大混雜、江戸町の四つ角は往來止めをしてしまつた。
鶯□　田舍の奴だと云ふ事だから、身體は重いに違えねえが、只浮雲いのは其野郎が、めつぽういゝ刀を振り廻すといふ事だ。
若三　なんでも銘は籠釣瓶とか云つて、側へ寄ると直ぐに斬れると云ふことだ。
若四　そいつア一番險のんだ。
鶯△　日が暮れたから、突然を喰ふといけねえぞ。
鶯×　よく家根に氣をつけろ。
トツヤ／＼云つてゐる、下手より榮之丞、尻はし折り大小、權八同じく半棒を持つて出て、
榮之　是は皆さん御苦勞で御座つた、シテ亂暴者は何れへ參つたナ。
鶯〇　オ、榮之丞さん、とんだ事になりました。
權八　ナニ、とんだ事とは。
一若　八ツ橋花魁が斬られました。

權八　夫ぢやアいつか花魁が、愛想盡かしを云つた佐野の野郎に違えねえ。
榮之　シテ八ツ橋の死骸は、どこにあります。
若二　立花屋の二階に御座いませうよ。
榮之　そんなら是から立花屋へ。
ト上手へ行き掛ける、此時後ろの黒塀の潜りより、次郎左衞門出て、
次郎　其八ツ橋の死骸をやるから、二人共是へ來い。
榮之　ナニ、八ツ橋の死骸とは。
權八　わりやア佐野の次郎左衞門だナ。
皆々　ソリヤこそ出た。
ト皆々打つて掛る、混雜の立廻り、次郎左衞門斬り拂ふ、皆々上下へ逃げ込む、跡三人きつとなつて、
榮之　そんなら其方が、人殺しだナ。
次郎　榮之丞といふ名を聞いて、戀の敵と呼び止めたは、いかにも佐野の次郎左衞門、見覺えのある二人の面ざし、八ツ橋の冥途の道連れ、この籠釣瓶の刀に掛け、此世の引導渡してくれる。、
榮之　ヤア水も漏らさぬ籠釣瓶で、花の盛りの八ツ橋を散らせしとあるからは、繋がる緣に此所で月の光りを便と

して、命のやり取りいたさにやならぬ。

權八　其尻馬に釣鐘權八、撞き出す命の捨鐘に、月に紛れた濡れ烏、一番羽がひを押へようと籠に因みの伏見町、モウ爰迄追ひ込んだら、ジタバタさせる事ぢやアねえ。

次郎　假令何人來樣とも、腕に覺えの鞍馬本流、

榮之　血の雨降らすか、生け捕るか、

權八　二ツに一ツの命のやり取り、

次郎　何を小癪な。

ト三人立廻り、此中上下にてワヤ〳〵いふ、權八一ト刀斬られ、下に居る、榮之丞も肩先きを斬られ、次郎左衞門刀を振り上げる見得を、道具替りの知らせ、鐵棒の音激しく。

道具廻る。

本舞臺眞中九尺、大門の裏を見たる心にて、兩扉を締め閂を挿し、左右板塀上手引手茶屋の戸を下ろしたる書割の張物にて見切り、下手九尺常足の二重、本庇、前づら簾を卷き上げ會所の高張提灯を燈し、此外長ちやうちん澤山、此外非常道具よろしく飾りつけ、總て吉原大門口會所の體、二重に町同心赤井黍助十手を持ち立身、この前後に手先町惣代家主など、多勢控へて居る。鐵棒の音にて道具止る。

赤井　コリヤ、江戸町の模樣はどうだ。

惣一　立花屋の裏手の家根から、辷り落ちまして御座りますが、突然に江戸町二丁目の中程へ出ましたさうで御座ります。

惣二　數は分りませんが、餘程怪我人が御座りますとの事で、廓内惣出で御座りますから、今に捕り押へます事で御座りませう。

赤井　精々心付けて一刻も早く、捕り押へる樣にいたせ。

惣一　畏りまして御座います。

ト此時多勢は向うを見て、

地一　ヤ、此方へやつて來たぞ。

地二　ナニ、此方へ來た。

赤井　氣を付けろ。

ト皆々身構へする、向うより鳶の者六人、長鳶にて次郎左衞門と立廻りながら出て、

鳶○　わつちがかう追ひ詰めれば、

鳶△　逃げようッても、逃がしやアしねえ。

次郎　何を。

ト立廻りながら舞臺へ來て、鳶の者多勢になり、立廻りの中階子を持ち出し、階子を使ひ、立廻り充分あつてト、次郎左衞門、勞れし思入にて躓くを、のし掛つて階子にて組み伏せ、刀を打ち落す、泰助はツカツカと側へ寄つて繩を掛け、

赤井　ソレ、引つ立てろ。

手先　サア立て。

ト次郎左衞門靜かに立上がり、

次郎　是にて、思ひ置く事なし。

赤井　名主方へ、引つ立てろ。

次郎　決して御法は、

ト前へ踏み出すを、木の頭。

背きませぬ。

ト手先きに引つ立てられて行く。

幕

籠釣瓶花街醉醒（終り）

一世に三度仇討せしと
其名高田の實說を
探つて正す櫻癡居士の
考案による義士の外傳
太閤軍記の二番目へ
讀切物に取しくみ候

復讐談高田馬場



復讐談高田馬場　二幕

序幕　神樂坂菅野邸の場
　　　八丁堀裏借家の場

大切　高田八幡社頭の場
　　　高田馬場仇討の場

役名――八百屋太郎助、菅野下女お丸、中津川祐範、門弟村上庄左衞門、同村上庄九郎、菅野六郎右衞門、同若徒惣平、饅屋の出前持、酒屋の丁稚、饂飩賣婆アおよく、中山安兵衞、大工吉五郎、左官興吉、家主嘉兵衞、參詣人三人、茶屋女お春、堀部彌兵衞、同妻お秋、同娘お妙、同下女おまつ、中間角平、中津川門弟大勢。

本舞臺四間通し中足の二重、本庇本緣附き眞中石の沓脱ぎ、上の方一間の障子家體、下の方建仁寺垣、いつもの所枝折門の庭口、此脇竹の四つ目垣の境界、此間玄關へ通ふ心にて出入りあり、二重正面上の方一間の床の間、續いて三尺の地袋、違ひ棚、下の方石摺りの襖の出入り。總て旗本屋敷中家中長家菅野住居の體。二重に下女お丸、鏡臺に向ひ髮を撫で付けてゐる。庭口に八百屋太郎助やつしなり、荷を下ろし立ちかゝりゐる。此模樣、合方調べにて幕明く。

太郎　八百屋でございい。

ト云へどお丸は夢中になつて髮を撫でつけてゐる、太郎助大きな聲にて、

八百屋はよろしう。

トお丸此聲にて驚いて、

お丸　アレなんだねえ八百屋かえ、お臺所へ廻らないでお庭の口から不躾な、今日は御新造樣がお留守だから、八百屋に御用はないよ。

太郎　お臺所へ廻つても、誰も居ないからお庭へ來たが、お丸どんは惣平さんに夏の牡丹餅で居ると見えて、鏡へ向つて髮を撫で、顏を短くしたり長くしたり、大層お留守におめかしだね。

お丸　アレ人聞きの悪い事を、止しておくれ、不義はお家の堅い御法度、惣平どんに惚れる樣なそんなみだらな女ぢやアないよ。
太郎　惚れなければ夫でいゝが、惣平さんが前町の豆腐屋の娘と出來て居る事を、お前は定めて知つて居るだらうね。
　ト氣を持たせる樣に云ふ。
お丸　エ、アノ惣平どんが。
　ト氣の揉めるこなしにて、
夫はお前、本當の事かえ。
太郎　なんで嘘を吐くものか、今日もお家に見えないのは必定前町の豆腐屋へ行つて、お娘にちやら附いて居ると見える。
お丸　エ、憎らしい惣平づら、私が是程思つてゐるのに、イエアノ、私が是程お家の法度を守つて居るのに、紊らをするとは、呆れるわいなア。
太郎　家へ歸つたら、能くこなたから異見をして上げなさい。
　ト横を向いて舌を出し、
八百屋でござい、八百屋でござい。

　ト呼びながら下手へはひる。お丸氣の揉めるこなしにて、
お丸　道理でお實家へ御新造樣を、お送り申して行つたにしては、歸りが遲いと思つて居た。オ、此間に豆腐屋へ行つて見て來よう。
　トツカ〳〵と立つて又立止まり、
どつこい、御新造樣の鏡臺を、此儘置いては露顯の基、原の通りにして置かねばならぬ。
　ト鏡臺を持つて上手障子家體の中へはひる。稽古唄きつばりとなり、向うより中津川祐範、羽織袴大小劍學者の拵へ、村上庄左衞門、同庄九郎、兩人共羽織袴大小、門弟にて出來り、花道よき所に止まりて、
祐範　門にて聞きし菅野の宅は、向うの長屋と相見えるが、どうか宅に居ればよいが。
庄左　そこは拔からぬ拙者故、小戻りをして門番の親仁めに聞きましたら、
庄九　今日は外出いたさぬと申したからは、確かに在宅。
祐範　然らば案内申し入れよう。
　ト三人舞臺へ來て、庄九郎駈け拔けて玄關口へ立ちて、
庄九　頼もう。

お丸　どうれ。
ト答へ、玄關へ出て、
庄九　何方からお出でなさりました。
赤坂田町より中津川祐範と申す者が、參つたと傳へて下され。
お丸　畏りました。
ト上手屋體へはひる。引き違へて菅野六郎右衞門、羽織着流し、大小にて出る、お丸も共に出る、六郎右衞門お丸に向ひ、
六郎　是へお通し申せ。
ト　お丸玄關へ出て、
お丸　お通り下さりませ。
ト三人は二重へ通り、
祐範　コレは御主人には、能くぞ御在宅いたされた。
六郎　コレは〳〵中津川殿、見苦しき手前宅へよくぞ御入來、まづ〳〵あれへお通り下され。
祐範　御免下され。（ト三人上手へ通り住ふ。）
六郎　お茶煙草盆を持つて參れ。
お丸　ハイ。ト奧へはひる。
祐範　イヤ必ずお構ひ下さるな、初めて御宅へ參つたが、門弟共に荒らされまする、拙者宅とは事變り、お立派な事でござるな。
六郎　何として、御覽の通りの手狹にて、其仰せでは大きに痛み入りまする。
庄左　どうか先生我々共を、
庄六　お引き合せ下さりませう。
祐範　承知いたした。イヤなに、六郎右衞門殿、是なるは拙者の門弟、村上庄左衞門、同苗庄九郎と申す者、以後お見知り下され。
六郎　是は初めて御意得まする、此方とても御同樣、以後はお見知り下されい。
ト双方挨拶ある、爰へ奧より、お丸茶煙草盆を持つて出て、其所へ置き一寸考へて、
お丸　どれが先生で御座ります。
六郎　白痴め、夫へ置いて立て〳〵。
ト　お丸奧へはひる。
祐範　イヤお叱りなさるな、兎角物馴れませぬ女中なぞには、コリヤ有勝ちな事で御座る。
六郎　此三月參りました、山出し下女、イヤ我雑で困り切りまする。シテ今日の御入來はいかなる御用で御座るよ

な。
祐範　參上せしは別儀でない、どうか拙者の一分を、立ててお貰ひ申したい。
六郎　何と云はるゝ。
ト合方替つて、
祐範　御承知の如く拙者儀は、當お屋敷の御本家たる溝口家へ、御指南番にお抱へ入れに相成る處、先達ての御前試合ひに御分家より參られし、其許に打ち込まれ、後れを取りし夫故に、殿の御不興受けし上お抱へ入れも夫迄にて御沙汰止みと相成りしは、此身に取つては大きな恥辱、夫より今迄通ひ居りし門弟共は次第に減じ、此儘に打ち過ぎなば多年の間の名譽を、落すのみか生活の道にもハタと差支へ、江戸表にて道場を開いて居られぬ仕誼ともなれば、誠貴殿に拙者の腕前、及ばぬ事を確かめ度く、今日お宅へ參りしは改め再度の立會ひを、願ふ心で參つて御座る、御迷惑でも菅野氏、御承引が願ひ度い。
ト六郎右衛門思入あつて、
六郎　何事の御入來かと、思ひの外なる其お頼み、ソリヤ拙者もアノ節に、前以て其許からお頼みにても御座つたら、辭退いたしてお相人に出まじきものを御本家の、殿の仰せにもだし難くお相手に出て其許の、御身分にも拘はる程の勝ちを得たるは生兵法、お恨みあつては恐れ入る、平に御用捨下されたい。
祐範　イヤ其樣にお詫びでは、拙者が却つて面目ない、誠貴殿が拙者より劍道お勝れなさるゝか、又は時のはずみにてアノ節勝利を得られしか夫を承知がいたしたい。
六郎　勝負は時の運にして、今日是にて貴殿と立會ひ拙者が脆く打ち据ゑられ、貴殿のお胸が晴るゝか知らぬが、夫は無益な勝負にて最早大事な御前試合に、後れを取られし後にては、再び御本家溝口殿へ、お召し出しにもなるまじければお諦めを願ひ度し、又夫が爲御門弟が減るとあつてはお氣の毒、宅へ御座つて拙者と立會ひ、速かに打ち勝ちしと、仰せられても苦しからず、負けた分にて拙者めも聞かれし節は程能く申さう、貴殿と違ひ劍道を表にいたす拙者ならねば自宅に於いてお立會は、近頃迷惑至極で御座る。
祐範　イ、ヤ試合ひもいたさずして、負けた分にしてやらうとは、奇怪至極な其詞、左樣な卑怯はお頼み申さぬ。
六郎　お頼みなくば夫迄の事、拙者も主人を持ちし身に無益な試合ひは望まねば貴殿のお頼み承引いたさぬ、お茶

でも喫つてお歸りなされい。

祐範　スリヤ主持ち故に一命が大事とあつて斷わるとか。

六郎　まづ〳〵左樣なもので御座る。

庄左　先生のお詞中口出しいたすは如何なれど、左程命が大事にて試合をいたすが怖いとなれば、アノ時勝ちしは時のはずみ、再び試合ひをいたしては所詮及ばぬ腕前故、免してくれとの詫び狀を書かせて夫で御勘辨を、なさるとしては、何うで御座らう。

庄九　コリヤ能い所へ心附かれた、さすれば夫を道場の正面へ張り門弟へ、示して恥辱を雪ぎなば此場で試合ひをいたさずとも、よき面晴れと申すもの、負けた積りで居てやらうと云はるゝ程なら一札出しても同じ道理と申すもの。

祐範　何樣夫は宜しからう、如何で御座る菅野殿、證文張つて詫びさつしやるか。

六郎　イヤ、證文は出し申さぬ。

庄左　スリヤ不承知ぢやと、

庄九　云はるゝか。

六郎　いかにも、夫は大不承知、御前試合ひに不覺を取り、お召抱へも止めとなり、門弟迄が日々に減り、生活の道に差支へると承はるも氣の毒故、再度の試合ひに勝ちしと云はゞ、聞き流しにして置くと云ひしは武士の情と云ふもの、夫に附け入り負けしと云ふ詫び證文を出せなぞとは、無禮至極な申し分、自宅で試合ひを斷るも、主人を憚る家來の遠慮、失禮ながら中津川氏、貴殿の手並みは先達ての御前試合ひで承知いたせば、老い年寄つても六郎右衛門、恐るゝ事は少しも御座らぬ、最早勝ちしと云はれるとも、聞き流しにはいたし申さぬ。

　トきつと云ふ。

祐範　主人を憚る遠慮とあらば、我が道場へ出張るとも、又は手廣き場所を選び、晴れの勝負をいたされよ、さすれば勝ちしも負けたるも他人の見る前明白なれば、夫を否とは云はれまい。

六郎　オ、屋敷中にてなき事なら、否とは申さぬ再度の試合ひ、いかにも勝負を決し申さん。

庄左　コリヤ、臆病武士も張り合ひにて、

庄九　強くなつたは面白い。

祐範　何處此處と申さうより、此宅よりは遠からぬ、高田の馬場と場所を定め、明日共云はず即刻に、彼處で勝負を決し度いが、貴殿は猶豫を望まるゝかの。

六郎　イヤ此方も武士の意地、出張ると申せば何時でも、決して否とは申さぬが、劍道指南にあらぬ身は、門弟とては一人もなく只一身の六郎右衛門、助太刀なぞを頼まれては、卑怯の至りと存じ申す。

祐範　其お案じには及ばぬ事、元より勝負は一騎打ち、人を頼みにいたし申さぬ、然らば今日何時に、高田の馬場へ出向かるゝナ。

六郎　直ぐにても宜しいが、今朝妻が實家方に病人あつて出向き居れば、次第を一封書き送り直ぐに後より出向き申さん。

庄左　最早彼れ是れ正午頃なれば、

庄九　試合ひの時刻は未刻と定め、

六郎　左様御座れば中津川氏、

祐範　お先きへ參つてお待ち申さう。

ト三人思入あつて立ち上がる。

六郎　お客人のお歸りぢやぞ。

ト奥よりお丸出て、六郎右衛門と共に玄關迄見送る、三人は戸外へ出て、

祐範　然らばお出でを、

三人　お待ち申す。

ト出の唄になり、三人向うへはひる。

お丸　旦那様には何方へか、お出でゝ御座りますか。

六郎　惣平はいかゞせしか、手紙を認め居る間、歸らば知らしてくりやれ。

お丸　畏りました。

六郎　多分は彼も眞劍にて、

お丸　エ、、

六郎　イヤ午飯の支度をいたし置け。

ト合方にて、上手の家體へはひる。是と一緒に向うより若黨惣平、着流し一本ざしにて出て、直ぐに舞臺へ來て、庭口よりはひる。お丸は是を見てツカ〳〵と惣平のそばへ來る。

惣平　お丸どん、何所へ行くのだ。

お丸　浮氣者の惣平さん、よく今時分ノメ〳〵と、すました顏で歸んなすつた。

惣平　エ、歸り早々何をいふのだ。

お丸　何を云ふもないものだ、今迄前町の豆腐屋に、豆を食べて居たくせに。

惣平　御新造様のお實家方へ御病人があつてお見舞にお出でなさる、お供をして今戻つたのに豆腐屋へ行つたなぞ

と、飛んでもない事を云つたものだ。

お丸　アレ白々しい其顔つき、お前平常何とお云ひだ。不義はお家の御法度故、男と女と一つに居て噺しをしては惡いなぞと、眞面目くさつた顏をしながら、能く前町の豆腐屋の娘と、大それた事をしなすつた。乾度旦那樣に告げねばならぬ。

惣平　ハ、、、、誰がそんな嘘を云つたか、夫は大方平常から此方が私へじやらくらして、埓らな事を仕掛けるから、其所へ附け込み豆腐屋の娘と譯でもある樣に、焚きつけられたに違ひない。

お丸　豆腐屋の娘だとて、私だとて同じ女、夫が嘘なら惣平どん、私の頼みを聞いておくれな。

惣平　エ、呆れ返つたみだら千萬、俺はそんな事は大嫌ひだ。

お丸　ホンにつれない惣平どん、平常お菜の盛り樣でも私が思ふ心の中、お前は察してくれもせず、嫌ふと云ふは情ない。

惣平　エ、嫌らしい其恨み、蒼蠅いふと旦那樣へ、此方で埓らを告げねばならぬ。

お丸　恩知らずメ、覺えておいで。

トツンとして奥へはひる。

惣平　やう／＼此節江戸馴れると、色氣づくには困りはてる。

ト合方きつぱりとなり、上手の家體より六郎右衛門封じた手紙を持つて出て、

六郎　オ、惣平戻つたか、大分遲かつたが、病人は何うぢや。

惣平　只今戻つて參りましたが、御新造樣のお妹御もお案じ申した程でなく、追々快い方でいらつしやいますが、お醫者樣へお藥取りを頼まれまして御座ります故、大きに遲うなりまして御座ります。

六郎　夫は快い方で仕合せぢや、夫では今宵は泊らずに歸ると云つたかどうぢや。

惣平　あちら樣から送らせて、日暮れ前にはお歸し申すと仰しやいまして御座ります。

六郎　歸るとあれば夫もよし、扨其方に聞きたいのは、勘當をした甥の安兵衛、今は何處に居るとか云つたナ。

惣平　ヘイ安兵衛樣は只今では、八丁堀邊にお住居でござります。

六郎　どうか彼れの居所を尋ね、手紙を屆けて貰ひたいが、

放蕩無頼の安兵衞故、急に居所が知れゝばよいが。
惣平　夫は拙者が諸所方々で聞き合せ、屹度お尋ね申しますれば、片時も早く御勘當の許れます樣に旦那樣、共々お願ひ申しまする。
六郎　不幸にして世繼ぎもなく、耳順の坂を越しながら彼が酒亂にあらざれば、家督にいたす心にて一昨年國許から、江戸へ便つて參りし故半年餘りも宅へ置きしが、アノ酒亂では我が家督を讓る譯にも相成らぬ。
惣平　夫も今では一年越し御浪人をなされまして、御運上を遊ばしますから、一旦の御立腹も皆御酒故と思召され、御勘當をお許しある樣、どうぞお願ひ申しまする。
六郎　何は然れ此手紙を、急に屆けて貰ひたいから、晝食をして早速に、在所を尋ねて貰ひたい。
惣平　イエ彼方樣で只今方、御飯を頂戴いたしましたから、直ぐに行つて參りませう。
六郎　然らばどうかさうしてくりやれ。（ト封じ文を渡し）差し置きでよいから、安兵衞に確と渡して貰ひたい。
惣平　よろしう御座ります。（ト一封を懷中して）何うか早速お在所が、知れて旦那のお手紙を。
六郎　夫では惣平頼んだぞ。

惣平　早速行つて參ります。（ト惣平奥へはひる。）
六郎　一騎打ちとは申せども、多分相手は多人數の門弟共が助太刀なし、品によつては眞劍にて立會はんも知れざれば、我が亡き後は實家方に頼みの手紙を書き送り、勘當なせど安兵衞に遺品の一封遣はし置けば、是にて思ひ置く事なし。
ト此中下手より惣平庭の外へ出て、
惣平　此手紙を安兵衞樣に急いでお送りなさるゝとは、お心解けて勘當のお詫びの叶ふ時節なるか。
六郎　とは云へ主人に仕へる身で、年甲斐もなく眞劍の、試合ひに命を果たすとは。
惣平　思へば今日のお使ひは、勇む心のお使者の役。
六郎　夫も餘儀なき武士の意地。
惣平　早速在り家が知れゝばよいが。
六郎　どうか無難に打ち勝つて。
惣平　勘當お詫びが。
六惣　濟めばよいが。
ト心々のこなし、六郎左衞門庭の外へ心附き、
六郎　惣平、まだ行かぬか。
惣平　イエ、直ぐに參りまする。

ト稽古唄になり、惣平向うへはひる。お丸奥より出て、

お丸　旦那様、御飯は如何で御座ります。

六郎　オヽモウ時刻ぢや、出してくりやれ。

ト立ち上がる、此模様、合方、時の鐘にて、　道具廻る。

本舞臺一面の平舞臺、上の方折廻し反故張りの障子家體、正面上手一間の押入れ、戸棚、下の方鼠の破れ壁、このつま臺所の心にて中窓のある破れ壁・いつもの所門口、此外正面隣りの家の入口、下手惣雪隱の前側の心にて板塀、此側に芥溜め、總て八丁堀裏長家の體、舞臺よき所に今戸燒きの火鉢、手桶なぞ、凡て事足らぬ勝手道具、だらしなく並べ、戸外に合長家の婆アおよく、世話拵へ、鰻屋の出前持ち岡持ちを提げ、酒屋の丁稚一升樽を提げ、立ち掛かり居る見得。オイトコ節の唄、飴屋の鳴物にて道具止る。

よく　一文無しの爰の家へ、鰻やお酒を持ち込むとは、又喧嘩でもあつたか知らぬが、勘定は濟んで居るのかえ。

出前　お連れのお客が代濟みだから心配するなと云ひました。

丁稚　安兵衛さんばかりぢやア、うつかり持つちやア來られないが、代濟みだから持つて來たのだ。

よく　勘定さへ濟んで居るなら、だらしのない爰の家、私が確かに預かるから、お酒も鰻も置いておいで。

出前　どうか器物の無くならない樣にお頼み申しますよ。

よく　隣の家は私の家だから、明いたら直ぐに家に持つて行つて、無くならない樣にして置くよ。

出前　どうぞ何分お願ひ申します。

丁稚　樽も無くならない樣に、預かつて置いておくんなさい。

よく　アイ／＼、承知だよ。

丁稚　安兵衛さんはどうしたんだらう。

出前　モウ歸つて來さうなものだ。

ト兩人下手へはひる。

よく　アヽ、プン／＼といゝ匂ひだ、預かり賃に今の中鰻とお酒をはしけて置かうか。

ト隣りの家へはひる。右の唄にて、向うより中山安兵衛、色の變りし黑小袖、朱鞘の大小、酒に醉ひしこなし、後より大工吉五郎、左官與吉、何れも印半纏に羽

織を着たる拵へにて出で來り、花道に止り、

安兵　コレサ、俺に腹さん／＼厄介を掛けて、途中で逃げようとは、ずるい手合だ。家へ行つて飲み直すから、附合つてくれ。

吉五　有難う御座いますが、店の用で今日は是非とも木場迄行かにやアなりませんから、是で御免を蒙ります。

與吉　私も是から二三軒店廻りをしにやアならねえから、勝手がましいが、是でお別れ申しませう。

安兵　コレ、仲人は時の氏神で有難えといふ事を忘れたか。

吉五　夫は忘れやアしませんが、大事な店をしくじつては、大工で飯が喰へませんから、是で勘辨しておくんなせえ。

安兵　イヤ／＼、勘辨相成らぬ。俺が仲人にはひらずば、先刻から摑み合ひ、頭でも打ち割るか、腕でも噛る所であらう、怪我人になつて出入り場廻りや、店の用が足りると思ふか。

與吉　夫だからお禮に御馳走をして、家へ迄酒と肴が屆けてある、夫で勘辨して下せえ。

安兵　エ、愚圖々々云はずと來いと云ふに。

ト右の鳴物になり、兩人を連れて門口迄來る、隣りの戸を開けておよく出て、

よく　オヤ安兵衛さんお歸りかえ、今方酒屋と鰻屋から誂へ物が屆いたから、私の家へ預かつて置いたよ。

安兵　夫は大きに世話であつた。代濟みだと云つたらうナ。

よく　私も夫を案じたから、聞いたら代は濟んだと云つたよ。

安兵　二人共用が濟んだから、勝手に用を達すがいゝ。

ト手を放す。

吉五　夫ぢやア代濟みの證人に、

與吉　爰迄連れて來られたのか。

安兵　又馳走がしたくなつたら、何日でも喧嘩をするがよい、俺が仲人にはひつてやるぞ。

吉五　こんな仲人は眞平御免だ。

與吉　とんだ目に逢ふものだ。

ト兩人呟きながら、向うへはひる。

安兵　實は此方も彼奴等の居ねえ方が勝手といふものだ。

ト内へはひる、およくも一緒にはひつて、

よく　夫では今日も喧嘩の仲人で、お酒に有り付いたかえ。

安兵　此頃何處にも喧嘩がないで、旨え酒も飲めねえ所、今日此先きの普請場で大工と左官が出入りの事でゴタ付いて居る中へはひり、まア兎も角もと鰻屋へ連れ込み、

手打ちをさせ、たらふく飲んだ上に家へ土産迄持ち込ましたが、代済みでねえと馬鹿を見るから、夫で二人を引つ張つて來たんだ。

よく　其散財が怖いので此節世間で喧嘩がなくなり、安兵衞さんは閑になつたと、私も噂に聞いて居たが、今日は大工や左官のお庇護で私迄が鰻とお酒だ。

安兵　ヤア、

よく　イエ何、鰻の蒲焼とお酒を確かに私が預かつて置いたよ。

安兵　鰻が一人前に酒が二升、是からゆつくり飲み直しだワ。

よく　今湯を沸かして置いたから、私の家で燗を附けよう。

安兵　イヤ燗なぞは面倒だ、樽ごと此方へ出してくれろ。

よく　イエ冷酒は、身體に毒だよ。

安兵　俺のからだには、却つて藥だ。

よく　ホンニお前は正覺坊だよ。

ト隣の内へはひる。

安兵　又酒をはしけようと思つて、彼奴に燗を附けられてたまるものか。

ト隣りより、およく岡持を下げて出て、

よく　安兵衞さん、是切りだよ。

安兵　オツト是れだ／＼。（ト岡持ちを開けて見て、）一分にしちやアたかい鰻だ。

よく　イエ、不漁だから其筈さ。

安兵　モウ三串程なけりやアならぬが、（ト樽を振つて見て、）ヤ、酒も二合ばかり少ねえ様だ。

よく　どうでもお客の代済み物は、割が損だから我慢おしよ。

安兵　ヘン、旨く云やアがらア。

よく　エ、。

安兵　ナニサ、飲むにやア手前より、新造の酌に限る様だ。

よく　昔の新造で、我慢をおしよ。

安兵　其所に丼があつた筈だ。

よく　取つて上げるから、まアお待ちよ。

ト是な唄になり、向うより家主嘉兵衞、役半纏、着流し、老けたる拵へにて、先きに立ち、以前の惣平附いて出て來て、花道にて、

嘉兵　留守にばかりして居るから、どうか家に居て呉れゝばいゝが。

惣平　御深切にお教へ下さいまして、御足勞で恐れ入ります。

ト兩人佛壇へ來て、嘉兵衞格子の中を覗き、

嘉兵　オ、喧嘩屋先生、家で御座つたか。

惣平　安兵衞樣、御機嫌よろしう。

ト兩人内へはひる。安兵衞酒を飮みながら、是を見て、

安兵　イヨウ、誰かと思へば惣平か、よく爰に居る事が知れて、尋ねてくれて忝い。

惣平　お家主の御深切で、やうく知れまして御座ります。

安兵　イヤ家主に聞かれては、俺の身の上がスッカリ分り面目次第もない譯だ。

嘉兵　立派な伯父御があると聞いて、私もなんとなく心嬉しく案内ながら出て來たが、又喧嘩でもあつたと見えていゝ機嫌に醉つてゐるな。

安兵　伯父があつても勘當され、出入りが出來ねば他人も同樣、併し家來が斯うやつて尋ねて異れたは忝い。

惣平　モシ安兵衞樣、お悦びなさりませ、いかなる譯か貴方の在所をお尋ね申し、手紙を屆けて異れとのお使ひ、コリヤ御勘當の許りまする時節が來たので御座りませう。

安兵　ナニ伯父上より、手紙が來たとか。

惣平　ヘエ差し置きでよい、確かに手渡しして來いと、仰しやりまして御座ります。

ト懷中より以前の手紙を出して渡す、安兵衞受取つて、

安兵　是は千萬忝い。

ト押し頂いて、懷中へ藏ふを見て、

惣平　ア、モシ安兵衞樣、いかなる御用か存じませぬが、早速御披見下さりませ。

安兵　ハテ伯父の手紙は開かずとも、毎時極りの酒の異見、禁酒したなら勘當許す、元の甥にしてやらうと、仰しやるのに違ひないが、其の辛抱が出來ぬから斯くの通りの浪人だ、折角今日は客を捕へ、よい心持ちに飮んだ酒も、手紙を讀めば醒めて終ふ、後で篤と讀むといたさう。

惣平　夫では貴方何うあつても、酒はお止めなさりませぬか。

安兵　其酒故に國にも居られず、江戸へ出て來た安兵衞だ、伯父の異見で止む程なら、喧嘩屋安兵衞と人に呼ばれ、ガラクタ長屋のこんな店に、我慢をして住んぢやア居ねえ、貴樣も態々使ひに來て尋ねてくれたは忝い、褒美に一杯やらうから、久し振りだ飮んで參れ。

惣平　イヤモウ御酒は強い禁物。エヽ腑甲斐ないお方だナア。

ト合方しんみりとなり、

御酒さへお上りなされねば御武藝といひ御手蹟といひ、人に勝れたお腕前に、立派な武家の若旦那、伯父御樣とてお世繼ぎの、御實子もなきお方故、繋がる御縁の甥御樣を、御養子にして御安心をなされ度いのが山々に、度度御異見なすつてもお聞き入れなきお身持ちに、餘儀なく去年御勘當、モウ半年にもなる事ゆゑ御流浪中に運上をなされた事と思召し、其のお手紙で御座りませうに、所詮禁酒は出來ぬから手紙を讀むには及ばぬとは、何たる事で御座ります、お心柄故斯うやつて、貧乏なさるは是非ないが、立派な御器量持ちながら、自ら好んで成り下がり、此お身持ちは何事ぞ、呆れて物が云はれませぬわえ。

ト愁ひのこなし、此中安兵衞に、手酌にて酒を飲み居て、

安兵　夫だから噺せぬのだ、伯父の堅藏を見習つて、貴樣迄其の頑固、何の事はねえ、伯父なぞは、酒を好んで飲む者は人間の部でないと思ひ、忌み嫌ふのが氣に喰はねえ、又人間が此世へ生れ、旨い酒を飲まぬと云ふは、生れ損ひと云ふものだ、下戸と上戸で氣が合はねば、異見をしても冗な事、サア〳〵そんな野暮を云はずと、貴樣も早く歸るがよい、アヽよい心持ちに醉つた〳〵。

ト有合ふ桝形の煙草盆を枕に寢る、嘉兵衞思入あつて、

嘉兵　聞いて居るのも氣の毒だが、何を云ふにも相手は生醉、斯う醉つて居ては爲方がない、其所は家主が年寄り役に、素面の時に家へ呼び、とつくり異見を爲ようから今日は此儘歸らつしやい。

惣平　お家主の手前と申し、拙者の過言もお咎めなく、其お詞は忝い、然らばどうか後々にて、宜しうお願ひ申しまする。

よく　折角斯うして尋ねて來て、お氣の毒で御座いますねえ。

惣平　まだ御挨拶もせなんだが、此方は何れのお人で御座るな。

よく　私はツイ此隣りに居る、長屋の者でございますよ。

惣平　それは〳〵お隣りたから、嘸御厄介で御座りませう、何分ともに醉どれのお世話をお願ひ申しまする。

よく　安兵衞さんが素面の時、私も異見をしませうから、

又出直してお出でなさいよ。
惣平　是は大きにお二人さん、おやかましう御座ります。
　ト唄になり、惣平思入あつて向うへはひる。
嘉兵　店賃の出所がやう／＼出來たと思つたら、俺も大きに的が外れた。
よく　醉つて居るからア、云ふものゝ、酒が醒めたら手紙を見て詫びをする氣になるかも知れない。私も共々勸め込み、伯父の所へ歸した上、世話賃でも取らにやアならない。
嘉兵　トキニ、まだ樽の酒と、鰻が殘つて居るぢやアねえか。
よく　殘つては居るけれど、又生醉が起きたらば、飲み直しをするに違ひない。
嘉兵　俺はまだ午飯前だから、酒と鰻は貰つて行かうよ。
よく　夫じやア私が困りますよ。
嘉兵　ナニ困る事があるものか、店賃代りに持つて行つたと、目が醒めたら斷つてくれ。
よく　飛んだ差引きがあるものだ。
嘉兵　爰等がぬかりのねえ所だ。
　ト酒樽と、鰻の岡持ちを持つて下手へはひる。

よく　ドレ、私もはしけた鰻で一杯やらうか。
　ト下手の長屋の中へはひる。是より床の淨瑠璃になる。
竹本〽歸り行く後にたゞひも長々と、寢入りて暫し夢の間の樂寢も醒むる安兵衛が、四方見廻し獨り言、
　ト安兵衛起き上がり、思入あつて、
安兵　ツイとろ／＼とする中に、皆歸つて仕舞つたと見える、夫は能いが酒も肴もまだたつびつにあつた筈だが、隣りの婆アめでも持つて行つたか、樽も岡持もそつくり見えぬワ。ア、醉醒めの次が飲み度い、と云つた所が、誰も居ず、ドレ御自身で召上がらうか。
〽狹き裏家の燧箱、勝手へ立つて手桶の水、柄杓へ汲んでグツと飲み、（ト水を飲み。）
ア、甘露々々、下戸の知らねえ水の味とは爰の事だ、そウ一杯引つ掛けようか。
〽充分飲んで我が胸をさする手先きに以前の書狀、
　ト文句の通りあつて、手先きに以前の手紙探り、懷中より取り出し、
伯父の所から惣平が、手紙を持つて尋ねて來て、他人の前で長たらしい異見の手紙は讀めぬから、後で見ようとドメ込んだが、實は酒故勘當され出入りの出來ぬ伯父の

手から手紙が來たとは懷かしい、どんな事が書いてある
か、早速拜見すると爲ようか。
〽何心なく封押し切り、讀む文體も澤山に、
ト竹笛の入りし床の合方になり、
「手紙を以て申入候、然らば其方儀昨年勘當いたし候
上は、菅野の家名いか樣に相成候共差構ひなき儀には
候得共、此度我等身に付き大難出來いたし候次第は、
先月御本家の御前へ召され、其節御指南番に御抱へ相成
るべき中津川祐範と云ふ者と武藝の試合仰せ附けられ、
君命默し難く試合に及び候所、運に叶ひ祐範に打ち
勝ち、御當家の御賞與に預かり候段面目此上も無之候
然るに右祐範は御召抱へも無駄に相成り、自宅町道場の
儀も追々門弟相減じ、生活の道立ち行き難く難儀に及び
候は、全く我等と立會の節不覺を取り候故と遺恨に
思ひ、高田の馬場に於て再度の試合申し込み候を、斷
り申候ては臆病未練にも相當り、武士の意氣地立ち難
く、今日午後八ツ時を約し、我等一人にて出張り候得共、
先方には門弟數多く有之、卑怯の助太刀致し候哉も難
計、自然眞劍の勝負にも立至り、我等の一命も是迄に候
間、

〽讀みも終らず安兵衞は、酒興も醒めて打ち驚き、
ト安兵衞びつくり思入、爰へ下手の門口より、およく
醉ひしこなしにて出て、内へはひり、
よく　安兵衞さん、どうお爲だえ。
ト云へども、耳にも掛けず、身支度しながら、
安兵　高田と云へば餘程の道、八ツを打つては間に合ふま
じ、ア、モウ何時であらうやら。
よく　夫ぢやア高田に喧嘩があるかえ。
〽折りから打ち出す太鼓の音、
ト八ツの太鼓をかすめて打ち出す、安兵衞指折り數へ、
安兵　オ、、アノ太鼓はお城の八ツ、宙を飛んで駈け附け
たら、間に合はぬ事ヨモあるまい。
よく　間に合はないから、今日はお止しよ。
安兵　間に合はぬとは、惡い辻占。
よく　ナニ辻占が惡いとは。
安兵　エ、喧しい、止めるな〳〵。
〽常に變りし安兵衞が、深き樣子も白髮のおよく、遣ら
じと止むるを突き退けて、
ト表へ出ようとするを、邪魔をして、トヾ門口にて足
へ縋る、

主、、邪魔なやつメ。

ト蹴返して、花道よき所迄行き、キツと見得。

〽飛ぶが如くに、

ト安兵衛逸散に向うへはひる、およく呆れて見送る、

三重、風の音にて、

幕

ト幕引附けると、宮神樂の鳴物にてツナギ、道具廻しにて、直ぐに引返す。

本舞臺平舞臺、正面石の鳥居、此後ろ總門を見たる中遠見、上の方聖天の坂を見せたる片遠見、下の方茶見世、眞中の所に床几二脚程置く、總て高田八幡社頭の體、爰に參詣人三人床几へ腰を掛け、茶屋娘お春、茶を出してゐる體、宮神樂の鳴物にて幕明く。

參〇　今日は此馬場で、劍術の試合があるとの事だが、

參△　夫は何處の連中の催しか。

參□　姉さん、お前知らないか。

お春　なんでも、赤坂田町の、中津川先生の催しとやらで御座います。

參〇　オヽ、中津川先生の催しか。

參△　何にしろ此頃ぢやア、門弟衆が大分減つたとやらいふ噂だが、

參三　兎も角も只の事だ、見て行かうか。

參一　夫がよからう。

お春　イエ、まだお早う御座いますよ。

參二　其中に八幡樣へお參りをしよう。

參三　茶代は爰へ置くよ。

お春　有難う御座います。

ト三人は茶代を置いて、鳥居の中へはひる。お春は片附けて茶店の中へはひる。合方大拍子の鳴物になり、向うより堀部彌兵衛、大名の留守居、羽織袴老人、妻お秋、娘お妙、何れも屋敷風の拵へ、下女お松、中間角助、日傘を持ち、供をして出て來り、花道にて、

彌兵　アレが牛込の總鎭守、高田八幡の總門ぢや。

お秋　承はれば八月十五日の祭禮には、放生會があるとの事、御迷惑でも舊蹟を、覺えて置き度う御座りますれば、參詣さして下さりませ。

お松　私共は目と鼻の、ツイ牛込で生れましたが、一度もお參りしませなんだが、お庇で今日はお參りが出來ます。

彌兵　いかにも源家の守護神にて、緣故があれば拜禮をい

たして行かねば相成らぬ。
ト此人數舞臺へ來て、
お秋　石段を上がりませねば、參詣のならぬ様子故、休んで參り度う存じます。
彌兵　夫もよからう。
ト床几へ掛ける、下女中間は下手にしやがんで居る、
お春店を出て、
お春　入らつしやいまし、試合ひを御見物で御座いますなら、まだお早う御座います、御緩りとお休みなされませ。
ト茶など出す。
彌兵　ナンぢや、今日は試合ひがあるとか
お春　ハイ、急に今日此馬場で、中津川先生とかいふお方が、試合ひをお催しなさいます。
彌兵　夫は能い所へ參り合した。
お妙　さうして夫は、何時頃から始めるので御座ります。
お春　相人のお方の參り次第、始めるとやら聞きましたが、一寸參つて私が様子を見て參りませう。（ト行き掛けるを止めて、）
彌兵　イヤ店を明けては氣の毒ぢや、角助見て參れ。
角助　ヘイ。

ト角助鳥居の中へ走りはひる。此時後ろの方にて螺貝の音聞え、太鼓を打つ。
お秋　アレ〳〵太鼓を打ちますのは、モウ始まると見えまする。
ト此時向うより、以前の惣平逸散に走り來て、息の切れるこなしにて、茶店の手桶を見て、
惣平　水を一杯振舞つて下さい。
ト聲を掛け、柄杓にて手桶の水を飲み、
アノ太鼓の聞えるのは、モウ試合ひが始まつたか、どうか旦那が勝つて呉れゝばいゝが。
ト云ひながら鳥居の中へ走り入る。彌兵衛是を見送り、
彌兵　今の小者の様子では、コリヤ尋常の試合でないわえ。
お妙　早く様子を聞き度いもので御座ります。
ト爰へ以前の角助戻つて來て、
角助　旦那様見て參りました。
彌兵　オヽ始まつたか、どうぢや〳〵。
角助　眞劍試合ひでおあぶなう御座いますから、お見合せなされませ。
お妙　さうしてどんな人達が、眞劍試合ひをしてゐるのぢや。

角助　六十以上の老人を一人取り卷いて居りましたが、お年寄りに似合はず揃々のお手利きと見えまして、一人も打ち込む者が御座いませぬが、其中に一度に斬つて掛かつて參りましたが、恐ろしいので私は跡を見ずに參りましたが、モウ今頃は老人のお方は死んだで御座りませう。

彌兵　たわけ者め、其試合ひを己れに見よとは申し附けぬ、始まつたらば知らせよと申してやつたを忘れたか。

角助　矢張常の試合ひならお知らせ申しに參りますが、眞劍の勝負故お怪我があつてはなりませぬから、夫でお知らせ申しませぬ。

彌兵　さばかりの事を、恐るゝ娘ではないわえ。

お妙　夫では今の小者の主人が、其御老人ではあるまいか。

彌兵　オ、大方はさうであらう、早く參つて次第を聞き、品に依つたら助太刀を。

お秋　ア、申し、滅多な事をなされましては。

彌兵　年こそとつたれ堀部彌兵衛、武士の情は。

　ト刀の柄を叩くを、道具替りの知らせ、

相互ひぢや。

　ト一同鳥居の方へ行く模樣、大拍子にて、

道具廻る

本舞臺平舞臺、後ろ通し小高き土手、八幡宮の社内を見たる書割り、諸所に松の立木、上の方に幕張り、總て高田の馬場の體、爰に六郎右衛門襷鉢卷、袴の股立を取り、刀を持ち諸所に疵を負ひし拵へにて立身、是を結範、庄左衛門、庄九郎其外門弟大勢同じく袴股立ち、襷鉢卷きにて取り卷き居る、下の方に惣平肌脱ぎにて、短かき刀を拔き、門弟五人を相手にしてゐる見得、太鼓、螺貝の音、早き合方にて道具止る。

六郎　ヤア眞劍試合や助太刀は、せぬと申して是へ引出し、卑怯を働く此振舞、我は是にて死するとも、覺悟の上は是非なき事、其方は武藝も未熟なれば、手出しをする事無用ぢやぞ。

惣平　よしや武藝は未熟でも貴方の御最期餘所に見て、手出しをせずに居られませうか、斯う云ふ事と知つたなら、安兵衛樣をお連れ申し、お助太刀でもさせようもの、知らぬ事とて差し置きの、手紙と聞いたばつかりに、異見の手紙と合點して讀まずにおしまひなされました。

六郎　ナニ、あの手紙を讀まぬとか。
　ト思入あつて、
イヤ勘當なせし甥なその、助太刀賴む身共でない、其方は早く立歸り、今一通の賴み状を妻の方へ屆けてくりやれ。
惣平　彼のお手紙をお丸めが、開封したので樣子が知れ、是へ駈け附け參りました。
祐範　ヤア聞き度くもない世迷言、今日の試合に勝てばよし、左もなき時は斯く／＼と、諜し合せし此方の手筈、望みとあらば下郎めも、共に息の根止めてくれん。
庄左　一度ならず二度迄も、
庄九　師匠に恥辱を與へし老ぼれ、
門一　門弟の身の捨て置かれず、
門二　後日に咎めを受くるとも、
門三　討つて捨てねば相成らぬ。
門四　叶はぬ所と、
皆々　觀念いたせ。
六郎　手疵は受けても六郎右衛門、ヤワカおめ／＼討たれんや。
皆々　こしやくな事を。

　ト是より烈しき立廻り、鳴物變つて双方よろしく、トド祐範と門弟皆々にて六郎右衛門と惣平を斬り倒し、止刀を刺す事あつて、
祐範　イデ此上は名乘つて出で、拙者が罪を引受けますれば、各方には片時も早く、お引取りを願ひます。
庄左　人をあやめし罪は同罪、
庄九　我々共も一同に、
門一　名乘つて出れば、
皆々　お連れ下さい。
祐範　然らば各一緒に御座れ。
　ト皆々身支度をして、上の方へ行きに掛かる、此時向う揚幕にて、
安兵　ヤア卑怯者、待つた／＼。
皆々　なんと。
　ト向うより、安兵衛走り出て、舞臺へ來る。皆々は是を見て、
祐範　シテ其方は、
皆々　何者なるぞ。
安兵　斯く止めたる身共こそ、汝が卑怯の刃に掛かりし、菅野が甥の中山安兵衛。

祐範　扨は先刻菅野めが勘當したと申したる、汝が甥の安兵衞なるか、見る影もなき浪人の、尾羽打ち枯らせし分際にて、劔の中も恐れずに飛び入る心が殊勝な奴、此世の思ひ出十分に、伯父の死骸に名殘りを惜しめ。

安兵　ア、遲かつた〳〵。コレ伯父ぢや人、お許し下され、貴方が日頃御異見の、酒に性根が狂つたばつかり、お知らせ下さるお手紙を、後れて讀んで時を違へ、此の御最期をさせまするは、皆安兵衞が不孝の科。

ト惣平の死骸を見て、

惣平其方も大忠臣、よく伯父上に助太刀して、健氣な最期をしてくれた、仇は目前安兵衞が、取つてやるから伯父諸共、草葉の蔭から見物いたせ。

ト祐範に向ひ、

遲刻なしても汝等が此場を去らず居つたが仕合せ、伯父と家來の追善に討ち取る術も易々と、見る間に本意を遂ぐるから、覺悟いたして夫へ直れ。

ト詰め寄る、祐範は嘲笑つて、

祐範　ハ、、、、長たらしい世迷言、不便ながらも返り討ちだ、覺悟極めて勝負いたせ。

庄左　併し酒故期に後れ、危ふい所を遁れたが、命冥加であらうのに。

庄九　態々好んで此中へ、駈け附け參つて飛び入るとは、よく〳〵運の盡きた奴。

門一　望みとあれば刷毛ついでに、

門二　息の根止めてやらうから、

門三　念佛唱へて、

皆々　夫へ出ろ。

安兵　念佛ならば其方で唱へ、合掌なして夫へ直れ。

皆々　何を。

ト安兵衞帶を締め直し、下緒を取つて襷にしようとして短きに當惑してゐる。此時下手より以前の彌兵衞先きに、お秋、お妙下女中間附いて出て來て、此體を見て、

彌兵　アイヤ其襷、お貸し申さう。コレ娘、其方のしごきを取つて上げろ。

お妙　お嫌であらうが是非共に、お役に立てたう御座ります。

お秋　トハ云へ女の腰帶は、穢れるなぞのお嫌ひは。

ト此間にお妙、手早くしごきを取る。

彌兵　イヤ遠慮は入らぬ、早く〳〵。

ト急き立つて、しごきを取つて角助に渡す、角助安兵
衛の方へ持つて行き、

角助　是をお掛け下さりませ。

ト出す、安兵衛思入あつて、

安兵　何れ何處の御方なるか、お禮は後にて申し上げん、御辭退申さず、借用いたす。

トしごきを一寸押し頂いて、手早く襷に掛ける事あつて、

サア、一人々々は面倒だ、一度に掛つて勝負をいたせ。

祐範　ソレ、各。

ト誂への早き合方に鳴物をあしらひ、門弟大勢を相手に烈しき立廻り十分あり、トヾ兩刀を使ふ、此中門弟の一人後ろの松の木へ登り、手裏劍を打たうと覘ふ、彌兵衛目早く見附けて、

彌兵　ソレ、手裏劍が參りますぞ。

安兵　心得た。

ト體を交す、角助は礫を取つて門弟に打ち附ける事などある、トヾ安兵衛一同を斬倒し、祐範薙刀にて討つて掛かるを、二三合して終に斬り伏せ、止刀を刺す、彌兵衛始終を見て、此時お秋お妙と共に側へ寄つて、

彌兵　イヤ、天晴れ勝れし其の御手練、手前ほとんと感心いたした。

安兵　お心添へにて斯くの首尾、是にて本意は遂げましたか、血汐に穢せし是なるしごき。

お秋　イエ、夫こそは此末々、結ぶ縁の贈り物、

お妙　其方へお置き下さりませ。

安兵　デモ名乘り出づる拙者故、

彌兵　其證人は我々夫婦、助太刀あつて老體を卑怯に討ちし者共故、御身は正しく敵討ち、奉行所迄も同道いたさう。

安兵　エヽ、スリヤ夫程迄に拙者めを。

彌兵　ハテ、聟がねには。

トお妙の顔を見る、お妙は恥かしきこなしにて顔をかくす。安兵衛ニツコリ笑ふ。双方見合つて、木の頭。

よい人物ぢや。

ト氣味合ひのこなし。此の模樣大拍子にて、

幕

復讐討高田馬場（終り）




塩原多助像



鹽原多助一代記（六幕）

序　幕

上州大原村茶店の場
同　藪坂峠谷間の場

役名——浪人鹽原角右衞門、百姓鹽原角右衞門、岸田屋宇之助實ハ岸田右内、茶店の亭主九兵衞、藥賣才助、百姓甚作、同茂十。鹽原女房おせい、同一子多助、茶店の女房おかの。

本舞臺眞中二間常足の二重、藁庇、正面上手反故張りの障子の出入口、下の方鼠壁、此前に圍爐裡を切り、自在竹へ鑵子を掛け、二重上の方在體の片遠見、よき所に左り沼田道と記したる石の道知るべ、二重下の方は後へ下げて、九尺葺おろしの下家、繩暖簾の入口、ずつと上下植込みの張物にて見切り、總て上州大原村茶見世の體。二重上手に茶店の女房おかの、糸車にて糸を取つて居る。平舞臺下の方に床几を二脚並べ、是に旅拵への藥賣り才六、荷を下ろし腰を掛け、茶を飲んでゐる。下手の床几に、土地の百姓甚作、茂十、鋤鍬を側へ置き煙草を喫んでゐる見得。在鄕唄にて幕明く。

甚作　コレおかのさん、大分精が出るの。

かの　稼がねえぢやア追ッ付かねえから、爲う事なしに稼ぐのさ。

茂十　イヤ精を出すはいゝけれど、客人が來てゐるに、つッ構はねえぢやア損だんべえ。

かの　ナアニ私等が店は、お前等の樣な茶を飲み倒す土地の手合だの、たま／＼お客が見世へ寄りやア、旅を歩かつしやる商人衆だから、構はねえ方が向うも勝手さ。

才六　イヤ全く爰のお婢のいふ通り、年が年中旅から旅を廻つて歩く藥賣りなぞは、旅中の費えを厭ふから、却て構つて貰はぬ方が、茶代も僅かで氣も張らねば、却て是が勝手でござる。

甚作　何にしろ圍爐裡の中へ、アニ燻べたか知んねえが、えぶくッて堪んねえ。

かの　今煙草の粉がは入つたから、夫でえぶいのだ、ゴホ

ンゴホン。（ト咳をする。）

才六　どんな煙草か、ア、えぶい、ゴホン〳〵。

茂十　此奴ア堪んねえ、ゴホン〳〵。

甚作　早く行くべえ〳〵。

ト百姓二人は咳をしながら、下手へはひる。

かの　アノ手合ひは油蟲で、茶を飲み倒して困るから今度辛子をいぶしました、モウいゝから藥屋さん、ゆつくり休んで行きなせえ。

ト團爐裡の火を直す。

才六　唐辛子を燻すとは、狐憑きでも落すやうだ。

かの　狐つきよりまだ惡い、彼奴等は寐入り豁でござる。

ト合方になり、向ふより岸田右內、旅商人、鞋絆草鞋がけにて風呂敷包みを脊負ひ出て來て花道に止り、

右內　思ひ掛けなく御主人御夫婦にお目に掛り、お詫びが叶つて有難いが、一つよければ又一つ、金才覺で苦勞な事ぢや。

ト右合方にて舞臺へ來て、

ハイ御免なさい、一服さして貰ひませう。

ト床几へ掛ける。

かの　お客さん入らつしやいまし、茶は其罐子にあるから勝手に汲んで飲んでくんなさい、

右內　ハイ〳〵、夫が勝手でござる。

ト煙草を喫んでゐる。

才六　夫では私はお暇しませう。

かの　まアいゝではかんせんか。

才六　まだ沼田の城下へ出て、日の暮れぬ中に得意を七八軒廻らねばならぬ、日の高い中に出掛けませう。

右內　富山の藥屋さん、夫では是からお前さんは沼田の御城下へ、お出でなさるか。

才六　ハイ左樣でございます、日光の方から山越しに、此方の方へ出て來ましたが、是から沼田の城下へ行きます。

右內　私もやつぱり日光から、此方の方へ出て來ましたが、貴方と違つて江戸の者は、意氣地が無くつていけません。

才六　イエ山國の者でも、此裏道はこたえます。

ト錢を出して床几の上に置き、

茶代は爰へ置きましたよ。

かの　是は有難うがんした。

才六　夫では江戸のお方、是でお別れ申します。

ト才六は荷を脊負ひ、上手へはひる。おかの立つて來て茶代を見て、

かの　通り一遍の旅商人は、茶代は二文と極つてゐるが、
　江戸のお方は又別段、まア御緩りとなせえまし。
右内　とんだ下駄を預けやアがる。
かの　エヽ、何でがんす。
右内　イヤ、此方の事よ。
　ト煙草を飲んでゐる。同じ合方にて、向うより百姓鹽原角右衛門、小紋の羽織、股引掛けにて出て來り花道にて、
角右　久し振りで遠方に出たためか、足が重くなつた樣だ九兵衛の店で一服やらうか。（ト舞臺へ來て）おかのどん、毎々健固か。
　ト床几へ掛ける。
かの　下新田の角右衛門さん、お珍しうがんすの。
角右　秋口になると用がえれえので、此方の方にも無沙汰アしたが、毎々繁昌でようがんすの。
かの　貴方もお健固でようがんす、何日此方へ出て御座らしツた、今煮花を入れて上げやんすから、緩り休んで行つてくんせえ。
　ト合方になり、下手より九兵衛、茶店の亭主にて裸馬を一疋曳いて出て來て、

九兵　おかの、茶は沸いて居るか、俺ア腹ア空いたから飯にしべえと、歸つて來たよ。
かの　あんだねえ、此人は、下新田の角右衛門さんも其所に御座るに、挨拶もしねえでさ。
九兵　イヤ角右衛門さん、がいに御不沙汰のウ仕やんしたが、恰度いゝ處でがんした。
角右　見りやア馬アフツ張つて、何處へ行くだね。
九兵　盛岡の市から出たと云つて、こんな馬ア買ひやんしたから、今おめえの方へ見せに行くべえと思つて居やんした。
角右　成程、是やアいゝ馬だ。
　ト馬をいろ／＼と調べる。
九兵　どんなに曳いて曳き廻はしても、足イ血溜り一つ出來ねえといふ、南部の三歳ものでがんすよ。（ト角右衛門此中調べ終つて）
角右　コリヤアいゝ馬だが、さうして賣り物かナ。
九兵　今買つて來たばかりだが、おめえさんなら安く賣るべえ
角右　値が安ければ買つてもいゝが、さうして幾干で賣らつしやる。

九兵　五兩五粒が半文缺けても賣らねえ馬でがんすから、夫でよくば讓りますべえ。

角右　五兩五粒とは値もいゝが、俺ア今千鳥村まで田地の掛け合ひに來たゞから、夫が相談にならにけりやア、歸りに引つ張つて歸るから、預かつて置いて下せえ。

九兵　ナア二お前さんなら、金の所は跡で屆けて呉れてもようがんす。

角右　イヤさうでねえ、極りのこんだ、手附けの金を打つて行くべえ。

九兵　ハア夫は御きんとうなこんでがんす。

ト是にて角右衞門懷より胴卷を出し、中より金を出さうとして金包みを落す。右内は是に目を附ける。角右衞門と顏見合はして、

右内　フ、、

角右　ハ、、

兩人　ハ、、、、。（ト空笑ひをして、）

角右　イヤ、うつかり落しやした。

ト金包みの封を切つて一兩出し、

夫ぢやア九兵衞どん、一兩手附けを打つて行くから、外へ賣らねえでくんせえ。

九兵　ハアようがんす、たしかに受取りやした。

角右　どう極るか、千鳥村へ行つて、田地の埒を明けて來べえ。（ト胴卷を懷へ入れる。）

かの　まアいゝぢやアがんせんか、今煮花がはひりやんすよ。

角右　イヤ又歸りに、ゆつくり寄りやんせう。

ト唄になり、角右衞門上手へはひる。右内、始終此樣子に目を附けて居て、トゞ思入あつて財布より四文錢を出し、

右内　お內儀さん、茶代は爰へ置きますよ。

かの　まア御緩りなせえまし。

トいふを耳にも掛けず、足早に上手へはひる。九兵衞夫婦は見送つて、

今のは江戸の商人だと云つたが、緩り休んで居る樣だつたが、急に駈け出して行つたのは、氣でも違つたんぢやアあるめえか。

九兵　江戸つ子は氣が早えから、うつかりすると、茶代を取り損ふぞ。

かの　夫でも江戸の商人だ、茶代を四文置いて行つたよ。

九兵　俺ア又此馬を賣つて、一兩べえ儲けるのだ。

かの　そんにお前儲けるかね。
九兵　おらも一寸仕合だか、馬も角右衛門どんに買はれり
やア仕合だ。
ト馬を前へ引き出し、
コレ青、われア仕合ものだぞ、下新田の角右衛門どんの
處へ行きやア、豆は喰ひ次第だし、足湯は遣つてくれる
し、手ッこに負へねえ、重い荷はわれがに附けはしねえ、
一生樂に暮らせるだ、ノウおかの。
かの　夫もおらが家へ買はれて來たから、此仕合をしやす
のだ。
九兵　思ひ掛けなく、一兩べえ儲かつた事だから、祝えに
一杯買つて來て貰ふべえか。
かの　飲むはええが、酒癖の惡い此方だから、毎度私ア泣
かされるだよ。
九兵　俺もだん〳〵取る年だ、モウ堅氣になつたから安心
せろよ、ドリヤ青の馳走に。
ト馬の手綱を手繰るを、道具替りのしらせ、
なりやすべえ。
ト驛鈴の合方にて、
道具廻る。

本舞臺正面岩山の中遠見、諸所に杉の立木、裾通り
熊笹の茂み、舞臺上下に清水の流れ、すツと上下袖
山の張物にて見切り、總て逆見村山間の體、山おろ
しにて道具止る。
ト向うより、角右衛門出て來り、花道にて、
角右　なんだか西の方が冠つて來たが、此山の中で雨に逢
つちやア、ダメなこんだ。
ト舞臺へ來る、後より右内走り來て、舞臺にて追ひつ
き、
右内　モシ〳〵、其所へ行く旦那え、一寸待つて下さいま
し。
角右　ハイ、何だね。
右内　ヤレ〳〵貴方は、大そうお早い足でございますナ。
角右　雨が降つて來さうだから、急いで歩いて來やんした
が、何ぞ用でもあるかの。
右内　お見忘れか知れませぬが、先刻大原村の茶店でお目
に懸つた、旅商人でござります。
角右　ア、さうだつた、思ひ出しやんした、其旅商人さん
が俺ア呼ばつて、何ぞ用でもがんすのか。

右内　お見掛け申して折り入つて、お頼み申す事があつてお跡を追つて参りました。

角右　アニ、頼み事があるとわえ。

右内　御迷惑でも、どうか暫く下に居て、お聞きなされて下さりませ。

ト角右衛門是非なく、不審さうに其所へしやがむ、木魂の合方になり、

私は元岸田右内と申してさる屋敷の藩中に勤めた者でござりまするが、仔細あつて町人となり、今は岸田屋宇之助と申す、旅商人でござりますが、勤めて居つた其主人が、故あつて浪人いたし、爰から近い小川村と申す所に逼塞いたし、困窮をして居りまして、昨日計らず出會ひし所、今五十兩の金さへあれば、世に出られるから家來の誼み、才覺してはくれまいかと、主人夫婦に頼まれましたが、只今の身分では、所詮才覺は出來ませんから、心配をして居る所へ、貴方が今方茶店の前で、お出しなすつた金子の重みは、七八十兩ある事は確かに見届け置きました、初めて出會つたお前樣に、こんな事を申すのも、濟まぬ事では御座りますが、來年の三月には、屹度御返濟いたしますから、夫迄どうか五十兩程、お貸しなされて下さりませぬか、お聞濟みさへ下さらば、其小川村の主人を連れ、お宅へ参つて私より、どんな手堅い證文でも、入れる樣にいたします。

ト角右衛門扨はといふ思入あつて、

角右　アンダ、五十兩貸してくんろ、魂消た事を云ふ奴だ、そんなら此頃噂に聞いた、我ア此山中の盗賊だナ。

ト懐中を押へて用心する。

右内　イエ盗賊のなんのといふ、そんな悪者ではございません、御得心さへ下されば、主人を連れてお宅へ参り、連印で拝借いたし、どんな高い利分でも、差し出す心で御座ります。

角右　エ、冗談もいゝ加減にしろ、五十兩といふ大金を、われが樣な初めて逢つた奴に、誰が貸してやんべえか、主人の爲だの出世の爲のと、出放題な嘘をぶつて、俺の懐へ目をつけても、其手を喰ふ樣な俺でねえぞ、此山道を越えるのは、何とも思はねえ土地の者だ、山の中でも名主もありやア地頭の陣屋も近くにあらア・サア俺がと一緒に歩びやアがれ。

ト口で強くいひながら、震へてゐる。

右内　サ其疑ひも無理ではないが、恥を明かして名を名乘

り、お願ひ申す程なれば、なんで僞り衒りませう、主人が世にさへ出ますれば、五十兩や百兩の金の工面は何でもなく出來る事故此お願ひ、何度お返し申しますから、願ひを聞いて下さいまし。

ト手を突いて頼む、角右衛門は弱身を見せまいと云ふこなしにて、

角右　エ、ウヌが樣な盜人は、以後の見せしめ斯うしてやるワ。

ト握りこぶしにて打つ。

右内　サアお打ちなさい、主人の爲なら私の身體はどんなに打たれましても、少しも厭ひに御座いません、其代りには主人の所へ御一緒に、お出でなすつて、願ひを聞いて下さいまし。

角右　エ、馬鹿野郎め、われが樣な人の物を目懸ける奴と何所へ一緒に行かれべえ、まだ爰を行きをらぬか、行かざアおのれ命がねえぞ。

ト足蹴にする、右内ムツとして、

右内　餘りと云へば。

ト思はず脇差しへ手を掛ける、角右衛門は驚いて後へ飛び退き、

角右　ナンダ、脇差しへ手を掛けたナ。

右内　エ、（ト心附き手を放し、）イエ斬る氣ではございません、貴方に存分打たれたら、金を貸して下さる事と、自由になつて居りましたに、打つた上に土足に掛け、願ひを聞いて下さらねば、刀に掛けても其金を、お借り申さにやなりません。

角右　コリヤ魂消たぞ、われが樣な生若え盜人に、アンで斬られて堪ろものか。

右内　夫では貴方はどうあつても、金は貸されぬと云はつしやるか。

角右　言はねえでも、知れたこんだ。

ト云ひながら、上手へ行かうとする、その袖をとつて、

右内　お百姓、待たつしやい。

角右　アンダ、止さねえか、着る物が裂けるわえ。

右内　今は斯んなに成り下がれど、一合たりとも侍の扶持を汚した成れの果、土民の土足に掛けられては此儘只は濟まされぬ。

角右　只濟まさぬとは何うするだえ。

右内　是非に及ばぬ。

ト嚇しの爲に刀を拔く、角右衛門ぎつくりして、

角右　此奴あぶねえ。

ト東の花道へ逃げて行く、右内は是を追つ駈けて中の歩みを渡り、西の花道へ掛り、右内、角右衛門を押へつけて、

右内　どうぞ頼みを聞いて下さい。

角右　エ、しつツこい、知らぬといふに。

ト振拂つて逃げる立廻り。此中知らせなしに、

道具廻る。

本舞臺眞中九尺中足の二重、藁葺きの古びたる觀音堂、諸所に蜘蛛の巣かゝりゐる、下の方に石の因果車、杉の立木、上の方後へ下げてダラ／＼降りの坂道、後ろ一面の岩山、裾通り谷川の流れ、熊笹の茂み、總て鹽坂峠谷間の體、山おろし、水の音にて道具止る。

ト角右衛門逃げて來て、

角右　盗賊々々、人殺し／＼。

ト逃げ廻り、木の根へ躓き轉ぶ、右内は追ひかけて來て、角右衛門の口を押へ。

右内　コレ滅多な事を云つて下さるな。五十兩貸してさへ下されば、なんで斯な事をしませう、幾度云つても同じ事だが、主人の難儀を救ひ度く、事を分けてのお願ひを土足に掛けたり打つたりして、惡口をさつしやるから、ツイ時の張り合ひで、脇差しは拔きましたが、殺して金を盗らうなぞと、そんな惡い心は御座りませぬ。どうぞ私の頼みを聞いて、五十兩貸して下さいまし、主人を連れてお宅へ參り、どんな證文でも張りませう、コレ、此通り拜みます。

ト手を放し、刀を下へ置いて拜まうとする、角右衛門は此隙に刃物を拾ひ上げ、

角右　われが樣な奴は斯うしてくれるワ。

ト斬つて掛かる、右内は身を交はして其手を押へて、

右内　さりとては聞き分けない、私を殺せば人殺し、此方も只は濟みませんぞ。

角右　さう云ふわれは、なんで拔いた。

右内　アレは時の張り合ひで。

角右　いゝかげんな事を、吐かし居るな。

ト兩人刀を枷に爭ひ、トヾ右内角右衛門を組み敷く

アレ人殺し、盗賊々々。

ト聲を上げる。此時上手の奥にて、本鐵砲の音して、

右内の腰を貫きし心にて仰向けに倒れる。角右衞門は狼狽て、

人殺し〳〵。

ト震へてゐる。上手の坂道より浪人鹽原角右衞門、山獵師の拵へにて鐵砲を持つて出て、

鹽原　お百姓、何處も怪我は、御座らぬかな。

角右　怪我なんざアしませんが、こんなに眞赤に血が出やんした。

ト右内の返り血を浴びた心にて、衣類を見せて震ふ。

鹽原　血が出たとは捨て置かれん。ドレ〳〵一寸見せなさい。

角右　ハイ、此通りでがんす。

ト鹽原は角右衞門の身體を改めて、

鹽原　何處も何ともないでは御座らぬか。

角右　斬られたのではがんせぬか。

鹽原　是は拙者が相人の者を、此鐵砲で射ち止めた時血汐が走つて、此方の身體へ掛つたと見えます。

角右　やアさうでがんしたか、道理で痛くもなんともがんせん、お庇護で命が助かり、有難うがんす。

鹽原　聞けば此頃此山中へ賊が出ては、旅人を惱ますと申す事、物騷な事と思つて居つたが、此方もアレなる賊に出會ひ、危い所でござつたナ。

角右　お庇護樣で助かりやんした、旦那樣聞いて下せえやし、此後の茶見世で、私が馬を買ふべえと、手附けの金を打つた時、胴巻きを落しやしたを、此奴〆が見て居やして後から私を追かけて來て、主人に出世を爲してえから、五十兩貸してくれなんぞと、いゝかげんな事を云ひやして、私の金を取り上げべえとする、イヤハヤ太え奴でがんす。

ト鹽原はモシヤといふ思入にて、

鹽原　夫ではアノ賊が、主人に出世をさしたいとて、五十兩貸してくれと申しましたか。

角右　噓を云つて私が金を取り上げべえと爲やした。

鹽原　見れば何うやら似寄りの年齡。

ト側へ寄つて右内を引き起し、顏を見て吃驚して、

ヤ、其方は右内であつたるか。

角右　エ、何だ、おめえも仲間か。人殺し〳〵。

ト腰の立たぬこなし。

鹽原　ア、コレ、左樣な者では御座らぬ、狼狽へて騷がつしやるな。

角右　夫でも、其奴を知つて居ては。

鹽原　知つて居つても賊では御座らぬ、證據は賊と思つた故、此奴を射止め御身の難儀を助けたが、何よりの潔白では御座らぬか。

角右　さう聞いて見ると、そんなものだが、何だか未だ未だ安心出來ねえ。

ト鹽原は右内を介抱して、活を入れる。是にて右内心附く。

鹽原　コリヤ右内、氣が附いたか。

右内　オ、旦那樣どうして是へ、ア、面目ない〳〵。

鹽原　樣子は大概承はつたが、何故左樣な心得違ひをしてくれた、今こそ浪人いたしても其方も武士の家來でないか、渇しても盗泉の水を飲まずと申す事を辨へぬか、斬り取りしても主人の出世の、金を調達いたさうとは、心得違ひの此上なしぢや、人を害め金子を奪ひ調へしとて、主人の世に出る其爲の、金子とならうと思ひ居るか、アノ爰な痴者メが。

ト右内苦痛を堪へるこなしにて、

右内　其疑ひは御尤もながら、左樣な譯ではござりませぬ、まア一ト通り聞いて下さりませ。

ト竹笛入りの合方になり、

昨日計らず八年振りにて、旦那樣にお目に掛かり、御樣子を伺ふ所、以前に變る御流浪の、御夫婦樣の今のお暮し、御新造樣の仰しやるには、今五十兩ある時は、支度も整ひ江戶へ出て何れの家へか旦那樣が、身の有附きが出來れ共五兩の金子も調はねば、斯うして居るとの御述懷、爰で以前の御恩返しと、お妹御を唆かし不義をいたした身のお詫びと、イエ其金子は私が江戶へさへ歸りますれば、直ぐに調へ送りますと、受合つては見ましたが、昨晚御厄介になりながら、寢て考へれば考へる程、容易に出來ぬ金子の才覺、どうしたものかとお宅を出て、今日此後の茶見世まで、思案ながらに參りまして、休んで居る後から來た、百姓體の旅人が、馬を買ひ取る約束にて、手附けの金を渡す時、落した金は七八十兩、ア、彼れがあつたら旦那樣の、御運も開き御恩返しが出來る事だと跡追つ掛け、次第を明かして借りようと、賴んで見ても聞き入れず、却つて惡口された上、土足にかけられ口惜しさに、威しの爲に拔いたれば、人殺しよ盜賊よと聲立てられて爭ふ所へ、飛び來る彈に的り此ありさまで御座ります、決して〳〵追ひ剝ぎなぞでは御座りませ

ぬよ。

鹽原　夫で樣子は相分つた、左樣な譯とも存ぜぬ故、身共も今朝其方をたゝせ、從然の餘り傍に出て、此山上を通りかゝり、遙か此方の谷間にてアレ盜賊よ人殺しと、呼ひ立つ聲に見下ろせば、組んず解れつする樣子、上なる者が物取りと認めし故に覘ひをつけ、切つて放せし其彈が、的つて無慘や其方が横死、許してくれよ、コレ右內。

右內　其お詞には及ひませぬ、思へばお主のお眼を掠め、御新造樣のお妹御と、不義をいたした人でなし、此身の罰が覿面に報つて來たと思ひますれば、悔む所も御座りません、却つて貴方のお手に掛かり、死ぬは此身の罪亡し、行く所へも行かれます。

鹽原　其罪も年も經ち、其方が昨日の詫び事で此方は恨みを消した心得、助けたいにも急所をば打ち拔いたればそウ叶はぬ、云ひ置く事でもあるならば、私に云ひ置き死んでくれ、返す返すも殘念ぢや。

右內　イエ私の身に取つては、心殘りは御座りませぬが、今際の際のお願ひは女房お龜と二人が中へ、設けましたお榮と申す、一人の娘が身の行末、一旦不義を働きまして家出をいたした罪あれば、表向きにて御勘當を許す譯には參りますまいが、私が死にましては世に留りたい女房娘、御不便かけて下さりませ。

鹽原　オヽ夫も家內と相談の上、又計らふべき時節もあれば、心殘さず成佛してくれ。

右內　其お詞を聞きまして、心の弛みに胸苦しく、是がお名殘りで御座ります。

鹽原　オヽそウ末期か、南無阿彌陀佛々々々々々々。

ト合掌する、右內は苦しみ落入る。此中角右衞門は二人の話しを聞いて居て、

角右　コリヤハア飛んだ間違えで、氣の毒な事になりやした、全くさういふ譯と知ればアーニ私とて鬼じやアなし、金を貸さねえ事もがんせぬが、初めて山中で出逢つた人に、金エ五十兩出せなんて云はれ、イケツ太えこんだと思えやしたから、ブツ叩いて追ひ遣がすべエと心にもねえ事を云つて、實は脅して見た所、臆病しイ拔いて追つ駈けるから、愈々盜賊に違えねえと、夫で今の樣に我鳴つたでがんす。

鹽原　イヤ其方に御無理は少しも御座らぬ、申さば彼の粗忽より、おのれと招く此の災難、手前においても其許へ、云ひ分なぞは御座らぬ故、御內分に下されて、此場の事

は此場かぎり、どうかお引取り下されい。

角右　イヤ此男の心根を、今になつて考へると、私もなんだか可愛さうで、回向でもしてやり度うがんす。

鹽原　夫は御奇特に忝い、彼もかやうな變死をしても、迷はず成佛いたします樣、御回向なされて下さりませ。

角右　承知しやした、南無阿彌陀佛々々々々々々々。

ト清水の流れにて血汐を洗ひ、拜んで居る。合方替つて、向うより鹽原の妻お清木綿和し形り、同じ拵への一子多助の手を曳き、出て花道に止まり、

多助　母樣、まだお見えなさるわいナア。

お清　いつも向うの山道を、降りておいでになる故、能う氣を付けて行きやいなう。

多助　アイ〳〵。

ト上の方を見ながら、兩人舞臺へ來て鹽原の姿を見て、

お父樣がおいでなさりました。

お清　旦那樣、是においでなさりましたか。

鹽原　オ、お清か、よく迎へに來てくれた。

お清　餘りお歸りが遲い故、此子を連れてお迎ひに參りましたが、お鐵は如何で御座りました。

鹽原　まだ兎一疋捕らぬ故、夫で大きに遲うなつた。

ト角右衛門思入あつて、

右門　そんなら、これはお內儀さんか。

鹽原　是は拙者の家內で御座る。

角右　夫では茲へ連れて御座らしつたは、息子さんでがんすか、穩和しさうないゝお子だ。

ト此中多助右內の死骸を見て、

多助　お母樣、彼所に誰か寢て居ります。

お清　ホンに、誰やら倒れてゐる。彼はどうしたので御座りまする。

鹽原　今朝別れた右內めぢや。

お清　エ、。（ト驚く。）

鹽原　過ちとは申しながら、我が覘ひし鐵砲にて、敢なき橫死を遂げさしたわえ。

ト愁ひのこなし。

お清　エ、、、、。

ト呆れし思入にて、死骸の側へ行き、

コレ右內、情ない事になりました、コリヤモウ手足も冷たくなり、疾うに絆は切れた樣子、モシ旦那樣、どういふ事の過ちにて、貴方は右內を鐵砲でお打ちなされたので御座りまする、譯を聞かして下さりませ。

鹽原　譯と申して外でもない、いかに忠義と云ひながら、初めて出逢ひし此御仁へ、右内が無理な願ひを云ひ掛け、剰へ脅しの爲に脇差しを拔き追ひすくめ、組み敷く樣子を思はずも、あれなる山蔭より見受けし故、我が家來とは知らずして、正しく盗賊山稼ぎと心得し故一打ちに、此鐵砲の狙ひを定め、打ち止めし上駈け寄り見れば、全く金を强談にて、借り度き故と刃を拔き脅して居りしと事分り、身共も不便に思ひ居るのぢや。

ト是を聞き、お淸死骸に取つき、

お淸　コレ右内、いかに忠義が立てたいとて、そんな手荒い事をして、借りたお金が旦那樣の、世に出るたそくになりませうぞ、斯う云ふ事と知つたなら、今朝もたつ時呉々も、私も賴みもせなんだに、是ではどうやら私等が、罪もない子に智慧をつけ、殺した樣に思はれて、殘念さやら氣の毒やら、出入りを止めた妹にも、是ではどうも云譯なく、却つて此方が恥かしいわいなう。

角右　イヤ斯ういふ事になると知つたら、私もあんなに我鳴らねえで、噺し合ひにしたものを、今となつては誠に早、お氣の毒やら不便なやら、聞きづれえ事になりやんした。

ト氣の毒なる思入。

多助　右内が死んだら伯母樣が、嘸泣かつしやるでござりませう。

鹽原　イヤ是とても因縁づく、不義の報いで是非ない事ぢや。

角右　失禮ながら旦那樣は、何と云ふお名前でがんすな。

鹽原　拙者は當時此麓の、小川村に逼塞いたす、鹽原角右衞門と申す浪人でござる。

角右　エヽ。（ト聞き咎めしが笑ひ出し）ハヽヽヽ、冗談を云はつしやる、鹽原角右衞門とは、私の名でがんす。

鹽原　イヤ拙者の名も鹽原角右衞門と申しまするが、扨は同姓同名と相見える。

角右　不思議な事もあるものだ、私等も先祖代々から、鹽原角右衞門と云ひやんして、上州沼田の下新田では、名の通つた百姓でがんす。

鹽原　拙者先祖も下野の國、鹽谷郡鹽谷村にて、鄕士の家と申す事が、古き書類に殘り居れば、自儘に名乘る姓名ならず。

角右　私等が先祖も元は野州鹽谷郡鹽谷村から、沼田へ出

たと聞いて居れば、事に依つたら一家の端か。

鹽原　初めて出會つた、此方と某。

角右　名乘つて見れば一つ名前、

鹽原　苗字も同じ鹽原とは、

角右　是も佛の引き合はせか。

鹽原　世には似た名も、

兩人　あるものぢやナア。

ト兩人は奇異の思入。

お清　さう云ふ御緣のあるお方を、手過ちにて殺したら、夫こそ猶々濟みませねど、同じ不便な事をしても、家來の方でまだしも仕合で御座りました。

ト此中角右衛門、胴卷きの中より金を五十兩出して、

角右　サア此五十兩を進せますから、是で出世をしてくんせえやし。

鹽原　折角の思召しながら、よしや同姓同名でも、一家とも親類とも分からぬ御仁に、五十兩といふ金を申し受ける所謂はなし、是は其方への納め下さい。

角右　イヤさうでもがんせうが、今お內儀のいふ通り、モシ間違ひでオッ斬られるか、アノ鐵砲で打たれた日にやア、懸け替えのねえ命迄、爰で捨てにやアなりましねえ、夫にどうやら名乘つて見りやア、先祖の代迄鹽谷村で一家であつたか知んれえ家柄、出世の爲になる事なら此五十兩で出世して、樂になつたら返さつしやれ、利息もなんにも要りましねえ。

鹽原　御厚志の段忝けないが、家來が無體の御無心から、金子を借用いたしては、どうも心が濟みませねば、偏に其儀は御辭退申す。

角右　イヤ其御家來も此樣に、其金故に鐵砲で打たれて死んだ事なれば、金が此方の手に入らにやア、おッ殺されても死に損だ。

鹽原　家來がよからぬ事をいたせば、主人が手討ちにいたすのは、コリヤ當然の事で御座る。

角右　夫ぢやアどうでも受取れやせんか、ハテ氣懸りなこんだナア。

お清　氣質を知らぬお方には、毎度お詫びをいたしますが、一旦斯樣に云ひ出しましては、思ひ返さぬ一徹者、どうぞ御勘辨下さりませ。

ト角右衛門思案して、

角右　夫ぢやア物は相談だが、此方の家に賣らうといふ、不用な物はござらぬか。

鹽原　お恥かしいお噺しながら、四年以前の出水の折り、家を流され水損に逢ひ、家財とても只今にては、足らぬ勝ち故何にも御座らぬ。

角右　賣る物もないと云はつしやるか。

ト多助に目をつけて、

夫ぢやア其作さんを、私の養子に下さらぬか。

お清　イエ此作は一人子故、どうも他家へは手放して、上げる譯にはなりませぬ。

角右　一人ッ子ぢやア尤もだが、私も今年は四十二だが、子といふものは一人もなく、夫ばつかりが不足でがんす、三百石も田地があり山も持つて居りやすから、子に讓り度く思つても、無けりやア死んでは他人の物、樂みのねえ事でがんすよ。

お清　左樣な所へ貰はれゝば、世に落ち果てた親の手で、育ちますより仕合ながら、武家の家では子がなければ、家の潰れるためしもあれば、何うも此子はお前樣へ、上げる譯には參りませぬ。

角右　ア、俺ア金より子が欲しいが、さういふ譯なら鐵砲で、打たれて死んだ此人の、回向料に此金を、置いて行くから納めて下せえ。

鹽原　回向料と云はるゝなら、お志しの鳥目を、何程なりとも置いて行かるゝ事なれば、納めて置くまいものでもないが、五十兩といふ大金は過分の事故受けられませぬ。

角右　又そんな事を云はつしやるか。私の心を二人の衆、能く聞いてくらッせえ。

ト合方替つて、

聞きやア死んだ此佛も、家來だと云はつしやるが、どうやら緣に繋がる人、江戸迄送つてやられねば、何れ爰等に埋めさつしやらう、此方さん達ちも山の中で、一生暮らす氣もあるめえ、江戸へでも出て見せえ、算參りをする者もねえだ、夫より其子を私に呉れて、此五十兩で出世をして、元の身分になつたがえゝ、名乘らぬ先きは他人だが、同じ鹽原角右衞門の、名前を名乘つてゐるからにやア、兄弟だかも知んねえから、能く考へて見さつせえ。

ト鹽原是をぢつと聞いてゐて、

鹽原　イヤ、だん／＼考へれば、多助を生んだ實の母は、此角右衞門殿の御家内であつた。

トお清は驚いて、

お清　アレ・あんな嘘をおつしやつて。
鹽原　ハテ只今迄は實の親と、申して居つたが有體に、モウ當人に云はねばなるまい。
トよろしく思入、お清は泣く、多助は是を察したる思入にて、
多助　お父樣貴方の出世になる事なら、貰はれて參りませう。
角右　アレ何も彼も知つて居ますだアヨ。
ト困つたといふ思入。
鹽原　角右衞門殿、改めて此悴はお返し申す。
角右　そんなら頼みを聞いてくれさつしやるか。
お清　イエ〳〵、此子をお金に替へては。
鹽原　ハアテ、養育料に。
ト目顏で知らせるを、木の頭。
納めるがよい。
ト氣味合ひのこなし、お清は泣き入る。角右衞門は悦ぶ、此の模樣、合方、山おろしを冠せて、
幕
ト幕引き付けると、此間十五年相立ち申候 狂言に御座候と記せしビラを下ろす。

二幕目

下新田鹽原宅の場
作場道庚申塚の場

役名――鹽原多助、分家太左衞門、原丹次、同悴丹三郎、幸右衞門悴圓次郎、下男五八、下女お六、祭文讀ほら八、同尺藏、村の若い者二人、百姓三人、鹽原の後家お龜、多助嫁お榮。

本舞臺後ろ一面後へ下げて常足の二重、栅の蹴込み、眞中九尺藁葺きの長屋門、此前に一間の土橋、裾通り小溝の土手板、門の左右生け垣、内より農家の藁家根を見せ、樹木の梢、上下は植込みの書割にて見切り、總て沼田在下新田鹽原住居入口の體。爰に村の若い者勘太、久六立ちかゝり居るを、作男五八止めてゐる、下手に祭文讀みのほら八、尺藏立ち懸りゐる。此見得在鄕唄にて幕明く。

五八　コレ、待てろと云つたら、まア待てろ。
勘太　ウンニア、あい等に此所エらを荒されちやア、外村

に對して男が立たねえ。

久六　足ッ骨エぶち折つて、二度と再び爰エらへ立ち廻らねえ様に、性を付けてやらにやアなんねえ。

五八　コレヨ、まア待てろと云ふに、アンでお前等に此手合へが憎まれんのだ。

ほら　何も私共は此衆達ちに、遺恨を受ける覺えはございません。

只藏　弱い渡世の祭文讀みで御座います、どうぞ御勘辨下さいまし。

勘太　イヤ機織りの女ッチヨを、螺を吹いちやア欺くらかし、爰等を荒しに來やアがるだ。

久六　昨夕も鎮守様の森中で、出逢ひがあつたと云ふこんだ、相手はアンでも、

兩人　此奴等だんべエ。

ほら　夫はとんだお疑ひだ、なんで私共が土地の姉さん方を、そんな粹な事が出來ますものか。

只藏　宿へ泊つて鎮守様の、鳥居前へ毎晩出ますが、そんな素らな事はいたしません。

ほら　夫では晩から、

兩人　でられん／＼。

勘太　アレあんな洒落をこきやアがる。

久六　ソレ、おッ捕えてブッ叩け。

二人　ぶッ叩かれて堪るものか。

ト下手へ逃げてはひる。勘太、久六追つかけてはひる。

五八見送つて、

五八　コレ、待てろと云つたら、待たねえか。

ト此時母家にて彈く心にて、端唄の三味線聞える。

アレ、又ベコチヤンが始まつたか、旦那が生きてござつた中は、祭文讀みなんざア、此門の中へ這入た事は無かつたが、後添への嬶アめが、今日も朝から男を引き込み、娘の女ッチに晝間から三味線なんぞをすりこかせるから鹽原の家はモウ駄目だ、奥に行つて嬶アの前で憎まれ口でも叩いてやんべえ。

ト門の中へはひる。右の端唄の合方にて、向うより原丹三郎、着流し大小にて出て來て、花道にて四邊へ思入あつて、

丹三　不圖した事から多助といふ、主あるお榮と人知れず、深い仲にはなつたものゝ、土岐の家來で城内の武家と云はれる身を以て、道に背いた密夫の罪、悪事千里で此事が、家中の耳に入る時は、夫こそ此方は扶持の放ひ上げ、

モウ是限りと幾度か、諦めて足を抜かうとしても、文の迎ひで呼び出され、互ひに思ひ切られぬとは、是が悪縁と云ふものであらう。

ト右の合方にて、舞臺へ來る。此時下手より、以前のほら八、尻端逃げて來て、丹三郎に突き當り、詫びながら上手へはひる。あとより勘太、久六追つ駈けて來て、

勘久 どつちへ行つた〱。

ト同じく上手へはひる。此時丹三郎、懐中よりお榮より來た手紙を落す。

丹三 此頃切りに在方で、祭文讀みが流行と聞いたが、何か聞違ひでも仕居つたか、ハテそゝくさとした奴ぢや。

ト向うを見て、

ヤ、あれへ來たのは鹽原の分家太左衞門、見られぬ中に、さうぢや。

ト落した手紙に心附かず、慌てゝ門の中へはひる。在郷唄の合方になり、向うより鹽原の分家太左衞門、羽織着流しにて出て花道にて、

太左 いそがしいのにツイかまけ、本家へ久しく無沙汰をしたが、兎角に後妻の母親が角右衞門殿の遺言を忘れ、勝手な眞似をするとの事、今日こそ樣子を見た上で、篤と異見をせねばならぬ。

ト舞臺へ來て、落ちて居る文を拾ひ、名宛を讀んで思入あつて、

コリヤ日外寺參りの戻りに、女連れで悪者に出逢ひ、難儀の所へ通りかゝり、助けられたが縁となり、此頃毎日入り込むと聞く、丹三郎へお榮から、遣つた文に違えねえ、是で多助を邪魔にする樣子も確かに分つた上は、五八に還つて夫となく、お龜の所業を聞き糺し、品に依つたら親子とも、

ト文を袂へ入れるを道具替りの知らせにて、

イヤ早呆れたものぢやわえ。

ト在郷唄にて太左衞門は門の中へはひる。

これにて道具廻る。

本舞臺一面の平舞臺、正面上の方九尺の床の間、續いて地袋、違ひ棚、下の方色變りの壁、ズツと上手折廻しの襖、下の方寄心に障子の出入り口、總て大百姓鹽原宅奥座敷の體。爰に酒肴、三味線など取り散らし、上手に後家お龜、長煙管を振り上げて立身、

是を嫁のお菜止めてゐる、下手に以前の五八爭つてゐるを、下女お六和めて居る模樣。今方にて道具止る。

お菜　お母さん、お待ちなさいよ、こんな分らずやにお構ひなさると、却て此方が賤くなります。

お龜　なんぼ分らない人達でも、餘りと云へば、ふざけた奴だ。

五八　コレ百姓の家で、晝間から、三味ずりこいたり酒ェ喰つて、何方が、ふざけてるか考へて見ろ。

お六　アレサ、夫だからおめえ惡いだよ。

五八　なんで俺が惡いだ。

お六　三味線をお彈きなさらうが、晝から御酒を飲らうが、御主人樣のなさる事だ、おめえが構つた事ぢやアねえ。

五八　イヤ俺ア構はにやアなんねえのだ。只の作男だアねえ、譯が違ふぞ。俺ア大旦那の代からして、爰な家の忠義もんだと褒め取つた此五八だ、後添への嫁アなんぞにコキ使はれて居る俺ぢやアねえぞ。

お龜　アレ、あんな憎らしい事を云ふのだもの、默つては居られないぢやアないか。

お菜　まア／＼、おつ母さん、我慢をなさいよ。

五八　サア、打つなら打てろ／＼。

お龜　オ、打たないでどうするものか。

ト下手へ來るを、お菜止める。五八暴れるをお六和める、下手の障子を開け、丹三郎入り來り、双方を止めて、

丹三　コリャ何事の爭ひか、まづ／＼拙者にお任せなさい。

お龜　おや、丹三郎さんで御座いましたか。

お菜　よくおいでなさいました。

五八　エ、其詞つきから氣に喰はねえ。

丹三　何で氣に喰はぬのぢや。

五八　御城内の侍の身分で、毎日々々百姓の家へ親子連れで這入り込むのが、第一俺の氣に入らねえのだ。

お龜　アレ、あんな失禮な事を云やアがるよ。

ト丹三郎ムッとして、

丹三　用捨のならぬ其の雜言、此分には相濟まさぬぞ。

五八　濟まされざア、どうともせろ。

お菜　お六や、早く連れて行つておくれよ。

お六　コレ五八どん、どうしたもんだ、おらと一緒に臺所へござえよ。

五八　嫌だ／＼オッ斬られべエ。

お六　ハテ私と一緒に御座えといふに。

丹三　ア、云ふ奴を捨て丶置いては、向後の爲に相成らぬから、どうにかせねばなりますまい。

　お六、五八を無理に引き連れて、臺所の口へはひる。

　ト能き所へ住ふ。上手より原丹次出て、

丹次　イヤ、匹夫の下郎だ、捨て丶置け。

丹三　父上にも今日は、當家へお出で御座りましたか。

　ト合方になり、丹次も上の方へ住ふ。

丹次　非番故用達しがてら、先刻から來て居つたが、取るにも足らぬ彼奴が悪口、相手にいたすも大人氣なければ、是へ出ずに寐て居つたが、其方もあんな分らずやが、何を云はうと捨て丶置きやれ。

お龜　ホンニあんな憎らしい奴は、顏を見るのもいやになります。

お榮　いつそ手附かずに暇を出して、家に居ない樣にして下さいな。

お龜　どうせ永くは置かれない奴だが、暇を出すにも是といふ、科がなければ出せないから、何を臺所で云つて居るかそつと行つて聞いて來ておくれ。

お榮　ハイ／＼、夫では丹三さん、種々お噺しがありますから、歸らずに居て下さい。

丹三　親人さへ宜しくば、爰に居るから行つて來るがよい。

お榮　夫では乾度爰に居て下さい。

　ト合方にて下手へはひる。

丹次　高い聲では云はれぬが、彼等が主人を悪口するも、心に一物あるからと、察して居れば故なくして、うつかり隙も見せられぬ。

お龜　ナンノ貴方彼奴なぞは、何と云つて歩きませうとも、世間で取り上げますものか。

丹次　イヤさうでない、世間の口程戸の建てられぬものはない。

丹三　今拙者が此方の門口を這入らうとしましたら、向うから此方へ參るは、分家と聞きし太左衛門に相違ないと思ひますから、もシ見られでもする時は事面倒と見られぬ樣に、急いで門を這入りました。

丹次　イヤ用心に如くはない、酒肴や三味線なぞは彼方へやつて置くがい丶。

お龜　ホンニ種々遠慮があるので、焦れたくつてなりやアしない。

　ト酒肴三味線を片づけ、上手の家體の中へ隠す、下手

よりお榮文を持つて出て、

お榮　モシ、おつ母さん、面白い物を拾ひました。

丹次　ナニ、面白い物を拾つたと、

お龜　どんな物だえ。

お榮　今次の間に此樣な手紙が落ちて居ましたから、拾つて見るとお作さんから、多助さんの所へよこした文、面白い事が書いてありますよ。

丹次　お作といふのは何處の女だ。

お龜　今噂をした分家の太左衞門の、一人娘でございます。

丹三　どんな事が書いてあるか、親人讀んで御覽なさい。

丹次　ドレ〳〵、一寸見せてくれ。

ト手紙を受取つて、開いて見て、

いか樣在所で生立つ者は、子供の折から機織りや、糸繰りばかりさせて置いて、手習なぞはさせぬから、手の書けんのも無理はないが、恰で鐵釘の折れの樣だ。

お榮　夫でも思ふ心意氣が分りますから面白い。

お龜　なんと書いてありますね。

丹次　一筆しめしめえらせ候、おめえ樣にはお榮どんと云ふ内儀さんのある身だから、私等がいくら思ひやんしても、駄目なこんでがんすが、おめえ樣の顏を、一日見ねば百日も見ねえ樣でがんすよ、夫に父樣が聟を取れと云ひやんすから、否で〳〵なんねえ、明日の晩げは月待ちだから蕎麥ノウ打つて、みんなを呼ばると云つて居るだに、乾促食ひに來てくんなんしよ、目出度かしく。多助さんえ、さくより、ハ、、、、、是は多助へ附け文だと見える。

丹三　色男が多助と知れては、お榮も用心せねばなるまい。

お榮　否で〳〵なりませんから、お作さんの思つて居るを幸ひ、早速別れ度う御座います。

お龜　夫を離緣の種にして、アノ多助を追ひ出す工夫、モシ旦那、一寸耳をお貸しなさい。

丹次　何だ。（ト耳を出す、お龜囁く。）

お龜　斯ういふ工合ではどうですね。

丹次　なか〳〵左樣な事では、素直にはまゐるまい。

お榮　なんであらうと私は離緣になりますが、身の本望でございます。

丹三　口では左樣に申して居ても、未練があるに違ひないわ。

お榮　エヽ、あんまりな。（ト打つ眞似をする。）

お龜　旦那の前で、無遠慮ではないか。（ト嗜める）

丹次　ハテ、変が内端の水入らずだ。

ト此時下手の奥にて、

コレ五八や、待つてくんろよ。

ト多助の聲聞ゆる、四人、急に居住ひを直し、眞面目になる。合方替つて下手の臺所口より、多助肩入れの着附け、破れたる雑股引の拵へにて出て、

是は御城内の旦那方、よう御座らつせえましたな。（ト挨拶なする。）

丹次　オヽ多助、毎度參つて厄介に相成る氣の毒ぢやナ、非番の折に外出しても、外に馴染の宅もなければ、ツイ此方の方に足が向くぢや、毎日も長座をして迷惑だらうが、許してくれ。

多助　いつ御座らしつても、何も上げる物もがんせんで、お粗末べエして濟みましねえ、おつ母さん、旨え物澤山御馳走して上げて下せえやし。

丹三　承はれば多助も江戸で生れし者とやら、江戸の者は他國へ參り、近附きになると噺しが合ひ、蒼蠅からうと思ひながらも、足が向いてならぬのぢや。

多助　生れは江戸ださうでがんすが、俺が樣に在鄕で育つと、一向駄目でがんす。そんなら旦那樣、緩り遊んで御座えやんし、おつ母さん行つて參りやす。

お龜　お前何處へおいでだ。

多助　元村迄小麥イ送つてやんべエと、青を曳いて行つて來やす。

お龜　大きに御苦勞だの。多助お前にちつと見せたい物があるから、一寸待つておくれ。

多助　見せてえ物とは、あんでがんす。

お龜　あんでがんすも無い物だ。お前と云ふ人はくろりくろりとして、大それた、分家の娘のお作坊と徒をして居るね。

多助　何を徒しやしたかね。

お龜　大概におしよ、お前は疾からアノお作と、不義をして居ると云ふ事さ。

多助　コリヤア魂消た。モシおつ母さん、誰がそんな事を云ひやんしたか、分家の娘と浮氣狂ひした覺ひはがんせん。

お龜　いくらお前が白を切つても、書いた物が證據だから嘘だと云ふなら、是を見なさい。

ト以前の手紙を見せる、多助取り上げ見て、

多助　ホンニ是やア分家のお作が、俺の所え寄越した文だ

が、何處に斯んな物があつたか、私やア夢にも知りやんせん。

丹次　イヤ却々隅へは置けねえ多助だ、見上げた者だ天晴れ天晴れ。

丹三　どうか拙者も左樣な事に、少しなりともあやかり度いものぢや。

丹次　色男の親玉か、

兩人　ハ、、、、。（ト嘲ける。）

多助　モシおつ母さん、お作がこんな手紙を私の所へ送つたか知んねえが、私は受取つた覺えはがんせん、どうして貴方の手へはひりやした。

お榮　どうしてとは多助さん、ソリヤあんまりで御座んせう、女房の役故お前の着物を、今方私が疊む時、袂に隱してあつたから、あんまりな事と口惜しいから、おつ母さんに見せました。

ト態と萎れて云ふ。

お龜　ホンニさう云ふ事のある端か、旦那殿の遺言で二人夫婦になつたものゝ、今日迄此子を振り附けて、碌に口さへ利かぬお前、夫程お榮が氣に入らずば、何も堪へてアノお作と隱し事をして居るにも及ばぬから、ちやんと此子を離縁して、太左衛門さんから表向きで、お作を嫁に貰ふがよいわね。

多助　モシおつ母さん、夫ヤア大違えの事でがんす、斯んな書いた物がありやんしても、アノお作と悪さアした覺えはがんせん、又お榮を離縁するなんて事は、毛頭ありましねえ。

丹次　コレ／＼多助、左樣に虚言を構へて、遠慮をするには及ばぬ事だ、其方も鹽原の相續人なれば、女の一人も拵へるは、男の働きと云ふものぢや、譯があるなら譯ある樣に、有體に申すがよいわさ。

多助　宜いも悪いもそんな事は、覺えのねえ事でがんす。

お龜　モウ今更となり、覺えがないと幾等云つても究た事さ。是から分家へ連れて行き、太左衛門さんにさう云ふから、私と一緒に行くがいゝ。

多助　夫はどうも困りやしたナ。伯父樣は堅えからそんな事を聞かせたら、どんなに怒るか知れましねえ、出入りも出來なくなりやんすから、どうか勘辨して下せえまし。

お龜　イエ勘辨して上げ度くつても、斯う云ふ不體裁があつて見れば、云はずに濟ませる譯には行かないから、サア長い短いは要らない、お榮を綺麗に離縁したと云ふ、

一札を書いてお出しよ。
多助　おつ母さんのお詞でも、夫ばつかりはなりやしねえ。
お榮　なんで私に離縁狀が書かれないとお云ひなのさ、夫は分らないぢやアありませんか。
お龜　離縁が出せないとは、どういふ譯だえ。
ト合方きつぱりとなり、
多助　其譯といひやすは、死んだお父樣の遺言にもおれとお榮とは從弟同士だから、夫婦にしてやるが、假染にも喧嘩アして、夫婦別れする樣な事があると草葉の蔭から勘當だと云はしやつたから、私も大概な事は堪へて居て、何一ツ云つた事はがんせん、私も我儘者でがんすが、內輪で物爭ひが出來てお榮を離縁しては何うも死んだ父樣が、お位牌へ對して濟みましねえから、お榮が私を氣に入らず、夫婦になつて居るのが嫌ならば、夫は嫌でも構ひやせん、內證は切つても表向き丈けは、夫婦と云はにやア世間へ對し、又分家の伯父樣に對しても濟まねえから、どうかさうして下せえまし。
ト賴む、お龜は丹次親子と顏見合して、
お龜　夫程の事を心得て居ながら、何故分家のアノお作と、徒事をしたのだよ。
多助　イ、エ爲た覺えはがんせんが、爲たと思はつしやるなら、御免なせえ。
お龜　ソレ／＼其一言が何より證據、したと思ふなら御免なさいと、詫びる口で、爲ましたから御免なさいと、何故云はない。
多助　夫でも爲ねえに違えがんせん。
お龜　エ、何う云へば斯う云ふと、何故そんなに隱すんだよう。
多助　どうぞ御免なすつて下せえ。（ト泣き伏す。）
お龜　アレサ詫びる事も何もない、爲たら爲たと云つて終へば、痛い思ひもさせないのさ、是でも知らぬと云ひ張るのかえ。（ト煙管で折檻する。）
多助　どうぞ堪忍して下せえまし。
お龜　エ、モ、いけ死太い、是でもか／＼。
ト打ち据ゑる、爰へ以前の五八中へ割てはひり、
五八　おめえ樣、手ひどい事をしなさるな。
お龜　要らざる所へ又出たか、お前なんぞの知つた事ぢやアない、邪魔をすると聞かないよ。
五八　イヤ邪魔はせねえが、多助さんを打たつしやると、罰があたらうと、夫で俺ア止めたのだ。

お龜　多助の事といふと、目くじら立つてお前は騷ぐが、親が子の折檻するのは當然、お前方の世話にやアならないから、邪魔をせずと引込んでおいでよ。

五八　イ、ヤ引込んでは居られねえ、私ヤア奉公人でがんすが、多助さんは此家な相續人だよ、お前樣より多助さんの方が先きへ此な家へ貰はれて來たは、十四年跡の八月で、お前樣は其年の九月來て、其翌年先のお内儀樣が死んだから、お前樣を後添にしべえと、分家の旦那樣と私が勸めたけんど、旦那樣は堅えから、村の者へ外聞が惡いと云ふのを、多助さんには伯母樣の事だから、女房に持つたがよかんべえと其緣合ひでお前樣を、此家へ入れた時に、何と云はしやつた、ア、有難え事だ、果報燒けがすると、云つたぢやアねえか。

お龜　エ、何を云ふのだ、お前の厄介になるものか、利いた風の事をお云ひでないよ。

五八　利いた風もねえものだ。

　ト云ひ爭ふを、多助和めて、

多助　コレ待たぬかえ、五八は醉つて居りやんすから、強情を張りやんす、皆さん私が惡いのでがんすから、どうぞ堪忍しておくんなせえ。コレ五八、まア其方へ行つて居ろよ。

五八　イヤ、何と云はしつても、私イ理窟を云はにやアなんねえ。

多助　コレそんなに母樣に突返しな事をしては能くねえから、まア其方へ行けと云ふに。

五八　デそあんな事を云つて、口惜しくつてなりやんせん、私やア胸が一杯になるだよ。

多助　えゝから彼方へ行けといふに。

　ト是非なく五八下手へはひる。丹次は丹三郎と顏を見合せ、上首尾だとひそかに悦ぶ。下手の障子を開け、太左衞門出て多助を見て、

太左　お龜どん、何をゴタ／＼して居ますな。見ればお客さんもあるに、どういふ譯でがんす。

お龜　オヤどなたかと思つたら、御分家の太左衞門さん、若い者とは云ひながら、あんまり腹が立ちますから、宅へお出でも知らないで、多助を連れて今お宅へ、行く所でございましたよ。

太左　どうした譯か知んねえが、まア／＼私が來たからア、手荒い事は止めてくんなせえ。

　ト上手の丹次親子に會釋して、

是は御披内の旦那樣、お初にお目に懸りやす。毎度御ひいきに預かりますと、多助から承はつて居ります、私は分家の太左衞門と申す親類どもで御座えます。ハイ、お心易く願えます。

丹次　夫ではお前が當家の分家の、太左衞門殿で御座つたか、毎度來まして當家の厄介になります、今日計らず飛んだ所へ來合はして、倅と二人で大きに迷惑をして居りました。

太左　ハイ、一つ村方でも、上と下と隔てゝ御座えますので、本家へも無沙汰勝ちで御座えます。

（ト多助に向ひ、）

ヤイ多助、われどんな惡い事したか知んねえが、此家な相續人でありながら、御客樣の前で母親に折檻されるとは、よくせきのこんだ、何を失策たゞ、此馬鹿野郎め。

多助　ハイ俺が惡いのでがんす、伯父さん、おつ母さんに詫び事してくんせえ、お願ひでがんす。

太左　エ、、何惡い事したゞえ。

お龜　ナニお前さん、さう改めて聞かれるとどうも人樣へお噺しが出來ませんが、申さない譯にも行きませんから、掻ひ抓んで申しますが、實はお前さんの家のお作さんと多助が出來て居りますのさ。

太左　ハア。何が出來てゐるだかね。

お龜　親女房の目褄を忍び、疾うから多助がお作さんと、深い中で居ますから、本家分家の間柄といひ知らぬ顏もして居られず、第一佛樣へ對して申し譯がありませんから、お客の前であらうとも、折檻せねばなりませぬ。

太左　成程夫は尤もな事だ。ヤイ多助、なんでこんな立派な女房があるに、俺が家のお作の樣な、あんな馬鹿といたづらをしたのだ。

多助　イエ私そんな覺えはがんせん。

お龜　ナニない事があるものか、書いた物が何より證據モシ太左衞門さん、是を御覽なすつて下さい。（ト以前の文を出す、太左衞門見て、）

太左　ハ、、、、、。此間まで青ッ鼻汁ア垂らして、踏反り返つて、寢そべつて居た女が、モウ此んな事を爲居るとは、イヤ呆れた奴でがんす、シタガお龜どん、此の手紙で見た所ぢやア、コリヤお作めが多助を思ひ、文を遣つた樣子だが、多助の方で手出しをして、枕交して出來合つたとも、文言に證據はねえが、是を荒立ては、爰な家も俺が家も、世間へ恥となる事だから、娘は俺が仕

置きします。何うか多助の疑えは晴らしてやつてくれさつしやい。

お龜　イヽエ疑ひは晴れませんよ、お氣の毒で御座いますが、外の事とは違ひますから、お前さんのおいでを幸ひ、爰で多助にさつぱりと、離縁狀を書かせまして、娘のお榮と別れる事にしてやりませんでは、可愛さうに此子も一生、嫌はれ者で苦勞をさせねばなりません。

太左　ハテネ、まだ深しい仲になつたと云ふ、譯柄も知れねえのに、離緣狀とはどう云ふ理窟だ。

お龜　ハイお榮もまだ若い身空、多助の樣な夫を守つてゐては、年中クヨ〳〵氣を揉みますのを、見る樣でございますから、いつそ綺麗に別れさせ、割れ鍋にもとぢ蓋と、それ相應な亭主でも、持たせてやり度う御座います。

太左　文のやり取りしたにもせよ、俺が家のお作の樣な、あんな馬鹿がどうなるべえ、そんなに氣を揉まねえでも宜さゝうなもんだがね。

お龜　どうして〳〵、お作さんもモウ年頃、聞けばアノ子も幸右衛門さんの息子さんと許婚で、モウ近々に圓次郎さんが、御養子に來ると云ふ噺し、其子とこんな猥らがあつては、此方も濟まねばお前さんも、向うへ濟まぬぢやございませんか。

太左　イヤ約束はしてあつても、まだ結納の取り交せなしたと云ふ譯ぢやアなし、俺が方おやア構はねえ。

お龜　其方で構はなくつても、此方では構ひます、モシ此事が御分家で、御不承知だと仰しやるなら、此子を連れて私も、身を引くより外御座いません。

ト　きつぱりと云ふ、太左衛門屹と改め、

太左　夫ぢやアどうあつても今度の事は、勘辨なんねえと云はつしやるのか。

お龜　ハイ、勘辨なりませんよ。

ト　脇を向いて、ツンとする。

太左　扨々是やア是非ねえこんだ、併し手紙を證據だと事荒立てゝ見る日になると、俺も今方途中で拾つた、手紙を出して調べ立てを、オツ始めるかも知んねえから、夫を承知で居てくんせえよ。

ト　是を聞き、丹三郎はもしやといふ思入にて、懷中な探り、氣を揉む、外の者は心附かず。

お龜　可笑な事を仰しやいますが、どんな手紙をお拾ひでも、覺えのない事は少しも差支へございませんよ。

太左　夫ぢやア爰へぶん出し、どんな事が書いてあるか、

文言から先きへ讀んで見ぺえ。

ト懐中より以前拾つた手紙を出す。丹三郎は吃驚して夫を取らうとするを、丹次袂を引いて止める。お榮も此樣子を見て氣を揉む、お龜はお榮の樣子を見て扨はと心附く、太左衛門は文を開き讀まうとする、多助はお龜丹三郎等の樣子を見て、樣子を悟り、讀ませまいと心配する。太左衛門は委細構はず文を見せて、

エ、此文の文言では、あんでも去年の八九月あたりから惡い事をしやアがつて、今以ていゝ仲で居て、おのれの亭主が邪魔になるから、離縁狀取つて別れべエと、科もねえのに科を拵えて死んだ佛の遺言も、何もぶツ潰して終ふ了簡だが、御城内の旦那樣、なんと世にやア大外れた太え女ツチヨが御座エますナア。

ト手紙を見せる、多助は一人で氣を揉む。

丹次　イヤ斯樣な事に口出しいたすは、不馴れの事故默して居つたが、コリヤ太左衛門殿の云はるゝ通り、手紙を證據に事を荒立て、血で血を洗ふ事をしては、世間へ對して聞えも惡く、又二ツには死んだ佛の、遺言にも反くと云ふもの、申さば若氣の至りにて、思案の外の色情に迷ひ心得違ひをせし事故、内分にして親達ちから、能く當人へ後々にて、意見をいたして戒めたら、浪風立たずに濟むといふもの、何と二通の其手紙は、火中いたして燒き捨てるか、手前に預けて下さらぬか。

太左　イヤさう云つてくれさつしやれば、元より事は好みましねえ、預ける譯にも行きましねえが、持て歸つて二通共燒き捨てる事にしますべえから、夫でなんにも云はねえで、俺に免じて勘辨さつしやい。

ト此間に丹次お龜に承知しろといふこなし。お龜も是非なく得心する。

お龜　勘辨ならない所ですが、たま〱お客においでなすつた、旦那にまでも御苦勞掛けては、お氣の毒でなりませんから、私も今日は不肖しませう。

太左　ヤレ〱夫は有難え、夫ぢやア是は二通とも、持て歸つて燒き捨てべえ。

ト二通の文を卷いて、懐中する。多助安心したるこなしにて、

多助　伯父さん、大きに有難うがんした。

太左　ヤイ多助よ、われに俺ア云つて置くだが、去年の秋われが親父が死んだ時に、枕元へ俺ア呼んで云ふのには、多助とお榮は從妹同士、今のお龜は多助の爲には、實の

伯母に違えねえから、一ツ家に血統が集まり、此内相談するだから、鹽原の家に取つちやア此位え目出度え事があんめえから、多助とお榮と夫婦別れでもする様な事があつたら、われ後見人になつて、どうか鹽原の家に疵の附かねえ様に頼むと云つて死んだぞよ。其角右衞門どんの遺言を、此手紙の様に反故にされては駄目だぞ、馬鹿野郎メ、われが様な意氣地なしがあるかい、一軒の主人が、母親に打たれると云ふ様な、情ねえ事があるもんぢやアねえ、氣イ附けにやアいかねえぞ。

ト　お龜に當てつけていふ。

多助　ハイ／＼重々濟みましねえ、どうぞ堪忍してくれさつせえ、おつ母さん、よく堪忍してくだせえました、有難うがんす。

お龜　何も私に禮を云ふにやア及ばないから、旦那や伯父さんにお禮を申して、早く元村へ行くとしなよ。

多助　ハイ直ぐと是から參りやす。

太左　元村へ何しに行くだ。

多助　ハイ小麥イ頼んで來やしたから、馬につけて行くでがんす。

太左　さうか、夫なら早く行つて來ウよ。そウハア彼是日暮前だが、雨が降つて來さうだから、雨具持つて行くがえゝぞ。

多助　ハイ、さう爲やんせう。

お龜　桐油がまだ新しいから、破かない様にしておくれ。

多助　ハイ／＼氣を付けやす、夫ぢやアおつ母さん行つて來やす。

太左　俺もそウお暇しべエ、誠にハア旦那方に對しお聞きづれえ事をお耳に入れやんして、どうぞ御免下せえやし、サア多助行くべえ。

多助　ハイ、お二人様御緩りとなせえやんし。

ト　兩人立上る、唄になり、下手へはひる。丹三郎お榮面目なきこなし、丹次は二人に向ひ、

丹次　コレ丹三郎、艶書を落し太左衞門に、拾はれるなぞとは、餘りと云へば白痴た奴だ、其方の疵にて身共等、思はぬ面皮をかゝねばならぬ。

お龜　イエ丹三郎さんばかりぢやアない、お榮もあんまり蓮葉だから、こんな間違ひが出來ると云ふもの、氣を附けなけりやアいけないよ。

丹三　面目もなき拙者の種相、今考へれば入口で、祭文讀みに突き當たられ、アノ時落したに違ひない。

お龜　どうぞ是から氣を附けますから、今日の所は旦那樣、御勘辨して上げて下さいまし。

丹次　今更申して返らぬ事故、今日の所は爲方がないが、以後は此度氣を附けたがよい。

お龜　私も旦那に内々で、御相談したい事があるから、お榮お前も丹三郎樣をお連れ申して、今の内積る噺しをしたがよい。

お榮　テモ有難い其お許し、丹三郎さん彼方へ參りませう。

丹三　夫では御免下さりませ。

丹次　五八やお六に聞かれぬ樣、靜かに噺しをいたすがよいぞ。

お榮　ハイ、知れぬ樣にいたします。

ト丹三郎お榮いそ〳〵として、上手の家體へはひる。

お龜　早くアノ子も表向き、御新造にしてやり度うございます。

丹次　お榮が三田に居た時分から、丹三郎と馴染とやら、よく〳〵深い緣と見えるの。

お龜　夫につけてもモシ旦那え、アノ太左衞門爺イに氣取られては、モウ迂濶々々多助を責めても居られますまい、いゝ御工風はありませんかえ。

丹次　工風と云つて別にないが、丹三郎にも云ひ聞かせ、當分の中二人共足を拔くより外はあるまい、アノ茫然の多助許りなら、別して恐れる事もないが、アノ伯父が氣取たからには、コリヤうつかりしては居られぬわえ。

お龜　寧の事にアノ多助を、貴方殺して下さいな。

丹次　殺すのは譯はないが、今も云ふアノ爺イが、氣取つて見れば我々が、直ぐと殺した疑ひ掛かり、屋敷の聞えも憚りあれば、矢張り足でも拔かねばなるまい。

お龜　其所が御相談で御座います、お作が多助に思ひを掛け、附け文をしたのは全く故、夫を遺恨に許嫁の、圓次郎が附け覘ひ、多助を途中で殺した樣に、拵へましたら貴方がたへ、ヨモヤ疑ひは掛かりますまいかと、今私が考へました。

丹次　何さま夫も能からうが、成らう事なら掛け離れた、遠い所で人知れず、バッサリやつて終ひたい。

お龜　恰度夫には幸ひな、今日の歸りがとつぷりと夜に入る道の暗まぎれ、モウ斯うなつたら一日も、早くやり度うございます。

ト丹次思入あつて、

丹次　成程是から元村迄、一里餘もある作場道、歸りは暮

るゝに違ひなし。

お龜　其闇の夜も暮間ひから、催す雨が降り出せば、往來の者は一人もなく、

丹次　馬を引つ張り濡れ鼠で、歸る所が此方の附目、

お龜　ホンニ桐油に鹽原と、印してあるのがよい目標、

丹次　コリヤ刀より竹槍で、殺した方が後日の爲だ。

お龜　竹槍でも死ねますかえ。

丹次　急所を抉ぐれば、

トうなづくを木の頭、

タツタ一ト突きだ。

ト此云ひ合せよろしく、時の鐘、合方にて、　道具廻る

本舞臺一面の平舞臺、後ろ小松原の中遠見、諸所に松の立木、此上下に掛け稲の稲叢、總て沼田在田圃道、夜中の體、雨の音、合方にて道具止る。

ト右の合方にて、上手より百姓丸助、笠を冠り、糸だてを引つ掛け、入戸村と印せし弓張提灯を持つて出る、下の方より同じ拵への百姓角藏、三太前栽籠を天秤棒に結びつけしを擔ぎ出て、双方行き合ひ、

丸助　ヤア下新田の角藏どんでねえか、三太ア連れてどけえ行くだ。

角藏　ヤア丸助どんか、畑物を持つて問屋へ行つたが、えらア仕切が廉いので、弱つたよ。

丸助　弱つたと云やア、此降りぢやア明日は雨だんべえ。

三太　今朝ッから泣き出しさうな空だつたが、段々ハア本降りになつたよ。

角藏　さうしてお前どけえ行くだえ。

丸助　庄屋様の用で、宿へ行つたが、お前等の様に稼いだら金の置き場があんめえにナア。

角藏　ヤア駄目なこんだ、溜りッこはねえだよ。

三太　アレ又いかく曇つて來たぞ。

丸助　おかゝが待つて居べエ、早く歸れよ。

角藏　そりやハアお互えだんべエ。

ト三人別れて上下へはひる。後合方になり、向うより多助菅笠を冠り、糸立てを引つ掛け、鹽原と記せし新しき桐油を鞍に掛けし馬を曳き出て、舞臺へかゝる。此時馬は立ち止つて動かぬ故、手綱を引ッ張つて、

多助　コレ歩かねえかよ、どうしたか青、困るべエぢやねえか、荷イみんなおろして仕舞つて、歩けねえ事はあん

めえ、何で足止めたゞよ、遲く歸ると又母樣が、やかましく云ふだから、急いでくんろよ、ハイ〳〵。

ト無理に曳いて舞臺へ來る、下手にて又止る。引つ張れば後跡へ下がる。

さう跡へ、下がつちやア困るべエぢやアねえか青、何うしたゞ。コレ青、青、困つたこんだナ。

ト當惑の思入、右の合方になり、向うより百姓圓次郎同じく笠を冠り、糸立荷籠を背負ひ出て、舞臺へ來て上の方をすかし見て、

圓次　其所に居るは、誰だえ。

多助　オヽ、圓次どんか。

圓次　おめえ何處へ行つたゞえ。

多助　おらア元村迄小麥イ送つて歸りだが、青がどうしても動かなくなつて、打つても擲えても歩かねえで後へべエ下るので、こんな弱つた事はねえだよ。

圓次　そりやア困つたナア、俺見てやるべエ。

ト圓次郎荷を下ろして、馬の傍へ寄り、

コレ青よ、どうしたゞ、コレ後へ下るが、足でもどうかしたか、痛める氣遣えはねえが、コレ多助の母樣は喧しいから、早く行つてやれよ、青どうした、われ臆病でも惡いか、誠に困つたナ、俺曳いてくれべエ、ハイ〳〵〳〵。

ト手綱を取つて、曳くと馬は前へ出る。

此通り歩くでねえか。

多助　オヽ歩く樣になつたか、誠に有難うがんす、俺手に負えねえから、どうしべエかと思つた、サ一緒に參りますべエ。

ト代つて曳くと馬又止まる。

アレ又止まつたか、青、どうしたゞ。

圓次　コレ青よ、今われ歩いたぢやアねえか、どうしたら動かねえか、ハイ〳〵〳〵。

ト又歩く。

オヽ歩いて來た。

多助　誠に有難え、どんな重い荷イ附けても、こんな事はついにねえに、圓次どんが御座んねえとどうすべエと思つたよ、ハイ〳〵〳〵。

ト代つて曳くと、又止る。

アレ又動かねえぞ。

圓次　又止まつたか、よし〳〵そんなら多助どん、かうしべエ、俺代つて曳いてやんべえから、おめえ後から來てくれさつせえ。

多助　さうして呉れると、俺アいかく助かりますだ、どうぞ代つて呉れさつせえ。

圓次　そんなら此荷イ忘れめえぞ、コレ青よ、今度は俺だぞ、ハイ〳〵。

　ト圓次郎曳けば馬は歩く。

こんな人を見る奴はねえぞ。

ト以前の合方にて、圓次郎馬を曳いて上手へはひる。

多助是を見送つて、

多助　ア、友達は持たうものだ、圓次どんが來たばかりで俺も太く助かつた、何にしても不思議でなんねえは、今夜に限つてアノ青が、俺の云ふ事を聞かねえとは、どういふ理窟か分んねえ、モウ今年で十年べえも、曳き馴れてゐるのに夫に反いて圓次どんの云ふ事を聞いて、歩き出すたア、矢つ張り女房のお榮なんぞに、馬鹿にされる俺だから、馬に迄馬鹿にされるか、ア、情ねえこんたナア。

　トホロリとして心附き、

是はおえねえ、圓次どんが面白がつて、俺に構はずヅンヅン行つてしまつた。ドレ遅れぬ様に急ぐべエ。

ト圓次郎の置いて行つた荷をかつぎ、

どつこいしよ、コリヤまア太く重い荷だぞ。

ト急ぎ足に上手へはひる。行鳴物にて、　　道具廻る

本舞臺眞中一間程誂への常足の二重、少し跡へ下げ、此上に庚申塚、草土手の踏込み、上の方に松の木、下の方に流の心にて土手板、濱作、此外舞臺一面に芒を植込み、後ろ黒幕、此褄廻り芒原、上下薄込みの張物にて見切り、總て沼田在作場道夜の體。以前の鳴物にて道具止る。

ト向うより、圓次郎馬を曳いて出て花道にて、

圓次　雨はやう〳〵止んだけんど、鼻ア抓まれても知んねえ闇の晩だ。コレ青よ、田の中へ嵌るめえぞ、ハイ〳〵ハイ。

ト舞臺へ來る、此時後ろの庚申塚の蔭より、原丹次出て、冠り尻はし折り、大小にて竹槍を持つて窺ひ寄り、圓次郎の脇腹を貫く、圓次郎は倒れる。馬は跡じさりをして下の方へ下がる、丹次は差寄つて止刀を刺さうとする時、人の來る氣勢に慌て、上手へ逃げてはひる。向うより多助は圓次郎の荷を擔いで出て、花道にて肩



な代へ、

多助　こんなに重い荷たア思はなんだが、かうして見ると圓次どんは、俺より力量が上手と見える、コレまア早く追つ付きてえものだ。

ト叢臺へ來て、死骸に躓き、

ア、吃驚した、人が寢て居る樣だ。

トすかして見て、

ヤ、コリヤ何だか、唸つて居るぞ。

ト爰へ下手より馬前へ出て、多助の肩の所へ首を出す故、心附き、

ヤ、青ぢやアねえか、そんならもしや、爰に居るのは。

ト荷を下ろす、此時後ろ黒幕を切つて落す、奥深かに芒原の遠見になり、切り出しの月を出す、此月明かりにて、圓次郎の手負ひを見て、

オ、圓次どんだ〳〵、ヤア〳〵コリヤ血だらけになつて、そんなら爰でオツ斬られたか、コレ圓次どん、氣イ確り持たつせえ、圓次どん〳〵。

ト抱き起す、是にて圓次郎心付き、

圓次　オ、多助どん、こんた何處も突かれねえか。

多助　イヤ何ともねえ、俺の事より此方の樣子、どうしたこんだかブツ魂消た、早く樣子を聞かしてくんせえ。

圓次　どうにもかうにも、爰え來ると、突然俺が横ツ腹へ槍突つ込まれて苦しくつてなんねえ、迚も俺ア生きられねえ、構はず爰を逃げたが宜えぞ。

多助　イヤ〳〵あんで逃げられべエ、此方が先きへ來なけりやア、俺が青を曳いて通り、此の苦しみを傍にあやなんねえ、爰で一緒にひつ斬られるとも、逃げるこんだやアがんせんから、そんな弱え事云はねえで、俺と一緒に家へ歸り、早く療治して治つてくんなよ。

圓次　イヤ〳〵是りやア、モウ駄目だ、迚も助からねえから、爰でおつ死んでも是非ねえこんだが、死ぬ前方にタツタ一ト言、云つて置きてえ事があるだよ。

多助　ナニ俺に云つて置きてえ事とは。

ト蟲笛入りの合方になり、

圓次　錢も取らずに逃げたから、追剝ぎに出たんでもあんめえ、俺ア何も人に恨まれ、遺恨遺恨を受ける譯もねえから、是りやア此方を殺さうといふ企みでしたに違えねえ、此頃村の噂を聞くに、おめえ等の家へ連子連れで這入り込む者があつて、後家や娘つ子とちよゝくり合ひ、此方を邪魔にするとの事、うつかりしたら此通り、おツ殺

されて仕舞ふべエから、用心せにやアなんねえぞ、今夜の中にもツン逃げて、身を安泰にしてくンろ、生若え身でこんな事を、異見がましく云つて死ぬのも、此方の分家、太左衛門どんの處え、養子に行く俺だから、他人の樣にも思はねえ、斯ういふ中も苦しくツて、咽が乾ッ付いてなんねえから、水ウ一杯飲ませてくんせえ、ア、苦しい、水を〳〵。

　ト苦しき中に多助を氣遣ふ、多助涙を拭ひ、

多助　オ、よく云つて呉れた、有難えぞ。俺が死ぬなア厭はねえが、アノ鹽原の家を潰しちやア、死んだ父樣に濟まねえから、此方の今の異見につき、直ぐに今夜ツン逃げてどんな山ン中へでも身を隱し、先祖の跡を立てにやアなんねえ、われもそんな弱い氣イ持たずに、死なねえ樣にしてくんろ。

　ト云ふ中圓次郎はうつとりとなるを見て、

コレ圓次どん、どうしたゞ、ア、モウロイ利けねえか、コレ圓次どん、確りさつせえ。

　トいふ中、圓次郎はがつくりとなる。

コリヤもう、どうにもなんねえか、ア、情ねえこんだナア。

　ト泣く、是より床の淨瑠璃になり、

竹本〽秋の夜を名殘りの露と消えて行く、草の莚のあはれにも、友音に啼くやきりぎりす、扨も果敢なき世を喞ち、

　ト多助死骸を見て愁ひのこなし、

ア、コレ、こんなになると知つたなら、水が一口飲みてえと、今云ひ續けに云つて居たに、せめて流れの水を掬ひ、末期に飲ませてやつたものを、助けたいのが一杯で、水を飲ましたら惡かんべエと、考えたのが惡かつた、モウ通らねえかア知んねえが、ロイ濕してやるとしべエ。

〽涙ながらに搔い立つて結ぶ流れの水さへも、雨に溢るる胸一杯、諸手に汲んで手向草、無慘死骸も道端の片しへ寄せて俗名を唱ふるも又涙なり。

　ト多助下手の流れの水を掬ひ、圓次郎の口へ注ぎ、死骸を松の根方へ寝かし替へて、

南無俗名圓次郎どん、こんたも思ひ掛けねえこんで、俺の代りに殺されたは嘸はア無念でがんせうが、敵やア俺が屹度取り、此方の異見で身を隱し、先祖の跡を立てた時にやア、立派に法事を勸めべエから、迷はず成佛してくんせえ、青を爰へ置きやんすから、通夜だと思つて勘

辨して、人の來る迄居てくんせえ、書置きをして此方の家へは、俺が直ぐに知らせべエ、南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛。

へ聲も曇りて身の詫びを、回向に誠顯はるゝ其愁傷を感じけん聞き居る馬も打ち萎れ、物云ひたげにさし寄れば

ト多助回向をして居る、此時下手に居た馬は多助の側へ來て、首をうなだれ愁ひのこなし、多助是を見て、

コレ青よ、われとは久しい馴染であつたナア。

ト轡面を取つて前へ出る、床の合方になり、

われは大原村の九兵衞どんが、南部の盛岡の市で五兩五粒で買つて來たを、俺の父樣に買はれて來たので、其時俺は八歳であつたが、鹽原の家へ養子に來る前で、われも俺や一緒に來るんで、俺はわれが脊中へ乘つて此沼田へ來て永え馴染、おらが十二の時から曳き馴れて斯うやつて永え間、一ツ所に居りやア兄弟も同樣だ、わりやア達者な馬で、今迄ないら一つ起して、くさみ一つ爲た事のねえ馬だ、夫に十六貫目の四斗俵二俵附けるなら當然だが、ハア三俵となると勞れべエと思つて、山坂ア越える時は俺が一俵擔いで遣る樣にするから、身體も今迄頑丈で、足イ血溜り一つ出來た事なし、能く働いてくれたから、だん／＼年イとるに從ひ、樂ウさせてやんべエと思つてゐたが、俺アどうあつてもアノ家には居られねえ、われ知つての通り、家の母樣と女房が了簡違えな奴で、俺を殺すべエとするだ、といふ譯は、われも今見る通りだ、一方ならねえ恩のある、圓次どんを凍え置いて逃げると云ふは濟まねえ譯だが、末期の際に云つた事が俺も胸に當つたから、此儘國を立退くだが、心殘りは圓次どんの、此死骸とアノ荷物だ、われ爰に居て番をして、俺の代りをしてくんろよ。われも只の馬と違ふから、是迄俺を庇つてくれたが、どうでも別れねばなんねえから、爰へ置いて行くだが、實は別れが辛えぞよ。

へ人に物云ふ如くにて、言ひ聞かすれば頭をうな垂れ、見るも哀れの思ひなり。

ト馬は愁ひのさま、多助は是を見て、

俺ア是から江戸へ行き、奉公をして金エ溜めて歸つて來るから、われエ夫迄達者で居てくんろよ、ヤ、俺が出れば定めて五八も追ん出されべエ、五八が出れば誰もわれに構ふ者はねえから、われに惡な喰ひ物も當がふめえ、どうも可哀さうでなんねえから、俺も出めえと思ふけんど、俺が家に居れば殺されてしまふに依つて、出て行く

んだから、どうぞわれ辛え處を辛抱して居てくんろ、ヤ、靑よ……靑よ。
〽撫でさすりつゝ懐舊の涙と共に云ひ聞かせば、畜類ながら兩の眼に溜める涙を、草の葉に拭く間もあらで又溜ろ、涙の果し泣く態は物云はぬ程あはれなり。
ト馬も首うな垂れる。
オ、靑、泣いてくれるか有難え、畜生でさへ恩義を知り、名殘りを惜しんで泣いてくれるに、夫に引き替へ女房お榮、人の道に缺けた奴、現在亭主の俺を殺すべエとする人非人、辛かんべえが辛抱してくんろ。ア、いつ迄云つても名殘りは盡きねえ。靑よ、是が別れだぞよ。
〽と云ひ捨てゝ死骸の方を伏し拜み、直す荷物も風除けに圍ふ屛風の形代や手綱の端を松の根へ結べどこれが憂き別れ、心弱くて叶はじと、振り拂ひ行く袖袂、行くに行かれぬ恩愛の絆に又も困り果て、
ト此中多助下手にある荷物を死骸の側へ置き、手綱を松の木へ結び下手へ行かうとすると、馬は多助の袖をくはへて放さぬに、多助振り拂へば、又引き戻す、多助は困じ果て、
オ、まだ止めるか困つた奴だ、俺もわれが可哀さうだから、別れて行き度くねえけれど、今云ふ通り是非がねえこんだ。爰放せ、エ、放せといふに。
〽口に叱れど不便さにあはれいや増す鐘の聲、心を鬼に振り切り行く、袖に涙の雨上がり、踏み出す足は住み馴れし土地の名殘りを見き馴れし、
ト此間に舞臺半廻しになる。
〽駒の名殘りに身代りの死骸を後に拜みつゝ、見返り見返り、
ト此中多助下手へ行き、馬は見送りながら身を悶く事なぞあつて、トゞ首をうな垂れて愁ひの思入、多助是を見て、花道にて泣き伏す、床の三重にて、多助は思ひ返して向うへ早足にはひる。馬は刎れ上る模樣にて

幕

三幕目

鹽原宅馬部屋の場
同奥座敷婚禮の場

役名――分家太左衛門、原丹次、原丹三郎、名主惣右衛門、下男五八、下女お六、魚賣喇八、百姓

大勢、鹽原後家お龜、同姓お榮、所の男の子、同
女の子。

本舞臺平舞臺、上の方九尺、前づら茅葺の庇を見せ、此下手に半鐘をつるしある事、是より下手へ黄心に塀家の勝手、正面見附き戸袋のある中窓、木の格子を打ち附け、此下障子の出入り口、鴨居の上白津暖塗り、敷居より竹のしたみ、九尺の中一間あけ放しの入口、舞臺正面眞中に板ぶき葺下ろし、丸太柱、此内に大きな土竈、大釜を掛け、火を焚きつけてある、少し下寄り、九尺茅葺の前面、一間の入口、上の方壁、三方板羽目の廐、此中に青鹿毛の馬繫ぎある事。總て鹽原宅廐の體。爰に田舍の魚屋干物のはひつた箱を持ち、○△の百姓二人畑歸りの拵へにて馬鍬を濯で洗つてゐる、廐の中に五八、大盥にて馬に湯を遣はしてゐる。在郷唄にて幕明く。

○ 魚屋の蛸八さん、此頃は不漁だといふから、嘸儲かるべえなア。

蛸八 イヤ不漁だら儲かると言ふが分かんねえ。

○ ナニ分らねえ事があるもんか、魚屋は江戸が不漁だと、代物を貯つて置いて、目の赤えボロ〳〵の一ト鹽や、喰ふと頭痛のする鯖なんぞを滅法不當賣るんだから、夫でいゝ錢が儲かるだらうといふ事よ。

蛸八 夫は素人目から見るとそんなものだが、さう旨くは問屋でおろしましねえ。

△ ときに、今日は奥で、何か生臭え物を買ふのかね。

蛸八 あんだか今日は入用だから、頭の附いた魚ア持つて來うと、先刻お六どんが來たけんど、鱈の干物の外は頭の附いた物はねえから、干物を持つて來やんした。

○ 何だ今日は生臭が入用だつて、ハテナ何か目出度えこんでもあるのか、ノウ五八。

ト五八は馬に湯を使はせながら、

五八 夫だからア俺ア今朝ッから、糞ッ腹が立つてたんねえと云ふんだ。

△ 夫りやアどういふ譯だ。

ト合方になり、五八は手を休めて、

五八 まア聞けよ、手めえ達も知つてる通り、家の跡取りの多助さんが家出をしなすつた、是にも海山噺しがあるこんだが、まだ歸るとも歸らねえとも片がつかねえに、家の後家めが名主を抱き込んで・アノ家へばつかり這入

り込む、城内の丹次てえ奴の倅の、生ッ白けた丹三郎と云ふ息子と、家のお榮ッ子と娶合せて夫婦にするてえだ、夫で今夜婚禮だつてだよ、俺可笑くツて堪らねえ。シッシッシッ。

ト馬に裾なさせながら、

馬鹿にも程があるもんだよ。

ト腹の立つこなし。

○ そいつア魂消た、一疋の馬が狂えば、千疋の馬が狂ふと、先の旦那が亡くなつてから、後家メがエラ巾をするだらう。

△ 何だか分らねえ侍を引き摺り込み、其上ならずお榮ッ子を、其又倅に當てがふとは、五八が業を煮やすも尤もだ。

ト爰へ上手の入口より、下女お六荷ひ桶へ水を入れて擔いで出て、蛸八を見て、

お六 魚屋さん、何を遊んで居るだ、後家樣がどなつてゐるに、早く腐つた魚でもたかく賣りつけてやんなんしよ。

蛸八 夫は又叱言だ、ドレ、此の干物で勘辨して貰ふとしべエ。

ト奥へはひる、お六は水を大盥の中へ明ける。百姓見て、

○ ヤアお六ッ子、亭主だもんだから、手傳つてゐるな。

お六 アレ、又そんなこんをいふと、聞かねえよ。

ト立つかゝる。

△ われに捉まつてなるもんか、糞力があるから、作が樣な痩男はおッ死ぬぞ。

五八 おッ死ね、早くおッ死ね、家の後家や丹次メがおッ死にさえすりやア、此家は安泰だ。

○ ホンにさうだ、あんな人遣えのいゝ多助さんが居なくなり、

△ アンナ人遣ひの惡い後家メが殘るとは、人間萬事大王の馬だ。

五八 コレ大王の馬ッちうがあるか、夫は寨王の馬といふのだ。

○ なんだ、大と寨位の間違えは、有り内だ。

△ 臺所へ行つて飯でも喰つて來ようか。

○ お六ッ子、馬の跡で御亭主に裾でも遣つて貰ふがええぞ。

お六 又だめエこくか。

△　怒るから稽だんべエ。

○　サア／＼、行かう／＼。

ト此鄉唄にて、百姓二人は上手へはひる。

五八　湯がねえから、汲んで來べエ。

お六　私が汲んで來やんすから、まア一服やんなんし。

五八　有難え、ドレ一服やんべエか。

ト五八煙草を喫む、お六は大釜より湯を汲み荷ひにて運ぶ。

五八　いよ／＼今日はお榮ッ子と、丹三郎の野郎と婚禮をするといふので、俺ア薄ッ膳が煮えてなんねえのに、丹次の奴メえらア着飾つて來やアがつた、夫にしても不思議なは、青メが先刻丹次の面ア見て驚いたが、畜生といふものは何でも何か見た事は忘ねえと見える。

お六　ほんたうに丹次樣を見た時の顏は、恐ろしかつたが、さうして馬が何か見た事でもあるのかねえ。

五八　サア、見た事と云ふなア、大きな聲ぢやア云へねえが、圓次どんを殺したのは、なんでも丹次の奴に違えねえと、俺ア思つてるだアヨ。

お六　夫では圓次さんを殺したは。

五八　必定彼奴に違えねえだ。

ト此時廐の中より、馬は首を出す、お六驚き、

お六　アレ、私の襟を舐めたよ。

五八　夫ではおめえら、何かする所を青に見られたのだんべ。

お六　オヤ

ト一寸考へるを道具替りの知らせにて、

いやだなう。

トお六恥かしきこなし、五八は馬の手綱を引く、このもやうにて、

道具廻る

本舞臺一面の平舞臺、上手一間の床の間、是に目出度き繪の懸物、銅の花活けに松竹梅を活け、是に續いて上下折り廻して、小形唐紙形の襖、よき所に朝顏形の雪洞附きの燭臺を灯し、眞中に大三方へ熨斗古銅の龜の置物、此外吸物膳杯臺、銚子など、總て鹽原宅廣座敷婚禮の體、爰に上手に名主惣右衞門、羽織袴其傍に原丹次、次ぎに丹三郎、何れも羽織袴、下の方にお龜、次ぎにお榮、紋附きの拵へ、お榮は綿帽子を冠りて住ひ、女蝶男蝶の子供禮服にて銚子を持つて控へゐる、此模樣下座の諷ひにて道具止ま

る。

丹次　扨だん／＼とのお世話にて、今日は彌々祝言と迄に至り、千萬忝う御座る。

惣右　イヤ／＼諸事行届かぬ勝ちでござりませうが、先づ是で安心と申すもので御座ります。

お亀　本當に貴方樣が入らつしやればこそ、か樣に祝言をする樣になりましたので御座ります。サア、お榮から早くお聟樣へ。

丹三　左樣なれば、御免下されい。

ト女蝶男蝶前へ進み、丹三郎に杯を勸め、兩人酌をしようとする、此時下手奥にて、

太左　イヤ其杯は待つてくれせエ。

ト皆々驚く、合方替つて、下手の襖の中より、太左衛門出て、座敷の眞中へ住ふ。

惣右　此方は、當家の分家太左衛門、

丹次　此婚禮の席へ参られ、杯を止められたは、

お亀　思ひ掛けない事で御座いますね。

ト太左衛門は腹の立つこなしにて、

太左　思ひ掛けねえこんだ、其思ひ掛けねえこんだといふのは俺の方でいふ詞だ。コレ、何で此分家の私に一言の相談もなく、お榮の聟を取らつしやる。名主どんが御座つても構はねえ、其譯を聞きやんせう。

ト威猛高になつて詰寄る。

お亀　ホンニ忘れて居りましたよ、お六に貴方の所へ参れと申し付けましたに。

トいふを冠せて、

太左　イヤ逃げ口上俺ア聞かねえ、誰が世話アしても此祝言は、分家の太左衛門が不承知で御座えますぞ。

ト大聲に云ふを和めて、

お亀　サア其所が物の間違ひ、まア私が申す事を、お聞き下さいまし。

太左　オ、面白い、云ふ事があらば話さつしやい、聞きますべエ。

お亀　どうぞ私の心の中を、お察しなすつて下さいましよ。

ト合方になり、

實はお前樣の所へお知らせ申し、又御相談もいたさねばなりませんが、是にはだん／＼入り譯のある事で、兎角内々で内端だけで極めて置きたい私の心、祝言とは云ひながら、ホンの内々、先月多助が家出いたしましてからの私の心細さ、是にお在の丹次樣が種々との御心もじ、

又名主樣のお指圖で、斯う入組んだ家の事故、片時も男の主人がなくつては、先づ第一に人の侮りを受け、多くの人は遣へねもの、と云うて百姓から聟を取つては、矢つ張り親御存生の樣に巾が利かぬ、所で此丹次樣の御子息丹三郎樣、幸ひ侍をお嫌ひなさるによつて、娘が聟がね、是といふも折角先代が拵へた、田地田畑人手に渡すまいといふ一心から、家の爲を思うての事、どうぞ太左衛門樣にも、若い者夫婦の後ろ見して、鹽原の家を守り立てゝ下さいまし。

太左　お詞の中だが、何と云はつしやる、ホンの內端の內內でとは、此太左衛門は安の家の內端ではござんねえのかね。

お龜　エ、。

太左　まだ云はねえでなんねえのは名主樣だ。

ト惣右衛門の方へ向ひ、

苟くも此一村の束ねをなさる惣右衛門殿、支配中で肝心な、跡取り息子の多助が家出した事をお聞きなせえましたら、直ぐにもお龜なり私をお役宅へ呼んで、どういふ譯で家出したかと、譯を糺さにやならねえが、名主樣の役目でがんせう。多助がまだ生きたか死んだか知んねえ中に、餘所から許婚、イヤ許婚所ぢやアねえ、先代の遺言で夫婦にしたお榮、夫に聟を取るといふ理窟が御座えますか、夫ともこんな我儘しても大事ねえと云ふ、御領主樣からお觸れでも御座りやしたか、貴方の心得方が承り度うがんすナ。

ト肩をいからして、畳みかけていふ。

惣右　コレ太左衛門、そりや餘り詞が過ぎやせねえか。

太左　イヤ詞は過ぎましねえ、譯の分らねえ名主どんだから、分からねえと言ひやした。

惣右　コレ、何は兎もあれ、一村の束ねをする惣右衛門、俺に向かつて、譯が分んねえとは、失禮だんべエぞ。

太左　失禮は承知でいひやす、夫がどうしたゞ。

惣右　夫だから斯うしてやるワ。

ト惣右衛門立ち懸かる、太左衛門腕捲りをする、此時奥より五八出て、

五八　斯うなつたら丹次親子を、早く叩き出して仕舞ふがえゝ、丹三郎め外へ出てうせろ。

ト丹三郎の手を取らうとする。

丹三　其方如きの存ぜし事ではない、立ち騒がずと控へて居れ。（ト五八を投げる。）

五八　アイタヽヽヽ、ウヌ今に遺趣は返してやるぞ。

ト下手へはひる。惣右衛門立上つて、

惣右　名主に向つて失禮なる太左衛門、モウ勘辨なんねえぞ。

ト立ち上がる丹次制して、

丹次　まづお鎮まり下さい。

惣右　夫でも餘り。

丹次　まづ／＼私にお任せ下さい。

ト和め、下手へ下つて手を支へ、

扨太左衛門殿、御立腹は御尤も千萬、全く此事はお龜殿より貴殿方へ御相談をいたさぬが無念、コリヤ實に惡う御座つた、が、サア其所が女子、隨分平常激しきお方で御座るが、女賢しうして牛賣り損ねるの譬、又某とても一人の倅、チト斯樣申しては如何なものぢやが、百姓の聟にいたすは、甚だ不足では御座るが、お龜殿、惣右衛門殿、折入つてのお頼み故、其筋の重役へ内々相談に及びし所、沼田では一二を爭ふ鹽原の家筋、滿更土百姓でもないから、緣組みいたしてもよからうと、御家老樣より御内々でおつしやつて下された故、お榮殿へめあはしたのぢや。

トいふを冠せて、

太左　滿更土百姓でもねえから、聟にやつたと、是はお武家樣のお詞とも存じましねえ。成程士農工商の四ツの民の上に立つお侍は、尊いもので御座へませうが、我々を土百姓とは餘りの詞だ、聞き捨てにはなんねえね。

トいきまく。

丹次　夫は只今ツイ口が辷り過ぎて申した事、夫を上げ足をお取りなすつて、直ぐ樣躍起となつての仰せでは。

太左　お困りなさるなら、聟の丹三郎さんをお連れなすつて、直ぐに歸つて貰ひやせう。

丹次　夫ぢやと申して、婚禮をしかけたものを。

太左　斯ういや不義の證據があるだから、此太左衛門は不承知でがんす。

ト前幕の文を出す。

丹次　夫ぢやと申して。

太左　引取らつしやるか。

丹次　サア、夫は。

太左　サア、

丹次　サア、

兩人　サア／＼／＼。

太左　とつと、連れて行つてくんせえ。
ト きつと云ふ、丹次お龜親子は顏見合せ當惑のこなし、此時後の方にて、早太鼓竹螺聞ゆる、是を聞き耳立て
惣太　俄かに聞えるアノ竹螺、村に何かはだつたのか。
太左　此竹螺は村の者が、豫々憎む丹次親子を、多勢寄つて追ひ出す手筈だ。
惣右　徒黨をされては大變ぢや。
お龜　此鹽原の家の事を、大事と思つてした事を、
丹次　仇に思ふは土民の愚かさ。
太左　何ぞと云ふと土民々々と、其土ほぜりの手並みを見せるぞ。
丹三　此上は是非に及ばぬ、お榮は拙者が召連れますれば、父上には少しも早く。
丹次　いかにも、立退く用意をいたさう。
お龜　そんなら日頃の貯えを。
太左　イヽヤ、土藏へは入れねえぞ。
丹次　妨げいたすと、
ト刀を拔くを、道具替りの知らせ。
許さぬぞ。
ト立ち上る、太左衞門は「拔いた〳〵」と叫びながら

奧へ逃げ込む、丹三郎はお榮を連れて下手へはひる、丹次お龜は身支度する、竹螺、早太鼓に。　道具廻る。
本舞臺元の厩の道具へ戻る、右の合方、鳴物にて道具止る。
ト上手より、丹三郎お榮出て行かうとする、奧より五八出て、
五八　どつこい、やらねえぞ。
丹三　妨げいたすと、ブッ放すぞ。
五八　ぶツ斬れるなら斬つて見ろ、俺の力を見せてやんべえ。
ト有合ふ熊手にて、兩人を引き戻す、丹三郎は刀を拔き立廻り、五八は厩の中へ逃げ込む、丹三郎追つ駈けて立廻りの中、馬の端綱を斬る、是にて馬は綱を放れて荒れ出す事あつて、トヾお榮に嚙みつかんとする。
お榮　アレー。
ト逃げる中に躓いて轉ぶを、馬は肩口を一嚙みして、丹三郎に向う、丹三郎刀にて斬拂ふ中、過つて片膝つくを伸し懸つて嚙みつき殺す、お榮逃げ廻るを五八から

む、馬は割つてはひり、お榮の袂をくはへて引き戻し、お榮の胸へ喰ひつく、五八見てびつくりして、

五八　ヤア、青が二人を喰ひ殺した。

ト　いひつゝ下手へ逃げてはひる。馬は二人を喰ひ殺して下手の奥へ暴れてはひる。向うより、百姓多勢、鋤鍬竹槍など持つて出て來て、

一　ヤ、あれに人が倒れてゐる。

二　若え男に女だぞ。

三　鹽原の徒者お榮ッ子に違えねえ。

四　男は御城内の原丹次の伜であんべエ。

ト　舞臺へ來て、死骸を見て、

五　ヤ、厩にいつもの青が居ねえ。

六　夫では青が暴れ出して、

七　此の二人を喰ひ殺したか。

八　アノ青は多助どんが、大層可愛がつた馬だから、其恩返しをしたゞんべエ。

九　畜生でさえ恩を知るに、人の皮を冠りながら、

十　アノ恩知らずのお龜後家。

一　早く丹次と二人も、捜し出して追ひ出さう。

二　サア／＼早く。

十人　行くべエ／＼。

ト　竹槍にて、四方を捜す、此時上手より惣右衞門逃げて來る。

惣右　こんた衆はとんでもねえ、徒黨はお上の御法度だぞ。

一　法度も何も要るものか。

二　欲張り名主も一つ穴。

三　構ふものか、

十人　やッ附けろ／＼。

ト　立ち騒ぐ。

惣右　コレ、名主の詞を聞かねえのか。

四　なんの云ふ事を聞くものか。

五　名主ぐるめやッ付けろ。

十人　サア、押しかけろ／＼。

ト　上手へ行くを、惣右衞門止めるを、押しこかして、惣右衞門と共に上手へはひる。厩の蔭より丹次お龜拵へになり、風呂敷包みを持ち出て、丹三郎お榮の死骸を見て、

丹次　コリヤ伜とお榮どのか、

お龜　コリヤやア惨い、何者が。

ト　丹次は疵口を改める事あつて、

丹次　「此奴の様子では、獸の仕業と思はるゝ、扨は最前彼の馬が、我が顔を見て驚いたか、畜生ながらも夫と悟り、二人を此場で喰ひ殺したか。殘念な事をいたした。」

ト死骸へ思入あつて、

「何は兎もあれ此の死骸、幸ひ火葬にいたしてやらう。」

ト有合ふ莚の上へ二人の死骸を乘せ、下手へ片附け、行かうとする、下手より馬狂ひ出で、二人を見て喰ひ付きに掛かる、丹次は手早く刀を拔いて斬りつけ、馬と立廻り、ト此馬の脇腹へ刀を突つ込みゑぐる、馬は苦しみ倒れる。丹次はお龜と花道へ掛かる、此時後ろの方にて、

百姓大勢　「火事だア／＼。」

ト聲して、母家の方に火の手上る。お龜は是を見返る、丹次手を取るを木の頭。此時下手より五八出て來て、軒先きに釣してある半鐘を夢中に打つ。これにて、

ひやうし幕

四幕目

横堀村地藏堂の場
同裏山越谷道の場

役名――惡漢道連小平、尼妙哲實ハ小平の妻またたびお角、原丹次、惡者雇立の仁助、山獵師芝七、同斧六、後家お龜。

本舞臺二間中足の二重、藁屋根、竹椽、上手一間障子の出入り、續いて一間南湊紙のある臺輪形の壁、一間の下家、此横手三尺の式臺、跡一面土間、正面臺所へ通ふ三尺の出入り口、平舞臺の下手家根つきの破れたる寺の門、左右玉椿の生垣、此中に損じたる石の地藏尊、後ろ藪だゝみ、此道具總體に雪持ち、舞臺花道とも雪布を敷き、上州横堀村地藏堂の體。爰に尼妙哲、坊主かづら鼠の着附け、腰衣にて行燈を置き、圍爐裡の側に火を焚いて居る、下手に獵人芝七、斧六焚き火にあたつて居る、此の模樣、雪おろし、樵唄にて幕明く。

斧六　「ア、降るわ／＼、滅法界積つて來たぞ。」

芝七　「今夜はえらい寒じだから、是を飲んで早う寢るがようがんす。」

ト有合樽を出す。

妙岳　得度御深切に有難うござります、斯うして村の衆に
お世話になるも、是も何ぞの約束事、實に佛樣と思つて
居ります、夫に此方衆お二人は商賣柄にも似合はず、信
心者、テモ感心な事で御座りますナ。

芝七　實は稼業が獵人ぢやから、罪亡しの其爲に、信心を
する了簡ぢや、夫も所詮行き屆かぬから尼さんに拜んで
貰ひ、極樂往生願ふのぢや。

妙岳　さうして今夜は、モウ歸らつしやるか。

斧六　イヤ／＼是から山へ出掛けて行つて、雪で凍えて居
る獸を仕止めるが、此方の附け目ぢや。

妙岳　稼業柄とはいひながら、是非もない事で御座るなう。

ト珠數を爪ぐる。

芝七　ア、お庇護で大きに暖まつた。斧六此勢ひで出掛け
ようか。

斧六　さうぢや／＼、是から裏山越しで嶺の方へ這入り込
まう。

妙岳　アノ嶺の方へ行かつしやるなら、よう道を氣を附け
て行かつしやれ。

斧六、尼さん決して案じなさるな、私等は年中歩いてゐる
から、山は盤の上も同じ事ぢや。

妙岳　ホンにさうで御座つたなう。

ト兩人は草鞋の紐を直しながら、

芝六　暖まる樣に兎でも持つて來たいが、喰ふまいなう。

妙岳　どうして／＼其樣なものなんで喰べてよいものかい
なう。

芝六　さうぢやなう、緣なき衆生は度し難しぢや。

妙岳　大分むづかしい事を云はつしやるの。

芝六　尼さんの說法で、よう覺えて居ますのぢや。

妙岳　夫は悅ばしい事で御座る。

斧六　そんなら尼さん、

芝七　又翌日逢ひませう。

ト雪おろし、樵唄にて、兩人下手へはひる。

妙岳　村の衆が入れ替り立ち替り、此樣にいたはつてくれ
るので、此雪でも喰べる物に不自由せぬは、日頃からお
守り申す佛の御利益、先づ初穗に此酒を地藏樣へお供へ
申し、お禮申して置きませうか。

ト靜かなる合方になり、妙岳は酒の樽を持つて上手の
屋體へはひる。右合方にて、向うより原丹次、半合羽
足拵へ、道中差し、割掛けの荷物、菅笠桐油をはおり、
お龜浴衣の上つ張り、旅形り、二歲の抱子を抱へ、杖

なつき出て來て、

丹次　今の間に白くなつたが、日が暮れたので、嘸おぬしは歩きにくい事であらう。

お龜　雪故先きは見えませぬが、跡の茶見世でお婆アさんが半町程戻ればと云ひましたから、モウ爰等で御座いませう。

丹次　なんでも向うの毀れた門が寺らしい、アレへ行つて尋ねて見よう。

ト矢張り合方にて、舞臺へ來り、

ハイ、お頼み申します。

ト上手の障子の中にて、

妙岳　ハイ〳〵。

ト出て、二重の上より、

何方でござるの。

丹次　私共は旅の者で御座るが、北牧迄參る者、足踏み迷つた其上に、折惡い此大雪、所詮遠くへ行かれませぬが、どうか泊めて下さるまいか。

妙岳　夫は嘸お困りでござりませう、其所は家根が御座らぬから、まア此方へはひらつしやれ。

丹次　眞平御免下され。

ト兩人下手の下家の内へはひり、身體の雪を拂つて居る、妙岳は行燈を背にして圍爐裡の火を直しながら、

妙岳　お女中連れで御座るの。

丹次　左樣でござる。

お龜　夫婦連れでござりまするが、誠に難儀いたしまする。

ト此時赤子泣く、いぶり付けながら、

オヽ寒からう〳〵、おとしくしや。

妙岳　夫は嘸お困りでござりませう、北牧迄は一里餘りもあり、お泊め申して上げたけれど、御覽の通りの尼の庵室、夜具とても御座らねば、どうもお泊め申されぬ。

丹次　どういたして、寢道具なぞは御座らずとも、苦しうござらぬ、只泊めてさへ下されば、今宵の難儀が助かります、どうか一夜をお願ひ申す。

妙岳　なる程夫も御尤も、宜しう御座る、穢い布團でよろしくば、寒さ凌ぎにお貸し申しませう、サア足を洗つて上らつしやれ。

丹次　スリヤ、お聞き濟み下さるか、夫は千萬忝い。サア其方も草臥で汚れたらう、水を貰つて洗ふがよい。

お龜　雪で足袋が濕つたばかり、足は汚れはいたしませぬ。

ト兩人は足袋を脱ぎ、二重に上る。

妙岳　今焚火を焚き附けて上げる程に、圍爐裡の傍に寄らつしやりませ。
兩人　有難う御座ります。
ト兩人は圍爐裡の側へ寄る、妙岳は麁朶を焚き附ける。
お龜　今迄冷えて泣きましたが、内へはひつたのでおとなしくなりました。
妙岳　子供は佛樣で御座るなう。
ト此時焚火燃え上る、丹次お龜あたつて居て、思はず妙岳の顏を見て、
お龜　ヤ、おまへはまたゝびのお角でないか。
妙岳　オヽ、あなたは鹽原のお内儀樣。
お龜　よい所で出逢つたなう。
丹次　扨は常々噺しに聞いた、毒婦のお角は其方か、人非人め覺悟いたせ。
ト刀を取り上げ、柄袋を拂ひ、立ち掛かる。
妙岳　サア其お腹立ちは御尤もでは御座りますが、まアまア、お待ち下さいまし。
丹次　此場に至つて待てとは卑怯ぢや。
お龜　扶うから居所を尋ねて居たのぢや。
妙岳　定めて左樣で御座りませうが、此姿になる迄の懺悔話しを一通り、お聞きなされて下さいまし。
お龜　ノメ〳〵とした落ち付きやう、
丹次　いふ事あらば早く申せ、
妙岳　ハイ〳〵。
ト涙を拭ふ、合方になり。
お噺し申すも涙の種、いつぞや貴方のお宅へ上り、道ならぬ事をいたしました、倅小平は此夏中お縄に掛つて入牢いたし、只さへ寒い上州に、恰度寒さに向つたので、遂々牢屋で煩ひつき、お手當てさへも碌々にならぬも道理田舍牢、其曉が牢死をいたし、力と思ふ倅に死なれ、是迄長の惡事をした報いで斯ういふ憂目を見るかと、生れて初めて目が覺めまして、心の鬼の角も折れ罪亡ほしに廻國して、樂に往生する心で、靈場參りをいたす内、巡り〳〵て此村の、慈悲ある人に助けられ、此庵室を預かりまして、村の人の御厄介で、麥や粟を貰ひましては其日を送つて居りますが、口でいふより此腹中を、割つてお目に懸けたい位ゐ、實に懲り〳〵いたしまして、世を捨てた身の此姿、お腹立ちは御尤もながら、懺悔いたすが罪亡し、生れ替つた尼の妙岳、どうぞお許し下さりませ。（ト兩手を突いて詫びる。）

丹次　是が誠の人間なら、懺悔噺しも誠と思ふが、是迄の事を思ひ出すと、心に落ちぬ物語り。

お龜　そんなら乾度倅の小平は、死んだに違ひないのぢやナ。

妙岳　アレが息災で居りますなら、何で姿を替へませう、決して嘘は申しませぬ。

丹次　きつと僞りは申さぬナ。

妙岳　お守り申す地藏樣へ、僞りいうては濟みませぬ。

ト丹次お龜思入あつて、

丹次　然らば命は助けて遣はす。

ト刀を下へ置く。

お龜　思ひ出しても腹の立つ、小平が牢死しましては、ホンニよい氣味で御座ります。

妙岳　改心いたしてお堂守りを、致す樣になりましたも、眞人間になつたおかげ、お心置きなくいつ迄も、御逗留なされて下さるが、私の爲に、是迄の、罪亡しで御座ります。

丹次　ナニ其樣に長くは居らぬ、今宵一夜の宿りにて、明日は直ぐに出立いたす。

妙岳　さうして何れへお出でなさります。

丹次　前橋へ出て中仙道から、一先づ江戸へ行く心算ぢや。

ト是を聞き、妙岳思入あつて、

妙岳　夫よりも一夜明け、雪が解けて二三月頃、緩々お立ちなすつた方が、宜しいでは御座いませんか。

お龜　大人ばかりか此子を連れ、此の山中の馴れぬ所でどうして長居が出來るものかね。

妙岳　夫では素直に街道へ、お出なさる事は出來ますまい。

お龜　ソリヤ又何故にえ。

ト合方替つて、

妙岳　今御逗留なさいましと、申しましたは前橋から中仙道はお二人の、人相書きでお尋ね者になつて居ますよ。

兩人　エ、。(トぎつくり思入。)

妙岳　沼田在の下新田、角右衞門樣の御後妻と御領主土岐樣の御家來にて、原丹次樣と云ふお人と密通をした其揚句、有金殘らず浚つた上、家へ火を附け逃げたといふので、街道筋は云ふに及ばず、名主樣から嚴しいお觸れ、うつかり表へ出なさいますナ。

ト是にて兩人面目なきこなし。

お龜　そんならモウ此邊迄、人相書きが廻つて居るかえ、今更となりお前に對し、合す顏もない始末。

妙岳　イエ其のお心遣ひには及びませぬ、計らず爰へお在になつたは、是も御縁でござります、私も今日では、一人も餘計にお助け申しますが、罪亡しで御座いますから、此儘爰においでなさいまし、此邊鄙の庵室では、捕人の來やう筈もなし、春迄隠れておいでなさつたら、その餘炎も冷めませうから、心置きなくおいでなさいまし。

丹次　一旦立腹いたしたが、今となつては其方に出會ひ、却つて二人の幸ひぢや、然らば春迄此庵に、匿まつて貰ふといたさう。

妙岳　幸ひ先程村の者から、貰つた酒が御座いますから、お寒さ凌ぎに一つ附けて上げませう。

ト妙岳上手の家體へはひる。

お龜　温かくなつた故か、スヤ／＼と寢て仕舞ひました。

丹次　寒いと思つた今宵の雪も、今となつては仕合となつたわえ。

お龜　春迄逗留いたしましては、何やかやの入用が、

丹次　いかにもお角に渡して置かうよ。

ト懐中の胴巻より、金包みを出して紙に別に分けてゐる此中妙岳上手の障子を開け、是を見て居て、又障子をそつと締める、丹次是に心附かず、金を仕舞ふ、妙岳酒の樽と黒塗りの本膳を持つて出て來て、

妙岳　圍爐裡で直ぐに附けますから、緩々お上りなさいまし。

ト酒を徳利へ移し、火燗にする。

オ、ようおようなされましたナ、貴方何日御誕生で御座ります。

ト赤子を見て云ふ。

お龜　去年下新田を出て、四萬の温泉場に逗留中、温まつた故か、輕く此子を生みました。

妙岳　左樣で御座りますか、男のお子で御座りますかえ。

お龜　ハイ、男の子で、誠に丈夫で御座ります。

妙岳　夫はお樂みで御座りませう。

丹次　是は誠に些少ながら、是から春迄三四ヶ月、此方の世話になる間、何や斯や買ひ物の入用に預かつて貰はうか。

ト紙に包みし金を出す。

妙岳　さういふ事ならお預かり申しますが、此樣に澤山は入りませぬ、ナニ貴方遣はうと云つたとて、何も買ふ物が御座いませぬ。

丹次　イヤ、たつた十兩ぢや、まア取つて置いてくれ。

妙岳　夫ではまアお預かり申して置きませう。
　ト懐中する、團爐裡より德利を出して、
　ソウお燗が出來ました、何も御座いませぬが、芋と牛蒡の煮附けが御座ります、寒さをお凌ぎなさいまし。
　ト猪口をさす。
丹次　然らば、遠慮なく馳走にならうか。
　ト妙岳の酌にて酒を飮む。
　今宵の寒じに計らずも、生き返つた樣な心地ぢや。
妙岳　寒さの方が強いので、容易な事では醉ひませぬ、御新造樣も澤山お飮りなさいまし。
　ト酒を進めて燗を附ける、合方雪おろしになり、向うより繼立の仁助、脚絆わらぢ一本差し、深い三度笠を冠り、出て來り門口より、
仁助　オイ〳〵、お母ア〳〵。
　ト妙岳は吃驚して、二枚折りの屛風にて二人を圍ひ、ツカ〳〵と落間へ下りて、
妙岳　ハイ〳〵、どなたで御座ります。
仁助　おツ母ア、俺だよ。
　トいひながらはひつて來るを、突然平手にて横頰を打たれ、驚いて、
　おつ母ア、俺だよ。
妙岳　ナニ俺だ、エヽどの面下げて爰へ來たのだ。
　ト又打つて、
　よく〳〵と爰へ來やアがつた。トツトと外へ出るがいゝ。
　ト猶はひらうとする仁助を、外へ突き出す。
仁助　何だか譯が分からねえが、そんなに怒る事はねえぢやアねえか。
妙岳　エヽ、よくそんな白を切りやアがる、何も云ふのは面倒だ、出る所へ出て申し上げたら、お上の目鑑で分かる事だ、サア俺等と一緒に來るがいゝ。
仁助　なんにもお前と一緒に、出る所へ出る譯はねえ、俺ア兄貴の用で來たんだ。
妙岳　人を馬鹿にするな、死んだ伜の用があつて堪るものか。
　ト無理に下手へ押し出して、耳を貸せと、爲方にて合點せる。
人を馬鹿にした爲方だ、サア一緒に來いと云つたら、來やアがらねえか。
　ト云ひながら、花道よき所迄來て囁く、仁助心得て、

仁助　夫ぢやア彼奴が、
妙岳　おのれ逃げようたッて、逃がすものか。
ト早く行けと爲方をする、仁助は向うへ逸散に走りはひる。
老人だと思つて突き倒して、遂々逃げて行つて終つた、エ、口惜しい事をした。
ト態と大聲にて喚き立て、空涙を拭きながら、歸つて來て二重へ上る。
丹次　お角、今のは心遣ひの者ではないか。
妙岳　今のは伜の友達で、賭博仲間で御座いますが、實は彼奴が指したので、伜がお上のお繩に掛り、遂々牢死いたしました。言はゞ敵で御座いますから、召連れ訴へをいたしませうと、捉へたのを振り切つてとう／＼逃げられて仕舞ひました。
お龜　そんなら私共の差合では無かつたか。
妙岳　伜の爲に遺恨のある奴で御座います。
丹次　夫でよう／＼安心いたした。
妙岳　サアお肴は御座いませぬが、澤山飲つて下さいまし。
丹次　寒い思ひをした爲か、一時に醉ひが出て、いゝ心持ちになつて來た。
お龜　此暖かい中寐かしてやり度いが、何處を借りてよう御座んす。
妙岳　夫ではそう飲りませぬか、圍爐裡があるから爰でよいけれど、餘り表へ近い故、本堂へお寐みなさいまし。
お龜　夫ではどうぞさうして下さんせ。
妙岳　お寒からうが有合せの、布團で凌いで下さりませ。
丹次　そんなら、お角。
お龜　思ひがけない厄介になりまする。
妙岳　是が他生の御縁でがな御座りませう。
ト合方、雪おろしになり、妙岳行燈を提げて先きに立ち、後より丹次お龜從いて、上手の障子家體の中へはひる。あと床の淨瑠璃になる。
竹本〽降りしきる赤城颪の風寒く、吹雪はげしく山々の積る惡事に道連れの小平を伴ひ以前の仁助、曲る心の雪道傳ひ、寒さ厭はず踏み分けて、
ト時の鐘、雪の音にて、向うより仁助先きに立ち、後より道連小平、脚絆、藁沓、簑、藁帽子を冠り、一本差しにて出て、花道にて四方へ思入あつて、
小平　今打つたのは子刻か。
仁助　おめえの所へ行つた時、かれこれ亥刻半だつたから

もう子刻になるだらう。

小平　雪は益々降つて來るし、こんないゝ都合にやアねえナア。

仁助　定めしおつ母アが待つて居るだらう。

〽慾に目のなき夜るの道、辿り〳〵て門の口。

ト床の合方にて、兩人舞臺へ來る、仁助そつと内へはひる、此中妙岳は圍爐裡の側へ布團を敷き寢る、此時そつと起き上り、三人顏を見合せ、奧に居ると爲方にて敎へる。兩人うなづき、囁き合ひ、二重へ上り、奧を窺ふ、此の模樣知らせなしに、

道具廻る

本舞臺二間前へ出して中足の二重、眞中一間中敷居、上に立像の古びたる地藏尊、集め物の三つ具足、此下戸の毀れた戸棚、正面左右三尺づゝの鼠壁、下手一間前の障子の中を見たる出這入り口、前の竹緣折り廻し、平舞臺の上手楷の立木、此下倒れし卵塔場、後ろ山々の中遠見、總て庵室本堂の體、上手に丹次、下手にお龜、抱き子を抱へ寢てゐる、兩人は眞中に割り掛けの荷物を置き、佛檀の前へ行燈を置き、雪の音、床の合方にて道具止る。

ト此中下手の障子を開け、妙岳そつと拔き足して忍び寄り、丹次の枕元にある刀を取つて下手へはひる。是と入れ替りに、小平頰冠りをして忍び入り、二人の寢て居る眞中へ入り、割掛けの荷を取つて後ろへ廻る、此時赤子聲になり、お龜目を覺し、小平の姿を見て、

お龜　アレ盜賊――。

〽云ふ聲聞きつけ丹次は刎ね起き、怪しき男をしつかと捕へ、

ト丹次起き上り、

丹次　おのれ盜賊、

ト小平を引き戻し、ちよつと立ち廻つて、

お龜、刀を取つてくれ。

お龜　ハイ。

ト尋ぬれどもなき故、まご〳〵する、床の合方にて、平舞臺上手より仁助刀を拔きて持ち、二重下手より妙岳木の枝を持つて出て、打つて掛かる、小平も刀を拔き立廻り、此中お龜は金のはひりし胴卷きを抱へ、此中へ絡み、小平は丹次に一太刀浴びせる、仁助も斬つて掛かる、此刀を丹次奪ひ取り、仁助を斬り倒す、妙岳はお龜より胴卷を引つたくり逃げようとするを、お

龜追ひ縋り、爭ひながら下手へはひる。小平は丹次と斬り合ふ、此立廻りの中、知らせなしに、

道具廻る。

本舞臺上寄りに三間の高足の二重、岩組みの蹴込み、二重の下手張り出したる山の張物、此下樹々の梢、此間に切り穴、諸所に杉の立木、向う雪山の遠見、總て此の道具雪持ち、横堀地藏堂裏手の體、右の合方にて道具止る。

ト雪おろしにて、上の方より以前の妙岳手負ひにて胴巻きを持つて逃げて來る、跡より丹次も刃先きに疵を受け、刀を持ち追つて來て、立ち廻り妙岳を斬り倒す、此時後ろより小平追つて來て、是を見て丹次に斬り附ける、胴巻きをかせに爭ひ、顏見合して、

丹次　おのれ盜賊、扨はお角と云ひ合したな。

小平　知れた事だ。

ト振り解いて、丹次を蹴返し、きつと見得、合方替つて、

沼田の在を駈落ち此方、網を張つて居たお尋ね者、旨く脱れた山越しも、送り狼道連れ小平だ、眼に掛かつた上からは、筐と思つて此金を、清く渡した其上で、親の敵と往生しろ。

丹次　手負ひながらもお角と共々、おのれも生かして置かぬぞよ。

小平　エヽ、グヅ〳〵吐かしやアがるな。

ト雪おろし、木魚入りの合方になり、雪を遣ひ、兩人立ち廻りの中、上手よりお龜抱き子を抱へ此中へはひり、邪魔になる、丹次は手疵の爲に次第に弱りトヽ小平に斬り倒される、お龜は胴卷と抱子を抱へ逃げ廻り、下手の岩角より足を辷らして谷間へ落ち心にて切り穴へ飛び込む、小平は胴卷を片手にして、岸の端より谷底を見下ろす、此時雪止んで月を出す。

雪に辷つてどつさりと、落ちた數丈の此下は、流れも早え吾妻川、親子は早瀬の水葬禮、是ぢやア恰で誂えたやうだ。

ト此時崖の上にて、本釣鐘聞ゆる、小平空を眺め思入あつて、

幸ひ晴れた青空に、鐘の響きもしんみりと、

ト胴巻きの金の重みを引いて、ニツコリ思入。此時日覆より雪なだれ落ちて來て襟へかゝる。

オヽ冷てえ。

ト身震ひするを、木の頭

びつくりさせやアがる。

ト襟の雪を拂ふ、此の模様、本釣鐘の送り、床の合方、山おろしの鳴物にて、

幕

五　幕　目

戸田家通用門の場

同邸内鹽原宅の場

役名――山口屋下男多助、鹽原角右衛門、鎌田市作、中間甚平、門番三九郎、同五左衛門、八百屋七右衛門、鼻緒屋丁稚新吉、角右衛門妻お清、家中女房お雪、同おしも。

本舞臺眞中二間常足の二重、此前式臺、瓦庇、正面板羽目、是へ六尺棒、提灯にぞを掛け、上手の棲障子の出入り、上手の前づら瓦庇、無双窓のある臺所の腰羽目、下の方跡へ下げて昔心に通用門の裏を見せ、大扉は締め切り、三尺の潜り門の出入り口、續いて築地、塀の張物にて見切り、總て昌平橋内戸田家通用門内の體。二重に緋氈しの板を拵へ、門番三九郎、五左衛門、菖蒲革の袴着附けにて楊枝を削つてゐる、式臺の所に鼻緒屋の丁稚新吉、鼻緒を入れし風呂敷包みを持ち、腰を掛けてゐる見得、合方調べの鳴物にて幕明く。

三九　コレ小僧、貴様よくお長屋の中根様へ通ると云つて度々御門を通行するが、一體何處の鼻緒屋だ。

新吉　下駄新道で御座いますが、中根様の御新造が風邪を引いておいでなさるので、ちつとも縫ひが間に合はないので夫故百度參りをしてゐますのさ。

三九　幾度來ても夫はいゝが、門へ少しは心附けをしろと歸つたら主人にさう云へよ。

新吉　どうして〳〵、内の旦那は吝ん坊だから、縫ひ子の所へ糸をよこすんでも、切り詰めによこす位ゐで、餘計な附け屆けなんざア、出しさうにもしません。

五左　夫は話せねえ吝ツたれだ、さうして貴様の主人の所は、どんな鼻緒を拵へるのだ。

新吉　ヘイ、印傳だの白なめしだの、革鼻緒でございます

よ。
五左　革鼻緒とは丈夫でいゝナ、履料にするのだから、門番が買ひたいと申したと、さう云つてくれろ。
新吉　代料はお納屋で御座いますかえ。
五左　賣つてくれと云はなきやア、よこさねえからさう云ふのだ。
三九　門を使ひが通行すれば、其位ゐの事は當然だ。
新吉　こいつア困つたナア。
五左　なんだと。
新吉　何と云ひますか、さう云つて見ませう。
ト潜り門から出て行く。
五左　此頃の商人は、平ツたく催促しにやア、みんな野面で通るから、門番の役得が少ないて。
三九　水つぽいのでも樽はぬから、酒屋が通つたら一升ばかり今日強請て、たんまり一杯飲みたいものぢや。
ト楊枝を削つてゐる、潜り門の中より多助、炭屋の下男になりし拵へ、通帳を腰へ下げ、炭俵を三俵天秤棒にてかつぎ出て、
多助　お願ひ申しやす、物が承り度うがんす。
三九　なんだ。

多助　私ヤア佐久間町の山口屋から參りましたが、此お屋敷に、鎌田一昨日といふ人がありやんすかね。
三九　一昨日なんて名前が、何處の國にあるものか。
五左　鎌田市作樣の間違ひだらう。
多助　ハア、そんな名でがんした。
三九　夫は其所の塀に附いて、眞ッ直ぐに行くと井戸がある、井戸の所を左へ曲ると、長屋が四軒ある其角から二軒目が、鎌田樣だ。
多助　ソリア有難うがんす。
ト下手へ行きかけるを、
三九　コレ〳〵、待て〳〵。
多助　ハア、呼ばつしやりやしたかナ。
五左　昨日山口屋の使ひの者に、粉炭を賴んでやつたが、今日は何とも云はなかつたか。
多助　オ、さうだつた、ガラリ忘れやんした。
ト荷をおろし、明き俵に半分入れし炭を出して、
是を御門へ上げてくれと、旦那に云ひ附かつて參りやした。
五左　さうか〳〵、其所へ置いて行つてくれ。
多助　そんなら誰方も御免なせえまし。

五左　ト炭をかつぎ、下手へはひる、五左衞門式臺へおりて
炭俵の中を見て、
山口屋は噺せる家だ、粉炭と云つてやつてもいゝ炭
を澤山よこした。

三九　炭が來たら火を起して、酒屋の來るのを、待つとしようか

五左　今方八百屋がはひつて行つたが、歸りに通つたら、酒の肴になりさうな世話のねえ物を、強請つて召し上がつて下せえ。

三九　承知しました。

五左　ドレ、燗の湯でも沸かしておかうか。
ト五左衞門炭俵を持つて障子の中へはひる。下手より八百屋七右衞門野菜の入りし籠をかついで出て、滯りを出て行かうとするを。

三九　コレ八百屋〳〵。

八百　ヘイ〳〵、御用で御座いますか。

三九　何か酒の肴になる世話のない物を、持つて居るかな。

八百　にんじんに牛蒡葱ばかり、おあいにく樣で御座います。

三九　葱はよいが臭ひがするので、祕密酒の肴にはならず何ぞ外になからうか。

八百　海苔が一帖殘つてゐますが、ヒネだからお氣の毒だ。

三九　海苔がある、結構だ、ヒネでもいゝから置いて行つてくれ。
ト八百屋荷の中から海苔を出して、

八百　是でよければ、代は入りません。

三九　夫おやア氣の毒だが、貰つて置かう。
ト海苔を見て、
成程是は大ヒネだ。

八百　豆腐へでも掛けて喰へば、夫でも海苔の味がしますよ。

三九　豆腐が岡部で六彌太なら、是は則ち貰つた只海苔。

八百　コリヤ一の谷の洒落でございますね。

三九　そこで一首の歌を詠むから、詠み人知らずと名を書かず、手帳へ留めて貰ひたい。

八百　ヘエ、どういふ洒落で御座いますね。

三九　ハテ、せんざい帳へ乘せてくれろ。
ト合方にて
道具廻る。

本舞臺四間中足の二重、本庇本緣附き、眞中に石の沓ぬぎ、上の方二間の障子屋體、下の方いつもの所に枝折門、四ツ目垣の境界、此外少し後へ下げて一間の物置き、下手は黑塀にて見切りあり、二重の正面床の間、違ひ棚、石摺りの襖の出入り口、戶田邸内鹽原宅の體。床の前に框入りの鎧櫃。是に鹽原角右衞門具足と記せし板札附けてある。爰に家中女房お霜、お雪小魚の入りし皿と小重箱を前へ置き、下手に中間甚平番手桶を置き、雜巾がけの體、合方けいこ唄にて、道具止る。

お霜　甚平さん、よく每日掃除をおしだねえ、嘸汚れて居るだらうね。

甚平　此お長屋へ住つてから、十日餘りになりますが、未だに拭くと雜巾が眞ッ黑になります。

お雪　先に住つておいでのお方は、勤番衆が二人で小使ひの中間が、たまに掃除をするばかり、雜巾なぞといふものは、ツイに遣つた事はない。

お霜　鹽原樣になつてから、おまへが每日掃除をするので、大そう綺麗になりました。

甚平　皆さんのお褒めに預かり、拭く張合ひが御座ります。

ト合方になり、奧より角右衞門妻お淸、序幕より二十年經ちし屋敷女房の拵へにて出て、

お淸　是はお隣りのお二人樣、ようお出でなさりました。

お霜　此間は何よりのお土產を下さいまして、お雪さんも私も有難う存じます。

お雪　疾うにお禮に上りませうと、存じて居りましたが、二三日風邪を引いて居りまして、遲なはりまして御座ります。

お淸　さしたる物も上げませんに、お禮なぞを仰しやいましては、お恥かしう御座ります。

お霜　是は召し上る樣な物では御座りませんが、深川から持つて參り、まだ生きて居りますから、態々御覽に入れます。

お雪　又私は翁屋のお煮染を、親類共から只今貰ひましたから、お裾分けをいたします。

お淸　是は〳〵何よりのお品を有難う御座ります。主人が今に下りましたら、此儘見せたう御座りますから、お入れ物はお後から甚平に持たしてさし上げます。

兩人　イエ〳〵、夫には及びませぬ。

ト此中甚平は掃除を終ひ、手桶を片附けて、

甚平　モウ雜巾掛けを終ひましたから、私が持つて上ります。
お淸　是を猫に引かれぬ樣、奥の戸棚へ仕舞つて置きや。
甚平　畏りました。
　ト甚平皿と重箱を持つて奥へはひる。
お霜　貴方には此頃、お國から當地へお出でなされた故、此近所の勝手を御存じ御座りますまいから、お買物でも御座りますなら、御遠慮なく私共へ仰しやつて下さりませ。
お淸　有難う御座ります、以前お抱へになりし時、間もなくお國詰めを仰せ付かり、久しく肥前に居りまして、二十年振りで此江戸へ、歸りまして御座いますから、何所も彼所も以前と變りとんと勝手が知れませねば、宜しくお指圖を願ひます。
お雪　町のお湯へいらつしやるなら、御案内をいたしますから、御都合のよい時に、左樣おつしやつて下さいまし。
お淸　此方へ參りましてから、御用人の神山樣の、お風呂を頂きまするから、まだ町方へは參りませぬ、いづれ參る其時はお連れなされて下さりませ。
お霜　私は大の湯好き故、いつでも宜しう御座りまする。
お雪　モウお下りの時分故、お邪魔にならぬ其中に、お暇をいたしませう。
お淸　まア宜しいでは御座りませぬか。
お霜　又ゆつくりと上がりませう。
お雪　貴方もチトお噺しに、お出でなされて下さいまし。
お淸　何れお禮に上りまする。
お霜　左樣なれば旦那樣へ、
お雪　宜しうお傳へ下さりませ。
　ト合方にて、兩人下手へはひる。
お淸　遠くの親類近くの他人と云うて、江戸へ來たら西も東も知らぬお人で、嘸當分は困るであらうと、案じたよりは生むが易く、此お長屋の皆さんは御親切なお方ばかり、世間に鬼はないものぢやナア。
　ト合方になり、奥より鹽原角右衞門、二十年後の老けたる年配、上下大小、鎌田市作同じ拵へにて出て來る
お淸見て、
只今お下りで御座りまするか、鎌田樣には御苦勞に存じます。
市作　鹽原氏には道中より御風邪にてお着故、十日の間の御猶豫願ひ、御全快を相待つて、今日初御目見得、上に

於ても御滿悅の御樣子、先づ滯りなく相濟んで、拙者も大慶至極で御座る。

角右　是と申すも皆其許の、お執成しに依る所、千萬忝く存じまする。コリヤ淸、其方も厚くお禮申せ。

お淸　何から何迄御親切に、お引き廻しに預かりまして、有難う存じまする。此末共に御昵懇にお願ひ申し上げまする。

市作　其儀は此方より願ふ所、御昵懇にいたすで御座らう。承はれば此方では、未だ跡目の御實子なく、又御養子もないとの事、何御不自由なきお暮しにて、御不都合と存じます、只今の中何れよりか御養子でもいたされて、老後のお樂みになさる樣と、差付けながら存じまする。

角右　御懇切なる其許故、恥辱を厭はずお噺し申すが、實は拙者も若年の頃、男子を一人設けましたが、主家を立ち退き在所へ引ッ込み、永々涙々いたす中、貧苦に迫る所より作の行末不便に存じ、農家ながら相當の暮しを致す者よりして、養子に望まれ其方へ、八歲の折遣はしましたが、最早今では二昔し、二十年程經ちし故如何いたして居りますか、音信不通に打ち過ぎますれば、生死の程も分りませぬ。

市作　スリヤ御實子が御座つたか、御男子なれば猶の事、御手元に御座つたら、立派に跡目の御相續が、出來る樣に御成人なされておいでゝ御座らうに、扨々夫は惜しい事ぢや。

お淸　只今となり考へますと、假令貧苦に暮しましても、タッタ一人の實子故、他家へ養子にやりませぬが、宜しかつたと存じまして、後悔いたして居りまする。

角右　イヤ／＼、夫は愚痴と云ふもの、彼を養子にやつたればこそ。

ト思入れ有て氣を替へ、

イヤ、身輕になつて江戸へ參り、御當家へ有附いたのぢや。

市作　何は格別、まだ御道中のお勞れも御座らうから、拙者は是にてお暇いたさう。

お淸　取り込んで居りまして、お茶さへも差上げませず、暫くお待ち下さりませ。

市作　イヤ／＼、お構ひ下さるな、又緩々と晩程にても、お噺しに參らうから、お茶は夫迄お預け申さう。

角右　お下りの儘お立ち寄りなれば、お上下でもお取りなされて、又の御入來を願ふがよい。

お清　左様では御座りませうが、餘りおそう／＼で御座りますれば。
市作　イヤ御前のお首尾が宜しいので、夫が何より重疊で御座る
角右　然らばどうか晩程は、是非御入來を願ひます。
市作　又後程に御意得ませう。
角右　ソレ、お見送りいたせ。
お清　ハイ。
市作　イヤお構ひなく、其儘々々。
　ト唄になり、市作後ろの襖の中へはひろ、お清も同じく見送る心にてはひる。合方替つて、
角右　今鎌田氏の云はれし如く、倅多助が手許に居れば、最早當年二十九歳、立派な者になつたであらうが、身共も永々浪人して世に埋もれて一生涯終るがいかにも殘念さに、身の有附きをせんものと、金子に換へて養子にやり、身支度をして江戸へ來て、再び當家へ仕官なし、お國元迄も參りしが、長年音信不通にせし故、今般江戸へ着くと直ぐに、上州沼田に書狀を出せしに、昨日伯父の太左衞門より、參りし返書の樣子では、鹽原の家退轉なし、多助も國を立ち退いて、今は行方も知れざる由、裕福なりし彼家がいかなる事にて退轉せしか、ハテ案じられた事ではある。
　トよろしく思入、奥よりお清出て、此述懐を聞きし心にて
お清　モシ旦那樣、貴方も左樣にアノ多助を、惜しくお思ひなさりまするか。
角右　イヤ惜しくはないが今居れば、最早二十九歳になる故、一廉の力になればと、獨言を申して居たのぢや。
お清　多助のお庇護で江戸に出て、御當家へ有附いて安穩にして居りますれど、鹽原の家相續の實子がない故心細く、又上州の養子先きも、退轉いたして跡方なく、多助も何れへ參つたやら、行方知れずと聞く悲しさ、是を思へば養子にやらず、よしや出世をいたさずとも、親子一つに居たなれば、嬉しい事で御座りませう。
角右　夫は愚痴と申すもの、相續人がないと申して決して悔むには及ばぬ事、日鑑に叶つた養子をすれば、必ず立派に跡は立つ、只案じられるは養家の退轉、モシヤ倅が放埒にて家名を絶せし事なれば、申し譯なき事であるぞ。
お清　アノ折り聞けば五百石の、田地を持つて相應な、身代ぢやと申しましたが、どうした事で退轉をいたした事

でござりませう、世の盛衰とは云ひながら、果敢ないものでござりますなア。

角右　ハテ夫故に人の身は、死なねば運の分らぬ者、

お清　夢の浮世に今日の今、榮耀榮華に暮らしても、

角右　明日はいかなる難に合ひ、零落するやも計られず、

お清　卒塔婆小町の身の果も、

角右　豐太閤の昇進も、

お清　變れば變る浮き沈み、

角右　知れぬで持つた、

兩人　浮世なりやナア。

ト此時申刻の鐘なる。

角右　冬の日脚のいと短く、

お清　まだお下りの儘なれば、お召替へをなさりませいなア。

角右　オヽ、着換へてゆつくり、休息いたさう。

ト時の鐘、合方にて、兩人上手障子屋體の中へはひる。是より床の淨瑠璃になる。

竹本〽人影は長くうつれど冬の日の短く西へ遠近の申刻を告ぐる時廻り、炭を擔いで御家中の門を多助は尋ね來て、

ト申刻の時廻りの聲、六尺棒を突く音を冠せ、向うより以前の多助、炭の荷をかつぎ出て、直ぐに舞臺へ來て、

多助　お馬場の角から六軒目の、お長屋だと云ふからは、爰の家に違えねえ。

ト門口へ來て、

ハイ御免なせえまし。

ト奧にて

甚平　どうれ。（ト大聲にて答へる。）

多助　エヽ、魂げた聲だナア。

〽びつくりなせば取次ぎに、甚平奧より立ち出でゝ、（ト奧より甚平出て。）

甚平　今御免なさいと云つたは、貴樣か。

多助　ヘイ、私は山口屋の若え者でがんすが、鎌田樣からお言傳で、炭を持つて參りやした。

甚平　山口屋の若い者か、炭は何俵持つて來た。

多助　二俵持つてめえりやした。

甚平　其物置きへ入れて置け。

多助　畏つてがんす、代を直ぐに下せえまし。

甚平　僅か二俵の炭の代、後でやるから案じるな。

多助　炭と引き換えに貰つて來うと、番頭さんから云ひつかつて來やんした、請取を持つて來たから、今下せえまし。

甚平　エ、喧ましい、遣らぬとは申さぬわえ。

多助　直ぐに持つて歸らねえと、番頭さんに叱られて困りやすから、炭の代を拂つてくれなせえ。

甚平　田舍者とは云ひながら、イケ强情な奴だ、今御新造樣へ申し上げ、拂つてやるから早く炭を物置きへ入れて置け。

多助　畏りやした。

へ炭を此方の物置きへ積み込む折しも甚平立ち出で、

ト多助物置きへ炭を入れる、甚平出て、

甚平　ソレ、炭の代を渡すぞ。

ト錢を四百文出す、多助請取り、

多助　ヘイ、有難うがんす。

甚平　夫で安堵したらう、代を遣はしたら、早く歸れ。

ト奥へはひる。

多助　是で番頭さんに叱られましねえ。

へ云ひつゝ四邊見廻はして、フッと目につく具足櫃、名札の文字を讀み下し。

ト多助財布へ錢を入れ、四方を見廻して具足櫃の名札に目をつけて、

鹽原角右衛門、此の名前は。

へ猶つく／＼と打ち眺め、

何にも知らずに爰へ來たが、同じ名前であるからは、確に夫に違えあんめえ、中間衆に聞いて見べえ。

ト奥へ向ひ、

モシ、今のお中間衆、ちよつとお聞き申し度い事がかんす、今のお方／＼。

へ呼び立てられて甚平は不肖々々に立出でゝ、

ト奥より以前の甚平出て、

甚平　エ、喧しい、何の用だ。

多助　此荷物に札が附いて居りやすが、鹽原角右衛門樣と仰しやるは、此家の旦那樣のお名前でがんすかね。

甚平　コリヤア旦那のお名前だ、此間お國から御出府なすつてまだ道中の儘に、ア、して名札が附いてゐるのだ。

多助　あれが旦那のお名前と聞いては、私がお前さんにお願えがかんす、爰な家の御新造さまにちよつくらお目に掛かり度うがんす、取り次いで下せえまし。

甚平　いかに田舍者なりやと申して、餘り物を知らぬ奴だ、

高の知れた炭屋の下男に、呼びつけられると云ふがあるか、そんな失禮な事を云つて、御門止めでも喰はぬ樣にしろ、馬鹿な奴だ。

多助　さう云はねえで、取次いで下せえまし。

ト甚平の袂を取るを、振り拂ひ、

甚平　エヽ、ならねえと云ふに。

〽叱り散らして入りにける。

ト甚平奥へはひる。

多助　アレ、今のお人、今のお人。

〽呼はる聲に一と間より、妻のお清は立出でゝ、

ト奥よりお清出て、

お清　コレ、喧しう呼立てる其方は何者ぢや。

多助　私は炭屋の若い者でがんすが、貴方は爰な御新造樣かね。

お清　いかにも、私は此家の妻ぢやわいなう。

多助　そんなら、いよ／＼、御新造さんでがんすか。

お清　根問ひしやるが用でもあつてか。

多助　御新造樣に逢えなくんば、承はり度いことがかんすが、此お荷物の名札にある、鹽原角右衞門さんと仰しやりますは、久しく肥前島原においでなさりやアしませんか。

お清　お國詰めで此間迄、其島原に居たわいのう。

〽聞くに扨はと進み寄り

多助　夫では確か其以前、安倍樣の御家來で、浪人なされて上州の、小川村においでなせえましたか。

お清　なる程其方の云ふ通り、以前上州小川村に、久しう居つた事があるが、何で夫を聞きやるのぢや。

多助　そんなら貴方のお名前は、お清樣と仰しやりますでがんせうな。

お清　いかにも私は清といふが、どうして詳しく、此方の事を、其方は知つて居やるのぢや。

〽云はれて多助は飛び立つ思ひ、嬉し涙にくれながら傍へさし寄り手をつかへ、

ト多助嬉しきこなしにて、前へ出で、

多助　モウシ母さま。

お清　エヽ。（ト合點の行かぬ思入。）

多助　お懷しうございます。

〽手拭顏に押し當てゝ、すゝり泣きに泣きければ、此方は不審晴れやらず。

ト多助は手拭を顏に當て泣く、お清不審のこなしにて、

お清　合點の行かぬ其方の詞、私を母と云やるのは。
多助　お見忘れなせえましたか、そりや御尤もでがんす、八歳の時にお別れ申した、私やア多助で御座りやす。
お清　そんなら其方が、アノ多助か。
多助　ハイ、貴方の倅でがんす。
〽云ふに此方は打驚き、扨は別れし我が子かと、顔をつくづく打ち眺め、
　ト　お清多助の顔を見詰めて、
お清　なる程其方がさう云やれば、見覺えのある幼な顔、別れ程經し多助であつたか。
多助　ハイ、多助でがんす。
お清　よくぞ健固で居やつたなう。
〽思ひ掛けなき多助に逢ひ、涙先立つ母親が見れば汚れし古袷、膝の破れし股引きにやつれ果てたる形容、是が我が子の身の果てかと暫し涙にくれたりしが、漸々に泣く目を拭ひ、
　ト　お清多助の姿を見て愁ひのこなし、
そなたに別れて二十年此方、生死の程も知れざれば、胸に忘るゝ間もなく、案じて居たる其方に逢ひ、此上もない悦びに、又悲しい其姿、斯く迄になり下るとは、いかに苦勞をしたであらうの。
〽不便な者やと母親が、咽び入つて泣きければ、多助は我が身を顧みて、
　ト　多助も我が姿を見て、
多助　こんな形りをして、お名乘り申すは面目ないが、是には種々譯ある事、後でお話し申しますが、此身が難儀をするにつけ、お父樣おつ母樣に、どうぞお目にかゝりてえと、あらゆる神や佛樣へ、お願え申した其お蔭で、思ひ掛けなくお壯健な、お顔を見まして嬉しうがんす。
お清　そなたも嘸かし嬉しからう、私も嬉しう思ふわいなう。
多助　こんな形りはして居やすが、子と思つて下せえやし。
お清　オヽ思はいでなんとせう。
多助　エヽ、有難うがんす。
〽傍に這ひ寄り見上ぐれば、母は見下ろし手を取つて、又も涙にくれにける、折りから一間に聲あつて、
　ト　兩人手を取交して悦ぶ、其時上手の屋體の中にて、
角右　コリヤお清、其方は隣家も憚らず、何を其處で申して居る。
お清　二十年以前別れました、多助がまゐりました故。

角右　ヤア炭屋の下男に用事はない、疾く／＼歸して奧へ參れ。

お清　左樣では御座りませうか、折角訪ねて參りましたれば。

角右　エ、まだ／＼申すか、參れと申すに。

お清　ハアイ。

〽銳き夫の一言に、早う歸れと目まぜして妻は是非なく立つて行く。

ト角右衞門に叱られ、お清は多助に早く歸れといふ思入して、上手屋體へはひる。

〽後に多助は爲方なく門の外面に立ち出でゝ、手に持つ物を取られし心地、只茫然と立ち居たり、

ト多助は枝折戶の外へ立ち、又立ち止つて、

多助　モシおつ母樣、只今お聲を掛けたのが、お父樣で御座えますか、何卒貴方のお執成しで、タツタ一言でようがんす、詞を掛けて下せえまし、お賴みで御座えます。

〽親子の中も隔ての垣、伸び上がり／＼賴む／＼と云ひければ、障子を開けて角右衞門、

ト屋體の前側の障子を開ける、中に角右衞門お清も側にゐる。

角右　ヤア身の程知らぬ素町人、まだ／＼申すか、無禮者、疾く／＼と歸り居らう。

多助　へエイ。（ト下にゐる。）

角右　忝くも殿樣より、三百石頂戴いたしお側近く仕へる角右衞門、炭屋の下男に知邊はないぞよ。

〽詞激しく云ひ放ち、

ト床の合方になり、

尤も以前浪々なし、過ぎ越し方を考ふれば、阿倍の屋敷を出でしより、上州の東口小川村に逼塞せし折り、然も沼田の下新田に我等と同じ同苗同姓、鹽原角右衞門といふ百姓ありて、不圖せし事より懇意となり、彼に多助といふ倅あつて、母に乳なく困りしが、是なる淸が一子を失ひ、乳のありしを幸ひに、我が方へ預かりて養育をいたしたが、八歲になりし時、最早成人なしたれば、返し吳れと申す故下新田の角右衞門方へ多助を歸し遣はした、其折り養育いたしたる謝禮なりとて五十金、某へ送りしを、辭退なせしも再三の勸めに夫を貰ひ受け、近邊の諸拂ひ濟ませ、殘りし金にて支度をして、江戶表へ參りしが、我が青雲の來りし所計らず當家に召し出され、三百石を頂戴いたし、何不自由なく暮らすのも、是沼田下新

田の角右衞門殿の蔭と云ふもの、然るに召抱へとなり程なくも、お國詰め仰せ付かり、遙々遠き肥前の國島原へ引き移り、容易に便りも出來ぬ故、訪ひ音信も怠りしが、二十年の年月經て江戸表へ歸りし故、早速沼田下新田へ書狀を以て尋ねしに、分家太左衞門よりの返書參り、披見いたせば恩人の角右衞門殿は死去いたされ、跡目相續いたしたる多助事は家出なし、何れへ行きしか皆くれ知れず、加之、出火にて家財殘らず燒失して、終に鹽原の家絶えしと云ふ、返書に一時は驚きしが、今は時經つ事なれば、何とせん方是非もなし。

〽是につけても惜きは家出なしたる多助が罪、

彼は八歳の時迄、當方にて育てし故、實の親と心得て、父の母のと申すであらうが、下新田の角右衞門殿の、位牌へ對して某は、詞も交はぬ面も合はさぬ、元より實の親ならねば、今は他人も同然ぢやぞ。

〽義を立て通す角右衞門、口には云へど心には不便と思ふ恩愛に、浮かむ涙を飲み込みて、

ト角右衞門愁ひを隱すこなし、

多助が家出なしたるも、若い者の事なれば、女に溺れ金銀を遣ひ失して路頭に迷ひ、見る影もない姿となり、迂路迂路彷徨居りはせぬかと、朝夕箸の上げ下ろしに、胸に忘るゝ事はない。トサ、實の親なら思ふであらうが、養育をせし縁のみにて、元々他人の事なれば、其方を左程には思はぬが、何にいたせ家督人が譲り受けたる家を捨て、生れ故郷を立ち去るなぞとは、云はう樣なき不埒者、左樣な者に面會いたす角右衞門と心得居るか、目通り叶はぬ、疾く〳〵立て。

〽血筋の絆打ち切りし思ひ切つたる一言に、今更何と云譯も涙に暮れて居たりける、妻はそばより執成して、

お清　其お腹立ちは御尤もでは御座りまするが、タッタ一言私が、申し聞かせ度う御座りますれば、まア〳〵お待ち下さりませ。

ト二重眞中へ來る、合方になり、

コレ多助、今旦那樣が仰しやる通り、若氣の至りで女に溺れ、金を遣つて家に居られず、夫で家出をしやつたか、さう云ふ事と親は知らず、其方を沼田へ遣つてから、暑いにつけ寒いにつけ、多助はどうして居る事かと胸に忘れた事はなければ、切めて人らしい容りをして、來た事なればどの樣に、嬉しいか知れぬのに、見る影もない其姿、常から旦那は物堅い、お氣質なれば今爰で、お逢ひ

なされう筈はない、是から其方は辛抱して、再び沼田へ立歸り立派に親の家を立て、見苦しくない容をして來た事なれば其時は、お逢ひなさらぬ事もあるまい。お屋敷内へ淚をかつぎ、出はひりをする今の身では、お逢ひなされう筈はない、辛抱をして立派になり、お目に掛かる時節を待ちや。サア今日は此儘歸りやいなう。

〽母は優しく事を分け、情も籠る眞身の異見、道理に迫り泣き伏せしが、多助は淚の聲を上げ、

多助　お父樣のお腹立ち、おつ母樣の今のお詞沁々骨身にこてえまして、有難淚がこぼれやす。親の家を捨てやしたは、是には深い譯のある事、是を打ち明け云ふ時は、假にも親とした人を惡く云はねばなりやしねえ。今云はず共此事は、後で譯が分かりやす、又私が國を駈け出しやしたは、女故ではがんしねえ、命に係はりやんすから。

お清　其方の命に係はるとは。

ト合方きつぱりとなり、

多助　家に居れば殺されやすから、據なく出やしたが、後で家は潰れるのも知つて居やすが命がなければ、鹽原の家が立てられやせんから、知りつゝ江戸へ來やしたは、奉公をして金を溜め、立派に家を起さうと只一心に思ひ詰め、此江戸へ出て來ましたが、賴る處がありましねえから、去年の八月廿日の日に、此お屋敷へ尋ねて來て、御門番で鹽原樣とお尋ね申しましたれば、鹽原樣はお國詰めで、此方にお在なさらねえと、云はれてお國を聞きやすと、肥前の國島原で、三百里もあると聞き、

〽賴みの綱も切れ果てゝ、只うろ／＼とさまよふ中、

僅かの路用は遣ひ果たし、三度の飯も食べられず、爲樣もやうも泣くばかり、詮方つきて昌平橋から、身を投げようとする所を、ヤレ待てと引き止めて、命を助けて下すつたは、今の主人の山口屋善右衞門樣でがんす。此身の成り行きお噺し申しやしたれば、不便なこんだと御親切に、受人もなく奉公人にお使ひなすつて下さいますから、私は是から十年でも二十年でも山口屋に、奉公をして金を溜め、國へ歸つて鹽原の潰れた家を立てます心、必ず案じて下せえますな。

〽淚ながらに身の成行き、噺す多助の難儀を聞く母親は咽び入り、

ト多助の噺しを聞いて、お清淚を催し、

お清　左程の事とは知らなんだが、死なうと迄に思ひ詰めたは、よく／＼の事であらう、太い苦勞をしやつたなう。

へ夫を憚り後云ひさし、共に涙にくれにける、扨はさういふ事なるかと父も思はず顔差し出し、多助の方を見やりしが、態と詞も荒々しく、

ト角右衛門も愁ひのこなしあつて、又氣を替へ、

角右　口賢く申しても、夫は誠と思はれぬ、彌々夫が誠なら、町人でも百姓でも道を立てるは同じ事、今の主人善右衛門は命を助けくれたる恩人、身を粉に碎いて奉公いたし、忠義一途に勤めし上、寐る目も寐ずに少々づゝでも、微塵積つて山の譬へ、餘金を積んで資本も出來なば、故鄕沼田へ立ち歸り一旦絕えし鹽原の、家名を立派に立てるのが、恩を知る誠の人、其時に至りなば其方が願ひも叶ふであらう、道を守りて其身を立て、後父母の名を顯はす事は八歲の折り寐物語りに、申し聞かせ置いたれば、ヨモヤ忘れはいたすまい、其方も武士の、イヤ假令百姓の子なりとも、左程の事は辨へ居らう、恩義を忘れず奉公いたせ、長居は目障り疾く／＼歸れ。

多助　ハイ／＼。（ト立ち兼ぬる。）

角右　エヽ、歸れと申すに。（トきつと云ふ。）

お清　今も其方に云ふ通り、物堅い御氣質故、所詮お逢ひはない程に、本意なからうが今日は歸りや、其方の心の切なさは母が推量してなれば、少しも早う歸りやいなう。

へ母の詞に是非なく／＼、咽ぶ涙を押し拭ひ、

多助　ハイ／＼、歸ります／＼。

ト立ち上り、思入あつて、

又叱られるか知れましねえが、八歲の時に別れたなりお父樣おつ母樣の、お顏もろくに知りませんが、今おつ母樣にはお目に掛かり、お顏からお姿を確りと覺えましたに、お父樣のお顏をばまだ少しも知りましねえから、一寸くら見せて下せえまし、さうせえすりやアお父樣が表をお通りなさつた時、覺えて居ればお顏を見て、お辭儀もなくお健固でお勤めなされて在つしやると、思へば安心いたしまして、私も奉公いたしやすから、タッタ一目お顏をば、どうぞお見せ下せえまし、申しお父樣、イヤ殿樣、お願ひ申し上げまする。モシおつ母樣、イヤ御新造樣、お執持ち下せえまして、お顏を見せて下せえまし。

お清　其方の賴みは尤もなれど、お聞き入れはない程に、今日は此儘歸るがよい。

多助　歸りますから只一目、どうぞ見せて下せえまし。

へ垣の外より伸び上がり、身を揉み焦る多助をば、不便と思へど母親も執成し兼ねて居たりける、障子隔てゝ

親父も肉身分けし我が子故、心に逢うてやりたさを浮世の義理に詞を正し、

ト三人思ひ〳〵の愁ひのこなしあつて、角右衛門きつとなつて、

角右　ヤア何時迄グヅ〳〵いたして居る、元より鹽原角右衛門炭屋の下男に知邊はない、達て是に居るからは、障子越しに其方を、槍玉に揚ぐるぞよ。

〽長押の槍をおつ取つて、りう〳〵扱き立ちかゝれば、脅しと知れど母親は、隔ての障子へ身を寄せて、

ト角右衛門長押の槍の穂を拂つて扱く、お清は驚いて障子に身を寄せて止める、多助は俯向いてゐる。

お清　まア〳〵お待ち下さいまし、只今多助を歸しますれば、其御成敗は私に免じ、お許しなされて下さりませ。コレ〳〵多助、今聞く通り障子越しに、槍で突くと仰しやるから早く歸つてたもいなう。

多助　ハイ、歸ります〳〵、おめえ樣に心配掛けては不孝になりやんすから、お名殘り惜しいが歸りやす。今多助を槍玉に揚げると仰しやいましたが、一旦人に與れたからは實子でねえと云はつしやるは、貰つた向うの親への義理立て、ア、有難え思召し、是からア槍で突かれた氣で死身に奉公しやすから、心配して下せえますな。トハ云へ二十年振りでお出會ひ申して、お父樣にお目に掛かる事が出來ねえとは、こんな悲しい事はがんせん。

〽こんな悲しい事はないと、さめ〳〵泣けば側で見る母は元より障子越し、見ぬ父親もハラハラと、落つる涙を飲み込みて、

ト三人よろしく愁ひのこなし。

角右　其方の恨みは尤もなれども、名乘る身よりも名乘られぬ、

お清　浮世の義理に絡まれて、

多助　親と云はれぬ旦那樣、

角右　倅と云へぬ他人の町人、

お清　必ず健固で、

多助　貴方も御無事で、

角右　まづ夫迄は恩愛の、

お清　絆を絶ちし親子中、

多助　是から死身に精出して、

角右　絶えし家名を起しなば、

お清　其時目出度く、

角右 お清　逢ひませう。

多助 ハイ。

ト惜しむ名殘りに振り返れば、後を見送る兩親が、別れともなく、

ト多助は天秤棒を肩にして行き掛け、振り返る。お清は枝折戸の所にて見送る、角右衛門顔を反け、涙を隠す。本釣鐘、床の三重にて、トゞ思ひ切つて多助は早足に向うへはひる。引張りの見得にて、

幕

大詰

同 返し

本所四目茶店の場
相生町炭屋店の場
堅川通川岸揚の場

役名——鹽原多助、道連小平、藤野屋杢右衛門、家主金兵衛、明樽買久八、吉田手代喜四郎、同心荒井周助、女乞食おすて、同おくろ、同おこも、茶店婆アおつね、炭屋若イ者嘉助、同丁稚彌吉、手先四人、炭船の船頭、荷揚人足等大勢、同心の供、女乞食お龜實ハ鹽原後家お龜、同伴四萬太郎、藤野屋娘お花、同下女お仲、長屋の女房おみつ、同娘おてつ。

本舞臺一面平舞臺、後ろ跡へ下げて忍び返しのある黒塀、下の方に出入口の切り戸、是に藤野屋庭口といふ木札、眞中よき所に透しの無双窓、此前上の方に葭簀張りの出茶屋、一間程の出し臺の上に茶見世道具一式、其外駄菓子の箱、此側に今戸燒の風呂火鉢に、鐵の燒金に大福餅を乘せてある事。總て本所堅川通り茶見世の體。爰に床几を二脚並べ、炭屋の久八、半纏着流し草鞋がけ明樽の荷を置いて休んでゐる。茶見世の婆おつね出し臺の横に、腰を掛けてゐる。稽古唄飾屋の鳴物にて幕明く。

つね 今日は久八さんの方がお早う御座いました、此頃のお天氣續きで、御同然に仕合でございますよ。

久八 いつも同じ刻限に、此方の店へ休むが、炭屋さんも追々に廻り場所が多くなるので、今日は私より後になつたと見えるね。

つね ナニ後ぢやア御座いません、まだ炭屋さんは寄りませんよ。

久八　夫だから今日は炭屋さんか、後だといふのさ。
つれ　炭屋さんはお前さんより、今日は後で御座いますよ。
久八　幾度云つても同じ事だ。
つれ　イ、エ、お待ちなされば、乾度來ますよ。
久八　いゝから、お茶をモウ一杯下さい。
ト茶碗を見せる。
つれ　ハイ〳〵、お茶で御座いますか。
ト茶を汲んで出す。鳴物きつぱりとなり、上手より多助、紋附きの筒袖、股引にて、炭の荷をかつぎ出て來て、
多助　ヤア久八さん、今日はこんたに勝たれやした。
久八　だん〳〵得意が殖えると見えて、私より今日は遲かつたね。
ト多助荷を下して、床几へ腰を掛ける、おつれ茶を出す。
つれ　炭屋さんのお噂で持ち切つて居りましたが、相變らず御精が出ますね。
多助　今日は組屋敷で炭賣つたはいゝけんど、錢出してくんねえで待つて居たゞけ、久八さんに先きへ爰へ寄られやんした。

久八　爰の婆さんは聾で、何を云つても噺しが出來ねえ。多助さん、こなたの來るのを待つて居ました。
多助　私も毎日爰へ寄つて、久八さんに逢ひやすを、樂みにして居やんすよ。
久八　奉公人の二人も使つて、立派な店を出して居ながら、多助さんのやうに、斯う稼いだら、金が貯つて置き場があるめえ。
多助　久八さんの前でがんすが、金は貯る了簡では大きな身代にならうと云ふ、願え事は駄目でがんすぞ。
久八　ハア金を貯めねえで、大身代になれる工風があるかね。
多助　人はどうか知んねえが、私なんぞは金の顏を見るたア、直ぐに撒き出して片時家へ置かねえ方が、貯るベエと思ひやんす。
久八　ハテネ、片時金を家へ置かずに、溜るといふはどういふ理窟だね。
多助　まづ十人が九人迄、金がへえるとしまひ込んで、出さねえ樣にすると云ふが、私やア金の顏を見ると、コレ金よ能く聞けよ、此多助さんなんざア見ろ、雨が降つても風が吹いても、商えに出て稼いで居るに、われが樣に

箱へへえつて樂ゥするたアあんの事ツた、まつと稼いで出世して來うと、金の尻ツぺたア打つたてえて、炭の仕入れに出してやる、トナア其金のは、儲えて幾干か殖えて戻つて來やすわ・夫を幾度も〳〵、云ひ聞かせて出してやる、其中にやアだん〳〵殖えて歸つて來て、モウ此位え稼いだから、何處へもやらずに、お前の傍へ寢かして置いてくんなせえと、あやまる樣になりせえすりやア夫が天然自然と溜る金持たんべエと思ひやす。

久八　成程こいつアいゝ考へだ、然し金が溜る程の大身代になつて來ると、交際といふものがあつて、旨い物も喰はねばならず、いゝ着物も着にやアならぬが、さう成つたら金の方でも、又ピヨコ〳〵出て行くだらう。

多助　イヤ俺ア交際でも、そんな駄目な事アしましねえ、旨え物でも着物でも、好き好むから嫌になるだ、何でも向うから授け次第に、此方で無理な好みをせにやア、さう金の要る譯もあんめえと、考えてゐるが、どうでがんすな。

久八　イヤさう嗜みも堅く守りやア、金も云ふ事を聞かにやアなるめえ。

ト久八感心する、此時後ろの塀の切戸を開けて、藤野屋の下女お仲出て、

お仲　モシ、明き樽屋さん。

久八　ヘイ〳〵、どちら樣で御座います。

お仲　此後の藤野屋ですが、旦那樣が折入つて、お頼み申したい事があると仰しやいます、一寸行つて上げておくんなさいまし。

久八　ヘイ〳〵、畏りました。

多助　又儲け口が出來やしたね。

久八　御大家の旦那樣が、何を私にお頼みなさるか。

お仲　一寸來て下さいまし。

久八　ヘイ〳〵、御一緒に參りませう。

ト兩人連れ立つて後の塀の中へはひる、多助おつれに向ひ、

多助　お茶を一つ下せえ。

つれ　なんだえ。

多助　茶を一つ下せえ。

ト茶を飲む形ちをする。

つれ　ア、、お茶かえ、ハイ〳〵。

ト茶を汲んで出す、此時上手にて、

三人女乞食　サア、貰ひ溜めを出しやアがれ。

お龜　イエ、そんなものは御座いません。

ト上手より鹽原の後家お龜、つゞれなりの盲目乞食、六歳の四萬太郎同じ拵へにて、是も女乞食おすて、おくろ、おこもの三人に引き摺られて出て、舞臺眞中へ來て酷く引き据ゑる、

すて　まだ素人のくせに、しやアがつて、

くろ　よく俺達の廻り場へ來て、

こも　門並み貰つて歩きやアがつたナ。

お龜　御覽の通りの俄盲目、何處がどうやら分りませぬ者、どうぞ御勘辨下さいまし。

四萬　をばさん、堪忍してくんねえよう。

すて　エヽ、そんな猫撫で聲で、欺される様な、

くろ　甘えこちとらだと思やアがるか。

こも　構はねえから、引つ張つて行かう。

お龜　どうぞ御勘辨下さいまし。

三人　サア貰ひ溜めを出しやアがれ。

ト三人はお龜の懐へ手を入れる、多助は此爭ひを見て前へ出てお龜を圍ひ、

多助　コレ〳〵お前等はどうしたもんだ、子供を連れた盲目乞食を、虐めるなんてえよくねえこんだ、俺が止めて口利くだから、勘辨さつせえ。

すて　ナニお前さん、このどう盲目は新米乞食で、お前さん、

くろ　爰等近所は私達の、貰つて歩く繩張り内、

こも　渡りも附けずに旦那場を、先ッ潜りをして貰はれちやア、

すて　此方の貰ひがお前さん、少くなつてお前さん、

くろ　邪魔になるから此近所を、

こも　廻らねえ様にしてやりますのさ。

多助　夫なれば此盲目に、俺が後で云ひ聞かせるから、今日の所は勘辨さつせえ、只頼んでも聞き入れめえから、一文づゝ三文やんべえ、夫で勘辨するがえゝ。

ト財布より錢を出してやる。

すて　一文づゝぢやアお前さん、あんまり廉いがおまへさん、

くろ　相人が堅氣の商人衆ぢやア、モウ後强請も出來めえから、

こも　夫ぢやアまけて置きませう。

多助　そんなら早く行くがいゝ。

すて　ホンニ〳〵盲目のくせに、

くろ　こんなづうづうしい奴は、
三人　ありやアしねえ。
ト三人は口叱言を言ひながら上手へ引返してはひる。
お龜思入あつて、
お龜　お通りがゝりの旦那様、難儀な所をお助け下さいまして、何とお禮を申しませうやら、お蔭様にて親子二人助かりましてござります。
ト多助四邊へこなしあつて、
多助　コレ伯母さま、どうしてそんなにおちぶれて、此方盲目にならしつたゞ。
お龜　誰方様でござりますか、目が見えぬ故一向に私には分かりませんが。
多助　詞つき迄忘れたかな、五年後に沼田で別れた貴方の甥の多助でがんす。
お龜　ナニ多助どのか、ア、面目ない面目ない、合はせる顔が御座りませぬ、盲目の事故多助殿、どうぞ許して下さいまし。
ト大地へ打ち伏して詫びる、四萬太郎見て、
四萬　おッ母ア、なんで泣くんだ。
お龜　是が泣かずに居られるかいなう。

トちつとこなし、此時後ろの黒塀の窓より娘お花覗つてゐる、多助思入あつて、
多助　コレ伯母さん、面目ねえと云ふ事が、今になつて分かりやしたか、エ、情ねえこんだナア。
ト誂への合方になり、
此方も以前は二百石取りの家に生れ、お嬢様とも呼ばれた身が、若え時から身持が悪く、家の家来と悪さアしておん出たとやら、おつ走つたとやら、夫も縁あつて子供が出來、旅へ出た夫の跡を、慕つて行つた中仙道で、一人の娘を誘拐され、俺が養父の父様に助けられて後妻になり、誘拐された娘迄、元へ戻つて安穏だに其父様が死なつしやつてから、遺言もぶち忘れ、男を引ッ込み密通したり、俺が女房と極つて居る、娘に迄密通させ今考えると理窟はねえだが、俺が居ちやア面倒で、おッ殺されるも知んねえから、庚申前で圓次どんが、末期の異見に其場を逃げ、夫から江戸へつん逃げて、太え難儀もしやしたが、漸々のこんでどうかかうか、今ぢやア炭屋の店エ出して、一軒の主人となりやした、是から稼いで金エ溜め、國へ歸つて鹽原の家を立て度く思つて居りやす、シテ其姿はどうしたゞ、さつぱり譯が分かりやしねえ、

是もやつぱり是迄の、罪だんべえと俺ア思ふがどうでがんす。

お龜　ハイ〳〵、何と云はれましても、返す詞も御座いません、天の罰とて年がひなく、惡行をした其報いは、忽ち此身に巡つて來て、丹三郎や娘のお榮は、馬に喰はれて敢なく死に、村一統が寄り集り、丹次と私を殺さうと、騷ぐを運よく漸やう立ち退く時は藁小屋で、二人の死骸を隱す爲、火葬にしたが過ちにて、家は殘らず燒き拂ひ、火附けの科と云ひ立てられ、引き戻されては身の上と、人家離れた山奧へ二年越しも隱るゝ中、因果の胤の此子を生み、モウ餘炎の醒めし頃と、さまよひ辿る庵室は、お前も知つた惡者の小平親子の隱れ家にて、計らず二人が泊つた晚、丹次は小平に殺されたが、私と此子は谷へ落ち、助かるかひも情ない、惡い病ひが顏へ發し、生れもつかぬ盲目となり、お前に爰で逢ひますのも、惡事をすれば此通り、憂き恥掻くと世の見せしめ、面目次第も御座りませぬ、過ぎ去る事は多助どの、どうぞ許して下さりませ。

ト手を合はせて賴む。

多助　イヤモウ、有體にぶちまけて、詫びられて見ると俺も又、緣に繫がる伯母のこんだ、モウ〳〵恨みは晴れやした、さうして樣子を聞きてえは、靑はアノ後どうなりやした

お龜　靑はお榮や丹三郎を、喰ひ殺した故丹次どのが、刺し殺して終ひました。

多助　エ、そんなら靑は殺されやしたか、ア、情ねえ事をしやしたナア。然し今云つても返らねえ事だ、何しろ此方を助けて上げてえが、佛へ對して濟まねえから、救ふ譯には所詮行かねえ、知らぬ他人の乞食の積りで、報謝して進ぜべえから、せめて子供は眞人間に、なる樣に成人させなせえ、此方の姉のおつ母樣も、今は江戶詰めで、戶田樣の邸に無事で御座らつしやるから、能く詫び言をするがえゝ。

ト財布から金を一分出して、

ソラヨ、爰に一分あるから、是を手の內に吳れてやるだ。

ト是を聞き、後へ下り、

お龜　エ、滅相なお金なぞを、そんなに貰つては、猶々濟みません、只是迄の恨みさへお前が晴らしておくれなら、夫で私も明日が日に、死んでも思ひは殘りませぬ、今云ふ實の姉さんも、今では江戶へお國から、歸つておいで

と聞いたれど、身のふしだらに尋ねても行かれぬ仕儀の此姿、せめて此子は人並みに、成人させたいばつかりに、恥を忍んで借しからぬ、命を繋いで居りまする。

多助　サア其命を繋ぐにも、金が無けりやア一日でも、辛い浮世は渡れぬ筈、あかの他人の心算にて、やる手の内に遠慮はねえ、サア／＼是を取つて置かつせえ。

お龜　イエ／＼、どうも其お金は。

多助　ハテ、えゝから取つて置かつしやれと云ふに。

ト無理に金を手へ握らせる。

お龜　ホンの事だが多助どの、佛の樣な此方さんを、なんで邪險にしたかと思へば、盲目になつてもまだかうして、生きて居るのが勿體ない、どうぞ許して下さりませ。

四萬　ヤアおつ母アが金を貰つた、嬉しい／＼。

多助　子供は正直だ、好な物でも買つて貰えよ。

お龜　私は見えぬが伯父さんの顏を、其方は覺えて居て、御恩返しをするのぢやぞよ。サア、お禮を云ふのぢや。

四萬　アイ／＼。お旦那樣、お有難う御座います。

多助　アレ可哀さうに、本物の乞食の樣だ。サア／＼早く行くがえゝ。

お龜　長居をしては、此方の恥になりますから、是でお別れ申しませう。

多助　サア／＼、早く行くがえゝ。

お龜　コレ四萬太郎、モウ一度お禮をいや。

四萬　お旦那樣、お有難う御座います。

お龜　ア、面目ない事ぢやナア。

ト合方になり、お龜四萬太郎に手を引かれ、禮を云ひながら向うへはひる。多助見送つて愁ひのこなし、お常茶店より出て、

お常　耳が不自由で私には詳しい事は聞えませんが、今のお貰ひはお前さんの知つたお人で御座いますかい。

多助　其遠いのが此方の幸ひ、詳しく知れちやア、此方の恥だ。

お常　遠い方から此方へ來たとは、ヤレ／＼夫は可哀さうに。

多助　何をいふのか、餘つ程本所だ。

お常　本所なら、近い筈だが。

ト葭簀の蔭へはひる。後の切り戸口より久八手拭にて汗を拭きながら出て、

久八　茶座敷なんぞへ通されて、ビッショリ汗になつた。

多助　えゝ儲け口でも出來たかね。

久八　儲け口所か、多助さんお前の運が向いて來たのだ。
多助　ナニ、私の運が向いて來たとは。
　ト合方替つて、
久八　今後の藤野屋さんから、私を呼んだのは何事かと、裏口からはひつた所、四疊半の放れ座敷へ案内をして、美しいお嬢樣が立派な茶臺で茶を出したり、旨さうな菓子を出して、大層丁寧に取り扱つた上で、旦那が出て來て扨、久八さん、此方に一つ頼みがあるが、今庭の外へ休んで居るアノ炭屋さんは御懇意かと聞かれたのさ、エヽ懇意の段では御座いません。大の仲好しで御座いますと、お前が律儀一つさんまへに稼ぐ噺しをした所、何と物は相談だが、私の娘をアノ人の嫁にやりたいが久八さん、橋渡しをして與れまいかと、云はれて私も始めの中は嘘ではないかと思つたが、全く娘が此方に思ひを掛け、嫁にならうといふ相談、なんと是ぢやア多助さん、運が向いて來たに違ひなからう。
　ト多助は此斷しを聞いて、馬鹿々々しいと云ふこなしにて、
多助　イヤ、そんな不釣合ひな緣談なら、斷つて下せえやし。

久八　コレ／＼夫ぢやア私が困る、金の尾つぺたを叩く格で、氣を長くしてモツトよいのを嫁に爲る氣か知らないが、いかに娘御が望みだと云つて、地面の八ヶ所も持つて居る御用達しの立派な旦那が、私の樣な明樽買ひに手を下げてこれ／＼とお頼み、第一あんないゝ容貌の娘が向うから嫁になり度いと、お前を見込んで頼むのを、斷るといふは勿體ない、兎も角も私に任せて、ウンと云つて返事をしなせえ。
多助　イヤそんな娘は幾人あつても、私やア些とも望みでねえ、ダメだから斷つて下せえ。
久八　なんでそんなに、嫌がるのだ。
多助　サア私ア高が計り炭屋、向ふは立派な御用達しで、娘も容貌が宜いと云へば、釣り合はぬは不緣の基だ、幾等里が金持でも、嫁が夫を鼻に掛け、朝寐をしたりベラベラと、引き摺つて居ちやア駄目でがんす。望みでねえから斷つて下せえ。
久八　さうそつけなく云はれると、私も頼まれたかひがない、一體此方はどんな女房を持てば、身分に相應なのだ。
多助　私も世帶の爲だから、どうで一度は持たにやアならねえが、先づ云つて見ようなら、此方の樣な人の娘で、

我精に働き共稼ぎに働く女房なら持ちやすが、夫も元の主人と實家に、相談せにやア持たれやせん。

久八　娘のない私の所から貰はうと云ふなア、出來ない相談だ。そんならかうしよう、旦那の所へ此方を連れて行つて直掛け合ひにするとしよう。

多助　そんな窮屈な所へ行つて、斷つて居る間はねえ、太く今日は手間取つたから、ちつとも早く出掛けやんせう。

久八　コレサ、さう云つちやア、困るではないか。

多助　婆アさん、是は私の分だよ。

ト財布の中の錢を出して、茶代を置く。

お常　まアゆつくりなさいましよ。

多助　久八さん、ゆつくりしなせえ。

ト多助荷をかついで下手へ行き掛けるを、久八は止めて、

久八　コレサ、怒つちやア噺しにならねえ。

ト引き戻す。

多助　イヤ、怒りやせねえが。

ト振り拂ひ、

駄目でおんすよ。

ト稽古唄にて多助向うへはひる。此中後の窓より、藤野屋杢右衛門大阪人の主人の拵へ、お花下女と共に樣子を見て居る。久八は見送つて、

久八　アレ、ぶき／＼して行つてしまつた。イヤ話せねえ人だなア。

ト困つてゐる、此時切り戸を開け、杢右衛門羽織着流し、娘お花振袖形り、兩人庭下駄にて出る、久八是を見て、

是は旦那樣、アノ通り故、私も呆れ返つてをりまする。

杢右　アノ堅いのが、

ト向うを見て、床几へ腰を下すを、木の頭。

此方の望みだ。

トよろしく向うを見込み、お花と顏見合す、久八は案じるもやう、右鳴物にて、

幕

ト飴屋の鳴物にてツナギ、道具出來次第に直ぐに引返す。

本舞臺上手へ寄せて四間中足の二重、八枚飾り、内一間上の方書心に二枚引きの障子、正面上手中仕切のある見世戸棚、續いて一間大阪格子の出入り口、

下の方板羽目、此前に大ぶりな錢箱あり二重の下
手一間の落間。此正面炭薪を積みし置場、下手寄り
二重へ掛け番心に二間程の門口、軒先きに「元祖計
り炭鹽原多助」と記せし、轡の紋付きの高張り提灯
を建て、總て本所相生町鹽原店先きの體。屋體の上
手に帳場を置き、行燈の側に多助帳合をしてゐる。下
手の落間の所に半切れ桶の中へ炭を澤山盛り上げ、
臺の上に計り炭を入れし笊を並べ、一杯七文の正札
をつけてある。若い者嘉助、丁稚彌吉、長屋の女房
おみつ、小娘お鐵、炭とりを持つて立ち掛かりゐる。
此模樣さんげ〳〵の合方に、狸囃子を冠せて幕明く。

みつ　一杯七文としてあるが、八文持つて來たから、お剩錢だけ餘計おくれ。

嘉助　へい〳〵。

お鐵　私にも一杯おくれ。

彌吉　ヘイ〳〵畏りました。

多助　毎度有難う御座います、お負け申して上げな。

ト炭を計り、錢を受取り、錢箱へ入れる。二人は下手へ來て、

みつ　八文ぢやア廉いものと、兩國で呼んでゐるが、斯んな廉い物はありやアしない。

お鐵　私の所の長屋では、みんな爰の炭を買ひます。

みつ　是ぢやア誰でも買はないのは損だ、隣りの家へも教へてやらう。

ト兩人下手へはひる。向うより前幕の久八、家主金兵衞と連れ立つて出て、門口へ來て、

金兵　ハイ御免よ、多助さんはお家かな。

嘉助　是はお家主樣入らつしやいまし、久八さんも御一緒で御座いますか。

久八　目出度い事が出來たので、家主さんを頼んで來ました。

ト多助此聲を聞いて帳場より出て、

多助　是はお家主樣、どうかずつと通つて下せえやし。

金兵　夫では御免なさい。

ト兩人二重上手へ通る。

久八　多助さん、此頃は四つ目の茶店へも少しも寄りませんね。

多助　是は久八さんお出でなせえ、彼處へも無沙汰ア爲やしたが、廻り場所が殖えたので、寄つて居る間がなくなりやした。

久八　夫は繁昌で目出度い事だ。

　ト金兵衛煙草を喫まうとして、火鉢を掻き廻して見て、

金兵　コリヤア煙草の火が粉炭ばかり、あんなに炭が澤山あるに、粉炭計り遣はずに、大きいのを注いだら宜からう。

多助　賣り物になりやすと、火に起すよりお客様にちつとも廉く上げてえので、惜しくつて成りやせんので、粉炭ばかり遣ひやすが、是でも年に積つて見やすと、大した事になりやすよ。

金兵　ハヽア年に積ると、大きな物かな。

多助　大き所ぢやア御座えません、まア早え噺しが私が初めて江戸へ來て、奉公して居た主人の所で、毎日奉公人が川岸揚げエする時、草履の鼻緒が切れやすと、其儘棧橋から川へ捨てるが、夫がいかにも勿體ねえから、竹の先きに釘を打つて、夫を引き上げて置いて、毎晩私が鼻緒を立て、ギウと眞中を〆めて置きやしたが、平均一日に五足づゝ、拾ひ溜めて恰度二年溜めやしたが、是が幾足になりやんすナ。

金兵　さうさ、コウツと、一日に五足で十日で五十足、是を一月だと百五十足かな。

多助　さうで御座りやせう、夫が一年なら何足になりやすね。

金兵　一年なら、こうツと、千八百足だ。

多助　二年だと幾干になりやす。

金兵　うるさいナ、二年なら三千六百足さ。

多助　何で御座えやす、さう云ふ塵積にして、私は恰度二年で三千六百足草履を溜めて、御主人へ上げた事が御座りやした、何と大きな物では御座えませんか、夫だから炭も冗には遣えましねえ。

金兵　成程是は驚いたナ、此奴ア心掛けねばならぬ。（ト多助下手へ向ひ、）

多助　是よ、お客様が途切れたら田村さんと坂野さんへ、持ち出しに行つて來るだぞ。

嘉助　ヘイ畏りました。

彌吉　夫ぢや俺等は坂野さんへ行かう。

嘉助　犬に揶揄て吠えられるな。

多助　大きに遲くなりやした、毎度有難うがんすと云ふのだぞ。

兩人　ヘイ。

　ト兩人炭俵をかつぎ、下手へはひる。

金兵　何處であんなに囃してゐるか、背の口から狸囃子は是が本所の名物だ。

多助　二人連つて御座つたは、何の御用でがんす。

久八　扨早速に家主さんから、口開きをして下さい。

金兵　トキニ多助殿、久八さんから此方には噺してはある事だが、此人の親類に十八になる娘があつて、堅氣な所へ嫁き度いが、支度もなければ着のみ着の儘、貰つて呉れる所はないかと、泣き付かれたので久八殿が、お前に當つて見た所、容貌はどんなでも構はぬから、臺所元から店の手傳ひ迄、我精に働く樣なのなら、貰つて遣らうとの挨拶に、久八殿が假親になり、私が媒人でよこす心算、急に實親の方に都合があつて、娘を早く遣りたいから、今夜先方へ連れて行き、内祝言の眞似事をして嫁ける譯には行くまいかと、親子連れで出掛けて來られ、實は當惑してゐるが、當家の都合はどうで御座らう。

ト多助困る思入にて、

多助　エヽ、貧乏人の娘なら、恰度身分相應故、貰ふ氣で居りやすが、私も國に居た時分、嫁では懲々しやしたから佐久間町の元主人と、邸に御座る實親に、此間逢ひやして相談掛けて見た所思ひの外に悦びやして、主人は私へ轡の紋の、羽織を祝つて呉れやした、又實の父樣は重代の脇差しを祝つてくれやしたから、有難えと思つて居りやすが、今夜直ぐといふ婚禮は、なんぼ何でも出來やしねえ。

金兵　折りがあつたら此方に逢ひ、聞かうと思つて居ましたが、轡の紋を附けるのは、薩摩樣の家にでも、由縁があつて附けなさるのか。

多助　イヽヤ、さうぢやアがんせぬが、こりやア私が馬の爲に、國で命を助かりやした、其恩を忘れぬ爲、轡の紋を付けて居りやす、又爰へ店出しをしました日も、馬が助けてくれた、其日にしましたから、成らう事なら婚禮も、其日に遣り度く思ひやす。

久八　夫は表向きの婚禮なら選んでやるが宜いが、貧乏同士の貰ひ引きは、商賣の都合に由り濟ましてくれても宜い譯だ。

金兵　今夜の所は土瓶の茶で、茶か盛り位ゐで目出度く濟ませ、奉公人の二人にも、世間の者にも當分の中、親類中から泊りに來たとか、何とか云つて程よく噺し、貰つて置いては下さらぬかな。

多助　夫は誠に困りやしたナ。ようがんす、さう云ふ譯な

ら、まア引き取ると爲やんせう。

金兵　承知してくれるか、夫は忝い。

久八　夫おやア、一寸行つて連れて來よう。

ト立ち掛かる、此前方より下手へ前幕の杢右衛門、羽織袴、娘お花振袖の拵へ、小風呂敷の包みを持ち出て門口に立つてゐて、此時孱な掛け、

杢右　イヤ、其迎ひには及びませぬ。

ト金兵衛久八出迎へて、

金兵　是は地主の旦那様、

久八　サア〳〵、是へお通り下さい。

杢右　夫では御免下さい。

ト杢右衛門お花は二重上手へ通る。

多助　モシ〳〵久八さん、此お方は誰殿でがんす。

金兵　是は此相生町を八分通り、地面を持つて御座る、四ツ目の藤野屋さまだ。

多助　エヽ。（ト驚く、杢右衛門前へ進み）

杢右　是は多助どの、始めてお目に懸ります、恰度今から三月程前、此方が毎日塀外の、茶店へ休んで御座る時、久八どのを内へ呼び入れ、申し入れたる縁談も、身分の所が釣り合はねば、不都合だとか申されて、お斷りが御座つた由、夫故娘を久八殿の、養女に先頃遣はして、勝手元だの小買ひ物の働き方を仕込んで貰ひ、漸々此頃馴れた様子、まづ兎も角も此方の家へ、貰入れさせて具れる様、是なる家主金兵衛殿を媒人夜に紛れ込み、申し入れたる内祝言、早速御承知下されて、親類共の手前も安心、どうか行末幾久しく、お目を掛けてやつて下さい。

ト是を聞き、多助腹の立つ思入にて、

多助　コレ久八どの、此方私を撒しなすつたナ。

久八　なんの此方を撒すものか、私の様な貧乏人の娘を嫁に貰ふのなら、身分相應の縁組みだから、貰はうと云はしつたを、よもや此方は忘れはしまひ、夫だから親類から養女に貰つた私の娘、此方の所へ嫁によこし、家主さんの媒で極氣易い内祝言を、爲して貰はうと頼んだのだ、何もお前を撒しやアしねえ。

多助　藤野屋さんを親類だなんて、噓も大がひに云はつしやい。

久八　夫こそ今は身分違ひに、誰にも云はずに隱して居たが、實は遠縁の親類だよ。

杢右　夫も此方を撒したと、腹が立つなら祝言を、今宵するにも及ばぬ故、下女同様に此方へ、置き使つた上で辛抱

を見届けたれば改めて、嫁に貰つて下さいまし。

金兵　夫ではどうもお嬢樣が、餘りお可愛さうで御座りませう。

お花　ア、申し金兵衞樣、モウ私を嬢なぞと、仰しやつて下さりますな、此緣邊が極ります迄、此方のお宅の召仕ひ、花やかうせいあゝせいと、呼び捨てにして使はれませねば、却つて居辛う御座ります、多助樣が御得心で女房にお持ち下さる迄、下女待遇にて御遠慮なう、御用を仰せ付けて下さりませ。

金兵　何と是では多助殿、置いて上げずば成りますまい。

多助　イヤさう云つても、駄目でがんす。

金兵　ナンデ是が、

久八　駄目でがんすナ。

ト合方になつて、

多助　サア所詮駄目と思ひますは、口ぢやア何でも爲ると云つても、大家で育つた娘ッ子が、貧乏暮しの共稼ぎは三日と續くもんぢやアがアせん。まづ朝起きが肝腎で、鳥がカアと啼くか啼かぬに、奉公人より先きに起き、裏の井戸から水ウ汲み込み、餘計な薪を使はぬ樣、釜の下ア燃し付けて、湯の沸く間に米エ研ぎ、水加減から勝手元は、一切一人で切つて廻し、飯の支度や拭掃除は、人手を待たずに手敏く、我精にやる樣でなくちやア、貧乏世帶は遣り切れやしねえ、又賣りに來る八百屋物なんぞを、內に待つて居る樣ぢやア、廉い物は買はれやしねえ味噌こし持つて買ひに出たり、奉公人の手が足りにやア炭でも薪でも引ッかついで、得意場へ持つて行く樣でなけりやア、俺が女房に向きましねえ、第一そんな長え袖で、ビラシヤラして御座つては、駄目なこんだと思ひやす。

杢右　夫故支度も澤山あれど、皆古着屋へ賣り拂ひ、晴着と云ふはアレ一枚、木綿着物の着替へなら差支へなく娘の手で、仕立てゝあると申す事。

金兵　又多助殿も云はしつた、臺所元の働きなら、三月も跡からお花樣が、手順を習つてある樣子。

久八　まづ兎も角も今夜の所は、目出度く濟ました上の事後で何とかいたしませう。

多助　イヤあながち振袖が惡いから、直ぐ着替へろと申す譯ぢやアがんせん。

杢右　併し家風に合はぬと云ふ、其お詞も御尤、ア、こりや何か爲樣がありさうなものぢや。

ト思案する、お花は決心せしこなしにて、ツカツカと土間へ下り薪割臺に振袖の兩袂を載せ、薪割にて是を切る、一同は呆れて見てゐる、お花は斷ち切りし兩袂を持つて、多助の前へ出し、

お花　此方へ參れば此樣な、振袖は不用故、モウ一生涯着ますまいと、誓ひに拂ふ此袂、仰しやる通り詰め袖の着類からして、つゝましく致しませねば一軒の、世帶の始末は出來ませぬ、若し此末に私が、御意に反いてお暮しに不爲な事でもいたしましたら、此誓ひを忘れたかと、御異見なされて下さりませ。

ト多助此體を見て感心して、

多助　イヤ其心底には魂消やした、女子は誰もベンベラの着物を惜しむものだのに、俺が詞を立てべエと、惜し氣もなく振袖をぶつ切り誓ひを立てるとは、ホンニ見上げた事でがんす。

杢右　そんなら御承知下さるか。

多助　ハイ、御主人樣と双親へ、早速噺して明日にでも、婚禮したくなりやした。

金兵　さうさへ成れば旦那樣も、お望み通りで、御安心で御座りませう。

久八　能くまア貴方も思ひ切つて、誓ひをお立てなさいました、モウ私の養女だと云はずに御縁が結ばります。

お花　無謀な奴とお叱りを、受けませうかと思ひましたに却てお氣に叶ひまして、大きに仕合で御座ります。

ト嬉しき思入。向ふより以前の嘉助、彌吉案内して荷主の手代善四郎旅拵へ、判取帳を持つて出て、舞臺へ來て、

嘉助　モシ旦那、野州飛駒村の荷主さんで、吉田八右衞門さんといふお方から、炭を送つて參りました。

多助　オ、其お人は久しい後に、俺が店出しする時は、千兩計りの炭薪を送つてやるとの約束だつた。

喜四　夫では此方で御座りますか、私は八右衞門の手代で御座ります、炭を積んで參りましたから、是へ何か受取りを願ひます。

ト判取帳を出す。

多助　ハイ〳〵、夫は御苦勞さまでがんす、今夜一晩代物は、船へ置いて下せえませんか。

喜四　お氣の毒では御座いますが、十三艘の荷船故川が埋つて外の船が、通られないと申しますから、直ぐに上げて下さいまし。

多助　十三艘おやア竪川の狭え川故、困るだんべえ。
嘉助　夜通し掛つて運んだら、運べぬ事もありますまい。
お花　何俵あるか存じませんが、稽古の爲私も、手傳はして下さりませ。
金兵　貴方が運ぶと聞きながら、此方も見ては居られない。
久八　コリヤ惣掛りで手傳ひませう。
多助　十三艘の炭薪ぢやア、迚も今夜は夜明かしだ。
杢右　コリヤ袴なぞは、はいては居られぬ。
　ト皆々立上がり、尻をはしをる、此模様賑かに、道具廻る。

　本舞臺常足の二重、石垣の蹴込み、後ろ松井町の川端、夜るの書割り、一面に浪布を敷き詰め、上手能き所に苫船一艘繋ひあり、總て一つ目寄り、南川岸の體、浪の音、狸囃子にて道具止る。
　ト右鳴物にて、上手より黒鴨の供綱の小田原提灯を提げ、先きに立ち、同心荒井周助、手先四人附いて出て來て、
周助　向ふ川岸の騒がしいのは、何だか様子が分つたか。
手一　ヘイだん／＼聞き糺しました處、相生町で評判の鹽原と申す炭屋方へ、荷主から船が着いたのださうで御座います。
周助　炭屋へ炭の荷が來るのは、何の不思議な事もないが何で川岸が騒がしいのだ。
手二　千兩からの炭薪だと申して、十三艘の船が着いたので、川岸が船で埋つてしまひ、
手三　外の船が通れませんので、早く荷を揚げて貰ひたいと、騒いで居るので御座います。
周助　どんな立派な炭屋か知らぬが、千兩の荷が着いたとは、番屋へ參つて聞き合はせものだ。
手四　聞き合はして見ました所、鹽原多助に其荷主が、恩返しだと申す事で、詳しい譯は申しませぬ。
周助　篤と調べて見ねばなるまい、後へ歸つて向ふへ廻らう。
四人　左様なさるが、よう御座ります。
　ト皆々上手へはひる。靜かなる合方になり、下手よりお龜、四萬太郎に手を引かれ出て、
お龜　コレ四萬太郎、何處へ行つても此態では、泊めてくれる者もないが、まだ氣丈夫なは此間、多助殿に逢つた後、又今日出會つたら貢いでくれた此お金、是を大事に

持つて居れば、木賃宿へ泊まれやう、サ少しも早く行かうわいなう。
四萬　橋のある所を左りへ行くと、宿屋があると敎へてくれた。
お龜　夫では急いで行くとしよう。
ト舞臺眞中へ來て、
今の此身を思ふにつけ、曲つた事は出來ぬものぢやナア。
ト合方になり、
沼田に居る折不義をして、恩を仇にて返したを、仇を恩にて多助どのが報つてくれた先刻のお金、取られた義理ではなかつたが、子供が不愍でならぬ故、恥を忍んで惠みを受け、せめて今夜は緩りと宿屋で寢るとしようわいのう。
ト云ひながら下の方へ來て、石に躓き轉んで金を落す。
アイタ、、、、。
四萬　おつ母ア、何處が痛いのか。
お龜　敎へてくれぬものだから、石へ躓き爪をはがし、痛くつてならぬわいなう。
四萬　さつきの金で藥を買つて、貼けたら早く治るだらう。
お龜　ホンニ、さう爲ようわいなう。
ト懷を探り見て、
ア、氣がわく／＼する故か、大事な物を落してしまふた。
四萬　何を落したのだえ。
お龜　先刻貰つたお金を落したから、其處等を搜して拾つておくれ。
四萬　アイ／＼。（ト紙入を拾つて、）
おつ母ア、爰にあつたよ。（ト渡す。）
お龜　折角貰つた大事のお金、よう搜してくれた。（ト懷中して）サア早う行きませう。
ト行き掛ける、此時後へ道連小平、旅形りにて窺ひ居て、ズツと側へ來て四萬太郎を川の中へ蹴込む。此い水音を聞いて、
コレ四萬太郎、どうぞしたか、コレ四萬太郎や。
トウロ／＼するを、小平手早く手拭にて絞め殺す事あつて、懷中より金を引き出し、中を改めて見て、
小平　ナンダ、大事な貰つた金と云ふから、十と二十と思ひの外、二朱が一つに端た錢、此奴ア飛んだ見込み違えだ、併し是でもねえにやア增しだ。ドレ、兩國へ行つて一杯やらうか。
ト行き掛ける。下手へ、以前の同心手先き出て是を見

て、

周助　ソレ。

ト指圖する。手先は小平に組み附き、立廻り、能き見得にて、　道具廻る。

本舞臺平舞臺後ろ向ふ川岸を見たる夜ろの遠見、上下は川岸藏の張物にて見切り、眞中五間の間炭俵を澤山杉形りに積み上げ、鹽原と若竹座と記せし弓張提灯を澤山挿し、左右に鹽原の高張提灯を建て、總て相生町竪川河岸物揚場の體。爰に杢右衞門弓張提灯を持ち、指圖をしてゐる、小揚人足以前の嘉助彌吉も交り、炭俵を運び居る見得、狸囃子、波の音にて道具止る。

ト右鳴物にて、此人數に交り、金兵衞久八喜四郎も襦袢の肌脱ぎ、尻端折りにて、炭俵をかついで運ぶ、お花襷掛け裾を高くからげ、同じく炭俵を重さうにかつぎ、運ぶ事四五度ある。

杢右　金兵衞殿も久八さんも、一息吐いて休んではどうだな。

金兵　草臥ない事もないが、お花樣でさへまだ休まないのに、大の男が弱つては先祖へ對して云譯がありません。

久八　驚いたのはお孃さんが、炭をかつぐ扱ひ方だ、何處で何日の間に覺えたか、初めて今夜俵をかつぐ、素人の樣ぢやア御座いません。

ト爰へお花俵をかついで出て、

お花　金兵衞さんも久八さんも、モウお勞れで御座いますかえ。

杢右　イヤあんな憎まれ口を利き居るわえ。

金兵　夫だから外聞が惡い。

久八　モウ一ツつけよう。

ト又炭俵を運ぶ、能き時分、下手より多助大土瓶と、盆へ茶碗を澤山載せしを持つて出て、

多助　ヤレ〱、嘸草臥たでがんせう。サア〱茶が這入つた、休んでくんせえ。

金兵　夫は有難い、久八さんどうだね。

久八　實は咽が乾つ付く樣だ。

杢右　お花も些と休むがいゝ。

お花　モウ少しでお終ひになりますから、爰へ運んでしまひませう。

喜四　イエ是だけ船が明けば、川に差支へも御座いませんから、まアお休みなさいまし。

多助　こんな我精な嫁御とは、思ひも寄らずに居やんしたダ、此働きには魂消やんした。

ト皆々茶を飲んでゐる、浪の音になり、上手より以前の周助供を連れて出て、

周助　コリヤ、鹽原多助は居らぬか。

ト多助前へ出て、

多助　へイ／＼、私が多助でがんすが、御用でがんすかね。

周助　其方に荷主が恩義があつて、十三艘へ積んだ炭を、送つたと申す事だが、どういふ事情の恩義があるのか、差支へなくば、聞き度いものだ。

多助　夫は四年程前方に、私がまだ佐久間町の山口屋に奉公中、野州飛駒村の荷主で、吉田八右衛門と云ふ人が、江戸へ仕切りを取りに來ました時、道連れ小平といふ惡者に五百兩程詐られる所を、私が其奴の顏を知つて居て無難に遁れた其禮に、われが店でも出した時は、千兩計りの炭薪を送つてやらうと、云はつしやつたを、此方は忘れて居やしたを、堅えお仁で約束違えず、送つてくれやしたのでがんす。

周助　其詞に相違ないか。

喜四　此通り判取りを持つて參つた、吉田の手代、私が證人で御座います。

ト判取帳を見せる。

周助　其小平と云ふ奴は、子供を連れた盲目の、女乞食を殺した科で、今夜向ふ川岸で御用に相成つたぞ。

多助　そんなら、モシ、伯母御でねえか。

周助　なんぢや。

多助　イエ、夫はよい氣味でがんした。

周助　彼が箇條が殖えて參つた。イヤ、是は川岸揚げの邪魔をした。

ト周助供を連れて、下手へはひる。

杢右　惡い奴が殺されたり、上のお手になる事は少しも此方に拘はりなしだ。

金兵　まづ斯うやつて千兩の、仕入れが出來れば多助どのも。

久八　益々店は繁昌して、大身代になるのは今の間。

喜四　目の寄る所へ玉とやらで、能いお嫁さんが出來ますとは、結構な事で御座ります。

お花　何卒お目には掛りませぬが、御主人樣へ貴方から、

よろしうお傳へ下さりませ。

多助　恰度爰等の町の名は、婚禮なぞには嵌つた町の名、

杢右　成程鶴の千歳町に、龜澤町はよい一對、

金兵　島臺飾る尾上町に、松坂町の色替へぬ、

久八　結ぶ妹脊の相生町に、綠町とは操の鑑、

多助　是ぢやア私も炭燒きの、爺イ婆アの友白髪まで、添ひ遂げにやアなりましねえ。

お花　ホンニ嬉しい其のお詞、

喜四　お目出度う、

皆々　御座ります。

ト鷄笛になる。

多助　一番鷄がモウ謳ふぞ。

杢右　ソレ、もうちつとだ、運んで仕舞え、

皆々　合點だ。

多助　是で多助も、

トにつたり笑ふを、木の頭。

男になれやんす。

ト悦ぶ。一同俵を積み上げる。鷄笛、波の音にて、

拍子幕

鹽原多助（終り）

實事を調ぶる三遊亭が作せしまゝでまだ辯ぜぬ
人情噺しを二番目の脚色に文政職人氣質其頃藏
前坂倉屋の好みで指した佛壇は仕事に妙を江戸
中の評判となる折紙付極めも箱根の湯河原にて
捨子と知れし身の素性明しかねたる龜甲屋の夫
婦を殺せしあやまちに訴訟の覺悟恩人へ空生酔
の愛想盡し奥を勤むる腰元が所行を知つてお奉
行所へ助命の御沙汰嘆願に惡人露顯の落着まで
補綴の細工無器用に眞似る業さへ未熟ながら

指物師名人長次



指物師名人長次（五幕）

序幕

藏前八幡社内の場
坂倉屋奥座敷の場
同裏手塀外の場

人物――指物師長次。坂倉屋助七。同伜助藏。箱淸の聟次郎。美濃屋茂二作。箱廻し善助。坂倉の手代佐兵衞。同丁稚三吉。參詣人四人。同下女お磯。柳橋の藝者小花。茶屋女おふく。子供乞食六人。

本舞臺一面の平舞臺、正面八幡の本社の書割り、下の方成田山旅宿、本堂の書割り、上の方に葭簀張りの茶見世、總て藏前八幡社内の體、爰に參詣人甲乙丙丁の四人、町人の拵へにて腰を掛けて居る。茶屋女お福茶を出して居る、坂倉屋下女お磯、丁稚三吉

お百度を踏んでゐる見得、宮神樂に双盤をあしらひし鳴物にて幕明く。

參甲　今日は二十八日で、不動樣の御緣日だけ、大層な參詣だ。

參乙　長井兵助も天氣を當込みで錢儲けた、爰の娘も別仕立てに造り上げたのは、茶代をせしめる了簡よ。

參丙　捨利を拂つて質屋の入換へ、よツ程資本が掛つた奴よ。

お福　お揃ひで、能く御參詣で御座いますね。

參丁　爲事を休んで出て來たのよ。

お福　御樣子のよい事をおつしやいますね。

參甲　樣子のいゝと云ふなア、お前の事だ。

お福　嬲つてはいけませんよ。

參乙　眞實の事よ。

お福　おすしを取りますから、御緩りなさいまし。

參丙　誰が袖へ行つて一杯やるから、直ぐに呼びによこすよ。

お福　眞實ですか。

參甲　嘘をいふものか。

參丁　だが、座敷が明いて居りやアいゝが。

お綱　乾度ですよ。
參甲　當てにして待つておいでよ。
　ト右合方にて、參詣人四人下手へはひる。
お綱　お茶代を置いた事のない、風の悪い客だよ。
　ト唄になり、向ふより柳橋の藝者小花、餘所行きの拵へ、箱丁善助供なしにて出て花道にて、
小花　そんなら善どん、梅本で待つて居るから、若旦那を呼び出して來ておくれ。
善助　呼び出すのはいゝけれど、三味線箱を持つて居ちやア、ほどが悪いから、向ふの茶屋へ預けて行きませう。
小花　ホンに、三味線箱が荷物だねえ。
　ト兩人舞臺へ來る、三吉小花を見て、
三吉　ヤア、柳橋の小花さんだ。
小花　三吉どんお詣りかえ。
三吉　箱屋の一件で、お礒どんと百度參りさ。
善助　ナニ箱屋の一件だつて。
お礒　イエ箱屋と申しても、藝者衆のお供の事では御座いません、指物師の箱屋の事で大心配が出來まして、お嬢樣の御名代に私達が、不動樣へお百度參りで御座ります。
小花　さうして御心配のあるとも知らず、苦勞になるから、

お礒　エヽ。（ト聞咎める。）
小花　苦勞の絶えぬ浮世とは、能く云つたものですねえ。
善助　三吉どんは直ぐにお店へお歸りか。
三吉　なんぞ用があるかね。
善助　お目にかゝつて、頼みたい事があるのだ。
お礒　そんなら是がお馴染の。
小花　エヽ。
お礒　三吉どん、お馴染の藝者衆かえ。
小花　參會の時若旦那のお供で、お出での其折りにお近附きになりました。
三吉　善どん一緒にお出でな。
善助　三吉どん、何分頼むよ。
お礒　貴方御ゆつくり成さいまし。
　ト挨拶して、お礒先きに、善助三吉、噺しながら三人向ふへはひる。
小花　私も苦勞で、氣が氣でなく、座敷先きから善どんと抜けてやう〳〵來たけれど、どうか首尾よく逢へればいゝがねえ。
　ト上手より美濃屋茂二作、中老の町人羽織着流しにて窺ひゐて、此時前へ出て、

茂二　コレ小花、よく寢こかしを喰はせたな。

ト小花驚いて、

小花　おゝ、お前は美濃屋さん。

ト逃げに掛かるを、引き止めて、

茂二　どつこい、今度は逃がさぬぞ、端唄に準えて當込みの、惚氣を聞くも太儀だから、寢る態をして居る中、ツイとろ／＼と肱枕、座敷も明けぬ客を捨て、挨拶もせず歸るとは、茶屋も茶屋だし藝者も藝者、俺でなければ嚴重に野暮の理窟も並べるが、其所が年がひ鳥居數、越して居るだけ粹を通し、其儘起きて後を慕ひ座敷を拔けて行く先きは、多分此邊と當りを付け、社内でおぬしを捉まへたからは、モウぴんしやんと逃げ廻らず、俺の頼みを聞くがいゝ。

小花　そんな事を仰しやいますと、人立ちがいたしますから、離れて居て下さいまし。

茂二　離れては片時も居られねえ。

小花　どうぞ放して下さいまし。

茂二　イヤ八幡樣の社内でも、放生會なぞはせぬ、人に見られて恥かしくば、俺と一緒に來るがいゝ。

小花　善どんの歸る迄、待ち合はさねばなりませぬ。

茂二　イヤあんな奴はどうでもいゝ、俺が斯うして捕へたからは、是が不動の金縛りだ。

小花　アレ御無體をなさいますな。

ト小花茂二作を突き放す、茂二作横ざまに倒れる。此間に小花は貞養の蔭へ逃げ込む。

茂二　アイタ、、、、。

ト入れ違ひにお福出て、

お福　お危う御座います。

茂二　危いもないものだ、小花はどうした／＼。

お福　今裏門の方へ、逃げてお出でなさいました。

茂二　ウヌ逃げたとて、逃がすものか。

ト下の方へ行き掛ける、茶店の横手より鼈甲屋幸兵衛大町人羽織着流しにて出て、

幸兵　美濃屋さん、待ちなさい。

茂二　オヽ鼈甲屋さん、御參詣ですかな。

幸兵　此社内へ來合せて、思はず見ました今のしだら。

茂二　藝者メがあんまり人を馬鹿にするから、今追つ駈けて捉へる所。

幸兵　いゝ年をして茂二作さん、藝者狂ひでもあるまいから、此人込みの群集の中、チト嗜んだがよくはないかナ。

茂二　天窓兀げても浮氣は止まぬと、都々逸でも謳ふ通り此道ばかりは別な物、どうも辛抱なり憎い異見をして下さるより、二百兩貸して下さい、アノ小花を身受けしてこつそり圍つて置きたいのさ。

幸兵　ハテ相手さへ得心なら、二百兩が三百兩でも外ならぬ此方の事、貸して上げまい物でもないが、今の樣子の工合ひでは、金を山程積んだ所が、無駄な事だと思はれるね。

茂二　是はとんだ御挨拶、女郎や藝者は賣物買物、金で此方の自由にするに、何で否やがあるものか、二百兩用達つのが、迷惑だから體をよく斷わんなさる逃げ口上だ。

幸兵　さう云ふ譯では決してない。

茂二　イヤ〳〵夫に違ひない、さう云ふ了簡ならモウ頼まぬ、其代り私の方でも此返禮はせねばならぬ、大身代の鼈甲屋へ入夫にはひつたは誰の庇護だ、此茂二作が玄石といふ針醫を頼んだ秘術の針の痕は、云はずと覺えのある事だ、夫や是やを思つたなら二百兩や三百兩、貸して呉れてもいゝ譯だ、私の方でも了簡があるからまアさう思つて下さい。

幸兵　腹を立つて、氣障を云ふにも及ばぬ事、金を貸すのは構はぬが、冗をするのが惜しいから、夫で異見をしたものゝ、併し夫程アノ藝者に執心をして御座るなら、まア兎も角も爰は門中、何處ぞへ行つて飲みながら、相談を爲樣ぢやアないか。

茂二　さう事を分けて云つて下されば、實は金藏の鼈甲屋さん、愛想盡かしは云ひ度くない、何處ぞ寄り附けの家へお供して、御相談をいたしませう。

幸兵　代地へ行つて巴屋で、一杯やりながら噺しませう。

茂二　巴屋とは有難い。

幸兵　茶代は爰へ置くよ。

お福　是はお氣の毒樣で御座ります。

幸兵　サア御一緒に行きませう。

ト双盤入りの唄にて、兩人連れ立つて向ふへはひる。お福見送つて、

お福　今のお方は鳥越で、大家と噂の鼈甲屋の旦那、お茶も飲まずに、お茶代を澤山置いてお出でなすつた。

ト葭簀の蔭より小花出て、

小花　お福さん、お氣の毒でしたねえ。

お福　お隱し申さうにも手狹の店、お察し申して居りました。

小花　イケ好かないアノ爺イ、聞けば其昔鼈甲屋の今の旦那を入夫に入れ、其緣で金の生る木が出來たとやら、お幇間半分で得意先きを廻つて歩く茶道具屋、あんな好かない奴の妾手かけに、誰がなるもので御座んせう。
お福　今も妾で鼈甲屋の旦那が異見をした樣なれど、それを聞かずにお金の無心、小花姉さんを身受けをすると、狂人の樣になつて居ました。
小花　夫につけても善どんが、早く若旦那を呼び出して、連れて來て呉れないと、猶々氣が揉めて來ましたよ。
ト お福向ふを見て、
お福　オ、向ふへ來たのは若旦那。
小花　人の氣も知らないで、悠々としてゐなさるよ。
ト 合方になり、向ふより坂倉屋の倅助藏、羽織着流し以前の善助を連立つて出て、花道にて、
助藏　今の二人に顏を背向けたは、善の字、借りでもあるのか。
善助　アレが小花さんに嫌はれ客の、美濃茂で御座いますからさ。
助藏　成程嫌はれるのは尤だ、私でさへあんな奴は眞ッ平だ。
善助　先刻川長の奧二階で、寢こかしにして來た奴だが、どうして此方へ出て來たか、小花さんの後を追つ驅けて來たのかも知れません。
助藏　コリヤあの爺イと話しがつき、心變りがしたかも知れない。
善助　何の、そんな事がありますものか。
助藏　小花は老人が好きださうだ。
ト 右の合方にて、舞臺へ來る。
善助　小花さん、若旦那をお連れ申しました。
小花　オヤさう、嘸迷惑な顏をして怒つた事だらうねえ。
助藏　なんでそんな氣障を云ふのだ、扨は今の茶道具屋と乘り換へる氣になつたのだナ。
小花　エ、そんな疑ひを受けても、ぞつとしますよ。
善助　逢ふと早々痴話喧嘩とは、些と嚴しう御座いますぜ、ドレ今の内不動樣へお參りをして來ようか。
ト 善助下手へはひる。
助藏　聞けばお前は美濃茂といふ、今見掛けた茶道具屋に、大層ひゐきになるとやら、向ふは金持ち此方は部屋住み、金が自由に使へぬ上に、家の親父が喧ましく、一寸表へ行くにさへ、心に任せぬ親掛り、定めて愛想が盡きたら

うから、他人ヿになる相談なら、遠慮は要らない、果然云ひなよ。

小花　アレ憎らしい其の揄揶、お前さんこそ此中からお樂みでも出來たのか、私の樣な變屈者は、厭になつたに違ひない、夫で便りがないのかと思へば片時我慢が出來ず、やツとの思ひで川長の座敷先きから善どんと、拔けて來たのにあんまりな、私の思ふ百分一も思つてゐてはくれないとは、エ、焦つたい口惜しう御座んす。

ト膝へ取り附いて恨みをいふ、お福は迷惑のこなしにて、脇を向く、下手より善助出て此體を見て、

善助　此奴ア眞つ晝間から、お福さんも助からねえ。

お福　オヤ善さん、憚り樣だねえ。

ト兩人心附き、一寸放れて、

助藏　ソレ見た事か。

小花　夫ではきつと若旦那、心變りは御座りませんかえ。

助藏　何の心が變るものか。

善助　餘計な御心配といふものさね。

お福　モシ姉さん、まだお暇しがおありなら、彼方が明いて居りますから、奥へお出でなさいませんか。

助藏　夫では小花、彼方へ行かう。

小花　そんなら奥で、とつくりと、

お福　其間に私は、買物をして參りませう。

善助　そこが流石にお福さんだ。

ト助藏は紙入れを出して、

助藏　善の字、是で。

ト善助に紙入れを渡すを、道具替りの知らせ、能い樣に捌いて下さい。

ト双盤入り神樂の合方にて、

道具廻る

本舞臺平舞臺、上の方九尺の床の間、是に二幅對の掛け物、花活け、續いて正面二間四枚の襖の出入り口、跡は茶壁、下の方障子を建切り、上手の棲折廻し襖の出入り、總て藏前坂倉屋奥座敷の體、上手座布團の上に主人助七札差しの拵へ、下手に箱清の養子恒太郎、半纒股引羽織にて住ひ、以前の下女お磯茶を出してゐる模樣、合方にて道具止る。

恒太　何のお頼みで御座いますか、御丁寧なお扱ひで、却つて痛み入ります。

助七　コレヨ、恒さんは下戸か上戸か、お聞き申して支度

をしなよ。

お磯　ハイ〳〵、只今御飯は申し付けましたが、御酒は如何で御座います。

恒太　イエ御酒は一向にいけません、どうかお構ひ下さいますな。

助七　ホンの有合せで、一ト口上げたいから、緩りして下さい。早く誂へにやんなさい。

お磯　ハイ〳〵。（ト下手へはひる。）

恒太　さうして、どういふお頼みで御座いますか、伺ひませんぢやア、氣になりますが、一體何で御座います。

助七　別段改まつた事ぢやアないが、折入つてお頼みと云ふのは、本所の締切りに居る長次さんの事に付き、親方筋のお前の方から、催促をして貰ひたいのだ。

恒太　アノ長次の事で御座いますか、彼奴は人に施しをするなぞと申して居ますが、夫では此方へお借りでも御座いますのか。

助七　イヤ貸しではない、仕事を頼んで半年の餘にもなるのだが、未だにそれが出來ないので、其催促を頼みたいのさ。

恒太　夫ぢや長次にお店から、何かお誂へになりましたか。

助七　其所がチト極りの悪い譯だが、お前の舅の清兵衛さんは、昔からの家の出入り、全體ならば清兵衛さんに、渡つた上でアノ長次に、誂へさせれば宜かつたを、實は此春私が出向き、此一週忌に入用の佛壇を誂へた所、其ウ明後日が佛の忌日で、是非飾らねばならぬといふ、其佛壇が出來ぬので、誠に當惑してゐるのさ。

恒太　夫ぢやア明後日お入用の、御佛壇といふのを知りながら、彼奴が怠けて投げやりにして居るので御座いますか。

助七　其邊は解らぬが、誂へる時日限があつては、所詮受合はれぬと云つたのを、承知で氣任せに拵へてくれと頼んだのが此方の過り、ヨモヤ佛壇一ッで、半年餘りはかかるまいと、思つた故に日も限らず、併し入用の月に入り、モシ差支へて出來ない時は、不用にならうと思ふから、店の手代をやつた所、催促をする位ゐならナゼ誂へたと先方の立腹、上げも下げもならぬから、當惑の餘り此頼み、どうかお前の庭から、親方筋の威光を以て、催促がして貰ひ度く、夫で御足勞を掛けたのだよ。

恒太　へエ左樣なお頼みで御座いますか、さう云ふ譯ならもつと早く、ナゼ仰しやつては下さいません、困つた性

分でアノ男は仕事に念を入れる替りに、人が十日で仕上げる物も、二十日も三十日も懸かりませんぢやア、滅多に仕上げをいたしませんのが、彼奴の持前で御座いますから、まア明後日の御法事にやア、所詮お間には合ひますまい。

助七　夫では頼み樣が、遲かつたか。

恒太　彼奴の心に落入らぬ中は、拵へて見ては又毀し、容易に仕上げをいたしませんから、家から催促した所で、所詮お間には合ひますまい。

助七　今更となり、箱清さんに誂へたとて間に合はず、扨扨是は困つたものだナ。

恒太　是だからお頼みを、よく聞いて見ない中は、御馳走には、

助七　エ、、

恒太　どうか御馳走は、御無用にして下さいまし。

助七　イヤ、せめて誂へた馳走だけでも、冗にならぬ樣にして下さい。

ト下手の障子の口より、手代佐兵衞出て、

佐兵　旦那樣、お悅びなさいまし、御佛壇が出來て參りました。

助七　ナニ佛壇が出來て來たか。

恒太　さうして誰が持つて來ました。

佐兵　當人が持つて參りました。

助七　夫は重疊、早速奧へ來る樣に、貴樣手傳つて持つて來てくれ。

佐兵　ヘイ〳〵畏りました。

恒太　だん〳〵と御心配の次第を、彼奴に聞かせ度う御座いますから、私も參りませう。

助七　夫ではどうか御苦勞ながら。

恒太　ヤレ〳〵、是で安心した。

ト佐兵衞恒太郎下手の口へはひる。上手の奧の口より娘お嶋大町人の娘にて出て、

しま　委細はあれで承はり、安心をいたしました。

助七　お鳥悅んでくれ、是で先祖へ云譯も立ち、死んだ婆さんが、どんなに悅ぶだらう。

しま　此事につき私も、不動樣へ御願を掛け、礒とお店の三吉が、毎日地内へ參りまして、お百度を上げて居りましたが、早速二人にも安心させお禮參りに遣はしませう。

助七　オ、さうしてくれ、てうど今日は二十八日、お禮に護摩でも上げる樣、百疋包んでやつてくれ。

しま　ハイ、さう致しませう。
ト此時下手の口にて、
佐兵　サア、ずつと此方へ、持ち込んで下さい。
しま　ア、モウ奥へ來る樣子。
助七　お前も佛壇を見て行くがよい。
しま　只今二人に申しつけ、ゆるりと拜見いたします。
トお嶋上手へはひる。下手の障子を開け、恒太郎と長次半纏着流しにて、桑の佛壇を手舁きにして出て來る。佐兵衞も付いて出る。
助七　サア先祖の佛壇の事だから、ずつと此方へ直して下さい。
長次　眞平御免下さいまし。
ト佛壇を眞中よき所へ置く。
助七　コレ佐兵衞や、臺所へ行つて、誂へた物を急がせる樣、云ひ付けてくれ。
作兵　畏りました。（ト手代下手へはひる。）
長次　コレは旦那樣、只今兩國の若親方から、すつかり承はり、飛んだ御心配を掛けて、誠に相濟まねえ事を致しました。
助七　なんの〳〵明後日の法事に、間に合ひさへすりやア仔細はないが、若し間に合はない時は、親類中へも吹聽した私が、どうやら極りが惡く、一々云譯せねばならぬが、今日持つて來て呉れゝば夫で安心、其詫びには及びませんよ。
恒太　御佛壇が參りますれば、是で私も安心いたしましたから、早速お暇をいたしませう。
助七　どうかさう云はずと、一ト口飲んで行つて下さい。
恒太　仕事が立て込んで來て、忙しう御座いますから、早くお暇を頂く方が、却て勝手で御座います。
助七　夫ではどうでも歸らつしやるか。
恒太　ヘイ、夫が勝手で御座います。
助七　まア〳〵一寸待つて下さい。
ト上手へはひる。
長次　お前さんに迄御心配を掛けて、濟まねえ事で御座います、どうか歸んなすつたら、親方へもよく云つておくんなさい。
恒太　まだ父さんがかういふ譯と知らずに、案じて居るだらうから、早く歸つて安心させよう。
ト上手より助七目錄包みを持つて出て、
助七　恒さん、是はホンの些少だが、一ト口上げる肴の代

り、どうか納めて下さい。

恒太　折角の思召し、ぢやア頂いて參ります。

助七　どうか、さうして下さい。

恒太　却つてお氣の毒樣で御座います。

助七　箱濟さんへ、宜しく云つて下さい。

恒太　夫ぢやア長次、先きへ歸るよ。旦那御免なせえまし。

ト挨拶して下手へはひる。

助七　どの樣に出來ましたか、是からお前さんの丹精の所を、緩々拜見せねばならぬて。

長次　今も指さんがお店で御覽になりましたが、何處に念が入れてあるか、七月越しで出來上つた佛壇とは思はれません、誠に細工は不器用でございます。

助七　どうして／＼能く出來ました、第一扉の開き工合ひなぞは、いかにもいゝ心持ちに出來上りました。

ト佛壇の諸所を改める事ある。

長次　三宅島の桑板は、一ト冬枯らして見ませんぢやア、狂ひの出たがる陽氣違ひに、大きに心配しましたが、板が此方にある中に、枯らしてあつたと見えまして、狂ひの心配が御座いませんので、一ト安心で御座いました。

助七　此板は三年程前に、買込んで藏つて置きました。コレおしまや、爰へ來て御佛壇が能く出來たから、見ておくれ。

ト上手よりおしま出て、

しま　是は指物屋さん、御苦勞で御座ります。

長次　お孃さんで御座りますか、初めてお目に掛かります長次と申す我儘者、お心易く願ひます。

助七　コレおしま、此佛壇の扉の工合を、爰へ來て見るがいゝ。

しま　ホンに是では何年經つても、狂ふ氣遣ひは御座りませぬ。

長次　ヘイ、自慢ぢやア御座いませんが、何百年經ちましても、狂ひの出ないのが受合ひで御座います。

しま　夫に人から聞きますれば、指物屋さんにお似合ひなさらず、難儀なものに施しを出し、お救ひなさると云ふ噂、さういふお人に御佛壇を拵へてお貰ひ申せば、おつ母樣の御菩提にもなり、丁度宜しう御座ります。

助七　長次さんは、善根者と聞いて、頼もしく夫で誂へたのだ。

長次　人の難儀を救ふ程の、身分ぢやア御座いませんが、兩親には早く別れ、十歳の時から親方の厄介になり此年

迄、さんざ難儀をしましたので、自分の難儀に引き比べ、困る者が見て居られず、無けなしの物を施しましては、要らぬ世話を焼くのが癖、高が職人で餘計な事で馬鹿馬鹿しいと、笑ふ者もありませうが、褒める人は御座いません。

しま　イエ／＼長者の萬燈より、貧者の一燈とか申しまして、有徳な身にて施すより、困る中での善根をなさると云ふは御奇特な、お心懸けで御座ります。

長次　お年若のお嬢様から、思ひ掛けなくお褒めに預かりこんな嬉しい事は御座いません。

助七　此春私がお前の家へ、板を持たせて行つた時、臺所に居た年寄りは、母親だらうと思ひましたら、夫では此方は二親に、早く別れさつしやつたか。

長次　へイ親父は子供の時に死なれ、又十七の年に母親に死なれ、木から落ちた猿といふのは、私の事で御座います、家に居ました、ありやア雇ひ婆さんで御座います。

しま　夫ではまた、お獨身で御家内さんは御座いませんか。

長次　ちつと變人で御座いますから、女房に成り人が御座いません。

助七　イヤさうでない、此方の様な名人の女房になれば、女冥加にかなふと云ふ者、只斑なのは念が入り過ぎ、仕事の長いのが實に閉口。

長次　へ、何で御座います。

助七　エ、ナニ、長い仕事も早くなるのは、連れ添ふ女房の稼の取り様、又第一世帶の爲にも、女房がなくては何かと不都合、其中私が能いのを見立て、此方に世話をしようから、氣に入つたら持つがよい。

長次　有難う御座います、どうかお願ひ申します、似た者夫婦と申しますから、成らう事なら善根好きで、心の賤しくない者を、女房に持ち度う御座います。

しま　さう云ふお方のお内儀さんに、なりましたら幸福者、女子冥加で御座ります。

長次　イエ冥加所ぢやア御座いません、人參牛蒡の使ひ迄自分で出なけりやアなりませんから、貧乏人の女房程難儀なものは御座いませんのさ。

助七　イヤ夫につけて、頼んで置き度いは、娘も最早年頃故、何れどこか相應な所へ、嫁付けねばならぬから、此娘の嫁入りする迄に、重ね箪笥や長持ちを、是非拵らへて貰ひたい。

長次　へイお急ぎで御座いませんなら、是非私もお嬢さん

の、お嫁入り道具を受合つて、指して見度う御座います。
しま　テモまア嬉しい。
助七　エ、
しま　イエお父様、どうか此お仁に、お頼みなすつて下さいまし。
助七　オ、頼まうとも〳〵、是非長次さんに指させる心算だ。
ト下手よりお磯出て、
お磯　お誂へが参つて居りますが、お出し申しても宜しう御座いますか。
助七　来たら直ぐに出すがよい。
お磯　畏りました。（ト下手へはひる。）
長次　左様なら、是でお暇いたします。
助七　イヤどうか緩り噺して下さい。トキに仕事の手間だが、此春手附けを置かうとしたを、板を預かつてする仕事に、手附けは要らぬと云つたので、其儘になつて居るが、何程上げたら宜からうね。
長次　出来て見ねえ中は分りませんから、取り極めずに置きましたが、恰度七月越し掛かりまして、思つたよりは餘計な手間、お不廉ものかは知れませんが、百兩お貰ひ申し度う御座います。
助七　ナニ、百兩え。
ト此時下手より、お磯酒と肴の膳を持つて出て、長次の前へ据ゑ、
お磯　サお一ツお上りなさいまし。
長次　こんな御馳走になりましては、誠にどうも濟みません。
しま　生憎く不漁でお魚が少いとやら、お粗末では御座りますが、どうぞ喫つて下さいまし。
お磯　お猪口をお取り下さいまし、私がお酌をいたしませう。
長次　私は不器用で、お酒は一吸もいけません。
助七　イヤ長次さん、是は些と云ひ憎い噺だが、板は其方で買つたのなら、随分百兩の値打ちもあらうが、知つての通り私の方から板を出して手間計りが、百兩と云ふのは不廉様だが、是はなんぞ間違ひではないかね。
長次　イエ間違ひぢやア御座いません、板をお出しなすつたのは、元より承知で御座います、手間計りでも百兩は充分掛かつて居りますから百兩お拂ひなすつても、御損な事は御座いません。

助七　ソリヤ早此春誂へた時、値を極めなんだが手落ちの様だが、幾干掛かるか知れぬといふ、お前の詞も高が佛壇、其上板が出してあれば、十か二十の細工手間で、出來ると思つた佛壇が工手間計りで百兩とは、チト法外たと思はれるね。

長次　素人衆が御覽になつては、何處にどういふ手間が掛かつて、値打ちがあるか分りますまいが、初め旦那のお誂へが、孫子の代迄家に傳へる大事にする先祖の佛壇、火事の時に持ち出しても、毀れぬ樣に拵えろと隨分無理な御注文、鐵か石なら知らねえ事、高が三分か四分板の桑で仕上げた佛壇が、物に當つて毀れぬと云ふ請合ひ仕事は指物師も、工夫をせねばなりませんから、夜の目も寢ずに工夫を凝らし、漸との事で七月越し、出來上りました御佛壇、夫が不廉と云はれちやア、合つた例しぢやア御座いません。

しよ　磯や、お前は次ぎへ行つて、私の呼ぶ迄控へておいで。

お磯　どうぞ、お呼び下さいまし。

ト　お磯は氣遣ひながら下手へはひる。

しま　モシお父樣、だん／＼聞いて見ますれば夫丈け手間の掛かつて居るに、違ひないと思はれますから、指物屋さんの申す通り、お金をお拂ひ下さいまし、御先祖樣の御佛壇へ、百兩位ゐ掛けませんでは、家の寶のお道具になりますまいと存じます。

助七　百兩はまだな事、千兩掛かつても、其金だけの値打ちがあれば、少しも惜しい所はないが、どう指手間が掛かつても、此佛壇が手間ばかり、百兩とは人にも云はれぬ。

長次　よう御座います、さう云ふ譯なら是は私が持つて歸り、此春貴方がお持ちになつた、板に寸分違はぬ物を、お返し申すと致しませう、デハ是は持つて歸りませう。

ト　ムッとせしこなし。

しま　ア、モシどうぞ待つて下さいまし。

長次　お扱ひは有難う御座いますが、不廉と云はれて押し付け業に、金を取つたと云はれては、私も名前に拘はります。

しま　それとても素人故、値打ちの所が分りませず、ツイお父樣が不廉と申したので、お腹も立ちませうが、勘辨をして下さいまし。

助七　イヤ長次さん待たつしやい、娘も默つて居るがいゝ、

成程確かに値打ちのある物を、不廉と云はれて押し付けに、金を取つて歸つては、名人長次と噂をされる、名前にも拘はらうか、どう云ふ細工で百兩だけの、手間が掛かつて出來上がつたか、素人解りのする樣に、其丹精を噺して下さい。

長次　噺すと云つた所が、別に噺し樣も御座いませんが、先づ指物の元手といふは、細工に使ふ釘で御座いまして、人手に掛けず一本々々、自分で削つた釘でなけりやア、精神込めて打ち込んで、何年經つても緩まぬと云ふ、丈夫向きにやア出來ません、其釘計りも六十八本遣つて居れば、一本一兩とした所で、六十八兩の値打ちがあります、殘るは僅か三十二兩、夫は夜の目も寢ませんで、七月越しの手間だと積れば、廉い物だと思ひます。

助七　さう聞いて見れば不廉もないが、何年經つても緩まぬといふ、此佛壇も非常の時に、持ち出す者が過つて、取り落しでもした時に、打ち込む釘も離れ〳〵、其折り不廉と云つた所で、此方の所へ尻もやれず、

長次　火事の時に落した位ゐで、毀れる樣な佛壇なら、百兩の事は扨置いて、五兩の値打ちもありはしません。

助七　落しても毀れぬとか。

長次　精神込めて打ち込んだ、釘は申さば大磐石、内から毀しやア知らねえ事、外からどんなに打つ叩いても、釘が一本緩まぬが長次の指した細工の折紙、噓だと思ひなさるなら、恰度途中で買つて來た、此才槌で充分に何處でも叩いて御覧なせえ。

ト腰から才槌を出して、助七の前へ置く。

しま　イエ其樣な事をして、折角出來た御佛壇に、疵でも附いてはなりません、お疑ひはお晴らしなすつて下さいまし。

助七　其疑ひを晴らすには、試して見るのが一番いゝ、止めずと其方へ退いて居ろ。

しま　イエ〳〵、どうぞ御佛壇を、打つのはお止め下さいまし。

助七　邪魔せずに退けと云ふに。

長次　モシお孃さん、お止めなさいますな、内から叩きやア毀れますが、いくら旦那が才槌でトントン打つ叩いても大丈夫で御座います。

しま　御先祖のお位牌を入れる、御佛壇を叩くと云ふは勿體ない。

助七　其所を附け込んで、叩けといふ、向ふの了簡が憎い

今見る前で打ち毀し面の皮をヒン剝いてやるのだ。

長次　面の皮を剝くよりは、モシ毀れたら二ツとねえ、此首を上げやせう、其代り疵物になつた佛壇は、其儘ぢやア引き取りませんぜ。

助七　モシ毀れずば千兩出します。

ト助七才槌にて佛壇をさん〴〵に叩く。

長次　旦那、そんな事ぢやア毀れるものぢやアねえ、モットカを入れて、打つ叩かにやアいけませんぜ。

助七　其口を忘れるな。

ト力を籠めて叩く、下手よりお磯丁稚三吉出て此體を見て、

お磯　コリヤ旦那樣が、

三吉　お佛壇を。

しま　みんなも氣を揉んで居りますから、大概になさいまし。

ト助七は息の切れしこなしにて、才槌を見て胸を叩き、

助七　佛壇が毀れぬ中、才槌が緩んで來た。

長次　大槌かなんぞで、お打ちなせえ。

助七　モウ夫には及ばぬ、コレ磯、盃洗の水をくれ。

お磯　ハイ〳〵、お水で御座いますか。

ト有合ふ盃洗を出す、助七水を一と口飲み、

助七　アヽ、がつかりした、閉口々々。

長次　夫ぢやア、どうしても毀れませんか。

助七　長次さん、此通り〳〵。（ト手を突いて詫びる。）

佐兵　さうして何で旦那樣が、

三吉　箱屋の眞似をなさいました

長次　工手間の掛かつた佛壇を、毀して見ると云ひたすつて、今閉口をなすつた所だ。

お磯　アレ勿體ない、そんな事を。

しま　お父樣、お疑ひは晴れましたで御座いませう。

助七　オヽ晴れた〳〵、約束通り千兩で、買つても是は廉いものだ。

お磯　ナニ、此御佛壇が。

佐兵
三吉　千兩とは。

長次　其相場は其方の値踏み、此方は手間代百兩さへお貰ひ申せば、いゝので御座います。

しま　併しこんなに疵の附いたは惜しい物。

助七　イヤ才槌で叩いた疵が、却つて値打ちの出た佛壇。夫ではどうか倍增しの、二百兩で買つて下さい。

長次　百兩より餘計な金を、お拂ひなさるにやア及びませ

ん。

助七　ナニ百兩より要らないとか、イヤ然りとては見上げた了簡、おしま長次さんに充分御馳走するがよい。

しま　御酒は喫らぬと、迷惑さうな御様子故。

助七　下戸なら旨い物を澤山取り寄せ、御飯を上げてくれ。

佐兵　ヘエ、夫では御佛壇の手間が百兩で御座いますか。

助七　オヽ百兩ぢやア、廉い物だ。

お磯　親方さん、どうぞお誂へを、仰しやりつけて下さいまし。

しま　どういふ物がお口に會ふか、御遠慮なく、仰しやつて下さいまし。

長次　御心配は御無用になさいまし。

助七　ハテ、御飯を喰べて歸つて下さい。

長次　イエ本所だけに私は、家の御ぜんが、

ト才槌を腰へさすな、道具替りの知らせ、

勝手で御座います。

ト一禮して立上がる、助七おしまは引き止める、捨ぜりふの中に、　道具廻る

本舞臺平舞臺後ろ少し後へ下げて生漆塗りの板塀、眞中手摺付きの二階、此前面障子を建て切り、松の枝常磐木の梢を塀の中より見せ、上下共土藏の裏手を見せ、總て藏前坂倉屋裏手の體、爰に子供の乞食六人、竹の皮包みの赤飯を爭つてゐる。角兵衞の鳴物にて道具止る。

乞一　俺が貰つた赤飯だ、手めえ達にやるものか。

乞二　貰つたもねえものだ、よこせと云つたらよこさねえか。

乞三　誰が貰つたもあるものか。

乞四　葬ひ歸りの旦那から、

乞五　みんなの頭へ貰つた赤飯、

乞六　みんなで食ふのだ、分けろ〳〵。

ト一つの包みを取り合ふ、爰へ上手より長次出て來て皆々を和め、

長次　此宿無しの餓鬼共メ、何を騷いで居やアがる。

ト乞食は長次を見て、

乞一　ヤア小梅の親方だ。

六人　どうぞ頂かして下さいまし。（ト靜まる。）

長次　日外手前達に、あれ程異見をして置いたに、まだそ

んな事をしやアがるか、扨々困つた奴等だナア、足腰立たねえ不具ぢやアなし、生先きの長え手めえ達が、紙屑を拾つて歩いても、[illegible]に幾干かになると云ふに、腐つた物を拾つて喰ひ、其日を送ると云ふなア、心得違えの此上なしだ。サア一人前に四文つやるから、喧嘩をしねえで早く行け。

六人　お有難う御座います。

ト長次は財布より四文錢を出して、一つ宛やる事有て、

乞一　サア赤飯は仲よく喰はう、喧嘩は止めて早く來い。

乞二　小梅の親方、

六人　お有難う御座います。

ト六人ワヤ／＼云つて、向ふへはひる。

長次　あんな奴等に施しも、冗どは思へと是も道樂、アノ中一人でも、眞人間にしてやり度えものだ、さう云ふ俺も去年から、あんまり仕事を詰めてしたので、脊中の瘤が痛み出し、兎角ヅキ／＼してならねえ、不具にもならねえ中、湯治にでも行き樂をして、骨休めでもするとしようか。

ト風の音になり、長次は向ふへはひる。此以前より二階の障子を開けておしま見て居て、長次のはひるを見送る。助七後ろより出て、

助七　コレおしま、何を其所で見てゐるのだ。

しま　アノ指物屋が子供の乞食に、異見をして手の中を施してやりましたを、見て居つたので御座ります。

助七　お前も常から善根好き、嘸頼もしく見て居たらうナ。

しま　志しから腕前迄、

助七　氣に入つたか。

しま　ハイ。（ト氣を替へて）アノ御佛壇か。

ト向ふを見やるた、木の頭。

氣に入りました。

ト心中に長次を慕ふこなし、合方にて、　拍子幕

二幕目

伊豆山芝居前の場

湯川原温泉宿の場

同山中岸の澤の場

役名――指物師長次。弟分赤松。坂倉屋助藏。指物師恒太郎。美濃屋茂二作。幇間のん八。箱廻し

善助。木戸番畠六。同田之助。雲助猪の澤の六。同猪草助。同堂ヶ島の七。蠶人當兵衞。璋膦擱彌十。田舍芝居の見物大勢。藝者小花。田舍娘おくね。茶屋娘お松。田舍の女見物大勢。按摩めく市。賄ひ婆おたよ。

本舞臺平舞臺、眞中三間蓙張りの芝居小屋、幕を張りし木戸口、庵り看板上下とも山組み、樹木の書割りの遠見、下の方に葭簀張りの出茶屋、すつと上下立木の張物にて見切り、總て伊豆山温泉場の近所、田舍芝居木戸口の體、爰に木戸番畠六田之助華美な着附け、股引の拵へにて立ち掛かり、見物の男女大勢札を買つてゐる、茶屋女お松は女客を案內する體芝居の鳴物賑かに幕明く。

ト見物はワヤ／＼云つて木戸口へはひる。向ふより助藏小花の兩人先きに、たいこ持呑八箱廻し善助、何れも温泉に逗留中の拵へにて出て來り、

助藏　伊豆山に芝居があると云つて勸められ、爰迄引つ張られて來た。

呑八　役者は誰が出るのだか、大方江戸の役者で御座いませう。

助藏　田舍芝居で江戸の役者は、あんまり當てになるものか。

小花　田舍の芝居は、嘸面白う御座いませう。

善助　それは、トンチンカンの所が江戸の大芝居では、とても見られませんよ。

助藏　呑八、大分賣り込むな。

呑八　まア行つて御覽なさい。

ト三人舞臺へ來て、庵看板を見て、

助藏　座頭が拔高屋金四郎だとよ。

呑八　成程拔高屋とは珍らしい。

善助　助高屋金五郎の、大方弟子で御座いませう。

小花　面白い名で御座いますね。

ト お松小屋の中より出て、四人を見て、

お松　おめえ樣方ア、御見物かね。

呑助　一と幕見るんだから、能い場所を取つてくれ。

お松　恰度能い所が明いて居ますから、サア一緒に御座らつせえ。

助藏　牛に曳かれて善光寺參りか。

ト右の鳴物になり、お松先きに此人數小屋の內へはひ

る。向ふより茂二作湯泉客の拵へ、後より雲助の平助附いて出て、直ぐに舞臺へ來て床几へ掛け、

茂二　市、久し振りだの。

平助　こんな所で、こんな容でお前さんにお目に掛るとは面目ねえ。

茂二　熱海へ湯治に來て居るが、伊豆山の祭りを見に出て來た、トキニおぬしに逢つたが恰度幸ひ、頼みてえ事があるのだ。

平助　江戸に居た時分、厄介になつた旦那の事だ、どんな事でも、やつ附けませう。

茂二　そいつア有難え、少し云ひ出し憎いが、柳橋の小花といふ藝者を受け出し、圍つて置かうと主人に掛け合つたが、肝腎の小花が不承知、色男の坂倉屋助藏といふ奴と、熱海へ遊山湯治に來た事を聞いたので、業が煮えて堪らなく跡を追つ駈けて來たといふのは、アノ助藏に鼻をあかせてやり度いのだから、ナント一肩入れちやアくれめえか。

平助　熱海へ來て居りやア、其奴ア譯無しだ。

茂二　幸ひ小花と助藏が、此芝居に來て居るから、歸りを待ち受け、（ト囁く。）なんと、かうして呉れまいか。

平助　そんなら途中で駕へ乘せ。

茂二　コレ、靜かにしろ。

ト茂二作平助と猶も談合する模様、芝居の鳴物にて、道具廻る

ト此間に田舍芝居の舞臺の心にて中幕の時代狂言を挿み、道具廻る

本舞臺平舞臺、正面伊豆駿河の山々を見たる遠見の書割り、眞中に石の地藏堂、屋根附きの石の手水鉢諸所に松杉の立木、根ッ子の切株、上下共山組みの張物にて見切り、裾通り藪疊み、總て熱海街道山中の體、上手の前に、谷底の心にて切り穴、松杉の梢を見せる。山おろし、合方にて道具止る。

ト合方になり、向ふより助藏小花の手を曳き、吞八善助連れ立つて出て、花道に止り、

助藏　小花が草臥れたと云ふから、駕を見付けて頼んでやつて貰ひたい。

小花　私ばかり乘つては、義理が惡う御座んすから、若旦那の分も見付けて、頼んで來ておくんなさいよ。

呑八　此先きの千歳橋の袂へ行けば、二挺や三挺は御座いませうよ。
善助　夫ぢやア是から、一ッ走り行つて見て來ませうか。
助藏　御苦勞でも、さうしておくれ。
善助　直きに連れて參ります。
　ト善助上手へ走りはひる。
助藏　善公は歩きつけてゐるが、呑八おぬしは駕と一緒に歩けるかね。
呑八　私だつて男でげす、二里や三里は大丈夫さ。
小花　ダガ呑八さんの來た時のお手際では、どうも覺束ない樣ですねえ。
助藏　さうよ、小田原から日金へ掛つた時は餘ッ程苦しさうだつたぜ。
呑八　アレは前の日の、草臥が業をしましたのさ。
小花　そんな瘦我慢を云つて、途中でお辭儀をしても駕はないから、今の中降參して、頼むんなら頼んでおしまひよ。
助藏　成程是は小花の云ふ通りにした方が能いだらうぜ。
呑八　然し冗になりましてはねえ。
小花　エ、負け惜しみをお云ひでないよ。
助藏　善公の後を追つ駈けて頼んで來なせえ。
呑八　成程仰せを背くも却つて失禮、そんなら御意に從ひやせう。（ト同じく上手へはひる。）
小花　若旦那、モウ日暮れ方で御座んすなア。
助藏　秋の日脚は短いからなア。
小花　氣味が惡くはありませんか。
助藏　そんなに怖がる事はない、熱海迄は僅か一里、駕で行けば雜作もない、安心して居るがよいのさ。
小花　夫ぢやア大丈夫で御座いますかえ。
　ト下手より塔の澤の六、堂ヶ島の七、雲助の拵へ、山駕を舁き出て來る、助藏見て、
助藏　駕屋さん、其駕へ乘せて行つて呉れまいか。
六　商賣だから何處迄も、お供をしますが、二人の中へ一挺ぢやア、
七　お供は出來ないから、お斷りだ。
助藏　一挺で宜いから、此女を乘せてやつて下さい。私は後から歩いて行きます。
六　一挺で宜けりやア、恰度歸りだ。
助藏　さうして何程で行つてくれるね。
六　熱海へ歸るんだから、駄賃は何程でも宜う御座いま

す。

助蔵　さう云はないで、遠慮なく云つて下さい。

六　棒組、二朱も貰つて置かうか。

七　二朱なら御の字だ。

助蔵　二朱とは餘り廉いから、酒代と共に一分上げよう。

六　是は有難え。サア、お乘んなせえ。

小花　若旦那、御免なさいまし。（ト小花は山駕に乘る。）

助蔵　直ぐに後から追つ付くから、どうぞソロ／＼行つて下さい。

六　へイ、畏りました。

ト駕昇は駕を昇き上げ、足早に上手へはひる。

助蔵　靜かに行つて下さい、ア、コレ駕屋さん、オイ若い衆、人が呼ぶのも構はずに、ドン／＼行くとはどうしたものだ。

ト云ひながら、追つ駈けようとする、後ろより茂二作市助出て行く先きを支へ、

茂二　案じるにやア及ばねえ、小花を乘せてやつた駕は、

平助　みんな旦那と云ひ合せだ。

ト助蔵吃驚して、

助蔵　エ、、そんなら罠に掛かつたのか、さう聞くからは駕を追つかけ。（ト行かうとするを引き戻し、）

茂二　あたばたすると、叩き殺すぞ。

助蔵　是から後を。

ト振り拂つて行かうとするを、引き据ゑ、

茂二　市助、貴様は爰を構はずと、

平助　合點だ。

ト市助上手へはひる。

助蔵　アレをやつては。

ト開くを、茂二作は引き倒す。助蔵は其手を拂つて行かうとするを、やるまいと爭ふこと。能き時分、下手より恒太郎、旅形りにて出て、此樣子を見て、割つて入り、助蔵と顏見合せ、

恒太　藏前の若旦那ぢやア御座いませんか。

助蔵　オ、、恒さん。

茂二　エ、、邪魔をしやアがるナ。

ト打つて掛る、恒太郎助蔵を鬪ひ立廻りあつて、トヾ茂二作岩角に躓き、足を踏み辷らして前の切穴へ落ちる。

恒太　ヤ、躓いて谷へ落ちたか。

助蔵　エ、。

恒太　天の罰は恐ろしいものだ。

ト兩人谷底を覗く、山おろし合方にて、

道具廻る

本舞臺四間常足の二重、藁葺の屋根、丸木の本緣、後ろ一間の床の間、三間吹き拔きの肱掛け窓、山々を見たる遠見、下手は母家へ續く手摺附きの廊下、平舞臺庭の心にて、自然石の飛び石、竹の筧、上の方は同じく山續きの遠見、總て湯河原溫泉宿、藤屋放れ座敷の體、爰に長次浴衣掛けにて小按摩に肩を揉ませてゐる、下手の筧の側に弟分粂松手拭を洗つてゐる模樣、在所めきし合方にて道具止る。

粂松　兄イ今茶を入れるから、一膳茶漬ツちやアどうだね。

長次　蕎麥を打つて貰ふ約束をしたから、急がなくつても宜い。按摩さん、お前力ばかり入れるから草臥てしまつて、ちつとも利かねえ。

按摩　利かねえ物は番太郎の即効紙に、湯場の按摩は御定法さ。

長次　口の減らねえ小盲目だ。

按摩　米土藏がありやア、按摩なんぞに出るものか。

粂松　ア、云へば斯う云ふと、口の減らねえ奴だ。

按摩　口が減らねえ代りに、目が減つてしまつた。

長次　ヘン、訝う云やアがる。

按摩　訝う云ふ髮結さんはどうだね。

粂松　モウいゝ加減に默つて居ねえか。

按摩　所が默つて居られません、生憎目はないが口があります。

粂松　默つてゐろと云つたら、默らねえか。

按摩　ホイ是は一番、遣り損なつた。

粂松　兄イ、今年は九月になつても、未だ暑いから、湯治場に客が大層殘つてゐる樣だね。

長次　さうさ、爰の湯治場へ來る客は、みんな怪我人だの撲身なんぞ計りだから、外の湯治場と違つて、寒くなつても歸らねえといふ事だ。

粂松　道理でなか〳〵賑かだ、兄イ不思議なのは、此溫泉の效能だね、痛くつて堪らなかつた此疵が、湯へはひつた故か、昨日から忘れた樣に成つてしまつた、實に能く效く湯だね。

長次　夫だから山の中へ、態々湯治に來る人があるのよ。

粂松　怪我でもしなけりやア、來る所ぢやアねえが、爰へ

來て見ると、隨分怪我人も澤山あればあるものさね。

長次　伊豆相模は石切りが多いから、石切職人が始終怪我をするので。湯治に來て居る客は、職人が多いのよ、どんな怪我でも一週か二週は入りやア、治るといふ事だ。宜い鹽梅に出來たものさ、怪我を澤山する所には、まア斯う云ふ温泉が湧くと云ふのは、天道人を殺さずといふのだ。

傘松　世界の事は、みんないゝ鹽梅に出來て居るんだ。けれど、人間といふお世話燒きが、面倒臭くして仕舞ふんだ。

長次　なか〳〵手前は物知りだナ。

ト按摩上を揉み了り、

按摩　ヘイ、下を揉みませう。

長次　上だけにして置かう。

ト傘松財布より天保錢を出して、

傘松　療治代た、百あるよ。

ト按摩に取つて、

按摩　ヘイ、有難う御座います、（ト立ち上がる。）

長次　オイ、おめえ下へ行くのか。

按摩　ヘイ。

長次　行くんなら婆さんに、先刻頼んだ蕎麥を持つて來てくれと、云つてくんねえ。

按摩　畏りました。

ト按摩は挨拶して下手の廊下口へはひる。

傘松　兄イ、田舍者は氣が永えなア。

長次　田舍ぢやア、蕎麥粉から挽いて掛かるんだから、滅多にやア來ねえやナ。

ト合方になり、下手の廊下よりおたよ婆ア賄ひ女の拵へ、笊へ蕎麥を入れ、汁の德利を添へて持つて出て、

たよ　ハイ、蕎麥が出來ましたが、お連れがモウ一人御座つたが、何處へ行かれたね。

長次　ウン連れの男か、今方箱根へ廻つて江戸へ歸つたよ。

たよ　夫を私も知んねえもんだから、蕎麥を三人前持つて來たよ。

傘松　婆さん、夫は決して多かアねえ、案じなさんな、俺が二人前引き受けるよ。

長次　又手前あんまり食つて、腹を損さねえ樣にしろよ。

傘松　ナニ、大丈夫だ。

ト捨ぜりふにて、蕎麥を喰ひ初める。

長次　めつ法旨え蕎麥だナ。

粂松　旨えの何のッて、色は黒いが素的な味だぜ。
長次　待つて居た効があつたらう。
粂松　あつた共〳〵、こんな蕎麦は江戸ぢやア、迚も喰はれねえ、婆さん是りやアお前が打つたのかえ。
たよ　私打つたのぢやアねえけれども、蕎麦粉が新しいから、夫で旨えだよ。
粂松　蕎麦粉が新しいと云ふが、まだ蕎麦は漸々花が咲いたばかりぢやアねえか。
たよ　去年出來た蕎麦だけれど、家で粉を挽くから、夫で粉が新しいと云ふのさ。
粂松　俺は蕎麦が新しいと思つた。
長次　是が本統の生蕎麦だ、江戸ぢやア斯うは行かねえ。トキニ婆さん、おめえの家は、此近所か。
たよ　私は三十の年から、爰へ奉公に來て居るだが、六年前に此近所へ世帯を持つたが、忙がしい時があると、來て吳れといふから、手傳ひに來て居るだよ。
長次　婆さん、おめえは何歳になんなさる。
たよ　俺ア、カラキシ意氣地がねえだが、今年五十八になるだよ。
粂松　五十八になるッて、めつ法年に合しては若えナ。兄イ、婆さんは四十位ゐにしきや見えねえね。
たよ　そんな悦ばせを云つたつて冗だ、奢らねえよ。さうして、お前さん達は江戸かね。
長次　ム、、江戸だよ。
たよ　江戸から來ちやア、不自由な所だッてね。
粂松　ソリヤア天下のお膝許だ、こんな田舍とは一緒にならねえが、其代り湯の効くにやア驚いたよ。
たよ　おめえさん方の、病氣はなんだね。
粂松　俺のは是だ。（ト足の指を出して）此親指を鑿でぶつ斬つたんだが、ヅキ〳〵しやアがつて成らねえのが此湯へはひつて大層よくなつた。
たよ　石鑿は重てえから、危ねえよ。
粂松　石鑿は重てえと、婆さん俺ア石屋ぢやアねえ。
たよ　ハアさうだかね。
粂松　俺ア指物師だよ。
たよ　指物師だとえ、箱なんぞを拵えるのかね、箱を拵らえる位ゐで、足イ鑿をぶつ通すとは、えかく不器用だね。
長次　こいつア一本參つたナ。
粂松　先刻兄イの竹篦返しだ、是が江戸の敵を長崎と云ふ

奴だ。

　　トおたよ長次に向つて、

たよ　おめえさんの病氣はなんだね。

長次　俺ア何處も怪我をしたんぢやアねえ。

たよ　ナニ無え事があるものか、先刻湯へはひる處を見たが、おめえの脊中に、親指のはひる程の穴が開いて居るでねえか。

長次　アレを見たのか、實はそいつが暑さ寒さに起つて痛んでならねえから、此河原の湯へ、湯治に來たのだ。

たよ　さうして、其瘢は何時出來たね。

長次　自分の身體の瘢だけれど、さう確然知らねえが、大方赤ン坊の時分に怪我をして、いゝ鹽梅に治つたんだらうよ。

たよ　赤ン坊の時の怪我かえ、さうしてお前さんの母樣といふのは、江戸の者かね。

長次　俺のお母か、夫を聞いてどうするのだ。

たよ　少し思ひ出した事があるからさ。

長次　ウムさうか、俺の親は江戸の生れぢやアねえ、夫を聞いてどうするのだ。

たよ　さうかね、夫ぢやアもしや、お前さんの母樣はおさなさんとは云はなんだかね。

長次　ム、、おさなと云つたよ。

たよ　さうか、おさなさんと云つたに違えあんめえ。父樣の名は長左衞門と云ふだらうね。

長次　ム、、さうだ、其通りだ。

たよ　どうも魂消たナ、夫ぢやアお前樣は長左衞門どんの拾つた子の、仁助どんだね。

長次　何だ、俺が拾ひッ子だつて。

兼松　どういふ譯で婆さんが、そんな事を知つてるんだね。

たよ　知らなくッてさ、お前さん此土地の拾ひッ子だもの。

長次　そんなら俺は此土地へ、捨てられた者なのか。

たよ　さうさ、此先きの山をちつと登ると小瀧が落ちてるろ所があるだよ、其所の蘆ッ株の中に、捨てられて居たのだ、其證據は脊中の瘢、能く壯健で立派な男にならつしやつたの。

長次　さうしてお前は、俺の親父やお母を、知つて居なさるのか。

たよ　知つてる所ぢやアねえ、一つ村に居たも同然朝夕物を云ひ交した中で御座んすよ。

長次　そんなら俺が捨てられた、一部始終を知つてゐるな

ら、どうか噺して聞かして下せえ。
たよ　アイ、詳しい噺しを仕ますべえよ。
長次　婆さん、ちよいと待つてくんな。（ト長次財布から金を出して紙に包み）こりやア少しだが、煙草でも買つてくんな。
たよ　此間貰つたので澤山だよ。
兼松　婆さん、そんな遠慮するには及ばねえ、貰つて置きねえ。
たよ　貰つて置くべえか、氣の毒だなア。
長次　離れ座敷の客人は、みんな遊びに出た樣子、誰も外に聞かねえから。
兼松　ゆつくり噺して聞かせなせえ。
ト在鄕樣の合方になり、
たよ　今から二十七八年前の事だが、私が爰の家へ奉公に來た其翌年、何でも二月の初めだつたが、此湯治場へ乳呑子連れた夫婦の客人が來て、放れに泊つて三日計り居たのさ、私や乳呑子の世話アして、草臥たから次ぎの間に打倒れて寢て仕舞つただ、夜中に目エ覺すと、夫婦喧嘩が初つてゐるだ、女の方では、能い鹽梅に云ひくるめて、此子はお前さんの胤に違えねえと云ふと、男の方がやア月イ勘定すると、一月違ふから俺が子ぢやアねえ、面迄彼奴に似てゐると云ふ、女は腹ア立つて、一月位えは勘定の違ふ事もあるもんだ、お前の樣に實の無え事を云はれては、モウ彼の家に居ねえ了簡だらうから、此子はお前の勝手にしたが能いと、乳呑子を男の方へ投げたと見えて、其乳呑子が泣くだアね。
兼松　ぢやア其泣いた乳呑子が、長兄イだね。
長次　默つて聞いて居ろ、夫からどうした。
たよ　サア乳呑子が泣き出したので、其聲で後は何イ噺したか聞えなかつたが、男の方も腹ア立つて、又乳呑子を女の方へ投げ返すと、女が又ぶん投げたと見え、ドシンドシンと、音がして果にやア乳呑子の聲も出なくなりやしたよ。
兼松　酷い事をしやアがる、婆さんお前止めに出なかつたのか。
たよ　サア夫婦喧嘩だから、取支えに這入る事もならねえで、まア恐しい人達だと、魂消て居る中、グヅ〳〵口小言を云ひながら、夫婦共寢て終つた樣子だつたが、翌る日の騷動が大變さ。
長次　どういふ騷ぎだつた。

たよ　サア是からお前の脊中の穴の斷しになるだが、あんまり饒舌つたで、咽が乾つ附きさうになつたゞ、息次ぎして後を噺すべえよ。

粂松　湯があるから、一杯飮みな。

ト有合ふ茶碗へ湯を注いで出す。

たよ　是は憚りだね、是ぢやアまるで落語家さんの樣だね。

ト湯を一ト口飮む。

長次　夫からどうした。

たよ　其翌る日の申刻下りだつた、其客人が吉濱に知己の人があるから、夫を訪ねて又歸つて來るが、初めて來たのだから、勘定を拂つて行くべえと、二人は出て行つたが夫切り歸らねえと、其日に長右衛門どんが山へ箱根竹を伐りに行つて、日暮れに下りて來ると、山の下で乳吞子が火の付く樣に泣き聲がするだから、どうしたんべえ可愛さうにと、近寄つて見ると、竹の切りッ株が、乳吞子の肩の所へ突さゝつて居たんべえでねえか、是ぢやア大人でも泣かずにやア居られねえ、打捨つて置かうもんなら、死んで終ふから、長左衛門どんが其子を拾つて歸つて譯ェ噺したから、おさなさんも魂消て吉濱の醫者ア迎えにやるやら、ハア村中の大騒ぎになつたから、私が行つて見ると湯屋の客人の子だから、直ぐに歸つて何處の人だか手懸りはあんめえかと、客人が預けて行つた荷物を開けて見ると、宿びしほの曲物と油ッ紙に包んだ、しめしばかりさ、夫で其夫婦が捨子を仕に來たんだと分り、直ぐに吉濱から江の浦や小田原と、手分けをして尋ねたが、知んねえで仕舞つた。何でも山越しに箱根の方へ拔けたんべえと、後で評議をしたのさ、乳吞子は脊中の疵が大けえに、血が太く出たから、所詮助かるめえと、醫者が手放したを、長左衛門どん夫婦が、夜るも寢ねえで丹精して湯へ入れ疵口を湯でたでゝ、看覺をした所が利目は見えて、六週りも經たねえに、穴にはなつたが壽命がある人は別なもんで、助かるめえと思つたお前樣が、こんなに大くなんなすつたにやア魂消たよ。

粂松　夫ぢやア兄イは、此湯河原の溫泉のおかげで助かつたのか。

長次　さうよ、まアそんな物だ、助かつたのは溫泉の効能だが、育てのお母や親父の手當てが屆いたから助かつたのだ。現在血を分けた親で居ながら、脊中へ竹の突通る程、赤ン坊を藪の中へ抛り込んで捨てるたア、鬼の樣な奴だナ。

粂松　さうして其夫婦と云ふのは、どんな奴だつた。
たよ　男の方は、二十五六でもあつたか、商人でも職人でもないいゝ男で、女の方は十九か二十歳位ゐで、色の白い髮の毛の眞黒な、眼が細くつて口元の可愛らしい宜い女で、縞縮緬の小袖に見た事のねえ黑い革の羽織を着て居たから、聞いて見たら、八幡黑の革絆纏だと云つたよ。
粂松　粹な拵へだナ、何者だらう。
長次　何者だつて、そんな奴に用はねえ。
たよ　生みの親でも、そんな邪慳ぢやア敵同士も同じ事だ。
粂松　併し兄イを拾つた親達は、乳が無くつて困つたらうナ。
たよ　困つたけれど長左衞門どんとおさなさんが、お前さんを實の子の樣に可愛がつて、貰ひ乳をして育てたゞ、其時名主樣をして御座らしつた、伊藤樣へ願つて自分の子にしたゞよ、スルと名主樣が名を仁助としいと云はつしやつて何か坦名主樣が名付け親だから、村の者が可愛がるめえ事か、外へでも抱いて出ると、手から手へ渡して村境迄行つて仕舞ふ始末さ、私も能く抱き守りしたんだが、今ぢやア大くなつて、抱く事もなんねえ。
粂松　今抱かれて堪るものか、不思議な人に出つ會し、思ひ掛けねえ事を聞くものだ。
長次　俺ア此噺しを聞いて、何だか心持ちが變になつて來た。
粂松　兄イお前腹が立つだらうな。
長次　腹が立たねえでどうするものか、婆さんお前近所の人に、此噺しをしてくんなさるなよ。
たよ　そりやア案じねえがいゝ、何で噺しますべえ。
長次　兼も江戸へ歸つて、友達に云つてくれるな。
粂松　お前の恥は俺の恥だ、なんで人に云ふものか。
長次　婆さん、俺を育てゝくれた親父の苗字は、なんと云つたか知つてゐるかね。
たよ　知つて居る所ぢやアねえ、加藤長左衞門と云つて、此村ぢやア加藤と云ふ家が澤山で、其中でも長左衞門どんは家柄だよ、御先祖の墓は畑の中に殘つてゐるよ。
長次　夫ぢやア墓は殘つてゐるのか。
粂松　畑の中に墓があつて、寺にやアねえのか。
たよ　ナアニ田舍ぢやア、葬式は寺でするが、埋めるなア畑の中だよ。
長次　俺も明日江戸へ發足から、先祖の墓參りをして、親父やお母の戒名を過去帳へ附けて貰ひ度えが、お前知つ

てるなら、案内してくれめえか。
たよ　アイ案内しますべえ、其寺は泉村の福泉寺様だよ。
長次　其泉村と云ふのは、餘ッ程遠いか。
たよ　ナニ、十二三町べエだよ。
粂松　夫ぢやア明日發足なさるかえ。
長次　何だか急に歸り度くなつたから、明日出發としようよ。
粂松　ぢやアさうするか。（ト空を見て）なんだか曇つて來たぜ。
長次　そウ申刻過ぎだらうから、歸りにやア暮れるだらうナア。
たよ　そりやア暮れますべえとも。
粂松　そいつア困るなア、山の中で日が暮れて、狼にでも出られちやア騷動だぜ。
たよ　さうさ、出ろかも知んねえが、お辭儀をすりやア喰やアしねえよ。
粂松　兄イ、明日にしねえナ。
長次　兼、手前江戸ッ子ぢやアねえか、弱い音を出すない。
ト長次立ち上る、粂松迷惑のこなし、爰へ下手より按摩手さぐりにて出て、障子越しに、

按摩　お療治は如何で御座います。
ト大聲に云ふ、粂松尻もちをつくを、木の頭。
長次　エ、ぴつくりさせやアがる。
ト按摩よびながら、元の所へはひる。長次粂松身支度をするもやうにて、

拍子幕

ト幕引き付けると、山おろしの鳴物にてツナギ、道具出來次第に引返す。

本舞臺平舞臺、上の方奥深く小高き坂道、後ろ、谷川の流れを見たる岩山の書割。諸所に箱根竹の茂み、切り出せし岩角、上下とも、岩山の張物にて見切り、總て湯河原山中岸の澤の體。爰に狩人筒袖、足拵へ、鐵砲をかつぎ立懸り、樟腦掘り同じ樣なる拵へにて岩に腰を下ろし、休んで居る、此模樣山おろし、木魂なあしらひ幕明く。

狩人　毎日々々精が出るね。
樟腦　別に精も出し度くねえが、稼がにやア追つ付かねえからね。
狩人　夫は御同樣さ、當途もなく鐵砲をかついで山ン中を

駈け歩いても、扨兎一疋見當らねえ事が多いので、くさくさするよ。
樟腦　其代り大きな猪か鹿でも見附けりやア、一月は遊んで暮らせるんだ、旨い稼業さ。
狩人　そんな事が時たまなけりやア、山稼業は上がつたりさ、此方の樣に見掛けた山を掘りやアきつと立ち前になるのとは大違ひさ。
樟腦　夫が世に云ふ癩病の瘡恨みさ、矢つ張り樟腦の筋道を見當てる迄が、厄介なものさ。
狩人　何稼業も其道へはひつて見にやア分らないものさ。
狩人　さうとも／＼、商賣は道に由つて賢しだ、馴れた稼業で稼ぐ事だ。
樟腦　其心算で能い獲物でもしなさるがいゝ。
狩人　お前さんも、しつかり掘り當てなせえ。ドレ、モウ一と山踏み込んで見よう。
　ト兩人捨ぜりふにて、上下へ別れてはひる。合方になり、上手の坂の上よりおたよ先きに立ち、長次兼松下りて來て、
長次　エヽ、兼や、墓參りをした位え、能い心持ちはねえナ。
兼松　さうさ、なんだか斯う淸々するものさ。
たよ　案内をした私等でせえ、倶に功德をしたゞから、嘸後生がよかんべえよ。
長次　婆さんのお庇護で、思ひも寄らねえ供養が出來たよ。
たよ　此所がお前の捨てられた、岸の澤てえだよ、此涯ツぷちがよ。
　ト坂を下りて來て、竹の茂みの所へ來る。
長次　ム、箱根竹が針の樣に茂つて居る、此中へ捨てたのか。
　ト立寄つて見込む。
たよ　夫だから脊中へ、竹の切先きが突通つたのさ。
長次　育てゝくれた兩親の、先祖の墓へ參りに來た歸りに、俺の捨てられた、此岸の澤へ來たと云ふのも、草葉の蔭の佛樣の導きかも知れねえなア。
　トちつと思入れ、此時上手の坂の上より、以前の小花駈け下りて來て、長次に縋り、
小花　どうぞ助けて下さいまし。
　ト一同驚き飛び退きしが、よく／＼見て、
長次　見りやア江戸の人らしいが、一體是はどうしたんだ。
兼松　譯を噺して聞かせなせえ。
小花　惡い駕に乘せられて、連れて行かれます所をやうや

う逃げて參つた者、どうぞお助け下さいまし。

長次　街道筋に有りうちの、惡い駕屋に引つ掛り、難儀に逢つたと云ひなさるのか。

小花　其人足が追つかけて、今にも爰へ參りませう。

兼松　ナニ、人足共が來やアがるとか。

長次　姉さん案じなさんな、俺達が居りやア大丈夫だ。

ト小花を圍ふ。山おろしになり、坂の上より雲助塔の澤の六、豐ヶ島の七、足早に下りて來て、兼松に向ひ、

六　モシ、今爰へ十九か二十歳になる女が來やアしやせんでしたかね。

兼松　其女か其女は……（トいふを冠せて）

長次　さうだ、今方向ふの方へ駈けて行つた。

七　エ、向ふの方へ、此先きは行き止りだ。

六　かうなりやア袋の鼠だ。大きに有難う御座います。

ト云ひ捨て、向ふへはひる。兼松小花を見て、

兼松　お前さん、何處かで見たが、（ト一寸考へて）オ、さうだ、柳橋で能く見る顏だ。

長次　柳橋だと、姉さん、お前は藝者衆かえ。

小花　ハイ、柳橋で小花と申します。

長次　小花さん……。ム、、夫ぢやア藏前の坂倉屋の若旦那のお馴染だね。

小花　ハイ、夫では坂倉屋さんへ、お出入りなさるお方樣で御座りますかえ。

長次　ぢやア若旦那と一緒かえ。

小花　今日熱海から伊豆山の、お祭りへ來た歸り掛け、難儀に會つたので御座ります。

長次　さう云ふ事ならコウ兼、若旦那の所迄送つて上げてくれまいか。

兼松　アイ〱。さうして旦那の居所わえ。

小花　吉濱の魚龜とか申しました。

長次　そんなら其所まで賴んだぞ。

兼松　サア今の奴の來ねえ中、一緒に行きやせう。

たよ　私も其所まで送りませう。

小花　お禮はいづれ、江戸へ參つて。

長次　少しも早く、お出でなせえ。

ト合方になり、おたよ先きに、小花、兼松坂の上へはひる。長次見送つて、

此方の素性を明かしてくれた、アノ婆さんが道案内、其深切に引き換へて、現在我が子を藪の中へ、捨てると云ふなア、鬼にも勝る人で無し。（ト旗の立つ思入あつて

氣を替へ〳〵ア、愚痴な事を云ふ中に、モウ夕暮。ドン暮れねえ中に歸らうか。

ト坂へ上りかける、此以前より下手の岩の蔭に、龜甲屋幸兵衛、着流し草履ばきにて窺ひ居て、此時前へ出て、

幸兵　モシ〳〵、一寸待つて下さい。

ト長次後へ戻り、

長次　私をお呼びなすつたのかえ。

幸兵　お目に掛かるは初めてだから、定めし變にお思ひなさらうが、私は淺草鳥越で龜甲屋幸兵衛と云ふ、公儀の御用を勤める町人、當時廣い大江戸で、名人長次と云はれるだけ、人と違つた肝ッ玉、惚れていよ〳〵お近附きになる氣で、お呼び申しました。

長次　龜甲屋の旦那で御座いましたか、お顏を存じませぬので、失禮をいたしました、眞平御免下さいまし。シテ私の名前をどうして、御存じで御座います。

幸兵　長次さんを知つてゐるのは、柳島の別莊へ月に一二度行く時に、お前さんのお宅の前を、通りますので知つて居ますのさ。

長次　夫ぢやア柳島へお出での時、家の前をお通りになるので御座いますか。

幸兵　近附きになつたら仕事を頼まうと、思つた念が固いてか、所も深き岸の澤、

長次　其谷川の魚と水、

幸兵　親しくなつて奥底なく、

長次　御ひゐき受けねばならねえ職人、

幸兵　長さん、どうか心易くして下さい。

長次　夫は此方で願ふことで御座います。

幸兵　お心易くなつたからは、私と一緒に熱海まで行つてはどうだね。

長次　有難う御座いますが、まだ二三日湯河原に、逗留する心算で御座いましたが、急に故郷が戀しくなり、明日江戸へ歸りますから、惜しい事だが御一緒に、行く事は出來ません。

幸兵　ム、さうか爲方がねえ、夫ぢやア今日はお別れにしませう。

長次　何れ江戸へ歸りましたら。

幸兵　どうか尋ねて來て下さい。

長次　又改めて。（ト一禮するを、木の頭）お尋ね申しませう。

ト双方挨拶して、長次は坂を上つて行く、幸兵衛は心ありげに長次を見送る、合方山おろしの鳴物にて、

拍子幕

三　幕　目

小梅村長次内の場
同押上　土手の場

役名――指物師長次。同弟分兼松。鼈甲屋幸兵衛。同手代萬助。坂倉屋助藏。同丁稚三吉。同下女お磯。恒太郎女房お政。坂倉屋の娘お島。助藏妾お花。幸兵衛女房お柳。

本舞臺常足の四間通しの二重、正面板羽目、下の方は臺所の心にて一間の腰障子、正面一間障子の出はひり、上手は庭の心にて、植木臺に土鉢の植木、竹の植込み、隣家の板塀、下手いつもの所二枚引きて格子口、此外田圃越しに農家を見たる片遠見、總て小梅締切り近邊長次住居の體、二重に道具箱、出來掛けの茶棚を置き、上手に恒太郎女房お政、條所行きの拵へ下手に兼松、仕事着の拵へにて茶を出してゐる體にて幕明く。

兼松　ツイお見舞に行きませんで、御無沙汰をいたしましたが、大親方はどんなで御座います。

お政　大して悪いと云ふでもなく、床の上に起きて居て、自分の氣に向いた仕事だと、ポツ〳〵やつて居る位ゐだから、案じる程の事はないよ。

兼松　さうして今日は何所へ來なすつた。

お政　向島の花屋敷へ、勘定を取りに行つた歸りさ。

兼松　夫は遠方を大體ぢやア御座いませんね、兄イも直き歸つて來ますから、まア一服やつてお出でなせえ。

お政　長次が暫く見えないが、どうかしたか見て來いと、お父さんが氣を揉んでゐるから、一寸寄つて見たのさ。

兼松　兄イも仕事に追はれて居るんでね、無沙汰をしちやア濟まねえと、いつも云ひ暮らして居ますのさ。

ト兩人捨臺詞にて煙草を喫んでゐる。向ふより坂倉屋助藏、羽織着流し、藝者小花素人になりし拵へ、丁稚三吉橋本の笹折りを提げて出て來て門口へ來て、

助藏　長次さん、家かね。（ト三人門をはひる。）

兼松　オ、是は藏前の若旦那、能くお出でなさいました。

助藏　柳島迄來ましたから、一寸寄りました。
兼松　夫は能くお寄り下さいました。
小花　アノ節は種々と、御厄介になりました。
兼松　小花さんで御座いますね、アノ時とは樣子が變つてすつかりお見外れ申しました。先日は御丁寧に有難う御座いました。
お政　夫では貴方が坂倉屋さんの、若旦那樣で御座いますか、每度御ひいきを有難う御座います。
兼松　若旦那、此人は兩國の若親方の、小指で御座います。
助藏　恒さんのお內儀かえ。
お政　取り散らして御座いますが、まア／＼お上り下さいまし。
助藏　御免なさい。お花お前も上んナ。
小花　ハイ。（ト兩人二重へ通る。）
助藏　私も恒さんに、箱根で危ふい難を救はれ、まだお禮も云ひませんが、歸んなすつたらお前さんから、宜しう云つて下さいまし。シテ長さんは何處へ行きなさつたのだ。
兼松　お得意樣の誂へ物で、寸法を取りに參りましたが、程なく歸るで御座いませう。
助藏　夫ぢやア先刻、橋本の前を通つたのは、長次さんであつたかしら。
小花　夫と知つたら、御飯をお上げ申したもの。
兼松　若旦那には今日は、何處へお出でなさいましたね。
助藏　小花が常から信心する、妙見樣へお禮參りに午前から出て來ました。
兼松　お禮參りと仰しやるは、お目出度い筋で御座いますね。
小花　私も願ひが叶ひまして、若旦那に引き取られ、訪諏町川岸へ家を持ち、氣樂な身體になりました、アノ折り御厄介になりました、お禮參りを兼ねまして、此方のお家へ上りました。
お政　夫はまアお目出度い、結構な事で御座ります。
助藏　又改めて恒さんや、長次さんをお招き申し、披露をしますが、親父の許しで行く／＼は、家へ入れる事となつたら、是で二人の願ひ通り、どうやら望みが叶ひさうぢや。
兼松　夫こそ重ね／＼お目出度う御座います。
助藏　是から兩國へ廻るから、お內儀、御一緒に參りませう。

お政　両國迄は餘程の道、態々お廻りでは、恐れ入ります。
小花　柳橋の兵庫屋へ、小舟が誂へてありますから、隅田川を下るばかり、御一緒にお出でなさいナ。
兼松　長兄イが早く歸つて來れば能いなア。
助藏　何れ其中、改めてお招き申すと、長次さんが歸つたら、能くさう云つておくんなさい。（ト立上る。）
兼松　まア能いぢやア御座いませんか。
小花　又此頃にお目に懸ると云つて下さい。
お政　私もお詞に甘えまして、其所迄お供をいたしませう。
兼松　イヤ舟のお供は羨しいナア。
ト捨ぜりふにて、皆々挨拶して助藏小花お政、三吉は折を忘れて供をして向ふへはひる。兼松は折を取上げて、
兼松　ヤこりやア三吉どんが提げて居た、橋本の土産の折だ、腹が北山でゐる所へ、旨さうな此匂ひが、プン〳〵しやアがらア、此奴ア喰はずにやア居られねえ。
ト折を持つて思入、下手より長次半纏の上へ羽織を引つ掛け、草履にて出て門口より、
長次　今歸つた。（ト二重へ上る。）
兼松　兄イお歸んなせえ、タッタ一足違えだつた。
長次　誰か來たのか。
兼松　両國のお政さんが、花屋敷へ勘定を取りに來た歸りだと、寄つた所へ坂倉屋の若旦那が、小花さんを連れて寄んなすつたので、隨分家は混付きやした。
長次　そいつア一人で困つたらう、夫ぢやア若旦那は、小花に浮れてゐなさるか。
兼松　親御の許しで小花を引いて、行く〳〵家へ入れる噺しになつたと、二人共に大悦びさ。
長次　そいつア能い鹽梅だ、二人共に好いた同士、若旦那も小花さんも、望みが叶つたと云ふものだ、さうしてお政さんは、何か用でもあつて來たのか。
兼松　別段用ぢやアねえ、花屋敷の歸りだと云つた。
長次　親方は年病みだと云つて、寢てゐるから惡くでもなつちやア大變だ、夫ばつかりが氣がゝりだ。
兼松　親方思ひの兄イだから、さう思ふのは尤もだが、昔者は念入りだから、心配する程の事はねえ、大丈夫だ安心しねえ。
長次　全く手前の云ふ通り、年は取つても仕事に掛けちやア五分でも、隙かねえ親方だから、指物同樣身體中、釘締めが確かだから、容易の事ぢやア緩まねえ。（ト兼松

折へこなしあつて、

兼松　トキニ兄イ、飯はどうだ。

長次　飯なら今馳走になつて來た。

兼松　今坂倉屋の若旦那が、橋本の折を置いて行つたから
よ。

長次　其所にある折か、飯前なら手前一人でやるがいゝ。

兼松　所が變な譯で、置いて行つたか忘れたのか、變ちき
りんで、判斷がつかねえ。

長次　そんな譯の分らねえものなら、判斷も何も要るもの
か。

兼松　所が紙のしが附いてゐるから、喰えと云つて置いて
行つたに違えねえ。

長次　子僧が取りに來るかも知れねえ、晩迄そつくりして
置くがいゝ。

兼松　取りに來たら俺が出て、何とか甘く胡麻化すから、
兄イ大目に見てくんねえ。

長次　エ、喰ひ意地の張つたやつだ、俺ア知らねえ、勝手
にしろ。

兼松　勝手にしろとは有難え、ドレ一ツ茶ずり、かツ込ん
で來ようか。

長次

ト兼松折を持つて奥へはひる。

今の中、着替へてしまはう。

ト長次も續いて奥へはひる。是を下座の兩吟になり、
向ふより坂倉屋の娘おしま、下女お磯、日傘をさし連
立つて出て來り、

お磯　モシお孃樣、向ふが長次さんの、お宅ださうで御座
ります。

しま　私や何だか恥かしい、其方よい樣に頼みます。

お磯　まアお氣の弱い、兎も角も私が一寸樣子を見ませう
から、是でお待ちなさいまし。

ト兩吟二の句になり、おしまは下の方に忍び、お磯一
人門口へ來て、

御免下さいまし。

ト奥より兼松出て、無雜作に格子の中より、

兼松　アイ〳〵、何處から來なすつたね。

お磯　アノ藏前の坂倉屋から參りました。

兼松　エ、坂倉屋だ、そいつア事だ。

お磯　チト伺ひたい事が御座いまして、

兼松　そいつア大きに御苦勞樣で、折角お出で下さいまし
たがね此近邊は誠に悪いどら猫が、居ましてね、其猫の

畜生か。

お磯 イエ〳〵夫は何で御座いますか、恰度よい折で御座いますので、

トいふを冠せて、

粂松 ヘエ、其折の事で御座います、先刻爰へお置きなすつたのを、盗賊猫にくはへて行かれ、折も蓋も粉々にして、どうもお氣の毒樣で、何とか旨く、取繕つて仰しやつて置いて下さいまし。

お磯 イエ私は御近所迄參りまして、よい折で御座りますから、アノ一寸。

粂松 サ、だから其折は粉々に猫が毀して終ひましてね、誠にどうも濟まねえ譯で。

お磯 イエ、折とやらを取り來たのでは御座いません。

粂松 エ、折ぢやアねえ。

トホッとせしこなしにて、門口を開け、

成程人が違つた、何の御用で御座います。

お磯 親方さんにお目に掛かり、お願ひがあつて上りました。

粂松 さうで御座いますか、矢つ張りお前さんは、坂倉屋さんの。

お磯 ハイ藏前の坂倉屋から、磯が參つたとお取次ぎ下さいまし。

粂松 私やア若旦那の使ひかと、胸がドッキリいたしやした。(ト奥へ向ひ、)オイ、兄イ〳〵。(ト奥より長次仕事着に着替へて出て、)

長次 何だ、人でも來たのか。

粂松 藏前の坂倉屋さんから、使ひが來た。

長次 ナニ坂倉屋さんから、ドレ。(トお磯を見て、)オオお磯どんか、何のお使ひだね。

ト此時おしま、下の方よりそつと出るを、長次は見て、

其所においでなさるのは、お孃さんぢやア御座いませんか。

しま 長次さん、其中はお目に掛かりませぬ。

長次 仕事にかまけて御無沙汰をしました、何ぞ御用で御座いますかえ。

しま はひりましても、宜しう御座いますか。

長次 飽ッ厭で、見られた態ぢやア御座いません、お構ひなくばおはひんなさいまし。

しま 夫では磯や、お前も一緒に、

ト合方になり、兩人二重へ上る。

お磯　お見受け申せばお二人限り、無御不自由で御座りませう。

長次　野郎ばかりで、カラモウ埒くちは御座いません。コウ兼、御免蒙つて手前晝飯を喰つてしまえ。

兼松　アイ、お嬢さん御免下さい。

ト兼松奥へはひる。

長次　お嬢さんと二人連れで、態々お出でなすつたのは、込み入つた御用でお出でなさいましたかね。

しま　ハイ今日は父の使ひで參りました、先達お拵え下さいました御佛壇を、林大學頭様に御覧に入れました所、世に珍しき細工ぢやと、お褒めになつて折紙をお附けなされて下さいましたを、長次さんにお目に掛けろと、申し附かつて此通り、持つて參つて御座ります。

ト懐中より袱紗包みの折紙を出して見せる。

長次　夫ぢやア先日の佛壇を、大學頭様が御覧になり、此折紙を附けて下さいましたのか。

しま　父も殊の外悦びまして、家の寶として、孫子の代迄傳へると、左様申して居りました。

お磯　其後は私が、旦那様の御口上を、お噺し申し上げませう。旦那様のお詞には、長次親方も御獨身の御様子だから、押附け業の様なれど、此お嬢さんも其中に、お嫁きになるお身の上、外に極つたお約束がないならば、どうか娘を御家内にお貰ひなされて下さるまいかと、不躾ながら此お願ひ。

しま　アレ、其様なあつかましい。

お磯　申し上げねば旦那様の、お胸の中が分りませぬ、決して娘が浮いた心で左様な事を申すのでは御座りませぬ長次様の善根、お心立をお見込み遊ばし、是非ア、云ふお方のお側へ、參りたいとの御執心、親御も夫を御得心で、申し出した此の縁邊、よいお返事をお聞かせなされて下さりませ。

ト長次是を聞き、迷惑なるこなしにて、

長次　途方もねえ御相談、藏前掛けて茅町居廻り五本の指に折られる御大家、其お嬢さんを私風情が、どうして女房に持たれますものか。

しま　矢つ張り私のお察し通り、お聞き入れはないといなう。

お磯　旦那様の御了簡では、若旦那には小花さんを引かして女夫になされた上、お宅をお譲り遊ばせば、殘るは妹御のお嬢様の、極りを附ければ親御のお役も夫で濟まう

と申すもの、お心掛けをお見掛け申し、主人の名代兼ねましてお嬢様の介添役、押しつけながらお願ひに、伺ひまして御座ります。

長次　旦那の思召しは有難え、能くお禮を云つてお呉んなせえ。だがどうして大家のお嬢さんを、三尺店へ貰えませう。

お磯　よしんば今は手狭なお宅へ、お住居なさる御身分でも、末々見込みのあるお方と、主人の眼鏡に叶つた貴方御當人のお心をお汲み分け下さいまして、枉げて御承知下さりませ。

長次　どうして／＼其日稼ぎの端下職人、釣合はねえ此の縁談、第一大家で育ちなすつた、お嬢さんが貧乏世帯を御覧なすつたら呆れ返り、三日と辛抱出來ますものか。

しま　夫は元より覺悟をいたし、御家風に從ひまして、御詞には反きませぬ。

お磯　お聞きの通り職人衆と、一緒になつて働けと親御様のお詞もあり、御當人も其お心故、其御心配は御無用に遊ばしませ。

長次　そりやアさうで御座いませうが、扨やつて見るとさうは行かねえ、冗な御苦勞なさるより御身分相應よい御縁を、お尋ねなせえと云つて下さい。

しま　スリヤ、お願ひはどうあつても。

長次　サア此お返事は出來ません。

ト確然と云ふ、おしまは差し俯向く

お磯　思ひに思ふたお嬢様の、お供をいたして參つたお使斯うお斷りを受けましては、取り付く島も御座りませぬ。モシお嬢様、コリヤまア何といたしませう。

しま　一旦思ひ詰めたお願ひ、お許しなければ是非ない事、外に嫁く心もなければ、一生勤めの御奉公に、上つて此身の操を立て、此先き過すの外はない、家へ戻つてお父様に、お願ひ申すとしようわいなう。

お磯　ホンニ豫々旦那様が、筒井様のお奥へ出すと仰しやつた事も御座りましたが、コリヤよい御思案で御座ります。

長次　デハお諦め下さいますか、夫で私も安心しました、此長次も坂倉屋さんとの縁組みはしねえ迄も、お交際の出來る様にでもなる様に、一生懸命働きませう。

しま　夫では貴方の御出世を、お待ち申して居りましたら望みをお叶へ下さいまするか。

長次　なるかならぬか分りませんが、さうさへ成りやア私

も決して彼れ是れ申しません。
お磯　其お詞が何よりお力、モシお孃樣、時節をお待ち遊ばしませ。
しま　其お詞を樂しみに、御出世なさる時節迄、御奉公をして待ちませう。
長次　さう何處迄も御執心とは、私もスッカリ我を折つた。よう御座います。今は見る影もねえ職人だが、正路を守つて稼ぎ上げ、屹度御緣を結ぶ樣、一精出すといたしませう。男の詞に雙は御座いません。
しま　其お詞に僞りの、ないのは常の御氣性で、よう分つて居りまする、お嬉しう御座ります。
お磯　是で私のお使ひも、重荷が下りたと申すもの、此お噺しを旦那樣へ、
しま　申し上げたら嘸お悦び。貴方有難う御座りまする。
お磯　よいお土產が出來ましたれば、女の足では小梅から藏前迄は小一時、灯りが點かねば歸られますまい、勝手ながらお孃樣、モウお暇をいたしませう。
長次　違えねえ、日の短い頂上で申刻を打つと暗くなるから、女ばかりぢやア途中が物騷。コウ兼松、まだ飯かオイ兼公々々。

ト奥より兼松出て、
兼松　腹八杯に詰め込んだら、眼の皮が緩んで眠くなつた。
長次　腹ッこなしにお孃さんと、お磯どんをお店迄お送り申して來てくんねえ。
兼松　アイ／＼そんな事は譯なしだ。
しま　お忙しいのにお間を缺かせ、お氣の毒で御座ります。
兼松　ナニ今日は道具だけ看板にして、半日休む心算で御座います。
お磯　さういふ事なら、御苦勞ながら、
長次　御遠慮なくお連れなさいまし。
しま　モシ只今のお約束は、必ず共に。（ト心を籠めていふ。）
長次　エ、大丈夫で御座います。
兼松　兄イ、約束ッて何だ。
お磯　アノ夫は。（ト口籠るを冠せて、）
長次　夫ぢやア兼、頼んだぜ。
兼松　アイ／＼。サお孃さん、參りませう。
お磯　大きに、お邪魔をいたしました。
ト合方になり、おしま、お磯、兼松供をして三人向ふへはひる。是より竹本の淨瑠璃になる。

竹〽冬の日も早暮れかゝる黄昏に、灯りの支度燈明の澤きを好む火打ち箱、狭き住居ぞ侘びしけれ、長次は一人つぶやきて、

ト長次神棚へ燈明を上げ、行燈へ火を移す。

長次　見る影もねえこんな家へ、大家の娘が嫁に來てえと云ふのも日外一心込め拵へ上げた佛壇が、先方の氣に入り折紙附きの質物に、なると云ふのも業の徳、思へば是も兩國の親方のお庇護と云ふもの、又二つには親の恩、夫に付けても合點の行かねえは、過日湯河原の岸の澤で出會つた縁で贔屓にして、手間代も餘計に呉れる龜甲屋さん、今日も手厚い馳走をして、俺の素性を聞いた時、傍に居たお内儀さんの、顔の色の變つたのは、何か譯でもある樣子、ヨモヤ夫ぢやアあるまいか、二十八年前方に俺を相模の湯治場で、捨てた親なら名乘り合ひ、恨みは恨み恩は恩、打ち明け噺しお仕てえものだ。

〽蘇ふ心に兎や角と、不審重ぬる折からに、爲せし無道も今更に夫と云はれず餘所ながら、詫びる心の幸兵衞夫婦、日暮れを待つて長次の門口。

ト長次一人思案する。風の音をあしらひ、向ふより龜甲屋幸兵衞、羽織着流し一本差し、女房お柳同じく羽織着流し、お高祖頭巾を冠り出て、花道にて、兩人向ふだといふ思入にて、舞臺へ來て門口から、

お柳　長次さん、お宅かえ。

〽云ふ聲聞きつけ、

ト長次坐つたまゝにて、

長次　どなたで御座います。

幸兵　長さん、私だよ。

ト いひながら格子を開ける、長次見て出迎へ、

長次　オヽ、是は龜甲屋さんの旦那と御新造、よくお出でなさいました、御用ならお人を下さいますりやア、直ぐに出ますのに。

幸兵　ナアニネ、今用達しの歸りなのさ。

長次　さうで御座いますか、散らかつて居りますが、まアお上り下さいまし。

幸兵　ムヽ、少し休んで行かう。御免なさいよ。

〽會釋こぼして座につけば、

ト兩人上の方へ通る、長次下手に住ひ、烟草盆なぞ出して、

長次　お二人連れで、淺草へお參りで御座いますか。

幸兵　イヤ一寸締め切り迄來たが、恰度お前の家の前を通

るから寄つたのだよ、どうか構つてくんなさんナ。
お柳　見ればお前一人の樣だが、いつものお弟子は何處へ行きなすつたのかえ。
長次　今淺草迄使ひにやり、タツタ一人で御座いますからお構ひ申す事も出來ませんが、御緩りとなさいまし。
幸兵　子のない家だ、心配しねえがいゝ。
長次　每度上りまして御馳走になつて、有難う御座います。
　ト木取りの材料を指して、
お誂への棚も此通り、木取つては御座いますが、まだ木が枯れませんから、斯うして御座います。
幸兵　夫を催促に來た譯ぢやアない、先刻お前の來た時に噺半ばでお柳が持病の癪が起り、中座をして失禮したから、其詫び旁々斯うやつて二人連で來ましたのさ。
長次　どうもお堅いぢやア御座いませんか、職人風情の私に、其御挨拶ぢやア却て痛み入ります。
お柳　淺草迄行つたと云ひなすつたが、アノ兼さんが少しの間でも、居ないと一寸不自由だらうねえ。
長次　居ました所でイケ粗雜で、此通り取つ散らかしてつツ構はず、タマに人樣でもお出でなさると、夫からトツパクサ大騷ぎでございます。

幸兵　ホンニさうだ、一軒の家に女房がないと、何かにつけて損のあるもの、何處か宜い緣でもあるなら、早速貰ふがよいではないか。
長次　私の樣な貧乏人の家へ來人は當分ありますめえからまア貰はねえ事にして御座います。
お柳　イエ緣と云ふものは、決してさうした譯の物ぢやアない。恥を噺さなきやア分りませんが、私も若い時伯母さんに勸められて、心に染まぬ所へ嫁いて、モウ〳〵人知れぬ苦勞をした揚句、緣がなくつて分れたが、夫が私の幸福で今は斯ういふ安樂な身の上で、何不自由はないけれど、子の出來ぬのが一ツの不足、長さんお前位ゐの子があつてもいゝのだが、夫が無いのは何かの罰でありませう、假令お金が幾千あつても、子のない程心細いことはないから、お前もお內儀さんを貰つて、早く子供をお拵らへよ。
幸兵　全くお柳の云ふ通りだ、相當の者でもあつたら、世話をして上げようから、持ちなさるがようござる。
長次　飛んだ事で御座います、私は女の事なんざア些とも構ひません、こんな貧乏な家へ誰が來ますものか。
お柳　其事なら心配おしでない、私共も及ばずながら、い

ろいろ随分心掛けて上げませう。

ト帯の間より金包みを出して、

アノ、是はね、まだ種々と家の道具を、拵へて貰はにやアならないから、ホンノ手附けの印しに、少し計りだが取つて置いておくれ。

（ある所には惜し氣なく、金も封じて一包み袱紗とくと取り出せば、長次は不審晴れやらず、（ト長次の前へさし出す）

長次　へエ、お手附けで御座いますツて。

お柳　少なからうが、上げて置くのさ。

長次　こんな物は要りません、上るたんびに御馳走になつたり、又仕上げて持ち込みやア、手間よりたかいお金を下さり、指物屋のお得意先きにやア珍らしい上客樣、其上仕事の前金迄お渡しなさるたア、職人冥利に盡きますから、此金はそちらへお納め下さいまし。

お柳　そんな堅い事を云ふものぢやアない、今も旦那の仰しやる通り、人の家に女のないのは締りが附かぬ、ダカラお内儀さんを持たねばなるまい、そんなこんなの用心に。

長次　イエまだ女房を持たうなぞと、少しも考へては居りません。

お柳　若い中は能くそんな事をいふものさ、ねえ旦那。

幸兵　さうとも〳〵、女ッ切れがなかつたら、年の中には大した費だ、年を老た者の云ふ事を聞くがいゝ、さうなつて見なせえ、第一こんな狭え家では嫁の荷物の置場もねえ、まア見世を仕事場にして、茶の間に臺所二階に住居の座敷位えの家でなけりやア仕方があるめえ、夫は緩り捜すとしても、金丈けは用心するが何より肝腎、そこらが常の心掛けだ。

お柳　まア其時は其時としても、引越しの貯へ位ゐは持つて居ねばなるまいから、私達の心を汲んで、何となしに手附けの金、其方へ取つて置いて下さい。

（枉げて勸める言の葉に、どうやら譯もありさうな夫婦の様子疑ひの、ます〳〵晴れぬ胸の中、

ト無理に金を納めろと勸める、長次はしばし幸兵衞夫婦の様子をぢつと眺めてゐて、

長次　親身も及ばぬ御深切の其詞、金の恵みや餘所ながらの、情を掛けて下さるより、モシおつ母さん。

ト一ト膝乗り出す。

お柳　エ、。（ト幸兵衞夫婦は一ト膝退く。）

長次　親子と一言、云つて下さいまし。

へずつけり云はれ轉く胸、夫と思へど素知らぬ顔、（ト

兩人ぎつくりして氣を替へ）

幸兵　何だとえ、親子の名乗りだと。

長次　ヘイ、どうか爲すつて下さいまし。

幸兵　長次さん、おめえ飛んだ勘違ひをしてはいけねえぜ。

お柳　夫に私をおつ母さんなんて、一體どうした譯なんだえ。

長次　どうも斯うもねえ、お前さん方お二人の、素振りで大概讀めました。斯うなつたらお二人さん幸ひ家にやア誰も居ねえ、私一人だ、どうか眞實の事を聞かして下せえ。

幸兵　オイ〳〵逆上ちやアいけねえ、俺達は只お前の正直な了簡と、仕事に惚れて居るだけだよ。

お柳　恰度我子にして見たい、年恰好だと思ふ所から、ツイ深切が過ぎたのさ、見れば見る程可愛い人、イエ可愛想な身の上噺しに、釣り込まれたといふ迄なので、思ひ掛けない親子の名乗りなんて、私はホンニ呆れてしまつたよ。

幸兵　諸家樣御用達しの龜甲屋だ、白い齒を見せたと云つて、失禮な事をいひなさんナ。

お柳　長次さん、詰らない事をお云ひでないよ。

（口には云へど恩愛の、目元濕ます母の顔、長次はぢつと打ち見やり、

長次　そりやア隱して居る事を、名乘つてくれろと云ふのだから、聞く方が無理かも知れねえが、先刻も寮で私の身の上、噺しをして居る其中に、俄に起る癪の差し込み御新造さんや旦那樣のお顔の色で大概は、扨はとお察し申しました、そりやア我が子を捨てた科が、あるから隱すは尤もだが、現在子として双親の、祕事を人中でしやべる樣な者はねえ、ましてや長次は男で御座います、御心配なく打ち明けて、モシお父さんおつ母さん、どうぞ名乘つておくんなせえまし。

（夫婦の袖に取り縋り、賴む心は千萬無量、分けてお柳は只うろ〳〵、何と答へも泣く計り、

ト長次二人によろしく賴む、幸兵衞は取り合はぬこなし、お柳は泣き伏す。

お柳　モシ貴方、（ト相談を懸ける樣に云ふ。）

幸兵　エヽ、默つて居ろ。

ト　お柳を押へ、長次に向ひ語氣激しく、

コレ何處迄付け上るのだ、俺達の子だなんて云やアがつて、ハ、ア是はなんだナ、そんなイモクを附けて、金にでも爲ようといふのだナ。（ト長次びつくりして）

長次　なんでそんな、强請なんて。

幸兵　イ、ヤ强請りに違えねえ、コレよく聞け、何を證據に子だなんぞと云ふのだ、龜甲屋幸兵衞はお上の御用を勤め、諸大名にもお出入りをする身分だぞ、俺があんまり手前をひいきにするものだから、夫を附け込み家へ入り込み、金にでもする了簡だらう、ウヌが樣な奴は癖になるから、召し連れ訴へをするから一緒に來い。

　ト引立てる、お柳慌てゝ止めようとするを、幸兵衞片手で制す。

長次　なんで私が金なんぞに目がくれて、そんな事をいふものですか、私だつて此頃はだん〳〵得意が殖えて來て仕事せえして居りやア、何も少しも困りやアしねえ、只親子だと云つて下さりやア、誰にも何も云やアしません矢つ張り指物屋でお出入りをすりやア、宜いのですから、モシ、手を合せて賴みます、どうぞ名乘つておくんなせえ。

幸兵　エ、そんな甘口に乘るんぢやアねえ、お柳歸らう、こんな奴に係り合つて居ると、大きな恥ッ搔きだ、お柳行かう。

お柳　ハイ。（ト泣いて居る、幸兵衞袖を捕つて、）

幸兵　コレ袖を放せ、コレ放さねえか、袖が切れらア。お柳早く歸らう。此先き何を吐かすか分らねえ。お柳どうした。エ、何をグツ〳〵して居るのだ。

〽急き立てられて女房が、不憫彌增し立ち兼ねる、袖に長次は又縋り、

　ト幸兵衞手强く長次の手を拂ひ、お柳の手を引立つて門口の所へ來るを、長次お柳に取縋り、

長次　おッ母さん、親だとせえ云つて下さりやアいゝのだタツタ一言云つておくんなせえ。

〽行くを止むる親と子が、恩愛二つ一徹の幸兵衞中を押し隔て、

　トお柳行きかれる、幸兵衞中へ割つて入り、

幸兵　エゝ何をしやアがる、手出しをすると家主へ引つ張つて行つて屆けてやるぞ。

〽威す詞に思はずも、ひるむ長次に幸兵衞夫婦、

　ト長次は手を放す、幸兵衞手早くお柳と入れ替り、兩人門口へ出て、

お柳　夫でもどうやら、

幸兵　エヽ、行けといふに。

ヘ止める長次を右の手に、胸の邊りを突き出す、辨天山の鐘諸共、格子戸ピッシャリ兩人は、足を早めて歸り行く。

ト兩人縋る長次を突き退け、時の鐘の送りにて、足早に向ふへはひる。長次外へ出て、

長次　モシ待つて下せえ、モシ旦那、御新造。

ヘ門口開ければ姿すら、見えねば望み盡き果てゝ、

ト床の合方になり

エヽ、情ねえ、二十九年後湯河原の、岸の澤へ捨てられた親にやう／＼巡り合ひ、ヤレ嬉しやと思ふ間もなく、賴むを聞かずに行かれて終ひ、育ての親にやア死別れ生みの親にやア捨てられるとは、なんたる因果な此の身の上。

ヘ因果を喞つ男泣き、泣く／＼はひる我家の中、手先きに觸る金包み、長次は思はず手に取つて、

ト長次泣く／＼家の中へ入り、以前の金包みに觸り取り上げ見て、

コリヤ今呆れて行つた手附けの金、是を貰つちやア慾に目がくれた事としか思はれねえ、持つて行つて返さにやア、俺の心がどうも濟まねえ、女と一緒の田甫道、是から先きへ土手傳ひ、後追つ駈けて返して來にやア。

ヘ惠みの金を手拭ひに、包む心の土手傳ひ、

ムヽ、さうだ。

ヘ押上さしてぞ、

ト金包みを手拭に手早く包み、懷へ入れ、尻をはし折り表へ出て、又歸つて戶締りをして早足に向ふへはひる。床の三重にて、

幕

ト幕引き附けると、風の音にてツナギ、道具出來次第直に引返す。

本舞臺一面中足の草土手、上の方は掛稻の框、後ろ田甫越しに締切りの川續きを見たる冬の野面、夜の遠見、前へ這はして草土手の蹴込み、眞中に石の地藏木の因果車、下の方は石を疊みたる土手の降り口、裾廻り小川の流れ、總て小梅押上堤の體、風の音にて幕明く。

ト木魚入りの合方になり、向ふより以前の幸兵衞、お柳連れ立つて出て、

幸兵　誰も居ねえから云ふが、お前にやア困るよ。彼奴が子だと云ふ事が知れて見ねえ、夫こそ大變だ、夫だからアレ程云つて置いたぢやアねえか、餘計な事を云つて金なんぞを遣るもんだから、とう／＼悟つて終はれたが、こんな事を知らさねえで、貰いでやる思案もあるから、モウ決して素振にも出さねえがいゝ。

お柳　私も云つたのは悪う御座いますが、アノ子の顏を見ると、可愛想だと胸が一杯になつて、餘計な事を云ひましたが、せめて捨てた罪亡しに、アノ位ゐな事をして遣らないと、お天道樣へ濟まない樣な氣がしますもの。

幸兵　まだそんな事を云つて居るから困るよ、過ぎ去つた昔の事は爲方がねえ。

トこの臺詞をいひながら、舞臺へ來て土手へ上る。

お柳　さう仰しやると、貴方は、またアノ子を先の旦那の子と思つて居るので、夫で邪推なお氣になるので御座いませう。

幸兵　馬鹿を云へ、株を云つて居るぜ、さう思ふ位ゐなら、ナンデあゝして目を掛けるものかナ。

お柳　夫でも先刻、私に縋つた所を突き倒しなすつたが、隨分ひどい事をなすつたぢやアありませんか。

幸兵　アレは態とやつたのだ、彼に本當の事を感づかれて見ろ、夫こそお互ひの身の大事だ、ダカラ何所迄も他人の樣にして置かにやア、安心がならねえぢやアねえか。

ト噺しながら上手へ行き掛ける、正面の地藏の蔭より長次出て二人の行く先きへ手を突いて頭を下げ、

長次　お父さんおつ母さん、ちよいと待つておくんなさいまし。

ト兩人驚いて、一寸後へ下り、すかし見て、

幸兵　オ、手前長次ぢやアねえか。

お柳　私達の後を追つかけて來たのかえ。

長次　先刻の金をお返し申さうと、急いで田甫傳ひに來ましたら、お前さん方より先きになり、此掛稻の蔭で、お二人のお噺しをスッカリ聞いて終ひました。

兩人　エ、。(ト合方しんみりとして、)

長次　モウ隱してもいけません、親子だと打ち明けて、どうか名乘つて下さいまし。

幸兵　手前も執拗奴ぢやアねえか。コレ積りにも知れて居らア、諸大名へのお出入町人、龜甲屋の實子なら、ナンデ職人なんぞにして置くものか、疾うに拾ひ上げて立派な息子株にしてやらア。馬鹿もいゝ加減にいふがいゝ。

其金は元より貴様に遣つたんだから、夫を持つて早く歸れ。

長次　金なんざア要りません、モシおつ母さん、親子だと名乘つては、都合の惡い事があるかは知れませんが、決してそんな事は、口が腐つても云やアしません、タツタ一遍でいゝ、一ト言親だと云つてさへ呉ゝば、後は今迄通りの出入りの職人でいゝんです、どうぞ一ト言親だと云つておくんなせえ。

お柳　夫はお前から云はないでも、全く私の生んだ子なら、旦那だつて私だつて知らない顏が出來るものかね、此方に覺えのない事は、幾等お前にせがまれても、どうも親とは云はれませんよ。

長次　お父さんは男の事、世間の事を考へて知らねえ顏も仕なさらうが、現在腹を痛めたお前迄素氣ねえ顏は情ねえ、そんな事を云はねえでコレ此通り、手を合はして賴みます、どうか眞實の事を云つて下せえ。

　トお柳の袖へ縋り、手を合せる、お柳は當惑のこなし、幸兵衞思切つて割つて入り、長次を突き飛ばし、聲を荒くして、

幸兵　コレ分らねえにも程があるぜ、此方に覺えのねえ事は、いくら云つても同じ事だ。ア、こりやア、なんだナ、柄のねえ所へ柄をすげて、此方がどうにかして居る所から、優しくするので附込んで、俺達ちの子だなんぞと、因緣を附けて金に仕ようといふ了簡だナ。

長次　飛んでもねえ、そんな了簡があるなら、態々後を追つ駈けて、金を返しに來やあしねえ。

幸兵　イ、ヤさうだ、夫に違えねえ、さうでねえなら何にも云はずに、其金を持つて早く歸れ。

長次　金なんざア要らねえと、初めから云つて居るんだ、直ぐに歸るから、一ト言親だと云つて下せえ。

幸兵　またそんな事を云やアがるか。

　ト手荒く長次が袖へ縋る手を振り放さうとして、

くだらねえ事を云つて夜が更けらア、サア放さねえか、人が來ると見ッともねえ、サ、放せ〳〵、エ、放しやアがれ。

　ト手ひどく振り放す。

長次　夫ぢやア斯んなに賴んでも、何所迄も知らねえと云ひなさるのか、名乘らなきやアいゝ、そウ賴まねえ、どうせ、我が子を捨てる樣な人情のねえお前さん達に、何を云つても冗な事だ、サア他人から金を貰ふ譯はねえ、

こんな汚らはしい物は要らねえ、返してやるから取つて置け。

　ト金包みを幸兵衛に叩き付ける。

幸兵　此野郎、投げ打ちをしやアがつたナ。

長次　親でもなきやア五分と五分だ、要らねえ金だから返したんだ。

幸兵　此恩知らずめ、ウヌ、叩き擲るぞ。

長次　擲るなら擲れ、俺を湯河原へ捨てやアがつて。

幸兵　何を云やアがる、此嘘吐きめ、ウヌは金を強請らうとする盗賊同然な奴だ。

　ト長次の横面を打つ、

長次　打ちやアがつたナ。

幸兵　オ、打つた、打つたがどうした。

長次　よくも盗賊と云つたナ。

幸兵　盗賊に違えねえ。（ト又打つ）

お柳　アレ、お前さん。

幸兵　エ、打つちやつておけ、癖にならア。

　ト又打ちに掛かる、手を止めて、

長次　モシ旦那、私ちやア打たれてもいゝ、一ッや二ッ擲られても構はねえから、タッタ一ト言親だと云つておくんなせえ、お願ひだ〳〵。

　ト又縋るを振り拂ひ、

幸兵　まだコケ未練な事をいふのか、そんな事ア俺ア知らねえ。

長次　何處迄もシラを切るのか、モウ仕方がねえ、モウ聞かねえ、親子なら一ッや二ッ打たれても我慢をするが、他人を打つて濟むと思ふか、コレ人を打つと云ふ法があるか、かうなりやア意地づくだ、出る所へ出て黒白を附けよう。サア一緒に來い。

　ト手を取る、幸兵衛も持て餘せしこなしにて、

幸兵　エ、何をしやアがる、ウヌ只は置かねえぞ。

　ト脅しの心にて脇差を抜く、長次は後へ飛び退き、

長次　ウヌ、斬る氣だナ。

幸兵　手前なんざア殺していゝんだ。

お柳　アレそんな事を。（ト止めにはひるを。）

幸兵　エ、引つ込んでゐろ。（ト突き退ける。）

長次　殺すなら、殺して見ろ。

幸兵　殺さねえでどうするものか。

　ト幸兵衛脅しの心にて刀を振り廻す、長次は眞劍に向ふ、お柳は此中へ止めにはひる立廻り、捻藏と掛稲の

枠を栁によろしく、トゞお栁石に躓きし心にて轉ぶ、幸兵衛後にてお栁の肩先きを斬る、長次吃驚して其手を捕へ、

長次　コリヤ、お母を。（ト云ふを冠せて、）

幸兵　エ、放せ。

ト振拂ひ、兩人揉み合ふ中刄物を因果車へ斬り込み、是を抜かうとして力餘つて、幸兵衛自身の脇腹へ突つ込み、苦しみながら、

人殺し

ト叫ぶ、長次驚いて介抱する中、追々苦痛を增し、幸兵衛はバッタリ倒れる。長次は是を見て是迄といふこなしにて以前の金包みを拾ひ上げ、幸兵衛の懐中へ入れ、お栁の死骸と一緒に堆藏の側へ片寄せる。此時上の方より人の來る様子に、長次は慌てゝ土手を駈け下り、花道よき所へ來て振返り、合掌するを木の頭、是と同時に上手の上手の土へ龜甲屋の手代萬助、迎ひに來た心にて弓張提灯を持つて出て、血に辷つて尻もちをつく。長次は逸散に向ふへはひる。萬助は四邊を見廻す、風の音。早き木魚の音にて、

拍子幕

四幕目　兩國箱淸内の場

人物――指物師長次。同弟分兼松。箱淸の聟恒太郎。職人久次。同留吉。家主太郎兵衛。指物師淸兵衛。恒太郎女房お政。

本舞臺平舞臺、上の方二間斜めに障子屋體、出入りあり、下手一間の板羽目、註文書きの張り出し、板切れなぞ立て掛け、毎時の所格子戸の門口、此下手正面腰障子の入口、續いて町家の片遠見の書割り上の方は庭の心、濡れ緣、手水鉢、能き所に長火鉢を置き、誂への茶棚、其外指物の出來掛け澤山、總て東兩國大徳院前、箱淸住居の體、爰に職人久次留吉仕事着、道具箱を置き、細工をしてゐる體、飾屋の鳴物にて幕明く。

久次　コウ留、ぬしやア昨日來た小花といふ女を見たか。

留吉　ウ、見た／＼、坂倉屋の道樂息子が藝者を引かせ、圍つて居ると聞いたが、板で云やア桐の糸柾、品はいゝ

が、面白味がねえなア。

久次　馬鹿ア云へ、半元服でア、造つてゐるから、桐の糸柾に見えるが、木地を洗やア杉の荒柾、粋な所に味があるんだ。

ト奥より恒太郎、仕事着曲尺を持つて出て、

恒太　此奴等ア女の噂ばかりして居やアがる、夫だから埒が明かねえ、夜業を掛けても仕上げにやアならねえ仕事だ、冗を云はねえで、身に沁みてやらねえか。

留吉　ナアニ久次の奴がね、昨日の女の噺しをするから、ツイ釣り込まれたのさ。

久次　噺したからッて、手を休めるには及ばねえ。

留吉　さう云ふ手前が噺しかけたんぢやアねえか。

恒太　ニ、喧しい、さつさと仕事に掛からねえか。

ト是にて兩人仕事に掛る、けいこ唄の合方になり、向ふより兼松仕事着の儘にて出て、直ぐに舞臺へ來て、

兼松　今日は、長兄イは此家へ來なかつたかね。

ト云ひながら、内へはひる。

恒太　オ、兼か、長次が居ねえッて。

久次　一つ家に居ながら、何處へ行つたか分らねえのか。

留吉　此方人等と違つて、堅藏の長兄イ、這入り込む穴もねえ筈だ。

恒太　さうして、何日頃から居ねえのだ。

兼松　雇ひの婆さんが病氣で、實家に行つてゐるから、今朝見舞に行つて歸つて見ると、家が貸店になつてゐるんだ。さつぱり譯が分らねえから、家主さんへ行つて聞いて見ると、先刻長次が來て、急に遠方へ行く事が出來たからと、店賃を拂つて、諸道具や夜具布團はみんな兼松に遣つて與れろと云ひ置いて、出て行つたさうだが、若しや其行きがけに、此方の家へ來やアしねえかと、探しに來ました。

久次　長次兄イだからそんな事はあるめえが、モシヤ情婦でも出來て、其女と逃げたんぢやアあるめえな。

恒太　馬鹿を云へ、そんな男ぢやアねえが、遠方へ行く事がありやア、一番餞けに家へ暇乞ひに來る筈だが○

兼松　私も其所へ氣が附いたから、聞き合せに來ましたが、何の事はねえ、長兄イに置き去りを喰つた樣なものだ。

久次　婦アの置き去りと云ふ事は聞いたが、職人の置き去りは初めてだ。

兼松　冗談ぢやアねえ、若イ親方の前だが、長兄イは道樂はなし、借金があると云ふぢやアなし、此節は出入り場

が殖えて、忙しくッて都合がいゝ譯だが、人に沙汰なしで店を開けるとは、どうも不思議で譯が分らねえ。

恒太　全くさうだ、相談なしにそんな事をする、向ふ見ずな男ぢやアねえんだがナ。

ト皆々不審のこなし、上手の障子の中より、指物師清兵衛老けたる職人の拵へにて出て、

清兵　店へ來たのは兼ぢやアねえか、何をグヅ〳〵云つてゐるのだ。

恒太　モシ父さん、兼の來たのは、長次が家を明けて何處かへ行つたんで、氣を揉んで來たのですよ。

清兵　ナニ、長次が家に居ねえ。

兼松　子供の時分から親方の丹精で職人となり、名人長次と云はれる位ゐに、立派になつたも此方のお庇護と、朝晩云つて居た長兄イが、親方へ沙汰なしに、家をしまつて何處かへ行くたア、どうも不思議でなりません。

清兵　兼、手前仕事の事で、長次と喧嘩しやアしねえか。

兼松　イエ長え間助けて居たが、喧嘩所か兄イの云ひ附けを反いた事アありません。

恒太　さうでなけりやア別段に、心當りもねえ譯だが、なんで影を隱したかナア。

清兵　俺ア此頃身體が悪く、長え間寢てゐるから、探しに出る事も出來ねえが、みんなで手分けをして、心當りを探してやれ。

恒太　アイ〳〵さう仕ませう、コウ久次も留も仕事を止めて探しに出る支度をしろ。

久次　ヘイ〳〵、此奴ア飛んだ事が持ち上つた。

ト道具を片附けに掛かる、此以前下手より長次出て、門口に聞いてゐて、此時格子を開け、

長次　イヤ探すにやア及ばねえ、長次は爰に來て居ます。

ト云ひながら家へはひり、眞中下寄りに住ふ。兼松見て、

兼松　オヽ兄イ、お前何處へ行つたんだ。俺アどんなに案じたか知れやアしねえ。

長次　何處へ行かうと俺の勝手だ、餘計な心配する奴が間拔だ。

ト態と酒に醉つたるこなし。

兼松　ヤア珍らしいや、兄イお前醉つてるナ。

長次　醉はうが醉ふめえが、手前の厄介になるものか、大きにお世話だ、默つて居ろ。

兼松　お前どうかして居るぜ、人にさんざツぱら心配さし

て置いて、惡態を吐くとはひどいぢやアねえか。
長次　エ、生利な事を吐かしやアがるナ。
ト是にて兼松ムッとして、
兼松　何が生利だ、兄い〳〵と立てゝ居りやア、訝う兄イがりやアがつて、手前こそ生利だ。
長次　ナニ。
ト双方意氣込むを、恒太郎制して、
恒太　コウ〳〵兼、默つて居ろ。オイ長次、夫ぢやアどうも穩和くねえぜ、お前が居なくなつたつて、兼が心配してゐるのに、惡態を吐いちやア間違えにならア。
長次　さうですか、私が惡かつたら御免なせえ。
恒太　何もあやまる事はねえ、聞きやア家を仕舞つたさうだが、一體何處へ行かうてんだ。
長次　何處へ行かうと俺の勝手さ、お前さんの厄介にやアならねえから、打ちやつて置いておくんなせえ。
ト愛想なく云ふ、恒太郎初め皆々呆れしこなし、此時恒太郎女房お政奥より茶碗に茶を注いだのを持つて出て、
お政　長さんお出でなさい、今日は珍らしく御機嫌だね、まアお茶でも飲んで醉ひを醒し奧で一と寢入りしてはどうだえ。
長次　コレはお政さん、醉醒めの茶とは有難えね。
ト茶を飲む、清兵衞思入あつて、
清兵　コレ長次、お前は家を疊んで何處かへ行くさうだが遠方とは何方の方へ行くのだ。
長次　親方御免なせえ、實は私は京へ上つて、利齋の弟子になる心算、家を疊んで諸道具一式、兼の野郎に置き土產、お前さんにも長え間、厄介になりましたから、一寸暇乞ひに參りやした。
清兵　ナニ京へ行つて利齋の弟子になる。
長次　まだ〳〵修行が足りねえから、モウ一苦勞しようと思ひます。
清兵　ム、腕を研きに行くはいゝが、彼も先代利齋の弟子で、手前に平常噺す通り、三年釘を削らせられ、其辛抱を仕上げたので、やつとアレ迄に成つた人だが、手前味噌ぢやアねえけれど、今京に居る五代目の利齋位えにやア、今でも俺は指せる心算だ。
長次　フム今の利齋位ゐに指せますかねえ。
清兵　オ、身體が惡くッても、書棚位は枕許で指させるのよ、コレ恒、鹿島さんの註文のアノ書棚を見せてやんナ。

恒太　アイ〳〵、久次手を貸してくれ。
久次　ヘイ。
ト兩人奧より誂への書棚を手昇きにして持ち出し、長次の側へ置く。
恒太　どうだ此抽斗の工合といひ、遠州透しの繼ぎ合せは寸分も隙のねえ指方だらう。
ト長次棚の廻りを見て、
長次　成程まづかアねえ樣だが、自慢をする程の細工たア思ひねえね。
ト兼松に驚いて、
兼松　コウ〳〵兄イ、何を云ふのだ。親方の仕事をケチを附けちやア濟むめえぜ。
長次　エ、默つて居ろ、親方の仕事だつてさう好い物ばかりありやアしねえ、から見た所が此書棚も、表面は器用に出來てゐるが、仕事に嘘がしてあるから、五六年經つと留が離れて、バラバラだ。
ト恒太郎ムツとして、
恒太　ナニ仕事に嘘があると、コレ何處を見て云ふのだか知られえが、家の父さんの指した物は十年經つても百年經つても、崩れねえのが常の自慢だ、一ツや二ツ才槌で撲つて見ても毀れねえのは、手前も知つてゐるぢやアねえか、ふざけた事を云はねえもんだ。
長次　所が直ぐに毀れるから、俺の目で見ちやア褒められねえ。
ト恒太郎きつとなつて、
恒太　何處が直ぐ毀れるんだ。
長次　何處でもよ。
恒太　ナニ。（トいきまくをお政止めて、）
お政　モシお前さんお構ひでないよ、平常飲めもしないお酒を飲んで、大層醉つて居る樣子だから、構ふ方が大人氣ないよ。
兼松　オイ〳〵長兄イ、大概にしねえナ、なんぼ喰ひ醉つて居るからッて、斯樣に能く出來てゐるものを、クサすなんてえ勿體ねえやナ。
長次　又四文と出やアがらア、クサす所があるからいふのだ、夫が嘘だと思ふなら、才槌を持つて來い、叩ッ毀して見せてやらア。
恒太　オ、面白え、毀せる物なら毀して見ろ。
ト有合ふ才槌を出して突き付け、
サア、此才槌で毀して見ろ。

ト云ふをお政止めて、

お政　アレ氣違ひに刄物とやらで、毀れないにもせよ其書棚に、疵でも附いちやア困るから。

恒太　ナアニ毀れなけりやア、野郎に元の通りにさゝせる計りだ。

長次　俺が氣違えか氣違えでねえか、今目の前で叩ッ毀して見せてやらア。

ト才槌を持つて立上がる。

兼松　コレ何をするんだ、アレを打つなア親方の頭ア打つも同じ事だ、お前の腕が曲ればとて、何で毀れッこがあるものか。

長次　エ、蒼蠅、止めやアがるナ。

ト兼松久次留吉止めるを、才槌を振廻して追ひ散らし書棚の側へ寄つて身體を蔭にして、内側より棚板を叩き、板をへがす、皆々見て吃驚して、

お政　ヤ、お父さんの指した書棚を、

恒太　能くもこんなに毀しやアがつたナ。

長次　どうだ、矢つ張り毀れて仕舞つたらう。

ト才槌を抛り出す、恒太郎思入あつて、

恒太　ヤイ長次、ウヌは十歳の年から此處の家に厄介になり、一人前の職人に、仕立つて貰つた父さんの、恩になつた事は忘れやアしめえ、犬にも劣つた恩知らずめ、外の弟子への見せしめに、畜生野郎の成敗を、父さんに代つて俺がしてやる。

ト才槌を振上げるを、お政中へはひつて、

お政　モシお前さん、腹も立たうが相人は生酔、短氣を出しちやアいけませんよ。

恒太　イ、ヤ止めるナ、親父の仕事にケチを附け、其上斯んな眞似をしられちやア、打つちつやて置けるものか。

ト立ち懸かるを、

清兵　恒、待て。

恒太　だつて父さん、此儘にしちやア腹が癒ねえ。

清兵　まアいゝから、騒ぐなといふに。

ト恒太郎是非なく下に居る、清兵衛思入あつて長次に向ひ、

長次、手前大層腕を上げたナ、麒麟も老ゆれば駑馬とやらで、俺の耄碌を見限つて、是から京都の利齋を便り、腕を研きに行く氣なら、決して止めやアしねえから、今打ち毀した此書棚の、噺しを土産に弟子になれ、モウ今日からは俺の方でも、手前を弟子たア思はねえから、今

目から手前も一本立ちだ、イヤ立派な者になつたナア。

兼松　コウ長兄イ、イヤ長次、俺も以前は家の親方に丹精されて、どうやらかうやら、指物師の職を覺えた兼松だが、親方思ひのお前とは心が合つて頼もしく、兄イと立つて是迄居たが、此節大慾を擴げかけ、いゝ得意が離え困らねえ様になつて逆上たか、恩を受けた親方の仕事をクサした其上に、丹精をした背割迄打ち毀すたア實に呆れた、俺アお前と一つでねえといふ面晴れに、兄弟の縁を切るから、まアさう思つてくんねえよ。

長次　ヘンそウ云ひ種は夫限りか、手前の様なガラクタは弟分にするのも荷厄介だから、アノ明き店の雜物を、縁切り代りに遣つて、おさらばだ。エ、親方、三年經ちやア三歳になる、腕を知らずにいつ迄も、子供ッ子同様思つてゐるから、燒が廻つて腕が鈍り、鼻ソ摘みにされるのを教えてやるのも以前の情誼、又若え親方も其心算で、今から腕を研くがいゝぜ。

恒太　エ、餘計な事を云はねえで、早くさつさと歸りやアがれ、面を見るのも癪にさはらア。

長次　箱清の筆にしちやア、仕事が鈍いと世間から云はれる事も知らねえで、親の光りで納まり込むが、下手は骨迄下手だから、修行をしても冗たらうが、夫でも六十の手習ひといふからナア。

恒太　ウヌ云はして置きやア。

　ト立ち上がらうとするを、

お政　氣違ひだから、打つちやつてお置きなさいよ。

　ト久次留吉はツカ〳〵と立つて、

久次　ヤイ長次、

留吉　早く表へ出やアがれ。（ト手を取るを、）

長次　エ、何をしやアがる。

　ト振拂ひ、腹掛けの隠しより書き付けを出して清兵衛の前へ置き、

サア此後何處で出逢つても、アカの他人と云ふ印しに、弟子師匠でねえ證狀だ、是を其方へ取つて下せえ。

清兵　證狀迄張るといふのか。

兼松　フム、疾うから其氣で居やアがつたんだナ。

恒太　だからいよ〳〵我慢が出來ねえ。

　ト又立たうとするを、

お政　恩知らずはこんなものだよ。

長次　親方ぢやアねえ、箱清さん、そウ云ひ分はねえのだね。

清兵　箕清も男だ、モウ此方に未練は少しもねえ。
長次　縁が切れりヤア、長居もなるめえ。
　ト立上がり門口へ来て、
　どうも大きにお喧しう。イヤ此奴も余計な世辞だつた。
　ト兼松立つて来て、
兼松　ニ、一昨日来やアがれ。
　ト突き出して、門口を締める。
長次　ア、、さば／＼といゝ心持ちだ。
　ト唄になり、長次悠々と花道よき所迄行き、思入あつて足早に向ふへはひる。
兼松　親方、御免なせえ。（ト立上がる。）
清兵　兼、何處へ行く。
兼松　あんまりな野郎だから、私が行つて腕づくでも、詫らせにやア濟みません。
清兵　其腹立つは尤もだが、禮状迄張り愛想盡かし、まア其儘にして置くがいゝ。
兼松　餓鬼の頃から世話になつた恩を忘れた今の仕方、打つちやつちやア置かれません。
清兵　イヤアノ長次は、今日ッ限り指物職はしねえ了簡。
恒太　父さん、夫がどうして分かつた。

清兵　昨日態々坂倉屋の息子が、家へ禮に来た時に、妹娘を長次の所へ、嫁にやり度く思つてあるが指物師では不都合だと、首を傾げて俺への相談、職人の出世になる事たら、お指圖次第にしませうと、云つて歸した昨日の今日、平常に似合はず酒を飲み、愛想盡かしを云つたのも、家を退んで縁切りの禮状迄も置いて行つたは、餘程仔細のある事だ。
恒太　そんな事なら遠廻しに、謎を掛けずに打ち明けて、云やアがつたらいゝ事を。
お政　譯も云はずにお父さんの、仕事をくさす憎まれ口。
兼松　夫計りでなく親方の、丹精をした書棚迄、打ち毀すとはなんの事、
久次　恩知らずだと云はれるのを、
留吉　知らねえ奴でもねえ筈だが、
清兵　其所が當時の人間だ、義理人情だの恩があるのと、云つて居るなア時代遅れた。
　ト合方になり、下手より家主太郎兵衛出て来て門口を開け、
家主　ハイ、御免よ。
恒太　オ、大家主さん、お出でなせえ。

清兵　何ぞ御用で御座いますか。
家主　イヤ早速に尋ねるが、小梅に居る長次は此方の家へ來ては居ねえか。
清兵　長次は今迄居ましたが、何をお尋ねなさいますな。
家主　外ぢやねえが、昨夜押上げの土手に人殺しがあつてどうやら小梅の長次に、其下手人の疑ひでも掛かつた樣子で、手先きの衆が探りに來たのさ。
清兵　人殺しの疑ひは、アノ長次に掛かつて居るので御座いますか。
恒太　そんなら若しや其事で、
お政　世帯をしまつて逃げる氣か。
兼松　其所で態々此方の家へ、
久次　愛想盡しに、
留吉　來たのか知ら。
家主　夫で當りを付ける爲、岡ッ引きが來たんだな。
清兵　モシ大家さん。
ト書狀を取上げるを、木の頭。
ちよこつと是を見て下さい。
ト家主家へはひり、書狀を開く、皆々一つ所へ寄り集まる、合方にて、

拍子幕

大切　同返し

南町奉行所白洲の場
同役宅奥の場
下谷稲荷町召捕の場

役名――指物師長次。町奉行筒井和泉守。針醫岩村玄石。龜甲屋手代萬助。指物師恒太郎。美濃屋茂二作。同女房およし。同心吉田駒次郎。留役蒔口丈助。公用人金村專平。家主太郎兵衛同源八。筒井奥方香川。同腰元島路 實ハ 助七娘おしま、腰元四人。同供。緣日商人實は手先二人。手先四人。

本舞臺五間通し高足の二重、本庇本緣付き、正面人見附きの障子、下手一枚明け放し、此後張り壁の疊廊下、平舞臺上下共潜り付きの板羽目、總て南町奉行所白洲の體、二重に留役の與力住ひ二重の下左右に同心二人腰を掛け、下の方に恒太郎、家主太郎兵衛平伏して居る、時の太鼓にて幕明く。

丈助　本所大德院前、太郎兵衞店恒太郎、

恒太　ヘイ。

丈助　家主差添へにて、願書を以て訴へ出でたる趣き、昨日當奉行所へ駈け込み訴訟を致したる、當時無宿長次郎と申す者、幼年より親孝心にて指物師の職となり、其性質實直にて職業を勵み、聊かにても餘德あらば貧民へ施し、人を害す樣な者でないと、家主太郎兵衞連印にて訴へ出でしに相違ないか。

恒太　恐れながら申し上げます、其長次は五ツの時に男親に死なれまして、其後は女親の手一ツで十歲の時迄育てられ、私養父淸兵衞方へ弟子小僧に參りまして、蔭日向なく仕事に勵み、褒美でも貰ひますと、直ぐに母に送り實に職人には珍らしい實體な者で御座いますから、親父もお店受けになりまして、小梅へ家を持たせ賴もしく思ひます中、每日になく酒を飲過ごし、昨日宅へ參りまして世帶を疊み京都へ行くから、弟子師匠の緣切りだと禮狀を置いて歸りました、不思議な事だと思ふ中、押上堤で人殺しをしたと申し、お奉行所へ駈け込み訴訟をいたしましたとは、何か是には仔細のある事と存じます、どうかお慈悲をもちまして右長次に一目逢はれます樣、お願ひに出まして御座ります。

丈助　夫に相違ないか。

太郎　相違御座りませぬ。

丈助　相違なくば、進達に及ぶ、控へ居れ。

恒太　ヘイ。

ト奥より公用人金村專平出て、

專平　只今御出席になります。

ト丈助專平は上の方へ席を改める、奥より筒井和泉守、小姓刀を持つて出て眞中に住ふ。同心は立つて下手に向ひ、

同心　本所大德院門前町太郎兵衞店長次郎、右一件一同はひりませう。

ト呼んで元の所へ來る、下手潜りの中より長次、龜甲屋手代萬助、家主源八出て、よろしく下の方へ住ふ。

和泉　訴訟人長次郎。

長次　ヘイ。

和泉　淺草元鳥越家持ち町人、幸兵衞手代萬助。

萬助　ヘイ。

和泉　コリヤ長次郎面を上げい、其方昨日訴へには、當月二十一日夜戌刻、柳島堤において幸兵衞並に妻柳を切害

に及びしに相違なき故、御法通りに仕置きを願ふと申すと雖も、いかなる遺恨で切害せしか、其趣旨を申し立てず、只切害いたしたとのみでは、罪の輕重定め難し、依つて今日幸兵衛手代萬助を呼び出し、突き合せの吟味を申し付ける、いかなる遺恨で切害なせしか、有體に申してよからう。

長次　へイ有體と申した所で、外に申し上げ樣は御座いません、只二人を殺したので御座います。

和泉　夫では仔細が相分らぬ、何か遺恨でもあつてか、或ひは物を奪はんとか申す、目的がなくては人は殺せぬものぢや、其切害をいたした譯を申せ。

長次　何だか知りませんが、二人を見ますと、むちやくちやに殺したくなつて、夫で殺したので御座います。

和泉　其方は、理解の分からぬ奴ぢや、殺し度く相成つたから殺したとは分らん申し立てぢやぞ、其仔細を有體に申し立てい。

長次　幾等お尋ねなすつても、其譯は云へねえので御座います。

和泉　ナゼ申し上げられぬ。

長次　其譯を云ふと、兩親の恥になりますから、どう仰しやつても云へません、どうかお慈悲で御座いますから、人を殺した廉でお仕置きにして下さいまし。

和泉　幸兵衛手代萬助。

萬助　へイ。

和泉　是なる長次郎は、幸兵衛方へいつ頃から出入り致した。

萬助　恐れながら申し上げます、夫なる長次は當秋主人が菩提所谷中天龍寺へ、墓參に參りました節近附きになりまして、九月頃より三月此方店へ出はひりをいたしまして、彼の住所が本所締切りで御座いますので、主人の寮の柳島へ度々呼び寄せ、指物の註文をいたし、手間代なぞも多分に遣はし、別に遺恨を受けます次第はないと存じます。

和泉　長次郎、夫に相違ないか。

長次　番頭さんのいふ通り、火鉢だの机だのと度々註文を受けまして、出來上がつて持つてさへ行けば、直ぐに拂ひを呉れます、いゝお得意で御座います。

和泉　そのいゝ得意の幸兵衛夫婦を、何故切害いたしたのぢや。

長次　夫が云ふに云はれねえ、誠にどうも困ります。

和泉　默れ、奉行所へ訴へ出る者が、云ふに云はれぬと申す事があるか。上役人をどう心得居る。
長次　恐れ入りまして御座います。
萬助　萬助申し上げます、押上堤にて殺されました主人幸兵衛懐中には、金子五十兩所持して居りましたが、私の考へますには、其金子を奪はんと存じまして、長次郎が切害いたし、遂に取れませんので出奔いたしたのでは御座りませんか、其邊をお調べを願ひ上げます。
和泉　長次郎、其方切害した幸兵衛懐中に、金子五十兩あつたと云ふが、其方存じて居るか。
長次　ヘイ知つて居ます。其五十兩は私へ呉れると云つて持つて參つたので、私はそんな汚れた金はいらねえと云つて返しましたら、其儘置いて行きましたから、後を追つ駈けて返したので御座います。
和泉　然らば幸兵衛が恵んで呉れた、金子を返しに行つたと云ふのか。
長次　ヘイ。
萬助　夫が長次郎は申譯で、全くは其金に目がくれ、奪ふ心算で、切害いたした事と存じます。
ト恒太郎前へ出て、
恒太　恐れながら申し上げます、長次郎は私養父清兵衛の弟子で御座いまして、幼少の時から親孝行で、綺麗な金でも御座りますと、貧乏人へ施します様な氣質で、人を殺します様な悪心は決してない者で御座ります。
太郎　恒太郎申し上げます通り、私店へ六年も住居いたし居りまして、店賃なぞも毎月十日前に納めまして、近邊では奇特者と評判を受けます程の者で御座ります、そう人殺しをいたすとすれば、何か仔細のある事と存じられます。何卒本人へ篤とお尋ねを願ひます。
和泉　町役人の申し立て、恒太郎の歎願書、身も大方は推察いたした。コリヤ長次郎、たゞ切害したからお仕置きに行ひ呉れと申したとて、其仔細が分らねば上の御裁許相立たぬ、其方天下の御政道を心得ぬか。
長次　心得て居りますから、逃げ隠れもせずに、お訴へ申したので御座います。
和泉　有體に申さぬ中は、何度願つても上はお取上げはないぞ、夫を申さぬは其方狂氣いたして居るな。
恒太　申し上げます、お奉行様の仰しやる通り、長次は取り逆上て居るに相違御座いません、私親共は當時七十七歳に相成りますが、長次郎が身を案じまして、夜もろ

くろく寢ませんで、江戸一番の職人を殺すのは殘念だと申して居ります、何卒お慈悲に、一命助かります樣願ひ上げます、全く長次郎は狂人に相違御座いません。

萬助　成程是は狂人かも知れません、手間代を澤山呉れ、五十兩といふ大金を遣らうと云ふ程の恩人を殺すと云ふのは、正氣の沙汰では御座いますまい。

和泉　萬助、其方も主人夫婦を切害いたしたは、全く彼が取り逆上ていたした事と思ふか。

萬助　御意の通りに御座ります。

和泉　町役人、其方はどう思ふ。

太郎　へイ、私も左樣存じまする。

和泉　然らば一同、夫に相違ないナ。

皆々　へイ。

和泉　コリヤ長次郎、其方全く狂氣いたして居るに相違ない、今日は入牢申し附ける、追つて呼び出す迄藥用いたし、上の御沙汰を相待ち居らうぞ。

同心　立ちませい。（ト云ふを長次は居直り）

長次　イエ私は狂人ぢやア御座いません。

恒太　コレ〳〵何を云ふのだ、お奉行樣のお慈悲だ。

長次　私は氣違ひぢやア御座いません、人殺しをした者が、なんぼお上のお慈悲でも、命が助かつちやア天道樣へ濟まねえ、お仕置を受ける覺悟で、お訴へに出たので御座います、私やア狂人ぢやア御座いません、矢ッ張りお仕置きにして下せえまし。

和泉　默れ、左樣な分らん事を申すが則ち狂氣の證據ぢや夫より牢內へ參つて藥用の手當を受け、篤と勘考いたして見よ。

長次　何と仰しやつても、私ア氣違ひぢやア御座いません正氣で御座います、氣違ひと云はれちやア生涯の恥で御座います、此大事な命を、錆鑓で突かれても、氣違ひだと云はれては恥で御座います。私は職人ですから人樣の道具を幾等も拵えましたが、彼りやア狂人長次の細工だと一口に云はれてしまつちやア、末代道具になりません、お慈悲のお詞は有難う御座いますが、狂人と云はれて命が助かるより、人殺しのお仕置を受けてえのが、職人根性としての願ひで御座います。

和泉　其方の申し條も尤ぢやが、御政道として筋道の分らぬ者を、人殺しの罪としてお仕置きには出來ぬ次第ぢや、斯樣々々な次第によつて幸兵衞夫婦を切害したと、申し立ての次第に由つては、いかに助命を願ふ共重き仕

置きに行はねば、相成らぬ場合もある、罪の疑はしきは刑せずとは往古よりの金言、達て仕置きが願ひたくば、事の次第を眞ッ直ぐに申し立てるがよいぞ。

長次　お奉行様の御理解よく分りまして御座います。此事計りは、どんな事があつても、云ふめえとは思ひましたが、筋道を云はなけりやア、お捌きが出來ねえと云はれちやア仕様がねえ、洗ひざらひ申し上げます。まづある所に一人の女がありまして、其女が若い時に亭主があるのに男を拵えまして、逢ひ引きをするのに亭主が邪魔になるから、其男と相談して亡き者にして、また其上に其年に出來た男の子を、其姦夫の指金で相州湯川原の谷の中へ捨てたので御座いますが、其抛り込んだ機に竹の切り口が其子供の脊中へ突き通つて、ヒイ〳〵泣いて居る所へ、其村の情深い人が通り掛かり、拾ひ上げられ、脊中の疵の手當てから乳のねえのに貰ひ乳をして育つてくれましたが、ナント實の子で谷へ捨てるなんてえ親が、何所の國に御座いませう、ひどい奴ぢやア御座いませんか。

和泉　ム、、其捨子は何者ぢや。

長次　ヘエ其捨子はお恥かしいが私で御座います、今申し上げます、捨子の證據といふなア、此脊中に、燒印を押した樣な疵がありますが、私が物心を覺えまして、育てのお母に此疵アどうしたのだと聞きますと、何にも云はねえで涙をこぼして譯を噺してくれませんでした、夫から指物の職を覺える頃から、此疵が暑さ寒さにズキ〳〵痛んでなりませんから、先々月湯川原へ湯治に行きますと、其宿屋におたよと云ふ雇ひ婆アが居まして、脊中の疵から捨子の一件疵の原因迄、すつかり噺しが分りました其後育ての父親やお母の葬つてある、谷中の天龍寺へ墓參りに行つた時、龜甲屋の幸兵衛に逢ひました、尤も其前一度逢つた事がありますので、能い所で逢つた、種種頼みたい物があるから、家へ來いと云はれまして、夫から小梅の宅から柳島の、龜甲屋の寮に近えもんですから、一寸〳〵行つて註文を取りましたが、其時私の身の上噺しを致しますと、側に聞いて居た、幸兵衛の内儀のお柳が、頓に顏の色が變り、眞蒼になつて癪を起して、ウンと倒れて仕舞ひました、ハテ變だ、俺が捨子だと云ふ噺しをしたら、癪を起して倒れたは、若しや實の捨てられた母親ぢやアねえかと思ひましたが、其時は默つて歸つて來ますと、其晩直ぐに私の宅へ夫婦が參りまして

獨身ぢやア不自由だらう、女房を持て、夫にこんな狹え家に居ねえでモッと廣い家へ引つ越せと、金を五十兩出しまして、是から賴む仕事の手附けだから、取つて置けと云ひますが、どうも合點が行きません、此奴ア愈々、俺を捨てた眞實の親達ちに違えねえと思ひますと、我が子を捨てる樣な、邪慳な親でも、懷かしう御座いますから、夫程な深切があるなら、眞實の親だと名乘つてくれろと申しますと、幸兵衞が大層腹を立てまして、淺草鳥越では人に知られた大名方へお出入りをする御用達し、龜甲屋の倅に職人風情はねえ筈だ、俺の子だなんぞと云つて、金に轉ぶ了簡か、少し優しい詞を掛けると、直ぐ附け込みやアがると、だん／＼惡口した上に、盜賊だと口穢く申しまして、こんな所に長く居るとどんな云ひ掛かりをされるか分らねえと、立ち兼ねるお柳を無理に引き連れて歸りました、其跡を見ると、五十兩の金が其儘になつて居ますので、是を取つて置いては、慾にはまつたと云はれるのも口惜しう御座いますから、返してやらうと跡を追つかけ、押上げの土手迄來ますと、幸兵衞夫婦は後から來まして、四方に誰も居まいと思ひ、ナゼ金なんぞを遣るんだ、彼奴が實の子と云ふ事が知れると、どんな面倒が起るかも知れねえ、モウ是から家へ寄せ附けると聞かねえと、叱言を云つて居る所を立ち聞きをしましたから、いよ／＼夫に違えねえと、隱れて居た掛稻の蔭から出て、モウ隱してもいけねえ、どうか親子と名乘つてくれと賴みますと、幸兵衞が又怒り出しまして、此奴ア太え奴だ、盜賊も同樣だ云ひ掛りをしやアがると突然紙入れ止めの刀を拔き、斬つて掛りますので、私もこんな邪慳な人はねえと思ひ、刄物をもぎ取らうとするのを、幸兵衞が私を踏み倒して、鼻ッ先きに脇差しを突き附けましたから、一生懸命にカラモウ夢中になりまして幸兵衞を、

ト云ひ掛けるを、恒太郎は氣遣つて長次の袖をそつと引く、和泉守目をつけて、

和泉　コレ止めるな、控へろ、夫からどういたした。

長次　ヘエ其晩は眞暗闇で御座いまして、何が何だか一向に分らず、幸兵衞が振り廻す脇差を捥ぎ取らうとする、其手が狂つて遂々手を負はせた樣子で、モウ百年目だと度胸を据ゑてメッタ斬りに、夫婦を殺したので御座います。

和泉　ム、然らば其方は、兩親を殺したのぢやナ。

長次　まアそんな物で御座います、お袋は本當のに違えねえだ、幸兵衛の方は實の親だか何だか確り分りません。
和泉　夫にて此方は大方相分つた。萬助。
萬助　ヘイ。
和泉　幸兵衛夫婦は、何歳に相成る。
萬助　ヘイ幸兵衛は五十三歳、お柳は四十七歳に御座います。
和泉　シテ只今の幸兵衛が、柳と夫婦に相成つたは何年程以前ぢや。
萬助　二十八九年以前の事で、柳は先代半右衛門の妻で御座いますが、半右衛門死去の後只今の幸兵衛が、入夫に参つたので御座います。
和泉　シテ其縁組みは、誰が媒酌いたした。
萬助　夫は私し方へ、永年出入りをいたします、下谷稲荷町に住居いたします、美濃屋茂二作と申す者が、媒酌いたしまして御座ります。
和泉　シテ其茂二作と申す者は、當今存命であるか。
萬助　御意の通り、存命に御座ります。
和泉　左様か、コレ長次郎只今の申し立ては、聊か相違ないか。

長次　決して嘘は申し上げません。
和泉　萬助、恒太郎。
兩人　ヘイ。
和泉　其方共は追つて呼出す、長次郎、吟味中入牢申し付ける、一同立て。
同心　立ちませえ。
ト時の太鼓にて和泉守は立上る、一同平伏する模様にて。　道具廻る
本舞臺平舞臺正面は九尺の床の間上下共斜めに銀地の畫襖、ズット上下は杉戸の出入口、眞中に褥、脇息、烟草盆など並べある、町奉行屋敷奥の間の體、こし元○、△、□、◎の四人は、主人の退出を待受けの心にて居並ぶ、琴唄の合方にて、此道具止る。
腰○　モシ皆様、御勤役中の御前様は嘸御心配で御座りませうナ。
腰△　夫故其お氣鬱をお晴らしの爲、今宵はお奥へお越しを願ひ、
腰□　奥様のお催しにて、久々にての御酒宴を、お催し遊

ばすと申す事、
腰◎ 夫に昨日お奥へ上つた、新参の島路さんがお目見得をいたすとやら。
腰〇 町人ながら藏前の、札差し衆の娘御とやら、
腰△ お育ち柄が宜しい故、立ち振舞もしとやかに、
腰□ 奥様初めお年寄りの衆お氣に召すことで御座りませう。
ト唄入り大小の鳴物にて、下手の襖の中より、和泉守羽織着流しに肩衣へ、奥方香川附き添ひ出て、和泉守は褥の上に、奥方は此側に住ふ。
香川 申し附けた御酒の用意は、整つて居りまする。
腰〇 ハイ、お料理方へ申し付け、
腰△ 御沙汰次第に差出します樣、
腰□ 疾くに整ひ居りますれば、
腰◎ いつにてもお差支は御座りませぬ。
香川 左樣であるか。（ト和泉守に向ひ）差し出しましても、宜しう御座りまするか。
和泉 チトお手前に内談が御座れば、酒宴は暫く待つて貰ひたい。
香川 御内談と御座りますれば、女共は遠慮いたさせるで御座りませう。（ト腰元に向ひ）其方達は、暫く遠慮しませうぞ。
腰〇 畏りまして御座ります。
トこし元は一禮して下手襖の中へはひる。
香川 シテ御内談と仰せ遊ばしまするは、如何なる次第で御座りまするか、お役向きに拘はりまする事で御座りまするか、お案じ申し上げまする。
和泉 左程心配の事ではないが、當今世上で名人なぞと云はるゝ程の職人一人、御法通りのお仕置きに行なふ事の嘆かはしく、どうかないたして助けてやり度く、心を勞して居りますぢや。
香川 シテ其者は、どの樣な罪を犯して御座りまするな。
和泉 訴へ出でし所に由れば、人殺しの罪であつたが、だんだん吟味に及びし所、親殺しぢやと白狀いたした。
香川 親殺しとは容易ならぬ、ソリヤ何者で御座ります。
和泉 其囚人こそ、先日林大學頭殿より聞き及ぶ、指物職、長次郎と申す者ぢやが、幼少の折り捨子となり、三十年程相經て不思議に素性も相分り、名乘り掛けしを實親が、いかなる都合か誠を云はず、却つて詐り言ひ掛かりと、惡名附けて斬り捨てんと、刃物を以つて挑みしを

止る機に過つて、切害せしとの申し立てに不審の廉の多けれぱ、夫から夫と吟味せしが、當の相人の實親が、兩人共相果てたれば、所謂死人に口なしにて、ほとんと調べに困却いたしした。

香川　其指物師の長次郎とやらは、昨日奥へ上がりました島路と申す宿使ひの、宿へ出入りをいたすと申す事を承はり居りまする。

和泉　夫故其方に内談いたす、其島路とやらを是へ呼び、長次郎と申す者の、所行を篤と聞いたれば、調べの助けにならうと思ひ、酒宴は暫時止めたのぢや。

香川　夫なれば當人を、今宵お目通りを願ひませうと、存じまして支度をいたさせ、控へさして置きましたれば、早速是へ召し出しお目見得いたさせますで御座りませう。

和泉　オヽ、さうで有つたか、然らば早ういたせ。

香川　心得まして御座ります。

ト鐸鈴を鳴らす、下手より腰元○出て、

腰○　召しまして御座りますか。

香川　島路に是へ出る樣に、申し付けませうぞ。

腰○　ハイ、畏りました。

ト下手襖の中へはひる。

和泉　確に彼は、林大學殿の邸へ出入りの用達町人坂倉屋助七が、娘おやさうぢやな。

香川　御意の通り坂倉屋と申す札差しの娘と申す事にて、流石親共の躾がらとて溫柔な者に御座ります。

ト琴唄樣の合方にて、下手襖の中より、腰元島路、(坂倉屋娘おしま)振袖形りにて出て、下の方へ平伏する。

和泉　彼が島路か。

香川　御意に御座りまする。

和泉　近う進め。

香川　お許しぢや、進みや。

嶋路　ハア――。

ト少し前へ進む。

和泉　コリヤ島路、予は和泉ぢや、折節奥へ參るに出つて見知り置け。

嶋路　恐れ多い仰せ有難く心得ます。

和泉　扨早速に尋ねたいは、其方の宿元は淺草御藏前の、札差渡世ぢやと申す事ぢやナ。

嶋路　直々のお答へは恐入りまするか。

和泉　イヤ、遠慮は要らぬぞ。

島路　ハイ、恐れ入りまする、仰せの通り私親共は代々御藏前町人、坂倉屋助七と申しまする。

和泉　さうであるか、其方宅の出入り職人の中に、指物職をいたす、長次郎と申す者を、存じ居るか。

島路　ハイ、其長次郎は、父が近しくいたし居ります出入りの者に御座ります。

和泉　ム、近しく出入りをさせるとあるは、當今世上で名人と、もてはやされる職人故、其方の父も床しく思ひ、格別に贔屓にいたすのぢやな。

島路　御意の通り、職業に勝れ居りますのみでなく、日頃の心掛けの能い者で御座りまして、職人なぞには似合ひませず、慈悲善根を施しまして、聊かにても餘德があれば、其日に差支へまする貧しき者へ施行をいたすと申す事を、父が豫々承はり、ひゐきにいたし居りまする。

和泉　ム、扨は今日長次郎の、慈悲願ひに出し者が親孝心にて善根好きと、彼の所業を事詳しく書面に認め差出せしは、助命になさん方便なるかと思ひしが、左はなくして、全く以て眞の奇特を行となす、正直者にてあつたるか。

島路　仰せの通り、正直潔白の氣質の者にて、假にも嘘詐りなぞ申す者では御座りませぬ。

香川　新參とは云へ何事も、茲へ目で居る氣質の其方が、夫程申す位ゐでは、其長次郎とやら申す者は、親孝心にて人の道を守る者に相違あるまい、夫がどうして怖しい親殺しなぞいたしませうか。

島路　エヽ、何と御意遊ばします。

和泉　コリヤ島路、なんで其方驚くのぢや。

島路　只今奥様の仰せでは、正直一途の長次郎が、人殺しをいたしましたと、伺ひまして餘りの事に、吃驚いたして御座ります。

和泉　イヤ人は見掛けによらぬと申して、予も勤役中、種種雜多な調べをいたして參つたが、どう見ても惡人とは見えん様にて、大罪を犯して居る者もあれば、一見無人相にて此奴こそ、曲者ならんと見込みし奴も、吟味を遂ぐれば、案外なる善人にて、見込み違ひはまゝある事ぢや。

島路　イエ、仰せでは御座りますれど、長次郎に限つて親なぞを殺す筈は御座りませぬ、彼長次郎は幼少にして父に別れ、又若年の其折りに、母を失ひ、孤兒に相成りましたと申す事、常から老人を敬ひ、幼少を慈しみます善

拙者、夫がどうして親殺しの、出來やう筈は御座りませぬ。

和泉　イヤ幼少にして別れし親は、夫は義理ある育ての親、名乘り合はうといたしたる、實の親が名乘らぬに、カッと怒つて殺害せしと申し立て、驅け込み訴訟をいたしたのぢやとの申し立てぢや。

嶋路　夫はいかなる間違ひか存じませねど、何共以て合點が參りませぬ。

和泉　平常の行ひとは打つて變りし彼の所業、上にも聊か不審に思へど、自ら訴へ出でし次第罪ある者と見ねば成らぬて。

嶋路　自身に御訴訟申す上は、ヨモ詐りでは御座りますまい、正しき道を守りし人が、何故左樣な曲事をいたしましたか、殘念な儀に御座りまする。

ト愁ひを催し、そつと涙を拭ふ、奥方は是を見て、

香川　コレはしたり、御前において不吉な落涙、嗜みませうぞ。

嶋路　身に係はりもなき事に、見苦しき態を御覽に入れ、恐れ入りまして御座ります。

ト一禮して座を立たうとするを、

和泉　イヤ下がるに及ばぬ、嘶しの根本は此方より申し出だした事ぢや、許す／＼其儘其處に居るがよいぞ。

香川　デモ御不興に相成りましては。

和泉　イヤ彼れの心底、疾くより左こそと察して居る、默き居るも尤もぢや此吟味は存じの外の處より罪人も出ようかと、見込みもあれば手附きの者に申し含め、即刻手がかりを採らせあれば、其沙汰次第で再調べを遂げし上其黒白は相分らう。

嶋路　有難い上のお詞、此身の望みは叶はずとも、

香川　エ、

嶋路　イエ有難う存じ上げます。

和泉　イヤ大きに嘶しが理に落ちて、いかう陰氣に相成つた。コリヤ申し附けある酒宴の調度を。

香川　畏りました。

ト紙臺の上の驛鐸を鳴らす、腰元○出て。

腰○　召しましたか。

香川　御酒宴の用意。

腰○　お次に整へ御座ります。

香川　早々是へ。

腰○　ハツ。（ト襖の中へはひる）

香川　お目見得相濟む上からは、嶋路は下りや。

嶋路　ハア。（ト立たうとするを）

和泉　イヤ其方には酌を。（ト是に居よといふ思入を、木の頭）申し附くるぞ。

ト琴唄の合方、嶋路は平伏する、下手より腰元四人は酒宴の道具を運ぶ。

ト幕引き附けると、臺拍子の鳴物にてツナギ、道具出來次第引返す。　幕

本舞臺平臺正面一間二枚引きの腰障子、上の方荒き格子、裾通り石垣、下の方は黑板塀中より松の木枝を出す、上下共町家のしたみ板の張物にて見切り蒲焼伊豆音と記せし幟を出し、門口を除けて上手に手遊屋とどつこい屋の緣日商人店を出してゐる、總て下谷廣徳寺前の體、臺拍子の鳴物、流行唄にて幕明く。

商甲　稻荷樣の神樂は大分遲く迄やつてゐるね。

商乙　思ひの外人が出たから、賽錢もたんまりだらう。

商甲　鳴物入りで人出をそゝるのも、一ツの景氣さね。

商乙　面白さうに囃し立てゝくれるので、此方人迄實入りがよかつた。

商甲　モウ彼是四ツ近いだらうに、お神樂は根氣がいゝね。

商乙　何だか天蓋がヤバクなつた、水ばれの來ねえ内に引き上げるかナ。

ト兩人空を見て捨ぜりふ、右の鳴物にて、下手より茂二作の女房およし、半纏着流しにて出て來て、

よし　久し振りだと云つて、飛んだ坊主が尋ねて來たを、宜い加減なチヤラツポコで歸してやつたが、アノ惡玉の事だから、此鰻屋に家の人の居る事を、どう嗅ぎ出すか分らないから、早く耳へ入れて置かう。

ト門口へ來ると、腰障子を開けて、出前持ち岡持を提げて出る、およしは是を見て、

モシ若い衆さん、美濃屋の亭主はまだお宅に居ますかえ。

出前　ヘエ美濃屋さんなら、お連れの方と奧の離れにお出でなさいます。

よし　さうかい、夫は有難う。

ト出前持ちは下手へはひる。

夫ぢやア是から乘ッ付けて、久し振りで江戸前の鰻にでも有附かうか。

ト腰障子の中へはひると、『入らつしやい』と聲がする
緣日商人は手先きにて兩人囁き合ひそつと家内の樣子を窺ふ、右の鳴物にて、

道具廻る

本舞臺下手へ寄せて三間中足の二重。青竹の蹴込み、本庇、本緣付き、一間石の沓脱ぎ、上手一間の踏み込み床、墨繪の軸物、下手は腰張りの茶壁、平舞臺下手は母屋の横手を見せ、上手は建仁寺垣の張物にて見切り、下谷稻荷町鰻屋離れ座敷の體、爰に廣蓋に酒の道具鰻の重箱を前にして、龜甲屋の手代萬助、美濃屋の茂二作と差向ひにて、酒を飲みゐる。下女おせい酌をしてゐる模樣、神樂の鳴物にて道具止る。

茂二　姐さん、忙がしからうから、爰にやア構はねえがいいよ。

せい　有難う御座います、今晩はあいにく立て込みまして、お氣の毒樣で御座います。

萬助　用があると手を鳴らすから、外の座敷の用を達しなせえ。

せい　どうかお手を願ひます。

茂二　池の緋鯉を呼ぶ樣に、お約束で手を鳴らすよ。

せい　どうかお願ひ申します、ドレお誂へを急がして參りませう。（ト奥へはひる）

萬助　此座敷は奥まつて居るから、内證噺しにはお誂へといふ奴さ。

茂二　アノ龜甲屋の身代を、どうか旨く、せしめたいものだ。

萬助　其所に如才のねえ心算で、旨く世間を胡麻化して、幸兵衞夫婦に親身はないと云ひふらしたに、アノ長次の奴も親殺しと名乘つて出たので、死んでから子供が一人殖えた譯さ、併し人殺しといふ刑狀があるから、遲かれ早かれお仕置き者だ、さうさへなれば否でも應でも永年の間の支配人と云ふ廉で、此萬助が跡目相續、あとは夫からの相談さ。

茂二　幸兵衞が生きて居ても、尻尾を摑んでゐる俺だから一生涯の金庫だつたが、ヒヨンな事で緣切り榎だ、是から先きは一件に係り合ひのある萬助さん、矢ツ張り一ツ穴だから、萬事は以前と同樣に、よろしくお賴申しますぜ。

ト兩人酒を飲みながら此臺詞渡る、奥より以前のおよし出て、

よし　モシお前さん、飛んだ奴が出て來ましたよ。
　トよろしく住ふ。
茂二　およし、家を留守にして何しに來た。
萬助　さうして飛んだ奴とは誰が來たのさ。
よし　三年後に鼈甲屋さんから、金を强請て旅へ行き、夫ッ切り便りのない針醫の立石玄石がさ。
茂二　ナニ玄石坊主が歸つて來たとナ。
よし　今方ヒヨツコリ訪ねて來て、每日もの大束を巻き出したを、留守だと云つて追ひ歸し、モシ爰に居る事を嗅ぎ出すまいものでもないから、裏から拔けて知らせに來ました。
萬助　旅へ出たぎり便がねえから、大方どつかの松並木の肥料になつたらうと思つたら、また此江戸へ歸つて來て、金の蔓を賴つて來たか。
よし　江戸へは入つて其足で、鳥越のお店へも寄つて來たと云ひましたよ。
茂二　又引ッ返して來樣も知れねえ、およしお前は家へ歸つて居な。
よし　そウ今夜は來やアしない、折角來て口を外すのは緣喜が惡いから、一杯御馳走になつて行くよ。

茂二　此奴、用をかこ付けに、附け込みに來たんだナ。
萬助　酒は相手の多いがいゝ、サア一杯やんなせえ。
　ト盃をさす、此時下手の庭口より、岩村玄石坊主かづら羽織着流しの拵へ、以前のおせい附いて出て、上の方へ行くを止めて、
せい　そちらのお座敷は、お客樣で塞がつて居りますから此方へお出で下さいまし。
玄石　イヤ此座敷の客の連れだから、構はつしやるなよ。
　トずん／＼二重へ上る
せい　モシ、お連れ樣で御座いますか。
よし　オヽ玄石さん。
玄石　お內儀も一緒かな。
よし　夫だから今私が。（ト云ひ掛けて心附き）私が今一人殖えたから、一人前だけ殖やして下さい。
よし　ハイ／＼畏りました。
　ト下手へはひる。
玄石　イヤ留守だと云つた二人に、留守番迄が一ッ家の、鰻屋へ穴ッぱ入りとは、此奴ア奇妙だ。
萬助　お珍らしい岩村先生、お久しう御座います、シテ何日お歸りになりました。

玄石　三年前に業用を兼ね、九州筋を遊山半分、京大坂から大和を巡り、夫から宮島中國筋、諸方を歩いた天竺浪人、併し故郷の江戸程な、能い所は一つもないから、今度歸つて來たのさ。
茂二　夫は隨分お樂みで御座いましたらう、只今お誂へが參りますが、まア一獻召し上がれ。（ト盃をさす）
玄石　有難え、江戸の酒にこがれて居た、まア二三杯かけ附けるかナ。（ト酒を飲む）
よし　先刻先生のお歸りの其後で、爰の家から迎ひが來まして、只今參つた計りで御座います。
茂二　只今女房から、先生がお尋ね下すつたと聞きまして萬助さんと二人で、夫は惜しい事をしたと、お噂申して居りました。
玄石　定めし惡く申して居たらう、道理でくしやみが澤山出た。
萬助　イヤとんだ事で御座ります、トキニ先生今およしさんから承はりましたが、店へお寄りになつたとの事、定めし今度の一條を、お聞き及びで御座いませう。
玄石　いかにも主人御夫婦が、不幸の事は承はつた。
萬助　私共も肝心要の、主人を亡くし、大きに力を落して居ります。
玄石　なんで力を落すのだ、幸兵衛さんやお柳さんが、死んで仕舞へばこれぞといふ身寄もない龜甲屋、相續人の極まる迄は差詰あすこの身代は、支配人のお前の自由、又あの時の種を知つてる、美濃屋の夫婦、旨い時節が來たんぢやアないか、まア目出度いといふものだ。
茂二　ナニ目出度い事がありませう、頼みに思ふ龜甲屋の夫婦が死んで仕舞つては、自由にならぬ人の身代、夫に今度の一件で公邊沙汰にもなつて居れば、どうする事も出來やア仕ません、實に困つて居ますのさ。
玄石　其噺しも薄々聞いたが、其公邊沙汰も死人に口なし、末はこつちに八分の強味、押えたばつたと云ふものだ、其處で恰度此席に支配人の萬助さんも居るのが幸ひ、愚老が改め頼みがあるが、何と聞いては呉れまいか。
萬助　何を申すも御存じの通り取り込み中、併し外ならぬ先生のお頼み、どういふ事か伺ひませう。
玄石　外でもないが、千兩程用達つて貰ひたい。
萬助　なんと仰しやいます。（ト合方替つて）
玄石　さう驚く事はあるまい、幸兵衛夫婦が居さへすりやア、何日でも貰へる金だから、金庫にして氣を長く預け

て置いてもいゝ譯だが、其夫婦が死んでしまひ、跡には此方や美濃屋の夫婦が横領をする鼈甲屋、何萬といふ有金から地面地屋敷殘らず入れ、總勘定をした日には若干貰つても宜いんだが、其所を云はずにタッタ千兩、是は器用に呉れざアなるめえ。

茂二　先生、イヤ岩村さん夫りやア些と虫がよからう、以前の事をまだ恩にお着せなさるかは知らないが、三年前に旅へ行くから、根ッきり葉ッきり縁切りと、名前をつけて五百兩と云ふ金子を手切れに貸して上げましたを、ヨモヤ忘れはなさいますまい。

玄石　いかにも夫は受取つた、夫だから三年越し約束通り旅を廻り、綺麗になくして歸つて來たのよ。

茂二　夫ぢやア約束を反古にして、モウ千兩ねだる氣かね。

玄石　まア、そんな物さ。

よし　ホンニ呆れ返つた岩村さん、酉の町で熊手でも賣買ひをしやアしまいし、吹ッかけが大束ぢやアありませんか。

萬助　モシ玄石さん、夫は以前の事もあるから、滿更素手ぢやア歸しませんが、チト切出しの桁が大きう御座いませう、まア私が計らつて夫相當のお療治代を上げますから、今夜夫で久し振りに何處ぞで遊んでおいでなさいまし。

玄石　御深切は有難えが、先生ごかしで煽て上げ端た金で追つ拂はうとは、圖々しいにも程があらア。コレ能く聞けよ。

ト合方きつぱりとなり、

三年振りで旅から歸り、俺が何も知らぬと思ひ、よい加減に馬鹿にするな、三十年來鼈甲屋の夫婦に連れて手前達は、身分不相應な眞似をして、樂に月日を送つたのは誰の庇護だと思ふのだ、此玄石が先代の主人の病氣へ附け込んで、祕術の鍼を灸所へ打ち、離れた仕事をしたればこそ、變死と知れずに事が濟み、二度目の入夫で幸兵衞が、お柳と添つて長の年月アノ鼈甲屋の跡へ直つて旦那樣、夫に連なる媒酌人の、美濃屋茂二作萬助も、祕密を知つた加擔人だ、何を云はうと云ふ目が出て、ふざけた眞似の仕放題、夫も時節が巡つて來て、死んだ主人の落胤、捨てた心算の其伜が、成人をして幸兵衞や、お柳を殺した過ちを名乘つて出ての吟味沙汰、所へ愚老が訴へ出て、何も彼も打ちまけりやア、訴人の褒で玄石の罪はいくらか輕くなり、其上家督相續は親の敵の幸兵衞を

討つた褒美で赦免となり、長次とやらが龜甲屋の、跡へ直るは知れたこと、夫を云はれぬ口止めなら、コリヤ千兩はやすい物だ、サア三人して受合つて金を器用に借りて呉れ、但しは惡事を訴へようか、二ツに一ツの返事をしろ。

トきつと詰め寄る、萬助茂二作はじつと思案する、此以前より平舞臺下手より、緣日商人の手先二人、案内して定廻り同心吉田駒次郎、手先三人附いて出て、木蔭に立ち聞き居て、此時、

吉田　ソレ、踏ん込め。（ト指圖する）

手先　御用だ、神妙にしろ。

ト二重へ躍り入る、玄石は素早く燭臺の灯りを吹つ消す、萬助茂二作は庭へ下りる、手先も續いて下りて兩人を捕へる、およしは二重にウロ／＼する玄石は壁へピツタリ附いて様子を窺ふ、是より暗がりの立廻り、玄石、襖を開けて奥へ逃げ込む、およしは二重にて組敷かれる、此模様にて、　道具廻る

本舞臺平舞臺朱塗りの玉垣、同じく鳥居、此中に本社の書割り、上の方に鰻屋の裏手を見せ、總て稲荷町廣徳寺稲荷社前の體、早き大拍子の鳴物にて道具止る。

ト上手鰻屋の裏口より、鰻の空笊を澤山投げる。其中を手先は大勢是を拂ひ退けながら出て取り巻く、雨戸を蹴開いて、鰻庖丁を持つて荒れ廻る玄石を捕へんと手先四人は組附いたまゝ出て、捕物の立廻りよろしくトヾ玄石を組み伏せ、繩に掛ける。上手の屋體より萬助茂二作およし繩に掛り手先三人に引き立てられ、同心吉田附き添ひ出る。

吉田　玄石は御用辨になつたか。

手先　ヘイ、此通りで御座います。

玄石　いよ／＼年貢の納め時か、斯うなつちやア何も斯も惡事の次第を申し立て、長次を助け龜甲屋の、跡目にするが罪亡しだ。

吉田　ム、、其通り申し立てろ。

玄石　お掛り様、お引き下さい。

ト惡びれぬこなしにて、先きに立つ。萬助初め三人は萎々と附いて行く模様よろしく　幕

指物師名人長次（終り）

『名人長次』は三遊亭圓朝の作つた人情噺を脚色したものであることは言ふまでもないが、その圓朝が此噺を作るに佛國文豪モウパッサンの小說『親殺し』(Le Parricide)によつたのであることは、未だ廣く知られてゐない。今の處明確に知る由もないが、なんでも、横濱のある稅關吏に『親殺し』の梗概を聞いたので『牡丹燈籠』を支那小說によつて創作的に綴り『鹽原多助』を僅少の傳說によつて創作した才人だから、忽ちにこれだけの飜作を完成したものであらう。ちやうど餘白ができたので、友人から聞くがまゝに書き添へておく。典據となつた原作『親殺し』は、邦譯のモウパッサン全集の中にあるから、對照して讀む便宜も多い。

新古演劇
十種之内

羽衣（はごろも）

常磐津連中
長唄囃子連中

中幕に相勤申候



新古演劇十種之内　羽衣（壹幕）

三保の浦濱邊の場

役名――天津乙女。漁師伯了。漁師磯松。同浪八。濱の子辰松。同入松。同三太郎。同伊佐吉。

常磐津連中
長唄囃子連中

本舞臺一面の平舞臺、後ろ富士山を見たる銀張りの浪の遠見、裾通り松原の切出し舞臺、眞中に莫大なる松の木、上手に三保明神の鳥居より祠を見たる切出しの中遠見、松の枝には誂への羽衣が掛かりあり上の方に長唄はやし連中の雛壇、下の方に常磐津連中の淨瑠璃臺、總て駿州三保の松原浪打ち際の體、一聲、浪の音にて幕明く。

ト前弾き、打ち合せあつて、長唄になる。

長唄へ春の海原氣も晴れ渡り、眺め吉野の花より勝る、富士の高嶺に積る雪。

ト合方になり、浪の音をあしらひ、向ふより漁師伯了、着附小袴釣竿を持ち出る、あとより漁師磯松、浪八倶に袖の蓑附、腰簑脚絆にて、櫂を持つて出て花道へ止る。

へ昇る旭の光りを受けて、解けて流れて流れて解けて、甚方村里乙女子の、化粧駿河の砂道末は汐路の浦見潟、釣らせて歸り行く船を、靜けき浪に三保の浦、

ト三人花道にて振り有つて、舞臺へ來て、

伯了　コレ二人の衆、濱から上がると此方の方で、堪らぬ香ひがした故に、うか／＼歩いて來たけれど、何ぞ此方衆は見かけたかナ。

磯松　こなたが先きへ嗅ぎつけて、此方へ來いと言はれたから、

浪八　一緒に付いて來た我々、さつぱり様子が分らぬ位ゐぢや。

伯了　だん／＼此方へ近付く程、香ひが高くなつて來たぞ。

ト磯松、浪八は四方を嗅ぎ廻つて、

磯松　成程、是はいゝ香ひだ。

浪八　一體どこから來る風だらう。

ト此中伯了松の枝の羽衣を見附けて、
伯了　ヤア見附けた〳〵。アノ松に掛かつた綺麗な物、大方あれに違ひない。
ト兩人も見て、
磯松　さうだ〳〵、ツイに見馴れぬ代物だが、一體あれは何であらう。
浪八　庄屋殿の娘ッ子でも、あんな綺麗な着物はあるまい。
伯了　まづ俺の鑑定では、此日本の物ではあるまい。
磯松　ナニ、日本の、
兩人　物ではないとは。
伯了　大方何處ぞで難風に會つて、流された唐人が陸を見附けて爰へ上り、其嬉しさの祝ひ酒で。
へ夫唐人の酒盛りに、ぐでんになりし喜見城機嫌上戸の浮かれ立ち、引つくり返す酒道具、浴びた唐女がヒラヒラを乾した所へ俺達の、姿が見えたに驚いて、隠れたに違ひなからう。
磯松　是はこなたの考へ通りだ。
浪八　併しかうして置いたなら、濱の子供の悪戯道具だ。
伯了　まア何にしろ見附けた役徳、持つて歸つて庄屋殿や、村役衆に見せると仕よう。

兩人　夫がいゝ〳〵。
へ松も昔の友なりと、寄つて緑のこぼれ葉や、
ト三人松の木の側へ來て、羽衣を取らうとする、此時上手の奥にて、
乙女　ノウ〳〵、暫し待つてたべ。
三人　なんと。
ト是にて知らせにつき、下手の常磐津連中を出す。
常磐津へ松風の音なふ聲も面はゆく、宮居の蔭を立ち出づる姿妙なる天乙女、見る目で馴れぬ浦人が、鹽焼く濱の朝烟り、
ト上手の奥より天津乙女、振袖好みの拵へにて出て來る、三人は悄りして附け廻りて、下手の方へ來る。
乙女　其衣こそは羽衣とて、下界の人の物ならず、必ず粗忽したまふナ。
常磐津へイザ此方へと求むれば、
ト乙女松の方へ行かうとするを、伯了支へて、
伯了　其大事な羽衣とやらを、往來繁き此濱邊へ、
磯松　ナゼ置き去りにして、行かつしやつた。
乙女　サア夫はナ。
常磐津へ雲井に遊ぶ天人の、正しき身には神掛けて、誠の

外は岩濤の寄するを厭ひ返る浪、
長唄へ漣立てる其様子、浦人はしたり顔、
ト乙女は羽衣の側へ行かうとするを、三人はやるまいと邪魔なする振りあつて、乙女は困るこなし、三人は顔見合して、
伯了　イヤ天人と云ふものは、檀那寺の欄間で見たが、正物は又格別。
磯松　此羽衣を返さぬは、天人殿も此儘に、
浜八　此浦へ引き止めて、幸ひ我等は獨身者、
伯了　三人の中誰なりと、氣に入つたのと女夫にならぬか。
乙女　ヤア潟らはしき其言の葉、戯言は取り置いて、其羽衣を返してたべ。
伯了　イヤ羽衣は、
三人　返さぬ／＼。
乙女　情なの人々や、其羽衣の戻らずば、我が天界の道も絶え、
常磐津へ今はさながら天人も羽なき鳥の放し飼、
長唄へ上らんとすれど翅なく、
常磐津へ地に又住めば下界なり、
長唄へ振りさけ見れば翠濃き浦曲彩る松の枝、
常磐津へ掛けしや袖の濡れ羽鳥、上の空行く雁がねも、
長唄へ千鳥群立つ諸羽がひ、パツト散り行く沖津濤、
常磐津へ立つゝ翻るか春風の、送るな浪の清さかえ、
長唄へア、羨まし行方かな、
常磐津へ妾は夫に引き換へて天津空へも行く事のならぬ憂き身の濡れたり。
ト乙女、ドキ模様の振り宜しくあつて納まる。三人は憫れだといふ思入あつて、
伯了　ナント二人の衆、あはれな事ぢやあるまいか。
磯松　聞けば聞く程尤も道理、
浜八　誰でも故郷を慕ふは情、
伯了　此羽衣は此儘に、天人殿へ返して進ぜう。
乙女　ナニ衣を戻してたまはるとか。
伯了　其代りには天上で、此方の仲間が舞ふと聞く、舞を一さし今爰で、
磯松　孫子の代迄噺しぐさに、
浜八　我等に見せて下されぬか。
乙女　夫は最易きこと、さらば其羽衣を身につけて、一トさし奏で申すべし。
伯了　そんなら早く羽衣を。

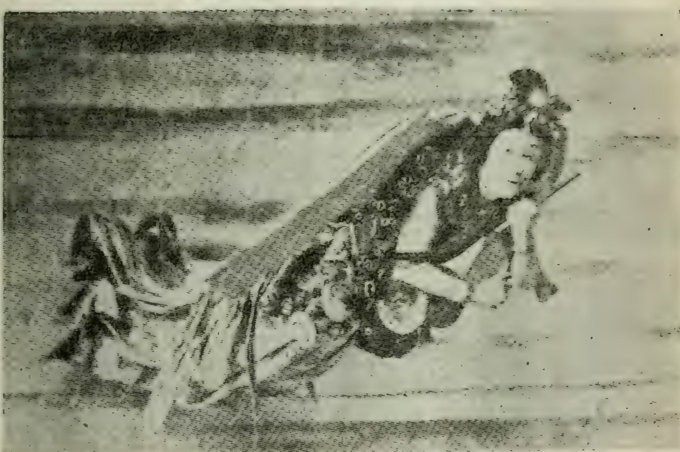
磯松　肩に引つかけ天女の舞を、
浪八　サア〳〵是で、
三人　見せたり〳〵。
乙女　あれなる社の拜殿にて、支度を急ぎ申すべし。
長唄へイザヤ奏でん支度ぞと、打ち連れてこそ入りにけり。
ト乙女は羽衣を受取り、三人附いて上手の奥へはひる。
長唄へ三保の浦邊に住む里の子がわやく盛りに皆汐風に、
吹きさらされて色黑顔に、富士を見てさへ雪と墨、
常磐津へ鷺が青田でどぜうを見れば、磯の淺瀬の魚せゝり
潜る深海は鮑の獲物、
長唄へ岩の漣寄せては返す、砂地汀を足まかせ、
常磐津へあたりキヨロ〳〵來りける、
ト向ふより、浦の子供辰松、入松、三太郎、伊佐吉の
四人、着流し提げ籠に貝を入れしを持ち出て花道にて
振りあつて舞臺へ來る。是と同時に上手より伯了、磯
松、浪八出て來て、
伯了　ヤア辰松に入松、三太郎に伊佐吉か。
磯松　大きな貝を拾つて來たナ。
浪八　其籠の中は、何と何だ。
辰松　今日は日和がよかつたから、

入松　こんなに澤山拾つて來た。
長唄へ東風吹かば心筑紫の果迄も、梅の花貝魁に、咲く
櫻貝都貝、野に千草貝錦貝、
常磐津へ友雀貝呼び連れて憎くまれ口の烏貝、蛤貝は海中
に入りし雀か蜆貝、浦打貝に汐貝も月の夕の砧貝、
長唄へはずむ拍子のますほ貝、
ト拍子の打ち合せあつて、
常磐津へ拾ひ集めて貝づくし、
ト四人振りあつて納まる。
伯了　其中に女夫貝はなかつたか。
三太　そんな物はありやあしねえ。
磯松　其女夫貝は爰にある。
ト懐ろより貝を出す。
浪八　俺も一ツ持つて居るが、欲しい者は、
磯松　取つたら遣ろナ。
兩人　取つたら遣ろナ。
ト早き合方になり、子供四人は兩人に追ひ縋ろ心にて、
舞臺を廻り、トヾ辰松、入松貝を取つて、
長唄へ磯に群れ飛ぶ千鳥貝、翅交していそぎ行く。
ト子供四人貝を持つて上手へはひる。伯了思入あつて、

伯了　支度が大分手間取れるだ、モウ大夫能い時分だ。
ト上手に向ひ、
サアノ丶、支度がよくば、
三人　天女の舞を。
ト上手の奥にて、
乙女　心得申して候。
長唄へ東遊びの雅なる、是ぞ舞樂の始めなるらん。
常磐津へ乙女は衣を着なしつゝ霓裳羽衣の舞の袖、（ト乙女羽衣を着、羯鼓をつけ出る）
長唄へ春霞たなびきにけり久方の、月の桂の花や咲く。
ト舞の振りあつて、
長唄へ面白や、
常磐津へ天よりは雲も妙なり三保の原、月清見潟富士の雪、
いづれや春の天津空、
ト羯鼓を使ひ、
常磐津へいざや歸らん、さらばやと、乙女の姿常磐木の、
蔭を巡りて舞の曲、
長唄へ暫し止めん羽衣の艶なる袖に浦人の、縋る功なき三保の原、
ト此中乙女は松の廻りを廻り、正面にてだん／＼宙へ上る心にて、身體を日覆ひへ引き上げる。三人は下より引き止める振りの中に松の木の上迄上る、三人は是を見上げながら下の方へ行き身體を消す。是にて松の木、三保の社鳥居をセリ込み、松は梢だけ殘り、舞臺は一面に夜霧をくり出し、長唄雛段常磐津の淨瑠璃臺の蹴込みは打ち返し、霞になる。
常磐津へ引くを見れば浮島の、原過ぎ行きて足高や
長唄へ富士の頂き白妙の化粧床しき夕霞、
常磐津へ雲井の調べ花降りて、
長唄へ松に其名を、
長唄へ殘すらん。
ト乙女日覆ひの上にて、宙乘りのまゝ、振事あつて、
音樂打ち合せの合方にて、

幕

羽衣（終り）



浄瑠璃

闇梅百物語



闇梅百物語（壹幕）

大廣闇百物語の場
葛西領源兵衞堀の場
裏田圃雪景色の場
墓野原闇星路の場
御殿山花盛りの場
姫路城内天守の場

常磐津連中
清元連中
大薩摩連中

役名──お小姓白梅。奥女中松の戸。同杉浦。腰元一重。同双葉。同若菜。同吉野。狸。川童傘の一本足。大骸骨。小骸骨。寒念佛の骨。雪女郎白妙。新造初霜。禿小雪。同みぞれ。讀賣り音八。同菊松。奴松平。同竹吉。同梅八　同作内。茶道貝齋。踊りの師匠水木歌菊。木の下家の侍八人
宮本無三四正則。小坂部姫の怪。

本舞臺正面常足の上段、黒框、金地、花の丸の襖、平舞臺上下共同じ襖、日覆より同じ模様の大欄間を下ろし、上の方は出入り口、下の方は常磐津連中の淨瑠璃臺、舞臺眞中に鯰形の一本燈心の燈臺、總て大名屋敷大廣間、春興百物語りの飾り附け、合方にて幕明く。

ト直ぐに常磐津の淨瑠璃になる。

常磐津〽千疊の廣間を照らす燈臺も、百物語り百筋を吹き消し殘り一ト筋の、灯しの影ぞ幽かなる

ト置き淨瑠璃の止り、向ふ揚幕の中にて、

局二人　サア〳〵お出でなさりませ。

〽あなたの杉戸押し開けて、隱す心のお小姓を、無理に連れ込む奥女中、

ト合方になり、向ふ揚幕の杉戸を開け、奥女中松の戸、同杉浦振袖なりのお小姓、白梅の兩手を捕へ、無理に連れ出して來て、

松の　サア〳〵白梅さん、お前で拾度百番目、

杉浦　簾に當つた身の不肖、灯りを消してお出でなさんせ。

白梅　イエ／＼夫はあなた方が、無理に私に引かした簾、灯りを消すのは不氣味故、どうぞ御免下さりませ。

松の　イエ／＼さうは成りませぬ。

杉浦　約束なれば仕方がない、私達も二人して。

松の　爰迄來たのは朋輩の、謂はゞ誼みと申すもの。

杉浦　是で御免を、

兩人　蒙ります。

白梅　アレ夫では私が困ります。

松の　人の困るは何年でも、

杉浦　きつと耐えて、

兩人　上げるわいナア。

〽人の怖いは何のその見る目可笑しく面白く、逃げるを夫と押し止めるを、存じませぬと突き退けて、二人は次ぎへ入り口の襖びつしやり建て切つたり。

ト文句の通り、白梅二人へ縋るを、突き退けて、上手襖の中へはひる。

白梅　ア、申しお二人樣、ア、モウ行つたさうな。

トぢつと思入。

〽跡には一人白梅が、斯る手術に陷りし身の口惜しさを喞ち言。

テモ意地の悪いお二人樣、怖がる者を面白さうに、此身一人をこの所へ。

〽恨んで見ても灯火を、消さで叶はぬ胸のやみ、

トハ云ふものゝ何時迄も、爰に一人で居られもせず、どうでも消さねばならぬかいナア。

〽怖く思へば爪立つる足の運びも若しやはと、震えながらに差し寄つて、吹き消す間さへアラ不思議や、風生腥く燈火は、いづくともなく、

ト白梅文句の中怖きこなしいろ／＼有て、トゞ燈火を消すと同時に、大どろ／＼になる、

アレ――。

ト俯伏せになると、白梅の身體を後ろへ引いて取り、道具居所替りになる。

本舞臺上段の欄間を飛ばし、正面及び左右の襖を引いて取ると、後ろは流れ川に田圃を見たる夜るの遠見と替り、上下は杉の木立ちの書割りと替り、下手の常磐津連中を消して、上手へ清元連中の淨瑠璃臺を出し、ドロ／＼打ち上げて道具納まる。

〽五月雨のショボ／＼降る夜は月も傘をめしたの川童と見なし、狸は欲の深蛇の目、さすが開かぬ氣河太郎、川から這ひ出しいどみ合ひ、
ト葛西念佛の合方になり、上手の横より二重の上へ狸、鼓模様の着附、緋の下り、尻はし折りにて蛇の目傘た傾げて出る。後より川童縫ひぐるみ、ちん／＼い緋の下りにて追つかけて出て来て、舞臺眞中にてきつと見得、
狸　エヽしッこい河太郎、俺が拾つた此傘をなんで手めえに渡すものだ。
河童　どつこいさうは云はせねえ、此川端へ流れ寄つたを、見附け出したは俺が先き、なんで割りを喰ふものだ。
狸　エヽしやら臭えよめえ言、天窓の皿の割れねえ中、傘を渡して消えてなくなれ。
河童　太平樂の腹鼓、ポン／＼云ふにやア及ばねえ、キリキリ傘を渡してしまへ。
狸　腕づくなれば、渡してやらう。
河童　なにを。
ト兩人鳴物にて、一寸立廻り、トヾ傘を後ろの流れの中へ打ち込む、ドロ／＼になり、兩人は其所へ氣絶する。

〽傘の蛇の目に首が出て、手が出て足がニヨッキリと、野中の杉の一本立ち、
ト離業の鳴物をあしらひ、上手より傘の一本足一升徳利と扇を持ち、一本歯の足駄を穿き出て来て、舞臺眞中に立ち身。
〽扨々々々扨もニヨッキリ目に立つ物は舟の帆柱、九輪の塔よ、立てば芍藥坐れば牡丹、歩く姿は蟹ならぬ一本足の横ッ飛び、撓て松が枝の磯馴れて、振りもよし芦濱花潟、川童狸の濱相撲、
ト一本足の振りよろしくあつて、トヾ河童と狸に角力を取れといふこなし、兩人立上り、仕切る事よろしく、
〽片や腹鼓、こなた皿天窓、双方見合つてせくまい／＼、ハッケよいしよも川育ちに引き手は川童足ならひ、狸は得手の腹櫓ハッケ殘つた勝負なし、
ト狸河童角力の振り、一本足は扇を擴げて行司の振りあつて納まる。
〽浮かれ興じて、
ト三人よろしく上下へはひる。此道具替る。
本舞臺元の大廣間、上段の道具へ戻り、舞臺の眞中

に以前の白梅氣絶したる心にて俯伏せになつてゐる
灯火の消えた燈臺も其儘ある、上手の清元を消し、
下手へ常磐津を出し、道具納まる。
宮神樂へ消えれば元の奥御殿、様子を案じて女中連れ
ト合方になり、向ふ杉戸を開け、以前の松の戸、杉浦
先きに立ち、一重、双葉、宮城、吉野、いづれも腰元
にて暗きこなしにて、探り足にて出て來て、花道へ止
り。

松の戸　アレ杉浦さん、白梅さんは燈火を消して行つた限り歸らぬは、どうしたことで御座んせう。

杉浦　大方私共が逃げたのに、物をおとして、廣間を抜け出し、何處ぞに隠れて居りませう。

松の戸　夫なれば未だよけれど、モシ氣絶でもされて居ては、夫こそお奥の大事といふもの。

一重　モシ奥御家老の三太夫様の、お耳に入つたら夫こそ大變。

双葉　私共の慰みから、そんな事でもありましては、

宮城　お局様の御迷惑、

吉野　なんとした物で、

四人　御座りませう。

松の戸　夫故私も心配して、皆さんの手を借りて、様子を見には參りましたが、

杉浦　此眞暗なお廣間は無氣味な事では御座りませぬか。

松の戸　シタが云ひ出しは杉浦さん、貴方お先きへお出で遊ばせ。

杉浦　どういたしまして、私は大の臆病、お年役にあなたから。

松の戸　其御遠慮には及びませぬ、どうぞお先きへ。

杉浦　ナニ貴方様がお先きへ立つが、御順當で御座ります。

ト兩人爭ふを、

一重　そんな事を仰しやつては、とんと果てしが御座りませぬ。

双葉　みんな一緒に手を引いて、

宮城　參らうでは御座りませぬか。

松の　成程夫が宜しう御座りませう。

〽多勢を頼み一同が、探り寄つたる上段前、

ト捨ゼリフにて怖きこなし、一同手を繋いで舞臺へ來
て白梅を探り當て、

〽氣絶の體を見て悔り、

杉浦　爰に氣絶をしてゐるは、白梅さんに違ひない。

松の　白梅さんが、ドレ、何處に。
ト探り寄つて、
コリヤ飛んだ事になりました。皆さん、呼び生けて下さりませ。
皆々　白梅さん、白梅さんいのう。
〽呼び生けられて心付き、顔を上げればノッペラボウ、
ト皆々寄つて呼び生ける、風の音の樣な薄きドロ〳〵になり、白梅心附きしこなしにて、顔を上げれば、髪を振り亂し居るノッペラボウの面を冠り居る、皆々驚きて。
皆々　アレ――。
〽面の眼も合はすふためきて裾を踏むやら辷るやら、後をも見ずに逃げて行く。
ト皆々悄りして下手へ逃げ込む、是にて此道具へ道具幕を振り冠せ、白梅の身體だけ殘す。道具幕は雪持ちの廓を見たる裏田圃の書割り、下手の常磐津を消して上手へ清元連中を出し通り神樂の鳴物にて、白梅引き抜き、雪女郎の拵へに替り、眞中へ立身。
〽雪見月人の心をおのづから、身に染む風のしつぽりと詰めする身はあと白梅の仇に蕾んで鳥籠の山、其梅ケ香を慕ひ來る、鳥もすれなる囀こそ、似たる禿の雪こかし、
ト傾城の振りの中、能き時分、下手より禿小雪、みぞれの二人、大きな雪轉がしを押して出て、眞中へ來る。
〽オ、冷たやと凍る手に、やう〳〵側へ近寄れば、
〽巡る巴の雪吹雪、サッと一ト吹き風に連れ、振袖姿の突しく、
ト雪轉がし中より割れて、新造初糸、振袖姿にて出る。
〽春待つ花ひて年の中、突いて見たさの追羽子に風は邪魔して憎らしい、ナゼに出雲の神さんが、叱らしやんせぬ風の神、好かぬ神とて徒らに、止んでくれたら二人して、嬉しかろもの辛氣らし。
ト新造羽子板を遣ひ振り、是に禿二人からんで、よろしく納まる。
〽ホンニ子供は罪なうて、苦界に住めば上品の紫雲の蓮臺の揚屋入り、支度も雪の身仕舞に、映す後光の末寶、圍ひ眞如の月影も照り添ふ襟や阿彌陀さし、連れる禿に新造を寄せて如來の三尊は、尊くやと思ふ立ちすがた。
ト傾城振りあつて、トゞ傾城眞中に、禿左右に立ち、

三途の彌陀の見得、新造は下手より拜む形ちにて納まる。
〽三途の彌陀と三つのそんじよそれ深く通へば通ふ程欺して取らん御誓願化かす手管も口先きの、舌の劍に尾は要らぬ、お職狐の花魁と呼ばれて情夫の其外は、嘘で固めてなくなみだ〳〵。
ト手おどり模様あつて、
〽見る目樂しき極樂も、心は辛き阿鼻地獄、沈む苦界ぞ。
ト四人よろしくあつて、通り神樂笛の音を冠せ、下手へはひる、知らせにつき道具幕を落す。
本舞臺常足の二重、正面上下舞臺前共一面に黑き幕にて包み、柳の木一本朦朧と立つ。下手に常磐津連中居並び、風の音禪の勤めの鳴物にて道具納まる。
ト右の鳴物にて、二重の下手より寒念佛の修行者、坊主かつら衣形り、提灯を持ち、鉦を叩きながら出て來て、
寒念佛　ア、寒い〳〵、いかに鼻の下クウ殿の建立とは云ひながら、此寒さでは凌げない、早く歸つてお仕着せの白馬でも、吞む阿彌陀佛々々。

ト鉦を叩きながら上手へはひる。
宮薗節〽秋風の吹くにつけても哀れ知る、穴目の芒朦朧と、宙宇に迷ふ其魂魄、
ト風の樣などろ〳〵に一つ鉦を冠せ、黑幕の中より骸骨現れる。
〽自體我等は都の生れ、色にそやされ、こんなに洒落て仕舞つた、洒落の遊びに出る時は、樂屋洗ひ粉糠袋、磨く手足の爪先きや、こすり〳〵て原皮のむけてどうやら灰水拔けのしたと思へば骨計り、シヤレ過ぎた身を悲しめば、
〽申し〳〵と蟲の音に、招く手さへも糸芒草ふみ分けて小骸骨。
ト後ろの黑幕の前へ、小骸骨塔婆の先きに白張りの提灯を下げしを持ち現はれる、大骸骨は是を見て、
〽かよわき屍見るよりも、其方は誰ぞと尋ぬれば、
ト大骸骨物を聞くこなし、
〽俺は娑婆にて子供のくせに、洒落た眞似して欄干渡り、橋から川へどんぶりこと落ツこツちた、落ちて水死の其果てが賽の川原の小骸骨、
ト振りある。

へヤレ此洒落者頼もしや、しやれに身體に報いも罪も、放れ〲の花野原、

ト骸骨双方共仕掛けにてバラ〲になる事あつて、トド元の通りになる、此止り時の鐘を打ち込む。

へ早明け近き鐘の音に、風も無常と吹き送り、形ちは消えて、

ト知らせにつき黒幕を引き上げる。

本舞臺常足の二重、後ろ花盛りの山を見たる書割の中遠見、踊りの衣裳、葛籠と毛氈を掛けし床几を五六脚置き、舞臺の骸骨は引き抜き和し頭巾花美なる着附け、かるさんの讀賣りの親子に變り、讀み本を持つて花道よき所へ行つて止る、上手へ清元連中を出して、常磐津連中と掛け合ひになり、大小おろしの鳴物にて道具納まる。

清元へ怪談も百鬼夜行の化け競べ、人の噂に菊の名の親子が走り讀賣りは上下二枚で事明細分かる不思議を皆寄つて御覽あれとぞしやべりける。

ト兩人花道にて振りあつて舞臺へ來る、此時上手の奥より以前の奥女中松の戸、杉浦、腰元一重、双葉、宮城、吉野、茶道眞齋、踊りの師匠水木歌菊出て、床几に腰を掛け、

眞齋　百鬼夜行の讀賣りとは珍らしい。

歌菊　どんな事が書いてあるか、お女中方へおよくよみに、

松の　爰で聞かして、

女皆　貰ひませう。

音八　へイ〲畏りました、百物語りは一家相傳、

菊松　格別今日は面白く、御覽に入れるで御座りませう。

眞齋　サア〲早く、やつたり〲。

音八　さらば御免を蒙つて。

ト立ち上がる。

常磐津へ是は先き〲評判の百鬼夜行の春の興、抑も怪物も昔とは變る世界に品を代へ大入道が關取りの眞似して踊る甚句節。

へ角力にや敗けても酒さへ飲めば、晩にや私が化けてやる。アリヤ〲〲〲モ、ンガア。

音八大格子の浴衣をはおり、團子提灯を逆さに冠り、大入道の形にて甚句を踊る。

清元へチヨロ〲歩きの一ツ目が、出した茶臺を一寸投げて、甘茶でかつぼれやつてくりよ。

常磐津へ沖の暗いのにお化けが見える、アレハ人影海坊主、
荒浪立つたり汐風吹いたり、
清元へ妄念ぢや魂魄ぢや、魄は此土に止まつて、やたらに
怨んでチョイと化けた。
常磐津へ化けたエ、化けた魔物にブマはない。
清元へおせゝのこれわいせの、このなんでもせエ。
トかつぽれよろしくあつて納まる。
常磐津へ變つた娘のろくろ首、春の日永にどこ迄延びる。
清元へ夏至迄延びる、暮れて閨近き短か夜に、
常磐津へ片輪車に京の町、
清元へ廻る仁和寺鼎が踊る、
常磐津へ冠る鐵鍋重なる罪の、
清元へ鬼に能く似た角盥、
常磐津へをどる碁盤の四ツ足に、
清元へ猫は二タ俣三毛揃ひ、
常磐津へさつさ何ンでもやりやしやんせ。
清元へ化けも、
双方へのや。
ト眞齋歌菊にて衣裳葛籠を使ひ、ろくろ首は三味線、鼎は蜜柑籠、つくま鍋は道成寺の振り出しの笠、角盥は双紙洗ひの盥、片輪車は琵琶、碁盤は經机など踊りの小道具を持ち出し、百鬼夜行の化け物の形ちの振りあつて納まる。此止り上下より奴四人出て、讀賣り兩人を取り巻く。是にて眞齋、歌菊奥女中こし元は驚いて上手へ逃げ込む。
松平　最前より見る所、
竹六　怪しい素振りの讀み賣り親子、
梅八　其所一寸も、
作内　動くまいぞ。
音八　それ知られては、
常磐津へ通力自在忽ちに、姿は消えて、
ト雷序の鳴物、ドロ〳〵を冠せ、音八は狐のこなしにて飛び去りにて消える。
清元へ續いて逃げるを遁がさじと、右と左りに追つ取り巻き、
ト菊松も逃げようとするを、奴四人は上下より取り巻いて、
松平　どつこい、おのれは、
奴四人　逃がさぬぞ。
ト菊松狐のこなしにて、

菊松　斯くなる上は我が本性、
奴四人　ナニを、
清元へ頭巾を脱げば愛らしき、衞士の姿の白狐、
ト一寸立ち廻り、和し頭巾を脱ぐと、糸たれのボットかつら、寶珠の模樣の切髮にぶつ返りになる。
常磐津へおらが親父は源九郎狐、見樣見眞似に此庭へ奴仲間を引き入れ／＼。
ト奴四人化かされ樣の所作立てあつて、トゞ奴松平の肩へ乘り見得、三人は是を取り卷く。
清元へ怪し。
マタへ恐ろし。
ト引張りの見得、雷序大どろ／＼にて、天主の狹間を書き割りし道具幕を引く、管絃の鳴物にてツナギ、能き程に上下より袴、股立、たすきはち卷きの侍八人、鎗を持つて出て來り、幕の外へ並みよく並び、
侍一　各々方にはお役目御苦勞。
侍二　當城の天主閣に物の怪ありと云ひ傳へ、
侍三　永年登る者なきを、
侍四　宮本無三四といへる武邊者、
侍五　客待遇にて逗留せしが、
侍六　天主へ登り化生の者の、
侍七　正體篤と見定めんと、
侍八　願ひを上げしにお許し蒙り、
侍一　今宵夜中の子の刻に、
侍二　天主へ登る其爲に、我々共は警固の役目、
侍三　イヤハヤ迷惑至極で御座る。
侍四　成るべく遠き場所を選み、
侍五　夜の明けるのを相待ち申さう。
侍六　危ふき所へ近寄らぬが、
侍七　即ち君子の道で御座らう。
侍八　然らば其氣で、
侍八人　固めませう。
ト右の鳴物になり、八人は上下へ別れてはひる、誂らせにつき、道具幕を切つて落す。
本舞臺高足の二重、白壁の蹴込み、瓦家根瓦庇、下の方狹間の心にて、同じく瓦庇、中足の屋體、白壁の蹴込み、是に大薩摩連中居並び、眞中の二重は一面に古びたる御簾を掛け、此前に古き八足臺、此上に御鏡と神酒徳利を置き、下手の奧に階子の上り

口を取り付け、總て姬路城内天主閣の體、風の音にて道具納まる。

ト直ぐに大薩摩になる。

〽君の許しを受け、妾に血氣の英勇士、宮本無三四正明は假りの主天守の樣子がんどうの光りに照らしニツコと笑ひ、

ト此文句よき時分に、階子の口より宮本無三四、着附けかるさん素網、大小、がん燈を持ち出て四方を見廻し、

無三　我れ武邊の修行に志し、諸國を巡り怪しと噂の物に出會へど、其正體は大方に年經る獸がなす業と、今迄試せし我が見聞、然るに當城天守閣に化生の者を神と崇め、其正體を見ずと聞く。武士の膽を鍊らんには此上もなき事共と、太守に願ひ登りしに、何の障化もあらざるは、臆病者の流言を誠となせし傳說なるか、猶も天守の隅々を、調べて浮說の根を斷ちくれん。

〽猶も天主の隅々を、糺さんものと破れ御簾の神前近く立ち寄りて、

ト文句の通り御簾の前へ來て、

フム……神前と覺しく僅かに形ちの殘りあるが、此所迄來つて何者にも、出會はぬこそ誠の浮說、是迄參りし證しとして此神前の瓶子の片々、持つて參つて君侯に披露いたさん、さうぢや／＼。

〽瓶子携へ下りんとする、後ろの方に聲あつて、

ト無三四瓶子の片々を取つて降りにかゝる。此時御簾の中にて、

小坂　不敵の若者、しばらく待て、其品携へ下りなば、立ちどころに冥罰受けん。

無三　なんと。

〽無三四はきつと見返りて、御簾取り退けんと立ち掛かれば、鳴動なして目くるめき、我にもあらで打ち伏したり、

ト無三四は御簾へ手を掛けようとするを、鳴物打ち上げ、大どろ／＼になり、二重眞中に悶絕する、

〽夫弓勢も幡磨潟、姬路の名にし大内へ仕へし女官小坂部を神に祭りし高樓の天守も古く荒れ果てゝ、登る者なき、五重目や、妖怪住みて震動は恐ろしくも亦物凄し。

〽しづ／＼出でゝ宮本を唯一と睨みと立ち掛かれば、

ト正面の御簾を上げ、小坂部姬の怪、十二單衣緋の袴、檜扇を持ち出で、無三四の傍へ寄る、無三四心づき、

〽此方もハッと心附き、刀引き拔き斬り附くれど、身體自由ならざれば彼方此方と空を打つ、無念と焦る其折りから、

ト無三四刀を拔き斬つて掛かれど身體自由にならぬこなし。トゞ小坂部は御簾の中へ身を隱す、無三四はドロドロにて、宜しくさいなまれるこなし、能き時分、以前の侍八人出て、御簾へ向かつて鎗を付ける。

〽近習の多人數登り來て、取り卷く助太刀敵し兼ね、後ろに破れし御簾の蔭、妖魔の姿ぞ恐ろしき。

ト能き頃正面の御簾を引きちぎる、と小坂部青隈逆立ちし髮の毛にて檜扇をかざし、畫面の見得、無三四刀をさし附ける、侍八人は海老折れになつて鎗を附ける、さらしの鳴物にて、

幕

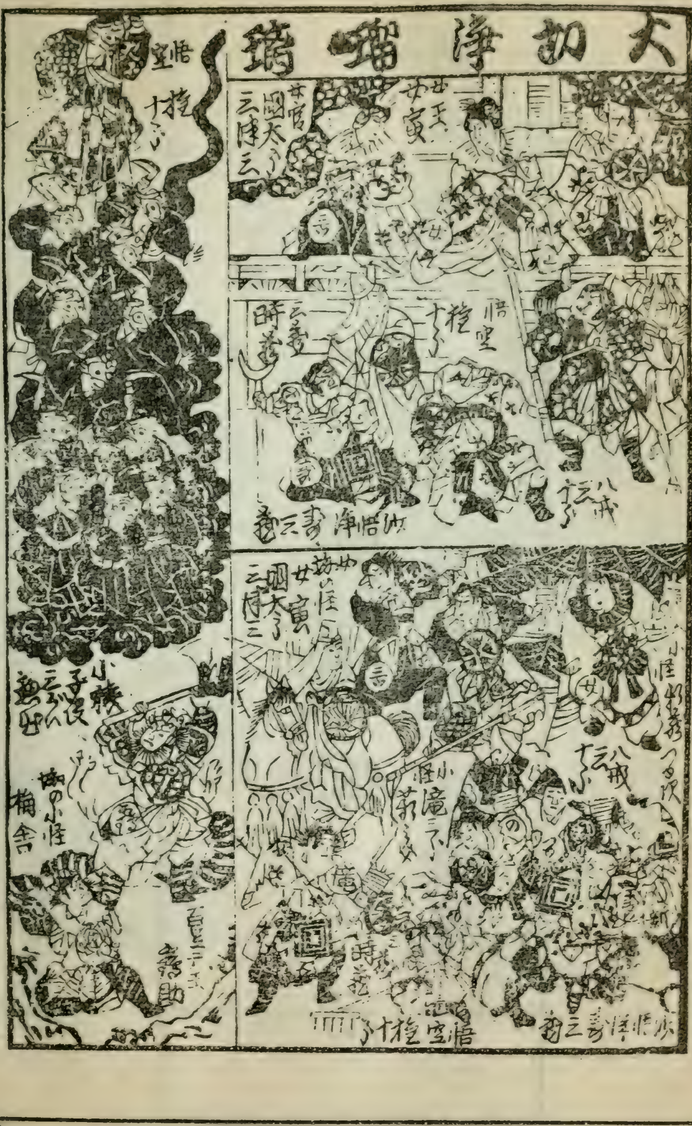
百物語（終り）



淨瑠璃

眞猿愛度開場に
通陽館の因を引て

通俗西遊記


大切浄瑠璃

通俗西遊記（三場）

西梁女國王宮の場
盤糸嶺機殿の場
百眼魔王岩窟の場

常磐津連中
竹本連中

役名──孫悟空。猪八戒。沙悟淨。百眼魔王。盤糸嶺の小怪、宮女小怪五人。西梁國女王 實ハ 盤糸嶺蜘蛛の精。宮女左官 實ハ 蜘蛛の精。宮女右官 實ハ 蜘蛛の精。悟空分身の小猿多勢。三藏法師。

本舞臺三間の間一面極彩色の唐館、眞中に石の階段、左右朱塗りの高欄附き、下手淨瑠璃臺の唐屋體。双方共前面に緞帳を下ろしてある。下の方に棕櫚の樹、館の欄間に迎陽館と記せし扁額、總て西梁國宮殿の體、後に屋體崩しになる誂へ、唐樂にて幕明く。

ト下手淨瑠璃臺の緞帳を巻き上げる。常磐津連中居並び、直ぐに淨瑠璃になる。

へ唐朝の王命受けて玄奘が、西天竺の靈山へ赴く旅も三藏の、經に望みも棧橋や、南贍部州跡になし、夜を日に次ぎて西遊記、

ト此止りセリの唐めいたる唄物になり、眞中に三藏法師、書面の拵へ、錫杖を持ちて立身、上手に八戒熊手を持ち下に居る。下手に沙悟淨同じく書面の拵へ、寶杖を持つて控へゐる。此形にてセリ出し、知らせにて止る。

へまだ春ながら山の端に、殘んの雪の去り兼ねて、積る里數も天竺へ凡そ十萬八千里、名も白妙に險岨なる山又山を傳はりて辿り附きたる一ケ城。

ト三人居直りの振りよろしく有て、

三藏　いかに兩僧、おこと等も佛法の正果を得んと此年月、我れに從ひ幾千の海山越えて西方へ赴く長の旅路、苦心の程も嘸かしと、三藏推察いたすぞよ。

八戒　コハ有難き御仰せ、曰ふ如く拙僧も佛の正果を得ん爲に、御弟子となつて長の年雨露霜雪に身を打たれ、あ

るとあらゆる難行も此身の罪障滅する爲。
沙悟　或る時は、田野に伏して妖怪の虎穴に入りて危ふくも命を遁れ今日迄、存命するも佛の導き。
沙悟　靉を踏まへ雲を越え絕所惡所の高山へ、登りては下り
三藏　夫につけても孫悟空、何故遲き事なるか。
八戒　通力自在を鼻に掛け、我が儘氣儘の弼馬溫。
沙悟　彼一人にて人數も揃へば、通り手形を驛官にて、引換への儀も整ふに、ハテ何故に遲刻なすか。
三藏　ト心遣ひのこなし、此時正面緞帳の中にて、
女王　客僧心急がれナ、緩々是に逗留あれ。
三人　なんと。
〽雲を彩る樓閣の帳卷き上げ鶯の初音も斯くや女王君、粉粧ならねど兩人の女官は客を待遇酒、肴携へ立ち出づれば、
ト東樂を冠せ、正面の緞帳を卷き上げ、中央に西梁國の女王唐裝束、白糸の苧環を持ち、異樣の床几へ掛け此左右に右官左官の女官、同じく唐衣裳にて赤畫の酒肴の道具を持つて立身、此文句の中女官は誂への臺を平舞臺へ持ち出し、酒肴を夫へ載せ、元の座へ直る。
三藏　コリヤ兩僧、目遣なして下に居らぬか。
八戒
沙悟　ハアー――。（ト下に居て目禮する、女王こなしあつて）
女王　斯ういふ事のある共か、昨夕閨の枕邊に建てし屏風に金色の光りを發し、姿見の鏡明らかに見し夢覺めて本意なくも、願ひの糸を繰り返し、待つ效あつて客人の最珍しき此御入來、能くも是へは參られしぞ。
左官　髮を下ろせしお姿に稀なお方に引き換へて、供なすお方はお二人とも、人間界とは思はれませぬ。
右官　異形な姿の其上に怖き眼で其所此所と、見廻したまふ恐ろしさ。
三藏　其不審な尤至極、容貌こそ此通り醜うは御座れ共心は至つて篤實にて、出家堅固の者なれば、必ず氣遣ひなさるゝナ。
女王　シテ御僧には何れより、此地へお越しなされしぞ。
左官　迚もの事に御在所を、
右官　お聞かせなされて、
兩人　下さりませ。
三藏　斯く申す拙僧が當所を過ぎる其由來、大概ながら語り申さん。
ト音樂の合方になり、

某拙僧は此國より遙か東へ隔たりし、南贍部州長安の城下關近き一山の、寺を預かる沙門にて、名を玄弉と申す者、唐の皇帝觀音の教へに由つて西方に大乘經のあるを知り、愚僧に命じて天竺の、大雷音寺へ至らしめ、佛を拜し三尊の法論經を求めよと、重き嚴命蒙りて、幾千萬の日を重ね、〽知らぬ國々通り行く、手形改め乞ふ爲に、是なる館へ參つたり、

ト一寸振りある。

八戒　又拙僧を其樣怪しみ給ふとあるなれば、素性を語り申さんか、

我等は遠き韃靼の福梁山に年を經し獸ながら長の名を酉の町ではなけれども熊手を得手に女なら何んでも御座れ色好み、一つに閨の肉蒲團温かいのも無理ならぬ炬燵に緣のなる、亥の子が人に化けたのも今は發起に氣も輕い荷になる連れの厄介の、八戒といふ正直な世捨坊主の旅の供、

ト八戒振り有て納まる。

沙悟　また我等が元を言はうなら、

〽原は天竺流沙河川童ならねど水底を、住家と定め九人旅人の命を取る年に、後生願ひの種福菩薩の慈悲で罪科を、川へ流して旅僧を渡した後の弟子師匠、名も沙悟淨と申すもの。

ト よろしく振りあつて納まる。

三藏　また此外に孫悟空と呼ぶ、徒弟一人御座れども、道に遅れて居り合はさず追つ付け是へ參りなば、手形の引き換へ濟ませし上、片時も早く出發致さう。

女王　御僧達の御身の素性、承れば此所で、御弟子の是へ參る迄、

左官　麁末ながら　御酒一獻、

右官　何卒お過ごし下されて、

左官　今宵は是へ御宿りあるやう、

右官　お勸め申し、

兩人　上げまする。

八戒　此美しい姫達が打ち揃ふたる此館へ泊れとは忝い、

イヤ師の坊、是非共今宵は御逗留。

三藏　是はしたり麁想いふまい、佛果を得んと思へばこそ、難行苦行の憂き旅を致す沙門の身の上で、女人ばかりの此館へ、逗留のなるべきか。

八戒　デモ此樣な美しい、女子が泊れと申すのに。

三藏　ハテ五戒の中でも、女犯は第一。
　トきつと云ふ。八戒是非なく控へる。
沙悟　夫につけてもアノ悟空、モウ見えさうなものぢやナア。
　ト知らせにて、竹本連中を出す。
竹本へ待つ間程なく向ふより、
　ト揚幕の中にて、轡の音して、
竹本へ耳に轡の音高く、連れに遅れし氣散じは、
常へ通力自在何の苦も、長の旅路に道草の、
竹へ意馬心猿と打ち連れて、
常へ庭前へこそ入りにける。
　ト此中向ふより孫悟空、畫面の拵へ、腰に馬柄杓をさし、金箍棒を持ち、白馬を曳いて出で來り、花道にて振りあつて舞臺へ來る。
沙悟　コレ／＼、お師匠樣が待つて御座るに、何を道草を喰つて居たのぢや。
悟空　今朝から難所の山を越し、馬に糧食を喰はせぬから、定めて此奴も空腹からうと、今棒鼻の松原で草を喰はせて居る中に、何時かみんなに遅れて仕舞つた。
八戒　馬に糧食を喰はすと云つて、己が勝手で道草を、喰つて居たのであらうがな。
悟空　エ、此阿房めが、何ぞと云ふと俺を惡者に仕居るわえ。
沙悟　コレ／＼、何ぼ猪と猿だと云つて、寄ると觸ると云ひ爭ひ、外と違つて御城内、まア／＼靜かにするがよい。
　ト此中悟空は下手の立木へ馬を繋ぎ、
悟空　是はお師匠樣、大きに遅くなりました。
三藏　其方が參りし上からは通り手形を見せし上、引換の儀を頼むといたさう。
悟空　夫が宜しう御座りまする。
女王　アイヤ、其儀は叶ひませぬ。
三藏　ナニ引き換へが、
四人　叶はぬとは。
女王　ならぬも無理か、此國は。
常へ西梁國の名に呼びて、男たいせし者とては鳥や獸に至る迄、住まぬ邊土に只一人、
竹へ夫の肌は白浪の寄する流れの川水を、飲んで其身に子を宿し、
常へ照胎泉と號けたる泉へ映る俤に、
竹へ二ツに見えて懷胎と知る果敢なさに引き換へて、

〽一と目見るさへ悪風の、慄とする程美しい、
〽月の桂の客人のお出でありしを此儘に、
〽いなされうぞと縋りつき、
〽放れ難なく見えにけり。
ト女王平舞臺へ下りて三藏の側へ寄り、クドキ模樣よろしく、トヾ三藏に取りつく。此中八戒は左官沙悟淨は右官を捉へ、媚きし振りの中、八戒は左官の顔をなめようとする、是にて左官びつくりして二重へ駈け上がる。此中悟空は考へてゐて此時驚いて、
悟空　ヤア〳〵、是は大變々々。
三藏　ナニ、大變とは。
悟空　今爰へ來る途中にて、咽が喝いてならぬから、清く流れる河水を此馬柄杓で四五杯やつたが、夫から何んだか蟲が冠り血の塊りを見る樣な、腹の中へ凝りが出來たが、若しや愚僧は孕みはせぬか。
女王　夫ぞ當國の子母川とて、清き流れの河水を、一口飲めば忽ちに懷胎をする奇體の冷水。
悟空　夫はいよ〳〵大變だ、ア、だん〳〵蟲が冠つて來るわえ。
ト腹を抱へて苦しやと惱む樣子に八戒は、小躍りなして打ち悦び、
八戒　コレ〳〵悟空、女の身なら孕んでも、生み出す所があるからいゝが、貴樣は一體どこから生む氣だ。
悟空　エヽ、人の落目を附け込んで、旨い加減に囀つて置け。
沙悟　トキニお女中、此國には墮胎藥はござらぬか。
左官　是から南へ二里半參れば、解陽山といふ高山あり、其山中の破兒洞といふ洞の内の、落胎泉の水を飮めば腹内の兒は流るれど。
右官　近頃其所に庵を結び、如意神仙といふ人が、泉を守り幾許の黃金を出して賴まねば容易く汲ませぬ落胎泉。
三藏　さあらば拙僧罷り越し、其神泉を乞ひ受けん。
ト立上がるを止めて、
女王　イエ〳〵貴僧は城内より外へはお出し申しませぬ。
八戒　可愛や悟空は口からでも、產をせねばなるまいに、矢ッ張り生れても悟空に似てはかつぎもの。
悟空　エヽ、又そんな事をいふか。
沙悟　コレ〳〵悟空、日頃貴公は通力自在で、神變不思議な事をするが、何とか旨い工風はないものか。
悟空　イヤそウ智慧も工風も斯うなつては、出損つて仕舞

つたが、モシお師匠様、どうぞ貴方の有難いお經でも誦んで下さりませ。

三藏　未だ佛果を得ざる故、拙き我等の法力ながら、徒弟の難儀助くる爲、さらば念を凝らして得させん。

唄へ南無西方の釋迦如來、あはれ徒弟が胎内に、

唄へ宿れる胤を一筋に、落胎せしめたびたまへ。

唄へ奇妙頂禮彌陀頼む、

唄へ諸佛菩薩と祈りける。

ト三藏祈りの振りよろしく、悟空だん／＼腹の痛むこなしにて、

悟空　ア、モウ、是は生れさうだ。エ、いつもの事にやつてくりよ。

ト是よりカンカラ太鼓の入りし鳴物になり、

唄へ扨々々々、まづ試みに一筋の毛を拔き取りて小柄になし、又一筋を針として、跡で拔き取る毛を繋ぎ、外科に用ゆる糸にして、腹の眞中縦う裂いて中の子胤を一寸出して、跡をソク／＼縫針で、づぶ／＼／＼縫へば、忽ち元の身に治る所が、不思議おや／＼イヨ評判／＼。

ト此中悟空五體の毛を拔き小柄と針と糸を拵へ、腹を裂いて中より血の塊りを出し、疵を縫ふ事よろしく、

何れも手品の振りにて納まり、

どうだ、不思議な體であらうナ。

女王　誠に不思議な其奇術、凡人業とは思はれぬ。

左官　諸佛菩薩の再來なるか。

右官　是ぞ則ち通力自在。

左官　ホンニ驚き、

兩人　入りました。

八戒　イヤ忌々しい自由な體だ。

沙悟　迚もの事に、コレ悟空、いつもの樣に金箍棒の、遣ひ分けを見せてはどうぢや。

悟空　身輕になつた悦びに、さらば御覽に入れようか。

唄へ棒おつ取つて座を構へ、

まづ拙僧が携へし、棒の由來を尋ぬれば、是ぞ東海龍王が秘藏なしたる寶にて、重さは一萬五千斤、長く延ばせば天上を、貫くかとも怪しまれ、縮める時は針程に短かくなりて耳の中、心の如くなる故に號けて是を如意と呼び、金箍棒と申すなり。

唄へ程に延ばして遣ひ分け、（ト棒を持つて構へる）

唄へ棒盡くしにて云はうなら、突く棒刺股袖がらみ、六尺棒に三尺棒、肩にかついだ天秤棒、門の戸締まりしん

擂り棒、糊んだ足場の丸太ん棒、蕎麦を打つのがトチ麺棒、磯で漁師が貝突く棒、鬼の手に持つ金てこ棒、

ト棒づくしの振りあつて、

どうだ、棒はいつもながら手に入つた物だらうな。

八戒　イヤ／＼、今の棒には大分ヨメが残つて居れば、先づ八戒は此態さ、

沙悟　又沙悟浄は寶杖で、三人一度の棒づくし、

悟空　拍子に乗つて、

三人　やつてくりよ。ヨイ／＼／＼。

ト竹本常磐津双方打ち合せの前弾きあつて、

常へ棒と名の附くものにては、花の彌生の櫻んぼう、子供欺しの飴ん棒、

竹へ長家あるきに鐵棒を、引きずる女房木偶の坊、鈍い亭主の二本棒、

常へ夫がべら棒黒ん坊、握りこぶしの思案ぼう、

竹へ遣ふ見得坊うつかり坊、

常へアレハ健忘物忘れ、

竹へ聞えぬ聾、座ッ頭の坊、

常へ錢なしでんぼう、寒がりぼう、

竹へ兎角浮き世は、

常へ御辛抱、

双方へわけもなや、

ト此中三人棒を遣ひ振りある。此止り本釣鐘の音聞へ打ち込む、三蔵吃驚思入れ。

三蔵　ヤヽ、俄かに打ち立つ、アノ鐘は。

悟空　人を集むる合圖なるか。

八戒　何とも以て、

四人　心得ぬ。

女王　騒がせ給ふな御僧達、日も西山に傾けば、入相告ぐる鐘樓の鐘、最早城門口々の扉を閉ぢて内外の出入りを嚴しく止めたれば、外に障りも内祝言、何卒妹脊の語らひを、お願ひ申す御出家様。

三蔵　望みある身に雲水の行を勤むる沙門の身、女犯は元より女人とは同席さへも佛の御罰。

左官　西天竺にお出でとあれば、幾千萬の難所を越え、ならぬ苦行をなさるより、長く當地に止まり給ひ、榮華を樂しみ遊ばすが、其身の德と申すもの。

悟空　イヤ／＼、夫は相成らぬ、尊き御身を女性故、三惡道の邪婬を犯さば、師の坊ばかりか我等迄、難行苦行も水の泡、

右官　假令いか樣云はるゝとも、此國內に入り込みし、男子と見れば一人も外へは出さぬ國の掟、是非に妹脊の語らひをおさせ申さにやなりませぬ。

八戒　さういふ事なら八戒が、一人殘つて四人前、夜の勤めをして遣らうか。

沙悟　ア、コレ、阿房な事は云はぬものぢや。

　ト八戒控へろ、女王こなしあつて、

女王　何は差し置き貴君の、お氣を慰さむ舞樂の一曲、兩人是にて御覽に入れよ。

兩人　ハア――。（ト竹本の誂ひがゝりになり）

　竹へ抑や舞樂の其起り、天津乙女が天上に集ひ給ひし舞樂殿、是俳優の初めにて、

　實へイザさらば時の帝の覽はす其大庭に鳴り響く、笙ひちりきや十三の弦の音色の床しくも、花羞かしき舞の袖ヒラリヒラリヒラ〱〱、蝶の羽がいの夫かとも見紛ふ振の面白や。

　ト兩人舞樂樣の振あつて、

女王　イザ貴人には奧殿へ。

三藏　アイヤ、愚僧は此所で一夜を明かし、明けなば手形を引き換へて、直ぐにも此所を出立致さん。

女王　テモ曲もなき其仰せ、女子共に申し附け、只今お迎へ申し上げん。

左官　何かの用意も御座りますれば、

右官　國王樣には奧の御座へ、

左官　一トまづお入り、

兩人　遊ばされませう。

　竹へ女官伴ひ國王は、帳臺深く入りにける。

　ト唐樂を冠せ、二重の緞帳を下ろす、此中八戒は有合ふ酒を飲み、肴の臺を枕にして寢てしまふ、悟空思入れあつて。

悟空　ソレ。（ト花道の方へ行く）

三藏　コリヤ悟空、何れへ參る。

悟空　女王が今の詞では所詮明日迄待つとても、術なく通す氣遣ひなし、城門閉し開けぬとあらば、金箍棒にて打ち破り、今宵の中に出立なさん。

三藏　是はしたり短慮千萬、沙門の身にて左樣な振舞ひ、相成り申さぬ。

悟空　師の御坊の仰せなれど、五戒を保つ我々に邪婬を勸める此城內、一夜を明かすは危ふきこと。

三藏　ヤア、止まれと申さば控へぬか。

悟空　是ばつかりは用ひられぬ。
竹へ強情我慢の孫悟空、駈け出す體に金箍呪、
ト悟空は急き込んで行きにかゝる、三藏口の中にて呪文を唱へる、ドロ／＼になり、悟空頭の痛む思入れにて、舞臺へ戻り、棒を投げ出し、天窓を押へ、
ア、痛い／＼、許させ給へ／＼。
三藏　然らば許し遣はす間、我が詞を用ゆるか。
悟空　用ひまする／＼、何卒呪文を解いて下され。
竹へ印をほどけば忽ちに、痛みを蘇はホツト息、
ト三藏印を解く、是にてドロ／＼打ち上げ、悟空ホツと思入れ。
ヤレ恐ろしや、イヤ觀音菩薩が師の坊へ悪い事を教へて御座つた故、折々呪文を用ひられ、痛い思ひをせねばならぬ。
沙悟　夫だから師の坊の、詞は必ず反くまいぞ
三藏　世に害をなす惡靈や妖魔の類ひは是非なくも、彌陀の利劍で降伏さすれど、佛に仕ゆる身を以て、無法は必ず愼み居らうぞ。
悟空　此後共に心得て、愼みまするで御座りませう。
沙悟　何は然れ此所に、立つて一夜は明かされず。

三藏　何れなり共城内の軒端を求め身を寄せて、雞鳴を相待たん。
ト八戒は夢を見たるこなしにて、
八戒　モウ飲めぬ、モウ飲めぬから、許せ／＼。（ト悟空、此體を見て）
悟空　人の苦勞も餘所にして、又阿房めが醉ひどれて、浮世の事も白川夜舟、いつそ悟空が脅かして、（ト立ち掛かり心附いて）どつこい、爰等が愼む所だ。
沙悟　左樣御座らば師の御坊、
三藏　八戒は其儘兩僧來れ。
竹へ弟子打ち連れて三藏は、白馬を曳かせ城内の、軒端の宿り尋ね行く、
ト三藏法師先きに、悟空沙悟淨馬を曳き、下手へはひる、是にて竹本連中を消す。
宮へ折りから爰へ宮女達ち、
ト唐樂になり上手より宮女四人白糸の苧環を持つて出で來り、
女甲　國王樣の仰せ附けで、戀聟君をお連れ申せとのお詞
女乙　どんな殿御か知らねども、餘程御意に入つたと見えお嬉しさうなお顏もち、

女丙　お化粧の間で鏡へ向ひ、お化粧を遊ばすやら、お装束はどれがよいの、
女丁　お枕許で薫らせる香迄お選み遊ばして、お待ち設けの戀聟様、
女甲　聞けば美しい御出家さんぢやと申す事。
女乙　男戀しの此國へ、巡り／＼て參りし幸福、
女丙　明日から女王の御側に侍り、夜晝となく／＼しつぽりと、
女丁　お睦言とは、羨しい、ホンニ果報な、
四人　男の子ぢやナア。
　ト此時八戒寢返りを打つ、四人飛び退いて、
女甲　申し皆さん、爰に誰やら寢て居ります。
女乙　國王樣の仰せにはお庭先きとあるからは、
女丙　戀聟君が待ち詫びて、寢て御座るのかも知れませぬ。
女丁　ホンニどうやら頭の樣子が、出家の樣で御座ります。
女甲　目の覺めぬ中、聟君のお顔を、しげ／＼見樣では御座りませぬか。
三人　夫がよろしう御座りませう。
　ト乙はさし足して八戒を見て、
女乙　アレ――。（ト飛び退く）
三人　どうなされました／＼。

女乙　どうのかうのと耳の長い口の大きな大入道、お化けの樣な顔で御座ります。
女丙　そんなら夫が國王樣、戀聟君で御座りますかいナア。
女丁　いかな事でも男戀しとは云ひながら、そんな殿御を聟君とは。
女甲　其所が譬へにも申す通り、蓼喰ふ蟲も好き／＼とやら、どうあらうかも知れませぬ。
女乙　ホンニ申せばそんなもの、
女丙　何は兎もあれ寢て居る故、
女丁　起して聞いて見ませうか。
四人　申し御出家、申し御出家。
〽搖り起されて八戒が、大欠伸するありさまを、見るに四人は氣味惡く、此方は邊り見廻して、
　ト八戒起上つて、欠伸をする。
八戒　イヨー見れば師匠も二人の弟子も、何處かへ行つてしまつたナ、扨はアノ美しい女王に連れられ、行つたと見えるワイ。
女甲　そんなら、最早聟君には、
女乙　アノ奥殿へ、
四人　お越しありしか。

八戒　コリヤかうしては居られぬわえ。
へ行くをやらじと引き止め、
女丙　きつ相替へて、
四人　コリヤ何處へ、
八戒　ハテ、知れた事、最前當りを附けておいた、女を猿
に取られぬ中、早く行つて此方のものに、
女丁　テモあつかましい、そんな顔で誰がおまへに、
四人　身を任さう。
八戒　エ、そんなに腐くはせぬものだ、顔はどんなであら
うとも其所がこつちの腕次第、
女甲　ホンニ外見より只心、
女乙　どんな物だか、味知らず、
女丙　ひもじい時の何とやら、
女丁　満更捨てゝも置かれまい。
へ一寸小當り袖褄を、引く氣になるは瀧津瀬の落ちる勢
ひ白糸の、此苧環の結ぶ縁、一人が引けば又一人寄つて
四人が据ゑ膳は是貧僧の重ね齋、
ト此中、人は八戒の身體へ苧環の糸を巻きつける、八
戒四人を突き退け、
八戒　エ、小嫌らしい止してくれ、貴様達には用はない。
爰に居た美しい女の居間を教へてくれ。
女甲　めつたに夫は、
四人　教へぬぞえ。
八戒　エ、面倒な、退けといふに。
へ寄るを飛び退きコリヤどうぢや、餌が旨さにツイ欺さ
れて、いつか取らるゝ餌差し竿、コリヤ又なんの事ッた、
籠の鳥寄るを刎ね退けコリヤどうぢや、餌さの旨さに欺
されて、いつか釣られる鰻掻、コリヤ又なんの事ッた網
の魚。
ト四人を相手に所作立てもやう有て、苧環の糸はだん／＼
身體へ巻き附く、トヾ風の音になり、さしがねの
蜘の巣八戒の頭へスッポリ冠さる、八戒下に居て、
これさ／＼、どうする／＼。
女甲　望みの通り國王様の、
女乙　お側へ連れて行く程に、
女丙　是から一緒に奥殿へ、
女丁　神妙にして行きやいなう
八戒　何の事はない操の、糸に絡んだ人形の様だ。
女甲　迚もの事に操の三番の身振りで、
四人　立つたりしよ

へとつば一筋二筋の糸も千筋に引く雲の、雨を催す朧月、
埒迎ひし八戒が烏飛びして、
　ト三番叟の鳴物にて、八戒操の思入れにて宮女の甲八戒の熊手を持つて後へ廻り、操の違ふ心にて皆々上手へはひる。
へ引かるゝ跡へ沙悟淨が、連れを案じて醉どれの、八戒を呼びに歸り來て、
　ト下手より沙悟淨出て來り、
沙悟　アノ八戒のズボラ坊主メ、モウ起きさうなものだ。
（ト四方を見て）
是はしたり、何處へ行き居つたか、アノ助平めが女に迷ひ、又墮落でもせねばよいが。
へ佇む姿目早くも、見やる女官は走り出て、
　ト上手より以前の宮女四人出て、沙悟淨を取り巻き、
コリヤ此方衆は何とするのぢや。
女甲　待ち兼ねました御出家樣、
女乙　閻王樣の仰せ附け、
女丙　お連れ申せと奧殿に、
女丁　御座つて最早御待ち兼ねなれば、
女甲　お早くお出で、
四人　なされませ。
沙悟　扨はズボラの八戒め、女犯を侵し墮落せしよな。
女乙　テモ野暮固い御出家樣、
女丙　サア／＼お出で、
四人　なさりませ。
　ト沙悟淨の體へ苧環の糸を巻きつける。
沙悟　エ、穢らはしい女の身で、側へ寄つて貰ふまい。
女甲　イエ／＼、何と仰しやつても、お連れ申さにや、
四人　なりませぬ。
沙悟　エ、穢らはしい、寄るなといふに。
へ寄るを突き退けコリヤどうぢや、風が寒さにツイくるまれて、何日に纏はる蔦かつらコリヤ又何の事ツた、山の松來るをかき退けコリヤどうぢや、浪が靜かにツイ招かれて、いつか吸ひ附く蛸入道、コリヤ又なんの事ツた足の疣、
　ト所作立ての中だん／＼五體へ糸のからむ事、トゞさしがれの蜘の巣を冠せる。
コレ／＼、愚僧をどうする／＼。
女甲　お連れの所へ伴うて、御馳走せねば、
四人　なりませぬ。

沙悟　長旅を拖へて居るから、どうぞ糸を解いてくれ。

女乙　そんなにお悶きなされまするると、だん／＼糸が絡みますぞえ。

沙悟　こんなに自由になつて居るから、どうぞ糸を解いてくれ。

女丁　何は兎もあれ奥殿へ、

沙悟　どうでも行かねばならぬとは、是は迷惑千萬な。

女甲　サア／＼糸を、

四人　引いたりしよ。

へ長旅の和尚さんが、悶くと糸が絡む故、引く度毎にびつくりしやつくりと、オヽサびつくりしやつくりと、

ト沙悟淨四人に引かれて上手へはひる。

へ斯くとは知らず三藏は、悟空と共に叉麦へ、端に迷ふ風情にて、暫し彳み給ひける。

ト下手より三藏先きに、悟空白馬を曳いて出で來り、

三藏　コリヤ悟空、何れの方へ參りても、それ軒のあらざれば八戒悟淨と諸共に元來し道へ引返し、城門口にて夜を明かさん。白馬へ乘つて赴かん。

悟空　委細承知仕る、夫につけても二人の者何れへ行きしか行方知れず、何れ夜明けに至りなば、城門口へ參るで御座らう。イザ師の坊には御乘馬へ。

へ勞りながら三藏を、白馬に乘せて孫悟空、城門さして立ち出づる、帳の中に聲あつて、

ト三藏馬に乘り、悟空轡を取つて行きにかゝる。

女王　ヤア／＼、貴人何れへ行く、最早支度も整ひたれば、是非に契りを結ばれよ。

三藏　なんと。

へ見返る雲の樓閣も、忽ち變る蟠糸嶺、賤が軒端でいぶかしゝ、

ト大どろ／＼になり、居所替りにて唐屋臺を打ち返し、藁葺の茅屋に替り、正面の緞帳を切つて落す、後一面の千筋の糸の張りし梅殿になり、以前の女王、右官、左官何れも蜘の巣の装束にて、手に白糸の苧環を持ち、立身、三藏、悟空こなしあつて、

三藏　西梁女國と思ひしに、見る間に替る此の藁家。

悟空　扨は妖魔の巣窟なりしか、抑まづわれ等は、

兩人　何者なるぞ。

女王　愚や悟空我こそは此蟠糸嶺に年を經し、白糸蜘の精なるが、此度南贍部州より十世修行の旅僧が、西天竺へ赴かんと、此山中を通行なすと

左官　其人肉を食する時は、長生不老の藥となれば、西梁女國と見せたるも、奇術を以て目をくらまし待ちもうけたる今日今宵、
右官　さうとも知らず迂濶々々と徨ひ來りし四人の旅僧、最早二人は我々の女色に溺れて白糸の、巣に絡まれし擒となれば、
女王　叶はぬ所と諦當に、命を渡して、
三人　往生せよ。
悟空　ヤア、しやらくさき化物メ、イデヤ悟空の手並を見せん。
三藏　二人の徒弟を救へよ悟空。
女王　ヤア〳〵小怪早來れ。（ト上手にて）
四人　ハア――。
ト上手より以前の甲、乙、丙、丁、蜘の頭を冠り、蜘の巣の裝束にて出る、悟空きつとなり、
悟空　拙僧是に踏み止まり、妖怪退治仕れば、師の坊には此場を早く。
三藏　心得た。
四人　三藏やらぬ。（ト取り巻く）
悟空　何を、

へ千筋にからむ白糸の中を悟空が吹き散らす、梢の嵐はげしくも、危ふき中の蜘の巣の、虎口を遁れ三藏は駒に跨り落ちて行く、
ト大どろ〳〵悟空金箍棒にて四人を打ち倒す、三藏は馬上にて花道へ行く、二重にて女王、左官、右官苧環を卷く、是にて三藏連理引きになり、引き返すを、悟空は二重へ上り金箍棒にて打ち拂ふ、三藏は向ふへはひる。二重の三人追ひ駈けんとするを、悟空隔てる。四人の小怪平舞臺に袴に並ぶ、家體前づらへ一面に蜘蛛の巣を掛ける、皆々立廻り、引つ張りの見得、大どろ〳〵にて山幕を降りかぶせる。是にて常磐津連中を消し、大ざつまになる。
へ夫佛經の國々へ渡らぬ昔深山は、多く妖魔の住家にして里に蔓り或る時は、都へ出でゝ害をなし、下界一圓妖怪の横行なすぞ恐ろしき。
ト此止り竹本連中を出す。
竹へ蜘の巣の中を遁れて空中へ、登る悟空が觔斗雲、ホツと一息月影は西に傾き遠近の梢激しき山下風、
ト此中能き程に舞臺のセリの穴より、悟空蜘の巣に包まれたまゝ、日覆へ引き上げる、悟空は頭の蜘の巣を

取り退け、

竹詞へヤレ／＼あぶない事であつた、是迄數多の化物を惱ませて來た俺でさへ、此蜘の巢には降參した、何は兎もあれ師の坊の跡を慕うて、オヽさうだ。

竹へ行かんとせしが、イヤ／＼／＼。

竹詞へアノ師の坊の云ひ付けには、八戒と沙悟淨を救ひ出だせと云ひ置いて、駒を飛ばして行かれたを、二人を見捨てゝ行く時は、師匠の詞を用ひぬかと、又金箍呪でメめ付けられ、痛い思ひをせねばならぬ、行くも險のん歸るも無氣味、

竹へどつちに仕ようか、思案橋、

竹詞へエヽまゝよ、一寸來なせ。

竹へ走るとすれど又後へ、引き戻されて不審顏、

ト八人藝の鳴物になり、揚幕の方へ行く、此時どろどろになり、切穴より悟空の體に附きし蜘の巢を引つ張る、是にて引き戻される事二三度あつて、

竹詞　ハテ此奴アケブだわえ、俺の乘つた觔斗雲は一息走れば十萬餘里を、一跨ぎにする約束だが、今日に限つて此樣に、いくら走れど元の山、

竹へハテ面妖なと見返れば、いつか絡みし糸筋に、

竹本へ扨こそ／＼まだ引つ掛りが附いて居るわ、どうか此奴を切り拂ふ能い魂膽がありさうなものだ。

竹へオヽ此時は携へし金箍棒を縮め込み、鎌に代へたる一工風、

ト持つたる棒を仕掛にて鎌にする事あつて、

竹本へしめた／＼、此機に乘じて八戒と、沙悟淨の兩人を一番救つてやつてくりよ。

竹へ自然變化に身内の毛、數本引き拔き口に入れ、仙氣を吹けば忽ちに、小猿の姿顯はれたり、

ト此中悟空毛を拔いて口に入れ吹く、大どろ／＼にて烟り澤山立ち、小猿多勢出る。

悟空　ヤア／＼小猿、われ達は巢に絡まれし八戒、沙悟淨、助け出だせよ合點か。

小猿　きやつきや。

悟空　オヽかつきれ／＼やアとな。

竹へヨイ／＼峰の高いのに機家が見える、アレハ蜘の巢盤糸嶺、小猿がかつ切れ小鎌でかつ切れ。

竹へ妖怪ぢや化物ぢや、高が女の蜘の巢ぢや、小鎌に引つ掛けて一寸投げろ、投げた小猿に怪我はない、オッセセのコレワイサのこの何んでもせい。

ト悟空宙乘りにて振りあるを、小猿其通りあつて小猿は切穴へ飛び込む。

悟空　是にて先づは一ツの安堵、心に掛かるは師匠の行方。跡を慕うて、オ、さうだ。

ト神變不思議通力の、雲に跨り一伸しに、風を含みて、ト早笛になり、悟空宙乘りにて向ふへはひる。是にて竹本を消し、常磐津を出し、鳴物打ち上げ、常磐津になる。

〽茲に岩嶮しくも、魔王が洞の黄花觀、東に當り焔焔と立ちし炎に多目怪、千里を見拔く兩眼の光り鋭く立つたるは、恐ろしくも又物凄し、

ト知らせにて、山幕を切つて落す。

本舞臺一面奥深に岩組みの張物、眞中に二間中足の二重、岩組みの蹴込み、同じく岩組みの洞穴、上下樹木の張物にて見切り、下手能き所に、黒雲山黄華觀と記したる建て石、總て深山魔王岩窟の體、茲に百眼魔王好みの拵へ、異形の斧を持つて、以前の三藏の乘りし白馬の轡面を取つて立身、山おろしの鳴物にて道具納まる。

ト魔王きつとなつて、

百眼　ハテ心得ぬ、我が此洞へ白馬にて徨ひ乘り來る青坊主、好む所の人肉と岩屋の中へ引つ括り、賞翫なさんと思ふ折り、東に當つて炎々と闇に焔の立ち昇るは、我と因みを結び居る盤糸嶺に變ある知らせ、心ならざる事共ぢやなア。

〽見やる彼方の山の端より、小猿に追はれ小怪が慌たゞしくも走せ來り、

ト山おろしになり、向ふより盤糸嶺の小怪、小猿に追はれ出て、魔王を見て、

小怪　百眼魔王へ御注進々々。

〽聲もわな〳〵云ひ入れたり。

ト小猿と立廻りながら、舞臺へ來る、魔王きつとなつて、

百眼　見れば怪しき小猿めに追ひ駈けられて參りしは盤糸嶺の眷族よな。シテ注進とは何事だ。

小怪　ハツ。（トのりになり）魔王も豫て御承知の十世修行の旅僧共、我が盤糸嶺へ參りし故、情事に、事寄せ引つ括り、取り喰らはんと思ひしに。

〽供に連れたる悟空とて、通力自在の惡猿が、神變不思
議の奇術にて、
巣は此如く鎌の刃で、數多の小猿に掻きむしられ、洞は丸焼け丸
〽我等の魔王始めとして殘る者共皆殺し、
裸、命から〴〵只一人お知らせ申し候と、前後不揃に述
べにける。
ト小怪は小猿を遣ひ、なかしみの注進ある。
百眼　扨は今方此洞へさまよひ來たる坊主めは、妖怪共の
噂に聞く、十世修行の玄弉とや、妹が敵今宵の中肉を喰
うて卽座の返報、アラ悦ばしや、心地よやナア。
〽洞を目掛けて心の笑み、妖魔の形相恐ろしや、
ト小怪向うを見て、
小怪　アレ〳〵又もや小猿めが、跡追つ駈けて參ります。
〽救ひ給へと平た蜘、恐れわなゝき逃げて行く。
ト小怪向ふを指し、下手へ逃げてはひる。
百眼　イデ此上は妹が敵の、孫悟空を尋ね出し、只一攫み
に引き裂きくれん。
〽駈け出す向ふに、聲あつて、（ト向ふ揚幕にて）
悟空　來るには及ばぬ、齊天大聖孫悟空、百眼魔王に見參
せん。

百眼　なんと。（ト向ふより悟空出て來る）ヤア命知らず
の變化者、我が洞中へ參りしは飛んで火に入る夏の蟲、
脆き命の孫悟空、百歩自在の斧の刃に、不憫やおのれは
寂滅なるぞ。
悟空　小賢しき其一言、白馬が爰にあるからは、正しく師
の坊此洞に擒となつて在さん、過ぎし昔に天宮を騒がす
悟空も改心なし、正果を望む我なれば、無益の殺生は好ま
ねど、師匠の大事多目怪金箍棒の一打ちにて、おのが命
は貰つたぞ。
百眼　小しやくな事を。
〽互ひに自在通力の、千變萬化果てしなく、戰ふ折から
生を得し、八戒沙悟淨走せつけて、
ト魔王悟空と立廻り、向ふより八戒沙悟淨出來り、
八戒 沙悟　孫悟空、爰に居たか。
悟空　よい所へ八戒、沙悟淨、師匠を生け捕る此の妖怪、
退治てくれる加勢をしやれ。
八戒 沙悟　オ、合點だ。（ト兩人舞臺へ來て打つて掛かる）
〽助勢に力得物の鋭さ、流石の妖魔もタヂ〳〵〳〵、早
是迄と諸聲と、共に輝く眼の光り、
ト立廻りあつて、トゞ眞中に魔王きつと見得、仕掛に

て眼中より光明を放つ、三人タヂ〳〵となる。

ト怪し恐ろし、

ト二重に魔王、平舞臺眞中に悟空、下手に八戒、沙悟淨、引張りの見得、大どろ〳〵に早めし唐樂を冠せ、

幕

西遊記（終）

竹柴其水篇

海を見晴す島崎の二階にふとした縺れから振込む纒の總右衛門後へは引ぬ階子の長次が角力仲間と物言も出入屋敷の葉山を始め馴染のお崎お倉に留られ蟲を堪へて富士松が場所を憚り引汐の谷山下のだんまり模樣春風寒くさえ返る喧嘩は社内の芝居前相手と目指水引と言約束に恩のあるおいのへ禮もそこ〳〵に夕暮近く女房子に酒にまぎらす暇乞ひ醉醒に飲む水盃を見る杢蔵が半鐘の出を掛茶屋の勢揃ひ多勢に恐れぬ四車が丸太を取て振廻す中へ飛込む鳶頭辰五郎との叩き合に投る瓦は雨霰富婁那の辯で焚出しの喜三郎が仲人に双方引にならぬやう取りあつかひは江戸の花古きはなしを新らしく初きやうけんに出初のかほぶれ

神明恵和合取組

神明惠和合取組（め組の喧嘩――三幕）

序幕

品川島崎樓の場
高輪谷山下の場

役名――め組濱松町の辰五郎。炊出しの喜三郎。め組柴井町の藤松。同濱松町の長次郎。同露月町の龜右衛門。葉山九郎次。三池八右衛門。力士勇野龍治。同荒浪龜之助。藝者おせん。茶めし屋藤介。島崎の若い者左介。同太助。高輪の時廻り杢藏。四ッ車大八。尾花屋の女房おくら。島崎の抱おさき。同おはる。同おくみ。同おはな。藝者おなべ。小按摩ちよんま。小じよくまめ。同ちび。其他。

本舞臺五間通し常足の二重、正面一間島崎と記せし長暖簾、上手一間中仕切りのある戸棚、此前に帳場格子、此外一面の板羽目、ずつと上の方、一間千本格子、此前に箱の用水桶あり、同じく下の方板塀、内より見越しの松、二重下の方に下駄箱あり、是へ下足札の付きしはき物を大分入れ、軒口一面へ注連を張り、入口の左右へ飾りを取りし跡の心にて松を少々宛さしてある。總て品川新宿、島崎樓店先の體。爰に獅子舞の男、獅子を冠り舞つて居る、囃子方二人ちやんぎりと太鼓を持ち、立ちかゝり、是をおくみ、おはな、女郎の形にて店先へ出て見て居る。帳場の内に若い者左介佇ひ、帳合をして居る、此の見得獅子の鳴物にて幕あく。と獅子を舞ふ事よろしくあつて、

囃方二人　おめでたうござい。

くみ　もし左介どん、帳合ばかりして居ずと、奥へさういつてやんなさんせ。

はな　毎年家例で内證から、お酒が出るのおやござんせぬか。

左介　知らせなくつてもさつきから、獅子が來て居るのは知れきつて居るから、いゝ時分に呼びに來るだらう。

獅子　呼びに來るまで待つて居ては、ちつとこつちがだれ込みの氣味だ。
太鼓　御家例のことだ、縁喜をよく、
ちやん切　目出たく、奥へ舞ひこめ〳〵。
ト又獅子の鳴物になり、獅子舞先に、囃子方二人暖簾の内へはひる。
左介　奥で小言が出にやアいゝが。
くみ　ひよつとこ踊りが面白いから、
はな　奥へ行つて見ようわいな。
ト兩人暖簾の内へはひる、跡通り神樂、鳥追の合方になり、花道より尾張屋の女房おくら、看板の提灯を提げて、先にたち、柴山九郎次、三池八右衛門、兩人とも留守居役の侍、羽織着流し雪駄にて出る。跡より四ツ車大八、二十四五と見ゆる角力の拵へ、勇野龍治、荒浪龜之助、いづれも三段目の角力、羽織着流しにて供をして出で來り、花道にて、
くら　今晩は、大層お早うございましたねえ。
九郎　なか〳〵の盛會ゆゑ、終ひまで附合つてをつたら、夜が明けようも知れぬゆゑ、三池氏と申合せ、すつぽ抜けをいたしてまゐつた。
八右　うまい都合にまゐるもので、裏階子から下へおりると、此の三人が待つて居つて、直ぐに河岸から船へ乘り丁度汐時もよろしいので、思ひの外に早くまゐつた。
くら　道理でお早いと存じました。どうせ今晩はお相方が、お仕舞になつて居りますから、宜しいとはいふものゝ、お客さまがお出でになりませんと、一同心が落ちつきません。
四車　さぞ今頃は中村屋で、どこへ旦那方がおぬけになつたかと、お噂申してをりませう。
勇野　兩國からは吉原が、近いところをお見限りで、南へお出での旦那方。
荒浪　どうぞ大事にしてあげるやうに、尾花屋のお内儀たのみますぞ。
くら　それはおつしやるまでもなく、勤めはなれたおもてなしは、氣のわるいやうでございます。
九郎　イヤ、さううまくまゐればよいが。
はな　少しもお早くいらつしやつて、安心させておやんなさい。
ト右の鳴物にて、皆々舞臺へ來る。左介帳場から飛んで出て、

左介　これはよく入らつしやいました。皆さんがさつきから、お待ちかねでござります。

ト侍雨人下駄箱を見て、

九郎　春は春だけ暮れぬうちから、大分客があると見え、

八右　いづれも知つた名のついた、札のはき物が澤山ある。

くら　いつも繁昌で左介どん、よいお正月が出來ますね。

左介　へイ、ありがたいことには、此通り正月早々お客さまがおそろひで、七福神の入船と申すもの。

四車　女郎の辨天で、若い衆の懐ろは、ナウ勇野。

勇野　松の内から、腹は布袋だ、

くら　マア、ともかくもお座敷へ、

九郎
八右　然らば案内。

左介　サア、入らつしやいまし。

ト右の鳴物にて、皆々暖簾の内へはひる。此處へ上手よりおせん、おなべ品川の藝者座敷着にて、雪駄をはき出で來り、

せん　ヲヤマア、大そうなはき物だこと。

なべ　大入り芝居のお茶屋のやうだ。（ト暖簾口より、若い者太助出で）

太助　丁度よかつた、早く行つたり。

せん　さうしてけふのお客さまは、

なべ　どなただか、お知りでないか。

太助　尾花屋のお客で、五人とも仕舞になつてゐるお馴染だ。

せん　それでは、關取の御連中だよ。

なべ　オヤマア、それはうれしいねえ。

太助　下の三番だから、早くお出でよ。

せん
なべ　それぢやア、すぐまゐりますよ。

ト雨人暖簾の内へはひる。右鳴物きつぱりとなり、花道より露月町の龜右衛門、鳶の者の拵へにて酒に醉ひしな、濱松町の長次郎、やはり鳶の者にて腕を肩へかけ、介抱しながら出で來り花道にて、

長次　コレサ、茶屋から送られて行きやといふに、初春早早つツかけに、醉つぱらつちやア見つともねえ。

龜右　何の見つともねえことがあるものか、おらツちばかりあがるのなら、茶屋が附かなきや沽券がわるいが、頭が初寄合の歸りに、向うの島崎で遊んで居るといふから、迎ひとごまかして遊びに來たのだ。茶屋もへつたくれも入りやアしねえ。

長次　手前はそんなにくらつて居るから、外聞も何もかまふめえが、頭の居るのをつきとめて、押しかけて來たや

うで、見つともねえ。

亀右　この野郎はおつウ見え張りやがる、どうで頭におんぶの遊びだ。いやなら止せ。おれ一人であがる。（ト舞臺へ來るな）

長右　コレサ、待てといつたら待たねえか。

ト附いて舞臺へ來る。太助この體を見て前へ出て、

太助　いらつしやいまし、まづ明けまして、おめでたうございます。

亀右　何がおめでてえのだ、おらアめでたくも何ともねえ。

長次　コレサ、ほどのわるいことは云はねえものだ。

亀右　何がほどがわるいのだ。

長次　マアいゝといふことよ。くらつて居るから、堪忍してくんねえ。

太助　大分御きげんさまで、へゝゝゝ。

亀右　人を馬鹿にしやアがつて、おつウをかしく笑やアがる。

長次　ときに、頭の居る座敷へ、案内をしてもれえてえものだ。

太助　へイ／＼よろしうございます。

亀右　よくなくてどうするものか。

太助　こつちへおあがり下さいまし。

ト二重へあがらうとして、亀右衛門ひよろ／＼とするゆゑ、

長次　コレサ、あぶねえ。（ト抱きとめるを道具がはりの知らせ）しつかりしろ。

ト此もやう、騒ぎ唄にて道具廻る。

本舞臺一面の平舞臺、後ろ品川の海を見たる遠見、見晴し座敷の心、簾通り緣側の手摺り、上の方書心に、九尺の床の間、一面の地袋違ひ棚、下の方同じく畫心に塗骨障子を四枚建切りあり、日覆より大灘間をおろし、舞臺一面薄べりを敷きつめ、嶋崎樓廣間の體、所々に雪洞つきの燭臺を照し、上手に以前の九郎次、八右衛門座蒲團の上に住ひ、この脇に以前のおくみ、おはな住ひ、續いておさき、おはる女郎仕掛なりにて住ひ、この脇に四つ車住ひ、眞中に酒肴の臺の物を取散らし、下手に以前のおせん、おなべ三味線を彈き、勇野、荒浪立ちかゝり、角力甚九を踊つて居る。ずつと下手に、おくら爛銅壺にて酒の爛をして居る見得、右の騒ぎ唄にて道具留る。

せん　とおせん、おなべ三味線を弾きながら。
なべ　ヨウ〳〵、甚九の日の下開山。
トほめる、兩人踊りくたびれたるこなしにて、
勇野　マア、こゝらで水だ〳〵。
荒浪　お内儀、早く銚子をくだんせ。
くら　丁度お燗がおあつくつきました。（ト酌なして、角力二人酒をのみ居る）
九郎　イヤ、土俵でこのくらゐ働き居ると、二人とも贔屓がつくであらうが、
八右　兎に角ころ〳〵ころげて居るので、贔屓にしても張合ひがない。
さき　いつも御一緒の水引關は、けふはお見えでありませんが、どうかなすつたのでござんすか。
四車　あれは、けふは名前替への祝ひで、會主のことゆゑ兩國の中村屋に殘つて居ます。
はる　それではあの水引關は、名が替るのでござんすか。
九郎　あの水引清五郎は、去年の暮の本場所で、一日も砂がつかねば年寄連がうち寄つて、改名させる出世角力ぢや。
くら　けふの中村屋の御參會が、お名前替へのおひろめなら、何ぞお祝ひ申したに、少しも知らずに居りました。
八右　イヤ〳〵、出入りの屋敷ばかりで世間へ心懸けぬやうとの、彼が氣質に我々のみけふは打寄つて、祝つたのぢや。
勇野　わしらも名でも替つたら、ころげぬやうにならうも知れぬ。
荒浪　どうか旦那方のお引立で、改名させて下さりませ。
せん　改名といへば、今度水引關には、何といふ名に替りました。
九郎　屋敷の國の山の名を採り、九龍山浪右衛門となつた。
くら　ヲヤ、それでもまだ番附には、水引としてございました。
四車　イヤ、春場所から改めて、えらい名前に替りますが、これといふのも屋敷方の皆お引立によるところ、ありがたいことでごんすわえ。
八右　いづれ來月神明で、また花角力があらうから、其番附へ九龍山と、名前が替つて出るであらう。
せん　花角力なら見られますから。
なべ　是非ともお供を願ひます。
九郎　イヤ水引の話で持切りで、どうやら座敷が沈んだや

うぢや。

八右　水を入れたら兩人とも、もう一騒ぎさわげ〳〵。

勇野　ヲイ藝者さん、三味おッぱじいて下せえ。

荒浪
せん
なべ　アイ〳〵、サアお踊りなさいよ。

ト三味線を弾く、これにて下座の太鼓入り角力甚九になり、勇野、荒浪酒に醉ひしこなしにて、ひよろ〳〵しながら踊る。此うち下手へよろけて荒浪は見切りの障子へ突きあたり、障子を倒す、此外廊下の片達見、おくらあわてゝ障子を建てようとするを、外より左右へひらき柴井町の藤松、鳶の者のこしらへにて、這入り來り立身にて、

藤松　ヤイ〳〵、何で障子をおれに當てやアがつたのだ。

ト此うち勇野、荒浪は下に居て、

勇野　何ぢや障子を當てた、障子を當てた覺えはないわえ。ツイ倒したのぢや。

藤松　イヽヤ當てたのだ。通りかゝつた廊下の外、わざと手めえ達が當てたのだ。（ト下に居る）

くら　お隣り座敷のお客さま、どうぞ御勘辨下さいまし。

勇野　イヤ、お内儀詫びさつしやるな、こつちに引け手はみぢんもない。

荒浪　よしぶつたふしたにせへ、餘所の座敷へ這入り込んで、挨拶もせず何でごたくをつきをるのぢや。

藤松　言はねえでどうするものだ。

勇野
荒浪　なぜ〳〵。

藤松　癪にさはるから、文句をいひに來たのだ。

勇野
荒浪　何ぢやと。（ト替つた合方になり）

藤松　遊所場だから天井や、ねだが拔けてもかまはねえと騒ぐ奴等に理窟ッぽく愚痴をならべていふのも野暮だが遊びに來りやア田樂の、豆腐にあやかる二本差しも脛一本の半てん着も、五一三六どしこみに、障子一重の客仲間、ちつたア遠慮もあらうのに、去年の暮の煤掃きか引ずり餅を見るやうに、大道臼がはねまはり、化物じみた大野郎が踊る隣りの騒ぎより、こつちの膳の燗徳利が、踊つてころげる騒ぎになり、やかましくてならねえところへ、廊下を通つて障子をたふされ、たゞ一言の挨拶もねえから文句をいひに來たんだ。

九郎　何ぢや、隣の客だとな。

八右　コレ四ッ車、つまみ出してしまへ。

四車　よろしうござります。（ト前へ出て）コレ〳〵兄貴どん、仲間の者が酒の上であたりもかまは

ず騒いだのは、ちつと無遠慮であつたなれど、こんたも詞が過ぎるでごんせう。とす、理窟でいへばそんなものぢやが、言はるゝ通り遊所場ぢや、こつちも今の惡口を、蟲をこらへて堪辨すれば、そつちもくどう言はんせずと早う座敷へいんで下され。

藤松　イヤそんな挨拶ぢやア立たれねえ、さう〳〵しくつてわるかつたと、詫びることなら歸つてやるが、詞が過ぎると言はれちやア、このまゝあとへは引かれねえ。

四車　オ、瘦せても枯れても力士をとらへ、大道臼との惡口は、ちつと詞が過ぎるであらう。

藤松　力士もへちまもいるものか、大道臼といつたがどうした、め組の鳶の三河屋藤松、おれが相手だ、どうともしろ。（トあぐらをかく）

勇野 荒浪　うぬ、さうぬかせば。（ト立ちかゝるを藝者兩人にてとめ）

せん なべ くら　マア關取衆、下に居て下さい。誰より一番お連れ申した、茶屋がとゞかないのでございますから、頭どうか堪辨して下さい。

藤松　イヤ、茶屋なんざア相手にしねえ、大道臼がおれの相手だ。

ト立ちかゝるを、おさきこらへかねてそばへ寄り、

さき　マアいゝから、藤松さん、あつちへ行つて居ておくれ。

藤松　エ、、手前が第一氣にくはねえのだ。（トはりたふす、女郎三人これを見て）

三人　アレ可愛さうにおさきさんを。（ト藝者二人下手へ向ひ）

せん なべ　誰か來ておくんなさいよう。

ト皆々立ち騷ぐ、處へ下手より、いぜんの長次郎、龜右衛門出で來り、

長次　サア、骨はおれが拾つてやるから、

龜右　藤松しつかりしろよ。

藤松　野郎の刀かけやがちやばいめらに、はゞをされちやア男が立たねえ。

九郎 八右　おのれ、無禮千萬な奴ぢや。（ト立ちかゝる、下手よりいぜんの若い者二人出て）

左介 太助　マア御勘辨下さいまし。（トとめる）

九郎 八右　堪忍は出來ぬ、とめるな〳〵。（ト立ちかゝるを皆皆とめる。此うちおさき上手廊下へ行き、）

さき　頭、來ておくんなさいよ。

ト呼ぶ流行唄になり、おさき心づかひのこなしにて、廊下へはひり、直ぐ辰五郎、鳶の者のこしらへ、是を引張り出て來り、

辰五　頭、後生でございますから、仲人になつておくんなさい。マア〳〵いゝから、騒ぎなさんな。（ト皆々の中へ割つて這入り、）コレ、おれが來たからにやア、騒がねえでも、事のわかるやうにしてやるから、手前達も下に居ろ。

藤松　兄貴が知つたことぢやアねえ。

長次
亀右　打つちやつておきねえ〳〵。

辰五　エヽ、遊び場所で見ッともねえ、靜にしろ。

ト無理に下に居る、此時八右衛門思はず辰五郎を見て、

八右　ヤ、そちは辰五郎ではないか。

辰五　エヽ（と八右衛門を見て、）コリヤ、旦那さまでござりましたか。

九郎　それでは貴殿が御存じの。

八右　いかにも、彼れは濱松町の、辰五郎といふ鳶の者。

四車　そりや、いゝ者がまゐりました。

勇野
荒濱　こりや野郎ども、かゝつて來んか。

女皆々　マア〳〵、靜にして下さい。

トよろしくなだめる、是にてみな〳〵下に居る。合方替つて、

辰五　お屋敷さまといふことは、隣り座敷で聞いて居りましたが、あなた様とはちつとも知らず、若えやつらの間着に顔を出すのも大人氣ないと、さしひかへて居りましたが、酒の上の間違ひにて、此の三人があなた方へ、對しましての失禮は、眞平御免下せえまし。

トよろしく詫びる、藤松前へ出て、

藤松　オイ〳〵兄貴、何をいふのだ、こつちに十分理窟があるのに、どんな因縁があるかは知らぬが、そんなに安目を賣んなさんな。

辰五　因縁も何もあるものか、お歴々の旦那方へ對し、失禮しちやア濟まねえから、おれが代つてお詫びをするのだ。手前達アすつこんで居ろ。

鳶三人　それだといつてあんまりだ。

辰五　エヽ、おれのいふことがきかれねえのか。

鳶三人　オイ。（トぜひなくひかへる。）

四車　イヤ勘辨はしませうもので、わしもあれらに惡口され、腹が立つてなりませぬゆゑ、いがめてやらうとは思ひましたが、茶屋の内儀が氣をもむといひ、こつちの内

へ氣の毒と、見合せて居りましたが、辰五郎とかいふ男が出て、旦那へお詫びをするとあれば、それで何にもいはぬが花、マア御勘辨なされませ。

九郎　もとよりかやうな遊所場にて、彼等を相手に事は好まぬ。

八右　詫びるとあれば勘辨して、このまゝ濟ませてやるであらうわ。

勇野　太神樂のまりのやうに、手玉に取つてやるところを、

荒濵　助かつたのはそつちの仕合せ、しつぽをまいて早く行け。

蔦三人　何をぬかしやアがる。（ト立たうとするをとめて、）

辰五　これさ、何にもいふなといふに（ト思入あつて、）ときに關取衆、何も相手が角力だからと、それに怖れて詫びやアしねえだ此の旦那方へ濟まねえから、血の氣の多いこいつらを、小言をいつて此場を濟ませ、事を丸く納める料簡、それといふも神明へこれからかゝる春角力、わつちが爰で言はねえでも、いはずと知れたため組の持ち場所、お前も愛嬌うる渡世で、若し間違ひでもあつたらば、家業の爲によくなからうと、それでおれがとめたのだから、よく此人達にもいつてやんねえ。

藤松　客の前おやア威光をかり、そんなごたくをつくだらうが、土俵へ上つて引つぱたかれ、どぢな負でもした日にやア、二目と見られたざまがやアねえ。

長次　今度の場所へ出やアがつたら、とられえうちからけちをつけ、二度と再び神明へは、出られぬやうにしてやるから、今のごたくを覺えて居ろ。

龜右　あんやきなこでころがす團子は、彼岸が來りやア賣れるだらうが、砂にころげた團子ばかりやア、どんな業人な女郎でも、鼻ッつまみで食はなからうよ。

勇野荒濵　何だと。（トきつとなる。）

辰五　またぐづ〳〵いひ出すのか。オイ姉え達、こいつらをあつちへ連れて行つてくんねえ。

せん　ハイ〳〵、頭が氣をもんでおいでなさるから。

なべ　あちらのお座敷へまゐりませう。

藤松　大きにお世話だ、うつちやつておけ。

長次　癪にさはつてならねえから、

龜右　言ふだけ言はにやア蟲が濟まねえ。

左介　どうぞ何事も御勘辨を。

太助　ともかくもあちらへ〳〵。

ト藝者兩人と若い者兩人、三人をなだめながら下手へ

つれてはひる。侍兩人思入あつて、

九郎　アイヤ辰五郎とやら、今聞けば神明近所は其方達の持ち場所ゆゑ、今度出たらば四ッ車にけちをつけると若いものが、憎まれ口を申したが、其方らのひいきを受けすと、彼れは屋敷の抱へ角力、コリヤ鳶人足とは身分が違ふぞ。

辰五　ヘエ、、左樣なら鳶の者と、角力は身分でも違ひますか。

九郎　角力は帶刀許しあれば、鳶人足とは一つにならぬわ。

辰五　ヘエ、さやうでござりますか。

ト癪にさはる思入、おくらむつとせしこなしにて、

くら　其の御身分の御高下を、おつしやいませぬが御遊興。モシ頭、あなたもどうぞお聞き流しに。

辰五　身分違ひの人足が、長居をしては失禮だ。それではどうかお二人さん、若えやつらの申し過しは、お聞き流しに願ひます。

九郎　然らば此後力士へ對し、心得違ひをしてはならぬぞ。

くら　アヽモシ、あなた、もうよいではござりませぬか。

八右　お腹も立たうが身共にめんじて。（ト九郎次をなだめ。）

そちもこのまゝ歸つてくりやれ。

辰五　出入り屋敷の名がなくば、

九郎 八右　ヤア。

辰五　イエ、大きにお邪魔をいたしました。

ト唄になり、思入あつて下手へはひる。あと浮いた合方になり、

勇野　これから隣へ面當に、もつと騷いでやらうぢやないか。

荒浪　騷ぐにしても肝心の、藝者がどこかへ行つてしまつた。

四車　イヤ旦那方も晝からの、お勞れなればお引けがよからう。

くら　それではお床をのべさせませうか。

九郎　大分醉つたから、それがよからう。

八右　急ぎはせぬが、床ぢや〳〵。

さき　モシ皆さん、今のうち顏を出して來ようぢやないか。

はる　おかみさん、ちよつと行つて來ますよ。

くみ はな　そんなら一緒に。

ト立上るゆゑ、

九郎　アコレ、枕の番は眞平ぢや。

八右　今宵ばかりは、それでは濟まんぞ。
くみ　アレ、人聞きの悪いことばかり。
はな　どうせ御身分が違ひますからな。
九郎・八右　何ぢやと。
はる　オヤ、モウ口説が始まりましたか。
四車　おさきも直に來てくりやれ。
さき　顔さへ出せば、直に來ますよ。
くら　ドレ、お座敷をこしらへて來ませう。
　ト女形皆々下手へはひる。
勇野　水引關の相方ゆゑ、あのおはるは揚げの女郎。
荒浪　わしらの相方はどうしたか、まだ顔さへも出し居らぬ。
四車　いそがしいから取卷の、供の方へは廻らぬ筈ぢや。
九郎　イヤ、かくして居れどおさきめは、鳶人足の藤松めに、血道をあげて居るとのこと。
八右　それゆゑ彼めがこらへかね、もし四ツ車に取られはせぬかと、喧嘩をしかけに參つた樣子。
四車　頭とやらが詫びなければ、懲らしてやるでござりませうに。
勇野　あいらが女郎の油を吸ひとる、
荒浪　油むしめでござりませうわい。
　トこの時バタ〳〵、獅子の鳴物になり、下手より小ぢよく二人出て、座敷へ逃げ込む、是を追ひかけて、藤明きの獅子舞獅子を冠つて舞ひ込むことよろしく。
四車　女郎の代りに、獅子が來ました。
小ぢよく二人　どこぞへかくしておくんなさい。（ト獅子舞顔を出して）
獅子　七種の御祝儀、おめでたうござります。
九郎　イヤ、悪魔拂ひを。（ト立上るを道具がはりの知らせ。）
八右　おさせなされませ。
　ト獅子の鳴物にて、獅子よろしく舞ふ、此もやう騒ぎ唄をあしらひ、道具廻る。
本舞臺一面の平舞臺、正面上手一間の床の間、續いて地袋違ひ棚、下の方腰張りの茶壁、ずつと上手折廻しの襖、下の方中ずかしのある塗骨障子の隔て、此外一面の板羽目、よき所に蒲鉾なりの掛行燈、すべて嶋崎樓名代部屋の體、爰に行燈を點し、六枚折の屛風を立て、絹床を敷き、此上にいぜんの藤松、女郎の部屋着を長襦袢の肩附に着替へ、三尺帶をしめ

て居る、此の見得端唄の合方にて道具留る。とバタバタになり、下手よりいぜんのおさき、上草履を持ち、はだしにて出來り障子の中へはひり藤松を見て、

さき　アレ、支度をして歸つちやアいやだよ。

藤松　どうせ今夜の仕舞の客で、お前はあつちへこびりついて、來る氣づけえはなからうから、氣をきかして早く歸るんだ。

さき　大かたそんなことだらうと、座敷の引けるのを待ちかねて、やつとこつちへ逃げて來たが、あんな好かない奴はありやアしない。

藤松　どつちへ行つてもおんなじ文句で、お前の口車にやア乘りたくねえ。

ト下手へ行きかけるな、

さき　アレ、何處へお前行くのだえ。

藤松　どこへ行くものか、歸るのよ。

さき　ばかなことをお言ひでない、着ものを早くぬいでおしまひ。

藤松　大きにお世話だ、おれのとゞばだ。

さき　そりやア言はないでも知つて居らアね、おぬぎといつたら、早くおぬぎよ。

藤松　裸にされる科はしねえ。

さき　それぢやアわたしのあの部屋着を、寢卷にするのがいやなのかえ。

藤松　角力なんぞにこびりついて居る、女郎の着物はおらあいやだ。

さき　面白くもない、そんなにお前にすねられて、癪をいはれちやアわたしが合はない、着かへろッたら着かへやアがれ。（ト無理に三尺帶を取り裸にする。）

藤松　ヤイ、裸にしてどうするんだ。

ト屏風にかけてある部屋着をとり、

さき　ホンニ、世話のやけた甚助だつちやアない。（ト藤松に着せる。）

藤松　ア、寒い、ひどく言やアがる。（ト下に居る、おさきそばに住ひなまめいたる合方になり、）

さき　ホンニさつきはわたしでさへ、癪にさはつてならなんだから、お前の怒るのも無理ではないが、いやな所に居るのもつとめ、座敷の引けるをまちかねて、お前の所へ逃げて來た、わたしの心を察しもしないで、歸られちやア合やアしない。

藤松　お前が心底さういふ氣なら、おれだつても歸りやア

しねえが、兄貴が出入りの屋敷の留守居が、一緒に居たので引け手になり、指をくはへて引こんだに、こつちの座敷へ寄り付かず、向うにばかり居られちやア、第一二人の前もばつがわるく、一人で寢ちやアゐられねえ。

さき　それだから氣が氣でなく、もし歸られちやア大變とお前のところへ逃げて來たが、間にあつたのでまアよかつた。

藤松　何にしろあいつらは、屋敷方へ取りいつて、ひいきを受けて居やアがるので、いくら悔しく思つても、鳶人足はかなはねえ。

さき　ナニかなはないことがあるものか、わたしが敵はとつてあげるよ。

藤松　宮城野信夫ぢやアあるめえし、女郎に敵がとれるものか。

さき　そりや地みちの力づくぢやア、所詮敵はとれないが今夜お前の敵討に、あの四ツ車をあげぼしに、蒲團の土俵へ投げるつもりさ。

藤松　角力はわざと負けるのを、ふつてやつたといふさうだが、角力をふつて敵討は、女郎の意地で面白い。

　トこのうち下手の廊下口より、いぜんのおはる出て、障子の外にこれを聞いて居て、うなづいて後ろへはひる。

さき　頭に出て居るあの妓にもちよつと吹きこんでおきたいが、あの妓の座敷はどこだらう。

藤松　イヤ、兄貴はさつき今夜中に、行かにやアならねえ用が出來たと、座敷ぎりで先へ歸つた。

さき　オヤ、それだつて今座敷に、頭の羽織が殘つて居たもの。

藤松　アヽ、それぢやア急いで忘れていつたのだ。イヽヤおれが翌の朝とゞけてやらう。

さき　癪にさはつたやうすゆゑ、それで歸つたに相違ない。それぢやアあの長さんと龜さんも、一緒かえ。

藤松　イヤ、あの二人は居る筈だ。

さき　どこにお出か此事を、ちよつと吹きこんで置きたいものだ。

藤松　たしか二番の名代へ、龜が寢たといふことだ。

さき　龜さんへ出て居る妓は、わたしと仲よしだから、吹きこんで置かう。

藤松　そんなことをいつて、逃げちやアいけねえ。

さき　さういふお前が、お歸りでないよ。（トこれより下

座の端唄になり）
はうたへ天の戸の明くるといへるうれしさに、つい引かさるゝ春霞、思ひのたけを言ふゝしも、さゝのきげんできそ始め、顔にうつらふ初日の出。
ト此うち藤松ふとんの上へ行く。おさき屏風を建て直し、下手の廊下口へ出る、是にて知らせなしに道具半廻しになる。
本舞臺うしろ一面の廊下の部屋々々、入口に番を記せし名代部屋、いづれも障子建てきりあり、右の端唄にて道具とまる。と上手より、おさき出て來り、下手へ行きかける。此時上手の明部屋より以前のおはる出て、
はる おさきさん、ちよつとお待ち。
さき おはるさん、何ぞ用かえ。
はる 外ぢやアないが、勤めの上で、敵をとるのは止しておくれ。
さき それぢやアお前、聞いておいでか。
はる 藤松さんとひそ〳〵話を、聞いて居たから留めるのさ。（トこれにておさき思入あつて）
さき 水引さんに出てゐるお前、其の兄弟のことだから、肩を持つかは知らないが、わたしもつむじが曲つて居れば、大盡風を吹かせたり、力自慢をする客は、氣にいらないからふるつもり、誰もかうした意氣張りは、勤めをする身にありうちと、聞かない顔をしておくれ。
はる イエ聞いたからいゝけれど、もしもそんな勝手をされては、わたしの出て居る水引關に、恨まれなきやアならないから、いやならいやでさしをつき、出ないといへば濟むことを、ふざけた眞似をすると聞いては、わたしがだまつちや居られない。
さき オヤマア、それはお氣の毒な、ふるもふらぬもわたしの勝手、お前の指圖は受けないから、マア異見は聞きますまいよ。
はる 異見を聞かずばわたしも意地、邪魔をするから覺えておいで。
さき お前に邪魔をされるのが、怖いと云つていやな客を、つとめるわけにはいかないから、其の御念には及ばない。
はる そんならきつと、ふつて御らんよ。
さき ふり通すから、見ておいで。
ト下手へ行きかける、此時下手より、いぜんのおくら、

看板提灯を提げ出來り。

くら　おさきさんでございますか、關取がお歸りになります。

さき　オヤマア、それはいけすかない。

くら　エヽ。

さき　イエ、いそがしいので行かずに居ました。

はる　ふられぬうちに、氣がついて。

さき　エヽ。

くら　イエ、お天氣は持ち直しました。

さき　こりや聞き違ひで。（トにつこり笑ふを、道具がはりの知らせ）持つたものさねえ。

トこのもやう、合方、時の鐘にて道具廻る。

本舞臺うしろ高輪の海を見たる夜更の遠見、裾通り雁木の柵の頭を見せ、よき所に永代兩國出船と記したる立札あり、上の方たゝんである茶店、下の方に石置場、柳の立木などよろしく、すべて八つ山下、海岸夜明前の體、爰に夜明しの茶飯屋荷をおろし、休み居る、浪の音時の鐘にて、道具留る。と上手にて、按摩笛聞えて、小按摩ちよんま宿歸りの心にて杖をつッ張り出て來り。

按摩「八つ山下の茶屋女、夜風をしのぐ茶碗酒、」（ト投げぶしを唄ひながら、下手へ行く、）

茶飯　オイ、ちよんまさん、いゝ聲だねえ。

按摩　誰だえ、茶飯屋さんかえ。

茶飯　ゆうべはしつかり療治があつたと見えて、投げぶしとはいゝ勢ひだ。

按摩　ナアニ、所謂夜明前で、按摩を呼んでも療治の仕手がなからうから、唄でもうたつて通らないぢやア此海ばたは通りきれない。

茶飯　唄より茶飯を一ぜん食ふと、よつぽどからだがあつたまる。

按摩　仕舞物でまけるなら、豆腐をぶつかけて一ぜん食ひたい。

茶飯　豆腐だけまけておくから、あつたまつて行きなせえ。

按摩　もつとまけてもらひたいものだ。

茶飯　そんなにまけては元がきれる。

按摩　ムヽ、うまくいつて居るぜ、おまへは毎日數寄屋川岸の、炊出しの親方へいつて、どぶへ流れた米をもらつて、それを茶めしにして賣るのだと、すつかり種を割つ

こゐたせ。
茶飯　エ、人聞きのわるいことをいひなさんな、行くことは行くが、そんなことはありやアしねえ。
按摩　それぢやア行くのかえ、ア、、それぢやアほんとだほんとだ。
茶飯　コレサ、靜にいひねえ、エ、仕方がねえ、盛りをよくするから、だまつて居ねえよ。
按摩　ウ、、賄賂を出すなら、おいらだまつて居るよ。
トこのうち茶めしをこしらへ出す、按摩食ふことよろしくあつて、
茶飯　どうだえ、唄よりあつたまらう。
按摩　あつたまることはあつたまつたが、口の中がどぶ泥たうとう十六文散財した。（ト錢を數へて荷の上へ置く。）
茶飯　エ、、人を馬鹿にしなさんな。（ト突く、按摩ひよろひよろとして、）
按摩　それではあんまり、イヤ、按摩針。（ト呼ぶ。）
茶飯　あつたかいのを、ためしあんかけ。（ト呼ぶ。）
按摩　あんまー針。
ト兩人呼びながら上下へ別れてはひる。あと鳴物きつぱりとなり、上手より以前のおくら、看板をつけて先に立ち、後より四ツ車、着流し一本差しにて、羽織を肩へかけ出て來り、
四車　モウかれこれ夜明け前、わしはこなたの所で駕籠をいうてもらふから、モウ送らずとようごんすわえ。
くら　イエ、どうせ駕籠へ聲をかけますから、御一緒にまゐりますが、何にしろ大そうお早いぢやござりませんか。
四車　イヤ、翌の朝は場所のことで、神明前に寄合ひがあれば、早く歸つておかねばならぬ。
くら　御場所が初まりましたら、しげしげお出でを願ひます。
四車　屋敷が赤坂と赤羽だから、旦那衆とたびたび來ますわい。
くら　是非お待ち申して居ります。（ト提灯にて下を見やり、）ア、モシ、關取道がわるうござりますよ。
四車　どつこい、モウ少しでぬかるのだつた。
トわきへ寄る、此時石のかげより以前の辰五郞、頰冠りにてうかゞひ出て、看板を蹴とばし四ツ車へつきかかる。四ツ車びつくりして飛び退き、双方よりうかゞふ。これを忍び三重になり、一寸立廻る。此時上手に

て拍子木の音して、時廻り杢蔵、着流し尻端折り、象股引にて火の番といふ提灯を腰にさし、拍子木をたゝきながら出て來り、四ツ車につきあたり、ひよろ〳〵として提灯を消し、拍子木を落し、これをさがすこなしにて三人の中へからみ立廻る、よきほどに花道揚幕にて駕籠屋の聲して、初音屋の看板をつけし四ツ手駕籠を、くりからのほりもののある駕舁二人かつぎ、聲をかけながら舞臺へ來る。辰五郎同じく提灯を打落す、駕籠屋二人はびつくりして、駕籠を置いて上下へ逃げこむ。これにて駕籠の中より炊出しの喜三郎、四十二三の人入れのこしらへにて出て、三人の中へはひる。鳴物替つて、世話だんまりのもやうよろしくあつて、ト、辰五郎、一本ぐさりの煙草入を落し、花道の方へのがれ行く。喜三郎煙草入を拾ひ、四ツ車に行き當り、双方後へさがりて、きつとなるを木の頭、辰五郎は逸散に花道へはひる。四ツ車はおくらを圍ひ、杢蔵は震える。この引張りよろしく浪の音新内の合方にて、

ひやうし幕

二幕目　神明芝居木戸前の場

役名――め組の辰五郎。九龍山浪右衛門。め組酒桝町の長次郎。同露月町の龜右衛門。葉山九郎次萬代山の住職易龍。職人山内の金。鶴屋の小娃八重菊。職人御成門の松。力士波の花鷹右衛門。同ゆで蛸八五郎。太鼓持乗り新。芝居の木戸番大當同新太。座元江戸喜太郎。四ツ車大八。辰五郎女房おだい。同悴喜太郎。蔦おもちやの文次。龜屋の小娃染之介。茶屋娘おまつ。同およし。芝居見物大ぜい。

本舞臺四間こけら屋根、前側板羽目の芝居小屋、眞中三尺の入り口、此左右木戸番の臺、下手四尺程の入口、これに客留の札を張り、やはり番人の臺、軒下に横長の繪の一枚看板、入口の脇千本櫻の大名題、下手ツキ狂言と記したる庵り、下手九尺の出茶屋、てうじといふ掛行燈、軒口に役者の紋附きし團子提

灯、茶道具よろしく、床几に毛氈をかけ、上下櫻の立木、すべて神明地内、宮芝居前の體。爰に職人山内の鐘、同御成門の松、一升樽と竹の皮包みを持ち、少し酒に醉ひしこなし、是を芝居の出方大常、新太の兩人入口の臺の上にて、兩人なすゝめて居る、下手茶屋の娘兩人、辨當箱土瓶などの世話をして居る。此のもやう、芝居の中の舞、流行唄にて幕あく。

大常　只今千本櫻が明いて居りますから、御見物はいかゞでござります。

鐘　御殿山の歸りがけに、千本櫻は何が附いて居るが、客留としてありながら、まだ人を入れるのか。

大常　イエ骨を折りまして、お二人ぐらゐはお入れ申します。

鐘　松公、まだ酒が半分の餘あるから、やりながら見て行かうか。

松　品川の勞れと御殿山で、夜櫻をながめながら、ぐつすりやつてこゝまで來たら、めつぽうおらアねむくなつたから、楊弓へでもいつて寢てえのだ。

鐘　年よりじみたことをいふなえ。宮の内の者へ聞えると、見つとむねえや。い、からおれと一緒にへえれ。

新太　丁度只今御殿場でござりますから、忠信の狐の狂ひが、極くよいところでござります。

松　何だ狐だ、昨夜はおれが狸をしたから、けふは役者が狐をするのか。

鐘　そんな駄じやれは義經で、靜御前はやめにして、此の御持參の樽の口から、たゞのみとしようかえ。

松　イヤ、千本一番のしやれだな、ところが、にしめが少ねえ。

大常　イエ、にしめ屋なら、中に居りますから、御自由にお召し下さりませ。

松　ナニ、にしめ屋がある、イヤ宮地の芝居は調法だ。

トこれにて、やはり右の鳴物にて、松錢を出し兩人中へはひる。

新太　角力がかぶつたので、めつぽうお客がつッかけて來るが、いくら入れたくつても中はぎつちり、かういふ大入りに、木戸番は却て樂が出來るものだ。ドレ、おりて一服やらかさうか。

ト兩人臺よりおりて、煙草をのむ。

茶屋娘おまつ　けふはお角力の顔ぶれがいゝので、大そうな見物でござんしたが、お客が違ふとはいふものの、こぼれが大

分芝居へ來たぞえ。
芝居娘およし　そりやア見物の來るはずさ、御殿場の宙乘りなどは木挽町の芝居でもかなはないくらゐだとこの近所の評判でござんす。
新太　何でも氏子繁昌でなければ、互ひにいけないが、まづ宮内でも芝居と角力、楊弓店に吹矢にからくり、食物店は大々餅、明神さまのおさい錢から、日蔭町の商人と、其うるほひは大したものだ。
まつ　アヽモシ〱、そんなにならべたてなくても、わたしやア芝の產れだから、よく知つてゐますわいナ。
新太　そんならあとは言はないが、これで屋敷の中間が來ないと、金がもうかつてしやうがないくらゐだ。
よし　それではあんまりうますぎませう。時々お屋敷のお中間衆が來て、常さんも新太さんもげんこつを頂戴するので、それが罪亡しになるのさ。
新太　イヤ折助のげんこつは、芝居ものは眞平ごめんだ。
ト大拍子、流行唄になり、花道より序幕の葉山九郎次羽織着流し大小雪駄、萬代山の住職易隨十德着流し、龜屋の小娃染之介、高髷の島田かつら、加茂川染の中振袖、はでなる帶、駒下駄、鶴屋の小娃八重菊、同じく若衆かつら、巾の廣き男帶、着流し駒下駄にて、兩人日傘をさし、後より男藝者乘り新、羽織着流しにて附添ひ出來り、花道にて、
葉山　萬代山の方丈は、衣より今日の御形が御入體に似合ふやうぢやな。
乘新　實に御寺樣とは見えませぬから、八重菊さんと御一緒でも、誰も何とも申しませぬ。
八重　全體が御經ぎらひで、お線香のかをりがありませぬから、お寺樣の中でも通人でありますよ。
易隨　アヽコレ〱、さうお寺〱といつては困る。何ぼなんでも晝日中、おぬしを連れて步くのは、チト法外と申すものぢや。
染之　それでもあなた、葉山さんと御一緒でござんすからかまはないではござんせぬか。
易隨　サア嬉しいと氣味のわるいのと、兩方がごたまぜで坊主頭へ汗が出てまゐつた。
ト舞臺へ來り、床几へ腰をかける。
まつ　乘り新さん、大そうお早うございましたね。
乘新　龜屋のお客が御二方、染之介さんと八重菊さんをお連れになつたから、御案内申しておくれ。

新太　先刻から棧敷を、とつておきましたから、直ぐ入らしつてくださいまし。

　ト此うち茶屋娘およし、茶を持つて來る。

葉山　狂言は何の所が初まつて居るの。

新太　ヘイ、千本櫻の御殿場が、明いて居ります。

乘新　チトお遲うございましたから、千本の四の切でございます。

葉山　晝は四ツ、夜は三ツと、玉の切れるのは、承知して居るわい。

乘新　イエ、このお子さんの玉のことではござりません、千本櫻の四の切でござります。

八重　アレマア、恥かしい。そんないやらしいことをおつしやいますな。

易隱　何のいやらしいことがあるものか、明けを買ひに行く客とは違ひ、晝夜の玉をつける客人、却てそち達の見得になるのぢや。

八重　アレマア、いやらしい、あんなことをおつしやつて、往來中で、オヽ恥かし。

　ト顏をかくす、此うち木戸番新太、茶屋より蒲團煙草盆を持ち出て來る。

染之　モウ遲いさうでござんすから、早うはひらうではござりませぬか。

葉山　よければ、案内いたしてくりやれ。

新太　サア、入らつしやいまし。

　ト流行唄梓弓の音になり、新太案内して皆々木戸の内へはひる。

大常　七軒町の龜屋の子供衆のうちでも、染之介さんはがらもちいさいし、どう見ても女のやうだが、八重菊さんはべらぼうに、とうがたつてゐるぢやないか。

まつ　何のこつたかしらないが、のどへこぶが出て來たから、モウ今年一ぱいくらゐで、あがりだといひましたぞえ。

大常　あの人などはこぶが出なくつても、初手から男と見える身體だ。

まつ　それでも今のお屋敷さんと、お寺さまの大の氣に入りで、今日も芝居をせがまれて、つれて來たのでござんすぞえ。

大常　今江戸中で子供屋流行、湯島よし町八丁堀と、神明前の七軒町だか、この四ヶ所の其うちでも、芝が一番美くしい。

まつ　加茂川染の中振袖で、高髷に結つたところは、どうしても女でござんすなア。

よし　あのお寺さんは、下谷ださうだが、湯島や八丁堀へお出でなく、わざ〳〵遠い芝へ來なさんすとは、この道ばかりは、別なもんでござんす。

大常　ナアニ、あの邊のお客は近所へ知れると面倒だから、遠くてもこつちの方へ來るさうだよ。

まつ　それでは山内のお方は、やつぱり湯島へお出でかねえ。

大常　ナアニ、山内のお寺方は、大てい品川へ行くといふ評判だ。

ト流行唄、楊弓の音になり、花道より辰五郎の女房おだい、鳶の女房餘所行きのこしらへ、悴喜太郎手遊びのめ組の纏を持ち、おだいに手をひかれ、跡よりおもちや文次こゞ縄の皮包みを提げ出て來り。

文次　喜太ちやん、たうとう歩いたね。

だい　こんなにお土産が出來たもの、歩かなくつてどうなるものか。

文次　山内の金つばに、すてきな纏を買ひなすつたから、火事が始まつても辨當附きだ。

喜太　文次、おぶつてくんねえ。

文次　常談をいつてはいけねえ、今はめたばかりぢやアねえか。

喜太　おらアいやだ〳〵。

だい　コレ、往來中で見つともない、向うへいつて吹矢を見せないよ。

文次　姐さん、マア花屋までお出でなさいまし。サ喜太ちやん、あそこまで歩いて行きねえ。

トだましながら舞臺へ來り床几へ腰をかける。葭簾のかげより、幕明きの茶屋娘出て來り茶を出す。

まつ　今日はどちらへ、お出かけでござります。

だい　少しうかゞふことがあつて、燈籠佛さまへ行つたかへりがけ、いつもきまりで宮の內で吹矢を見るのでござんすよ。

まつ　オヤ吹矢でござりますかえ。どこにもござりますさうなが、神明さまのが昔から相かはらずだと申します。

文次　姉さん芝居は這入りますかね。

よし　毎日大入でござりますのに、只今方角力がはねましたから、それからまた込みますので客留になりました。

だい　角力はいつまでかゝるだらうね。

文次　此前角力は降りがつゞき、二月の五日に初まつて今日は三月廿三日、二た月越しの興行でよわつてゐると聞きましたが、這入ることはこれも毎日いつぱいでございますよ。

よし　それに今日は評判の六日目の取組で、いゝ顔ぶれだと承りました。

文次　ム、今日は雷に柏戸、平石に錦木、四ツ車に荒岩でこの三枚が呼びものだつた。

よし　雨が多いので長くはかゝりますが、大そうもうかるので掛りの衆は福々ださうでござります。

　ト此時芝居小屋のうちにて、わや〳〵いふ、おだい聞耳立て、

だい　大ぶごた〳〵するやうだが、間違ひでもあるのぢやアないかえ。

まつ　客留のくらゐでござりますから、只今忠信の引抜きで、大方ほめたのでございませう。

だい　そんならよいが此近所は、組合の若い者がよくはツつき歩くから、大きな聲でもすると、びつくりするよ。

文次　ハツクシヨ、姐さん噂をいつちやアいけねえぜ。

喜太　文次は弱いくせに、喧嘩が好きだよ。

文次　エヽ、見たこともねえくせに。

喜太　エヽ、湯屋で喧嘩をして、ふた安になぐられたぢやアねえか。

文次　あれを見たのか、こいつアしまつた。

喜太　ざまア見やアがれ、いくぢなしめ。

　ト此うち始終後ろで、がや〳〵する。おだい心づかひの思入あつて、

だい　けふは芝居へ、誰か來て居やアしないかえ。

文次　濱松町の長次と露月町の龜は、角力へ行くと内を出ましたが、芝居へは誰も來やアしませぬ。

まつ　お角力がはねてから、お角力衆はお出でになりましたが、組合の衆はぞんじませぬ。

だい　向ふ見ずの人達ばかりで、實にやるせがありませんよ。

文次　ハツクシヨ、又噂をしてはいけませんよ。

喜太　早く吹矢へ行かうよ。

　ト此うちおだい巾着より、二朱を出し紙にひねりおいて、

だい　毎度お世話になりまする。

まつ　オヤマア、お氣の毒さまでござります。

文次　マアいゝから、とつておきねえといふに。

だい　いゝお世話やきだねえ。（トやはり右の鳴物にて、三人上手へはひる。）

まつ　おかまひもしないで、お氣の毒さまでございます。

よし　濱松町の頭のおかみさんは、この近所で評判のお方でござんすね。

まつ　何でも以前は、それしやの果だね。

よし　あれは、それ、以前品川の藝者衆で、大そう評判の賣ッ子だつたね。

まつ　道理で、いゝ氣前だと思つた。

トあたりを片附ける。この以前よきほどに、木戸番木戸口へはひる、此時バタ／＼にて、木戸の内より、木戸番大常、新太走り出て來り、

新太　座元さんは、居ねえかえ／＼。（ト下手の入口をさがす。）

大常　表にはお見えなさらないが、あわたゞしい。

茶屋娘兩人　どうしたのでござんすえ。

大常　サ、とんだ間違ひが初まつたので、うつちやつておくと芝居をしては居られない。

まつ　なぜまたお前がたで、とめないのだえ。

新太　どうして相手へ疵をつけたから、おら達の手際には行かねえのだ。

大常　何にしろ、困つたものだなア。

トうろ／＼する。流行唄へ冠せて幕を引く木の音、しやぎりになり、バタ／＼にて、木戸の口より男女見物の仕出し「喧嘩だ／＼」といひながら逃げ出て來り、此中へ幕明きの住職易隨、染之介八重菊の手を引き、乘り新附いて出て、八重菊アレエ／＼と泣くを、易隨介抱しながら皆々と一緒に上下へ逃げてはひる。此中へ、鳶の者濱松町の長次郎、露月町の龜右衛門、着流し三尺帶片肌ぬぎにて、幕明きの職人の傘と松のたぶさを持つて引きずつて出て來る。これを九龍山浪右衛門、着流し駒下駄、後より浪の花、ゆで蛸とりてきにて、とも／＼止めながら出て來り、これを分けようとする、ごつちやの立廻りあつて、九龍山双方を押へ、

九龍　コレサ、お前がたも腹も立たうが、双方とも穩便にしてやつてくだんせ。

長次　イ、ヤ、穩便にやア出來ねえ。舞臺に遠い所なら知らず、ツイ土間のはなッ先に居て、大きな聲をしやアがつて、邪魔になつてならねえのだ。

亀右　おまけに傍に見物して居る、百姓をつかめえて、酔つたまぎれになぐるたア、あんまり無法な野郎だから、見るに見かねて、
両人　しよびき出すのだ。
兼　サア、から疵をこせえられちやア、あしたから仕事に出られねえ。
松　この疵はこゝに居る、仕事師がつけたのだ、サア、どつちともしらちをつけてくれ。
両人　エヽ、生意気なことをいやアがるな。
ト立ちかゝらうとするを、九龍山止める。此うちとりてき両人兼と松に、引受けるから逃げろといふこなしこれにて両人は悪態をつきながら、下手へそこ〳〵にはひる。
長次　ヤア、相手を逃しやアがつたな。
亀右　サア、逃したからにやア、うぬが相手だぞ。
ト九龍山と力士両人にくつてかゝる。此うち木戸の口より、四ツ車大八、着流し一本ざしにて出て来り。
四車　何だ〳〵、まだいさかひをしをるのかえ。
九龍　見るに見かねて止めに這入つた、おれを相手とくつてかゝり、言ふことをきかぬわえ。

四車　きかざアそのまゝ、しよびき出せ。
長次　四ツ車か、何だしよびき出せ、面白え、サアしよびき出せ。
亀右　これからは角力取が相手だぞ、よく喧嘩を買やアがつたな。
四車　野郎ども、面倒だ、むかひへ突轉ばせ。
両人　オイ。
ト流行唄、大拍子になり、長次郎、亀右衛門立ちかゝるを、とりてき両人にて突倒す、此うち下手よりめ組の辰五郎、羽織着流し、尻はしをり、股引き草履にて出で来り、長次郎につき當り、顔見合せ、
長次　ヤ濱松町か、いゝとこへ来てくんなすつた。
辰五　見りやア何か間違ひがあつたやうす、いつてえこりやアどうしたのだ。
長次　芝居を見に来て、のんだくれと物言ひをしたを、角力取が喧嘩を買つたが始まりで。
亀右　おらッち二人を表へ突き出し、恥をかゝせやアがつたのだ。
辰五　ナニ、角力取が恥をかゝせた。
ト上手を見やり、思はず四ツ車、九龍山と顔見合せ、

相手といふのは、お前達か。

九龍　いかにも、わしが買つた喧嘩を、丁度一緒に居合せた、

四車　兄弟分の四ツ車が、見かねてこゝへ飛び込んだのだ。

辰五　喧嘩を買つた兄弟分は、しかも此春品川で、出逢つた相手の四ツ車。

長次　あの晩事は納まつたが、又芽を吹いた芝居小屋。

亀右　濱松町が來たからにやア、よもやうつちやつてはおかれめえ。

辰五　そりやア言はずと知れたこと、そこへ行つて辰五郎が、喧嘩のしらちをつけにやアならねえ。

ト摺鉦入り、はでなる合方になり、三人立ち上り、九龍山は上手、四ツ車は眞中、辰五郎は下手にて、めいめい床几へかけ、力士は上手、長次郎、亀右衛門は下手へ立身、こゝへ木戸の口より葉山九郎次出て來り、

葉山　委細は木戸で聞いて居たが、これで角力が負とならば、我朋友より出羽と有馬へ此一らつを申し上げさせ、再び出入りをあげさするぞ。ドレ、この邊で見物いたさう。

トすつと上手の床几へかけ、扇づかひをする。此内芝居の出方、茶屋娘うろ／＼する。

四車　出入り屋敷の旦那方に、御贔屓の葉山様が、丁度この場においでなさるは、屋敷へ知れても面ばれに、こつちのためにももつけの幸ひ。

九龍　芝はめ組の持場所と、子分子方が威張りちらし、角力や芝居で言ひてへざんめえ、見るに見かねて買つて出た、いせんの名前は水引清五郎、今改めて九龍山、たゞあやまつてもゐられねえ。

辰五　そりやアこつちも同じこと、纏の内なら知らねえこと、まだ二段目の七枚目、その水引が春場所から名前を替へた九龍山、力自慢の左利き、鐵砲突につゝかけられちやア、あとへは引かねえ意の者、此神明から愛宕をかけ、天狗と仇名の豆辰が當番あげた上からは、籠目の纏をこかすとも、此の消口は取らにやアならねえ。

四車　この春しかも島崎で、出逢つた時も指をくはへ、青菜に鹽で土俵をおりた、角力でいへば褌かつぎ。

九龍　稽古廻しをしめ直し、一度が二度でも三度でも、地取のつもりでついて來い、いくら相手は變らうと、兄角力の四ツ車と、二人がウンと仕切つたら、毛筋のすきもありやせぬわえ。

辰五　若いやつらが火の中へ、飛び込むところをおれが扱ひ、濟ましてやつたをいゝ氣になり、消口取つた氣だらうが、又燃えあがつたそのごたく御尤もとは聞かれねえから、あふりをくつておッこちるか、たゞしはこのまゝ燒止まるか。

四車　角力と鳶の達引は、盛りを競ふ遲櫻、

九龍　ちらす火花か神明で、

辰五　命のやりとり、

三人　しようかえ。

ト三人きつと見得。芝居の出方二人、心づかひのこなしにて、

大當
新太　ア、誰ぞ來てくれゝばいゝがな。

トうろ／＼する。此時芝居小屋より、座元江戸喜太郎、羽織着流しにて走り出て來り、九龍山と辰五郎の中へはひり、

座元　どうぞ暫く、お待ちなすつて下さりませ。

九龍　誰だか知らぬが、怪我するぞよ。

辰五　どかねえか／＼。

座元　イエどかれませぬ。私はこゝの座元、江戸喜太郎でござりますが、今あなた方が宮の内で間違ひになつたも、元は芝居から起つた事ゆゑ、あすから興行が出來ませぬ。それでなくても、今日も打出しましたくらゐゆゑどうぞ私を助けると思しめして、穩かに願ひたうござります。

トいへども、だまつてゐるゆゑ、

モシ頭。モシ關取衆。どうぞお聞き濟み下さりませ。

と双方へたのむ、此うち上手の出方に角力、下手は長次郎、龜右衞門よろしく思入。座元は心づかひのこなしにてたのむ。

四車　どうだ水引、座元が難儀になるといふて、このやうに賴むものに、どうしようか。

九龍　オヽよいわ、おいらの方は預けるとしようわえ。

座元　ヤア、ありがたいことでございます。モシ頭、どうでござりませうな。

辰五　元より人の難儀になるを、好むわしでもねえけれどよんどころない意氣張りに、もう引分けにやア行かねえが、こゝはお前に免じてやらうよ。

座元　エヽ、スリヤ、我慢して下さりますとか。ア、これで安心いたしました。關取、頭、大きにありがたうござります。

ト辰五郎思入あつて、
辰五　太夫元の頼みゆゑ、此場はこのまゝ別れるが、是ぎりおやア濟まねえぞ。
四車　あすの角力はもはや七日目、モウ三日で打上げるが出會ふとあるならおら達は、
九龍　十日とつても芝に居て、けふは車屋、あすは平松、門なみのんで待つて居よう。
辰五　ムヽ、それぢやアきつと逃げかくれは、しねえとこんたはいふのだな。
九龍　何で卑怯に、
兩人　逃げるものか。
辰五　きつと言葉を忘れるな。
葉山　アヽ、さすがは名うての力士だけ、此の場で事を起さぬとは、身共もこれには感心いたした。かげには屋敷が附いて居れば、決して負けては相成らぬぞ。
トけしかける。此うち長次郎、龜右衞門は心のはやる思入あつて、
長次　オイ〳〵頭、さつきからだまつて聞いて居りやア、こゝでは喧嘩をしなさらねえのかえ。
龜右　このまゝ指をくはへた日にやア、組合の名折れになるから、何とかしらちを、
長次 龜右　つけてくんねえな。
辰五　エヽ、手前達は文句をいはずと、一切おれに任して置け。
ト立上る。これにて四ツ車九龍山も立上る。長次郎、龜右衞門はいま〳〵しきこなしにて、下手へついて行く。
九龍　それぢやア此まゝ別るゝとも、
辰五　いづれ後日に改めて、
四車　喧嘩の相手は四ツ車と、
九龍　九龍山浪右衞門だぞ。
辰五　ムヽ、濱松町の辰五郎を、肚胸をすゑて覺えて居ろよ。
トこれにて辰五郎、長次郎、龜右衞門三人花道附際へ行く。
葉山　がうぎにえらいごたくを申すが、後ろ姿は青菜に鹽だな。
浪の　ヤイ、ごくだうめ。
ゆで　ざまア見い。
長次 龜右　何だと。

ト戻らうとするのを、辰五郎止めて、

辰五　エヽ、いふなら勝手に。

ト制し、舞臺の三人と顏見合せるを、木の頭、

いはしておけ。

ト此引張りよろしく、鳴物なしにて、　ひやうし幕

と幕引きつけると、

長次　おらア、どうも、癪にさはらア。

龜右　頭どうあつても、

兩人　あいつらを。

トまた行かうとするを、

辰五　エヽ、よせといつたらよさねえかえ。

トこれを大拍子、はでなる唄になり、兩人戻らうとするを、辰五郎後より制しながら、花道へはひる。後シヤギリ。

三幕目

數寄屋川岸焚出内の場
濱松町辰五郎内の場

役名――め組の辰五郎。露月町の龜右衞門。鳶の者脊高竹。茶飯屋與助。鳶の者三ッ星半次。力士ゆで蛸八五郎。焚出しの手代茂助。焚出し人足。番太郎杢藏。焚出しの喜三郎。辰五郎女房おたい。喜三郎女房おいの。辰五郎悴喜太郎。品川の藝者おせん。其他。

本舞臺上寄りに三間常足の二重、蹴込板張り、正面紺の暖簾口、上手、まひら戸の押入戸棚、下手鼠壁に二段に出入り屋敷の帳面を掛け、下手一面に平舞臺、平釜をかけし土竈、後ろ折廻し板羽目、ずつと下手に車井戸、上手に米俵十俵ほど積んであり、すべて數寄屋川岸焚出し喜三郎臺所の體。二重上手に手代茂助、羽織着流し、かけ硯を置き、帳をつけて居る、下手に序幕の番太郎、木綿半纏、着流し、くろみ足の膳へ肴を入れし皿を置き、燗徳利猪口を持ち、手酌で酒を飮んで居る。平舞臺下手に若い者〇△の二人焚出しの印半纏、股引三尺帶にて、深い御膳籠へ辨當箱を詰めて居る。同じく若い者□◎の二

八、一人は四斗樽へ米を入れ、千切にてといで居る、一人は米あげ笊へ米を入れて居る。此下手に茶飯屋、半纏股引尻端折り、草履にて、藁袋を持ち、薪へ腰をかけ、煙草を呑み居る。此の見得住吉踊りの鳴物にて幕あく。

○　茂助さん、神田樣は附きましたか。

茂助　けふは五人ふえたのだな。

○　アイ、さうでございます。

△　筋違と淺草は、いつもの通りです。

茂助　よし／＼兩方とも附けた。

□　茶飯屋さん、けふはいつもより遲かつたの。

茶飯　ゆうべ遲くなりましたので、今朝は少し寢すごしました。

○　それおやア、しつかりもうかつたね。

茶飯　賣殘つたので、遲くなりましたのさ。

茂助　こつちの内は繁昌だが、世間はよつぽど不景氣ださうだ。

茶飯　こちらのお内の御繁昌は、旦那樣の御氣性がえらいからでござります。此間も私に、朝のうち臺所の手傳ひをしろとおつしやるから、あがつて驚きましたのは、若い衆がとぎあげて流す米が、自然とたまり、流しのどぶが眞白で、それをすくひあげますと、小二升はかゝさずあり、それを毎日おもらひ申すは、濡れ手で粟でござります。

番太　そりやアおまへのいふ通り、立ちよらば大樹のかげで、わしなども此春まで高輪の自身番に定番をして居ましたが、ふとしたことからこちらさまの、一方ならぬお世話になり、神明町の番太郎の株を買つておもらひ申し、小商ひに一人では閑るだらうと女房まで、よいのをお世話くだすつて、二人でかせぎましたので、國に殘したお袋を、呼ばれるやうになりました。

○　遠國からこの江戸へ、かせぎに出かけて來る人は、形にも振りにもかまはずに、

△　たゞたまるのが一方だから、好きな酒を錢を出しちやア、五勺の酒も飲まねえから、

□　二三年もたつ其うちにやア、しつかり金をこしらへてハイ左樣ならと御歸國だ。

○　金せへたまりやア用はねえと、あと足で砂だから、遠國者にやア油斷はならねえ。

茂助　杢藏さんなぞも今のうちは、かうして毎日機嫌きゝ

に來なさるが、今に金がたまつたら、ハイ左樣ならとあと足で、國へ歸る仲間だらう。

番太　どうして／＼わしなどは、江戸の土になる心、なぜといつて見なさい、内でかゝアが商ひをして錢をもうけてくれますから、晝のうちはこれといふ用のない番太郎ゆゑ、御恩になつた旦那さまの、御機嫌伺ひにあがりますも、ありやうはこの通り、お臺所で好きな酒をたらふく飲まして下さりますから、實にありがたいことでござります。國へ行つたらまづい酒も錢を出さねば飲まれませぬ、それゆゑ國へは歸りませぬ。

茶飯　私などもこの春までは、溜めたら國へ歸らうと思つては居りましたが、かういふよいお出入場が出來ては、ソウ／＼國へは歸りませぬ。始終はこちらのお家へ來て荷かつぎにでも使つてお貰ひ申したうござります。

茂助　茶飯屋さんも遠國だが、やつぱり金溜め一方か、ついに休んだことがないの。

茶飯　其日かせぎの貧乏人、一晩でも休まれませぬ。

○　麥飯から橋向ふへくらげえをした女があるので、毎晩のやうに出かけるが。

△　大木戸か八ツ山下で、おめえに逢はねえことはねえ。

茶飯　去年の暮から品川の景氣のよいので早く賣切り、いつも夜明しをしますが、芝の大鐘を聞かぬうち、たいがい家へ歸ります。

□　夜商ひをする者は、どろぼうと同じことで、晝寢て夜のかせぎだが。

○　長い月日のそのうちにやア、怖いことがあつたらうな。

茶飯　往來のない晩などは、怖いことがござります。

番太　怖いといへばわしがまだ、高輪に居た時分、こなたの茶飯を明方食ひ、別れたことがござつたの。

茶飯　あれはしかも此春の、七草の晩だつたが、あの晩何か怖い目にあひなすつたことがありますか。

番太　サア七ツ廻りに出たところ、どういふことかわからぬが、わしが持つてゐた火の番の、提灯を蹴飛ばしたから、何をするといふところへ、江戸の方から早歸りの、四ツ手駕籠がそこへ來ると、それからごつたげえす騒ぎに、横面をはり倒され、ひどい目にあひましたが、相手は逃げてしまひました。

茂助　そりやとんだ目にあひなすつたが、その相手はわからないかえ。

番太　その折は知れませなんだが、神明町の番屋へ來てか

ら、相手の形に氣がつきましたが、組合の紫がよく着ます、當番つなぎを着て居りました。

茂助　それでは相手は組合の紫か。

〇　何にしろ出合頭で、

△　おめえは打たれ損だつたな。

トこのうち、暖簾口より喜三郎羽織着流しのこしらへにて顏を出し、番太郎の話しを聞き、うなづいて奥へはひる。

〇　杢藏さんの話しを聞いて、とぎかけた米がふやけてしまつた。

◎　サア〳〵、早く笊へあげねえ。

ト米あげ笊へ米をあげ、桶をそのまゝ置く、これを茶飯屋見えぬやうに、米を小桶へあける。杢藏これを見て、

番太　イヤ茶飯屋さんは感心だ、よく殘つた米を集めてあげなさる。

茶飯　これは御奉公でございます。

番太　殘つた米はよつぽどあるの。（トいひかけるを、）

〇　ア、コレ、よけいな口を利きなさんな。

番太　それでも感心なことだから、

茶飯　イヤ、早く片付けて歸りませう。

ト茶飯屋は手ばしこく米を袋へあけ、若い衆へ錢を渡す、杢藏これを見て、

番太　なアるほど、立ちよらば大樹のかげだ。

茶飯　茂助さん、杢藏さんは隅へは置けないね。

茂助　立ちよらば大樹のかげとは、實にこりやア恐れ入つた。

番太　どうだえ。（ト兩人を見やり、）わしもよつぽど。

ト持つたる德利をおくを、道具がはりの知らせ、

氣が利いて來たらうの。

ト幕明きの鳴物になり、茶飯屋だまつて居ろといふこなし、番太郎のみこむ。此もやうよろしく道具廻る。

本舞臺四間の間平舞臺、上の方一間床の間、東照宮の掛物、三方へ神酒德利を載せ備へあり、眞中一間大阪格子、下の方帳場簞笥、帳面入といふ箱、此上二枚引の半襖、上の方障子屋體、下の方打附格子の中窓、上下板羽目、此所に用水桶手桶積みあり、いつもの所門口、すべて焚出し居間の體、爰に鐵瓶を

かけし長火鉢を置き、座蒲團の上に以前の喜三郎住ひ、傍に女房おいの、着流し世話なりにて住ひ、下手に品川の藝者おせん、餘所行きのなり、力士ゆで蛸着流し、派手なるなりにて住ひ、此の見得合方にて道具留る。

いの　おせんさん、よく訪ねておくれだ。まア、けふはゆつくりしておいで。

せん　ありがたうござります。

喜三　なんだか睡さうな顔付きだが、ゆうべ遲くなつたのか。

せん　ハイ、新川の大一座で夜明しになりましたから、直にそのまゝ寢ませずに、樹木谷へ朝參りにおまゐり申して、こちらさまへ御無沙汰になりました申しわけに上りました。

喜三　なるほど、けふは廿四日、淸正公様の御縁日だつた。

いの　樹木谷の蛇の目せんべいを澤山とありがたう。

せん　おいしくもございませんが、甘いものがお嫌ひゆゑ。

いの　かうばしくツてうまいから、いつでも買ひにやりますよ。

喜三　ゆで蛸はけふは樂だの。

ゆで　ハイ、きのふの降りでけふあすは、場所が休みでござります。かう降りが續いては、あんまりからだが樂過ぎて、皆品川へ入れ上げます。

喜三　今度の角力は降りがちで、初日は一月五日だつたが、けふは三月廿四日、なんぼ晴天の興行だつて、十日の場所をべん／＼と、六十日もかゝつては、勸進元の藤島も、雨にやア弱つて居るだらう。

いの　世間の人の悪口に、あんまり雨がふりつゞくので、藤島とはいはないで、ふりしまだといひますさうだ。

喜三　なんぼ女が見られねえといつて、そんな悪口を利かねえがいゝ。けふのあがりあんばいでは、あしたは天氣は大丈夫だ。

せん　妾どもは本場所は、十日目でなければ見られませぬから、花角力の外はぞんじませんが、おとゝい錦木關と四ッ車關の取組は、面白かつたさうでござります。

ゆで　おとゝひ一の取組で　水を入れて又暫く押合つてをりましたが、つひにあづかりになつた時は、割ッかへるやうでござりました。

喜三　屋敷の御用が重なつて、つい見ずに仕舞つたが、どういふ取口であつた。

いの　ゆで蛸さん、話しておきかせな。

ゆで　只今お話し申しますが、おせんさんちよつと相手になつてください。

せん　わたしや角力なぞは、知りませんよ。

ゆで　エヽ、毎晩色男を取るくせに。（トおせんの手をとり引き出す。）

せん　アレサ、悪ふざけをおしでない。（トいやがるおせんを無理に立たせて、）

ゆで　マア、形ばかりするのだから、ちよつと立つてくんなせえ。まづ最初錦木關が左をさすを引ぱづし、四つに組んで四ッ車關が、力まかせに押出さうと、おり／＼と押して行き、モウすこしでふみ切るを、さすがは手取りの錦木關、からだをひねつてふみ止り。

ト此のうち角力太鼓の合方、ゆで蛸いやがるおせんを相手に取組の思入。

水を入れろ／＼と御見物が、やかましいので水を入れて取組ませ、又暫く押合うたを、四ッ車關がふりほどいて鐵砲突きにぽんとつき。

トゆで蛸おせんの胸をつく。

せん　アイタヽヽ。（ト倒れる。皆々びつくりして、）

喜三　どうした／＼、怪我でもしやアしねえか。

せん　イエ／＼、怪我はいたしませぬが、胸をひどくつかれたので、痛くつてなりませぬ。

いの　あの力でつかれてたまるものか、怪我のないのがお仕合せだつた。

ゆで　ツイはなしに實がいつて、とんだことをしました、堪忍してくださいまし。（トあやまる。）

喜三　イヤ、この取組はおれが預かり、モウ／＼よしにするがいゝ。

いの　おせんさん、疵でもつきやアしないかえ。

せん　イエ／＼、何ともございません。

ト此うち喜三郎懐中より丼の紙入を出し、中より金を出して紙に包み、

喜三　二人にいつぺい飲ませるのだが、けふは屋敷の客があるから、これで自由に飲んでくんねえ。

ト金包みをやる。兩人取つて、

ゆで　これは有難うございます。

せん　おかみさん有難うございます。

ト辭儀をして、金包みを帯へはさむ。ゆで蛸は金包みを持つて、

ゆで　これをお貰ひ申しては、又品川へ行かれます。

せん　増本へおいでなら、これから一緒に行きませうか。

喜三　オヽ、駕籠をやるから、乗つて行きねえ。

ゆで　イエ〳〵、それには及びませぬ。

せん　妾ゃ金春へ寄つてまゐりますから。

いの　それぢやア、初音屋から乗つておいでよ。

せん　ありがたうございます。

ゆで　まづ品川へ行けるとなつたら、モウおいとまいたしませう。

喜三　ちつとも早く、行くがいゝ。

せん　大師様へいらしつたら、きつと寄つてくださいましな。

いの　行きさへすれば、かならず寄るよ。

ゆで　さやうならば、

ゆで
せん　ありがたうございます。（ト門口へ出で）

ゆで　これから甚九で、迷はしてやらう。（ト角力甚九になり、両人捨ぜりふにて花道へはひる。）

喜三　あのおせんは、いくつになるか、いつも元氣でいゝ調子だ。

いの　辰さんの女房になつた、おだいさんと一緒に、宿へ出て居たといふからは、モウよつぽどになりませう。

喜三　なんといつても色の場所、作りで年から若く見えるが、おだいは今ぢやア子供が出來、世話女房で色氣もなく、すつかりくすぶつてしまつたな。

ト合方にて、奥より手代茂助、帳面を持ち出て來り、

茂助　あしたの納めは、どなたでございます。

喜三　増上寺へ御佛參だから、本社の右京様へ二百人前、お月番の根岸様へ百人前、両方とも芝の納めだ。

茂助　かしこまりました。（ト帳面へ附ける。）

喜三　先月遅くなつたので、役人衆に叱られたから、あしたは早く持込むやうに、手配りをしておいてくれ。

茂助　あすはごく早く持ちこみます。

トきやりくづしの合方になり、花道より辰五郎、紺の腹がけ股引、好みの着附、細帯役半纏、鳶の者のこしらへ、藤くら草履にて出て來り、花道にて思入あつて直に舞臺へ來り門口を明け、

辰五　大きに御無沙汰をいたしました。

いの　オヤ、濱松町の辰さんか。

喜三　久しく見えなんだが、どうしたのだ。

辰五　此間から仕事が重なり、いそがしいので何處へも出

かけず、済まねえことゝ知りながら、わつちばかりか、
かゝアまで、御無沙汰をいたしました。
喜三　さういそがしくば來ずともいゝに。
辰五　イエ、あがらなくつちやア濟みませぬ。
喜三　マア、ともかくもこゝへ來ねえ。
辰五　御免なせえ。（ト合方きつぱりとなり、火鉢のそばへ住ふ）
いの　さうして辰さん、おだいさんはかはることもないかえ。
辰五　宿から家へ來た時分は、よく血の道で寢ましたが、がきが出來てから丈夫になり、あれもこつちへ御無沙汰をしちやア、濟まねえといつて居りました。
いの　さぞ坊は、大きくなつたらうね。
辰五　いたづらばかりしますから、かゝアが一日小言をいふので、さう〳〵しくてなりませぬ。
いの　おだいさんが小言をいつちやア、お前のあとを追ふだらうね。
辰五　どこへ行くにも一緒に行くと、いはれるのには困ります。
喜三　子供は夫婦のかすがひで、どんなに腹立つことがあつても、子供に免じて喧嘩もなく、なんにしてもいゝことだ。（ト辰五郎これを聞き思入）
いの　さうしてけふは、何處へ、おいでのだえ。
辰五　何處へも行くのぢやアございません、こつちの家へ來ましたのだ。
喜三　なんぞ用でも、あつてのことか。（ト辰五郎思入あつて）
辰五　お暇乞ひに參りました。（ト喜三郎合點の行かぬ思入あつて）
喜三　やぶから棒に暇乞とは、何處か遠方へ出かけるのか。
辰五　よんどころない仕事をたのまれ、遠方へ行きますから、もし歸りが遲くなりましたら、殘して行きますかゝアやがきを、お賴み申しにまゐりました。
喜三　土地の仕事が重なつて、何處へも出ねえといひながら、遠方とは何處へ行くのだ。
辰五　エ、わつちが行くその先かえ。
いの　ついに遠方へ行かないお前が、遠方へ行くといひなさるは。
喜三　いつてえ何處え仕事に行くのだ。
辰五　出入り場先からたのまれて、甲州の身延山で、五重

の塔が修覆になり、足場をかけに行きますのさ。

喜三　塔の足場をかけに行くのか、そいつア危ねえ仕事たな。

辰五　一つ落ちりやア命がけさ。

喜三　ム、、さうか。（ト喜三郎思入あつて、）茂助竹の皮があるめえから、皮屋へ取りにやつておいてくれ。

茂助　かしこまりました。

喜三　おいの、鈴木へ荒えところをさういつてやつて、來たら一ぺいつけてくれ。

いの　アイ、直ぐにさういつてやりませう。

辰五　けふはちつと急ぎますから、決してかまつちやアいけません。

喜三　おれも喰ふから、遠慮しなさんな。

いの　辰さん、ゆつくり話しておいでよ。

ト合方になり、おいの茂助奥へはひる。喜三郎立上り、あたりをうかゞひ、戸棚から序幕の煙草入を出し、腰にさげ元の所へ住ひ、

喜三　お前身延山へ、足場をかけに行くといふのは、嘘だらうな。

辰五　エ、外なら知らずこつちの家へ、なんで嘘をつきやせう。

喜三　嘘でなけりやアなほのこと、塔の足場とあるからは、てうど角力の櫓くらゐの高さはあるに違えねえ、天狗と渾名の豆辰だから、落ちることはあるめえが、もし落ちたらば命づく、こりやアよしにした方がよからう。

辰五　おことばをそむいちやア濟みませんが、一旦約束したからは、今更よすにもよされませぬ。

喜三　そりやアお前の氣性だから、よすにもよされめえけれど、獨り身ならば知らねえこと、女房子のある身分なら、思ひきつたらどうだらう。

辰五　ためを思つて親切に、さういつてくんなさるを、用ひねえのも仲間の附合ひ、どうも行かずにやア居られませぬ。

喜三　ふだんはおれがいふことを、よく聞いてくれるのに聞かれねえとは、お前がいふのは八つ山下の遺恨ゆゑか。

辰五　なんといひなさる。（ト合方きつぱりとなり、）

喜三　いよ〳〵身延へ行くならば、餞別にやるものがある。

（ト序幕で拾ひし煙草入を、辰五郎の前へ出す。

辰五　ヤ、この煙草入は。（トびつくりする。）

喜三　覺えがあらうな。

辰五　どうしてこれを。

喜三　おれが拾つたのだ。

辰五　エヽ。（ト兩人氣味合の思入。）

喜三　忘れもしねえ此の正月、しかも八日の夜明前、今年はおれも厄年に身の災難をのがれようと、大師川原へ夜をかけて七ツ立に駕籠にのり、通りかゝつた八つ山下、誰とも知らず二三人、打合ふ中へかつぎこまれ、怪我でもしちやアつまらねえと、厄年ゆゑに氣がついて、駕籠からおれもうかゞひ出て、思はず中へ立ち交り、とんだ芝居のだんまりもやう、拔けつくゞりつするうちに、足にさはつて思はずも、此の煙草入を拾つたのだ。（トこれを聞き、辰五郎思入あつて、）

辰五　そいつは思ひがけねえ話しだ、わつちも其晩七草の初寄合ひから友達と、のんだあげくが宿へくりこみ、陽氣にみんなで騷ぎましたが、よんどころねえ用があつて連を殘して島崎から早歸りにとび出したが、雨氣に星の光りもなく、まつくらやみをやう〳〵と、八つ山下へ出たところ、顏をふき切る朝ならひ、よけるはずみにつき當つた、出逢ひがしらの行違ひに相手の奴をふんづかまへようと、爭ふうちに東もしらみ、長持唄が聞えるので、見とがめられちやア面倒と、思ふところへ乘つこんだ駕籠を幸ひ双方とも、あと白浪と別れたが、その時落した煙草入、とんだ人に拾はれたな。

ト兩人よろしく思入。此時奥より番太郎の杢藏出かゝり、うかゞひ居る。此以前より女房おだい、半纏がけ世話なり、荒い者の女房の拵へ、門口へ來て内をうかがひ、此話を聞き、下手へはひる、杢藏も奥へはひる。

喜三郎案じる思入にて、

喜三　この煙草入は類のねえ、一本ぐさりに金物は、二番組と彫つた短册、しかも根附の大ばたきへ、めの字のあるのがたしかな證據、おれだからいゝけれど、もしもお前が目ざす相手の、イヤサ、相手といつてはあるめえが、ほんのその場の出合頭、間違えぢやアねえ行違え、よもやお前が遺趣返しとか、遺恨を返すといふやうな、そんなことはあるめえが、あつたらあとで女房子がどんな難儀をするかしれねえ。そりやア内輪のことだから、おれが引きうけ世話をしようが、もしも大きな間違ひになつた時にやア引くに引かれず、め組はかりか二番組、一同の騷動になるめえともいはれねえ。疾うからお前にいはうと思つて、實は待つて居たところだ。

と餘所ながら意見をする。辰五郎も思入あつて、

辰五　親切づくでさういつて、くんなさるのはありがたい、氣早と人に言はれましてむやみなことをしましたのは、そりやア厄介のねえ時分、こつちのお世話でおだいをもらひ、喜太郎といふがきも出來、町内持になつてから地主方に可愛がられ、少しは人に立てられて今ぢやア子分も出來まして、人に小言もいひますから、決して馬鹿なことはいたしませぬ、安心しておくんなせえ。

喜三　イヤ、その安心の出來ねえのは、ふだんは人の先へ出ず、ひかへ目にする方だけれど、祖父さんからの附渡り、かんしやく持が一つの疵、イデ鎌倉といふ時にやア、一番がけに火の中へ飛び込むといふ負けねえ氣性、鳶の者にやアいゝことだが、頭となりやアそこらをば、愼まにやアいかねえから、それでおれが案じるのだ。これがたゞの子分なら、どうでもいゝで濟みもしやうが、新橋きつてめ組ぢやアなくてならねえ濱松町、もしもお前に間違ひでもあつた時にやアどうもつれ、今もおれがいふ通り、二番組一同の大騒動にならうから、よくそこらを考へたがいゝ。

辰五　ふとした緣から兄弟同樣、わつちを思つてくんなさる、その親切に對しても、むやみなことは決してしませぬ、七草の晩高輪でまつくら闇でつき當てられ、ちつとばかりの行違ひ、無法なことをしやアしませぬ。

喜三　まだそんなしらをきるのか、おれが方にやアその晩のたしかな證據があがつて居るのだ。

辰五　ナニ、その晩の證據があるとか。

喜三　オイ〳〵、杢藏ちよつと來てくれ。

　ト奥よりいぜんの番太郎出て來り、

番太　ハイ〳〵、なんぞ御用でござりますか。

喜三　今しがた臺所で、話して居たを聞いてゐたが、此正月の七くさの晩、夜明前に高輪で無法にそなたをなぐつたは、當番つなぎを着てゐた者だな。

番太　ハイ、その時は氣がつきませなんだが、神明町の番太郎になりましてから町内ゆゑ、當番つなぎといふことが、やう〳〵にわかりました。

辰五　それぢやアあの晩出ツくはした、夜番は杢藏さんだつたか。

番太　ハア、、わしが持つてゐた提灯を、蹴飛ばして横ツ面をなぐりつけた無法者は、イヤ濱松町の頭とは、わしはちつとも知りませなんだ。

喜三　かういふたしかな證人が、あつてはしらは切られめえ。

辰五　ムヽ。(トぎつくり思入。)

喜三　これから先はいはずとも、日々多人數の入りこむ焚出し、人の噂で聞いてゐる、おれが方では兄弟同樣に思ふから案じるのだ、それをおれにしらをきり、かくし立てはそでなからうぜ。

トこれにて辰五郎ぢつと思入あつて、

辰五　こりやアわつちが惡かつた、どうぞ堪忍しておくんなせえ。

喜三　それぢやア身延へ行くといつたも。(ト辰五郎思入あつて、)

辰五　一たん男が受合つたら、危ねえ足場も合點で、命がけで行きますが、御親切な異見につき、また仕手方と相談して、模樣替にして見ませう。

喜三　さうなることなら見合して、丈夫な仕事をするがいゝ。(ト思入あつて、)しかしそれも男づく、互ひに顏を賣る生業、引くに引かれぬ仕事なら、命がけでやるがいゝ。骨はおれが拾つてやらう。(と辰五郎嬉しき思入にて、)

辰五　アヽ親方、ありがたい、よくいつてくんなすつた、その詞は忘れませぬ。

番太　なんだかさつぱりわしらには、仕事の話しは分らないが、がうぎに仲のよいことだ。

喜三　オイ杢藏、臺所へいつて、酒を早く持つて來いといつてくんねえ。

番太　ハイ〱、かしこまりました。(ト奥へはひる、と奥にて、)

いの　今持つて行きますよ。

ト合方になり、おいの小廣蓋へ酒道具をのせ持つて出る。あとより杢藏鰻の箱を持ち出で、よき所へおく、

鰻の來るのを待つて居て、大きに遲くなりました。

喜三　けふは何か急ぐといふから、早く一ぱいついでくれ。

(ト喜三郎猪口をとりあげる。)

番太　ドレ、お酌をしませうか。(と德利をとり酌をする喜三郎ぐつとのんで、)

喜三　いゝ燗だ。サア、一つのみねえ。

辰五　それぢやア一ぱいのみませう。

ト辰五郎は別れの心にて猪口をとる、杢藏酌をする。此うちおいの中皿を出して、鰻を箱から取りながら、

いの　大そうけふのは、大きいね、

喜三　こいつア、いゝ魚だ、うまからう。

いの　日本橋から向うでは、筋違の深川屋だが、こつちでは尾張町の鈴木の鰻がいつちいゝね。

番太　こりやア一本どのくらゐします。

いの　一串二朱はするだらう。

番太　エ、一本二朱とはたまげたことだ。（ト辰五郎のんで）

辰五　こいつア野暮に、親方へ。

喜三　ム、、返盃するのか。（ト猪口を受取る、おいの酌をする、喜三郎飲まうとして）これが別れに。

辰五　エ。（ト顏見合せ思入、喜三郎猪口を落し）

喜三　猪口は割れたか。

辰五　イ、エ割れませぬ。（ト猪口を取りあげる。）

喜三　割れぬといふは。（ト道具がはりの知らせ）いゝさい先だ。

ト思入、おいの手拭でこぼれた酒を拭かうとするを、木藏とめて疊の酒を吸ふ、このもやうよろしく、合方にて道具廻る。

本舞臺平舞臺、眞中一間中仕切障子の出入り、上手欅鏡戸の押入戸棚、下手鼠壁、提灯がけ、眞中の欄間に神棚、眞鍮の神道具を飾り、上の方一間折廻し障子屋體、いつもの所門口、下の方葺きおろしの下家内に地形の蛸、鋤、鍬、かけや、のこぎりなど鳶道具の書割、すべて濱松町辰五郎家の體。爰に鳶の者春高竹、三ツ星半次、紺の腹掛、半纏三尺帶、鳶口を磨いて居る、傍に辰五郎の倅喜太郎廣袖當番つなぎのなり、おもちやのめ組の纏を持つて遊び居る、此の見得本町二丁目の飴屋の唄にて道具留る。

竹　喜太さん、なぜかアちやんと一緒に行かねえのだ。

半次　おいらなら一緒にいつて、おもちやでも買つてもらふのに。

喜太　おいらはどこへいつたか、しらねえものを。

竹　大方明神樣の吹矢へいつて、歸りは角の太々餅たらう。

半次　太々餅は氣が惡い、二盆ばかり喰ひてえものだ。

喜太　半次はお酒をのむくせに、太々餅が喰ひたいのか。

竹　ナニ半次は盜人上戸だから、酒でも餅でも兩刀だ。

半次　ならうことならきはだのさしみで、グッと一ぺえや

りてえのだ。
喜太　またちやんに叱られようと思つて。
半次　こいつア一番閉口だ。
竹　今の子供は油斷がならねえ。
トやはり右の合方にて、花道より以前のおだい出で來り、直に門口へ來る。
だい　オヤ姐さん、お歸りなさい。大きに留守を御苦勞だつた。誰も家へ來なんだかえ。
半次　裏のをばさんが來たばかり、留守に誰もまゐりません。
トおだい内へはひる。
喜太　おつかア、何處へいつたのだ。
だい　日蔭町までいつたのだが、つい先で話しをされ、半時ばかり遲くなつたが、よくおとなしく待つて居たの。
喜太　なんぞおみやを、買つて來ておくれか。
だい　内を急いで歸つたから、いつも來る飴屋が來たら、買つてやるから呼んで來な。
喜太　アイ〳〵。
竹　姐さん、頭は何處へ行きなすつたえ。
だい　數寄屋河岸の親方へ、無沙汰になつて濟まねえからちよつと行つて來るといつたが、知つての通り話し好き數寄屋河岸から何處かへ廻り、話し込んで居るのだらう。
半次　組合内でも一といつて、二とねえ意氣な頭だから、何處へ行つても女に惚れられ。
竹　姐さんの前で何をいふのだ、あとさきを見て口をきけ。
喜太　半次は間拔けなやつだな。
竹　ソレ喜太さんにせへ、間拔けが知れらア。
だい　穴ッ這入りの噂も聞くが、ふだんならいゝけれど、話しこんで居る時でないから、早く歸つてくれゝばいゝに。
竹　すこし姐さん、ちん〳〵だな。
だい　そりやア子供の出來ねえうち、今おやアそんな苦勞はしないよ。
半次　ほんに姐さんは、いゝ思ひきりだ。
だい　モウ今に歸つて來なさるだらうから、お前へ方も研ぎ上げたら、そこを片附けて置いておくれ。
竹　二本とも研ぎ上げたから、これからどつぷり湯へはひり、
半次　伊勢屋へ行つてさしッ子を、入れかへてもらつて來

よう。
ト鍵を下手の下屋へ入れる。
だい　それぢやア早く、行つて來ておくれよ。
竹　直ぐ行つて、
兩人　歸ります。
ト飴屋の唄にて、兩人下手へはひる。後におだい思入あつて、
だい　切通しの鐘を聞きそこなつたが、モウ日ざしのあんばいでは、七ツを打つに間はあるまい、早く歸つて來なされぱいゝが。
トこれより床の淨瑠璃になる。
〽行く空の日影くもりし春の末、花も名殘りの廿日すぎ、散る間も早き身の上に、思案にくれて我門へ、立歸りたる辰五郎、俄に酒に醉ひし體にて、
ト此うちおだいあたりを片づけ、辰五郎を案じる思入。よきほどに花道より、以前の辰五郎、思案の思入にて出來り、直に舞臺へ來り、思入あつて生醉ひのこなしにて、
辰五　おだい、今歸つた。
〽足もしどろにどつかと坐せば、
ト辰五郎よろ〳〵として下に居る。
だい　直きに行つて來るといひなすつて、大そう遲くなつたね。
辰五　數寄屋河岸へ無沙汰をして、久しぶりで行つたから親方もおかみさんも大そうに喜んで、まづともかくも一ぺえのめと、鈴木の鰻で馳走になり、すきツ腹でめつぽふ醉つた。
だい　ふだんそんなにのめないのに、けふに限つてひよろひよろするほど、そんなに酒をのまなければよいのに。
辰五　それだといつて親方と、おかみさんにすゝめられ、のめねえ酒もついのんで、目のまふほどに醉つたのだ。
だい　そんなに醉つて目がまふなら、紫金錠でもおあがりな。
辰五　薬をのむより、寢る方がいゝ。（ト喜太郎そばへ來て、）
喜太　ちやん、何處へ行つたのだえ。
辰五　數寄屋河岸へ行つたのだ。
喜太　おいらも一緒に行きたかつた。
辰五　どうして連れて行かれるものか、數寄屋川岸にやアもゝんぢいが居る。

喜太　もゝんぢいとはなんだえ。
辰五　お化のことよ。
喜太　ヽヽちやんの子だから、お化は怖くない。
辰五　生意氣なことをいふな。
喜太　もゝんぢいなら、煮て喰つてやらア。
辰五　何もかも知つて居やアがる。
だい　今時の子に、ゆだんはならないよ。
辰五　コレ奴、ヽヽちやんが寝るから、枕を持つて來てくれろ。
〽いひつゝそこへ肱枕、横になるのを引き起し。（ト辰五郎寝ようとするをおだい引き起して）
だい　コレ頭、おまへは此處へゆう〳〵と、枕をして寝る氣かえ。
辰五　のみすぎてせつねえから、横になつて醒すのだ。
だい　たとひ酒に酔つたとて、寝て居ては、済むまいに。
辰五　雨上りの水道ぢやアあるめえし、済むもすまねえもあるものか、おれがうちへおれが寝るに、誰が何といふものだ。
だい　イエ、他人は知らずわたしがいひますよ。
辰五　ナニ、手めえがいふとは。
だい　おまへ、けふ親方の所へ、何の用で行きなすつた。

辰五　何の用で行くものか、あんまり久しく無沙汰をしたから、機嫌きゝに行つたのも、後のことまで。イヤ、後の喧が先になつて、いひてえことをいはねえうち、短氣を出すなと異見をされ、馳走になつて歸つて來たのだ。
だい　それではおまへは親方に、短氣を出すなと異見をされ、きのふの仕返しをしない氣かえ。
辰五　ナニ、仕返しとは。
だい　なんぼわたしがぼんやりだつて、そんなに馬鹿におしでない。
辰五　誰が馬鹿にするものだ、色で夫婦になつた上へ、可愛い子まで産んだ手めえ、馬鹿にするやつがあるものか。
だい　そんならきのふの仕返しを、なぜ忘れてしまひなすつた。
〽膝つきかけてつめ寄る折から、門へ來かゝる龜右衛門、内の様子を窺ふとも、しらふにあらぬ生酔に、
トおだいきつとなつてつめ寄る。下手より前幕の龜右衛門、斎流し三尺帯、駒下駄の者のこしらへにて出て來り、門口へたゝずみ、内の様子を窺ひ居る。辰五郎生酔の思入にて、手をたゝきながら。
辰五　ム、、思ひ出した〳〵、宮の内の芝居のことか。

だい　たゞ小向ひの喧嘩なら、お前が我慢をしなさりやアそれで事はすむだらうが、他人にかはつて相手になり、立派に約束したからは、それでは組合へ濟みますまい。

辰五　それぢやアきのふのいきさつを、手前は聞いて知つて居たか。

だい　目と鼻の先の宮の内、人の話しに聞いて居たが、家へ歸つて來なすつても、機嫌が悪く、なんにも言はず、女のさし出るところでないから、だまつてゐたが數寄屋河岸の、親方の所へ行きなさるは、大方喧嘩のことゝ察し、案じられるから後をつけ、門にかくれて八つ山下の喧嘩のことから、親方のよそながらの異見まで、立聞きして知つてゐます。

辰五　南無三、それでは聞かれたか。

ト酔ひにまぎれてとり合ぬ、夫を女房はもどかしく、胸づくしをきつととり。

ト辰五郎生酔の思入、おだい胸ぐらをとりきつとなり

だい　コレ頭、あんまりしつこしがないぢやないか。（トあつらへの合方になり。）これが堅氣な商人なら、引こみ思案もいゝけれど、役場へ持つてく鍵よりも、男を磨く鳶の者、役半纏へ濟みますまい。それも六十七十の年よりならば知らぬこと、まだやう／＼と三十の坂へ足をふみかけた、男盛りの身をもつて、さりとはいくぢのない料簡、なんでお前は親方の、異見を聞いて御もつともとあたまをさげて歸つておいでだ。わたしや女でも口惜しくつて、ゆうべはろく／＼寢やアしない。（ト傍にある纏をとつて、）この纏へ對しても、のめ／＼しちやア居られないに。

ト傍にありあふ持遊びの纏をとつてさしつくれば、その口惜しさはいはずとも、胸も張りさく辰五郎、無念をこらえしどもなく、飲まぬ酒の酔にまぎらし。

トおだいよろしく思入あつて、おもちやの纏をさしつける。辰五郎よろしく思入あつて、生酔のこなしにて、

辰五　エヽつべこべとやかましい、女の知つたことぢやアねえ。だまつてそつちへ引つこんで居ろ。

ト突きはなせばとりすがり、

だい　イエ／＼、引つこんぢやア居られない。（トおだいむしやぶりつく。）

喜太　おつかア、ちやんをどうするのだ。

だい　あんまりちやんが意氣地がないから。

喜太　おいらのちやんを、いぢめちやアいやだ。

へとりすがる子にひきとめられ、しばしたゆたう門口に、始終を窺ふ龜右衛門、こらへかねてずつとは入り、

ト おだい喜太郎にとめられ、是非なくとまる。此時門口に窺ふ龜右衛門、ずつと内へはひり、

龜右　思ひがけなく來合せて、門で樣子を聞いて居たが、こりやア姐御のいふのがもつともだ。

辰五　ヤ、誰かと思やア龜か。

だい　オ、よいところへ來ておくれだ。わたしのいふのがいゝか惡いか、龜さんよく聞いておくれ。

龜右　聞いた〱、おめえのいふのが本筋だ。少しも惡いことはねえ、コレ兄貴、ふだん飮まねえ酒をのみ、醉つたふりで逃げる氣か、そりやアあんまり卑怯だらう。

辰五　何がおれが卑怯だといふのだ。

龜右　今の話しの樣子ぢやア、數寄屋川岸の異見をきゝ、しかけた喧嘩の腰を折り、くらひ醉つたふりをして、寢るといふのは何のことだ。あんまりわけがわからねえ。仕返しもせずこのまゝに、指をくはへてお前が引込み思案なら、生き死にを一緒にしようと、約束をした藤松や長公と三人で、おらア命を捨てに行く氣だ。他人のことでも組合の恥になりやア火の中へ、飛びこむお前のふだんの氣性、め組ばかりか二番組で喧嘩でひけをとらねえ兄貴、いま姐さんのいふ通り、まだ三十にたるかたらずもうろくのしやうが早いぢやアねえか。

へまけぬ氣性に龜右衛門、詞もあらくつめよるを、辰五郎は耳にもかけず。

ト 龜右衛門手拭を握りつめる、辰五郎はやはり生酔の思入にて、

辰五　手めえ達がワア〱いふので、さう〱しくつて寢られねえ。コウ、喜太や水を一ぺえ持つて來てくれ。

喜太　アイ〱。

へ年よりませし喜太郎が、藥罐の水を湯呑へつぎ、こぼさぬやうに持ち來り、

ト 喜太郎文句の通り、湯呑へ藥罐の水をつぎ持つて來て、

ちやん、水を持つて來たよ。

辰五　オゝ、よく持つて來た〱。（一ト口のんで、）アアいゝ心持だ、よくいふやつだが、醉ざめの水くらゐ、うめえものはねえ、おだい一口のめ。

だい　わたしやア醉つて居ないから、水などはのみたくな

い。（トツンとする。）

辰五　手めえがいやなら、奴飲め。

喜太　おいらは水は大好きだ。（ト喜太郎一口のんで、）おつかアおめえも飲みねえ。

〽何心なく喜太郎が、さし出す水にうなづいて、

ト喜太郎おだいの前へ茶碗を出す。おだいちよつと思入あつて、

だい　喜太がいふなら、一口飲まうよ。

〽心ありげにのみほせば、（トおだいグツと水をのむ。辰五郎見て、）

辰五　おだい、手めえものんだか。（ト思入、生酔のこなしにて、）下戸の知らねえ、うめえ味だなっ

〽浮世の夢の醉ざめに、それといはねど三人が、飲むは別れの水杯。

ト辰五郎、おだい、心のうちで泣く思入あつて、

だい　親子三人思はずも、今飲んだのは水杯。

辰五　ムウ。（トあつらへの合方になり、）

だい　頭、わたしやアおまへに改めて、頼みがあるがきいておくれか。

辰五　いつにねえ改まつて、手前がおれに頼みとは。

だい　男の子は男に附くが、昔からの習ひだが、この子はわたしが連れて行くから、夫婦の縁を切つておくれな。

辰五　なんだと。

〽思ひがけなき縁切りに、おだいの心はかりかね、ためらふ傍に亀右衞門、離縁といふをきゝかねて、

トおだいずつけりいふ。辰五郎合點の行かぬ思入。これを亀右衞門腕組みをしてゐたが、これをきいて前へ出て。

亀右　わつちも喧嘩でのぼせて居るから、人の話しも耳へもいらず、ぼんやり默つてきいて居たが、姐御の方から暇をくれと思ひきつた今の一言、お前の心が讀めねえが、どういふ譯のあつてのことだ。

だい　どうもかうもありやアしない。お前達も知つての通り、わたしも惚れて女房になつたが、いひがひのない頭の料簡、こんなしつこしのない亭主を持つて居るより別れてしまひ、一人でくらすがましだから、縁を切る氣になつたのさ。

辰五　それぢやアおれに愛想がつき、手前は別れてしまふ氣か。

だい　子まで出來た二人が仲、別れたい氣はないけれど、

世間の人に後ろ指をさゝれるのが悔しいから、わたしや別れてしまひたいのさ。

龜右　こりやア姐御の方がもつとも。人に笑はれるのが悔しいから、子供を連れて別れるといふは、爰が江戸ッ子の魂だ、姐御お前ばかりぢやアねえ、おれもこれまで兄貴といつた、兄弟分もけふかぎり、これから先は一本立ち、しつこしのねえやつらだと、蔭で人にいはれねえやう、命をきりに龜右衛門が、やるところまでやらにやアおかねえ。

ヘ手に持つ手拭にぎりつめ、無念と思へば女房が、

ト龜右衛門悔しき思入。おだい思入あつて、

だい　縁を切れば用のない家、こゝに長居をしようより、サア喜太郎來な。

ト喜太郎の手をとるなふり拂ひ、

喜太　おいらはちやんの所に居たい。

だい　モウけふからはおつかアばかり、ちやんといふのは、ありやアしない。

喜太　いやだ〱。ちやんがいゝ。

だい　えゝきゝわけのない、來いといふのに。

ヘいやがる我子の手を引きとり、涙こぼさず氣丈にも、門へ出で行く女房を、

トおだい、喜太郎の手をとり、無理に引立て門口へ行く。辰五郎起上り思入あつて、

辰五　コレおだい、待て。

だい　待てとはなんぞ、用があつてか。

辰五　數寄屋川岸の世話になり、夫婦になつて七年此方、出るの引くのといふこともなく、子まで出來た二人が仲、見りやア涙もこぼさずに、手前はこゝを出て行く氣か。

だい　愛想がつきて出て行くのに、なんで涙がこぼれるものかね。

辰五　ム、、その心なら望み通り、夫婦の縁を切つてやらう。

だい　エ、（トぎつくり思入。）

辰五　まだ年若なからだだから、おれが死んだら、イヤ、神明町が媒人だから、是を持つて早く出て行け。

ヘ懷さぐり書附をおだいの前へ投げつくれば、心ならずも取りあげ見て、

ト辰五郎腹掛のかくしから、書附を出し、おだいの前へ投げろ。おだいとりあげ、開き見てびつくりなし、

だい　ヤ、こりやわたしへの離縁狀。

龜右　それぢやア兄貴も姐御をば、
だい　離緣する氣でござんしたか。
〽いふにこなたも居直つて、（ト辰五郎居直つて、合方きつぱりとなり。）
辰五　若い時から一方ならず、世話になつて兄弟同樣、力に思ふ炊出しの喜三郎さんへ餘所ながら、暇乞に行つたのは、けふ仕返しでおれは死ぬ氣だ。
だい　エヽ、そんならおまへは。
龜右　仕返しをする氣か。
辰五　しなくツてどうするものだ。日本橋から比べりやア芝の土地は場末だが、水道の水にかはりはねえ、命を惜しんでこのまゝに、指をくはへて引込むものか。たとひ向ふが力士でも、命がけで勝負をする氣だ。
だい　この仕返しをする氣なら、なんで醉つたふりをしてゆう〳〵と寢て居なすつたのだ。
龜右　お前の肚がよめねえから、おれも腹をたつたのだ。
辰五　それもこれも料簡があつて、おれがしたことだ。角力はけふが七日目に爪もたゝねえ見物人、怪我をさせちやア氣の毒だから、酒に醉つたふりをして、おれがぐづぐづして居るのも、場所のはねを待つて居るのだ。手前達と同じやうに今から騷ぎたつたら、若い者は向ふみず場所のあるうち押しかけたら、どんな騷ぎにならうも知れねえ。それゆゑ我慢をして居るのだ。ことにやア親仁が頭取だから、こんなことのある時は若い者を靜めにやアならねえ役のおれが先立ち、喧嘩をしちやア濟まねえのも知つちやア居るが穩便に、蟲をこらえて居られねえのは、め組がひけをとつた日にやア、二番組の恥だから命を捨てゝ一番やろ氣で、あとへ難儀のかゝらぬやう、書いて置いた離緣狀、これを手前に渡しておくから、小僧が末をたのんだぞ。
〽心の中をうちあけて、話すも流石組合で、人の上へも辰五郎、天晴め組の頭なり。
ト辰五郎よろしく思入。
だい　これまで人に負けることの、嫌ひなおまへがけふにかぎり、引込み思案は合點が行かず、
龜右　かういふ心と知らねえから、言ひすぎたことをいつたのは、
だい　どうぞ堪忍、
兩人　してください。
辰五　ナニ、詫びるにやア及ばねえ、おれを人に笑はせめ

えと、思ふからのことだから、なんで悪く思ふものか。

だい　縁を切るといつたのも、おまへに験をつけるため
　この去狀は返します。

辰五　縁は切らぬが去狀は、こりやア後日のためだから。

だい　イエ〱、これは返します。（ト兩人あちこちとつ
　きやる。喜太郎出て、）

喜太　こりやアおいらが、もらつたよ。

〽取るより早く引きさけば、（ト喜太郎離縁狀をとつて
　何心なく引きさく。）

龜右　コリヤ喜太坊が破つたか、こりやア何より大でかし
　だ。（ト七ツの時の鐘。）ヤ、ありやア切通しの七ツの
　鐘、角力のはねにそウ間はねえ。

辰五　若い者が出掛けぬやう、おれが行くまで留めてゝく
　れ。

龜右　案じなさんな、留めておきやす。（ト龜右衛門門口
　へ出る。）

辰五　早く行つてくれ。

龜右　合點だ。

〽あとをも見すに龜右衛門、一もくさんに駈て行く。

　ト時の鐘、バタ〱にて、龜右衛門逸散に花道へはひ
　る。辰五郎思入あつて、

辰五　こりやア大事な役半纏、これを着ずやア行かれねえ
　さしツ子を出してくれ。

だい　アイ〱。

　トこれより早めやうの合方になり、辰五郎上に着てゐ
　た役半纏を脱ぐ、戸棚よりおだい二の字つなぎの長半
　纏、鬼の首が消口をくはへしさしツ子の半纏を出す、
　辰五郎すつぽり脱いで半纏を着る。おだい白木綿の三
　尺帯を出す、辰五郎身ごしらへをして、草鞋をはく、
　おだいは戸棚から白鞘の短刀を出し、
　頭、これを用意に。（ト出すを取つて、）

辰五　この白鞘をどうして手前が、

だい　數寄屋川岸から歸りがけ、日蔭町のお店へ寄り、番
　頭さんから借りて來ました。

辰五　こいつア何よりありがたい。（ト腰へさして、半纏で
　かくす。）

だい　數寄屋川岸へはどうしようね。

辰五　模樣がへにしようといつたが、骨を拾つてやらうと
　いふ、其一言がこつちの力、あとでいゝやうにいつてく
　れ。

たい　わたしが行つてお詫びをしませう。（ト辰五郎門口へ出て。）
辰五　それぢやアおだい。
だい　頭。（ト兩人顏見合せ。）
辰五　達者で居ろよ。
　トほろりとして顏をそむける。おだいもうつむきがちつと思入。喜太郎ツカ〳〵と傍へ行き。
喜太　ちやん、一緒に行かう。
　〔すがりつかれて鬼神にも、負けぬ氣性の辰五郎、これがこの世の別れぞと、恩愛妹脊の愛情に、思はずこぼす一雫、こらへ〳〵し女房が、わつとばかりに泣き伏す時しも、角力のはねに打ち出す太鼓。
　トこのうち辰五郎手鍵を持ち出かける。喜太郎ツカツカと行つて、辰五郎にすがる。辰五郎喜太郎を見て、これが別れといふ思入。おだいと顏見合せ、不便だといふ思入にて泣く。おだい是を見て、ワツと泣伏す。此時花道の揚幕にて、角力太鼓を打ち出す、兩人きつとなつて、
だい　ヤ、あの太鼓は、角力のはね。
辰五　コリヤかうしちやア。

　ト喜太郎をつきたふすを木の頭。
居られねえ。
　トきつと見得、角力太鼓バタ〳〵にて、辰五郎手鍵を持ち、勢ひこんで花道へはひる。これと一緒に、舞臺はおだい喜太郎を抱いて見送る、引込みといつぱいに、
　　　　ひやうし幕
　ト角力太鼓にてつなぎ、直に引かへす。

四幕目

神明町鳶勢揃の場
神明角力小屋の場
同境內末社裏の場

役名━━め組の辰五郎。九龍山浪右衞門。炊出しの喜三郎。鳶柴井町の藤松。同濱松町の長次郎。同露月町の龜右衞門。力士大童山文太郎。同勇野龍治。同荒浪鶴之助。同團子山五郎吉。同浪の花鹽右衞門。町方同心岡村千藏。神明町の町役人喜兵衞。同新右衞門。め組の鳶大勢、とりてき四人。

神明町の番太郎杢藏。四ツ車大八。鳶おもちや文治。同中門前の專坊。同とゝまじりの榮次。同やんま鐵。同花籠の喜久松其他。

本舞臺上手九尺村木置場の釣掛け、是に板割大貫杉四分松六分の束を立てかけ、續いて下手へ三間繩からげの板圍ひ、此下手九尺こけら屋根竹を打ちし中窓、裾廻り板羽目、この横手三尺の出這入口、番太郎裏手の心、此の前火の見の階子、町役人昇るべからず板の頂上に屋根附の半鐘を掛け圍ひの向ふ通り町の向ふ側を見たる屋根の中遠見、すべて芝神明町普請場明地の體、爰に藤松、長次郎、專坊、榮次、おもちや文次、やんま鐵、花籠の喜久松、其外三階繼出の鳶の者、いづれも火事場ごしらへ銘々鳶口手鍵、思ひ〳〵のこしらへにて立ちかゝり居る。この見得きやりくづしの合方、聖天の鳴物にて幕あく。

鳶一　こゝの明地に居られねえから、日蔭町の石龍師の庭も、ついでに貸してもらつたのだ。

二　石龍師の先生は、この喧嘩は末になると、必らず大きくなるといつて、易を見てゐたからは、

三　當時江戸で一二をあらそふ、名におふ芝の石龍師、きつと當るに違えねえ。

四　當つた日にやアお互ひに、當談事とはわけの違ふ、命がけの大喧嘩。

五　さしこの下へ鎖かたびら、又劍術の胄込みもあり。

六　かねの鉢卷濡紙で、組合總出で二ヶ所に別れ、

一　頭であひが軍配に、進めと聲をかけるを待つて、

二　飛び出したならばお互ひに、お組の名折れにならねえやう、

三　命をきりにたゝき合ひ、一番二番はいふに及ばず、他の組合にも褒められて、

鳶四　よしんばこのまゝ打殺されても、名の殘るのを儲けにして、

五　やるところまでやツつけにやア、これまで長々世話になる、

六　濱松町や頭であひに、恩を返す時がねえから、

一　命は決して、

皆々　惜しまねえのだ。

藤松　ム、よくいつた、それはさうと日蔭町へ、濱松町は來たらうか。

長次　來りやアこゝへつッかけるが、遲いのを親が案じて、今かた家へ迎ひに行つたが、モウ疾うに歸る時分だ。
文次　きのふ姐御が山内の燈籠佛さまへ、何のことだか伺ひに行つたから、大かたあそこで囚の知らせに、姐御が止めて居るのぢやアねえか。
喜久　今朝數寄屋川岸へ行くといつたが、まさか引止められて居もしめえが、それとも姐御が案じてゐるのかな。
榮次　そんなことをかまふやうな、頭ぢやアねえはずだが、又喜太さんにとつ付かれ、出にくいのぢやアあるめえか。
豐　人を馬鹿にして居やアがらア、これから喧嘩をしようといふに、子供にとつ付かれて出にくいやつが、どこの國にあるものか。
專坊　モウかうなつたらそんなことに、未練のある人ぢやアねえが、
藤松　どうか早く、
皆々　來なさりやアいゝが。
　トバタ／＼にて、上手の圍ひの内より、入口を明け、鳶の者一人出來り、
鳶　みんな、氣をつけねえよ／＼。
皆々　なんだ／＼。

鳶　今新錢座の方からこゝへ來る道、この明地の圍ひの外で、神明のとりてきが圍ひのすき見をしてゐたから、なぐりたふさうと思つたら、ほう／＼の體で神明の方へ、逃げて行きやアがつたから、あいつがきつと知らせるに違えねえ。モウ油斷は出來ねえぜ。
長次　何だ角力が覗いた、そいつアかうしちやア居られねえわい。
豐　長兄イ、鼻を揃へて大ぜいが、濱松町を待つにやア及ばねえぢやアねえか。
專坊　ム、さうだ／＼、それぢやアみんなで、
皆々　さきがけしようか。（ト立ちかゝるを藤松留めて、）
藤松　コレ、靜かにしろ。
　トあたりへ思入あつて鳶の一に囁く。一すぐ下手の中窓より、內を覗き思入あつてこちらへ來り。
鳶　ゆうべは明け番をしたと見えて、番太郎は白川夜船だ。
長次　こゝの番太郎はこの正月、高輪から株を買つて來たが、正直いつさんめえといふやつで、めつぽう物に驚くから、みんなを見てびつくりして、濱松町が來ねえうちに、若し騒がれて角力に知れると、こつちが後手になるかも知れねえ。番太郎へは靜かにしねえ。

皆々　承知しました。

ト　やはり右の鳴物、バタ〳〵にて、東の假花道より亀右衛門、さしこごしらへにて汗を拭きながら出來り、

亀右　みんな心配したらうが、濱松町は直ぐ來るから、一足先へ駈けぬけて來たのだ。

文次　亀兄イ、さう〳〵待つてはゐられねえぜ、今向ふから見に來たから、モウ油斷は出來ねえのだ。

専坊　もし遅れるとどおさくさから、頭にかまはず乘つ込まうか。

喜久　おらア石龍師へ行つて、みんなに知らして來るとしよう。

皆々　ム、、さうしてくれ〳〵。

藤松　ア、コレ〳〵、まア待ちねえ。（ト思入あつて、）それぢやア頭は女房子に、イヤナニ、これまで待つて居たものだ、まア、モウ少し待つてやんねえ。

長次　さういふうちもけんのんだ、かまはねえ出かけろ出かけろ。

皆々　合點だ。（ト立ちかゝる。此時東の揚幕にて、）

辰五　待つてくれ〳〵。

ト　屋體囃子、早めたる合方にて、花道より前幕の辰五郎、火掛りのこしらへ、手鍵を腰にさし、鳶口をかゝへ走り出來り。

みんなも、待ちどほだつたらうな。

亀右　頭、角力場へ知れたさうだから、早くしねえと、

皆々　後手になるぜ。

辰五　ム、、さうだらう、モウこの邊へ二ヶ所もかたまりやア、疾うに知れたに違へねえ。それぢやアこゝで互ひのかために、水杯をした上で、

長次　ム、合點だ、専坊水はいゝか。

専坊　オイ。

ト　これよりかはつた合方になり、専坊圍ひの後ろへはひる。このうち鳶の者上手に立てかけてある、松板杉板などを東のまゝ一束づゝ所々へたふし、皆々これへ腰をかける。こゝへ専坊手桶へ杓柄をつけ提げて來り、其中へ置く、藤松柄杓を持つて立上り。

藤松　それぢやアこゝで。

皆々　水杯を。

辰五　命を捨てる冥土の旅立、逆さまにして若いものから、順にみんなへ廻してくれ。

亀右　まづ此中で若い者は、中門前の専坊に、とゝまじり

の榮次におもちやの文次、さ榮公から先へ初めろ。
榮次　そんならおらから逆廻しに、
專坊　頭の前で、
三人　水杯。
辰五　初はなにのむのは威勢よく、遅れちやアならねえぞ。しつかりしてのんでくれ。
榮次　頭、大丈夫だ。（ト榮次柄杓より一口のみ、）サ、これでおらの膽ッたまは、すわつたぜ。
專坊　ム、合點だ。

ト榮次より受取り、專坊、やんま豐、文治、長次郎、藤松、龜右衞門と順々に他の皆々へ廻す。

長次　モウ、何時だらうな。
萬　今がた芝の七ツを打つた。
長次　それぢやアぐづ／＼して居ると、角力がはねて歸るだらう。
辰五　よしんば角力がはねたところが、きのふ宮の内の芝居前で、この仕返しに來ねえうちは、相手の水引、四ツ車は幾日でも神明近所で、酒をのみながら待つてゐるとへらず口をきゝやがッたから、よもや田舍の花角力へ逃げて行くわけにも行くめえ。
藤松　これから事を起したところが、きのふは座元の顏を立て、けふは角力がはねてからなら、勸進元にも義理も立つ、こゝらはうまく行つたのだ。

トこゝへ文次柄杓を持ち前へ出て、

文次　頭、殘らず、
皆々　濟みました。（ト辰五郎へ柄杓を出す、）
辰五　ム、、さうか、それぢやアおれで納めようか。

ト合方きつぱりとなり、辰五郎立上り、件の水をのみ柄杓を出す。藤松これを取らうとして、兩人ちつとなり、

藤松　兄イ、おめえはよつぽど運がいゝぜ、石龍師の庭へ行つて見ねえ、この組合の頭であひは、殘らず揃つて待つてゐますぜ。
龜右　組合中の顏揃ひ、あゝも氣の揃ふといふも、實に頭の高運とわつちやアさつきみんなを見たら、嬉し涙がこぼれましたよ。
長次　人となつたらかう行きてえ、お前さんのことを聞くと、命をきりに、やッつけて、濱松町の名をあげると、口を揃へていひましたが、子分となつてゐるわッちらア、どんなにいゝ心持だつたらう。

辰五　ム、さうか、友達は持ちてえものだな。（ト思入あつて、）それぢやア手前達も今こゝで、水杯をしてくれゝば、命がけでやつてくれるな。
萬一　エ、、濱松町から起つた一件、かういふ時が恩返し、
萬二　卑怯未練な喧嘩はせず、後の世までも組合の、
萬三　名の殘るやう、
皆々　やツつけませうよ。
辰五　ム、、それぢやアおれゆゑ、命まで。
皆々　あたりめえさ。（ト辰五郎皆々を見わたし、ちつとなり、）
辰五　ム、、ありがてえ、よくいつてくれた。（トちつと思入。）
皆々　そんなら頭、
番太　出かけようか。
ト皆々立ち上る、此うち大階子へ昇り半鐘をする。此時下手番小屋の内より、前幕の番太郎眼をこすりながら出て、びつくりなし、
番太　ヤア、いつの間にか、火事があるのかく。
龜右　エ、何を寢ぼけて、居やアがるのだ。
番太　こいつア大變、しくじり道具だ。

ト あわてゝ屋臺の内より、太鼓を出し舞臺より花道へ出をかけて、うろく歩く。此うち皆々支度をなし。
辰五　サアやツつけろ。
トこれにて賑かな合方へ、やたい囃子と半鐘をかぶせ、花道の揚幕にては、角力太鼓になり、皆々きやりにて花道を勇ましくはひる。番太郎あわてゝ階子を昇り、あたりを見まはし、又おりようとして二三段上より轉げ落ち、腰を打ちし思入にて撫でながら眞中へ運び出る。こゝへ上手の圍ひの入口より町方同心供をつれ、芝の家主兩人附添ひ出て來り、
家一　コリヤく本藏、今すつたのは、どこに火事があるのだ。
家二　サア、どこに見えるのだく。（トこれにて本藏またびつくりなし、）
番太　アノ火事々々、火事は今の組合の衆達が、あゝちゝちゝゝゝ。
トあわてゝ口がきけぬ思入。此うち所々にて半鐘を打つ、同心聞耳を立て、
同心　今往來を通りかゝりしゆゑ、とりあへずまゐつたが、其方は何を見當に出をかけた、いづれに出火があるのだ。

番太　ヘイ〳〵、何あの仕……事……シ……。
トどもりながら震へる。
同心　もはや諸方で打ち出した樣子、コリヤ町役人ども、この番人を自身番へつれてまゐれ。
番太　エヽ、何もわたくしは、惡いことはいたしませぬ。
同心　エヽ、出火もないに出をかけたが惡いのだ。それ引きずつてまゐれ。
番太　ヤ、こいつはたまらぬ。
ト逃げにかゝるを同心引きすゑ、十手にて打つ、これにて杢藏びつくりして、尻もちをつくを道具がはりの知らせ、家主兩人にて、杢藏の手をとり引立てる、此もやう早き合方、半鐘の音にて此道具廻る。
本舞臺一面角力小屋の前側、眞中くゞり戸を開き、此向う土俵の中遠見、小屋の前側八日目取組の張出し、上下櫻の立木。すべて神明境內角力小屋の體。木戸の眞中に琉球疊を七八疊重ね、此上に九龍山鉢卷繩だすき尻はしをりにて居る。同じく序幕の勇野、荒浪に波の花と四人のとりてき、其外力士大童山、いづれも鉢卷繩だすき、竹槍、丸太を持ち立ちかゝり居る。此見得賑やかな合方へ聖天をかぶせ道具留る。
とり一　呼出しの音松が、日蔭町で鳶の者につきあたられた上ぶんなぐられ、ほう〳〵の體で歸つて來ましたが、
二　聞けば日蔭町ばかりでなく、大門から片門前の方も、いつぱい詰めたと聞きましたが。
三　向うのやつらもこゝは持場所、負けては顏にかゝはること、
四　一生懸命やッつけるだらうが、何だか心が勇み立つて、こんな面白いことはないわえ。
浪の　面白いことは面白いが、向ふはめ組が惣出だらうがこつちは若い手合ばかり、しつかりせんぢやいかんぜ。
九龍　火事場ならば知らぬこと、たゞ腕づくでたゝき合ふなら、向ふの相手が五十人に角力が一人宛にしても、めつたに負けることぢやアない。
勇野　裏手へ廻つた四ッ車關に、誰か外に居るだらうの。
荒浪　オヽ、居るとも〳〵、花車に瀧の音、手玉石に大綱關、其外藤島の部屋のものが十六七人廻つてゐるわい。
團子　おらア國で猪狩の時に、けだものゝ中へ飛びこんで、ばらがきにあばれたことがあつたが、それから見りやア人間ばかり、どんなやつが來ようとも熊や猪の料簡であ

ばれりやア負けはせぬわい。

九龍　勸進元や世話役に迷惑かけてはならぬから、早く退いてくださせえとはねて早々たのんだが、どうだそウいんだかの。

大童　いぬにはいんだが、ことによつたら顏役をたのみに、行つたかも知れぬわい。

トやはり右の鳴物、バタ／＼にて、花道より力士一人走り出來り、

力士　オイ／＼關取衆、今蔦の者が、神明町と日蔭町で勢揃ひをして、モウこゝへやつて來るから油斷しては居られませぬぞよ。

勇野　ム、、それぢやアこゝへ。

皆々　やつて來るとか。

大童　今がた裏の四ツ車にも、小屋の竹をひつこぬいて、竹槍にして渡しておいたから、來たら槍玉にあげてやれよ。

皆々　オイ。

九龍　手まへは小屋の裏手へまはつて、四ツ車にいうてくれ。

力士　合點だ／＼。

ト力士上手へはひる。此うち花道の揚幕の内にて、きやりの聲する。これにて皆々きつとなり、

荒浪　サア野郎ども、向ふから來るぞ。

皆々　オヽイ、合點ぢや。

九龍　待て／＼。みんなよう聞いておけ。若し蔦の者がこゝへ來ても、こつちで先へ手を出すな。先から出したらやッつけろよ。

皆々　オヽイ。

九龍　よう、しつかりせえ。

皆々　オヽイ。

トこれを合方、やたい囃子へ半鐘をかぶせ、花道よりバタ／＼にて、彌次馬の仕出しばら／＼逃げて出て來り、上下へ走りはひる。續いていぜんの辰五郎先に、皆々走り出で來り、直ぐ舞臺にてごつちやになり、立廻つて九龍山上手に柱の折れを持ち、辰五郎下手に鳶口をかまへ、兩人きつと見得、誂への合方になり、

九龍　オヽ辰五郎か、よくもおぬしは忘れずに、けふ仕返しに出てうせたな。

辰五　そりやアこつちでいふこツた。惣身へ智慧がまはりかねる、手前達こそ忘れたらうと、はれるを待つて押し

て來た所も芝の宮の内、角力と火消の腕くらべ、一ばん勝負をしにやアならねえ。

九龍　大きなごたくをまき出したな。先づわれから先へ腦天を、ぶちのめして見せるぞよ。

辰五　生意氣なことをいやアがるな。

九龍　野郎どもたゝきのめせ。

辰五　ソレ、やッつけろ。

鳶皆々　合點だ。

ト双方よりうつてかゝり、ちよつと立廻つてきつと見得。これより誂への鳴物へ半鐘と出の太鼓をかぶせ、一ヶ所でなく舞臺と兩花道と別れて何ヶ所にても立廻り、此うち辰五郎、九龍山の肩先へ鍵を打込む、これと一緒に九龍山柱にて辰五郎の胸をつく、これにて双方たぢ〳〵となり、仰向けに、やけに引くりかへる。皆々びつくりなして立寄り、上下へ別れ介抱する。これにて九龍山の肩先血にじみ、兩人苦痛に屈せず又立寄り打合ひ、トヾ辰五郎力士と立廻りながら花道へはひる。九龍山黨の者と立廻り、知らせなしに此道具廻る。

本舞臺少し前へ出して瓦屋根、九尺床、店の裏側、三間ほどずつと下手朱塗りの末社、二軒此間松の立木向ふ境内の向側を見たる中遠見。すべて社内手遊屋裏通りの體。いぜんの鳴物にて道具留る。トバタバタになり、東の揚幕より辰五郎先に、鳶の者大ぜい階子をかつぎ出で來り、屋根へかけて皆々屋根へ昇り、瓦をめくり後ろの境内へ投げる。うしろにてわや〳〵人聲する。よきほどに知らせなしに此の道具廻る。

本舞臺正面神明社の中遠見、上手いぜんの店の前側下手末社何軒も並び、すべて前の表を見たる道具にて納まる。と向ふバタ〳〵になり、四ツ車眉間を糊紅になし、これを鉢巻にて結へ、細だすき一本ざしにて竹階子を持ち、藤松、文次、榮次、長次郎、鳶口にて立廻り出で來り、直ぐ舞臺へ來り立廻つてきつと見得、三味線入り角力太鼓になり、四ツ車皆々を相手に立廻りあつて、上手へ追つて行く、此時花道の揚幕より、いぜんのとりてき六人、鳶の者大ぜいと立廻りながら出で來り、ちよつと立廻つてとり



てきは鳶の者に打立てられ、上手へ逃げて行くを、鳶は追つて行く。こゝへ上手より辰五郎、鳶口にて出で來り、舞臺へ押し戻し、立廻つてきつと見得、誂への鳴物になり、辰五郎、四ッ車へ皆々からみ立廻りあつて、こゝへ上手より大童山、荒浪、勇野、鳶の者と立廻りながら出で來り、これにて力士上手に、鳶の者下手に分れきつとなる。バタ／＼になり花道より三番目の焚出しの若い者三人、長提灯をかざし先に立ち、あとより喜三郎羽織の上へ法被を二枚重ね、一本ざし足袋はだしにて走り出て來り、此中へはひる。

喜三　焚出しの喜三郎だ。待つてくれ／＼。（ト辰五郎喜三郎を見て）

辰五　オヽ、數寄屋河岸か。

四車　誰が來やうとかまふものか。

皆々　たゝきしめろ／＼。

喜三　サア殺すなら、おれから先へやつてくれ。（ト舞臺の眞中へあぐらをかき）サア殺せ。コウ喜三郎は殺してもいゝが、此法被へ疵でもつくと、双方ともに其分ちやア濟まねえぞ。

皆々　エヽ。

喜三　コウよく聞け、みんな氣の立つて居るのはもつともだが、是を見て物を言へ。

ト着て居る法被を脱ぎ、

ヤイ、提灯を出さねえか、エヽ、震へるない。

若者　ヘイ、ナニ、震へやアしません。

トこれにて若い者あたりを見廻し、氣味の惡き思入にて、喜三郎の前へ提灯を出す。

喜三　こりやア御月番の町奉行、根岸肥前守さまのお印だぞ。しかもこりやア町方だらう。

ト下手の鳶の者へ思入

こりやア寺社御奉行松平右京之亮さまのお印だぞ。力士は寺社の御掛りとは手前達は知つて居るだらう、サ、どつちも掛りの奉行職、印へ對して止まるか、但しはこれにはかまはねえか、サア／＼、おれはたゞの野郎だが、よも此印にはかなふめえが。

トきつと思入。皆々顔見合せきつとなる。花道よりバタバタになり、いぜんの龜右衛門走り出で來り。

龜右　御出役だぜ／＼。

皆々　エヽ。（ト此うち舞臺へ來り、）

龜右　オイ／＼。みんな聞きねえよ、今神明町の自身番へ御町と寺社の兩奉行が、御出役になつて、拾ひあげになるぞ。

皆々　エ、。

喜三　サアうか／＼しちや居られねえ、まづ喧嘩はこれまでに、此の喜三郎に預けてくれるか、双方返事をきかしてくんねえ。

辰五　ム、、命がけで飛びこんだ、數寄屋川岸の詞を立て、おれはお前に任さうが、さうして相手の、

鳶 皆々　角力の方は。

四車　みす／＼寺社の御出役と、聞いちやア御上へ濟まねえから、

大童 角力　こりや仲人へ。

皆々　預けようかえ。

喜三　それぢやアおれが案内して、

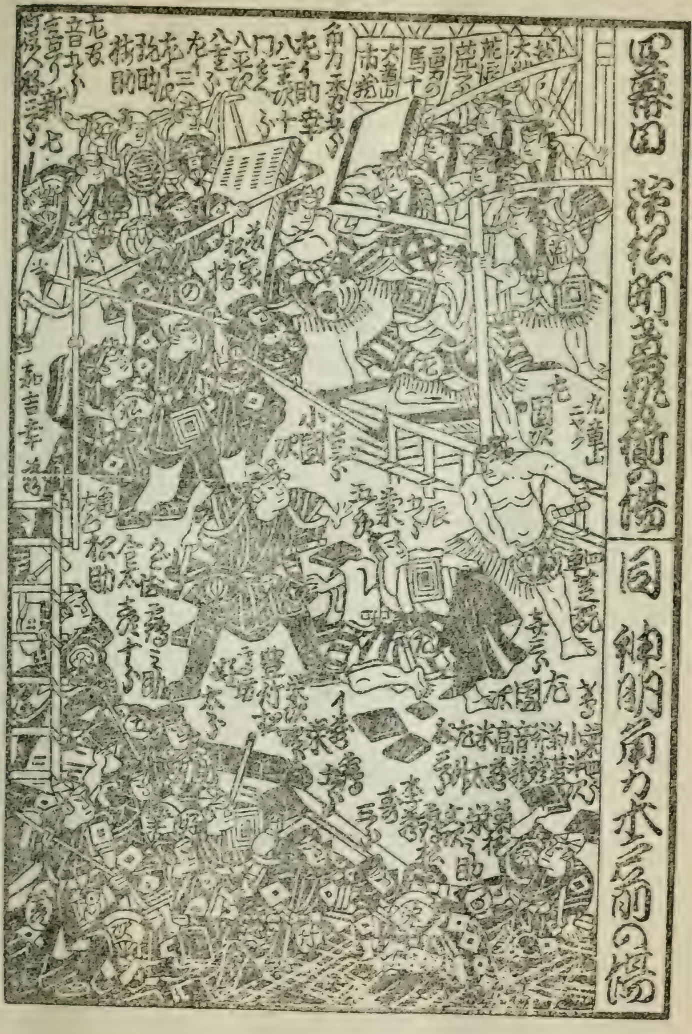
藤松　双方一緒に、

皆々　訴へようか。

辰五　ム、。（トうなづくを、木の頭。）神妙にしろよ。

トこの引張りよろしく、皆々立上る。聖天の入りし賑かな合方にて、　ひやうし幕

め組の喧嘩（終り）


四番目　濱松町若者喧嘩の場
同　神明角力芝居前の場

新淨瑠璃

三人片輪


かたわもの
抱入

三人片輪（淨瑠璃、三人片輪――一幕）

船岡長者廣間の場

長唄囃子連中

常磐津連中

役名――躄、太郎介。盲、半之丞。主人、船岡主馬。太郎冠者。唖女、まきの。腰元松尾。同、貴船。

本舞臺正面銀地へ松の畫の襖。上手折廻し、同じく竹の畫の銀襖。下手の褄、畫心に四尺、橋懸りと見たる更紗の暖簾口。この下手常磐津の淨瑠璃臺。紅白の段幕を掛け、すべて京の都、船岡長者廣間の體。一セイにて幕あく。と橋懸りの暖簾口より、船岡長者、袴小さ刀にて、十間の扇を持ち出て來り、舞臺

主人　眞中に立身にて、

罷り出でたる者は、當洛中に住ひいたす、船岡主馬と申す者でござる。某存ずる仔細あつて、片輪者を數多抱ようと存ずる。（ト少し下手へ向ひ、）コリヤ、太郎冠者はをるか。

ト揚幕の打にて、

太郎　ハア――。

ト暖簾口より、太郎冠者着附、肩、半袴にて出て來り下手に手をつかへ、

御前に候。

主人　コリヤ、最前女子兩人に申付けたる、高札を見に參つたか。

太郎　疾くまゐりましたれば、最早程なく戻られませう。

主人　然らば是にて相待ち申さん。

ト太郎冠者上手へ貝桶を直し、主人これへかける。この時知らせにつき、下手の段幕を切つて落す。こゝに常磐津連中上下にて居並び、淨瑠璃になる。

淨るり〽薄曇り、空も一つの花見月、連れ立つ野邊の道草に、二人手に手を鳥鐘のいと睦じき優さは、富貴の家につかふ女や、いそ〳〵として戻り來る。

ト この内花道より、腰元松岡同貴船の両人、京風の島田かつら、中振袖紺土佐の日傘を持ち出て來り、花道にて振りあつて舞臺へ來り、下手に手をつかへ、

松尾 貴船 唯今戻りましてござります。

主人 おことらに申付けたる片輪者、抱ようと存ずる、高札は建てありしか。

松尾 都の辻々檢分いたせしに、悉く高札を建て、片輪者お抱へと記しあり、

貴船 洛中の人々には、珍しき立札と、皆打擧りてをりました。

主人 それは悦ばしや、追つけ片輪者參るであらう。

〽梅が香や、のつと日の出る山路には、人より先へ薫りはすれど、さて櫻花山吹の、その美しさどこへやら、見えぬ盲目の道のぞき、耳は人より早咲きに、便り求めて歩きより

ト この內花道より盲目牛之丞、水衣、半袴、座頭々巾竹の杖にて出て來り、花道にて振りあつて、舞臺へ來り、

盲 物申う。

主人 表に案内がある。

ト 調べの入りし賑かな合方になり、松尾下手へ行く。

松尾 どなたでござりますな。

盲 私は高札の表に附いたる片輪者のうち、即ち座頭でござるが、どうぞ御主人にお取次ぎを願ひたい。

ト これにて松尾主人の前へ來り、

松尾 お聞き遊ばしましたか、座頭がまゐりました。

主人 オヽそれは重疊、こちらへ通せ。

松尾 ハア――(ト下手へ來り、)ずつとこれへお通りあれ。

主人 座頭には高札の表について參られしか。

ト 松尾手をとり、よき所へ下にゐる。

盲 いかにも左樣、どうぞお抱へ下されたし。

主人 それは此方望む處、異議なく抱へ遣はさん。シテわごりよは產れつきの盲目か、又は中年の盲目かナ。

盲 ハイ、この盲目になりましたは。

〽京の町にていつかどの、米を商ふ物持も、慾に目のなき秤目にて、人の眼を晦ませし、その種蒔きの報い來て、忽ち曇る眞の闇、これはと驚き歩けども、杖突きのゝ字に歩きかね、心の月は晴るれども、晴れぬこの身の因果者。

ト よろしく振りあつて、

これに懲りてその後は、すつかり改心いたしました。
〽雨持つ空にうつ／＼と、唯うつむいてゐたりける。折柄向うへたはれ女が三十二相揃へども、揃はぬ襟に札かけて、唖の看板押付けに、便る軒端も縁のはし。
ト この内花道より唖女、かつしき、かいどり、端折り襟に唖と記せし黒塗りの木札を掛け、さゝらを二本持ち出て来り、花道にて振りあつて、舞臺へ来り、下手にてさゝらを揉む。貴船下手へ来り、
貴船 どなたでござりますナ。
唖女 ワア――。
ト木札を指し、口がきけぬといふこなし。貴船こちらへ来り、
貴船 唖の女子がまゐつてござります。
主人 大方それも高札を見て、尋ねて參つたものであらう。こちらへ通せ。
貴船 ハア――。
ト下手へ行き、唖の手をとり案内して、主人の前へ来る。唖は手眞似にて、高札があつて、それを見て此處へ来たから、頼むといふこなしにて、頻りに辭儀をなする。

主人 女子の身にて不便な事ぢや。いかにも抱へて遣はす。コリヤ、貴船、身の上を聞いて見やれ。
貴船 ハア――。(ト指にて下へ書きながら、)お前が、お身の上は。どうぢやいな。
唖女 ハア――。(ト泣伏す。)
〽そもやわたしが身の上は、あの島原で傾城の、其名高尾の山ならで、登る客衆を目先に、まるめておいて呼び通す、その口車廻りよく、深みへはめし報いにて今は因果なワア、ア、、行末は人を騙せし濁紅葉、
トこの内盲人を客につかひ、太郎冠者を禿にして、よろしく振りあつて納まる。
ワア／＼。
〽推量してとうつむけば、
ト涙を拭ふ。主人扇にて書きながら、
主人 いかにも不便なものぢや。この上は心を改め、行末當家に仕へてゐよ。
唖女 ワア／＼／＼。(ト口の利けぬといふこなし。)
〽嵐山から飛んで来る、烏羽根の番ひが羨まし。その翼には引きかへて、躄近所々々御近所近所、心は急けど捗らず、やう／＼に進み来て、

トこの内花道より躄太郎介、半袴腰帯にて、兩手へ足駄を持ち、ゐざりながら出て來り、花道にて向ふだと心附き、嬉しき思入にて、早く行かうとして腰を立て又倒れ、悔し泣きに泣く振りあつて舞臺へ來り、

躄　案内申う。

主人　ソレ、又片輪が參つたと見える。（ト松尾下手へ行き、躄を見てふき出し、こちらへ來り。）

松尾　今度は躄殿がまゐりました。

主人　何でも片輪でさへあればよい。これへ呼べ〳〵。

ト松尾下手へ行き、

松尾　イザ、こなたへ通られよ。

躄　ハツ、忝や〳〵。（トよき所までゐざつてはひり、辭儀なして、）私は高札の表について參つたる躄でござります。お召抱へ下さらば、この上なき仕合せにござります。

主人　イヤ、抱へようとも〳〵。シテ、產れつきの躄か、又中年にて躄になりしか。

躄　ハツ。仔細申すも、涙の種。

〽過ぎし昔は肩衣に、鑓一筋の身なりしも、曲る心に身を持崩し、親の異見のうるさしと、腹立紛れ蹴かへせし、報いは忽ちこの姿。

トこの内ゐざりにて、よろしく振りあつて納まり、

天の御罸の恐ろしく、てんと改心いたしました。

〽身の行末のあぢきなさ、語るを聞いて實にもと思ひ、

主人　扨も〳〵、不仕合の者共ぢや。左樣に改心いたす上は、性は善なる人心。よい〳〵今日より召抱へるぞよ。

躄　それは忝や。偏にお助け下さりませ。

主人　わごりよ達の身の上を承り、われも不便彌まさり、思はず貰ひ泣をいたしました。かく此方に抱へる上は、申付ける事こそあり。某四五日泊り掛けにて、西山の麓まで行かねばならぬが、跡は斯くの如く召使ばかりぢや。それに三人とも健忘の病あつて、見る事聞く事直きに忘るゝによつて、決して賴みにならぬほどに、其方等に番をさせねばならぬが、先づいつち先へ抱へたる座頭に聞くが、番を申付かつたら、何として守護いたすぞ。

盲　私は御覽の如く皆目見えませぬが、いゝかんは至つてよろしうござるので、蟻の這ふ音までよう解りますれば、もし盜人などはひらば、必ず人に知らせますでござる。

主人　ム、よし〳〵。シテ、唖の女は如何ぢやぞ。（トいへども默つてゐる故、）イヤ、これは唖ぢやによつて、

返事をせなんだか。
ト唖を呼び、百日鬘に大小差して、土藏へ賊が來て、金を取つたらどうすると聞く眞似をする。唖立上り、盲の杖を持つて長刀を遣ふ振り。
イヤ、長刀を心得をるとか。ム、よい〳〵。シテ、躄は何を心得をるぞ。
躄　私は十三束三つ伏せの矢に、五人張りの強弓を引きます。弓の大名人でござれば、賊が來らば射落してお目にかけます。
主人　成程、弓の大名人とか。ム、、これは躄でも差支なく出來る事ぢや。ム、、先づこれでよし〳〵。
（所持の合鍵とりいだし、（ト腰より木札の附いたる鍵を出し。）
然らば、わごりよ達に申付けるは、それがし歸宅いたすまで、盲には寶物藏の鍵を預けるぞ。
盲　ハツ、畏つてござる。
主人　又唖には酒藏の鍵を預けるぞ。イヤ、これはいかな事。唖であつたか。コリヤ〳〵。
ト手眞似にて酒のはひりゐる藏の鍵を預けるから、氣を附けろといふこなし。

唖女　ワア。（トうなづき鍵を受取る。）
主人　次は躄ぢやナ。其方には、錢藏の鍵を預けるぞ。
躄　ハツ、畏つてござる。（ト銘々鍵を押頂き、懐中する。）
主人　斯の如くおことらに鍵を預け、この上申置く事は
（はや算ふれば三年後、風雨烈しき闇の夜に、見越の松を足代となし、忍び入つたる數多の盜賊、寶藏目懸けて入り込みしが、シヤ小賢しと身を固めエ、ヤアオ、と討つて出でしが、賊は木の葉の散る如く、ばら〳〵ぱつと逃げ散つたり。
トこの内主人物語る模様あつて、
必らず心を付けられよ。
躄　お留守は、お氣遣ひなされますな。
盲躄　やがてお歸りなされませ。
主人　心得た。
（胸に一物舟岡は、西山指して出で行く。
トこの内主人立上り、腰元にちよつと呑込ませる思入あつて、下手へはひる。女形三人は上手襖の褄へはひる。
（後に三人は愼んで、彼方此方を打守り、ほつと一と息、

トこの内盲はずつと上手、聾は眞中、啞はずつと下手にて、澄まして四邊を窺ひ、

盲　さても／＼、目の縁がいたく懈うなつてまゐつた。（ト兩眼を開いて、草臥を休めてくれう。）ア、よい心地や。今日御入來の皆樣のお顏が見えて、このやうな、淸々いたした事はござらぬ。

啞女　ア、さても／＼。久々にて口を利いたら、咽の道が淸々としました。オ、しんどやなア。

ト唇を舐めるこなし。

聾　さても／＼、足がメリ／＼いたいた。ヨ、どつこいしよ。ナ、よい心地や。ぐつと延ばいた處は、極樂や極樂や。

（互に顏を見合せて、（トこれにて三人思はず顏見合せて。）

三人　ハヽ、ハヽ、ハヽヽヽヽヽヽ。（ト大笑ひに笑ひ。）

聾　何ぢや、伴之丞殿に樫野殿であつたか。

盲啞　太郎介殿か。

三人　ハヽヽヽ。イヤ、これで安心した。

（あたり憚る者もなく、打寬いで座を崩し、（ト三人眞中へ打寄る。賑かな合方になり。）

盲　太郎介殿は、何故當家へ抱へられたぞ。

聾　されば、貴樣も知つての通り、不仕合せが續いたによつて、高札を見て片輪を思ひつき、ゐざつてゐて喰はうと思うて、聾でまゐつた。シテ貴樣は。

盲　わしも一生寢てゐて喰はうと、盲になつてまゐつた。

啞女　又わしは長の間お喋べりで喋べり草臥れたさかい、啞になつて來たわいなア。

聾　先づ四五日戻られんというたから、鬼の留守に洗濯とやら、ゆる／＼樂をいたさうではないか。

盲　オ、その事ぢや。それによい折にはよいもので、當家の召使共は、健忘の病持ちといへば、何をせうと直ぐ忘れてしまふから、これも安心ぢや。

啞女　何にいたせ、此處へ呼んで樣子を見ようではござんせぬか。

ト手を打つ、上手の褄より、以前の松尾、貴船、太郎冠者出來り手をつかへ、

松尾　お客樣、ようお出で、

三人　遊ばしました。（ト三人不審の思入あつて、）

聾　これは面妖な。コレ、お客ではござらぬ。この三人

を知らぬのか。
貴船　一向に、
皆々　存じませぬ。
盲　イヤ、いよ／＼妙ぢや。モシ、我々三人は、御當家へ抱へられたての、鍵番でござる。
貴船　左様なことは。
皆々　一向に存じませぬ。
啞　これは仕合せ、イヤナニ、これぢやによつて御主人が、召使ばかりぢや、頼むとおつしやつたのぢや。
躄　ア、いよ／＼これで、
三人　安心ぢや。（トこの時太郎冠者不意に立上り、）
太郎　ア、思ひ出した。
盲　エ、びつくりした。それではわしらを、思ひ出したか。
太郎　イヤ／＼、思ひ出しのは、都の巷（四方の御贔屓打集ひ、都へ花の咲き滿ちし、其の入札の限りなく、千萬億の數々は、恵も深き徳の海。（ト都新聞披露の禮の振りあつて納まる。）
盲　成程、それは都にて大評判のおぬしの噂。身にも應せぬ事であつたが、

躄　御贔屓下さる入札は、わしらも共々何れも様へ。
三人　御禮申上げまする。（太郎冠者に列なり一統辭儀をする。）
啞女　いよ／＼これで安心なれば、緩々土藏の錠を明け、命の洗濯しようぢやないかえ。
躄　オ、よい／＼。コレ女子衆、持參の酒を開くによつて、酒盛道具を貸して下され。
松尾　酒盛道具は、
貴船松尾　何になされますナ。
躄　ハテ、今いうた持參の酒を、これにてあけうと存じて。
松尾　そのやうな事、
貴船松尾　仰せありしか。
（不審顔にて腰元は、小首かたげて出て行く。（ト忘れたることなしにて、考へ／＼上手の棲へはひる。）
躄　イヤうまい／＼。今いうた事今忘れるとは、主人が戻るとも大丈夫。
盲　されば我等は西藏より、數多の寶物取出し、
啞女　わたしは預かる酒藏より、
躄　又錢藏より錢を出し、

盲 數盃傾けその上にて、
啞女 寶を持つて・
三人 遊山と出掛けう。
へ一人合點二人三人、藏前さして、
うまいぞ〳〵。
へ入りにける。
ト 三人揃ひ足にて、下手暖簾口へはひる。この時正面の襖を左右へ開き、向う雛段にて長唄連中居並び、これより上下掛合になる。
うたへ見渡せば、嵯峨野につゞく嵐山、春の景色は九重の雲井に近き洛中に、ここに豐な一構へ。淨るりへ笑顏こぼるゝ人々は、誰に遠慮も長廊下、運ぶ廣間に座を構へ、
ト この内下手より盲人臺附の枝珊瑚珠を持ち、躄は臺に載せし錦の袋を、重さうに持ち、啞車の臺附の上へ酒の瓶を載せ、綱にて曳き出て來り、よき所へ直す。上手の褄より、松尾三方に大杯を載せ、これへ桃色の房附の切をかけ、貴船長柄の杓子を持ち出て、よき所へ置く。
啞女 酒宴の興に御舞ひさふらへ。
ト これにて松尾貴船扇を持ち、前へ出て、

淨るりへ長閑さに、矢走へ歸る眞帆片帆、勢田の夕照山彩に、三井の晩鐘音も曇り・うたへはや唐崎の夜の雨、晴れ間を松の石山に、月待つ宵の樂しみは、淨るりへほんにあはづに歸りよか。
ト この内兩人扇をつかひ、八景の振りよろしくあつて、この時忘れたるこなしにて、ぢつと立上る。
盲 ア、健忘で後は忘れたか。
ト 肩を叩く、これにて思ひ出せしこなしにて、早き振りになり、
うたへ堅田へ落つる雁の、ちら〳〵ぱつと立つ浪に、淨るりへ降り來る比良の暮雪の山々は、名にし近江の八つの景。
ト この内よろしくあつて納まる。三人の片輪はこの間拍子にて瓶の酒を杯につぎ、かはる〳〵酒を呑み、追々醉の廻りしこなしにて、
盲 ア、よい心持になつてまゐつた、大層呑口のよい酒でござるの。
躄 それはよい筈でござる。これは當時有名の、石崎の澤の鶴と申す酒でござる。
啞女 石崎のお酒が、この酒藏にあらうとは、この鍵番も

知らなんだ。

壁　何となく、氣が浮き〳〵いたいて參つた。

ト壁手拍子を打ちながら。

うた替りへまだ花の、春は清水のたゞ頼め、頼母しき春も千千の花盛り。

ト謠にて躄珊瑚珠の臺を持ち、立たうとして醉つて立ちかね、躄にてよろしく舞ふ。啞浮れ出し、

淨るりへいとし若衆に小鼓は、締めつ弛めつ弛めつ締めつチ、タツポ。うたへ鳴るか鳴らぬか調べの糸の、解けぬ思ひの緣の端。

ト袋の寶物を鼓につかひよろしくあつて、盲杖を金剛杖にして前へ出て、

うたへ山から下りる小山伏。淨るりへ腰に法螺貝お手に珠數御客僧は受け給ふ、柴垣越しに物言はう。うたへ功力通じて有難や。

ト盲人祈りの振りあつて納まる。

うたへこれは近頃評判の、動物園に一構へ、熱帶地方の詣とて、隣りづからの象見舞。

トこの內松尾かいどりをすつぽりかぶり、扇を鼻にして象の振りにて、倒れゐる盲人を起す。これにて盲人桃色の件の袱紗をかぶり杓子を持ち、瓶の側へ起き上り、猩々の見得。

淨るりへ猩々眠氣にうつとりと、起されて見る瓶の酒。

うたへ下戸は知らぬが醉醒めの、水にはあらで石崎の、濱の鶴とて一本生、淨るりへ醉うた〳〵上野の山で、雲を凌ぐは、淨るりへ酒の藏

ト猩々の振りよろしくあつて、三人ひよろ〳〵して其儘皆々寐る。松尾貫船思入あつて、三人へ三方、杓子、車附の瓶の臺を紐にて腰へ結びつけ、

松尾　健忘といひて心を許させ、樣子を見たる三人の振舞。

貫船　お庭口より忍び出で、御主人へこの事を。

兩人　さうぢや〳〵。

うたへ主命重きかしづきは、支度とり〳〵走り行く。

ト橋がかりへはひる。

淨るりへ引違へて戻り來る、主人は門に佇みて、

ト下手より以前の主人出て來り、

主人　ハテ心得ぬ事である。唯今戻りがけ、土藏の戸前を見廻りたるに、錠前が明いてゐる。（ト聞耳立て、）これはいかな事、酒藏の瓶を引出し、正體なき有樣。ハヽア、かねて腰元共に申付けおいたが、我許へ知らせにで

も參つたか。よし／＼、一つ落してくれう。（ト縺合ふ杖をとつて、トン／＼と叩き。）アノ、こゝな、大盜人め。

うた（梢をおろす夜嵐に、散るや木の葉の寄邊なく、

トこれにて三人目をさまし、主人を見てびつくりして慌てながら、盲人は啞になり、躄は盲になり、啞は躄になつて、

啞　これは、お歸りなされましたか／＼。（トゐざつてく／＼、廻る。）

主人　おのれは啞の癖に、口を利きをるか。

啞　エヽ。（トびつくりして啞になり。）ワア／＼。

主人　ヤア、おのれ躄の癖に、盲になつたか。

躄　エヽ。（トびつくりしてゐざる。盲慌てゝ。）

盲　ワア／＼／＼。

主人　エヽ、おのれも盲目の癖に、啞になつたか。

盲　エヽ。（ト慌てゝ目を閉ぢる。）

主人　アノ、こゝな、大盜人め。やらぬぞ／＼。

三人　これは、いかな事。

主人　やらまいぞ。

うた（濱松風にざんざめき、吹立て／＼吹送る、追ひつ追はれつくる／＼／＼。浄るり（巡る因果も一興の、納まる御代ぞ、うた（目出たけれ。

ト三人逃げにかゝると、紐にて結びつけたる品を引摺り逃げにくいな、主人追廻す。賑かな鳴物をかぶせ、追掛けよろしくあつて、先づ今日はこれぎり。

ト目出度く打出し

三人片輪（終り）

過し慶應年間に酒輿に乘せし歩兵に出合命危ふき九郎兵衛の難儀を救ふ彰義隊大澤春日段田害浪士が屯なす所へ上使にあらぬ長岡が說諭の尾に附か衆が退身善か惡かはしらま弓矢猛心の八郎と賢次郎が望みをば叶へん爲に半左衛門が親子の緣を切戶口惜しむ名殘のおいゆやお谷忍び難なく忍が岡に火花を散す幸助が覺悟の自殺に介錯の役に會津の長吉が落行く道も御隱殿覺善院の勇力に血路を開く三川島又も降り來るあめいろ綱代の御駕を守護なす源吉佐兵衛同じ忠義に金魚屋のおわかも夫の恩返しかくまふ天野がお花より父の最期の噺を聞き悲嘆の涙に暮六のかねて入込む非人の傳次が訴人に遁れぬ必死の捕物星霜早くも辰年より今年は二十三年の博覽會に目出たく再會

實有難太平今昔物語

皐月晴上野朝風

七幕



大詰 本所割下水 金貸屋の場

皐月晴上野朝風

（上野戰爭——七幕）

序幕

上野山下袴腰の場
廣小路松源樓の場
池之端仲町裏の場

役名——酒井牢輔。金魚屋九郎兵衞。春日左衞門。川宮新八郎。佐藤伴次郎。歩兵大佛鋼藏。同井之端左九郎。願人すちやらか三次。同のつぺり才六。齒抜き高井清介。高井の奴藤介。小代浦太。藝者京家の君勇。同あやめ家小花。同立花家小竹。同新柏家小葉。刀屋女房おはつ。同娘おかね。同下女おてつ。願人女房おもん。松源の女中〇△。其他。

本舞臺下手より上手へ斜に石垣、此の上草土手。松の立木の袴腰、よき所に開帳札を澤山に立て、上下櫻の立木、ずつと上手は見世物小屋の横手にて見切り、此前床几の上へ太刀三本、齒抜きの道具、下手に床几二脚。すべて上野山下袴腰の體。齒抜の見世に高井清介、着附袴にて立身、下手に齒抜の小僧藤介扇を持ち、此下手に仕出し六人、友達娘四人見物してゐる。ずつと下手に、願人ののつぺり才六、吉原冠り着流しにて、三絃を弾き、すちやらか三次同じなりにて、木魚を打つてゐる。これを仕出し四人娘形三人程見物してゐる。この模様見世物の鳴物にて幕あく。

清介　齒の抜けたるは、第一人相の妨げにいたしまして、これを其儘に捨て置く時は、幸ひも禍ひとなり、上運も不運と變るは、抜齒を其儘にいたして置きますゆゑ、甚だ不爲でござりますから、これは第一人の心掛でござります。

藤介　アイ〳〵左樣でござい。

娘〇　半時ほど前より立つてをりますが、まだ太刀を抜きませぬね。

娘△　お花見の人が多いから、直ぐ後へ人が立ちませうに。

娘□　早く抜いて見せればよいこと。
娘◎　待遠しうござんすナ。
清介　昔よりござりまする、長井兵助源水などゝは格外の違ひにして、手前方の齒の療治は、日本無類家傳でござります。もし蟲齒でもお痛みのお方は、一つ付け用ゐてお試しなさい。
藤介　アイ〳〵、左樣でござい。
三次　扨世の中は仲もよく、先づ其内で中なるものは、何であらうと尋ねて見たらば、お染久松藏の中、幡隨院長兵衞は駕籠の中、石川五右衞門は釜の中。
清介　しかし藥ばかり賣りましては、愛嬌がござりませぬから、居合拔をいたして御覽に入れます。
三次　お飯と杓子はお鉢の中、はしらと三つ葉は椀の中。
藤介　アイ〳〵、こちらでも御用とおつしやる。
三次　すちやらかぽく〳〵。
才六　なだべこちやら〳〵。（ト上下にて爭ふ。）
清介　オイ〳〵、隣りに出たお仁、それでは邪魔をするといふものだ。ちつと靜かにしたがいゝ。
三次　お前方こそ遠慮して、もつと小さくなるがいゝ。山崎町から出て來りやア、この山下は繩張内だ。
才六　長井兵助の僞物で、高井清介といふ胡麻化しもの。死んで地獄へ行つた時、齒より舌を拔かれなさんな。
藤介　オイ、人の生業の邪魔をして、胡麻化し齒拔とは何のこツた。長井兵助の本家から附渡つて來たこの小僧・聞いては默つてゐられねえ。
才六　聞いてゐられざア、どうともしろ。

ト見世物の鳴物にて、才六三次、清介を目がけて打ちに掛るを、藤介飛び附く。こつちやの立廻り、これにて見物の仕出し花道へ逃げる。この時揚幕より花見の仕出し六人、女形交りて逃げて出る。この後より歩兵大佛銅藏、井之端左九郎、筒ッぽだん袋、紺足袋、麻裏草履、大小にて、壹升樽とこゝ繩に結び折をさげ、金魚屋九郎兵衞金魚の荷を擔ぎ、この天秤棒を大佛銅藏提へ、刀屋女房おはつ、着流し雪踏、同娘かれ、着流し雪踏、同下女おてつ、小包を持ち、銅藏佐九郎酒に醉ひたるこなしにて、娘おかれの手を捉へ出て來る。これにて見物又舞臺へ戻る。これにて皆々ごつちやになり、この内歩兵兩人、願人齒拔を毆り倒し、皆々上下に別れる。見物娘は逃げてはひる。

銅藏　わいらは皆相手だぞ。

左九　一人も其分には置かんぞ。
見〇　積んだ喧嘩に枝が咲き、後へも先へも動かれず、
見△　居合を見ようとしたばつかり、
見□　到頭掛り合に、
皆々　なりましたなア。
九郎　突當つたとおつしやりますが、金魚は唯今お得意先に、納めて參つた歸りがけ、この人込でございましても自由自在に除けられますから、決して打附けはいたしませぬ。
銅藏　ばかな事をいへ、慥に手前達が我々に突當つたに相違ない。
左九　手前の家はどこだ、サア、それを申せ。
九郎　サア、わたくしの宅は。
銅藏　目高金魚と呼び歩く、まだ時候には早いながら、大方立派な金魚屋で、出入り屋敷へ持つてまゐつた、戻りがけと見拔いたぞ。
左九　サア、早く家を申さんか。
九郎　サア、私の家はナ。
左九　言はれなきやア手前達を召連れ、唯今出逢つた松源へ行つて、聞いて見たら知れるであらう。
九郎　アヽモシ、松源様はお得意先。唯今金魚を納めたばかり。そんな御迷惑かけては相濟みませぬ。
銅藏　アヽ、親は金魚の問屋だナ。これはなか〳〵物持たわえ。丁度よい、こゝへ連れて來た上さんも、一緒に屋敷へ連れて行く。當歳も願人も引くるめ、皆引張つて行くとしよう。
皆々　エ。
てつ　そのお腹立は御尤もでございますが、女子のことでございますから、どうぞ御勘辨下さりまして、お見のがしを願ひます。
かれ　それに此方から突當つたと申す譯ではござりませぬ。池の端から出て參つたを、あなた方お二人が、わざと此方へ突當り、
はつ　アヽコレ〳〵、さうではない。つい粗相したのぢやから、お詫してゐるのぢやわいの。
てつ　それでもあなた、あんまりゆゑ。
はつ　ハテ、默つてゐやいの。
ト制す。この内銅藏左九郎は憎い口より酒な含みゐて
銅藏　貴様達は口を揃へ、へいつくばつた同様に、頻りに勘辨してくれと、あやまつてばかりゐるが、百萬陀羅申

しても、一旦屋敷へ連れて行かねば、この儘には濟まさんぞ。

左九　ヤイ願人、酒がおつもりだ。どこぞそこらへ行つて、一升注いで貰つて來い。

三次　どうして、私共に一升などゝは。

左九　願人坊主にはよこすまいが、公儀の歩兵が申附けると、横柄に言つて行け。

三次　それでも錢を遣らなくつては。

左九　錢には及ばぬ。ただ持つて來い。

三次　それは御無理でござります。

銅藏　エヽ、早く取つて參らぬか。（トキツといふ。才六三次びつくりして。）

兩人　ヘイ、唯今行つてまゐります。

銅藏　待て〳〵。一人は人質に、此處に殘つてをれ。

才六　ヘヽエ。（トこれにて餘儀なく才六殘り、三次樽を受取り。）

三次　アヽ、たゞ酒を呉れゝばよいが。（ト下手へはひる。）

銅藏　しつこしのねえ町人共だ。この位あたまを揃へてゐても、片ツ端から盲目ばかりだ。

左九　この間も猿若町の守田座で聞違ひをした時、流石は芝居者だけあつて、酒肴で扱つたが。

銅藏　今日無禮をいたした奴等は、そこへ心附かぬとは、死人も同樣な奴だナ。

トこれを聞き、九郎兵衞おはつ思入あつて、下手にてちよつと囁き、銅藏左九郎の傍へ來り、

九郎　唯今あれにて失禮をいたしました人達が、一統お詫の印として、御酒のお肴を差上げますれば、どうぞそれでお屋敷へ、お連れなされまするのは。

皆々　御免なされて下さりませ。

銅藏　バカ申せ。酒の肴を出したくらゐで、これが料簡出來るものか。

かね　かゝさん、こーやどつしたらようござんせうナ。

銅藏　イヤ可愛らしい聲を出したナ。その聲を聞いては、皆の代りにこの娘を連れて參らう。

左九　コリヤよい思附きだ。オ、幸ひ此處に大太刀がある。これを差して警固してまゐらう。（ト出し臺の上にある大太刀を差し。）都合三本で、市川流の梅王のやうだ。

銅藏　イヤよい事がある。今此處へ酒が來たら、この娘を山へ連れて參つて、酌をさせながら花見と致さう。

左九　それはよいが、此奴らを一緒に連れるは、却つて難

儀ぢや。

銅藏　オヽ、幸ひ池の端の蓮玉に朋友がをつた。彼奴らに此奴を引渡し、君は花見の方へ來なさるがよい。

九郎　それではどうでも、お屋敷へ、

はつ　連れて行かれるので、

皆々　ござりまするか。

左九　サア、ぐづ〳〵せんで一緒に來んか。

ト辻打になり、左九郎大太刀を差した儘、九郎兵衞清介の襟がみを取り、才六を先に立て、兩人を引ずりながら、下手へはひる。藤介心配なし、

藤介　モシ〳〵親方。見世が一人ぢやア始末がつきませぬよ。（ト下手へ行かうとするを、）

銅藏　始末がつかざア、勝手にしろ。

ト藤介を足蹴にする。これにて藤介びつくりして上手へ逃げてはひる。この内おはつおかれ、おてつの三人は氣味の惡きこなしにて、

はつ　旦那樣へお願ひでござりますが、宿で連合が案じてをりませうから、どうぞお返しなされて下さりませ。

銅藏　歸りたい。勝手に歸れ。その代り娘は借りて行くぞ。（トおかれの手を取る。おかれワツと泣伏す。）何だ、泣き出したか。此奴ア妙だ。こゝが千兩といふ所だ。酒の來るまで待つてもゐられぬ。お袋、酒が來たら持つて來てくれ。ドレ、一足先へ花見をしようか。

トおかれを引張り、立ちかゝるを、

はつ　アヽモシ、滅相な。これをお連れなされましては。

銅藏　エヽ、邪魔をいたすとぶつた斬るぞ。

ト辻打にて九郎兵衞、おはつ捨ぜりフにて留めるを銅藏振拂ひ、かれを連れて上手へ行かうとする。爰へ上手より春日左衞門、割羽織、大小、中下駄にて鐵扇を持ち出て來り、この中へはひり、兩人を支へ、眞中へ來る。この内仕出しそこ〳〵に上下へ逃げてはひる。

銅藏キツとなり、

ヤア、何故往來の妨げするのだ。

左衞　何事かは存ぜぬが、女子を提へて連れ行く樣子。見るに忍びず留めましたが、如何なる無禮を致せしな。

トこれにて双方床几へかけ、

銅藏　無禮といふのは此處にゐる、娘とお袋と見える女房おれに突當つて無禮をしたから、唯今屋敷へ連れて行くのだ。

左衞　然らばこれにゐる者共は、皆詫びてゐるのでござる

か。

銅藏　殘らず無禮をしましたので、

左衛　それに何で銅一人、無理に引立て、他の者にお構ひはござらぬな。

銅藏　エ、

左衛　彼は子供も同樣ぢやに、選りに選つて連れ行かるゝとは、醉狂なお人であるな。

ト此うち奥より三次一升樽をさげて出て來り、

三次　大きにお待遠樣でござりました。

銅藏　大儀であつた。先刻から待ち兼ねてゐたのだ。

三次　旦那、どうしても酒をよこしませんから、歩兵樣の御用だと申しましたら、この頃そんな事をいつて贋があると申しまして、よこしませんから、仕方なく自腹で買つて參りました。

銅藏　オ、御苦勞であつた。相手は助けやるから、勝手にこの場を引取るがよい。

三次　それは有難うござります。(トあたりを見遣り、)彼奴はどこへ參りました。

銅藏　今蓮玉へ連れて參つた。あれへ行つて、勝手に連れて行け。

三次　何のこッた。此處にゐねえ位なら、この酒は買はねえものを、バカな目に逢ふものだ。

左衛　コリヤ、其方は何れの者だ。

三次　ヘイ、山崎町にをります職人でござりますが、この旦那に無禮をしたといつて、到頭酒を買はされまして、なけなしのお錢を立替へました。

左衛　ナニ、酒を求めて參つた。武士たる者が、町人に酒の無心をいたすとは、さて〳〵法外千萬な事ぢや。

トこの内少し銅藏面目なきこなし。

三次　ヘイ、一升は一升でござりますが、代は安うござります。

左衛　コリヤ、幾ら出したか、身が取らすぞ。

三次　實は三合ぶり揃ひまして、七文と五十でござります。

左衛　どの位ぢや。遠慮なく申せ。

トこの内銅藏不審に思ひ、樽の重みを引いて、口から呑んでゐる。左衛門は錢入より二朱と錢を出し、

左衛　コリヤ一朱が二つに、錢が附いてゐるぞ、これを持つて早くまゐれ。

三次　エヽ、それではあなたが下さいますか。それは有難うござります。(ト三次金を受取り、)これでやう〳〵

立前が埋つた。
左衛　重みは慥に一升あるが、これは滅法水ツぽい酒だな。
三次　實は三合酒を買つて、後は水を入れて來ました。
銅藏　ウヌ、人をバカにしやアがつたナ。
三次　エヽ、斬るなら斬つて見やアがれ。（ト言捨てゝ下手へ走りはひる。）
銅藏　エヽ、不屆きな奴め。何で逃がすものか。
　ト辻打になり、銅藏氣味わるく／＼これなしほに、後追ひ掛けて下手へはひる。
左衛　よいしほにして逃げてまゐつたが、實に憎むべき者ではあるわい。
　ト合方になり、皆々下手にて手を突き、
はつ　どうなる事と存じましたに、あなたがお出でになり、娘が命が助かりました。
てつ　何とお禮を申しませうか、有難いことで。
兩人　ござりまする。
左衛　市中の茶屋小屋遊所場にて、諸人に難儀を與うる由、專ら噂高きゆゑ、新徵組の巡邏あれど、なか／＼隅々まで行屆かぬゆゑ、かゝる輩の横行なすは、德川家の御恥辱。目に懸らば懲らしてやれど、實に苦々しき事ぢやわえ。
　トバタ／＼にて、下手より以前の九郎兵衛、清介太刀を擔ぎ走り出て來り、左衛門を見てびつくりなし、
九郎　ヤ、また後釜が、
兩人　ござつたかな。
　トギヨツとする。おはつ思入あつて、
はつ　ア、モシ、お案じには及びませぬ。このお方樣は、一人殘つた歩兵さんを、遠ざけて下さりました。娘のためには命の親、お救ひ下さつたのでござりまする。
九郎　オ、左樣でござりましたか。實は私も三橋向うで命拾ひをして參りました。
左衛　扨は其方等も歩兵に出逢ひ、難儀をいたした者なるか。
九郎　ハイ、唯今揚出しの所まで參りますと、あなた方に似たお方が中へおはひり下さりまして、扱つて下さいましたが、一向に聞入れませず、實に憎い奴でござりました。
清介　さう致しますと、二言三言いひ募る内、先の奴が刀の柄へ手を掛けたを、その旦那が扇にて急所を打つと、大層びつくりいたしました。

九郎　すると泡を喰ひまして、雲を霞と池の端の方へ、一目散に逃げてまゐりましたわえ。
はつ　そんなら此方様も助かつたかい。シテそれは、何れのお方でござりましたナ。
九郎　それはこの頃彰義隊へはひつた天野八郎と申すお方、實に命の親でござりますわえ。（ト手を合せ拜む。）
はつ　シテあなた樣のお屋敷は、何れにゐらつしやりますか。お聞かせなされて下さりませ。
左衛　イヤ、身共らは當時浪人、どこと申して屋敷はござらぬ。
てつ　お宿にても厭ひませぬ。いづれお禮に上りますれば、どうぞお教へ下さります。
左衛　禮などゝは無益な事。つまり斯やうな難儀を救ひ、公儀の恥辱を雪ぐのぢや。
九郎　そんならこれぎりお禮さへ、
はつ　申上げられぬので、
皆々　ござりまするか。
左衛　我目に掛る其時は、この末難儀は救うてやるぞよ。
ト見世物の鳴物になり、左衛門下手へはひる。みなみな後を見送り、

九郎　同じ人と生れても、人に難儀をかけるもあり、
はつ　又人の難儀を救ふもあり、
かね　十人寄れば十色とやら、
てつ　花さへ八重と一重あり、
清介　同じ武士にも鋼鐵と鈍刀。
九郎　實に今のは鋼鐵ぢやな。
ト感心せし思入。この時上手より藤介出て、
藤介　アイ〳〵、左樣でござい。
九郎　エヽ、びつくりした。（ト手拭で鼻を拭ふた道具替りのしらせ。）オヽ、齒拔の小僧さんか。
トこの模樣よろしく、辻打にて道具廻る。
本舞臺一面の平舞臺。上手寄心に九尺の床の間、交山の軸、置き花活けに山吹を入れ、この下四尺の地袋、續いて茶襤、上手一間二枚銀地光琳松の繪の襖、下手折廻し二階の廊下。裾通り手摺。向ふ樹木の梢と二階家を見たる中遠見、すべて松源樓二階廣間の體。上手に酒井宰輔割羽織、袴、大小、小代浦太同じこしらへ、田宮新八郎同じなり、この三人上手に住ひ、次に以前の春日左衛門、佐藤伴次郎、銘々吸

毛氈を拵へ酒肴を出し、下女○△酌をなし、藝者君勇、小花三絃を彈き、小竹、小榮音頭を踊つてゐる。この見得、京の四季にて道具留まる。

ト藝者小竹、小榮振りあつて納まる。あと合方彈き流し。

新八　近頃は諸方にて踊りが流行いたすと聞いたが、今日圖らず數寄屋町の酌人の踊りを見ましたは、これも酒井氏のお心入、恐れ入つてござりまする。

宰輔　それに今日座敷へ出でし、この君勇は、當年の春京都より參りたる、江戸には珍らしき都の藝妓。これが各々がたへ御馳走でござる。

君勇　まだ御當地馴れんさかい、ちよつとも御樣子が分りませぬから、よろしうお願ひ申します。

小花　君勇さんが參りましたので、京の四季の本家本元、この頃はどちらの御座敷でも、四季が流行ものでござります。

浦太　久々にて酒井氏に拜顏を得ました上、殊の外酩酊いたしたが、とんと失念しましたが、何年振りでござらうナ。

宰輔　それほど長くもござるまいが、拙者はお目附を勤めしきり、絕えて世の中へ出ませぬ故、御同樣に長いやうでござる。

新八　酒井氏が下されし此集會の廻狀に、一人として洩れもなく當樓へ來りしは、これも盡きせぬ奇緣といふもの。

左衞　何となく、元の將軍家へ歸りたるやうな心地がいたし、

伴次　大政返上前の料簡で、裸に今宵は過しまするて。

宰輔　御ゆつくりとお過し下さい。

トやはり右の合方にて、藝者酌をなして、皆々酒を呑みゐる。この内下女再び出て來り、

女△　唯今店二階のお客樣が、お邪魔とは存じますが、ちよつとお目通りいたしたいと申され、伺ひに出ましてござりまする。

伴次　何人なるか、許しませうや。

宰輔　遠慮なく通すがよい。

女△　ハイ〳〵。

ト下手へはひる。みな〳〵酒盛よろしく、爰へ直ぐ女中△案内して、おはつおかねおてつの三人出て來り、

お連れ申して參りました。

げつ　誠に失禮ではござりますが、先程のお禮に出まして
　ござりまする。
左衛　オヽ、先刻のお女中でござつたか。ア、參らずとも
　よいことに。
げつ　一命助かり安心いたし、ちよつと支度に當家へ立寄
　り、二階へ參りしその節に、お見掛け申しました。お禮
　を申さなくては濟みませぬゆゑ、ちよつと出ましてござ
　りまする。
かね　先程は一命をお救ひ下さりましたので、母も安心い
　たしました。
てつ　お供いたせし私共まで、有難いことで。
三人　ござりまする。
淸太　何か間違ひでもござつたかナ。
左衛　この内儀は山下にて、歩兵に難儀を申し掛けられ、
　困却なした折通り掛り、扱つてやりました。
淸太　ムヽ、スリヤ時に遭はずして、歩兵が町を荒します
　とナ。
新八　亂暴極まる致し方、新徴組の警固では、なか／＼防
　ぎゝれますまい。
　ト宰輔ちつとなつて、

宰輔　事によつたら、我隊も。
淸太　エ、
宰輔　イヤ、かく世の中が亂れては、必らずこれは募らん。
小花　そんなお話をお聞き申すと、何だか身の毛がよだつ
　やうで、夜のお座敷には出られませんね。
小竹　小花姐さん、お聞きなさい。一昨日の晩も車坂で、
　三人とか斬られましたとサ。
小染　あれを斬つたお人は、ソレ何とかいふ下谷の方の劍
　術の先生だとさア。
新八　ナニ、下谷にゐる劍術の先生とは、ムヽ。（トぢつ
　と思入。）
左衛　京都の戰爭以來、實に世間が亂れたの。
新八　君勇はあの頃は、まだ上方にをつたかナ。
君勇　居つた所ではおまへん。日も忘れんが、去年の十二
　月九日であつたさかい。御所の廻りのお固めを附けまし
　たは、薩摩樣に土州樣、藝州樣でおました。わたい大德
　寺へお詣りの戾りがけ、仰山膽冷しましたさかい、よう
　覺えてをりますわい。
小竹　姐さん、戰を見たのでござんすかえ。
君勇　ナニその時は戰などないけれど、みんなから筒袖に

股引の仰山太いのを穿きよつて、長い刀を差しなはつて、皮の足袋や紺の足袋に草履草鞋を穿きなはつて、よう塗つた笠を冠り、御門の口々にずらりと並ひよつて、大砲小砲取り並べ、かういふ鹽梅に力んでゐなはつたが、實に禁裏樣の御威光は、仰山なものであつたさかい、今に目に殘つてゐますわい。

小染　その時分には、江戸の公方樣は、御留守でござんしたが、彼方でござんしたかえ。

君勇　オヽ、彼方とも〳〵。其時は公方樣は二條のお城にゐなはつて、それから十二月十二日の晩大阪へお立ちなされたさかい、京の町は何か樣子は分らんが、德川樣の御家來が、今にごてごて始まると、えらう騷ぎ立つて來ましたのサ。

小竹　ソリヤどつちが惡いのでござんせうね。

君勇　ソリヤわたい達には分らんが、わが故鄉を褒めるぢやないが、都へ來たらどだい公方樣は及びまへんナ。

ト この內宰輔みな〳〵は、酒を呑みながら聞いてゐる。

はつ　私どもの生業は、德川樣のお蔭にて、これまで樂に世を送りましたが、唯今のやうなお話を承はると畏れ多く、何とも申上げやうがござりませぬ。

君勇　それは御尤もでおますが、京の者は德川樣で大きな難儀をしましたわいナ。

新八　將軍の爲に難儀をしたとは、それは如何たる事であつたナ。

君勇　サア、當年の春は祇園町では、逃げるの退くのといふ騷ぎ、しかも正月三日の日暮れに、大阪へお歸りなさつた公方樣が、又京へお出でなさると定りますと、鳥羽と伏見へ關門をこさへ、そこでキッチリ留めたさかい、それからゴテ〳〵と到頭戰が始まつて、京にゐてさへ氣味惡うて、私や八瀨の里へ立退きましてござりまする。

小花　お上の御樣子は分らないが、何ぼ何だつて公方樣のお通り筋へ、關門を拵へるとは、あんまり酷いぢやアありませんか。

君勇　サア、それだつて普通のお供で行きなはつたら知らんこと、三萬とか軍人を連れて行きなさつたから惡うござんす。

てつ　それでも關門など出來たのは、何だか穩かでないと思ひますねえ。

君勇　あなた方、さういひなさるが、それから毎日戰があ

つて、七種の翌朝に、徳川樣は大阪から紀州へ落ちられ、姿を變へて、船でお江戸へ戻られたさかい、マア惡いは知れてをるナ。

小花　ソリヤ向うは禁裏樣ゆゑ、それで敵はないから逃げたのでござんせう。

君勇　イエ、阿呆らしい。惡いから逃げたのでござんす。

小花　イヽエ、謂はゞ御主人も同樣ゆゑ、わざとお立退きでござんしたらう。

君勇　イエ、そりやお前方の言ふのが嘘ぢや。

小花　イヽエ、徳川樣が態とお立退きで、

三人　ござんすわいナ。

君勇　イヽエ、逃げたのに相違ないわいナ。

ト藝者爭ふ。この內宰輔は皆々な窺ふ思入。作次郎は藝者達をとめて、

作次　コリヤ、ちと靜かにいたすがよい。君勇は京の產れに土地の肩を持つのも尤も、小花等當地の者は、江戸を褒めるは當然ぢや。

左衛　尤も人情の然らしむる所ぢやが、どちらが惡いと申すまでもなし、かく成行くも皆時節。最早双方申さぬが花ぢや。

君勇　ツイ暮から春へかけ騷ぎましたさかい、言募り、申譯がござりませぬ。

はつ　私も又お禮に上り、大きに長座をいたしました。

宰輔　唯今話を承はれば、徳川の爲に今日まで樂に暮せし刀屋の由、それほど將軍が有難いと思ひをるかの。

はつ　徳川樣のことなれば、御恩は山程ござりまする。

宰輔　ム、左樣か。シテ宅は何れぢや。

はつ　ハイ。御徒士町一丁目で、鎌倉由兵衛と申しまする。

宰輔　オ、左樣か。（トちつと思入あつて、）又近日何か賴むであらう。

はつ　どうぞ、御用を願ひまする。左樣なれば何れも樣、これにて、

三人　お暇仕りまする。

君勇　大きに失禮、

小竹
君勇　いたしました。

ト端唄の合方になり、女中案內して、おはつ以下二人下手へはひる。

君勇　つい都のお話に實がいつたので、仰山失禮いたしました。

小花　江戸は江戸の肩を持ち、もし負けたら、此方三人で

小竹　言負かさうと思ひましたよ。
小花　小花姐さんのお言ひなさる通り、公方様が負けたと思ふと、
小榮　悔しくつて、
小竹　なりませぬわいなア。
宰輔　ヤア潔い。これが誠の大和魂でござるなう。（トこれを皆々聞き、）
ト皆々感心なす。爰へ女中燭臺を持ち出て來り、置く。
小花　自分の勝手にお喋べりをして、申譯がござりません。
君勇
小花　何ぞお唄ひなさいまし。（ト三絃を取上げ調子を合せる。）
宰輔　コリヤ／＼、チト此處で内談あれば、暫く下へ行つてゐてくりやれ。
小花
君勇　オヤ、左様でござりますかえ、それではよい時分に、お呼びなすつて下さりませ。
伴次　承知いたした。
君勇　そんなら下で、
三人　お待ち申してをりますわいなア。
ト流行唄になり、君勇以下三人下手へはひる。これにて左衛門伴次郎後を見送り、
左衛　彼等は遠慮いたしてござるか、
伴次　シテ、遠ざけられし、
皆々　その趣意はナ。
宰輔　久々にて拝顔を得し、各々方もお聞きならん。唯今女子が物語りし、鳥羽伏見の戦争より、御帰京ならせられし成行は、いかゞ思召しますぞ。
浦太　言ふに言はれぬ意味あれど、かく成り行きし事どもを、
新八　今日となり考ふれば、實に本意なき、
皆々　事でござる。
宰輔　御承知もありつらん。御親征江戸へ入城ありて、宣旨へ添へし別紙の趣。
トこれにて宰輔は切手本をなして居直り、懐中より書附を出す。皆々も下手にぢつと俯向く。
「第一條。慶喜去ル十一月以来天朝を欺き奉り、剰へ兵刀を以て皇都を犯し連日錦旗へ發砲し、重罪たるに依り、追討として官軍差向けられ候處、段々眞實恭順謹愼の意を表し、謝罪申出で候に付、而して祖宗二百餘年治國の功業少からず、殊に水戸贈大納言、積年勤王の志業淺からず、旁々以て格別深厚の思召しあらせられ左の條件實行相立ち候上は、寛典に處せられ、徳川家

名立て下され、水戸表へ退き、謹愼罷在るべき事。」「第二條。城明渡し、尾張藩へ相渡すべき事。」「第三條。軍艦銃砲を引渡し申すべし。追て相當差返さるべき事。」「第四條。城內住居の家臣共城外に引退き、謹愼罷在るべき事。」「第五條。慶喜叛謀相輔け申候者重罪たるに依り、嚴科に處せらるべきの所、格別の寛典を以て相當の所置いたし、之を言上すべき事。」（ト書附を卷き納めながら、）この五箇條の儀領承あられ、違背之なき段御受ありたり。文中に慶喜叛謀相輔け候者、重罪たるにより嚴科に處せらるゝと。御同樣に臣下なり、公は則ち主人なり、主を思へば嚴科に處すとは。

ト互ひに顏見合はせ、扇を膝につき、味氣合の思入。これを誂への合方になり、

將軍恭順謝罪の爲、東叡山の大慈院へ御閑居あらせられし時の、御心根を察し奉れば、

左衛　假令嚴科に、

皆々　處せらるゝとも。

ト ぢつとなり俯向き、愁ひの思入。宰輔この樣子を見遣り、

宰輔　これにて互ひの胸中も。（ト思入あつて、氣をかへ、）イヤ、座敷が大分しめつて參つた。女子を呼んで飲直すと致さう。

ト手を叩く。藝者お酌女中出て來り、

君勇　オヤ、もう御用濟みで、

皆々　ござりますかえ。

新八　此方へまゐつて、酌をしてくりやれ。

ト小花新八に酌をする。君勇は宰輔に酌をする。宰輔猪口を取上げ飲みかけ、床の軸へ思入あつて、

宰輔　「南山に鼓打つて北山に舞ふ。」南山に鼓打つて北山に舞ふとは、面白いナ。

浦左　落款は深川の山で名高い、交山ぢやナ。

左衛　交山とは交はる山。

新八　山に交る。

作次　南山の上野に鼓打つて。

宰輔　北山の陸奥に舞ふ。

新八　その北山は、

左衛　會津か。

作次
新八　函館。

宰輔　イヤ、言はず語らず胸中か。

浦太　一つに合ふはこれも又、

左衛　盡す忠義は常磐木の、
作次　十八公の松源に、
新八　酌みかはすとは深き縁、
宰輔　やがてぞ山に交はりて、
女皆　エ、
宰輔　又も酒宴を、（ト浦太と顏見合せるを道具替りのしらせ）開くでござらうナ。
ト氣を替へる。この模樣太鼓入りの座附唄にて、道具廻る。
本舞臺、正面不忍池、中島を見たる夜の中遠見。よき所に柳の立木、上手建仁寺垣、下手黒塀の見切り。すべて池の端仲町裏手の體。時の鐘すちやらの合方にて道具留る。と上手より幕あきの才六、三味線を彈き、三次と他に〇一人、木魚を合せながら出て來り、
三次　けふは朝ッから附が悪いから、もういゝ加減にして歸るとしようぜ。
才六　此處まで來たものだ。切通しまで流さうぢやアねえか。
〇　手前達は豪勢怖がるが、さう毎晩斬られてたまるものか、取れるだけ錢を取るがいゝ。
三次　所がけふは廣小路で、だん袋に掛り合つて、なけなしの錢を取られたのだ。
〇　おらア淺草へ行つてゐたから、ちつとも樣子を知らなかつたが、酷い目に逢つたナ。
三次　所が天の助けはあるもので、彰義隊に似てゐるお侍が、その代物を扱つてくれて、錢はそのお方が出してくれたから、先づ穴は埋つたが。
才六　まご／＼すると打つた斬られ、こんな險難な世の中はねえ。
〇　お上のお取込が酷いので、今にも戰が始まるやうだが役人衆も面喰つて、歩兵などを拵へたが、ちつとも爲になりやアしねえ。
三次　どうして爲になる所か、商人遊所場こちとらまで、上つたり大明神だ。
才六　おまけに毎晩人殺しはあるし、早く錦切の附いたお侍が市中を廻つてくれなけりやア、うつかり表も歩けねえ。
三次　實に力にするものは、この頃では錦切だが、何とか

いふ唄が流行るぢやアねえか。

才六　おれは三味線を知つてゐるから、德、唄つてくれ。

○　よし／＼。

三次　おれもあたまを言つてくれりやア、後は思ひ出す。

トこれにて才六三味線を彈き、三次、○木魚を打ちながら、

○　「皆さん／＼お馬の前に、ひら／＼するのは何ぢやいな。あれは朝敵征伐、錦の御旗を知らないか。」

三人　トコトンヤレトンヤレナ。

トこれより下座へとり、四人鳴物を合せ、花道へはひる。この內よき時分に、上手に以前の宰輔、浦太、左衞門、伴次郎、新八、松源の貸提灯をつけ出て來り、後を見送り唄を聞いてゐる。

宰輔　歩兵が市中で亂暴なすゆゑ、旣に庶民が政治向きを惡しざまに言ひなすは、聞くに忍びざる事ぢやわえ。

浦太　これも時節と存ずれど、

左衞　斯くまで世の中亂れしか、

伴次　今の唱歌を聞くにつけても、

新八　ハテ苦々しき

皆々　事ではある。

トぢつとこなし。新內の合方、按摩の笛になる。下手より幕あきの歩兵銅藏、左九郎、頰冠りにて、以前の一升樽と經木折を四つ程さげ、酒に醉つて出て來り、

銅藏　サア、これから雁鍋へ行つて、又一杯飲み直し、この勢ひで吉原へ行かうではないか。

左九　雁鍋はもうしまつたらうが、もしゝまつたらこの折で、酒を出さして酒むと致さう。

銅藏　オットそのこと、やつちよろね。（ト兩人上手へ來り、左衞門に突當り。）エヽ、氣を附けねえか。無禮者めが。

左九　コリヤ、武士たる者に突當つて、詫をしねえか。

ト左九郎は左衞門の腕、銅藏は胸倉を取る。伴次郎はさげたる提灯にて兩人を見せ、

伴次　オヽ、此奴は晝間の兩人ではござらんか。

左衞　左樣であつたか。（ト振拂ひ。）また酩酊いたしをるか。（トこれにて銅藏左九郎ひよろ／＼として、）

銅藏　ヤア、此奴、不埒な事を申す。

左九　ウヌ、その分にはしねえぞ。（ト歩兵兩人刀へ手をかける。）

新八　斬つてしまへ。

ト これにて左衛門抜打ちに歩兵兩人の胴を一刀に斬る。これにて兩人苦しむ。伴次郎は提灯にて宰輔、浦太に見せる。

宰輔 莫迦め。

ト 刀を落し差しにする。歩兵兩人はバツタリ倒れる。

これな木の頭。

皆々 ム、ハ、、、、。

ト 大笑ひに笑ふ。この模樣、やはり新内按摩の笛にてよろしく、

幕

二幕目

下谷竹町湯屋の場

凌雲院應接所の場

役名――天野八郎。越前屋佐兵衛。長岡悦太郎。大久保軍右衛門。春日左衛門。田宮新八郎。佐藤伴次郎。小代浦太。上野鐵五郎。三助越後の音吉。同會津領の松藏。凌雲院の徒弟隨念。齋藤數馬。浪士。天野娘おはな。同下女おたよ。刀屋女房おはつ。湯屋女房おひさ。長屋嬶おすゞ。同おてふ。其他。

本舞臺一面の平舞臺、正面一間の湯屋の入口を、内より見たる障子、越前屋と記し、この内落間の境界、上手三尺の番臺、これより上へ斜に下駄棚、上手大臣柱際着物を入れる棚の裏を見せ、この間より流しへ行く出入口、土間の下手寄ごころに上格子、この内竹簾をおろし、裾通りやはり着物を入れる開き。すべて上野町湯屋を内より見たる體、番臺に湯屋女房おひさ、着流し前垂にて佇ひ、糠袋へ糠を詰めてゐる。下の方に長屋嬶おすゞ、湯上りにて着物を引つかけ、抱子に着物を着せてゐる。この脇に同おてつ帯を締めてゐる。番臺の近邊に三助音吉、半纏三尺帯にて雜巾がけをしてゐる。この見得赤子泣聲、唄にて幕あく。

すゞ よくまあギヤア〳〵泣く子だね。氣のぼせがしてなりやアしないよ。

てつ お晝前だからまだよいが、これが夕方でゞもあつた日にやア、着物を取られても知れやアしないね。

すゞ　イエ、そりやア此處の湯は安心さ。昔からお客の物は足袋片々なくならないのは、こゝの湯の名代だから、それはどんなに込んでも大丈夫さ。
てつ　さう言へば此處の親方は癇性だと見えて、隅から隅まで心持よく掃除をするから、實はお晝前など私共が來ると、斷られやアしないかと思つて、少し氣が咎めるのさ。
ひさ　どう致しまして、どなたもお客樣、そんな御斟酌はござりませぬ。
てつ　それでもあんまり綺麗だから、何だかお氣の毒に思ひますよ。
　トこの内吾吉、だん〳〵下駄箱の蓋へ、板の間を拭きながらはひる。おてつは帶を締めながら、
お前の處では、昨夜は仕事からお歸りかえ。
すゞ　イ、エ、昨日も一昨日の晩も泊りきりだから、又小塚原へでも引掛つたのではないかと、實は氣を揉んでゐるのさ。
てつ　私の所でも丁度二晩歸らないから、樣子を聞いたら、上野に大急ぎの仕事が出て、毎晩夜明しをするのだと、棟梁のお上さんから聞きましたよ。

ひさ　モシ〳〵、その急仕事と申すのは、本當でござりますかナ。
てつ　それでは急仕事の譯を、お知りなさいませんかえ。
ひさ　詳しい譯は存じませんが、一昨日からお山の廻りを竹矢來で圍ふといつて、この近所の人足衆を大勢引上げたとの噂。人の話で分りませんが、戰でもなければよいと、湯屋などの稼業の者は心配してをりまする。
すゞ　あの廣い上野の廻りを、矢來で圍つて、どうするのだらうね。
　トこの内抱子に着物を着せ、自分も前垂を締めてゐる。爰へ上手戸棚の蔭より、前幕の刀屋の女房おはつ湯上りにて、手拭と糠袋を持ち出で來り、
はつ　此方のお家は御掃除御用で、上野のお出入りでござんすから、お聞き申したら分るでござんせうが、私の所なども、この頃は刀の研ぎが立込んで、夜業をしても間に合はぬほど、急に忙しくなりましたが、戰の噂は本當でござんせうかね。
ひさ　宿でも日々御本坊や又御殿へも上りますが、家へ歸つては何も申しませぬから、一向樣子は分りませんが、この噂にも困りきりますな。

はつ　刀の研ぎが立込んで忙しいのは有難いが、もし山で戰でも始まると、上野近所は一面に焼拂はれでもしはせぬかと、內の人も案じてをりまする。

すゞ　それではお山で始まると、此處らもむづかしいのでございませうナ。

はつ　どういふものだか分りませんが、まあ危いかと思ひますね。

てつ　どうせ店借だから、私共はそんな事は構はないから內の人の仕事があつて、甘いものが食べられて、芝居の一と幕も見る方が、呑氣でいゝかも知れませんよ。

すゞ　この三月二丁目へ行つた時は、市村が花子の松若で左團次が男達をして、明石屋が忍の惣太だつたね。あれを思ひ出すと、何か始まつて思ふさまお金を儲けて、芝居へでも行きたいのさ。

てつ　大層靜かになつたね。

すゞ　やう〳〵寢ついたのさ。刀屋のお上さん、ごゆるりとなさいまし。

はつ　モウお歸りでござんすかえ。

すゞ　お先へ御免なさい。

　トやはり右の唄にて、兩人履物をおろし、入口より奥へはひる。

はつ　今のお上さん達も、大層話好きでござんすナ。

ひさ　いつも元氣なお二人ゆゑ、御苦勞なしで世間の噂をなさいますが、あゝいふ事は言ひ當てるものでございますナ。

はつ　何だかソハ〳〵して、厭なことでございます。

　トやはり右の合方にて、表の入口より亭主佐兵衞、羽織着流し駒下駄にて、思案のこなしあつて出て來り、店へ上りながら、

佐兵　オイ今歸つたよ。

ひさ　オヤ、大層遲うございましたナ。

佐兵　これはお上さん、お出なさいまし。

　ト挨拶して番臺の傍へ立つてゐながら煙草を喫ふ。

はつ　夜になると出られないので、お晝前に來ては、長湯をして行きますわいナ。

佐兵　相變らずお忙しうございますかナ。

はつ　忙しい所ではありません。深夜業をしてゐます。

佐兵　へエゝ、刀屋さんはそんなに當時は、お忙しうございますかナ。

はつ　研ぎが主でござんすが、諸方から來ますので、職人

を入れてやつてをります。
佐兵　この頃は、刀劒流行でもござりますか知らぬ。
はつ　ナニ、さういふ譯でもござりませんが、この節上野や根岸邊のお寺方へお出なすつたお方達だと申すことで皆初めての御注文なれど、御身分のあるお方と見え、お揃ひなどの几帳面には、實に褒めてをりますのさ。
佐兵　お客と申すのは、さういふお方でござりますか。
ト腕組をなしぢつと思入、この内おはつ身支度をなし、おひさ煙草をつけて出す事などあつて、履物をおろし、
はつ　さやうなら。
佐兵
ひさ　お歸りなさいまし。
ト合方にて、おはつ奥へはひる。佐兵衛は踏臺へ腰をかけ、ぢつと考へてゐる。おひさ番臺にある錢を集めようとして、土間へバラ／＼と落す。おひさ是れを取りに土間へ下り、錢を拾ひながら、佐兵衛の樣子を見て、
ひさ　モシ、見れば顏色もよくないし、何だか鬱いでお出でだが、どうかしたんでござんすかえ。（トいへども、佐兵衛默つて考へてゐる。）モシ親方、どうしたのだえ。
ト佐兵衛の傍へ下にゐる。これにて佐兵衛心附き、
佐兵　おらア癪に障つて堪らねえのだ。
ひさ　藪から棒にびつくりするわね。何ぞ喧嘩でもしておいでのかえ。
佐兵　ナアニ、喧嘩はしねえが、言草をいつて來たのだ。
ひさ　エヽ、それは何處でお言ひのだえ。
トこれにてちよつと流しへ思入あつて、
佐兵　天野のお孃さんか。
ひさ　外には誰もお出なさらないよ。
佐兵　それぢやアいゝ。まあかういふ譯だ。（ト替つた合方になり）今朝廣小路の三河屋から、名主樣の寄合があるから、おれにちよつと來てくれと、呼びに來たから行つて見ると、大勢鼻を揃へてゐて、何だか恭しく言立てるには、今度宮樣が京都へ愈々お立になるにつき、この道の取締として、山内の陵雲院へ四條侍從さんがおはひりになるから、官軍御用とした札を掛けろといふのだが、あんまり莫迦にしきつてゐやアがるのだ。
ひさ　何もお寺へ札を掛けたつて、お前怒る事はないぢやアないか。
佐兵　ムヽ、さうぢやねえ。札を掛けるだえ。
ひさ　それだから、陵雲院へ掛けるのだらう。

佐兵　莫迦言へ。おれの家へ掛けろと言ふのだ。
ひさ　エヽ。（トびつくりなし、）宿屋でもしろと言ふのかえ。
佐兵　ナニ、さうぢやねえ。御用といふ札を掛けて、官軍を湯へ入れろといふのだ。それから己アさう言つてやつた。それはいけません。越前屋佐兵衛は、親の代から東叡山のお掃除御用で、お山中のお掃除をして、焚物は年中たゞ貰つて、おまけに年に七十俵宛の米を貰つてをりますから、徳川様と上野に對しちやア大恩があるんでございます。そりア官軍だつて天子様の御家來だから、惡いといふ譯は決してありませんが、江戸の恩人へ對していけませんと、おらアキツパリ斷つて來たのだ。
トこれを聞き、おひさ悦ばしき思入にて、
ひさ　そりやよく言つておやりだ。それで向ふが承知したかえ。
佐兵　ナアニ承知しねえのだ。そんな手前のやうな事をいつては、上へ對して濟まぬから、何でも御用を足すがいいと、大勢で勸めるから、癪に障つてたまらねえのだ。それからおらア斯う言つてやつたのだ。佐兵衛は徳川様と宮様の事なら、命でも捨てます料簡だが、外の者には用はありませんのだ。（トキツと思入。おひさ表へ心遣ひのこなしにて佐兵衛の袖を引く。佐兵衛振りもぎつて、）ナニ構ふものか。それとも強つて入れろといふなら、エヽ、ようございます、今夜の内に湯屋を叩き壞してしまひますといつて、直ぐ表へ出掛けると、まあそれだけは待つがいゝと、寄つてたかつておれを留めたが、いまだにヂリ〳〵してたまらねえから、もし何とか言つて來たら、直ぐ打壞す積りだから、手前もその氣でゐてくれろ。
ひさ　そりやアいゝ心持だつたね。それではいよ〳〵御殿では、京都へいらつしやるかえ。
佐兵　下々の者にやア分らねえが、事によつたらさうなるかも知れねえ。
トむつとなりうつむく。おひさもぢつと思入。こゝへ上手流しの口より、以前の三助晋吉出て來り、
晋吉　親方、いゝ心持な事を言はつしやるの。
佐兵　オヽ晋公か、聞いてゐたのか。
晋吉　ハイ、聞いてゐましたが、どうかわしも若しもの時には、御用に遣つては下さりませぬか。
佐兵　ムヽ、それでは手前もお上を思つて、骨を折る料簡

か。

晉吉　ハイ、公方樣と宮樣の事なら、どんな事でもする、といふのは、產れは越後の會津領、國を出てから江戸へ來て、これまでお世話になりましたが、御領主樣に對しても、德川樣の事ならば、骨を折らねばなりませぬ。

佐兵　ム、よく言つてくれた。おれも親から江戸ツ子で、永年下谷に渡世をしてゐて、湯屋仲間で立てられるも、一に上野と二には親の蔭。その泰平の續いたも、この頃御殿で樣子を聞くに、今度はいよ〳〵怪しい鹽梅、もしも話が纏まらず、イデ鎌倉となつた時に、こゝが日頃の御恩返し、丁度御本坊から來た米が、積んであるこそ幸ひだ。生業廢めても、其時は手の屆くだけ家中で、兵士方のお世話して、炊出しをする積りだから、手前も一番手を貸してくれ。

晉吉　それは丁度いゝ役だ。親方さアの事ならば、しなくつてどうしべい。

トこゝへ上手流しの口より、三助松藏、半纏三尺にて手を拭きながら出て來り、

松藏　親方、おれ入れてくれねえのは情ねえ。恨みでござりますぞ〳〵。

ひさ　そんなら、お前もこの御用へ。

松藏　おらも矢張り會津領、十年後神樂坂の辨天湯で、木拾ひしてゐたを、此方の家へ引上げられ、三助にして下された、大恩ある親方さん、省くといふも水臭え。どうぞ遣つてやつて下さいまし。

トよろしく思入。これにて佐兵衛ちつとなつて、

佐兵　晉公のみか松藏まで、共に思つてくれるのは、おれの身にとつては有難え。遣はねえでどうするものだ。

松藏　エヽ、そんなら遣つておくんなさいますか。

晉吉　これで兵士方の味方が殖えた。

松藏　エヽ、有難うござりますわえ。

佐兵　おひさ、今から言つて置くが、いよ〳〵事が起つたら、おらア直ぐに御殿へ行くが、その時には斬られてしまふか、又鐵砲に中つて死ぬか、そりやアうんぷてんぷだから、お上の爲だ、泣いてはならねえぞ。

ひさ　アイ。(トちつとなる。)

佐兵　おらア根から町人だが、何だか今から力瘤がはひつて、こんな好い心持な事はねえ。何だか氣が勇んで來たやうだ。

ト腕を叩き、きつと思入。この時入口より女形〇・着

流し前垂駒下駄にて手拭を持ち出て來り、番臺へ錢を置く。これにて皆々氣をかへ、

ひさ　今日はやう〱、お天氣になりました。

女〇　さうでございますね。

トこの内女形〇下駄棚へ履物を上げ、上手の口へはひる。おひさ思入あつて、

ひさ　松、お湯が出るよ。

松蔵　ハイ〱。（ト慌てゝ上手へはひる。佐兵衛立上り、）

佐兵　晉公、今の事は御本坊の御迷惑になるといけねえから、他人には決して言はねえがいゝぞ。

晉吉　ハイ、それは大丈夫でございます。

佐兵　おひさ、今番臺へ誰か寄越すよ。（ト幕あきの合方にて、佐兵衛流しの口へはひる。）

晉吉　お上さん、大きに有難うございます。わしもこれで大安心をしましたわえ。

ひさ　あゝいふ事を聞く度に、湯に來てお出での天野樣を、思ひ出してもお氣の毒で、實に胸が一杯になるよ。

晉吉　町馴れねえから、湯へ來てもまご〱してゐさつしやります。ハ、、、、。

トこゝへ流しの口より天野の娘お花、屋敷風の人柄のよき娘、下女お谷、兩人湯上りにて手拭と糠袋を提げて出て來る。

ひさ　もうお上りでございますかえ。

お花　お晝前ゆゑ、中も靜かで、ゆる〱はひつてをりました。

ひさ　町の湯へはいらつしやらぬに、嘸お氣味が惡うございませう。

お谷　どういたしまして、唯今の内參りますると、お家のお湯より餘程心持がようございまする。

ひさ　それでもよく錢湯へ、おはひりつけなされましたナ。

お花　この頃はひり附けましたので、色々樣子の變つた事が澤山あるので、見る物毎に珍らしうございます。

トこの内お谷團扇をお花に渡し、これをお花つかふ。

晉吉　嬢樣、吹拔きへ團劇が掛りますが、芝居噺は如何でございますナ。

トお花顏をそむける。お谷これをかいとり、

お谷　表にビラがございましたが、定めしはひるでござんせうね。

晉吉　はひる所ではございませぬ。それに晝席でございますから、私なども時々に見世の閒を見て、あすこの路地

へ立聞きに行きますわえ。長さん、チトお供致しませうか。

ひさ　コレ／＼、何を言ふのだ。黙つてゐないのかえ。

お花　谷、涼しくなつた。モウ帰りませうわいナ。

お谷　ハイ／＼。

　トこの時おひさ流した見やり、思入あつて、拍子木を打つ、これにて音吉上手へはひり、お花不審の思入あつて、

お花　あれは何だえ。

　トお谷に聞く。おひさは笑ひながら、

ひさ　これはお湯を出します知らせでござります。

お花　初めて私は。

　ト手拭にて襟を拭ふた道具替りの知らせ。これへもおひさ又木を二つ打つ。

承はりましたわいナ。

　トこの模様、稽古唄、角兵衛の鳴物にて、この道具廻る。

本舞臺真中後へさげて二間の玄関、土庇、式臺、正面白地の襖、上下瓦燈窓のある白壁の前づら、裾通り板羽目、上の方振よき葉櫻の立木、下の方箱の用水桶。すべて車坂上凌雲院門内の體。こゝに彰義隊の有志三人、○△□羽織袴なり、大小にて立掛りゐる。この見得木魚の入りたる替つた合方にて道具留る。

○　各々、何か椿事出來いたしましたかナ。

△　今黒門より注進には、總督の使者が参ると申すが、我我一圓合點がまゐらぬ。

□　この間中兩度まで参りし使者が、又今日参ると申すは心得難し。多分虚説に相違ござらぬ。

⊘　ナニサマ、全く總督より、又候使者が参るものなら、その前以て山内へ、届けのあるべき筈なるに、不意の使者とはその意を得ませぬ。

△　コリヤ黒門へ見張の者が、

□　聞違ひに相違あるまい。

○　隊中の者が門内へ知らせに參つた様子なれば、篤と糺して御覧なされい。

△□　左様致さう。

　ト謡への合方になり、揚幕より有志一人、同じく割羽織袴なり大小にて出て來り、

× 各々それにゐられしか。黒門よりの知らせには、總督の使者として、長岡悦太郎殿不意に參られ、隊長に面會なさんと、押してこれへ參ると申せば、先へ驅拔け參つてござる。

○ スリヤ虚説でもなかつたか。

△ 長岡殿これへ參るとあらば、

□ この由奧へ、申入れん。

ト この時正面の襖を開け、小代浦太更けたる浪士の鬘、羽織袴大小にて先に立ち、佐藤伴次郎同じく浪士のこしらへにて出て來り、

浦太 イヤ、その知らせには及び申さぬ。

○ 扨は御兩所。

四人 お聞きありしか。

浦太 如何にもあれより承つたが、總督よりの使者として、長岡殿が參るとあらば、定めし兵士も多人數引連れこれへ參るに相違なし。

伴次 不意に參つて隊長へ、押して面會なさんなどゝは、油斷のならぬこの時節、こりや用心をせずばなるまい。

× イヤ、知らせの者に尋ねしに、黒門までは供も附けしが、あれより内へは供も附けず、唯一人平服にて、これへ參ると申すこと。大膽不敵な事でござる。

浦太 イヤ、平服にて參るのが、多分は彼の手段でござらう。

伴次 油斷ならねば各々には、奧へ知らせて警固せられよ。

四人 心得てござる。(ト三人奧へはひる。)

浦太 これへ參らば兩人にて、篤と糺して奧へ通さん。

伴次 名に負ふ長岡悦太郎殿、如何なる手段あらんも知れず。

浦太 樣子を試した上ならでは、

伴次 滅多に奧へは通されますまい。

ト 兩人玄關へ住ふ。この時舞臺下手より浪人八人ゲベルの鐵砲を持ち出て來り、

○ これに控へてをりませうや。

浦太 イヤ、門内所々へ二人宛、左右に立つて警固召され。

八人 心得てござる。

ト 花道へ行き、一人づゝ並びよく並ぶ。これにて誂への鳴物になり、揚幕より長岡悦太郎、割羽織平袴にて短刀を帶し、中拔草履にて出て來り、花道の皆々の前を恐れもなく通る。これにて皆々案に相違のこなしよろしく、トゞ悦太郎舞臺へ來るを、八人後より附添ひ

舞臺へ來り、左右へ四人づゝ分れて取卷く、浦太伴次郎思入あつて、

浦太　これは〳〵長岡殿には、總督よりのお使者として、お先觸れなき不意の御入來。

伴次　火急の儀ゆゑ、警固としても人數揃はず。

悅太　恐れ入つたる仰せ、悅太郎謝しまする。（ト禮をなし）唯今申入れし如く、隊長方へ面會なし、お談じ申す事あつて、又候今日推參致せば、何卒お傳へ下されい。

浦太　委細承知仕る、

伴次　イザ長岡殿、お通りあれ。

悅太　然らば御免。

ト式臺へ上り掛ける。左右の八人わざと鐵砲を向ける。悅太郎これを見送り、につこり笑ふを道具替りの知らせ。

御苦勞な事ぢや。

トよろしくこなし。この模樣時計の音にて道具廻る。

本舞臺一面の平舞臺、正面九尺の床の間、佛畫の掛物好みの置物、左右一間宛地袋違ひ棚、上の方書心に中形の襖、出這入りあり、同じく下の方襖の出這入り、花道揚幕の所杉戸の出這入り、舞臺花道とも高麗緣の薄緣を敷詰め、すべて凌雲院廣間の體。上手に大久保軍左衞門、割羽織袴一本差し、續いて田宮新八郎隊長分、次に少し離れて春日左衞門、上野鐘五郎、齋藤數馬、何れも羽織袴一本差しにて住ひ誂への合方にて道具留る。

數馬　唯今使者の來りし趣、池田殿より上樣へ言上をなされんとて、御殿へお出にござります。

軍右　オ、左樣なるか。先頃澤三位使者を立てし後、長岡殿も本坊へ入來あつて、その砌り事は濟みしが、又候今日來たりしとは、何とも以て心得ず。

新八　もし手切にも相成る時は、その用意あらまほしく、警固の手配り申附けしが。

左衞　何と申して參りしか、長岡殿が使者の趣、早く承知がしたいものぢや。

鐘五　多分は警固の多人數に、ゲベルをもつて取卷かれ、

數馬　恐怖いたして玄關に、尻込みいたした事でござらう。

トこゝへ花道より以前の伴次郎出て來り、直に舞臺下手、下にゐて、

伴次　ハツ、總督より使者に立たれし長岡殿を案内致し、

軍右　唯今これへ小代殿が參られてござりまする。
シテその副使は誰なるや。定めて多人數引率なし、使者に參つたでござらうナ。
伴次　拙者も左樣存ぜし所、唯一人にて平服を着し、小刀のみにて臆する體なく、推參致してござりまする。
軍右　ナニ、小刀のみにて參りしとナ。
伴次　ハツ。
軍右　天野氏へ通じて下さい。
伴次　委細承知いたした。
ト伴次郎上手杉戸の內へはひる。合方きつぱりとなり花道より以前の浦太先に、以前の悦太郎出て來る。これと一緒に上手より天野八郎割羽織袴一本差しにて、伴次郎附添出て來り、上手へ住ひ、この內悦太郎舞臺へ來り、下手へ刀を置き、無刀になり、よき所へ住ふ、これにて皆々よろしく上手へ住ふ。八郎思入あつて、
八郎　當山の執頭白王院、並びに隊長酒井宰輔、面會致すべきの所、外出致して居合さず、身不肖ながら天野八郎。
軍右　大久保軍右衞門。
新八　田宮新八郎。
左衞　その他有志列座の者、
鐘五　總督よりのお使者の趣、
八郎　仰せ聞けられ、
皆々　下されたし。（ト慇懃に禮をなす。）
悦太　イヤ〳〵、左樣に改まつては拙者甚だ痛み入る。實は今日推參致せしは、總督よりの使者にあらず。拙者一個の料簡にてお談じ申しに參つてござる。
浦太　ハ、ア、左樣でござつたか。
八郎　シテ御入來の下されしは、如何なる次第にござるよナ。
トこれより誂への合方になり、
悦太　されば、先頃澤三位公御本坊に於て公命を奉じ、拙者に於ても各々へ懇々申上げたる通り、前上樣朝廷へ對し奉り、恭順謹愼遊ばされしに、彰義隊及び諸隊の者、當山に屯集なし、錦旗へ敵たふ色ありと、その嫌疑紛々たり、御譜代の各々方が、斯かる兆のある事を、萬一總督がお察しあらば、御謹愼中なる上樣の御不爲ゆゑにその由を、池田覺王院の御兩所へ御評議有され、速かに解散あつて、京師の御沙汰を御待ちあるが肝要なりと存ずるゆゑ、竊に入來致してござるが、天野殿には如何

なるや、御心底の程、承りたし。

八郎　御懇切なるその御意見、忝く存ずれど、假令何様評議なすとも、一度屯集致せし上は、當隊初め諸隊共、解散致す所存はござらぬ。

悦太　スリヤ解散はあられぬとナ。シテ、屯集致されしそのお見込みは、如何なる譯か、その趣意をお聞かせ下され。

八郎　如何にも、お聞かせ申すでござらう。（ト合方きつぱりとなり）當春二月十二日、殘念ながら上様には、謹愼謝罪乞はせられ、御城までもお開きあつて、當山にて御恭順遊ばされ、それのみならず、又候や、水戸へ御退去遊ばされ、三百年來續きたる、將軍職を奉還あつてかゝる時世に成行きしは、嘸御無念にござらうと、その御心中は如何ばかり。（トホロリと思入あつて）お察し申せば恐れ入る、數代受けたる御恩澤、報ぜんものと當山へ、屯集なせし我々共、長岡殿にも御譜代なれば、諸隊の者の胸中を、よしなに賢察下されたし。（ト口惜しき思入。）

軍右　それも上様伏見にて、御指揮に依つて錦旗に向ひ、發砲なせし事なれば、是非なき事と存ずれど、少しも上には御存じなき事。

左衛　先手の者の過ちより、起りし事に相違なければ、大阪城を退き給ひ、直ちに江戸へ御歸城遊ばし、

新八　如何なる御處置に相成るかと、晝夜心痛いたす我々。

伴次　京師の御沙汰なき內に、無念に堪へかね總督へ、從ふ諸藩へ粗忽あつては、

數馬　お上の御趣意に叛くゆゑ、宮様御警衛のその爲に、かく當山に屯集なし、

浦太　恨みを含む者あらば、諸隊へ加へ外出を、止めて御沙汰を待つ所存。

八郎　大政奉還遊ばされ、諸藩の列に加はるとも、八百萬石の御領分、その儘御領地相成らば、申さずとても國主の上席、長く泰平續きしは、東照宮の御武德なれば、お高に疵の附かざるやう、幸ひ、貴殿は總督へ、拜謁召さるゝ御身ゆゑ、譜代の者の安堵なすやう、偏にお頼み申し入れる。

悦太　お頼みなくとも拙者とて、お家のお爲を思へばこそ、推參致せし儀にござれど、各々方のお見込では、却つてお上のお不爲かと、この悦太郎は存じまする。

軍右　如何なる譯にて上様の、お不爲なりと言はるゝか、

拙者に於ても合點がまゐらぬ。
浦太　お見込あらば逐一に、これにてお述べ下されい。（ト合方替つて、）
悦太　各々方の仰せには、當宮を守護召され、殊に諸藩に粗忽あつては、お上の不徳と申さるゝが、然らば何故過日來、この近邊にて藩士等を、害せし事を總督へ、届け出でしは度々たりと承はりしが、各々には、それ等は御存じござらぬか。
皆々　ム、。（ト皆々顏見合せよろしく思入。）
悦太　斯やうな事が重なりなば、止むを得ずして官軍より、兵端開く儀もござらば、いよ〳〵以て朝敵の、汚名を受けねばなりますまい。これらの邊は各々にはお心附きはござらぬか。
　トこの内始終天野立腹の思入にて、
八郎　默らッせえ、長岡氏、この近邊にて諸藩士を、害せし者もござらうとも、我々共の存ぜぬ事、このお膝許に住居なすは、武家は素より町人百姓穢多や非人に至るまで、お上の御恩を思はぬ者は、唯の一人もござるまい。これ等が藩士を恨むは尤も、誠に亂れしこの世の中、浮浪の徒がその日に困り、切取いたす者もござらうを、我共は天下の旗本、無禮致さば切捨てゝも、差支へなき身分なれど、慎み中に何故に、左樣な事を致さうか。貴殿の樣に言はるゝと、東叡山に屯集せし、諸隊の中に害せし者がござるやうに聞ゆるが、それとも何か證據がござるか。
　トキッと言ふ。
悦太　證據ござれば忽ちに、總督よりの御沙汰にて、官軍襲ひ來るべし。さはなくとても官軍方、當隊中の業なりと、見込をつけて兵端を、開きし時は逐一に、辯解いたす暇もなく、止むを得ずして戰起らん。さある時には當春より、深く謹慎遊ばれし、お上の御趣意をもどくのみか、三百年來續きたる、御領分も滅する道理、それ故解散お勸め申す。大事な時節でござる故、同じ譜代の長岡が、詞をお用ゐ下されい。
　トこの内浦太成程といふ思入あつて、
浦太　長岡殿が斯くまでに、我々共を思召し、解散せよとのお勸めは、尤もに存ずれば、仰せに從ひ小代浦太、退散致す所存でござるが、何れも方には如何でござるな。
數馬　小代殿には血迷はれしか、當隊中へ加盟なす時、誓詞神文なしながら、唯今と相成つて、脱隊なすとは未練

な事。

鐵五　よくのめ〳〵と滿座の中にて、斯くの如き詞を吐き、赤面をなされぬぞ。

伴次　今にも官軍襲ひ來ろやう承つて聞怖なし、命が惜しくなられたか。近頃卑怯至極でござらう。

浦太　ヤア無禮なるその詞、命は些か惜しまねど、事ある時は上樣の、お不爲なりと承り、それ故解散致すと申すに、何で卑怯と言はるゝぞ。

新八　武士たる者が誓文なし、約せし事を變ずれば、全く卑怯に相違ない。各隊へ見せしめに、拙者が手の内見せてくれん。

浦太　お望みなればお相手致さう。（ト兩人立掛ろを）

軍右　同隊中にて爭論致すは、堅く誡めあること故、御兩所共にお控へなされ。

左衞　大久保殿のお詞なれば、田宮氏、斯樣な者にお構ひあるな。

ト此の始終天野腹の立つ思入にて、

八郎　先刻より承はれば、屯集致せし諸隊の者、解散致すは上樣の御爲筋だと仰せあるが、當春以來上樣には、降伏謝罪を願ふといへど、今日に至るまで、寬典の御處置もなく、既に先頃勝安房殿、東海道の參謀たる西鄕吉之助に面會なし、お城は素より兵器まで、お渡し申せば品川より内へ兵士を入れざるやう、再應歎願致されしに、其儀すらお許しなく、御直參の方々が、陪臣者に手を下るも、全く君侯を思へばこそ、無念を怺へ耐へ忍び、一旦謹愼致しをれど、萬一官軍當山へ、侵撃致さば花々しく、一戰なして死を決する所存でござるが、貴殿には大目附までお勤めなされし御身分柄でありながら、殘念に は思はれませぬか、それとも理窟がござるなら、我々共の得心なすやう、道理を解いてお聞かせ下せえ。

ト思入にて言ふ。長岡わざと氣をかへ、

悅太　奥御祐筆のお家柄、天野殿の思召しも、又悅太郎の存ずる所も、上を思ふは一なれど、互ひに言戰を致せし所が詮なき故、思ひし事をお話し申せば、お氣にされずにお聞き下さい。（トこれより好みの合方になり）戰爭致して勝敗を極める事なら伏見にてお供の人數は十萬餘、東海道を參謀がまゐる途中は皆御譜代、防ぐ所は箱根もござるし、それを易々通せし上、お城は元より兵器まで、京師へ渡して上樣には、水戶へ御退去遊ばしたも、昔から源平初め、北條足利豐臣など、何れのお

家も行末か、旨く纏りがつきませぬ故。御當家様は明日にも、京都よりして寛典の御沙汰がござればお膝許は、蟲一匹も殺さずに、この大變が納まりましたら、徳川天下の引揚げば、上手にやつたと後の世まで、龜鑑になるでござりませう。そこを思つて上様が、御謹慎遊ばされしは、全く深き思召し。イヤ恐れ入つた事でござる。

八郎　成程、貴殿の仰せの通り、その思召しでござらうが、萬一京師で寛典の御沙汰がなくば其時に、御譜代衆が散り散りになつてをつては、イザといふ時、致し方がござるまい。（ト思入あつて、）イヤ、然し御懇篤のお詞ゆゑ、又隊中にて相談いたし、御返答申上げん。

悦太　御返答下さるとあれば、これまでにて申上げません。早やお暇致すでござらう。

八郎　武門の意地に無禮を申し、悪しからず思召し下されい。

悦太　それは御同様に、その場合に依つてはお互でござる。（ト思入あつて、）左様ござらば各々方。

皆々　長岡殿。

悦太　何れも失禮をいたしました。（ト立上り下手へ行き、下にゐて刀を差し、花道へ行き、思入あつて下にゐて、）御隊名の外に、臥龍、活氣、貫義、神木、遊撃、また其外にござつたナ。（ト指を折りながら言ふ。）

八郎　其他は純忠、萬字、旭、松石、白虎以下、十八番隊でござる。

悦太　その各隊へ落のなきやう、これより直ちに赴かん。（トちつと思入。）

八郎　イヤ、それは當方より傳達致すでござる。

悦太　何卒落のなきやうに。

八郎　承知仕る。

軍右　お見送り。

悦太　イヤ、その儘。

ト八郎と顔見合せるを木の頭、この引張りよろしく、寺鐘のキザミ。これと一緒に悦太郎花道揚幕へはひる。後シャギリ、

幕

三幕目　御徒士町天野宅の場

役名――天野八郎。同弟賢次郎　同父牛左衛門。

天野の用人宗兵衛。三河崎の植木屋源次。天野娘お花。同女中お谷。小代の娘おいの。お蘭小竹。同小染。

舞臺三間の間常足の二重。一段の踏段。正面上手一間の床の間。續いて一間小形の横出違入り、下手一間地袋戸棚、跡茶壁。上の方一間障子屋體。下の方九尺の玄關。本庇式臺附。向うはキラ形の襖、下座の所黒塀にて見切り、二重と玄關の間、中窓のある庭木にてつなぎ、すべて御徒士町天野宅の體。二重に小代の娘おいの島田かづら屋敷娘の拵へ、小竹小染好みのかつらお蘭の拵へ、三人共黒塗小判形の盆へ盆石を竝べ、砂を打つてゐる。傍に盆石の道具よろしく、稽古唄にて幕あく。

小竹　おいの樣、御覽下さいまし、この石はかう使つた方がようございませうね。

いの　モウ少し右へ寄つた方がよいと思ひます。

小竹　それではこの位に致しませうか。

ト盆の上の石を直す。

小染　私のも御覽下さいまし。よくお師匠樣がおつしやいますが、位置といふものがむづかしうございますね。

いの　私などには分りませぬが、繪を書くと同じ事で位置が第一でございますが、お二人共に怠らず、よく精をお出しだから、大層位置がよくなりました。

小竹　もう少しで出來上りますから、口を利かずに精を出して、

小染　早く仕上げてしまひませう。

いの　お前方に負けぬやう、私も精を出しませう。

ト合方にて、下手より植木屋源次、紺の腹掛股引紺の印半纏三尺帶草履にて、牡丹の鉢植を持ち出て來り、玄關口にて、

源次　お頼み申します〳〵。（ト奥にて）

宗兵　どうれ。（ト合方にて、玄關正面より宗兵衛、紋附の着附、縞の袴、用人のこしらへにて出來り、）オヽ、誰かと思つたら、植木屋の源次殿か。

源次　お臺所へまゐりましたが、お谷どんが見えませぬから、お玄關へ出ました。

宗兵　以前と違つて無人ゆゑ、臺所はお谷一人、大方奥に用があつて、臺所にゐなかつたらう。外ならぬ貴樣だから、玄關から上るがよい。

源次　左樣なら、御免下さいまし。（ト牡丹の鉢を持つて玄關へ上り、）例年お上へ差上げます牡丹が咲きましたから、御覽に入れませうと持つて參りました。（ト牡丹の鉢を前へ出す。）

宗兵　それはよく持つて參つた。嘸奧でもお悅びのことであらう。

源次　不順な氣候にいつもより、今年は遲うございました。

宗兵　旦那樣も此頃は御心配が多いので、何處へもお出なさらぬから、御覽なされたら、お氣晴らしになつてよからう。

源次　こちら樣は御內福で結構なお身分だのに、何が御心配がございまする。

宗兵　貴樣達も知つての通り、先達御知行が半地になつて、引續き伏見に於ての戰爭から、御知行が上つてしまひ、お仲間の內でも內福と、評判のよい御當家も、坐して喰へば減るばかり。一年增しにお暮しが詰るゆゑに、お前にもお庭の垣根が損じても、挿竹さへもならぬから、御用がなくて氣の毒だ。

源次　イエ、この節は何方でも、蔭張り御用はございませぬ。

宗兵　今奧へ申上げるから、ゆつくり休息して行くがよい。

源次　有難うございますが、諸方でございますから、お暇をいたしませう。

　ト此の時奧よりお谷、前垂下女のこしらへにて、盆へ茶碗をのせて持ち出て來り、

お谷　源次殿、お茶を呑んで行きなんせ。（ト茶を出す。）

源次茶碗を取つて、）

源次　これは〳〵有難うございます。

　ト合方になつて、奧よりお花島田かつら屋敷娘のこしらへ、小さな羽箒を三本持ち出て來り、

お花　おいの樣、浪の打寄せを附けるには、この箒をお使ひなさいまし。（ト羽箒をおいのにやる。）

いの　ハイ左樣でございまするか。

お花　餘程附けようございます。お前達これをお使ひ。（ト羽箒を小竹小榮へやる。）

兩人　有難うございまする。（ト宗兵衞お花に向ひ、）

宗兵　お孃樣三河島の源次が、牡丹を持つてまゐりました。

お花　それはよう心に掛けて、相變らず持つて來てくれた。牡丹は父樣がお好きゆゑ、嘸お悅びなさるであらう。

源次　この間から御機嫌伺ひに上りませうと存じながら、

忙しいのに取紛れ、御無沙汰をいたしました。

お花　マアゆる／＼と話したがよい。

源次　有難うはござりますが、まだこれから猿若町の、一丁目の太夫元へ參りませねばなりませぬ。

小竹　オヤ、植木屋さんは市村の家へ、仕事に行きなさんすか。

源次　ハイ、出入場でござります。

小榮　オヤマア羨しい、私も植木屋さんになりたいものだ。

宗兵　聞けば、家橘は菊五郎になるといふ噂があつたが、いよ／＼改名しますかの。

源次　この秋には、五代目菊五郎になりますと申す事でござります。

宗兵　家橘は親の羽左衛門より、祖父の菊五郎に似てをりますから、名を襲ぐ筈でござります。

お花　お母樣にお貰ひ申した、錦繪の菊五郎に、よく面差が似てをります。

いの　菊五郎を存じませぬから、その繪を拜見したうござります。

小竹　私どもにも御相伴に、

小榮　お見せなされて下さいまし。

お花　文庫へしまつて置いたから、明日出して見せませう。

源次　私はチト急ぎますから、お暇いたしまする。

宗兵　急ぐとあるなら歸るがよい。

お谷　又この邊へ來なさんしたら、

源次　必らずお尋ね申上げます。

ト合方にて、源次辭儀をして玄關より下手へはひる。

宗兵　大殿樣がお好きゆゑ、この牡丹の鉢植はお奧へ持つて參りませうか。

お花　御心配のある中へ心ないやうではあれど、少しはお氣の結ぼれを散じる事もあらうから、奧へ持つて參つたがよい。

ト合方にて、宗兵衛牡丹の鉢植を持ち、奧へはひる。

いの　お花樣、この波打際へ使ひます砂は、どれがよろしうござりませう。

お花　藥袋紙のたとうにある水晶の砂がようござります。(トおいのの盆畫を見て、) おいの樣は御上達で、この金華山などは、大層よう出來ました。

小竹　昨日お稽古を願ひました、蓬萊山の石の積みやうは、どうしても覺えられませぬ。

お花　景色と違ひ蓬萊山は餘程形のむづかしいものと、佐藤榮中樣仰せゆゑ、容易には出來ますまいが、先づ思ふ通りに拵へて、先生のお出でまで、床の間へ崩さぬやう、飾つて置いて上げようわいの。
小竹　どうぞお願ひ申します。
お花　小榮さんの須磨の浦も申分なく出來ました。その濱邊の打寄せへ貝殼をあしらふと、一入見榮えが致しませう。
小榮　貝殼の使ひやうを、お敎へなされて下さいまし。
お花　かういふ工合にお使ひなさい。（トお花、箱にある貝殼を出してあしらふ。）
小榮　有難うございます。
ト辭儀をする。この內奥より宗兵衞出て來り、お花の盆畫を敎へるを見てゐて、
宗兵　ア、お愛しうござりまする。（ト手拭を顏へ當てゝ泣く。）
お谷　コレ宗兵衞さん、何をお前は泣きなさるのだ。
宗兵　これが泣かずにゐられるものか。
お谷　そりや何故に。（ト合方きつぱりとなり、宗兵衞淚を拭ひ、）
宗兵　この宗兵衞は十代から、御當家へ親子共御奉公致しまして、永年御恩になりましたが、以前に變る世の成行。お孃樣が盆畫などのお稽古をなされまするは、時世時節で仕方がないが、それもお組合の旗本方なら兎も角もでござりますが、町家の內でも藝者屋などの、
ト言ひかけるを、お谷宗兵衞の袖を引く。宗兵衞心附き、
イヤ、以前と違ひ近年は、藝者衆もよい方のお座敷へ出るゆゑに、お孃樣藝の盆畫などを、かうして習ひにござるさうだが、そのお稽古をなさいますのが、お愛しうござります。
お花　何がいとしい事があらう。幼い時より盆畫を好み、習ひ覺えた技なれど、打棄ておけば自然と怠り、遂には忘れてしまふ故、小代樣のおいの樣や、又この妓達へ敎へるも、覺えた技を忘れぬやう、この身の爲にする稽古。榮中樣もよい事と、お悦びなさいましたわいの。
トこの內おいの、小竹、小榮は盆石を拵へて、
いの　お花樣、私もお二人も出來上りましてござりまする。
小竹　御覽なさつて、

兩人　下さりませ。（トお花盆を見て、）

お花　何れも見事に出來ました。多分明日は先生が、お出でなさるお日取りゆゑ、この儘床へ飾つて置いて、お目に懸けませうわいな。

兩人　有難うござります。

お谷　もう七つを打ちましたれば小竹さんも小榮さんも、お暇をしなさんしたらようござんせう。

小竹　晩にお座敷がござりますれば、

小榮　お暇を致しませう。

いの　もうお歸りでござりますか。

小竹　あなたはお後で、

小榮
小竹　ごゆるりと。

お花　夜中なれば又明日。

小竹
小榮　お稽古に上ります。

ト稽古唄にて、小竹、小榮玄關より花道へはひる。

宗兵　あの子供達は座敷へ出て、人馴れてをりますから、よく口まめに喋べりますナ。

お谷　さうおつしやいますが、盆石でも習はうといふ心ゆゑ、おとなしやかでござります。

ト谷方になり、奥より半左衞門、胡麻鹽かつら着流し、老けたるこしらへ、萠黃眞田の紐つきし掛物の箱を持ち出て來り、

半左　最早數寄屋町の子供は歸つたか。

お花　唯今歸りましてござります。

半左　いのはよく精が出るの。

いの　毎度お花樣にお稽古を願ひ、餘程數を上げましてござります。

半左　定めて上達したであらうナ。

お花　一日毎にお上りゆゑ、この間もお師匠樣がお褒めなされてござりました。

いの　それと申すも、お花樣の、御丹精ゆゑでござります。

トこの内半左衞門眞中へ住ひ、

半左　指南をいたす榮中殿が、四谷の住居に下町まで、出稽古はなか〳〵出來ず、幸ひ娘が幼年より、習ひしだけを敎へさせるも、以前に變る世の中に、末々藝が身を助ける、夫の諺が身に當る事もやあらんと先を思ひ、先達より稽古をさすも、これ皆人の爲ならず。そなたもそれを心得よ。

お花　父上の思召しを、私もお察し申し、望む者に敎へま

すが、町家の者の附合は、餘程武家とは違ひます。中にも今の二人などは、人馴れてをりますゆゑ、いろ／＼な話をいたし稽古をいたしまするので、よい保養をいたします。

いの　世間見ずの私などと違ひまして、二人共お世辭のよいのを承り、人附合を覺えます。

半左　おひ／＼町家の交りいたせば、これも一つの學問だ。宗兵衞、水屋に神酒が注いであれば、これへ持つて來て呉りやれ。

宗兵　畏りました。（ト合方にて、宗兵衞奥へはひる。）

半左　いのは久しく泊らないが、宅でさへ案じずば、今宵は泊つて行くがよい。

いの　ハイ、今日は御厄介になります積りで、參りがけにお母樣へお斷り申して參りました。

半左　他と違つてこちらとは、兄弟仲の緣家ゆゑ、宅でも安心いたしてをらう。

お花　さうしてお前のお父樣は、お歸りになりましたかえ。

いの　十一日の夕方に、上野へお出でなさいましたが、いまだにお歸りがございませぬ。

半左　ム、、小代は未だ歸らぬか。（ト思入あつて、）谷、其方も手を貸して、盆栽を奥の床の間へ、崩さぬやうに並べておきやれ。

お谷　ハイ、畏りました。（トお谷おいの盆栽を奥へ運ぶ。）

お花　東照宮樣のお祭りを、いつも四月になさいますのに何故お延ばしなさいました。

半左　イヤ、六月の十七日は、上には水戸へ御退去にて、殊の外のお取込に、心ならずも用があるゆゑ、當月に延ばしたのぢや。

　トこの時奥より宗兵衞、三方に神酒徳利を載せしを持ち出て來る。半左香門は箱の中より圓相に神君の像を書きし掛物を床へ掛け、神酒を取つて、

ドレ、御神酒を供へませう。（ト掛物へ神酒徳利を供へ、）サア、娘も宗兵衞も拜をいたせ。

兩人　ハツ。（ト掛物へ向ひ拜む。時の鐘、床の淨瑠璃になる。）

〽東臺の森も綠の若葉どき、卯の花くだし降るほどに、山ほとゝぎす啼く頃は、雪足早き雨催ひ、晴れぬ思ひに賢次郎、わが家の門へ歸り來て、

　トこの内時の鐘。花道より賢次郎羽織袴大小低き下駄にて、本を包みし紫の袱紗包みを持ち出て來り、花道

賢次　道にてちよつと思入あつて、舞臺へ來り、玄關より二
　重へ出て、
　唯今戻りましてござりまする。
半左　オヽ、賢次郎戻りしか。
お花　今日は、お早うござりましたナ。
賢次　稽古に暇を取らぬゆゑ、少しは早いかも知れぬ。
　ト賢次郎よき所へ住ふ。
半左　兄弟二人の戻るのを、先刻から待つてゐた。東照宮
のお祭を閏月の今日に延ばし、今御神影を飾つた所、こ
れへ參つて拜を致せ。
賢次　ハツ。
　〽はつとばかりに神前へ、賢次郎は進みより、禮儀を盡
し拜すれば、
　ト賢次郎掛物の前に行き拜禮をする。
半左　賢次郎は戻つたが、八郎はまだ戻らぬか。
お花　お午過ぎから車坂の高木原先生へ言傳するとてお出
でゆゑ、程なくお歸りでござりませう。
半左　これまで年々御祭禮に、親子五人打揃ひ、拜禮をい
たせしが、五年後に妻に別れ、一人缺けたる其頃より、
はや段々と替る世に、上には水府へ退去され、數代御恩
を蒙りし、臣下の者も心々に、朝臣になる者あれば、歸
農いたす者もあり。穩かならぬ當時の成行、心ならざる
時に臨み、兄八郎が今日の、御祭禮の御拜をなさぬは、
何とやら心掛り。
　〽眉をひそめて子の行末、案じる親の心休めに、
賢次　高木原殿のお宅とあれば、程なくお歸りなされませ
う。左樣な事まで御心配なさると、第一にお身體の毒に
なりますれば、御心配なさいますな。
お花　直ぐに歸るとおつしやつたれば、今にお歸りなさい
ませう。
宗兵　お心掛りにござりますなら、車坂へ私がお迎ひに
まゐりませう。
半左　直ぐに歸ると申したら、今に歸つて參るであらう。
わざ／＼迎ひに行くに及ばぬ。
お花　お兄い樣、お召替なされませぬか。
賢次　駿河臺の師匠より敎示を受けし廉々を、筆記いたし
て置きたいから、後に着物は着かへよう。
お花　左樣ならお召替へのその時に、お呼びなされて下さ
りませ。
賢次　東照宮へ御拜をなせば、手前は御免下さりませ。

半左　奥へまゐつて休息いたせ。

賢次　後程お目に掛りませう。

〽一禮なして小包を、携へ奥へ入りにけり。〔ト賢次郎辭儀をなし奥へはひる。〕

お花　曇りしせゐか常よりも、早う暗うなりました。

半左　コリヤ谷よ、燈明を持て來い。

お谷　ハイ／＼。〔ト合方にて、お谷神前の蠟燭立を持ち出て來る。〕

半左　御神前へ供へて置け。

お谷　畏りました。〔ト床の間に供へる。半左衛門思入あつて。〕

半左　八郎といひ賢次郎といひ、天晴の若者だが、一腹一生でありながら、あゝも心の違ふものか。

宗兵　八郎樣は武道にのみお心を入れられて、日々劍術槍術のお稽古をなされまして、お上の爲なら一命を捨てゝ、戰をなされる御所存。

お花　それに引替へ賢次郎樣は、文道がお好きにて、日々學問にお出なされ、順逆の道をお守りゆゑ、戰などをなされますお心は少しもなく、蘭書をお學びなされまする。

お谷　昨夜も夜更けて私が眼を覺めまして見ますれば、まだ御本をお讀みなされて、御らんなつてでござりました。

半左　どちらもどうとも言はれぬが、二人の心が一致なさば、第一親が安心なれど、

お花　お二人共にお心の、

宗兵　合はぬといふも世の成行。

半左　分けて娘が孝心ゆゑ、二人の心が一致せば、

宗兵　御男子二人に御女子が一人。

お谷　この上もなき御兄妹。

半左　世に子福者と言はれんに、

お花　そのお心の合はぬといふは、

半左　これも宿世の因果ぢやなア。

〽子故に迷ふ宵闇に、月の出汐を、

ト皆々よろしく思入。時の鐘三重にてこの道具廻る。

本舞臺四間通し常足の二重、長押附本庇三尺の袋附。正面上手一間床の間、好みの掛物、釣り花活けに藤を活け、以前の盆石二面並べあり。續いて一間遊び棚。うしろ二間墨繪の襖。上の方後へ下げて一間丸窓のある附屋體。この前御影の石燈籠、常磐木、四

ッ目垣、いつもの所枝折戸の庭口、二重との間四つ目垣、下の方後へ下げて土塀、三尺の引戸。こゝにも常磐木を置く。すべて天野宅奥の間の體。こゝに二本足の角行燈を置き、唐机の上にブックを載せ、以前の賢次郎歐文の書を見てゐる。下手に以前のおいの、蓬萊山の盆石を直しゐる。緣に牡丹の鉢を置き、よろしく三重にて道具留る。

ヘ松蔭の、暗き卯月の雨空に、星の影さへ中庭の、緣端近く書見なす、賢次郎のかたはらに、おいのは何かおもはゆく、

トこれより琴入りの合方になり、おいのこれを聞き思入あつて、

いの　モシ賢次郎樣、あの琴の音はいづれでござります。

賢次　あれは隣家の山田の娘が、時折夜分復習ふのぢや。

いの　三絃と違ひまして、琴の音は奥床しく、よいものでござります。

賢次　よいか知らぬが書見の邪魔ぢや。

いの　御邪魔と申せば、私も、今宵は御厄介になりまする。

賢次　以前と違ひ今日は、家内も至つて無人ゆゑ、お前が泊つて下さると、妹も大きに力を得て、賑かでようござる。

いの　私も亦お花樣に、盆石のお稽古を受け、この身の得になりまする。

賢次　相變らず盆石の稽古に、精が出ると見えるの。

いの　ハイ、唯今も數寄屋町のお酌と子供と三人で、諸所の景色を仕上げましてござりますが、明日四谷の先生がお出でなさると申すことゆゑ、お床へ飾つて置きましたが、少し砂地が寄りましたから、唯今繕つてをりまする。

ト賢次郎盆を見て、

賢次　何れも見事に出來たやうぢやが、私などにはどれがよいやら、一向に分らぬが、今お前が直してゐるのは珍しい形だが、それはいづれの景色ぢやナ。

いの　これは小竹と私と、二人して拵へました。蓬萊山でござりまする。

賢次　いかさま是れは內國に、見慣れぬ山の形にて、波の打寄せ石の位置、見ぬ外國の山などは、斯くもあらんと思ひ遣られ、一入の詠めにて、見れば見る程よい出來ぢや。

いの　まだお床の間に金華山と、須磨の浦がござります。

賢次　イヤ、私が望みは蓬萊山、金華山や須磨の浦、日本

の景は望みでない。
いの　シテ蓬萊山と申しさするは、いづれの國でござります。
賢次　未だ淺學の事なれば、確かには申し難い。これから日夜勉強なし、やがて望みが叶ひなば、蓬萊山に等しき山ある外國へ渡海なし、わが日本の器量を彼地へ、（ト思入あつて）未だ學問未熟の某、積學のうへ話すであらう。
いの　どうぞお聞かせ下さりませ。
賢次　又後に話しにござれ。
いの　有難うござります。
〽親しき仲も武家育ち禮儀正しく奥へ行く。（トおいの辭儀をなし奥へはひる。）
〽跡見送りて賢次郎、蓬萊山の盆石を、つくづくと打見やり、（ト賢次郎盆石を見て）
賢次　外國船を見たならば、猶豫いたさず打拂へといふ、神君の御諚を守り、外夷は利非の判らぬ者と、わが日本でさみせしは、大いなる誤りにて、蘭書を廣く閲なせばはるかに勝る文明國。政治は固より軍事の備へ、なかなか以て及ばぬ事のみ。それ故早く彼地へ渡り、留學なして百般の事業を會得なさんものと、疾より膽を固めし某。一日も早く父上のお許しを受けて航海なし、地球の內を一周なして、望みを遂げる我が存念。ア、時來るのが待たるゝわえ。
〽洋行なさん望みをば、思はず口外なす折しも、兄八郎が槍たづさへ、庭に始終を窺ひをりしが、
ト賢次郎ニ盆石を見て思入。この内上手より燈籠の蔭
〽八郎、袴つまみ股立、大小、草履にて、手槍を持ち窺ひ出て淨瑠璃の切れにてツカツカと出て、
八郎　ヤア、德川譜代の家に生れ、多年恩澤の徳を受け、人と成つたる身を以て、わが日本の敵となす、外夷に深く心を寄せるは、言はうやうなき國賊なり。兄弟同志にあらざる印、今槍玉にあげてくれん。
〽言ふより早く縁先より、躍り上りて突出す槍、有合ふ扇で拂ひのけ、身構へなせば、繰戻し、又突出すを上を下、よけつ拂ひつ挑みしが、シテ面倒と槍投棄て、刀を拔いて斬りかゝれば、心得たりと拔合せ、兩人庭へ飛下りて、暫く打合ひ戰うたり。
ト文句の如く八郎二重へ上り、槍で突いてかゝる。賢次郎傍にある扇にて拂ひのけ、立廻りあつて、槍を捨

て刀を抜いて斬つてかゝる。賢次郎抜合せ立廻りあつて、平舞臺へ下り、文句の切れより大小入りの鳴物になり、立廻りよろしくあつて、

〽折から立出る宗兵衞が、それと見るより愕りなし齒の根も合はずがた〳〵と、足もしどろに震ひながら、

ト奥より宗兵衞出て來り、これを見てびつくりなし震へながら留める。

宗兵　これは如何なる譯あつてか、マア〳〵お待ち下さりませ。

八郎　エヽ、邪魔致さずと、

兩人　退け〳〵〳〵。

〽邪魔立すなと蹴倒せば、宗兵衞慌てゝ奥へ向ひ、

ト宗兵衞ふるへながら留めにはひるを、蹴返される。宗兵衞ふるへ〳〵聲にて、

宗兵　大殿樣々々々。大變でござります。早くお出で下さりませ。

〽呼ばゝる聲に奥の間より、半左衞門は立出でゝ、打合ふ中へ割つて入り。

ト奥より半左衞門出て來り、立廻りの中へはひり、兩人を留め、

半左　我に思ふ仔細あり、兩人ともに暫く控へよ。（ト兩人是非なく控へて、）

〽鶴の一と聲兩人も、是非なく暫し躊躇ひて、

八郎　仔細ありとは何事なるか。

賢次　父の一言背かれず、

八郎　控へまして、

兩人　ござりまする。

〽刀を引いて控へれば、宗兵衞ホッと一息つき、（ト兩人刀を引き下にゐる。）

宗兵　すんでの事に魂が、でんぐり返りをする所であつた。

半左　今兩人に申す事あり、刀を納めてこれへ參れ。

八郎　ハッ。

〽はつとばかりに顏見合せ、刀を納め、塵打拂ひ、兩人緣へ控へれば。

ト八郎賢次郎と顏見合せ、うなづきて刀を納め、袂の手拭を出し足を拭ひ、八郎上手、賢次郎下手に上り住ふ。

半左　奥御祐筆を勤め、五百石の俸祿賜はり、いざといはば一廉の、お上のお役に立つべき身の上、その用人を勤めながら、僅か二人の立合に、恐怖なしたる今の有樣、

恙み少なき事なるぞ。

宗兵　恐入りましてござりまする。

半左　上の瓦解も尤もぢやな。

〈宗兵衛有無の返事もなく、天窓を押へ控へれば、折から立出る二人の娘、

ト宗兵衛天窓を押へ、面目なき思入。奥よりお花おいの出て來り．

お花　今宗兵衛が父上を、お呼び申す聲を聞き、何事なるかと窺へば、

いの　お兄い様お二人が、刀を拔いてのお立合。どうなる事かと存じましたに、

お花　お怪我がなうて何よりで、

兩人　お嬉しうござりまする。

半左　兩人こゝで果し合ふも、深き所存あつての事、疾くより承知致しをる。

八郎　スリヤ兩人が胸中を、

賢次　父上には疾くより御承知とナ。

半左　それ故今日兩人とも、親子の緣をきつたるぞ。

皆々　エ、（ト皆々驚き、）

〈思ひがけなき一言に、

お花　スリヤお兄イ様お二人の、御緣をきるとおつしやりまするか。

半左　親子の緣をきつてやるも、望みを叶へさせんが爲

八郎賢次　何とおつしやります。

半左　これにつき兩人へ、申聞かす仔細あり、他聞を憚る事なれば、宗兵衛、あたりへ心をつけよ。

宗兵　心得ました。

〈前後左右を窺へば、半左衛門は威儀を改め．

ト誂への合方になり、半左衛門思入あつて、

半左　仔細と申すは外ならず、兄八郎はこの程より、高木原殿の道場にて、槍劒に心を委ね、日夜武藝を勵むのは前將軍の御恩澤報ぜんといふ心組、天晴なる所存なり、又弟賢次郎は、幼年より蘭學を好み、よく外國の事情に通じ、語學も餘程出來る樣子、盆栽に作る蓬萊山、これを外國の山と見て、心の內に悦ぶは、渡海なして文明の國の事情を探らんため、これも天晴なる心底なり。今兩人の果し合ひ、優り劣らぬ手練と手練、篤と見屆け安堵せしゆゑ、今日限り緣を切り、兩人の望みを果さす所存、互ひに包む心中を、半左衛門に打明かせ。

〈星を指されて兩人は、しばし默してゐたりしが、親の

情を無にせじと、八郎は進み出で、
ト半左衛門よろしく思入にていふ、八郎思入あつて、

八郎　かく御存じの上からは、何をか包みかくし申さん。舊冬上樣京都へ御進發あらせられしが、當春伏見街道にて、先手の者の爭論より、止むを得ずして戰端を開き、終に朝敵の汚名を蒙り、ひそかに江戸へお歸り後、寺入りなして御謹愼、程なく官兵御下向にて、江戸御城を召上げられ、今日水府へ御退身、數代御恩を蒙りし、臣下の身にて安閑と、これを見捨てゝをられませうか。然し朝廷へ對し奉り、弓引かんなどゝいふ、左樣なことはあらざれど、せめての事に御代々の、重器を御守護仕り、まつた上野の御門主を、護り奉る存念にて、彰義隊へ加盟致す、深き意味ある拙者の心中、かくの通りでござりまする。

〽詞淀まず八郎が、わが心腹を打明かせば、
ト八郎よろしく思入にていふ。

半左　シテ、賢次郎が心中は。（ト賢次郎思入あつて、）

賢次　又私の心中は、御推量の通りにて、過ぎし嘉永年間に、アメリカの使節ペルリ氏浦賀港へ渡來なし、數回應接なせし後、和議を結びて歸國なし、横濱開港なせし後は、諸臣の心二つに分れ、一は無謀の膽力に、鎖國攘夷を主張なし、一は泰平打續き武威衰へし今日に、戰端開くはよろしからず、開港和親が良策なりと、頻りに申す者あつて、私の情に屬るのみにて、まこと愛國の心にあらず、この二派一致なすは、文明進歩なせし後、されば手前は衆に先駈け、航海なして西洋の、百般事情を探りし上、日本の武威を外國へ、輝かさんわが所存、斯くの通りにござりまする。

〽兄に劣らず爽かに、包む心中物語れば、
ト賢次郎思入あつていふ。半左衛門は感心せし思入。

お花　スリヤ、八郎樣は彰義隊へ、御加盟あつて、有志の方と共々に、上野へお籠りなされまするか。

いの　賢次郎樣は外國へ、修行にお出でなされまするか。

宗兵　それは飛んでもない事だ。上野へお出でなさるのも外國へお出でなさるのも、どちらも危ふい命づく。もしもの事でもあつたらば、水の泡になりますぞえ。

八郎　一つ橋樣さへ水戸表へ御退去なさる時節なり。

賢次　よしや父へ不孝になるとも、天下の爲には替へられぬ。

〽腰を固めし兩人の、心中父は感じ入り、（ト半左衛門



思入あつて）

半左　舊冬上樣御進發の節、お留守居の周防守殿、御城へ幕府の諸臣を集め、上樣の御名代にて、各々の存じ寄りを憚る事なく言上あれと、仰せありし其時に、朝臣又は無祿居住か、二つに決心せよとの趣。その後當春上樣が御歸城の折、又再び前の趣仰せ渡され、必らず心得違ひをせず、朝廷へ無禮なきやう、懇々の御說諭ありたり、その時我は歸農なし、今日樂に世を送れば、最早武士にあらざる某。然し忰等兩人共、武士の道を磨くとあるは、天晴なる事なるぞ、兄は德川の臣下を護りて彰義隊へ加盟なし、又弟は朝臣となり、御國の爲に力を盡す、何れを何れと言ひ難し、唯願ふのは兩人共、心得違ひを致さぬやう、御國に美名を遺してくりやれ。これのみ父の賴みなるぞ。

（父は忰の健氣なる、心を賞し言諭せば、兄八郎はうなづきて、

ト半左衞門よろしく思入。八郎も思入あつて、

八郎　これまで厚き御教育の御恩を報ぜず脫走致すは、人たる道に缺けてはゐれど、今父上のお諭しは膽にえりつけよく守り、心得違ひを致さぬ決心、これにつけても恨めしきは、伯父小代浦太殿、おいのが實の父ゆゑに、委で申すも氣の毒なれど、一旦加盟致しながら、長岡よりの說諭に服し、退散せしは卑怯の武士、彼等如き振舞は八郎決して仕りませぬ。

賢次　一途に左樣思はれな、退身ありしは卑怯にあらず。小代殿は誠の武士。長岡殿の御說諭は、順逆二つの道理にて、一旦興せし約を解き、退身ありしは御國の爲を思召しての事にこそ。

八郎　イヤ、退身なせしは臆病なり、善にせよ惡にせよ、一旦加盟なしたる上は、何處が何處まで約を變ぜず、意を貫くが大和魂。

賢次　イヤ、さう言はるゝは僻事なり、順を守り平穩に計らふが、これ愛國の誠を顯はす大和魂。

八郎　イヤ〳〵、假令逆にもせよ、主恩忘れず奉ずるが、臣下の者の道なるぞ。

賢次　イヤ〳〵、それは一途の御料簡なり、後の榮えを思はぬは、主へ對して不忠なり。

八郎　然らば我を不忠といふか。

賢次　如何にも不忠と申しまする。

八郎　さう聞く上は、先刻の勝負を、

賢次　お望みならば、

兩人　この場で決せん。

ト又も刀へ手をかけて、既にかうよと見えければ、お花おいのは縋り留め、

ト八郎賢次郎刀を持ちキッとなる。お花は八郎、おいのは賢次郎を留めて、

お花　マア／＼お待ち下さりませ、折角最前父上がお留めなされてお二人の、お望み叶へんその爲に、親子の御緣をおきりなされし、思召しをおもどきなさるか。

兩人　サアそれは。

いの　兩虎爭ふその時は、必らず一虎は仆るゝと、物の本にもござりまする、父の御慈悲を思召さば、大事を控へし御身の上、どちらにお怪我があつてもならぬ、小事はお捨てなさりませ。

兩人　ム、。

ト理の當然に兩人も、實にもと怒りを鎭むれば、聞きゐるおいのは打案じ、

ト お花兩人を留める。兩人も尤もと刀を下に置き控へる。おいの思入あつて、

いの　お二人さまのお爭ひも、元はといへば我父ゆゑ、久しくお歸りなさらぬは、如何なる事と存じましたが、今承りしお話では、この行末が案じられ、どうしたらようござりませう。

ト途方に暮るゝも道理なれ、半左衛門は默然と、手を拱いてゐたりしが、

ト おいの泣くか、お花宥める。この内半左衛門俯向きゐて思入あつて、

半左　シテ、兩人共望みあつて、臍を固めし上からは、最早此家にゐるまいな。

八郎　仰せの如く彰義隊へ加入の上は、今日にも東臺へ赴きて、諸臣と評議なす所存。

賢次　又某も朝臣の、御免があらば今宵にも、神奈川表へ罷越し、身の方向を定むる心底。

半左　オ、兩人共に尤もなり。今日親子の緣をきれば、我へ孝行すると思うて、御國へ忠義を盡さうぞ。

八郎　その儀は心得、

八郎賢次　をりまする。

お花　男であらば私も、何れへかお附き申し、とも／＼忠義を盡したけれど、甲斐なき女子の事なれば、お二人樣になり代り、後にお殘りなされし父上へ御孝行を盡し

ますれば、お心置なくお二人共、美名をお揚げなされませ。

八郎　男勝りの妹が心底。

賢次　承つて安心いたす。

半左　コリヤ、神前の神酒をこれへ。

宗兵　ハツ。（ト宗兵衛奥へはひる。）

半左　決心なせば兩人共、この家を脱走する身の上、人目を厭へば夜に紛れ、これよりひそかに立退きやれ。

八郎　寸善尺魔の譬もあれば、父の仰せに從ひて、

賢次　これより直に支度なし、お暇いたすで、

兩人　ござりまする。

ト兩人袴の紐を締め直す。

〽折から奥より宗兵衛お谷、神酒土器を携へ出で、

ト奥より宗兵衛、以前の神酒徳利をのせし三方を持ち、お谷土器をのせし三方を持つて來り、よき所に置く。

宗兵　持參致してござりまする。

半左　親子身内が一世の別れ、目出たく杯致して參れ。

八郎
賢次　有難うござります。

半左　先づ身共が呑んでやらう。（ト半左衛門土器を取る。宗兵衛酌なする。これより床二挺になり、）

〽幾歳も、家の榮えのかはらじと、土器とりて年毎に、祝ひし春に引きかへて、憂を重ぬる卯の花の、月を重ねし十七日、けふを名殘りに酌みかはす、酒もこの世の別れぞと、口にいはねど胸せまり、袖に涙の雨催ひ、汝も哀れを身に知るか、ともに音を啼く時鳥、死出の田長といふ名さへ、心にかかる人々は、空に血を吐く思ひなり。

トこの内淨瑠璃に構はず、半左衛門呑んで八郎へ差す。八郎呑んで半左衛門へ返す。半左衛門呑んで賢次郎へ差す。賢次郎のを半左衛門、お花へ順杯にしろといふ思入。賢次郎心得お花へ差す。お花呑み、おいのへ差す。おいの呑み宗兵衛へ差す。宗兵衛有難き思入にて呑み、どうしようといふ思入。半左衛門お谷へまはせといふ思入。宗兵衛お谷へ差し、酌なする。この内立役へは宗兵衛酌をなし、女形へはお谷酌をなす。皆々これが別れといふ愁ひの思入よろしく、宗兵衛お谷はお流れを頂戴して、有難いが情ない事だと、兩人にてよろしく置く。半左衛門これらを見て愁ひの思入よろしくあつて、

半左　今よりしては武士を捨て、町人となる半左衛門、涙もろきは許してくれ。（ト鼻紙を額へ當て泣く。）

八郎　君のため御國のため、是非なき事にはござれども、
賢次　子の本分を達せねば、父へ對して不孝の至り。
〽濟まぬことよと恩愛に、落涙なせば妹が、
お花　それはお案じなさいますな、及ばずながら二人前、御孝行を致しまする。
八郎　最早言ひ置く事なければ、
賢次　この庭口より東西へ、
八郎　別れ〳〵に、
兩人　立退かん。
〽西と東へ立出づれば、（ト八郎賢次郎上下へ行きかける。）
半左　兩人待ちやれ。
兩人　ハツ。（ト後へかへる。）
半左　これなる牡丹を見るにつけ、富貴の餞別遣はさん。
〽用意の金子を投げやれば、（ト半左衞門袱紗包みの金を、二人に投げやる。兩人取上げ。）
兩人　この金子は。
半左　用意に致して、はな〴〵しく、
八郎　鎧草の鎧を着るか、
賢次　名取草の名をあげるか、
半左　吉左右待つぞ。
兩人　ハツ。
〽親子の緣も切戶口、行くをしばしと引留めて、別れを惜しむ兩人に、振拂ひかね佇めば、
ト八郎は東、賢次郎は西へ行きかけるを、お花おいの引留め、宗兵衞お谷も共に名殘りを惜しむ思入よろしく、半左衞門思入あつて、
半左　思へば先頃上野にて、隆喜樣が御謹愼中　詠じ給ひし一首の和歌。
兩人　なんとおつしやる。
半左　「國のため民のためとてしばし身を、忍ぶが岡に墨染の袖。」
ト八郎賢次郎思入あつて、
八郎　「國のため民のためとてしばし身を、」
賢次　「忍ぶが岡に墨染の袖。」
半左　このお歌をば忘れまいぞ。
兩人　ハツ。（ト本釣鐘を打込み。）
〽折から告ぐる鐘の音に、胸に時打つ思ひにて、立別れてぞ。
ト八郎、賢次郎行きかけ、思入あつて後へ戻り、半左

衛門と顔見合せ、みな〳〵名殘りを惜しむ思入。本釣鐘、三重にてよろしく。

幕

四幕目

上野黑門口の場
同山內戰爭の場
同御隱殿裏の場

役名——篠原順藏。天野八郎。桐野敬次郎。酒井宰輔。秋元虎之助。後藤鐵次郎。大久保軍右衛門春日左衛門。田宮新八郎。佐藤伴次郎。福岡散次郎。高木原源吉。同弟縫之助。同門弟、竹本次郎新門の子分會津の長吉。手古雨乞の小吉。三助越後の菅吉。三助越後の松藏。八代熊五郎。齋藤數馬。凌雲院の徒弟隨念。官兵。脫走兵。新門の人足等。

本舞臺正面右の方新黑門。左の方九尺の黑門。左右柵矢來、內より荒木の板を打附けあり。上下裾通り石垣。上草土手、松の立木。柵矢來の前、黑鐵塗りに胡粉にて入山形を記したる年番大名の天水桶。すべて上野黑門口の體。こゝに彰義隊の浪士六人、うしろ鉢卷襷下、右の腕へ白布を目標に貼り附け、拔身にて立ちかゝりゐる。この見得、木の頭直し、二三發大砲の音して、後合方早鐘にて幕あく。

浪一　此黑門は我彰義隊にて、門の內外嚴しく固め、見透かれぬやう致しあれば、

浪二　敵手許まで繰込むとも、容易に內は窺はせじ、

浪三　又南門は遊擊隊にて、內は嚴重に固めをれど、

浪四　隊長心を勞されしは、密告ありて分かりたり。

浪五　茅町裏なる高木原の邸內へ、備前の兵が繰込んで、

浪六　大砲を備へし由、不忍を差渡せば、その町數も僅かなり。

浪一　この長雨に明方より、昨夜にまさりて南風強く、殊の外味方の苦戰、

浪二　何分向ふが見透せぬが、手許へ來るを、

皆々　心をつけん。

ト合方早鐘になり、東の花道より所化隨念、うしろ鉢卷尻端折りにて、茶碗と大藥罐とを持ち、同じく二幕

目の三助松蔵、飯篭へ竹の皮包みを澤山入れ、これを擔ぎ出て來り、

隨念　皆樣、息つぎに水をお上がりなされませ。

皆々　オヽ、これは忝い。（ト皆々水を呑みながら）

浪△　其方は何れの徒弟ぢや。

隨念　私は凌雲院の弟子の内で、隨念と申しますが、武士でないから戰は出來ず、とあつて逃げるも卑怯と存じ、せめてもの御恩報じに、御武家方の息つぎに思ひつきし藥罐の水、どうぞ上つて下さりませ。

松蔵　皆樣、水を上りましたら、辨當はどうでござりますナ。

浪○　イヤ今朝根岸の源光寺で、食事をいたして出たばかり、まだ兵糧には及ばぬわ。

松蔵　そんならこれから山内の、御本營へ行つて參りますが、昨日から昨夜も夜通し家のお上さんは握飯をこしらへ、又親方は今朝明方、御本坊へ駈けつけて、それ〴〵手配りしてゐますので、助鐵砲する三助は、とも〴〵山内へ運びますが、段々往來が出來なくなり、もうこれで後の辨當は運びきれまいと思ひますわえ。

浪○　これは奇特な心掛だが、三助と申すは湯屋のことかナ。

松蔵　ハイ、上野町の越前屋といつて、上野の御掃除方をして、その芥を焚つけにお貰ひ申してゐた、このお山では大恩受けた、内の親方でござりますわえ。

浪△　なにしろ此處は構ひ所、追々敵も近寄る樣子、わし流れ彈でも來ると危い、早く中へはひつたがよい。

隨念　假令彈丸に中つて死んでも、公方樣の御祈願所で、死ぬのは少しも厭ひませぬ。

松蔵　オヽ、さうおやとも〳〵。わし等なども、これといつて誰に頼まれた譯でもないが、何となく氣が勇み、いくらか御用を足す心で、かうして働く上からは、命は少しも惜みませぬ。

ト合方早鐘になり、花道より二幕目の齋藤數馬、若衆かつら鉢卷腹卷の鎧、附太刀にて、手槍を持ち、黑毛の馬上にて、竹笠にて出で來り、直ぐ舞臺へ來て、

數馬　各々御油斷あるな。唯今清水門より不忍下谷と巡見いたし參りし所、はや根津御成道邊まで、敵軍おひ〳〵繰込む樣子。合圖の發砲いたせしからは、程なく開戰になりまするぞ。

浪三　山内の手筈整ひし上、山王臺にも物見の者あれば、

必らず油斷は致しませぬ。

浪三　唯だ困却致すのは、唯今までの強雨にて、向うが一向見え分かず、これにはほとんと弱りまする。

數馬　これより再び取つて返し、敵軍の樣子を探り、猶も吉左右お知らせ申さん。

皆々　御苦勞にござる。

數馬　御免。

ト數馬引返して花道へはひる。これと一緒に東の假花道より、二幕目の三助、音吉、鉢卷湯屋の印半纏草鞋にて、脊負ひ葛籠を脊負ひ出て來り、

音吉　オ、松藏、無事に來られたかナ。

松藏　オ、音公か、よく此方來られたノ。

音吉　これで五度目だが、もうこれぎり向ふへは行かれぬわえ。

隨念　此方衆は兵糧方だに、葛籠をどこから持つてござつた。

音吉　これはわしの計略だ。

松藏　計略とは何のこつた。

音吉　もう御徒士町邊は官軍で一杯になり、往來さへ出來ぬから、ハイ親類へ逃げて行くのでござりますござりますと、衣類と見せて脊負つて來た、葛籠の内は實は辨當、ちよつと出して見てくらッせえ。

ト隨念葛籠の蓋を明け辨當を一つ出し、

隨念　成程、中は竹の皮だ。

浪△　イヤ、町人にしては天晴心掛け、慌てゝはならぬぞ。心を落着け怪我せぬやう、山内へ持つて參れ。

音吉　それはお案じなさいますな。これ程の計畫を企てるこの三助。何で慌てゝよいものだ。

トきつと思入。この時南京玉二三發落ちる。音吉松藏びつくりして尻餅をつく。

浪□　イヤ、唯今の口の下から、左樣に恐怖してはならぬ。早く門内へまゐるがよい。

音吉　參りますとも〳〵。コリヤうつかりしてはゐられぬわえ。

隨念　早う立たつしやれ〳〵。

ト音吉松藏隨念、氣味わる〳〵立上り、浪士二門外より呼び、内より明け三人はひる。又二三發南京玉の音する。皆々きつとなり。

浪○　いよ〳〵發砲いたす樣子。各々心をつけられよ。

皆々　承知いたした。

ト合方バタ／＼にて、花道より二幕目の奉目左衛門、頬冠り草鞋掛け、袷坂尻目よけな雨除けに着て出て来り、直ぐ舞臺へ来る。皆々ためらふ。これにて件の日除けを脱ぐ。下は陣羽織たッつけ大小のこしらへ。皆々礼をなし。

浪一　いまだ往来は出来ますかな。

左衛　往来はもう出来ん。御成街道より廣小路へかけ、薩州肥後因州の兵が繰込み、まつた湯島より来るは茅町へかけ、肥前肥後筑前の手にて来れば、この小山を幸ひに抜刀にて、三枚橋まで總がゝりにて斬込まん。

浪一　唯今齋藤氏もお戻りあつて、敵陣の模様注進してあらまし様子相分かれば、

浪二　有志が心は勇み立ち、御沙汰を待つて斬込む所存。

浪三　よくば是より、

皆々　打つて出でん。（ト皆々立かゝるを、）

左衛　イヤ、左様に進るは悪かりなん、小人数は最危ふし、門内の兵と一緒に斬込まれよ。

浪二　さういふ内に三橋向ふへ、早や敵軍の間近くなりたり。

浪三　加勢は君よりお通じ下され。

浪四　各々斬込まん。

皆々　ソレ。（ト皆々抜身にて舞臺と花道へはひる。）

左衛　かく心の勇むのも、幕府を思ふ心中より。ハテ、頼もしき武士ぢやわえ。

トきつと思入。この時揚幕の内にて、二三發大砲の音する。これと一緒にバタ／＼になり、以前の六人の浪士と齋藤数馬、馬上にて、官軍八人抜身にて、戦ひながら出て来り、ジリ／＼舞臺へ押して来り、この内目覆より南京玉を落し、入混りの立廻りあつて、ト、閉の黒門を開く。これにて数馬と浪士みな／＼内へはひる。左衛門此後を相手にちよつと立廻り、トヾこつちやになり、皆々はひる。これにて両方の扉ぴつしやりと閉める。風の音を打上げ、これより床の浄瑠璃になる。

〽時しも皐月なかばにして、此年春の初めより、續く霖雨に小止みなく、曇る青葉の東叡山、朦朧として見えにける。

ト文句よき程に、知らせにつき、上下の袴腰と大箱の天水桶を残し、黒門摺矢来を上下へ引いて取る。

本舞臺正面奥深に太鼓堂より通天、中堂邊を見たる

切出しの中遠見。前側所々に杉の立木、よき所に高麗綵の疊十疊程積み重ね、この傍にゲベルの小筒八挺、組合せあり、すべて東臺山門内の模樣よろしく道具留る。ト文句の止め、床のメリヤスになり、前側一面本雨を降らし、よき程に上手の疊の蔭より、二幕目の酒井宰輔うしろ鉢卷陣羽織、鎧下、甲州形裏金の陣笠、拔身にて立上る。

〽樣子窺ふ霧隱れ、向ふをきつと見透かして、

トあたりへ思入あつて、疊の上に立上り、拔身を構へ、

宰輔　氣を附けイ。

ト號令をかける。この時上手より浪士右の腕に白布を結び、思ひ〳〵のなり、草鞋にてツカ〳〵と出て來り整列する。宰輔これを見て、

解けエ。

ト號令をかける。これにて皆々組合はしたる鐵砲を併き、二列になる。宰輔これを見て、

宰輔　肩へ筒。(ト號令をかける。これにて皆々鐵砲を抱へる。)

籠めエ。

ト號令をかける。これにて皆々鐵砲へ彈丸を籠めかんをつける。この時日覆より南京玉を抛る。これにて宰輔初め皆々腹這ひになり、

覘へ。

ト號令をかける。皆々寢たる儘、下手の揚幕へ覘ひをつける。宰輔立上り、

撃てエ。

トこれにて一時に發砲する。この時調練太鼓、バタバタになり、花道より秋元虎之助、鎧下陣羽織、義經袴にて、手槍を持ち、以前の敵兵六人と立廻りながら出て來り、舞臺へ來る。これにて舞臺の八人亂發になり號令なしにて發砲なし、トヾ手許へ斬込むゆゑ、ゲベルの先にて突いてかゝり、立廻りあつて、虎之助浪士と共に敵兵を花道へ追ひながらはひる。

〽心ならねど黑門の、方を見渡し馳せ行かんと、息をついたる後より、豫て期したる一發に、

ト宰輔花道を見込み、心遣ひのこなしにて下手へ行く。この前よき時分より上手水箱の內より篠原順藏、赤熊の冠り物、黑の筒ッぽ、だん袋、腕に錦切れを附け、草鞋脊負ひ太刀にて半身出し、ゲベルにて覘ひをつけ、酒井宰輔が花道へ行きかゝる時、引金を引く。ドンと

音して左の足へ當り、俯向きに仆れ、キッとなつて起上り、ちんばを引きながら舞臺へ戻り、上手を向きキッと見得。この内順藏又水箱の内へ身をかくす。

〽急所の傷手を事ともせず、

宰輔　確かに狙ひをつけたる鐵砲、我は敵軍山内に、忍びゐると覺えたり。

〽豪氣の池田は太刀風切り、又追ひ行かんとなしたる折柄、躍り出たる篠原順藏、錦の光り輝きし、鋭き威勢に挑み合ふ、その勢は龍虎の爭ひ、

トこの内雨井宰輔キッとなり、上手へ行かうとする。この時立木の蔭より順藏、ゲベルの劒にて突き掛からうとして飛び出る。文句の止り鳴物になり、兩人ちよつと立廻りの内、花道より官兵の福岡散次郎、鐺下たッつけ、胸に錦切、拔刀にて走り出て來り、この中へ加はり三人立廻りの内、花道より以前の秋元虎之助戻り來て、順藏散次郎へ打つて掛り、立廻つて散次郎虎之助に追はれ、上手へはひる。後に宰輔順藏立廻りの内、本鐵砲の音して宰輔の右の肩へ當り、バッタリ倒れる、これと一緒に順藏も一緒になる。本釣鐘、床のメリヤスになり、順藏窺ひながら立上り、ゲベルを抱へ宰輔の様子を窺ふ。

〽折柄烈しき木がらしに、はら／＼／＼と散り來る武士

ト文句の止りバタ／＼にて、下手より以前の浪士八人走り出て來り、順藏を目がけ打つてかゝり、これを相手に立廻りながら、花道へ追つてはひる。

〽こなたは傷手にこらへ得ず、苦痛に自由もならざる所へ、木の間へあたる砲聲を、事ともたさず忠と義の、心動かぬ新門の、子分に名を得し會津の長吉、息せきこの場へ馳せ來り、

トこの文句の内バタ／＼になり、花道より會津の長吉更けたるかつら、鉢卷の上へ陣笠を冠り、臥龍梅大縞方の法被、三尺帶一本差し、素足へ草鞋がけにて、金葵の御紋、猩々緋二重ばれんの着物を擔ぎ、走り出て來り、宰輔につまづきびつくりなし、抱起して顏を見て、

長吉　ヤ、彰義隊の隊長ぢやアございませんか、此奴アしまつた事をしたなア。おい、旦那様。しつかりおしなせえ／＼。

〽聲をかぎりに呼び生れば、

トこれにて宰輔心づき、キッとなつて花道へ行かうと

するを、長吉留めて、
長吉　旦那、わつちでござります、會津の長吉でござりますよ。
宰輔　オヽ長吉か、殘念だわえ。
長吉　エヽ、わつちも忌えましくてなりませぬ。
へ無念面にあらはるれば、
宰輔　賴みとなせし南門より、官軍込み入る上からは、所詮この上見込はない。コリヤ長吉、斯くの如き我が深傷これにて切腹いたすから、汝わが首を討つてくれ。
長吉　エヽ、（トびつくりなし、）モシ／＼そりやアいけません、五十になつても喧嘩なら、若えものよりはな棒で、火の中へでも飛び込みますが、お武家の首が何で斬れますものか。そんな事は堪忍しておくんなさいまし。
宰輔　今際の其方へ賴みゆゑ、どうでも致して首を討ち、知れぬ寺院へ埋めてくりやれ。
長吉　そりやアどんなにしても埋めますが、斬る事はどうも出來ませぬ。
宰輔　エヽ、我が恥辱を思ひくれぬか。
へ苦痛ながらに勵ますれば、
長吉　臥龍隊の大砲組へ使つてお貰ひ申したからは、これでもわつちは侍だが、敵なら知らず味方の首を、討てといふのは何たる事か。こんな苦しい事はねえ。
宰輔　右の腕を打拔かれ、どうしても刀が持てぬ、もうよい、この儘で斬つてくれ。
トこの内南京玉をはふる。宰輔あせり、
サア、斬らんか。
長吉　エヽ、今斬ります／＼。
宰輔　山王臺もはや敵軍、恥辱になるぞ、斬つてくれんか。
長吉　へエ、斬ります。
宰輔　エヽ、臆病者めが。
へはつたと睨み左手にて短刀取上げ右手の方、がばと突立てきり／＼／＼、最期の程ぞ勇しき、長吉是の踏所なく、
トこの内宰輔左手にて短刀をとり、鞘を口にくはへ、中身を拔き、左にて右の脇腹へ突込み引廻す。長吉これを見て顫へる。この内宰輔ばつたり倒れる。こゝへ南京玉を投げる。これにて長吉飛上り、彈丸をよける事などあつて、
長吉　此奴ア所詮近づけねえ。
へ心を定めて長吉は、討たんとすれど手先の狂ひ、引く

に引かれぬ思ひ出に、とつおいつなす最中へ、爰もかれかれ走り來る。

トこの内長吉宰輔の刀を取つて首を切らうとして切れぬこなし、これにて思ひ切つて鋸挽きにする。よき程に東の花道よりお手古雨乞の小吉、火事頭巾、春日山の法被、股引白足袋、草鞋がけにて、鈴蟲の鐵棒をかい込み、以前の所化隨念、葉あきの大藥罐を冠り走り出て來り、長吉の首を挽くを見てびつくりなし、兩人仰向けにひつくりかへる。長吉一心に首を挽く。小吉起上りキッとなつて、

小吉　風龍隊へ味方をすると、立派な事をいやあがつて、裏切りをする卑怯な野郎。ウヌ、この鐵砲で打殺すぞ。

〈打たんとなすを隨念支へて、〉

カウ待て／＼。所詮、味方の首を切るので、さう思ふのは尤もだが、こりやア此處で打倒れた隊長の遺言で、首を持つて此處を落ち、寺へ葬つて上げるのだから、決して裏切りをするのぢやアねえ。

小吉　それぢやアきつと、裏切りぢやアねえのだナ。

長吉　おれも新門の子分だ。そんなケチな事をするものかえ。〈トその内隨念宰輔の死骸を見やり、〉

隨念　オヽ、しかも二ヶ所の鐵砲傷、ヤア、腹を切つてるなさるわえ。

小吉　ム、此奴アおれが早まつた、こりやア裏切りぢやアねえ。

長吉　運悪く二發喰つて、もう叶はねえと諦めなすつて、悔しまぎれに左の手で、逆に腹を切りなすつたが、おらアゾッとしてしまつた。

小吉　さういふ事なら少しも早く、首を持つて落ちるがいい、おらア骸を匿して上げよう。

長吉　ム、それぢやアさうしてくれ。

〈義心は強き兩人が、かくす死骸も宿世の緣、口に出さねど胸の内、空晴れやらぬ思ひなり。

トこの内小吉隨念手傳ひ、宰輔の死骸を下手へ荷ひ行く。長吉は斬首の鉢卷をほどき、これをひろげ首をくるみ、腹へ卷かうとして心づき、差物のばれんの中へかくして結びつけ、この内小吉隨念出て來り、

小吉　サア早く落ちて、葬むつて上げねえ。

長吉　オヽ、合點だ。〈ト差物をかつぎ下手へ行くを、〉

小吉　オイ、それ彈を氣をつけねえよ。

長吉　ム、大丈夫だ。案じるねえ。

へ勇み進んで立出づる、向ふに風を切つたる一發、

トこの內隨念は又藥罐を冠ろ。小吉は上手へはひろ。この時木鐵砲の音して、長吉の擔いだる差物の葵へあたり、微塵にこはれる。これにて長吉たち〳〵となり差物を持つたまゝ仰向けにひつくりかへり、直ぐ起上つて、

へ長吉顏を顯はして、

長吉　エ、コレ、遊撃隊の差物で、葵の御紋が捨てゝあつたを、粗末にしちやア勿體ねえと、こゝまで大事にして來たも、御紋へまともにあたるからは、此奴ア所詮追付かねえか、エ、癪に障るなア。

へ無念面にあらはるれば、

ト隨念この內うつむきゐて、額を上げ、

隨念　こなたの志しは感心だ、この御紋はわしが拾ひ、粗末にならぬやう埋めるから、其首を取られぬやう、早く行かつしやるがいゝ。

長吉　ムヽ。よくいつてくれた。それでは粗末にならねえやう、お前に賴んだぞ。

隨念　合點だ〳〵。

長吉　ドレ、敵の中を切拔けにやアならねえ。

トメリヤスにて、ばれんの內より首の包みを出し、これを抱へ花道へ行きかゝる、隨念は差物の壞れしを集め、ばれんをちぎり取り、これにて結ぶ。この內南京玉を投げるゆゑ、兩人びつくりしては飛び步く。トヾ隨念は上手の杉の立木へ登り、葉の間へ顏をかくす。長吉は花道へ行かうとして彈丸に恐れ、行かれぬこなしにて、舞臺へ戾り、首をはすに脊負ひ、有合ふ疊を一疊とつて兩人にてさし、彈丸をよけながら花道へはひる。この內一發隨念にあたり、ばつたり舞臺へ落ち倒れる。これにて杉の立木へ煙り上る。こゝへ小吉出で來り、これを見てびつくりなし、

小吉　此奴も到頭やられたか。

ト死骸をかゝへ上手へはひる。やはり合方早鐘の音にて、花道より高木原源吉、うしろ鉢卷下緖、襷、袴股立草鞋、講武所方のこしらへ、引はだの刀拔身を兩の手に持ち、先頭に兩岡散次郎、敵兵八代熊五郎と立廻りながら出て來り、舞臺へ來てきつと見得、誂への鳴物になり、高木原源吉兩人を相手に兩刀の立廻りあつて、この內花道より幕あきの浪士六人走り來り、この中へ加はり立廻つて、散次郎兩人を上手へ追込む。こ

こへ花道より高木原縫之助、うしろ鉢巻、鎖の素網、袴股立大小、草鞋、竹本次郎、若衆かつら、鉢巻、劔術の皮胴、袴股立にて出て來り、

先生、御無事なりしか。

源吉　オヽ、車坂より坂本へ切つて出でんと致したが、敵充滿して出る事叶はず、又も此處へ引返したが、兩人共危ふいから早く當山を落ちてしまへ。

縫之　兄上のお詞ながら、日頃の御恩を報ずるは、即ち今日唯今なり。彈丸にて死したら知らず、敵には一命渡さぬ所存。

次郎　先生、何卒お指圖下され、何れの手にても助太刀なし、見事に戰ひたうござります。

源吉　日頃稽古に身が入るゆゑ、天晴なる心立、我れもそれは感心致すが、何にも致せ彈丸烈しく、迂濶に往來も出來難い。チト見込あれば、暫く待て。

兩人　ハツ。（ト合方バタ〳〵になり、花道より以前の秋元虎之助出て來り、）

虎之　オ、先生、これへござられしか。

源吉　オ、秋元氏、黑門口の模樣、如何でござるか。

虎之　いけません、破れました、僅かの間に切込まれ、拙者下寺口の防戰なす内、三橋より雁鍋前村の邊に出火なし、その虚に乘じて破られましたが、かやうに殘念な事はござらぬ。

源吉　エヽ、それでは愈々破られしか。

〽勇氣もたゆみどつかと坐し、思案途方に暮れにける、折柄敵の虎口をのがれ、馳せ來る浪士の落合つて、

トこの内源吉ぢつとなり、無念の思入あつて、樽の酒を呑みゐる。この内上手より以前の春日左衛門出で來り、

左衛　各々方、御無事でござるか。

虎之　オ、春日氏も傷を負ひしか。

左衛　南門の内に止まり、血戰いたしをつたるが、殘念なは山下より、打上げたる砲擊にて、山王臺の社を燒き、一圓の猛火となりしが、所詮これではもういかんぞ。

虎之　最早亂軍となる上は、互ひに覺悟が肝要なり。先づこの人數にてしめし合はさん。

〽流石勇士に事ともせず、各々地上に坐を占めて、

トみな〳〵あたりへ思入あつて下にゐる。

〽謀じ合さんその所へ、又も打合ふ修羅道の、劍の音の凄じく、

ト文句の止り、合方にて、花道より後藤鐵次郎、うしろ鉢卷、鎧下、義經袴、所々ちぎれ、手負ひにて、敵兵四人と立廻りながら出て來る。舞臺のみな〳〵花道を見込み拔身を構へる。この内舞臺へ來り、ごつちやになり、四人を上手へ追込む。これにて鐵次郎どうとなるを、皆々介抱なして、車座になり、

鐵次　各々、殘念でござる〳〵。

左衛　御尤もだ。推察いたす。

鐵次　シテ我隊長には、お逢ひなさらぬかナ。

左衛　我が活氣隊が車門より當山へ繰込む砌、吉祥閣の横手にて兵士を引率せられし時、拜顏得しまま其後は逢はず、何れに指揮なし在するか。

虎之　はや隊長には、今頃は御存命ござるまい。

鐵次　ナニ、御存命ござるまいとは。

虎之　大隅殿が最初より、心痛なされし黑門口。我もあれに加はりをりしが、廣小路邊の出火にて、三橋邊が一向分らず、殊に南風烈しくして、篠つく强雨に見渡せず、よもやと思ひし其内に、拔刀隊に斬込まれ、忽ち黑門破れてござる。

〽聞くに手負は齒嚙みをなし、

鐵次　本願寺を初めとして、御本坊凌雲院と、再三再四會議の度毎、互ひに心を勞せしが、はや黑門破れし上は、拙者は自殺と覺悟せり。

左衛　それは身共も御同意なり。見受けし所餘程の深手、御心中お察し申すが、しかし拙者は其身の無事ゆゑ、自殺いたすは不本意なり。

源吉　如何にも、一命だにあらん限りは、わが兩刀の續かんだけ、敵を引受け防戰なさん。

〽刃風を切つて腕試し、

まだこの分では兩刀で、五百や千の敵兵は、確かに討てるでござらうわえ。

鐵次　それ聞く上は一つの安堵。われは所詮覺束なければ何卒君等は手分けして、御本坊を御守護下され。

縫之　それが一の目的なれば、然らば我々左右へ分れ、

次郎　御安危伺ひ、

兩人　奉らん。

虎之　もし御殿が危險とあれば、北の山手の境を破り、

〽言はんとせしが四邊を憚り、（ト皆々囁き合ふ。）

然らばこれより、二人を連れ、

鐵次　何卒御守護を、

三人　心得た。

〽忠義に凝つたる三人は、右と左へ分れ行く。

トこの内源吉は上手、縫之助と次郎とは下手へはひる。

〽又もやこゝへ向ふより、おひ〳〵集まる味方の武士。

トこの内鐵次郎殘念なる思入、花道より幕あきの齋藤數馬、右の腕を討たれ、鎧ちぎれ〳〵になり、手負ひにて馬に乘り、東の假花道より田宮新八郎筒袖、だん袋、手負ひにて刀を杖につき、双方一時に出て來り、花道にて舞臺を見やり、

新八　地。（ト合言葉をかける。）

左衞　月。

數馬　賢。

虎之　仁。

と合言葉して舞臺へ來り、この時數馬どうと落馬する。皆々介抱する。馬は下手へはひる。

左衞　オ、田宮氏か。

鐵次　齋藤なりしか。

左衞　齋藤氏、數度の注進、御苦勞でござるぞ。

虎之　双方殊の外手を負うたが、しつかり致しやれ。

左衞　シテ、黑門の樣子は如何に。

數馬　初發黑門の破れし後は。

〽三枚橋より切込みたる、藝州勢の勢ひ鋭く、馬上ながらに戰ひしが、

初めは同志の鋒先鋭く、三橋向ふへ進軍なせしが。

〽折柄下谷仲町の、横合より打掛け〳〵、不意をうたれし彰義隊、篠つく雨に刃の稻妻、てうてうてうと打合ひしが、

前後を挾む大軍に、所詮防戰なし難く、

〽此事味方へ知らせんと、鎧の袖の雫を拂ひ、青葉隱れに不忍より、穴の稻荷へ登りしうしろへ、飛び來る彈丸に腕を打たれ、

やう〳〵これまで參つたり。

〽事の故由物語れば、田宮も血汐に咽喉をうるほし、

新八　身共も唯今車坂より、見明院へ赴く途中、はや寬王院の玄關口へ、坂本より討込んだる。

〽敵の彈丸雨霰、行きつ戻りつ何これしき、義は金鐵の内兜に、

田宮殿の御奥屋敷まで、間近く寄らん所存にて、

有合ふ疊おつ取つてひらりと退いては右へそれ、右へ退いては左へそれ、

〽竹の臺まで進みしが、
いかにも烈しき彈丸に、今は異なき中堂も、所詮見込の附き難し、
〽取つて返せし山王臺、最早敵地に入り難く、無念面にあらはれたり。
ト皆々キッとなり、
虎之　スリヤ、山内も程なくして、
鐵次　敵の巷と、
皆々　なりゆく事か。
〽猛き心の武士が、胸も張り裂くばかりなり。
數馬　この上は一手なり、君を守護する外はござらぬ。
鐵次　各々方は當山を、落去と決心下されて、我等に構はず、
數馬 新八　御本坊へ。
左衛　イヤ、潔き御覺悟。然らば秋元氏、各々の自殺お見屆け下されい。
虎之　ム、承知いたした。然して後に直樣後より。
左衛　各々の誠忠、恐れ入つた。
〽勇み進んで出で行く、又もやこゝへ馳せ來る壯士。
トこの内左衛門手負を見てちよつと愁ひの思入あつて來たかへ、三重にて逸散に下手へはひる。入替つて上手より佐藤伴次郎、うしろ鉢巻鎖の着込、稽古袴無腰、やはり手負にて槍を持ち出て來り、
伴次　何れもお悦びなされ／＼。
虎之　何事でござるナ。
伴次　最早御本坊には誰もをりませぬぞ。
鐵次　エヽ、スリヤお立退きなされしとナ。
皆々　チエヽ、忝い。
〽人々安堵の思ひをなし、苦痛をこらへ山内見渡し、
トこれにて皆々ちつとなり、
虎之　三百年來泰平の、打續きたる德川の、
新八　清き流れを汲みし身も、時至らねば報國の、
伴次　その企の果さずして、この東臺の屍となり、
數馬　十六年を一期として、慶應四年五月今日、
鐵次　澤長爾が說得に、順逆二道を說かれしが、
虎之　用ゐざりしも武士の意地。
新八　今日此處に及びしも、
鐵次　是非もなき世の、
皆々　成行ぢやな。
〽勇む心のたつか弓、弦の張さへたゆたうて、しめり勝

ちなる五月雨、落ちて流れて不忍の、池もあふるゝばかりなり。（ト皆々手を取交し、愁ひの思入。）

鐵次　頼むはこの上、彼方の、

新八　御先途、

四人　願ひ奉る。

虎之　承知いたした。

（あの世を急ぐ武士が、迷ふ道さへ露もなく、勇み立つたる劍の切先、健氣の程ぞ見えにける。

トこの内鐵次郎短刀にて切腹する。新八郎咽喉へ突立てる。作次郎無腰ゆゑ手槍を踏折り、これも咽喉へ突立てる。數馬咽喉へ突立て、その刀にて我が顏を十文字に斷ち、倒れる。この内虎之助自刄を見屆け、ちつと思入。次何の止り、早鐘メリヤスになり、花道より幕あきの三助音吉、破籠の上へ蚊帳をかぶせ、これを被り走り出て來り、花道にて、

音吉　ヤレ恐ろしや〳〵。この戰爭に出て働くは、お上のお爲と思つて出たが、どこも彼處もどんどんと、鐵砲丸の音ばかり。見る間に山王樣のお宮も燃え出し、（ト身顫ひをなし。）ヒウ〳〵と天窓の上を、彈丸が飛ぶので眼の珠が、引くりかへつて膽玉が、これではでんぐりかへりさうだ。

（足もわな〳〵三助は、怖氣立つてぞ歩き寄り、

ト舞臺へ來り、みな〳〵の死骸を見やりびつくり尻餅をつく。

虎之　コリヤ〳〵、其方は何れの人足だ。

音吉　イエ、人足ではござりませぬ。御徒士町の湯屋でござりますが、このお山の、味方する氣で兵糧を運びましたが、なか〳〵烈しい戰に、辨當をあがらつしやる間もなく、到頭黑門が破れましたので、もう逃げなければなりませぬが、これから何處ぞの穴を見つけ、もぐり出る氣でござります。

虎之　ム、、然らば德川家お味方の者ぢやナ、それぞ幸ひこの死骸、手傳つて向ふの森へ、かくしてくりやれ。

音吉　エ、。

（心も空に見廻して、（ト傍へ行き、死骸を見てびつくりなし。）

これは皆樣、お死になされましたナ。

虎之　屍を置くは殘念ゆゑ、早うかくしてくりやれ。

音吉　これはちつと、氣味が惡いな。

虎之　エ、臆病者め、打た斬るぞ。

ト骨打にする。音吉又尻餅をつき、體を撫でゝ見やり
何ともなきゆゑ、
音吉　ア、斬られたのではなかつたか。（ト虎之助を見やり下手へ飛び退き、）唯今片附けますから、御勘辨願ひますゑ。（ト虎之助あたりを見廻し、）
虎之　新門々々。
トこれにて下手より新門の人足、新門の印半纏、股引草鞋がけにて出て來り、
子分　へイ、何御用でござります。
虎之　この死骸を片附けるに、手傳つてやれ。
子分　へイ、畏りました。
ト音吉と共に片付ける。この內虎之助身支度をしてゐる。音吉は念佛を唱へながら、氣味わる／＼一人々々死骸を擔ぎ、上手の蔭へはひる。音吉この度毎にびつくりするをかしみよろしく、
〽又もや聞ゆる人聲に、秋元きつと向ふを見やり、
ト虎之助、東　花道附際にて、湯幕を見込み、
虎之　これより山王臺へ赴いて、花々しき働きをなし、十六番隊の手並を見せ、君に一命捧げ申さん。
〽阿修羅王の荒れたるが如く、猛火の中を事ともせず、
山王臺へと走り行く。
ト虎之助逸散に東の花道へはひる。子分上手へはひる。
この內音吉まご／＼して、
どつちへ行つたら逃げおほせるか、人並よりも大きな體、かうヒウ／＼飛ばれては、きつとあたるに違ひないわい。
〽心も空に音吉は、沼田も同じ山內を、しどろもどろに踏み迷ふ、折柄轟く大砲に、
トこの內音吉あちこちと逃廻る、文句の止り、大砲の音する。これと一緒にひつくり返る。
こりやア魂消た事になつた。
〽震へる足を踏みしめてゝ腰もがた／＼逃げ行けり。
ト音吉よろしくあつて、花道へはひる。又一發大砲の音する。
〽湯島臺より打込みし、一里砲にて忽ちに、今迄ありし樓閣も、あがる猛火の凄じく、
トこの內正面の中堂、通天、太鼓堂へ一面に火の手上る。文句の止り、上下二挺の合方へ早鐘の音、南京玉を使ひ、花道より天野八郎、うしろ鉢卷、筒袖、義經袴、草鞋、拔身、桐野敬次郎、鉢金の鉢卷、紺の筒ッ

ほゝたん姿、肩に鎖切をつけ抜身にて、兩人立廻りながら出て來り、花道にてちよつと立廻つて左右へ分れ、

八郎　我に向ふは何奴なるぞ。

敬次　參謀西條吉之助の附屬、桐野敬次郎なり。

八郎　ム、、我は彰義隊中、天野八郎なり。

敬次　イデヤ手柄を致してくれん。

八郎　何を。

ト立廻りながら舞臺へ來り、双方へ分れきつと見得。これより大砲の音をあしらひ、兩人烈しき立廻りあつて、トゞ上下より敵軍、以前の浪士出て來り、ゲベルにて突いて掛る立廻り。この內知らせなしにこの道具留る。

本舞臺、五尺程の高足、上手一面柵矢來この下一面芝生伏せの草土手、平舞臺の下手丸竹の藪、前側上より見たる柵矢來、上下所々に杉の立木澤山、すべて御隱殿裏の體、床の三重にて道具留る。

〽降りしきる小止みもなき森の木下闇、敵か味方か亂軍に、こゝを先途と戰ふ武士。

ト文句の止り、誂への合方、大砲の音をあしらひ、柵矢來の內へ、以前の大勢立廻りながら出て來り、双方入混りの立廻りあつて、トゞ矢來のよき處ミリ〳〵と壞れ、敵味方ともバラ〳〵と平舞臺へ落ち、上下へ逃つてはひる。この中へ天野八郎桐野敬次郎組打にて土手を辷り落ち、双方平舞臺にて組打の立廻り、よき程に花道より大久保軍右衛門、うしろ鉢卷、襷下、陣羽織、義經袴、大小草鞋、東照宮と記したる幟を背負ひ手槌を持ち走り出て來り、敬次郎へ槌をつける。敬次郎これをあしらふ。トゞ八郎下になるをはね返し、敬次郎下になる。軍右衛門これへ槍をつける、こゝへ上手より以前の八代熊五郎、福岡散次郎に四人附添ひ抜身にて駈付け來り、八郎、軍右衛門に打つてかゝり、双方一時の立廻り。この內八郎枝の垂れし丸太へ飛びつき、其儘うしろへ飛込む。ソレといつて四人下手へ追ひかけてはひる。この途端本釣鐘の音して、軍右衛門は熊五郎の胸先へあたり、俯伏せに倒れる。敬次郎打たうとしてためらふ。

〽浪士は血汐の面を見ひらき、

ト熊五郎敬次郎軍右衛門を起す。軍右衛門血汐になり、

軍右　官兵の貴所に申入るゝ事あり。

敬次　何事なるぞ。
軍右　烏合の勢に圍きかね、かゝる場合に至りしが、全く錦旗に對し奉り、發砲せしに非ざれば、偏にお含み下されい。
〈今際に殘す一言に、思はず浮む涙をこらへ、〈トこれを聞き敬次郎ぢつとなり〉
敬次　その詞、總督の許及び參謀へ、桐野敬次郎確かに傳うるでござる。
軍右　チエ、忝ない。
〈苦痛の中に安堵の思ひ、三十五年を一期にて、惜しき花をぞ散らしけり、桐野死骸を打見やり、〈ト軍右衛門落入る。敬次郎ぢつとなり〉
敬次　現在胸を打たれながら、錦旗に對する一言は、あつぱれ將たるこの振舞、惜しき武士を失うたわえ。
〈折柄馳來る一個の武士〉
トバタ／＼になり、花道より官軍一人竹の子笠、蓑にて走り出て來り、
官軍　桐野氏、御油斷あるな、唯今三河島の方へ志し、出家を守護なす落人あり、此段密告に及びまする。
敬次　ナニ、出家姿で落ち行きしとナ。

熊五　それぞ正しく、目指す御方。
皆々　ソレ。〈トツカ／＼と下手へ行くを〉
敬次　ア、コレ、暫く待つた。
熊五　デモ外ならぬ、
熊五 敬次　事件ゆゑ。〈ト敬次郎の傍に下にゐる。敬次郎ぢつとなり〉
敬次　三河島より戸田へ登らば、道中無事に會津まで。
皆々　エ。
敬次　イヤ、合圖を致すを、〈ト拔身の血をふるひ〉待つたがよい。
〈企の程ぞ、
ト向ふを見込み辭儀をする。三人不審の思入。三重、風の音にてよろしく、
トあと早鐘、風の音にて、つなぎ直ぐ引返す。

幕

五幕目　三河島不動前の場

役名……越前屋佐兵衛。執當白王院。非人ぼうだ

ふ傳次。春日左衛門。三助越後の晋吉。同會津領の松藏。上野の衆徒顯念。官兵等。高木屋源吉。同弟鐵之助。上野の僧光仁。高木原門弟竹本次郎等。

本舞臺一面の平舞臺、後ろ奥深に三の輪邊より千住を見たる體夜の遠見。後に打返す誂へあり。上の方に石の道知べ、この上に坐像の不動尊。前に線香立の石、左右に古びたる納め幟。下の方藁疊、ずつと上下積込の張物にて見切り、すべて三河島田圃不動前の體。こゝに官兵六人拔身の槍を持ち、立ちかゝりゐる。下手に前幕の三助松藏、仮籠の上へ筵をかぶせした置き、兩手をついてゐる。この見得、三味線入り一つ鉦にて幕あく。

官〇　コリヤ、其方はどこへ通る。

松藏　ム、――。

官〇　コリヤ、物を申さぬか。かくし立をすると相成らんぞ。何れの者で何處へ通ると、詳しく申せ。

松藏　ム、――。（ト松藏口が利けぬといふ仕方をする。）

官△　何ぢや、唖か、早く手眞似を致せばよいに。

官□　こちらへばかり口を利かせ、餘計な手數をかける奴ぢや。（トこの内松藏は辭儀をする。）

官〇　コリヤ、その内は何ぢや。

ト手眞似にて聞く。松藏大工のてうな打ちなして、こつぱといふ眞似をする。

官〇　何だ、大工か、その内を見せろ。（トこれにててうな打なしてはあやまる。）イヤ、改めんければならん。

ト一人松藏を押へつけ、一人筵を取つて内を見る。この中に前幕の竹の皮包澤山ある。

官□　コリヤ、木葉と申したが、皮包みの辨當があるが、これはどうしたのぢや。

トこれにて松藏ふるへながら地上へ書く。

官〇　何ぢや、大工の辨當だ。各々如何でござるナ、江戸の大工は斯くの如き、竹の皮包みの辨當を用ひますかナ。

官□　それはちと不案内でござるが、如何なものでござらうかナ。

ト皆々考へゐる、松藏この内始終心遣ひのこなし。やはり右の合方にて、上手より前幕の三助晋吉、けんどん盖の蕎麥の荷を二つ、天秤棒にて擔ぎ、印半纒三尺なりにて出て來り、氣味わるく／＼下手へ行き掛るを、

官○　コリヤ／＼待て。
音吉　ヘイ、何御用でござりまする。
官○　其方は何處の者だ。
音吉　ハイ、私は根岸の者で、小塚ツ原の天王前まで、出前を持つてまゐります。
官○　出前とは何ぢや。
音吉　ヘイ、蕎麥の出前でござります。
官△　ム、、こゝへ見せるがいゝ。
音吉　ハイ。（トもぢ／＼してゐる。）
官△　エ、、見せんか。（トけんどんを明けようとして、蓋も何もなきゆゑ、）コリヤ、中に何もないではないか。
ト音吉ふるへゐる。下手にて松藏、この聲を聞きつけすかし見て、うつかりして、
音吉　ハ、、、それでは此處へ參る道で、皆振り落してしまつた、コリヤ駄目エしましたわえ。
松藏　オイ、音公ぢやアねえかの。
音吉　エ、、松公も來てゐたか。
松藏　今ふん捕まつたよ。
官○　ヤ、啞が物を申すとは、此奴僞だナ。
音吉　ヤア大變だ。

逃げにかゝるを官軍捕へる。
官△　逃げるには及ばん、一應調べをすればよいのだ。
松藏　ハイ……。
官○　コリヤ、其方はよい、早くまゐれ。
松藏　ヘイ／＼／＼。
ト音吉慌てゝ件の箱を擔ぎ、一目散に花道へ逃げてはひる。
松藏　旦那方、どうぞお助けなされて下さりませ。
官△　イヤ、僞りし廉一應取調べし上、放免いたし遣はす。
松藏　それではどうでもいけますまいか。
官□　コリヤ其の籠擔ぎ、一緒に參れ。
松藏　ヘイ／＼。
トやはり右の合方にて、松藏氣味わる／＼件の飯籠をかつぎ、官兵附添ひて下手へはひる、合方替つて、花道より上野の僧四人、うしろ鉢卷、衣のつゆをとり、繩襷、尻端折り、草鞋にて、あめ色網代の乗物を擔ぎ出て來り、舞臺へ來る、この時以前の見張六人槍を持ち出て來り、
官○　ソレ各々。
ト駕籠を止める。これを四人行かうとする立廻り。ト

ト駕籠を下ろし、官兵兩人駕籠の戸をあける。内より白王院、茶色麻の衣の褄をとり、白の單衣、素足草鞋がけにて、短き鐵の棒を錦の袋に入れしを持ち、片手に律宗派の網代笠を提げ出て、兵士を相手にちよつと立廻り、よき程に花道より前幕の高木原縫之助、同門弟、竹本次郎、うしろ鉢卷襷がけ拔身にて駈付け來り、

縫之　私助太刀仕る。

次郎　早くこの場を落ち給へ。

白王　奇特の助太刀、忝ない。

トこれより兩人からみ、烈しき立廻り。この内白王院うしろの藪へ逃れる。こゝへ花道より僧頓念茶色麻の衣、白の單衣にて走り出て來り、この中へはひり、まごまごする。これを兵士白王院と心得捉へる。

頓念　どうさつしやる／＼。

といふを矢庭に駕籠の中へ押込み舁き上げる。これを僧、縫之助、次郎支へながら下手へはひる。あと本釣鐘誂への合方、蛙の聲になり、藪疊の内より白王院件の笠を冠り窺ひ出て、上下を見廻し、ほつと思入。合方きつぱりとなり、東の假花道より春日左衛門姿を變へ先に立ち、次に二幕目の湯屋越前屋佐兵衛好みのこしらへにて、僧光仁、黑の麻衣、白の單衣、白綸子の脚絆、白足袋、草鞋、律宗の網代笠を冠り、これを佐兵衛背負ひ、後より前幕の高木原源吉頰冠りやつしなり尻端折りにて、何れも無腰にて、みな／＼竹の杖を突き、窺ひ／＼出て來り、花道にて舞臺をすかし見やり、

左衛　御執當かナ。

白王　オヽ、先生おやナ。

源吉　わしもをります。

白王　早く／＼。

トこれにて四人舞臺へ來り、光仁をおろし、堂の前の線香立の石へ腰をかけさせ、三人下手にゐて、

源吉　御窮屈にいらせられん。

左衛　長時化の御出水にて、往來も腰きりありしを、お負ひ申してこれ迄參り、嘸草臥れた事であらうナ。

トこの内白王院佐兵衛を見やり、

白王　其方は何ぢや。

佐兵　ヘイ、湯屋でござります。

白王　ハヽア、遊擊隊の者か。

佐兵　イエ、上野町の越前屋佐兵衛と申します、湯屋でご

ざります。

白王　ナニ町人が、かゝる難儀な場合をお供申し、奇特な者ぢやノ。

佐兵　ハア。

トこの内白王院、左衞門と思入。左衞門心得、懷中より安政小判を三十枚程紙に包み、

左衞　これは些少ぢやが、當座の褒美に取つて置きやれ。

佐兵　難有うはござりまするが、私は金が欲しくツてお供したのではござりませぬ。不斷御恩になりますから、かういふ時の御恩返しと、命掛けで參りましたが、金なら少しは此方から、御用立てる氣でござります。

源吉　イヤ、いつも佐兵衞の俠氣には、感心いたす事ぢやわえ。

左衞　各々、感心でござるナ。

トこの内光仁、草鞋の紐解けてゐるゆゑ、結ばうとして結べぬこなし。

光仁　如何いたして結びてよきや。

佐兵　ハヽ。

ト佐兵衞草鞋の紐を結ぶ。この内白王院花道附際へ行き、向ふを見込む。源吉、左衞門は上手と東の方を心附け、元の所へ來る。この内光仁愁ひの思入。白王院これに心附き、みな／＼と顏見合はせ、ぢつとなり、とも／＼に泣く。左衞門紛らして、

左衞　シテ、これより落ちる先は。

白王　三の輪通りは必らず固めあらん、これより裏道を落ち行かんが、案内なくては心許なし。

佐兵　それは私が御案内いたして、これより上尾久村の農家にて、川端の治右衞門と申す方まで參り、もしそこにても危ふい時は、同村の長兵衞宅まで一と先お落ちなされませ。

白王　然らば、案内してくりやれ。

源吉　餘り多人數になります上に、この邊手前の顏を存じをれば、それが爲め却つて露顯のおそれあり、お名殘り惜しくはござりますれど、これにてお別れ申しまする。

白王　オヽ、左樣か、御盡力でござつたナ。（トこの内佐兵衞は向ふを見やり）

佐兵　アレ／＼、又お山へ火の手が上りましたが、今頃何處が燒けますことか。

左衞　青く火勢の上るのは、御本堂の邊であらうか。（トこれにて白王院ぢつとなつて）

白玉　はや灰燼と。（ト ちつとなる。この時鳥笛になる。
みな〳〵氣味合の思入あつて〕
作兵　追手まゐらぬ其内に、
白玉　わが東臺を後になし、
左衛　落ち行く先も白河の、
光仁　關路をしのぶ陸の奥、
源吉　左樣ござらば、御機嫌よろしう。
白玉　後日にお目にかゝらん。
ト本釣鐘、誂への合方、蛙の聲になり、光仁杖をつき立上る。皆々上下に手をつき、愁ひの思入あつて、上手外を廻り上へ白王院、作兵衛、光仁の介抱なして出る。左衛門は前後の官兵を心附けるこなし。源吉ずつと上手へ出る。この内知らせなしに、蛇の目廻しになり、上手内側の不動堂下手へ廻り、裏手になる。下手より外側へ並木の新芽一面に出て來り、これと一時に後の遠見打返し、上野の山、青葉の梢の蔭より火の手見える遠見になる。これに灯入り十五日の月を出し、上手よりこれを見送りながら、三人介抱して花道へはひる。源吉舞臺より花道を見込み、ほつと思入。バタバタになり、下手より以前の縫之助糸立をかぶり出て來り、
縫之　兄上、天野氏より御傳言でござる。（ト
源吉　如何いたした。
縫之　雅人體に姿をやつし、吾妻橋より本所の方へ。
いひかけるを〕
源吉　コレ。（ト押へるを木の頭。　ア、よい月にならしつたなう。
ト氣をかへ、百姓の思入になり、我家へ指をさす。これにて縫之助續く。この時上手植の間へ非人ほうだら傳次、菰をかぶり出て窺ふ。この模樣、時の鐘、合方蛙の聲にてよろしく。
ひやうし　幕

六幕目　北割下水金魚屋の場

役名——金魚屋九郎兵衛。金魚屋雇人濟八、實は天野八郎。非人、ほうだら傳次。魚賣雨乞の小吉。金魚賣、德松、實は隼高吉。酒屋の丁稚、三太。金魚屋女房、おわか。天野の娘、お花。同下女お谷

本舞臺、上寄りに、二間常足の二重、柿葺の屋根。向ふ上手一間障子の出這入り。下手三尺鼠壁、大小のさで二本懸けてある。上の方あとへ下げて、中窓のある屋體の張物。下の方一間葺おろしの下家、内板羽目。金魚入りの盤臺積んであり。上手平舞臺に金魚入りの池、布張り、金魚の書割。いつもの所丸木の木戸、竹を打附けし三尺の開き戸。玉椿の生垣。この開きより屋臺へ鳴子の繩引いてあり、下の方生垣の間路地の心。すべて本所割下水邊金魚屋の體。こゝに金魚賣德松、紺の長半纏三尺帶、金魚屋のこしらへ、草鞋にて、誂へ金魚の荷を傍へ置き、さでにて金魚を分けてゐる。傍に酒屋の丁稚三太、角大師のかつら、柿素の着附、紺の前垂草履、紐の附きし德利を提げ立掛りゐる。入口の外に菰冠りの非人寢てゐる。合方飴賣りの唐人笛にて幕あく。

丁稚　をぢさん、お前の金魚はみんな色が悪いぢやアないか。

德松　今年は入梅前から降り續いたので、どこの金魚も色が悪い。それだから丸や琉金の上物はさつぱりねえ。

丁稚　この間家の坊ちやんが、此方の家で和金を買つたが、いつもより高いやうだ。

德松　その金魚の値の高いのは、根津谷中の金魚屋が、この五月上野であつた戰のために家を荒らされ、おまけにあの折水が出て、みんな代物を流したから、この本所と白金の樹木谷ばかりゆゑ、品がないので高いのだ。

丁稚　もう金魚もしまひだね。

德松　今年は時候が遲れてゐるので、まだ縁日では賣れるのサ。

ト合方にて、奥より金魚屋女房おわか、前垂掛けにて出て來り、

わか　德さん、お前まだ選つておいでか。

德松　明日西河岸の地藏樣へ、晝前から出掛けますから、今日選つて置きますのサ。

丁稚　池田屋でござりますが、何ぞ御用はござりませぬか。

わか　今日は何もよかつたよ。

丁稚　炭のよいのがございますが、お買ひなすつて下さりませ。

わか　いゝのがあるなら二三俵、明日持つて來ておくれ。

丁稚　薪はようしうございますか。

わか　風除けの榛の木を五六本切つたから、今月内はいらないよ。

丁稚　それぢやア炭を明日持つてまゐります。

ト丁稚徳利をさげて花道へはひる。

徳松　あの小僧は年に似合はず、商賣上手でござりますナ。

わか　あゝいふ小僧を置き當てたのは、その主人が仕合だね。

徳松　ときに、お家で置きなすつた若い衆はどうでござります。

わか　何といつても素人だから、商賣用には足りませんよ。

徳松　見掛けは大層氣の利いてゐる人のやうに見えますが。

わか　見掛けによらず氣の利かないのと、根が田舍者だから、何の用にも足りないが、長降りでもした時に、水車でも踏ませるのが、あの男の使ひ道さ。

徳松　長降りといへば、時化つゞきで出商人は困りましたが、やう／＼の事で天氣になり、大仕合でござります。

わか　これでは今宵のお月見も、拜まれさうでございます。

徳松　暮方でお氣の毒だが、もう少し遲らして下さりませ。

わか　遠慮なくゆつくりと、遲り分けて行きなさんせ。

徳松　有難うござります。

ト又唐人笛の鳴物になり、花道より獵人清八實は天野八郎、單衣の上へ紺の印半纏、三尺帶、尻端折り、草履にて竹笠をかぶり、網持とぼうふりを持ち、さでを擔ぎ出て來り、花道にてちよつと思入あつて、舞臺へ來り、直ぐに内へはひり、

清八　おかみさん、今歸りました。

わか　オ、清八歸つたか、大層遲かつたの。

清八　遠方まで行きましたので、それで遲くなりました。

徳松　清さん、今日は赤採りかえ。

清八　エ、赤採りとは。

徳松　お前は符牒を知らねえか、赤といふのは赤ぼうふら、糸といふのはさしの事だ。

清八　ハア、さうでござりますか。

わか　それだから生業のまだ用には足りませんよ、さうして、今日はどつちの方へ行つたのだえ。

清八　やう／＼お天氣になつたので、晝から近所へ出掛けましたが、本所居廻りは水が多く、さつぱりぼうふらが掛らないから、阿部川町から下谷の方へ、ついうか／＼と行きまして、今日はがつかり致しました。

わか　草臥れ休みに湯へはひり、早く今夜は寢るがいゝ。
清八　有難うございます。
德松　清さん、お前は外へ出ず、内にばかりしてゐなさるが、何故商ひに出なさらねえのだ。
清八　まだ商ひは出來ませぬから、緣日へは出られませぬ。
德松　腹からの町人でなけりやア商ひは出來ません。お前は以前武家だらうね。
清八　エ、ナニ、わしは元は百姓さ。
德松　そりやア百姓か知らないが、どう見ても腰つきは、以前大小差したやうだ。
清八　武家と見たのはお前の目違ひ、腰へ差すのは鎌ばかり、なんで大小を差しますものか。
德松　さういひなされば百姓だらうが、一體お前の在所はどこだえ。
清八　エ。（トギックリ思入。）
わしが在所は下總の。（トいひかねる。）
わか　清八が在所は、小金村でございますよ。
德松　へエ、小金村でございましたか。
わか　又この清八が外へ出ず、内の用ばかりしてゐますのは、德さんお前も知つての通り、家の親方が出好きだから、外の用は自分でするから、清八は家へ置きますのサ。
德松　成程、此方の親方は、人の世話をするのが好きで、よく親切になさるから、仲間内でも何ぞあると、皆んな此方へ持込むから、家にゐる間はない筈だ。
わか　さうして、ぼうふりはどうしたえ。
清八　わざ〳〵行つた甲斐もなく、下谷近所も水が多く、それにうつかり採つてゐると、人に目を附けられて、飛んだ目に逢ひますから、匆々家へ歸りました。今日も無駄足を致しました。
トおわかへ思入にていふ。
わか　それぢやアこれを裏へ持つて行つて、芥をよく拾つて置きナ。
清八　畏りました。德さん、御免なさい。（ト合方にて清八岡持とさでを持つて下手へはひる。）
德松　イヤ、私も暮れぬその内に、
わか　早くしまつてお歸りなさい。
德松　九郎兵衞さんに、よくいつておくんなせえ。
ト合方にて荷を擔ぎ門へ出る。おわかは奥へはひる。時の鐘、門口の寢てゐる非人、德松の擔いでゐる金魚の荷を引張る。德松たぢ〳〵として荷を下ろす。非人

起上ると、四幕目のぼうだら傳次にて、徳松に囁き、兩人よろしくこなしあつて、徳松は花道へ行き、

徳松　日高金魚。

ト呼びながら揚幕へはひる。傳次後を見送り又寢る。飴屋の笛、合方になり、花道より四幕目の雨乞の小吉、魚賣りになり、長半纏三尺帶草鞋にて、魚の荷を擔ぎ、「今日はよろしう。」と呼びながら出て來る。この後より三幕目の天野下女お谷、下女のこしらへにて、小さき風呂敷包みを持ち、雪踏にて出て來り、花道にて、

お谷　モシ〳〵、魚屋さん、ちよつと承りたい事がござります。

小吉　アイ、何だえ。

お谷　この御近所に金魚屋はござりませんか。

小吉　御下水邊は、金魚屋は門並だが、名は何といひなさる。

お谷　その名はしかと分りませぬ。

小吉　名が分らなくては知れにくい。今もいふ本所には、何軒あるか知れねえから、門並聞かずば分るまい、早速向ふが金魚屋だから、あすこへ行つて聞いて見なせえ。

お谷　それは有難うござります。（ト兩人舞臺へ來る。）

小吉　今日はよろしうござい。（トいひながら、生垣の下手へはひる。お谷は門口の側へ行く。）

お谷　ちよつと承りたうござります。（ト内にて返事のなきゆゑ、）モシ〳〵ちよつと承りたうござります。（ト小吉下手より出て來り、）

小吉　そこでいくら呼びなすつても、住持は奧の方だから、なか〳〵滅多に聞えやアしねえ、この門の戸を向ふへ明けると、鳴子がついてゐますから、直ぐに奧へ聞えます

ト入口の戸を向ふへ開けると、奧から以前のおわか出て來り、

わか　オヤ魚屋さんかえ、今日は遲かつたね。

小吉　少し捌口が惡いので大きに遲くなりました、もう二三軒お得意を廻つて今日はしまひます、イヤ、私よりかこのお方が、金魚屋さんを尋ねてゐなさるから、今お宅を教へたのだ。

わか　何ぞ御用でござりますか。（トお谷内へはひる。）

お谷　ちと卒な尋ねものでござりますが、こちらのお宅へ若い男が餘所から參つてはをりませぬか。

わか　男も一人をりますが、何といふ名でござりますえ。

お谷　サア、その名前は。（トいひかねる思入。）

小吉　なか／＼こりやア占者にでも、見て貰はなきやア分るまい。この間に裏の谷狩干し場へ、商ひをして來ませう。（ト小吉荷を擔ぎ、生垣の間へはひる。お谷はあたりを見て、）

お谷　もし、逢ひましたら御免下さりませ。此方のお家へこの夏頃から、御奉公に參つてゐる、若い男はござりませぬか。

わか　ハイ、この五月から置きました、若い者はござりますが、お前さんのお尋ねなさるのは、どんな男でござりますえ。

お谷　サア、田舎者でござりませうか、又江戸者でござりませうか、私にもさつぱり分りませぬ。

わか　私共にをりますのも、田舎か江戸か分りませぬが、年の頃は二十四五で、形は少し小さい方だが鼻筋が通つて目が涼しく、口許が尋常で、言分のない好い男、當時の役者でいはうなら、二丁目の太夫元家橘によく似てをります。（トこれを聞く内、お谷は違ひないといふ思入。）

お谷　私の尋ねますのは、その人でござります、よくお教へなされて下さいました。

ト嬉しき思入。おわか情人だと思ふこなし。

わか　何處から尋ねてお出だか、今に私が逢はして上げます、思ふ男の在所が知れて、嘸嬉しうござんせう。

お谷　誠に嬉しうござります。

わか　知らぬ所をあちこちと、尋ねて歩きなさんすも、惚れた仲では無理ではない。

お谷　イエ／＼、さういふ譯ではござりませぬ、私の勤めてをります御主人の、お孃樣にお逢はせ申したいのでござりまする。

わか　私は又お前さんと好い仲のお人と存じましたが、お勤めなさるお孃さんのお使ひでござりましたか。

お谷　唯今お連れ申しますから、御免なされて下さりませ。

ト　お谷逸散に花道揚幕へはひる。おわか後を見送り。

わか　今の女中はそは／＼と、どうした譯か分らないが、肴でも持つてゐて、生三堀か藪の內で、つまゝれたのではないか知らぬ、お孃さんを連れて來ると、一目散に駈けて行つたが、何だか分らぬ事ぢやなア。

ト合方にて、おわか思入あつて奥へはひる。門口の非人傳次起き上り、向ふを見て、

傳次　今の女も怪しいわえ。

ト向ふを見ながら後へ下り、入口の戸へ寄りかゝる。

これにて鳴子の音して、奥よりおわか出て來る。傳次びつくりして寢る。おわか思入あつて、

わか　鳴子の鳴つたは、今の女中が來た事かと思つたら、さうでもないのは。

ト柱へつかまり、表を見るを、道具替りの知らせ。

風が知らぬ。（ト稽古唄にてこの道具廻る。）

本舞臺三間常足の二重。柿葺の本屋根、本緣附。向ふ上手一間床の間、牛の御前の掛物をかけ、續いて一間障子出這入り、下手一間戸棚、まいらせんの戸、上の方を後へ下げて一間本屋根、小窓のある雪隱の張物。兜鉢の手水鉢、樹木をあしらひ、舞臺前上下に金魚池あり、廻りは柵、中は水の有澤り飛込む事あり。下の方同じく池の書割の遠見、池の周り玉椿の生垣、所々に芒の茂み、藪疊、すべて前の屋體續き、奥住居の體。平舞臺上手に以前の清八、ぼうふりの蟲を箸で選り分けてゐる。下手に九郎兵衛着流し、低き下駄にて亭主のこしらへ、さでにて金魚池の水草を取つてゐる。この見得、床の三重にて道具留る。

へ入相の、鐘も哀れな秋の暮、露しらずの本所に、親へもひろき金魚屋の、軒に名殘りの蚊の聲は、これも所の名物たり。

トこの内清八井を運び、水草を取りて、

九郎　清八、もう日が暮れたから明日の事にしたがよい。

清八　歸りが遲うござりましたので、ぼうふらを選り分けますのが、つい遲くなりました。今夜は月夜でござりますから、夜業をして片附けませう。

九郎　ナニ、夜業をするには及ばない、明日少し小早く起きて、朝飯前にするがいゝ。

清八　それぢやア明日の事にしませうか。

ト合方になり、さでをおいて二重へ上る。清八團持とさでとを緣の下へ入れ、二重へ上り、下手へ住ふ。

九郎　今夜は十三夜の月見だから、後に鰻で一杯やらう。

清八　先月のお月見には、大層お醉ひなされましたぜ。

九郎　仲間の者に押込まれ、つい一升が三升と、鰻登りに醉倒れたが、片月見ゆゑ今夜も呑むが、貴樣と二人で飲めよう。

清八　有難うござりますが、私は酒は呑みませぬ。

九郎　成程、貴樣は斷つてゐるナ、それぢやア團子にする

かいゝ、豆や芋は畑のだから、喰つて見ろ。餘程うまい。

清八　八百屋が持つて來るのと違ひ、とり立は違ひます。

へ話すその間に暮れかゝる、黄昏時に女房が、行燈たづさへ立出でゝ、

ト奥より以前のおわか角行燈をさげて出て來り、

わか　今し方淨光寺の入相を撞いたのに、もう暗くなつてしまつた、日が短くなつたので、忙しなくなりました。

九郎　今夜は月夜で一杯に内へさすから、燈火はいらぬ、又油が上つたから、無駄に點けるには及ばない。

わか　ナニ、及ばないことがあるものかね、曇つて來たので月はなし、暗闇にゐられますものか。

九郎　よくつべこべと口答へをする、消せといつたら消してしまへ。

トキツといふ。おわかツンとして、

わか　それぢやア消しておきませう。

へともし灯消せば暗闇を、これ幸ひと清八を、主人は上座へ敬ひて、

トおわか行燈を吹消す、九郎兵衛清八の手をとり、先づ〳〵と上手へ直し。

九郎　嘸御窮屈でございませう。日が暮れゝば商人の來る事もございませぬ、一日のお氣休めに、お樂においでなされませ。

ト誂への合方になり、清八思入あつて、

清八　過ぎし五月の戰爭に、味方破れて上野より、奥州路へ立退いて、再び事を起さんと、思ひし内に八方へ、官軍方の手が廻り、嚴しい圍みに脱れ難く、却つて燈臺元暗し、江戸に忍んで時節を待たんと、人足共の半纏で、姿を變へて夜に紛れ、いづれへか身をかくさんと、思ふ折から三河島で、こなたに出逢つて便りを得、この本所へ尋ね來て、世間を憚り田舍出の奉公人といひなして、今日までこの家に隱れ忍び、物憂き月日を送りしは、我父上の安否を聞きたく、御無事にあらば明日にも、當地を立退きいづれでも、身の方向を立てる所存、長居いたして露顯なし、この家へ難儀をかけては濟まぬ。實にこなた衆夫婦の恩は、詞に禮は盡されぬ。

へ兩手をついて禮をなす、その手を主人は取上げて、

ト清八手をついて禮をいふ。九郎兵衛はその手を上げさせ。

九郎　エ、勿體ない事おつしやりませ。何のお禮に及びませう。しかもこの春池の端で、酒に醉ひし歩兵に出逢ひ

既に命を取られる所、あなた樣に助けられ、危い難儀を脱れました、嬉しまぎれにお名所も承はらずにお別れ申し、お宅が知れねばお禮致さず、心掛りでをりますうち遂に上野で戰が始まり、三河島の親類へ、見舞にまゐつた歸りがけ、思ひがけなくお出逢ひ申し、今日かうして私方へおかくまひ申しまするも、その時受けた御恩返し、いつまでなりと御遠慮なく、手前においで下さりませ。

〽眞實面にあらはれし、心の内ぞ殊勝なる。

清八　その志しは忝いが、最前來る金魚屋の、徳松殿が根問ひといひ、油斷のならぬ時節ゆゑ、父の安否が知れ次第、直ぐに他國へ立退く所存。

わか　先刻お歸りなされし時、下谷へお出でなされしとおつしやいましてござりますが、御親父樣の御樣子は、お分りになりませぬか。

清八　五月以來人目を憚り、内にのみをりましたゆゑ、運よく今日まで脱れしが、明日をも知れぬ科ある身の上、見咎められぬその内に、立退く所存で今日下谷へ、笠をかぶつて面をかくし、ほうふりを採りに參つたが、何分四邊の人目もあるので、問合はす事もならず、空しく歸つてまゐりました。

わか　それは本意ない事でござりましたなう。

九郎　さういふ事なら私が、明日尋ねて上げませう、

清八　御苦勞ながら舊宅の、近所へ行つて尋ねて下さい。

九郎　承知しました。

〽密事を語る折しもあれ、鳴子の音に驚きて、

ト三人打寄りて話す。この時軒の鳴子なる。三人びつくりして、

わか　ヤ、誰やら表へまゐりし樣子。

九郎　早く行つて見て來やれ。

わか　アイ／＼。

〽あいと返事も身も輕く、女房は表へ急ぎゆく。（トおわか奧へはひる。）

〽跡は又もや主從が、席をば變へて座を構へ、（ト九郎兵衞上手へ住ひ、清八下手へ住ふ。）

九郎　さつき女房に聞きましたが、あなたを尋ねて若い女中が、參りましたと申しますが、お心當りはござりませぬか。

清八　女などに尋ねられる、心當りはなけれども、もしや妹が。

九郎　エ。
清八　イヤ、いづれの者が尋ねて來たか。
九郎　うつかり油斷はなりませぬ。
〈折から女房が立出でゝ、〈ト奥よりおわか出て來る。〉
九郎　表へ來たのは誰であつた。
わか　先刻お前に話しておいた、あなたを尋ねて來た女中が、十六七のよい娘を、一緒につれてまゐりました。
九郎　何處の者か名を聞いたか。
わか　如才なく聞きましたら、苗字はおつしやいませぬけれど、花と谷と申す者、どうぞあなたに逢はしてくれとおつしやいましてござりますが、お心當りはござりませぬか。
清八　名前が花と谷とあれば、妹が尋ねてまゐりはせぬか。
わか　お出でなすつた娘御は、大層美しうござりますが、もしや以前の。〈トいひかけ〉イヤ、お心遣ひをなされませずと、早うお逢ひなされませ。
清八　イヤ、暫時待つてくりやれ。
〈障子の破れより隙見をなし、〈ト清八障子の破れより奥を見て、〉

妹の花に下女の谷、二人の者に相違なければ、ひそかにこれへ通して下さい。
わか　ハイ／＼。
〈又もとつかは出で行く。〈トおわか奥へはひる。〉
九郎　扨はお出でなすつたのは、お妹御樣でござりますか。
清八　父上の御身の上、お案じ申さし心が屆き、妹がまゐらば分るであらう。
九郎　さういふ事なら月夜を幸ひ、ゆるりとお逢ひなされませ。〈ト奥にて、〉
わか　サア、こつちへお通りなされませ。
〈さあ／＼こちへと女房の、案内にお花はしづ／＼と、下女諸共に入り來り、兄を見るより思はずも、
ト奥よりおわか先にお花屋敷娘のこしらへ、女中のお谷附添ひ出て來り、清八を見て、
お花　オヽ、お兄樣、ようお達者でござりましたなア。
〈うれし涙にくれければ、
トお花下にゐて嬉しき思入にて、清八も思入あつて、
清八　其方も無事で、このやうな悦ばしい事はない。
お花　上野から奥州へお落ちなされましたともいひ、又は果敢なく討死をなさいましたとも申し、生死の程が分り

ませず、誠にお案じ申しました。

清八　さうして此處にゐる事を、どうして其方は知つてまゐつた。

お花　母様のお祥月に、お寺へまゐりましたれば、お住持様のお話に、本所の金魚屋に八郎様がお出なさるを、垣越しにお見かけ申したが、大事の御身に噂にも、人には決して申しませぬが、内々お知らせ申しますと、承はりしを便りにして、谷と二人でこの邊を、お尋ね申してござりまする。

お谷　最前こちらへ上つた時も、お名前を憚りますれば、誠に容な尋ね者で、どちらで聞いても分りませず、どう致さうかと存じましたが、やう／＼の事で知れました。

九郎　この本所は金魚屋が何軒もござりますから、嘸お困りなさいましたらう。

わか　それもお尋ねなされまする御一心が屆きまして、こちらにお出でなされまする事が分りまして、お兄い様にお逢ひなさり、嘸お嬉しうござりませう。

お花　誠に嬉しう存じまする。

清八　最早この世で逢はれぬ事と、存じをつたに計らずも、今日面會なしたるは、この上もない悦びなり、それにつき早速承はりたいは、疾うからして心に掛るは父の身の上、お變りもなくおいでなさるか、それを早く承りたい。

お花　ハイ、父上は。

（ト言ひさして俯向けば、）

清八　御無事なるか、但し又、お煩ひでもなされはせぬか。

お花　ハイ。

清八　お變りなさる事はないか。

お花　ハイ。（ト清八思入あつて、）

清八　返事のないは案じられる、早く御様子聞かしてくりやれ。

（いふに妹、是非なくも、浮む涙をのみこみて、

ト床の合方、お花うれひの思入、涙を拭ひ、

お花　申上げるも涙の種。父上には戰爭を深く御心配なされしゆゑか、其後御氣分が常ならず、廿日過ぎにふと風邪の熱に冒され給ひしゆゑ、直にお藥を上げましたが、次第々々に病が重り、諸方のお醫者をお頼み申し、いろいろと手當を致しましたが其の甲斐もなく、七月の廿九日に果敢なくも、お亡なりなされました。（ト泣く。）

清八　エ、。（トびつくりなす。）スリヤ父上には御病氣

にて、果敢なく御死去なされしとか、殘念な事をいたしたり。シテ弟賢次郎は、その折江戸にをつたるか。

お花　戰爭の二三日前、神奈川よりのお手紙に、よい便りあつて長崎へ明日赴くことになり、彼地より外國へ、渡海なして學問勵み、人となるまで歸國なされば、くれぐれ父上の御身の上、私へお頼みありて、其後お便りがござりませねば、何れにおいでなされまするか、お知らせ申す事もならず、又宗兵衛も長の病氣に國許へ戻してしまひ、據所なく私と、これなる谷と二人して、御看病をいたすに、次第〳〵にお疲れなされ、御臨終の前日より、死ぬるお覺悟なされまして、御苦痛もなくすや〳〵と、眠るが如く明方に、よい往生をなさいました。

へ涙ながらに妹が、父の最期を物語れば、聞く八郎は茫然と、しばし詞もなかりしが、

ト お花涙ながらにいふ。清八ぢつと思入あつて、

清八　五十五年を一期となされ、父には御最期なされしか、現在男子の兄弟が、二人までありながら、脫走せしゆゑお側にをらず、後に殘りし妹の、其方一人にてお世話いたし、遂に御死去なされしとは、誠にもつて本意なき事。しかし孝心深き其方なれば、男子が看護なすよりも手は屆きしに相違なけれど、我々二人お側にをらず、返す〴〵も不孝の至り、濟まぬ事をいたしたり。

へ勇氣すぐれし八郎が、先非を悔いての落涙に、側の妹も涙を拭ひ、

ト清八思入あつて、涙を拭ふ。

お花　シテ兄上には此所より、いづれへお出でなされまする、思召でござりまする。

へ問はれて八郎打うなづき、（ト誂への合方になり、）

清八　錦旗へ向ひ發砲なせば、疾より江戸にはゐられぬ體、それを今日まで姿を變へ、この家に忍びをつたるは、嚴しい詮議を脫るゝ爲、又二つには父上の、御安否を伺はんと、今日も竹笠眼深にかぶり、舊宅の近所まで樣子を聞きにまゐりしも、人目繁く望みを果さず、然るに圖らず其方に逢ひ、御死去の趣承り、最早今宵を過さずして、我望みを達する所存、然しそれも事成らずば、品川海に碇泊せる榎本氏の許へたより、奧羽へ脫艦いたす所存。さすれば再び面會なすか、運拙くして逢はれぬか、存亡知れぬ我が身の上。既に順逆二つの內、弟は順に隨ひて、朝臣となる志願なれば、洋行なすとも存命なり、其方と二人で父上の、位牌を永く守り吳れ、我は逆に隨

ひて、過ぎし五月上野にて、錦旗へ對して發砲なせば、今日にては朝敵なり、人目を忍ぶ身の上に、他聞を厭へば其方は、長居致さず歸りくりやれ。

〽詞淀まず滔々と、わが心中を打明かせば、

ト清八よろしく思入あつていふ。

お花　その御決心の上からは、所詮お止め申しても、お止まりはござりますまい、是非なき事と諦めますれば、御身を大事に奥州へ、御發足なされませ。

清八　オヽ、よくぞ諦めてくれたるぞ。其方もその身を大切に、心細くも谷と二人で、父の追善供養を頼むぞ。

お花　ハア——。

ト時の鐘。

清八　あの鐘はもう五つ、この本所は淋しいゆゑ、二人は早く歸るがよい。

お花　お名殘惜しうござりまするが、

お谷　途中が案じられますれば、

お花　お暇をいたしまする。

九郎　コレ、吾妻橋までお送り申せ。

わか　アイ、それは承知でござります。

お花　左樣なればお兄樣。

清八　私はぬやうにいたせ。

お花　あなたもお身を大切に、

清八　氣遣はずと急いでまゐれ。

お花　ハア。

〽惜しむ名殘りに立ちかねるを、さあ〳〵早うと女房にせり立てられて、是非なく〳〵、跡を見かへり出て行く。

トお花名殘りを惜しみ立ちかねるを、おわかせり立て、お花お谷の手を取り、振り返り見て奥へはひる。

〽これが此世の別れぞと、跡を見送る八郎の、心を主人は察し入り、

ト清八跡を見送り、愁ひの思入。九郎兵衞こなしあつて、

九郎　アヽ、お愛しうござります。（トいひながら行燈の灯をつけ、）これからは又奉公人、ゆつくり足でもお出しなされ。

清八　イヤ、最早猶豫いたし難し、今宵の内に立退かん。

〽又も鳴子に打驚き、（ト軒の鳴子鳴る。清八びつくりして、）

誰か表へ參つた樣子。

九郎　イエノヽ、今二人がお歸りなされたのでござります。

清八　いかさま、さうであつたか。

「忍ぶその身に氣を配る、折から出で來る肴屋が、」

ト下手より以前の小吉、酒に醉ひし思入にて、荷を擔ぎ出て來り、

小吉　今合羽干し場でしまひ物の魚を買つて貰つた上に、月見だから一杯吞めと、御馳走になつてぐつすり醉つた。イヨウ、おらア表へ出る氣だつたが、こりやア池の方へ出た。イヤ、親方さん、毎度有難うございます。

ト此内清八は立退く心にて、戸棚より紋附の着附帶大小を出し、二枚折り屛風の蔭へ置く。

〽いひつゝ思はず顏を見て、（ト小吉清八と顏を見合せ、）

小吉　ヤ、お前さんは天野の旦那。

清八　ア、コレ。（ト押へる。）

〽あたりを憚り止むれば、魚賣りも心附き、

小吉　成程、こりやア飛んだ事を言つた。

〽生醉本性違はずと、おどろくこなたの藪蔭より、非人はのそ〳〵出で來り、

ト小吉驚く。下手より以前の非人ぼうだら傳次、菰を着たまゝ出て來り、

傳次　どうぞ一文下さいまし。

ト此聲に三人びつくりして、

九郎　何んだ、今時無遠慮な、こゝは垣根の構へ內だ、早く表へ出ねえのか。

傳次　今朝ッからこゝの家の外に、久しくわつちやア寢てゐたから、內か外は百も承知だ、手の內さへ呉んなさりやア、直ぐに表へ出て行きやす。

ト縁に腰をかける。清八は二枚折の屛風の蔭へ隱れる。小吉思入あつて、

小吉　コレ〳〵、乞食の癖に遠慮もなく、縁ばなへ腰をかけ、身の程を知らねえ奴だ、早くそつちへ行かねえのか。

傳次　呉れせえすりや直ぐに行くから、早く手の內をくんなせえ。

九郎　エヽ、やかましい、ソレ、

ト九郎兵衛文久錢を二文やる。傳次これを取上げて、

傳次　なんだ、こりやア文久二つかえ。

小吉　コレ〳〵三十貰つたら言分はあるめえ、不足さうな面をするねえ。

傳次　飴を買ふ子供でも三十の錢は嬉しがらねえ、惜しくば其方へ返してやらう。

ト傳次錢を抛りつける。

九郎　いらずば貰ふな、無理にやらうとはいはねえわ。
（ト錢を取る。）
傳次　三十や四十の零砕錢を、おらア貰ひに來たのぢやアねえ。
小吉　さうしていくら呉れろといふのだ。
九郎　何だと。
傳次　その屛風の蔭にゐる、清八を貰ひに來たのだ。
傳次　貰ひに來たのは、錢ぢやねえ。
九郎　小吉　エ、。（トびつくりする、凄みの合方になり）
傳次　貰ひに來たのは外ぢやアねえ、この夏上野の戰争から、影をかくした脱走人、形は小さな男だが、大きく言やア天下の朝敵、その時降つた五月雨の水氣に落ちる不忍の、鐘同樣に脱れ出で、この本所の割下水、九郎兵衛といふ金魚屋に、二歳三歳變り物が、圍つてあるといふ噂に、探索方から頼まれて、今日朝ッから探りに來たは脱れぬ天の四つ手網、大降りがして樋の口から、流れ出さねえ其内に、おれがさでゞすくひに來たのだ。
九郎　スリヤ若い者の清八を、脱走人だといひなさるのか。
傳次　流石その名はいはねえでも、今この野郎がうつかりと、口走つたが確かな證據だ。

小吉　それぢやアおれが名をいつたので、
九郎　旦那の素性を知られたか。
傳次　ナント動きはとれめえが。
（又もやこゝへ金魚屋が、姿を變へて入り來り、
ト下手より以前の徳松、尻端折り紺の脚絆、草履、十手をさし、手先のこしらへにて出て來り、
徳松　かねて天野八郎が、この家に隱れてゐると聞き、金魚賣に姿をかへ、疾から入込み探つてゐたのだ。
傳次　卑怯未練に隱れずと、
徳松　立派に名告つて、
兩人　縄かゝれ。
（菰脱ぎ捨てゝ身構へれば、八郎もはやこれまでと、衣服を改め立出でゝ、
ト傳次菰を脱ぎ捨てキッとなる。この内清八屛風の蔭にて紋附の着附に着かへ、脇差を差し刀をさげ出てキッとなつて、
清八　かく露顯の上からは、最早何をか包みかくさん、いかにも前に上野にて、一戰なせしも運來らず、風雨の惱に敵し難く、つひに味方の破れとなり、彈丸の中を切拔けて、姿をかへて今日まで、志願あつて隱れ忍びし、我

こゝに天野八郎なり。天命盡きればいざ知らず、わい等如きの手にあはうや。

傳次　袂から目串をつけて置く、この家の四方を取圍めば、

德松　最早逃げ出る所はない。

傳次　覺悟極めて、

兩人　繩かゝれ。

清八　小ざかしき覺悟呼はり、ならば手柄にからめて見よ。

兩人　何を小癪な。

ト、かねて伏せ置く數多の捕手、こゝかしこより現れ出で打つてかゝるを身をかはし、當るを前後左右へ投げ退け、飛鳥の如き働きは、目ざましかりける次第なり。

トこの內上下より官軍八人好みのこしらへにて出て來り、ツカ〳〵と二重へ上り、屏風の影の清八の手を取り引出す。これと立廻つてキッと見得。淨瑠璃の切より誂への鳴物になる。偖魚池をつかひ、烈しき立廻りとなる。その內九郎兵衞は柄の長き水打柄杓で、池の水を汲んで捕手にぶつかける。小吉は天秤棒を持つて捕手の邪魔をする、立廻りよろしくあつて、德松大きな玉網を持つて來て、清八の天窓へかぶせる。清八これを取らうとして取れぬ思入。この隙を見て、傳次小丸太を持つて、清八の刀を持ちし手を強く打つ。不意を打たれて刀を落す。清八取らうとするを、傳次手早く拾ひ池へ投げ込む。清八件の網を引切り顏を出してキッと見得。これより鳴物替つて、池をつかひ烈しき捕物の立廻り。九郎兵衞は柄杓、小吉は天秤棒にて邪魔をする立廻りよろしくあつて、德松うしろから清八を羽がひ締めにする。傳次前から掛るを、清八蹴る。傳次たち〳〵として池へ落ち、水の花パッと立つ。これを木の頭。清八もがくを、大勢で取押へる。九郎兵衞小吉は捕手に引据ゑられ、傳次は池より半身出してホッと思入。清八は無念のこなし。この見得よろしく、ドンドン早めたる合方にて、

ト幕引附けると、「これより三十三年相たち、明治二十三年に相成候狂言。」と記したる札を出す事。

ひやうし幕

七幕目　上野第三博覽會の場

役名──越前屋佐兵衞。天野賢次郎。銀行副頭取

境賓實は淸井作實。會社の支配人奈井彦太郎。會津の長吉。家令羽田千彌。同邑井榮藏。待合猶の家の小吉。實は雨乞の小吉。執達北松。新屋の小旦那半左衞門。寝戸の仙平。二合半の八十八。半田村の稲右衞門。館内定夫。高木原源吉。生徒春之助同松太郎。同花若。廣告小僧ちよこ松。賢次郎令閨おきみ。田宮の姉娘米子、境實の妹稲子。田宮の妹娘亀子。賣茶の娘おせん。田宮の下女おふみ女生徒貞子。半左衞門嫁おくわ。茶屋小女等。

本舞臺、上手寄心に博覽會入口、正面の上に第三回内國勸業博覽會と記せし額。これより下手瓦屋根上下ガラス窓、外側の張物、この前電氣燈の柱。下手一間札賣場、屋根に入場券賣場と記せし板札。小判形札賣場の窓、これに「暫時賣切」としたる板札を賭け、上下青葉の楓の立木、すべて上野博覽會入口の體。こゝに接待の床几を二脚置き、田舍者○△□毛布を引かけて草鞋がけ、田舍婆、田舍の嫁丸髷裾模樣にて襟をかけ、洋服姿の田舍の小旦那、すつと上手に靴磨きの靴屋、小倉の服にて、洋服姿の小旦那に靴を磨くことを勤めてゐる。この模樣、賑やかな合方へ、大拍子をかぶせ幕あく。

田△ 權六どの、頼んだ事がはだつたではござらぬかの。

田○ 遙々の所を踏出して、今月の今日となり、窓を締められたさいご、どうする事も出來ましねえ。

田□ よもや博覽會の閉手べえ賣切れやうとは思はねえがお巡り樣に聞いて見るべえか。

婆ア 賣らねえといふものを、賣つて下せえといつて、お巡り樣にも願はれめえ。

三人 コリヤマアどうしたものだなう。(ト心遣ひの思入。田舍の小旦那落着きゐて、)

小旦 そんなに騷ぐ事はござらぬ。僕などはこの館内に縣下より出品があるから、誰にでも逢つて言ふから、もう少し待たつしやれ。

嫁 小旦那殿は附合々々と言はつしやるが、先程からべんべんと、もう二時間も待つてゐましツけえが、いまだに知つたお方もなし、恥をかいて下さんすなよ。

小旦 東京馴れない者ばかり連れて來たので、どこへ行つても脇の下から汗の出る事のみ、田舍者と見られて、見とむなくてならぬわえ。

靴屋　旦那、暫くお待ちなさいます内、お靴磨きは如何でございます。
小旦　わしらア靴かえ、マアようございますよ。
靴屋　どうせ此處においでなさいませうから、一錢で磨いて差上げますから、どうぞお願ひ申します。
小旦　今朝宿で磨いておいてくれたから、マア止しにしますべい。
靴屋　直ぐでございますぜ。舶來の眞黑墨で、直ぐ艶が出て皮がしなやかになりますから、ちつとお磨きなさいまし。
小旦　磨いては貰ひたいが、一錢でも出すのは不經濟ぢや。
ト澄ましてゐる。嫁おくわ心遣ひのこなしにて、
嫁　もし旦那どの、わし案じられてならねえが、もし知つたお方に逢はぬ時は、皆様に濟みましねえよ。
靴屋　失禮でございますが、大分汚れてをりますから、一錢御散財なさいまし。
婆ア　宿で磨いたか知らないが、わしが見てさへ穢い靴一錢はずんではどうだんべえ。
小旦　婆樣までにさう見られたら仕方ないから、實はいふが、本當は國を出る時磨いたきりぢや。
田〇　それではもう十日になるから、穢えのは尤もだ。
小旦　仕方がねえ、やつてくれさつせえ。
靴屋　へイ、畏りました。
ト小旦那半左衛門腰掛へかけ、靴屋へ靴を渡し、靴磨二人にて片足づゝ磨く。やはり右の鳴物にて、花道より家令羽田千彌、同邑井榮藏、散髪、羽織袴、靴にてステッキを突き、學習院生徒春之助、松太郎、花若、洋服にて、貞子同じく學習院女生徒にて、連立ち出て來り、
千彌　本日は非常の雜沓にて、馬車では危ない位でござるな。
榮藏　東照宮の前で下車いたし、これまでやう／＼參りました。
貞子　もう何時だらうね。（ト榮藏時計を見やり、）
榮藏　もう一時三十分であります。（トこれにて皆々舞臺へ來り、）
榮藏　ハヽア、今日は切符が賣切れたナ。
春之　千彌、博覧會の館内へ、
花若　はひる事が出來るかえ。
千彌　優待券を所持いたしをれば、入場に差支へはござり

ませぬ。

榮藏　マア、この床几へお掛けなされませ。

ト これにて下手へかける。皆々の靴を見て綺麗だといふ思入あつて、後へ下る。田舍者は子役三人達のなりを見てびつくりなし、コソ〳〵話してゐる。小旦那はシガレツトを吸ひながら、餘り見るなといふ思入。

松太　今權現の脇にあつた、二つ並んだ黒い門は、戰の時にあつたのだねえ。

千彌　左樣でございます。あれは今年で廿三年後、もつと彼方の口元にございまして、戰の時鐵砲丸が幾つもありましてございまする。

榮藏　また博覽會へおはひりになさいますと、宮樣のお中門に、あの時の鐵砲丸がはひつた儘でございます。

嫁　アレマア幼くせえに、東京者はませてゐさつしやるなう。

小旦　コレ、默つてゐぬかえ。

ト はやり唄、大拍子になり、花道より廣告小僧ちよこ松、日の丸とかたばみの紋のフラグをぶつ違ひに附けたる赤い帽子、役者紋盡しの背廣服、布まぜ引幕と見たるズボン、大入と記したる襷へ花打にしたるを首へかけ、拍子木を持ち出て來り、花道に止りチヨン〳〵と二つ打ち、

廣告　東西々々。これは日本橋區葺屋町一丁目三番地、齋藤長吉と申しまして、新富座の番附の版元で、紅梅散と申す齒磨を賣りひろめます、御贔屓の役者好み、上製の齒磨を賣りひろめますが、こゝではお弘めに進上いたします、もし御用の節は、新富座の運動場と芝居茶屋にございます、評判々々。（ト拍子木を打ち舞臺へ來る。）

千彌　オヽ、芝居がゝりの廣告小僧は、芝居の版元が新發明だな。

榮藏　幸ひはしりを一つ買つてやりませうか。

廣告　イエ、私のは賣りません、これは進上いたします。

ト 箱より出して二包みやる。田舍者これを見て、

婆ア　只程安いものはござらぬ。おらがにも一つ貰ふべえか。

ト 廣告小僧五人に一つ宛渡す。嫁これを見て羨しがり、

嫁　オイ小旦那も一と包み貰はツせえよ。

小旦　エ、見ともない。郡長方の附合する者が、そんな不

品行な事が出來るものかえ。(ト小言をいひながら、家令の側へ來り、帽子を取り。) 當開館はえら盛會でござりますナ。

千彌榮藏 さうでござりますナ。

小旦 先生方も、やはり入場劵をお待兼ねでござりますかナ。

千彌 イヤ、僕らは優待劵を持つてをります。

小旦 ヘエ、、兵隊劍を持つてござるとは、ア、劍はステツキにでも仕込みになつてをりますかナ。

榮藏 イヤ、兵隊の劍の事ではござりませぬ。優待劵を持つてゐるのでござります。

ト小旦那半左衞門一向分らぬこなし、嫁は心遣ひのこなしにて、

嫁 モシ、知らぬ事なら知りましねえと、言はつしやつたがようござらうのに。

小旦 エ、、何を田舍者のくせに、默つてゐらつせろ。(トハンカチーフにて汗を拭ひながら、) ハ、ア、左樣なら優待劵と申すは、この頃出來た香川縣の俗言でござりましツけえかな。

トこれにて家令兩人クス〳〵笑ひ、

千彌 イヤ、優待劵とは開場中、いつでも通行の出來る、入場劵の事でござりまする。

子役皆々 榮藏、早くはひらうよ。

榮藏 ハツ、左樣いたしませう。

小旦 それでは今の齒磨の格で、優待劵は只の切符でござりますかナ。(ト家令兩人呆れはて、)

兩人 これは失敬。

トやはり右の鳴物にて、榮藏千彌、子役の手を引き入口へはひる。小旦那みな〳〵見てびつくりしてゐる。こゝへ靴磨靴を仕上げ出て、

靴磨 ヘイ、出來ました。

小旦 ヤア、えら手間がとれたなう。

靴磨 綺麗どころか、ひどい汚れ方で、三足ぶりもかゝりました。

トこれにて小旦那、半左衞門靴磨に一錢渡し穿く。こゝへ廣告小僧ちよこ松後より出て、

廣告 窓の明くのを待つ間、皆さん手を貸して下さい。

田口 よい〳〵〳〵と〆るのかナ。

廣告 イエ、これを皆さんへ撒いて下さい。

田口 ア、野良で種蒔く格でやるべえ。

田△　どうせ弘めとあるからは、種蒔きには違ひない。

トこれにて皆々廣告小僧と共に引札を撒く。バタ／＼にて入口より館内の定夫、博覽會の印袢天、靴にて出て來り、賣場の窓へ出て招く。これにて内より開く。

定夫　一時間程賣出してもようございます。

小旦　オヽ、それでは皆の衆一緒に、

田○　連れ立つて、

皆々　はひられますわえ。

定夫　サア、切符をお買ひなさいよ。

トこれにてバラ／＼と窓の所へゆくゆゑ、小旦那ひよろひよろとして留めるを道具替りの知らせ。

小僧　恐ろしい押しやうぢやわい。

ト廣告小僧は木を打ち、言立をいふ。この模樣はやり唄、大拍子にて道具まはる。

本舞臺、眞中三間方形の屋根、丸竹の押縁。四方松丸太の柱、内一面の七間、上手折廻し、正面とも一面の半窓、褄通り杉皮、竹の押縁、下手三間、杮葺卸しの下家、軒先に『賣茶精撰園』と記せし白金巾に萠黄の暖簾。上手の柱に『神田通新石町。精撰園出店』と記したる簾をかけ、テーブル椅子床几を澤山置き、後ろ一面上野舊本坊庭の中遠見、下手に三尺四方、奈良の經藏の張物。この周りこまよせ。上下に雜木の植込み。屋臺の横手ペンキ塗の丸太。これに萬國のフラグをかけ、すべて美術館園中茶店の體。こゝに境實の妹稻子、東京女生徒のこしらへ、境實、羽織着流し駒下駄、銀行頭取にて、兩人椅子にかゝり、下手に茶屋娘お仙襷がけ、草履、子役の茶屋小女三人、襷がけ草履にて、茶を出してゐる、この模樣賑やかな合方、大拍子にて道具留る。

實　上野の山には珍しいあの神樂の音は、あれはどこのが聞えるのだえ。

お仙　今日は十五日で、權現樣のお神樂が上るのでございませう。

稻子　今日は中が惡込みで、今美術館を出て此處へ來たら、カッとしたせゐか眼暈がして、ふら／＼するやうでございます。

お仙　私共も唯今まで一杯でございましたが、やう／＼今すいたばかりゆゑ、ごゆるりと遊ばしませ、それに眼暈がなさいますなら、大坂町の高木で賣ります淸心丸が

ございますから、五六粒上つては如何でございます。

實　そりやアよい物がある、貰つて服んだがいゝではないか。

お仙　唯今持つて參ります。

ト下手の店へはひる。やはり右の鳴物になり、花道より四幕目の天野賢次郞、洋服ステッキ、令閨お君丸髷官員の令閨のこしらへ、洋傘を持ち、前幕の小吉、羽織着流し、磐井彥太郞會社の支配人、好みのこしらへにて出て來る、すこし後より四幕目の會津の長吉、白髮かつら羽織三尺帶を尻端折り股引、靴にて、皆々を見て不審の思入あつて、考へ／＼來る。皆々直ぐに舞臺へ集り、天野賢次郞夫妻は下手の床几、小吉磐井彥太郞は上手の後へ下りし床几、長吉は下手後へ下りし床几へ裏向きにかゝる。境實、稻子は天野夫妻を見やり、會釋して、

實　又御一緒になりましたナ。

賢次　一つ道ゆゑ、後になり先になりして、行先は落合ひましてございます。

お君　餘程草臥れてまゐりましたが、あなたよくおみ足が何ともございませぬな。

稻子　今朝ほどからまゐつてをりますので、もうがつかりいたしました。

賢次　こゝは美術館の裏手にて、雜沓もしませず、空氣も一番よろしきゆゑ、足休めには適當の場所でござる。

實　筋違ひの萬代軒と、こゝの賣茶は位置がよろしいと見えまして、大分繁昌いたしますナ。

トその內子役の茶屋小女、上下の彥太郞小吉長吉へ茶を出してゐる。お仙天野夫妻へ茶を出し、淸心丸を稻子の側へ湯を添へて持つて來り、

お仙　サア、よろしいだけ召上りませ。

お君　大層御繁昌でございますね。

お仙　お蔭樣で皆樣が、通新石町の精撰園はどこだ／＼とおつしやいまして、いらしつて下さいますので、九時頃からは一杯でございまする。

トやはり右の合方、大拍子をかぶせ、東の假花道より高木原源吉、羽織袴雪駄、以前の學習院生徒春之助、花若に家令千彌、榮藏の兩人附いて出て來り、

源吉　若樣方は、よくお歩きなさいまするナ。

千彌　西館の機械が御意に入つて、餘程時間を費しました。

榮藏　今度讃岐より出品になりました、水難救助の機械は

非常に珍らしいものでございますナ。

源吉　あゝいふ會社が出來ましては、これから、難風に出會ひましても、難船で死ぬものはございませぬ。

春之　又あそこへ行つて掛けようよ。

千彌　唯今風月堂でお休みではございませぬか。

花若　春様と契約したから、向ふで休まんければいかんよ。

榮藏　それでは門並でございますナ。

ト皆々春臺へ來り上手の床几にかける。

賢次　オヽ、これは先生に若様でございますかナ。（ト皆皆會釋なし、）

源吉　唯今中門内でお目にかゝり、御同道いたしました。

榮藏　天野君には、最早種々御覽になりましたかナ。

賢次　唯今美術館を廻つて來ましたが、日本畫の中では、別けて玉章の隅田堤などは、實に美術でござるのに、油繪の出來は、格別ようございますナ。

稻子　昨年巴里の博覽會にも、嘸よい油畫がございましたらうナ。

賢次　これも非常な陳列品でございましたが、今回の油畫はなかなか外國にも負けませぬ。

ト實これを聞き、ちつと思入あつて、

實　わが父なども今日迄、存命いたしをつたなら、この博覽會を見られませうに、詰らん事をいたしました。

賢次　これは君の御親父も又我が兄の八郎も、御同様でござるのは、御一新の折當山にて討死せずば、聖明のこの結構な世の中に、存命いたしをられませうと、返らぬ事を思ひ出しては、毎度懷舊の思ひをいたしまする。

トこれもちつと思入。この時裏向きにて聞いてゐたる會津の長吉、前な向き下手へ出て、

長吉　天野の若旦那樣、お嬢樣、御機嫌よろしうございますか。

トこれにて賢次郎お君思ひ出せぬこなしにて、

賢次　ア、お前はどなたでござつたかナ。

長吉　ヘイ、二昔餘も經ちますから、御尤もでございますが、私は新門の子分で、會津の長吉と申しまして、お屋敷へは頭と一緒に、仕事にまゐつた者でございます。

賢次　オヽ、さういはるゝと思ひ出す、成程さうであつたか、マア此方へ掛けるがよい。

ト合方になり、長吉下手へかけ、

長吉　久し振りでお目にかゝりましたが、若旦那も大層立派におなりなさいましたなナ。

實次　瓦解の砌りは兄弟が、心一致いたさぬゆゑ、兄八郎は上野へ籠り、僕は洋行いたせしゆゑ、親父はそれが元となり、あの年七月この世を去り、唯今妹が酒井の次男を養子となして相續いたすが、今日となつて見ると、先づ我が方が勝利ぢやわえ。

ト これを聞き長吉考へ、

長吉　その酒井樣とおつしやりますのは、もしや彰義隊の隊長をなされました、酒井宰輔樣ではござりませぬか。

實　いかにも、その宰輔がわしは惣領の忰にて、當時は或る銀行の副頭取をいたしてをるのぢや。

長吉　へェ、左樣でござりますか、それはよい所でお目に掛りました、實は疾より酒井樣のお身内に逢ひたいと心掛けてをつた所、こんな幸ひはござりませぬ。

實　そりや、どういふ譯でござりますナ。（ト合方キッパリとなり）

長吉　誰でも知つてはをります事だが、今年で二十三年後慶應四年五月十五日、朝ツぱらから戰が始まり、今でいやア十時頃、山門内で彰義隊の隊長をなすつた酒井樣の體へ二發彈があたり、ぶツ倒れてお出なすつた所へ、わつちが駈附けましたが、隊長のおつしやるには、所詮もういかねえから首を切つて埋めてくれと、飛んでもねえ事を言ひつかり、どう仕ようかと思ふ内、ヒウ〳〵ヒウヒウ鐵砲丸が天窓の上を過ぎるので、うか〳〵してはゐられませぬから、思ひ切つて首を切り、命から〴〵根岸へ逃げ、臥龍隊の本陣になつた、源光寺の墓所へ駈込みやうやう埋めは埋めましたが、どうかして身内の衆にお知らせ申して上げてえと、思つてゐた所念が屆き、こんな悦ばしい事はござりませぬ。

實　そんならこなたが親父の首級を、源光寺へ埋めて下すつたとか、知らぬ事とてこれまでは、山王臺へ詣りしばかり、何處の土とも知らざりしが、これにてやう〳〵佛事も營め、こんな幸ひはござりませぬ。（トこゝへ上手の小吉上手へ出て）

小吉　オイ、長兄イ。久しく逢はなかつたナ。

長吉　オヽ、確かお前は瓦解時分、手子をしてゐた、何とか言つた人だなう。

小吉　エヽ、脊中に雨乞小町を彫つて、それが渾名の雨乞小吉。上野の時はお互ひに、こわえ目に遭つたわえ。

長吉　成程、お前もあの時にやア、酒井樣の討死に、かゝりあつた人だの。

小吉　斬り合つた所ぢやアねえ、お前が首を持つて逃げた後で、死骸を片附けたが、二三日經つて一つにして、葬つたといふ噂だつたが、今日となつて見ると、大隅樣のお骸は全く山王臺の供養塔へ、納まつたに違えねえ。

賢　スリヤ親父の亡骸を匿してくれしか、これにて測らず全體まとまり、こんな目出たい事はない。

春之　上野の戰の顛末は、讀本の十草に詳しく出て讀んではゐるが、先生もあの時は東臺にゐましたかえ。

榮藏　おいでどころではござりませぬ。日頃御勉強の眞影流、極意を現はされたのでござりまする。

源吉　イヤ、わしはあの時は少しも山にはをりませぬ、さる方の御守護いたして、根岸へ落ちたゞけでござります。

松太　先生、嘘言をいひ給ふな。本日上野へ來てお出での公衆は、皆承知してゐますよ。

源吉　ア、モシ／＼、そんな事いうてはなりませぬぞ。

ト子役松太郎を留める。合方キツパリとなり、下手より田宮の姉娘米子、丸髷士族の女房のこしらへ、同じく妹娘重子、束髪好みのこしらへ、洋傘をつき、下女お文附いて出て來り、

下女　嬢樣、こゝがよろしうござりまする。（ト下手床几へかける。天野の令閨お君見附けて、）

お君　田宮樣、よく御姉妹でお出掛けでござりましたな。

（トこれにて互ひに會釋なし、）

米子　やう／＼のことで、西館だけ巡つて、これへ、

三人　參りました。

トこの内長吉小吉は米子重子を見やり、顏見合せ思入あつて、

長吉　モシ旦那、今田宮樣とおつしやいましたは、もしやあなた方のお仲間であつた、新八郞樣ではござりませぬか。

賢次　いかにも、臥龍隊の隊長をされた、田宮新八郞の令孃ぢや。

長吉　エヽ、左樣でござりましたか。それぢやア矢張りやつてしまつたお仲間だ。

ト腹を切る眞似をする。

小吉　此奴ア飛んだ博覽會になつたナ。（ト小吉も愁ひの思入。）

米子　こゝにおいでのお二人も、父を御存じと見えまする。

小吉　ヘイ、戰爭の時、二人ながら上野の山にをりまして田宮樣にもお心安くいたしました。

重子　スリヤお前さんが父上を御存じでござりましたか、あの後生れし私ゆゑ、お顔さへ見る事出來ず、悔しい事をいたしました。

米子　私は居りましたが、まだ五歳でござりましたから、存じませぬも同じ事、今承はると、夢のやうに思ひます。

ト愁ひの思入。茶屋娘お仙小女に指圖して、始終茶を出す事。

長吉　さうして天野の若旦那樣は、あれからどちらへいらつしやいました。

ト合方キツパリとなり、

賢次　戰爭前父上に、長のあひだ暇を貰ひ、わが志願は朝臣ゆゑ、一度洋行を思ひ立ち、神奈川奉行に緣故あるを、幸ひにして彼地へ赴き、それより長崎に滯在中、東臺の戰爭ありて、兄が身の上案じをつたが、樣子聞くさへ上への恐れ、その内佛蘭西の飛脚船にてマルセールまで船でまゐり、巴里に於て十年間、機械學を勉强し、滿十二年にて歸國なし、直きに官へ奉職の上、妹が身の上父の年回、何や彼や片附けて、翌年又々洋行を、上より仰せつかりしゆゑ、再び歐羅巴へまゐり、今度は萬國の機械類を悉く一覽なし、昨年佛の博覽會へ臨み、それより歸國の途につきしが、僕は後年の時機を計り、洋行せしばかりに、今日こゝに逢ひがたき、開明の世に逢はるゝも、誠に心一つでござるテ。

長吉　左樣ならお兄いさんのお亡りの事は、お知りなさいませんか。

賢次　長崎にゐる内に、あの秋兄は本所にて捕縛の上、處刑を受けしと承はつたのみなるが、歸國後何れで聞き合せても、一向に樣子も分らず、又存じをる者あつても罪人ゆゑに遠慮して、樣子を明かしくれぬので、佛事はすれど夢まぼろし、本意なく思ひをるばかりぢや。

小吉　それについて私は、天野樣には顏向けの出來ない事がござりまする、外の事ではござりませぬが、屋敷出入りも上つたりで、魚屋になつて本所を、商ひして歩く内、思はず出逢つた八郎樣、ヤ旦那樣とうつかり言つたを、直ぐに手先の耳になり、其時到頭縛られなすつたが、あの時お呼び申さなけりやア、捕まるまいと思ひますと、實にそれから神經で、忘れた事はござりませぬが、其後わつちも新橋の濱の家の厄介で、待合を出してをりますが、唯氣になるのはこの一件、お兄さんの代り天野樣、

どうぞ料簡して下さりませ。
賢次　その濟まぬと思ふは私、兄は朝敵の一人なり、其方が呼んだは政府へ對し、却つて功になる事ゆゑ、禮こそ申せ、恨みは致さぬ。
小吉　アヽ、さうおつしやいますと、猶々面目なうござりまする。（ト俯向く。）
長吉　しかしあれから西丸下の、糺問局へ引かれなすつて若旦那が死ぬ時は、立派なものでござりましたよ。
賢次　ナニ、兄が最期を存じてをるとナ。
長吉　ヘイ、よく存じてをります。
賢次　それは存じがけない事だ、どうぞ話して聞かしてくりやれ。
ト替つた合方になり、
長吉　實はその時私も德川樣のお爲にした、あつぱれ武士を仕置にするかと、癪に障つてたまりませんから、前から化けて草刈となり、其日も屋敷へはひつてゐて、吟味所の隙見をして、盗人同樣扱つたら、命懸けで一番飛込み、片端から毆り倒し、旦那を逃がす料簡で手ぐすね引いてをりますと、天野樣へ縄をも掛けず、陣羽織の官軍が丁寧に連れて來て、天野殿、後々へ申殘さるゝ事あらば、立合の者より傳へると、手を突かねえばかりにいひましたぜ、わつちも思惑が違つたから、少し氣が弛んだのさ、すると天野樣も偉いものだ、錦旗へ對し奉り、犯罪人の身分といたして、何の申し置く事はござりませぬ、唯願はくば武士らしく、切腹仰せ附けられたしと、これも丁寧にいひなさると、官軍も偉えね、火附盗賊とは異り、大和魂磨きし御身、切腹の儀承知いたしたといひました。（ト眼を瞑つていひ、氣をかへ）
そこでわつちは、すつかり溜飲が下つたね、すると旦那が腹切刀をお持ちなすつて、辭世をお詠みなさいました。（ト考へながら）「國のため君に捧げし命こそ、けふぞ」（ト考へながら）「けふぞ〳〵。」（ト考へ出せぬこなしにて）
悔しいが、歌なんざあ嫌ひだのに、年をとつて耄碌をしたと見えて、忘れてしめえました、何でもそんな事だつた、それから突込んで、見事にお切りなさいました、それのみならず咽笛まで搔切つて、介錯人が首を切りましたが、天野樣もえらいが、その大切に扱つた役人衆もえらいもので、それからわつちも河岸をかへ、天朝贔屓になりましたよ。

トこの時上手の後にゐたる磐井彦太郎前へ出て、

彦太　思はずこゝで天野樣の、お亡りの事を承はりましたが、それにつけて天野樣へお詫を願ふものがござります。

賢次　ナニ、わしにかナ。

彦太　ヘイ、私は牛皮會社の支配人でございますが、社の内に皮を晒す男で、傳次と申します者が、心得違ひで御一新時分、天野樣の密告をして、それがため本所で捕縛になつたと申す事、今日となつて見るとお氣の毒でなりませぬから、もし御身内でも知れた時は、お詫をしたいと申してをりますが、測らず此處で承はるも、これも不思議な御緣といふもの、どうぞお位牌へその男のお詫をなすつて下さりませ。

賢次　それは感心な者でござるナ。態々其身の非を上げて詫びてくれとは性は善なり、悅びこそすれ恨みませぬから、よく本人にいつて下さい。

彦太　左樣なら、お聞濟み下さりますとか。それはさぞ悅びませうわえ。

トこの前よき程に、下手茶店の横手へ越前屋佐兵衞、更けたる拵へ、羽織着流し、駒下駄にて腰をかけ、茶を呑みゐて、この時前へ出て、

佐兵　高木原樣、天野樣、暫くお目にかゝりませぬが、御機嫌よろしうござりますナ。

源吉　オヽ、竹町の湯屋の御亭主か。マア此方へかけるがよい。

佐兵　測らず此處へ掛けまして、あなた方のお話を承はつて、思はずも貰ひ淚をこぼしました。

賢次　竹町の湯屋と申すは、上野の御用を足した、越前屋佐兵衞さんかナ。

佐兵　ヘイ、戰爭の時三河島で、八郎樣にお別れ申し、御出家方のお供して奧州まで參りました、越前屋佐兵衞でございます。

源吉　川端の治右衞門の前で、百姓姿で別れたきり、泰平になるまで逢はなかつたが、實にえらかつたノ。

佐兵　あの晩は川端の治右衞門の裏手より、田船で夜半にあそこを出て、上尾久の長兵衞方まで腰切りはひつて押してまゐりましたが、それから市ケ谷のコブ寺以來鐵砲洲の松坂屋から、榎本樣の蒸氣船をお送り申して、其後に奧州へ參りまして御機嫌を伺つた時、御前樣から御褒美に下さりました、お杖、お笠、お脚絆は、今に家の寶

にして、神様のやうにしてをります。

彦太　とてものことに、お守りにある脚絆を、お目におかけなさいナ。

佐兵　おゝ、さうぢや、皆樣、こんなに大事にしてをりまする、（ト懷より腹守りを出し、内より四幕目に遣ひし白の脚絆を出し、）頂戴いたしましたる脚絆、有難いことでござりますナ。

ト出す、賢次郎受取りて押しいたゞき、これにて皆々辭儀を爲し、思入あつて、

賢次　ア、、それはよく大切にしてござるナ。

彦太　かく目前に其時の、品を見るのも盡せぬ奇縁。

賢次　けふは五月十五日、御一新より算ふれば、丁度二十三年忌。

源吉　みな縁のある人々が、今日こゝへ集まりしも、

實　開運進歩を内國の、諸人に知らす博覽會。

お君　第一第二第三と、その會場の度毎に、

米子　機械、織物、書畫、陶器、

重子　木材、塗物、瀬戸物、

稻子　以前に優りし陳列に、

千彌　外國品にも負けぬやう、

榮藏　年々進むその證據は、

佐兵　湯屋まで近頃勉強なして、煉瓦家屋の御布達には、

小吉　不潔をかくす市場の目かくし、

彦太　實にこれ程有難い、

長吉　結構な世に出逢ふといふは、

佐兵　御同然に長生は、

彦太　したいものでござりますナ。（ト皆々よろしく思入）

佐兵　唯分らないのはこなたの髷だが、なぜ附けてゐなさるのだえ。

長吉　こりや二十三年忌の、この五月十五日まで、彰義隊へ手向のちよん髷、濟んだら切つてしまひます。

賢次　流石は會津の長吉殿、そこらの義氣は、

皆々　感心しました。

長吉　旦那、年はとつても若い者に、まだ負ける氣はござりませんから、これから百迄生延びて、國民兵に出る積りだ。

千彌　こりやア天窓とは大違ひ、

榮藏　誠のこれが、

皆々　開化人ぢや。

ト　バタ／＼になり、上手より以前の定夫、鈴を振りな

定夫　諸君、閉場時間になりまする。御退場下さい。
ト言捨てゝ下手へはひる。バタ〳〵にて上手より慕あきの田舎の小旦那半左衛門、キヨロ〳〵して出て来る。後より嫁泣きながら附いて出て、
小旦　出ろ〳〵と言はッせつても、出所が一向分りましねえ。
嫁　出られなかつたらどうしべえ。(トオイ〳〵泣く。)
賢次　何事かと存じたら、出所が知れぬといはるゝのか。
小旦　ハイ、途方に暮れてをりまする。
嫁　ハア〳〵〳〵。(トしきりに泣く。)
佐兵　皆さん。(ト両人に指をさすを木の頭。)飛んだ開化人でござりますね。
トこの引張りよろしく、はやり唄、鈴の音にて、
ひやうし幕
走り出て来り、

皐月晴上野朝風（終り）

御濱御成に御船手の爭論終に遺恨となり空しく討れし内宮の娘おかよは河竹の流れに沈み假宅にて同じ勤の紫と色香を競ふ物言ふ花盛り久喜で見し夢が盡ぬ緣しに名乘り合ふ梅田も師匠の茂々の井に暫し別れの暇乞妻のおわかや娘のおよし下男金六下女おむら惜む名殘に袖濡らす其朝露の蜊河岸再び歸る京橋の酒席で出合ふ櫻井が故主の仇と白刄の一腰見事討得し腕前に鳶の銀次に大工の庄藏廻る報いと萬字屋の主人藤吉松田の女房お君も倶に證人に訴へ出し一條を取脚色たる二番目狂言

松名高紅葉京橋

四幕



一刀流成田掛額（松田の仇討＝三幕）

清元連中

序幕

深川成田開帳の場
大川御座御成の場
久喜萬字假宅の場
南新堀乙女橋の場

役名——茂々之井門人梅田雅樂介。將軍家慶公。水主同心内宮新太郎。茂々之井縫殿。大工赤貝の伊太郎。御小姓山名壹岐守。同大山兵部少輔。御小納戸稲本大隅守。同越川一學。成田講中大勢。水主、劍術遣ひ櫻井武雄實は水主同心村田小八。久喜萬字屋藤吉。鳶頭分銅銀次、小頭分銅藤次。久喜の抱妓、かしく實は内宮の娘おかよ、御小姓幾江。大御臺睦の方。老女濱の江。中老沖江。久喜の抱妓紫。同新造鳥人。茂々之井の下女お松。引手茶屋女房おくら等。

一番目太閤記の幕引き付けると、打込みになり、此上に成田山開帳の積み物の道具幕を引き、はやり唄鈴の音になり、東西の揚幕より三階二階の役者總出にて、思ひ／＼の講中旗を立て、其外提げ實、賣出しの弘めものなどの仕出し出て來り、上下へ別れてはひる。

本舞臺一面の平舞臺、正面振よき松の大樹、此後ろ建仁寺垣。市村座奉納地所といふ建札。下手に家根附の茶店、富ヶ岡といふ掛行燈、軒口に講中の暖簾、同じく提灯を掛け、竹に結びつけし納め手拭を澤山出し、茶店の正面葭簀張り、下手青簾をかけ、是に賤ヶ嶽七本槍讀切、田邊南龍、一の鳥居定席と記したる寄席のびらを掛け、此蔭出し臺に小竈茶釜薬罐をかけ、此脇に茶碗を載せし棚を置き、手桶其外茶道具よろしく飾り置き、上の方見世物小屋莚張りにて見切り、すべて深川八幡境内の體。爰に小菅講中といふ小旗を持ちし講中四人、青山講中といふ小旗を持ちし講中四人喧嘩をしてゐる。小頭分銅藤次若

衆皆腹掛股引派手な着附にて尻端折草履、鳶の小頭のこしらへにて、芳松金太同じく鳶の者のこしらへにて、三人此中へはひり、双方を止めてゐる。後ろに京橋講中の人數立ち掛り見てゐる。やはり流行唄鈴の音にて幕開く。

小〇　厭だ／＼、彼奴等にこめられちやア村の恥だ。
小四　料簡なんねえ／＼。
芳松　是程俺達が留めるのに料簡がならねえのか。
小四　ア、料簡なんねえ／＼。
金太　さうして相手のお前達も、矢張り料簡がならねえかえ。
青〇　イエ私共の方はお前さん方が、口を利いて下さいますから、
青四　よろしくお任せ申します。
榮次　相手の衆は溫順しく、留めにはひつたわつち等に任せろと言ひなさるが、お前方はどうあつても料簡がならねえかえ。
小〇　是が日本橋か京橋の講中なら料簡しますが。
小△　山の手から來た講中に、後から來て乘越されちやア、
小〇　村の名折れになりますから、假令お前等が口を利いても、
小口　後へ歸さにやア料簡なんねえ。
芳松　それぢやア是程口を利いても、料簡がならねえのか。
金太　料簡ならざア料簡するねえ、これから先は此方が相手だ。（ト金太立掛るを榮次留めて、）
榮次　コレ二人共靜かにしねえか。人の喧嘩を買つて出ちやア、講中の衆へ對して濟まねえ。
芳松　それだと言つて彼奴等が、
金太　分らねえ事を言やアがるから。
榮次　エ、待てと言つたら待たねえか。（トキツといふ。是にて兩人後へ下る。榮次思入あつて、）お前方は小僧と思つて俺を莫迦にするだらうが、親父は銀座の銀次といつて、鬼に緣ある鐵棒の、音に響いた鳶頭、今日は親父の名代にお迎ひに來た分銅榮次、一番わつちの顏を立つて、料簡して呉んなさらねえか。
京一　コレ／＼お前方も好い加減に、仲人に任して料簡しねえか。
二　折れる時に折れねえと、飛んだ喧嘩に枝が咲き。
三　どんな間違ひにならうも知れねえ、若しさうなつたら第一に。

四　不動樣へ濟まねえから、爰は頭に任せなせえ。
小〇　成程お前等の言ふ通り、不動樣へ濟まねえ譯だ。
小四　頭へお任せ申すから、よいやうにして、
小四　下さりませ。
芳松　相手の衆も承知かえ。
青〇　此方は頭の顔を立て、さつきからお任せ、
青四　申しました。
榮次　爰で笑つてお呉んなせえ。モシ皆さん、手を貸して下さいまし。
皆々　合點だ〳〵。（ト小頭はヤアと聲をかけ、皆々手を打つ。）
小〇　飛んだ事から皆さんの、
青〇　御厄介になりまして、
皆々　有難うございます。
京一　お前方は遠方だから少しも早く、
京也　お出なさい。
小〇　それぢやア皆さん。
皆々　これでお別れ申します。（ト流行唄の合方、鈴の音にて、上下へ小菅と青山の講中はひる。）
芳松　いつも成田のお開帳は、お着きに大層人が出るが、今日は餘計に出たやうだ。
金太　魚河岸から小網町を、やつと通つて深川へ來ると、芋を揉むやうだつた。
京◡　そりやアさうと、家の頭は今日はお迎ひに來なさらないか。
榮次　今朝早く出ましたが、組合の者と一緒ゆゑ、今に後から參ります。
京×　今日此やうに人の出たも、一つは假宅のある故だ。
京皆　それぢやア小頭、
芳金　ドレ、御一緒に參りませう。
ト流行唄鈴の音にて、講中を先に榮次芳松金太上手へはひる。後同じく流行唄、八幡の大拍子になり、花道よりお由、島田鬘紋附の着附雪踏にて、桃之井の娘のこしらへ、下女お松縞の着附雪踏にて、娘お由に日傘を差しかけ、おむら銀杏髷縞の着附雪踏にて小間使のこしらへ、金六ぼつと鬘縞の着附、草履にて下男のこしらへにて出て來り、花道へ留り、
お由　コレ松や、大層な御參詣で御門の際で人に押され、どうせうかと思うたわいの。
お松　あなたにお怪我をおさせ申すまいと、誠に心配を致

しましたが、もう爰へ參りますれば氣遣ひはござりませぬ。
お由 今日不動樣がお有たので、奉納の庭などが餘程出來たやうおやわいの。
お松 もう五日經ちますと、お開帳が初まりますから、奉納物を見物ながらお詣りに參りませう。
金六 わしは深川は初めてだが、何時もこんな賑かな所かえ。
お松 イエ／＼不斷は斯うではないが、去年の地震で吉原の假宅がある上に、成田山の御開帳で、それでこんなに賑ふのぢやわいな
むら 内の村で網河岸の厄神樣へ講中が出て來たから、今日のお迎ひが立派だつた。
お松 向ふに茶店がござりますから、あれへ參つて休みませうわいな。
ト右の鳴物にて皆々舞臺へ來る。茶店簾の蔭よりおみい前垂駒下駄、茶屋女の拵へにて出て來り。
みつ これはいらつしやいまし、これへお掛け遊ばしませ。
お松 大層な人でござりますな。
みつ 今し方まで、往來が出來ませぬ程でござりました。

金六 姐さん、茶でも水でも早く呉れさつせえ。
むら おらも咽が乾いてなんねえ。
みつ ハイ／＼、唯今差上げます。
ト茶屋娘おみつ簾の蔭へはひる。皆々床几へ掛ける。三味線入り大拍子になり、上手より門弟清六大六源彌仁太郎、いづれも馬乘袴大小劍術門弟のこしらへ、二升樽を下げ少し酒に醉ひたる思入にて出て來り、お由を見て、
清六 今日は常になく酩酊致した、爰で一寸休んで參らう。
大六 成程これは休むべしだ。（ト清六態とお由の側へ腰を掛ける。）
お松 此方へお出なされませ。
トお由の手を取り下手へ行かうとする時、清六足を前へ出す。お由それへ躓き、
ア、お危うござります。
清六 ア、痛い／＼。（ト清六仰山に言ふ。）
大六 大和田氏、如何召された。
清六 是なる娘が足を踏んで、ア、痛い／＼。
お由 イエ／＼私が足などを、
お松 モシ。（トお松お由の言ふを留める。）

大六　武士たる者の足を踏むとは。
源彌　さりとは失禮千萬な、
仁太　こりや此儘には致されぬ。
　トキツと言ふ。お由お松へ縋る後ろへ圍ふ。小間使おむらキツとなつて、
むら　そりやアお前等がよくねえよ。お嬢様はよく氣を付けて歩かつしやるが、皆様は醉つてござらつしやるではないか、
お松　コレ／＼おむらどん、何を言はしやんす。
むら　それだつて餘り無理言はつしやるから。
お松　エヽ何だねえ。（トお松おむらを宥め、）人混ゆゑについ粗相を致しましてござります、御免なされて下さりませ。
清六　イヤ／＼許されぬ／＼、足の指が切れるかと思ふ程に踏まれたからは、詞の詫では赦されぬ。
大六　此方の足を踏んだ程、娘の足を踏返し、
源彌　指の骨を踏折つて、歩けぬやうにして呉れう。
仁太　さうした事なら、人の足を踏んだ痛さが知れるであらう。
お松　皆様方のお腹立は御尤ではござりますが、御覽の通り年の行かぬ娘御ゆゑ、どうか御勘辨下さりましてお赦しなされて下さりませ。
清六　イヤ／＼赦されぬ、此儘勘辨致しては、武士たる者の耻辱ゆゑ、赦されぬからさう思へ。
お松　スリヤどのやうに、
皆々　申上げても、
大六　エヽ聞く耳はないわい。（トこれにて兩人困る。金六おづ／＼前へ出て、）
金六　ヘイ／＼御免なされて下さりませ。
源彌　見れば爰へおづ／＼と蟇を見るやうに、
仁太　這ひ出して來た手前は何だ。
金六　ヘイ、わしは下男でござりますが、今わし共の娘御が足を踏んだと仰有りますが、何處を踏みましてござりますか、泥が着いてをりませぬな。
清六　雪駄の事ゆゑ泥は着かぬが、コレ此足を踏んだのだ。（ト清六金六の鼻の先へ足を突き出す。）
むら　アラマア嘘べえ吐かつしやる、何處も何ともありもしねえ癖に。
金太　コレサ何言ふだえ。（トおむらを金太退けながら、）お前様がさう仰言れば、よもや嘘でもありますまい。わ

しらがお詫びを致しますから、御免なすつて下せえまし
清六　イヤ／＼赦す事はならぬ。足を踏んだ此娘をこれから一緒に連れて行き、
大六　思ふ存分に四人で。
兩人　エ。(ト兩人びつくりする。)
源彌　イヤ何も手酷い事はせぬ。
仁太　酌をして貰ひたいのだ。
金六　主人からわし共が預かつて來た此娘御、連れて行くと仰言つてもお渡し申す事はなりませぬ。
大六　エヽしち諄い、ならぬといふに。
ト清六扇にて金六の眉間を打つ。
金六　コリヤわしを打たしやつたナ。
清六　武士に向つて過言をなすから、打つたが如何した。
金六　打たれたからは。(ト金六立掛るをお松留めて、)
お松　アコレ金六殿、お前が腹を立つてはならぬ。
金六　それだと言つて。
お松　旦那樣のお名が出るゆゑ、おつと堪へて下さんせいな。(トお松金六をちつと留める、金六是非なく留まる。)
大六　サア各々、お娘を早く連れて參らう。
源彌
仁太　それがよい／＼。(ト源彌仁太郎お由の手を取り引立てる。)
お由　アレエ。
お松　イエ／＼お孃樣は渡されませぬ。
大六　さう言ふ手前も一緒に來い。(ト大六お松を引立てる。)
金六　コリヤソウわしが命を捨てゝも。(ト立ち掛るを清六金六を突倒し、)
清六　邪魔のない内、
三人　少しも早く。
ト早き大拍子になり、大和田清六山倉大六娘を引立て習志野源彌下女お松を引立て花道へ行きかゝる。金六是を留めるを、芝山仁太郎突廻して蹴倒す。茶屋娘おみつ捨ゼリフにて氣を揉む。小間使おむらは泣きながら附いてゆく。此内花道より茂々之井舜藏好みの鬘、羽織大小雪踏劍術先生のこしらへにて出て來り、花道にて行き合ひ、突當りて、
清六　ヤイ／＼晝日中突當り、眼があつても見えぬのか。
大六　無禮な奴め、氣を附けて通れ。
お由　ヤア父樣がお出遊ばした。
お松　よい所でござりましたな。

仁太　猶はずうと引立て參らう。
ト是にて皆々行かうとするを、舜藏扇にて女形兩人を持つたる侍の手を拂ふ。是にて立廻りながら舞臺へ來り、四人舜藏を取卷き、
清六　ヤア手向ひ致さば用捨はせぬ、姓名名乘つて、
四人　勝負致せ。
舜藏　名乘れとあれば申し聞かせん、我は京橋釼河岸にて劍術の指南致す、茂々之井舜藏と申す者ぢや。
清六　エヽ、そんなら貴殿は茂々之井殿か。
大六　ソレ各々。
ト兩人上下より胸倉を取る。是を舜藏拂ふ。後の兩人切つてかゝるを一寸立廻つて、舜藏扇子にて四人を打据ゑる。是にて叶はず、上下へ逃げてはひる。皆々ほつと思入あつて、
お松　よい所へ殿樣がお出下さりましたので、助かりましてござりまする。
金六　おつぼつてやらうと思つても、若し切られでもすると大變と、手に汗を握りました。
むら　わしは若し叶はなかつたら、此度のお開帳へ出る姿こがしの大女でも頼んでと、手具脛引いてをりましたが殿樣がござらしつたので、ホンと引裂かれた時は、村にゐて角力取して押掛つてやつた時より好い心持でござりました。
舜藏　生兵法の侍共、大分諸所を徘徊なし、町人に難儀をかけるとは憎むべき奴ぢやわえ。
お松　ほんに左樣でござりまする、
舜藏　由、如何にも群集致すから、又朝の内參詣をするとして、今日は早く歸るがよい。
お由　もう／＼是に懲りまして、早々歸宅致しまする。
金六　殿樣はまだお歸りにはなりませぬかな。
舜藏　是より木場の鹿島へ參る約束を致しあれば、介意はず先へ歸るがよい。
お松　どうか道にて今の人に、出逢はぬやうにしたいものだが、心配でなりませぬ。
ト此時下手へ薄明きの小頭と芳松金太出て來り、
芳松　モシ、そのお話の侍は、四人連れではござりませぬか。
お松　オヽ、頭の所の皆さんも、御存じでござりますかえ、其四人連れでござります。
芳松　それぢやア今橋の方へ、曲つた奴に違えねえ。

舜藏　丁度いゝ所で逢つた。歸宅致すなら、是を送つて歸つて吳りやれ。

金太　よい所でお目にかゝりましたから、氣を付けながらお送り申しませう。

榮次　ナアニ彼奴等が力んだつて、高の知れた木端野郎、喧嘩をすりやア負けやアしねえ。

むら　小頭は威勢がよくつて、火事へ行く所を見ると、おらア仕事師さんは大好きだよ。

芳松　小頭がいゝならば、お前を女房に世話をしませうか。

むら　そりやア有難え事たが、こんなに人混の中でそんな事を言はれると、皆樣におらこツ恥しいや。

ト小間使おむらは顏をかくす。

お松　コレサ、御主人の前で何でござんすねえ。

金太　イヤサ、中々此子は愛嬌者だな。(ト此時本釣鐘のちやん〳〵を打込む。茂々之井思入あつて。)

舜藏　ム、、早や勤行の知らせの鐘。

お由　暮れぬ内に少しも早う、

金太　此樂達を力にして、

お松　お供致して、

皆々　參りまする。(ト茂々之井舜藏あたりへ思入あつて、)

舜藏　若し込合ふなら、

ト立上る木の頭。

船で行くがよいぞ。

ト此模樣流行唄、見世物の鳴物にて、　　ひやうし　幕

ト幕引付けると、双盤見世物の鳴物にてつなぎ、直ぐに引返す。

本舞臺一面の波幕。波の音にて幕あく。と波の音打上げ次第になり、知らせにつき波幕切つて落す。本舞臺向ふ三方鏡通り上總房州海岸の遠見、上手に御濱御殿の御庭を見たる切出しの中遠見。平舞臺一面穩かなる波布を敷詰め、眞中に朱塗の御座船、黒塗の欄干、此上金葵の彫物。軒先へ紫地へ白の葵を染め拔きし幕を張り、此內船の前の方一と間、上段揚疊、此下手二た間に仕切り、ずつと艫の方二紺三白の幕を張り、此內に白地へ葵の御紋を朱にて染拔きし幟を建て、軸を上手にして据ゑある。すべてお召船大川御座船の體。上手上段の眞中に將軍家慶公、無地の割羽織中小紋の着附、義經袴一本差にて褥の

上に住ひ、此左右に御小姓山名壹岐守大山兵部少輔御小納戸稻本大隅守越川一學、何れも割羽織、將軍と一樣のなり一寸差にて住ひ、次の間の眞中に大御臺睦の方、ふきわ蔓縫ひ模樣の襠にて褥の上に住ひ此左右に老女濱の江更けたる鬘、襠、中老沖江、咲島ひとえ、同じなりにて住ひ、御臺の下手に御小姓幾江文金高島田振袖、此側に子役の見附添ひ、此次の間に御坊主三人割羽織野半纒股引一本差にて住ひ船の表に鵜飼周玄、割羽織野半纒股引にて、前に櫂を置き住ひ、此見得よろしく道具納る。と鼓の入りし靜かなる合方になり、

壹岐　治まる御代の時津風、波靜かなる青海原。
兵部　見渡す御濱の御庭内、いと青々たる秋の色。
大隅　中に彩る紅葉に、山水揃ひし御座船にて、
一學　後ろは房總二ヶ國を、一と目に澪の印まで、
壹岐　ことなき詠めに、
四人　ござりまする。
家慶　今日急の思ひ立に、龍の口より乘船せしが、海は疊を敷いたる如く、かく大漁のあると言ふは、又一入の樂しみぢやの。

睦　永代橋を出でし時、御先供の漁船が一時に網をうちしは見事なものであつたわいの。
濱の　あれは佃の六人船にて、御濱御殿の沖合まで、寄せ打にござりました。
沖江　漁る魚も御納屋にて、生洲へ取置き御濱まで、持參致すと申すゆゑ、
咲島　御上陸の上は、御庭の御茶屋へ御休息の節、献上致すを、
一重　お側で拜見致しまするは、御供致せし身の冥加。
幾江　いと珍しく、
皆々　存じまする。
睦　今日思はぬ幸ひは、是までつひに例なき、女子に御成のお許し出でしは、此身にとつて冥加なり。幸ひ幾江はお慰みに、上へ舞を御覽に入れよ。
濱江　有難き御詞、お受け致すでござります。（ト辭儀をなして下手へ向ひ）幾江殿、支度せられよ。
幾江　ハア、。
ト合方キツパリとなり、此時下手より坊主○後ろの手摺の中を通り、壹岐等の側へ來り、

○　申上げさする。唯今御納屋より獻上の生魚、はしけ船にて持參致しましたが、如何計らひませうな。

ト是にて御小納戶壹岐守上手へ向ひ、

壹岐　御庭の御茶屋へ廻しませうや、如何計らひませうな。

家慶　いと海中も穩かゆゑ暫時是にて休らへば、持參の生魚是へ持て。

壹岐　畏つてござります。（ト坊主に向ひ、）是へ。

○　ハツ。

ト下手へはひり、やはり右の合方にて○△□の坊主三人にて手の附きし小判形の桶へ魚の入りしを一桶宛持ち出て來り、將軍の前へ並べ、上下の緣の內へ平伏する。皆々是を見遣り、將軍悅ばしきこなしにて、

家慶　いつに替らず今日も、殊の外なる大漁であつたの。

一學　ソレ、御奧へも御覽に入れよ。

坊主　ハ、ア。（ト坊主三人少し下寄りへ桶を寄せる。是にて坊主三人桶の內を見て、）

○　イヤ捕れましたナア〳〵。鯛黑鯛ふつこ鰈こちにせいご、オ、あなごもぬら〳〵間にをります。（ト此內坊主兩人外の桶より一人は黑鯛、一人は鰈を、跳ねるのをやうやうに持つて、）

□　イヤ是はいかな事〳〵、此力の恐しさ。イヤどつこいしよ、さうはならぬ〳〵。

△　鰈はぬめりのござるものゆゑ イヤどつこい辷つたか。（ト鰈の跳ね飛ぶのをやう〳〵に押へ附け、）イヤモウぺた〳〵してはどうもならん、ア、是にはほとんと辟易ぢや。

○　ト此內坊主小蛸の頭を持つて釣し上げ、是に蛸がをりまする、此近海にて蛸はいと珍しき獲物、コリヤ一段とお慰みになりまする。一寸足を數へ、やはり足は八本ござりまする、如何にも左樣でござりますな、イヤ鯛鰈などに引替へ、殊の外溫順しう致しをりますわえ。

ト此內持つたる指取れぬこなし。

ア、痛々々々、是はいかな事、吸付かれました。ア、痛痛、イヤ吸込む事〳〵。ア、指が千切れるやうぢや、是はいかな事。

ト手を振れども蛸取れぬに當惑して手を振ふ。是を坊主□△介抱しながら慌てゝ三人下手へはひる。皆々是を見て笑ふ。

沖江　用意よくば、御上覧に備へられよ。
幾江　ハ、ア。
ト此内小姓幾江金烏帽子薄衣の直垂緋の袴金の幣束を腰に差し、静の拵らへにて中啓を持ち、前へ出て下にゐる。是を下座の地へ取る。
へ晴れ渡る空も翠に常磐なる、松吹く風も穏かに、八重の潮路も浪立たで、静けき御代に民安く、君が恵みを打仰ぐ、日影のどかに真帆片帆、千船百船おちこちに、湊をさして入るぞめでたき。
ト此舞の内静かに御座船上手へ廻る。唄の切れ、替つた合方になり、バタ〱にて船艫の方に水主同心内宮新太郎、少し更けたる鬘、白地へ濃藍にて藤を染抜いたる伊達染の着附浅黄の帯にて、同役村田小八同じこしらへにて、是を引付けゐる見得。艫の道具に留る。
新太　ヤア何故あつて断りもなく、一番艫を取つたるぞ。
小八　イヤ拙者が取りしは表向、組頭の許しを受け、今日晴れの御成の御供に、先艫を取りしが如何致した。
新太　オ、許しを受けしと申すが、同役たる我々共へ、達しのなきは如何なるぞ。
小八　ナニ、まだお触れがござらぬとな。
ト びつくりして下にゐる。
新太　龍の口より御濱まで御通船中、是非なく默してをつたが、此沖で御漁の間を幸ひに、咎めの出ぬ内申聞かす。素より先艫の許しを受くれば、一統へ組頭より斯々なりと触れるが當然、コリヤ村田、其方未だ壮年故前後も辨へずして、斯かる不都合を仕出しては、上へ對して濟まざるゆゑ、爲を思ふて申し聞かす。よく承はれ。（ト船桁へ腰をかけ、）其方日頃上役へ諂ひ下役を眼下に見下し、己れの利のみ計らんとする、心得違ひの振舞なり、そりや組頭へ諂ひなば、先艫の役をさせん位は言うたかも知れざれど、上役ばかり笠に着ても、一統承知せざる時は、此内宮同役に代り不承知を申すぞよ、御身は然も三番艫、何故先艫で是へ參つた。
小八　サアそれは。
新太　コリヤ唯の船人とは譯が違ふぞ、勿體なくも上様の御座船の御供にて、先艫と梶は大事の役目、若し粗相のある時は、其身の不爲であらうのに、それでも強ひて先艫を取るか。
ト小八俯向き忌々しきこなし。
長年勤めた其揚句で、やう〱先艫へ出られるのだ、連

従輕薄の出世では、いざといふ時役には立たぬぞ、コリヤ村田、耳はないか、イヤサ御身の爲を思ひやる異見が耳へはひらぬか、無理な出世で、若しひよつと御船の汐路を違えたら、其時こそはコレ此首道具、波の藻屑へ落ちて死ぬのは役柄ゆゑに譽だが、お仕置受けては死にたくねえ、憎まれ口は御身の爲だぞ、よく年寄の言ふ事を忘れぬやうに覺えてゐやれ。（ト立上り思入あつて、）ドレ、脇艫へ参つて勤めねばならぬ。

ト上手へ行きかゝるを、村田小八忌々しき思入あつて、内宮の裾を捉へ、

小八　新太郎待て。

新太　待てとは何ぞ用でもあるのか。

小八　おのれ満座の其中にて、よくぞ恥辱を與へしぞ。

新太　恥を掻かせしが何とした。

小八　ム、。

ト息込み、有合ふ小刀を取つて柄へ手をかけるを、内宮新太郎扇にて是を留める。一寸立廻つて抜きかけるを新太郎要にて村田の眉間を打つ。是にて小八の額に疵つくゆゑ、再び立上らうとする。爰へバタ〳〵にて水主同心三人、同じく揃ひのなりにて出て、小八を抱き留める。此見得合方早めて薄く波の音をあしらひ、此内船上手へ廻る。是にて舳の鵜飼は櫂を持つて立掛り、御側の四人は刀へ手をかけ、將軍を守護してゐる見得にて船納る。

壹岐　艫の方にて非常の訴へ、容易ならざる物音は。

兵部　コリヤ唯事では。

皆々　ござらぬぞ。

トキツとなる。此中へ將軍割つて出て、四邊へ思入あつて氣をかへ、

家慶　イヤ氣遣ひ致すな。あれは大方六人の者が寄網の人聲ならん。

ト是にて皆々顔見合せホツと思入あつて下にゐる。鵜飼あたりへ思入あつて、

鵜飼　仰せの通り餘程大漁のやうに見受けまする。

睦　スリヤ非常の事では。

女形皆々　ござりませぬか。（ト此内將軍は立身にて船へ思入あつて氣をかへ、）

家慶　皆の者。

皆々　ハア、。

家慶　よい眺望ぢやの。（ト少しもさはらぬ體。皆々恐入

つたるこなしにて〕
壹岐　寛仁大度の御詞は、
兵部　是ぞ則ち十二代の、
大隅　天下は益々泰平に、
一學　流れも清き德川の、
壹岐　其名も高き、
四人　大川御座船。
睦　御供致せし姿まで、
濱江　恐悦申し、
皆々　上げ奉りまする。
家慶　ム、目出たい、船唄申し付けい。
鵜飼　ハ、ア。
ト是にて鵜飼立上り扇を開き高く上げて合圖する。此時下座にて御船唄の端唄になり音頭を取る。
〽高き家に昇りて見れば烟り立つ、民の竈も賑ひて、
ト是より大勢になり、
〽ソーレ戸ざゝぬ御代こそ目出たいの、御祝儀目出たいエ、ソーリヤエ、。
ト此御船唄へ薄く波の音靜かなる合方を冠せ、御座船段々と奥へ引込む。よき程に知らせに付、大ドロ〳〵になりて此道具居所にて替る。

本舞臺一面の平舞臺。上寄りに三間の間向ふ一間床の間。好みの掛物をかけ、續いて袋戸棚茶簞笥。次の間一間夜具棚。此下二枚引の杉戸。此次一間廊下口向ふ座敷の書割。門口の所緣張りの障子、上の方折廻し障子にて閉切り、下の方中二階の淨瑠璃臺。伊豫簾を下し、上寄りよき所に六枚屏風を立廻し、傍に丸行燈、煙草盆を置き、廊下に掛行燈をかけ、すべて深川仲町久喜萬字假宅二階の體。下手廊下口に大工赤身の伊太郎着流し三尺、手に腹掛と羽織を持ち歸ると言つて立掛りゐるを、引手茶屋女房おくら新造音人と留めてゐる。此見得太鼓入り騷ぎ唄にて幕あく。
伊太　厭だ〳〵、おらア歸るから留めて吳れるな。
くら　モシ親方、何がお氣に障りましたか、マア靜かになさいまし。
伊太　あんまり人を莫迦にするから、默つちやアゐられねえ。
くら　誰がお前さんを莫迦にしますものか。

番人　マア紫さんの部屋へ、お出でなんし。
伊太　厭だ〳〵、誰が部屋へ行くものだ、身分は叩き大工だが、大概な棟梁より仕事の多い伊太郎さんだ、是まで長屋の三州屋へ家のやうに出掛けたが、迚も女郎を買ふならば大きな所で遊ばうと、當時假宅で一の當り、八幡前の久喜萬字、是から足を近く來る氣で、憚りながらふりぢやアねえ、茶屋から送られて來た俺だ、一寸床へ面を出して、それぎり烟になつてしまひ、あんまり莫迦にしやアがるから、外へ行つて上るのだ、留めずに俺を歸して吳れ。
くら　生憎今夜はお客が落合ひ、お前さんへ濟まないといつて花魁も氣を揉んで、今に行くから些との間、私につないでゐて吳れと、くれ〴〵もお賴みなさんしたから、マアお部屋へお出でなさいまし。
番人　今呼んで參りますから、マア兎も角もお出なんし。
伊八　厭だ〳〵、何でも歸らにやア蟲が納まらねえ。
ト此時廊下口より紫部屋着のこしらへ、上草履にて出て來り、歸るといふ伊太郎を引留め、
紫　今に私が參りんすから、少し待つてゝ吳んなましと、あれ程お賴み申したのに、歸る〳〵と大きな聲して、私しの勤めの惡いやうで、內證へ聞えて叱られんすから一緒に部屋へお出なんし。
伊太　俺だつて今日初めて女郎を買ひにやア來ねえから、廻しがあれば來られねえと知つちやアゐるが、一寸顏を出した限り、あんまり酷い仕方だから、外へ行く氣で歸るのだ。
紫　それぢやア私に恥を搔かして、それでいゝのでありんすか。
伊太　いゝといふ譯ぢやアねえが。
紫　さういふ譯でないならば、お部屋へ歸つてくんなまし、今お前さんに歸られると、花魁も恥なれば送つた茶屋も恥になれば、其處を思つてモシ親方、機嫌を直して下さいましな。
伊太　一旦歸るといつたならば、明日來るとも今夜は歸る。
紫　それぢやアお前さんは私が厭で、それで歸ると言ひなんすのか。（ト紫思入あつて、）是程私が思ふのに、こんな悔しい事はありんせん。
番人　そんなに氣を揉みなんしたら、又積が起りんせう。
紫　こんなに皆んなが留めるのに、どうでも歸りなんすのか。

伊太　ム、お前さえ來て與れりやア歸る氣はねえけれど。

くら　お歸りなさる氣がなければ、機嫌を直してモシ親方。

晉人　早く部屋へお出なんし。

伊太　それでも歸ると言つたからは。

紫　エヽじれつたい、私と一緒に。〽ト紫伊太郎の手を取る。）

くら　マアお出なさいまし。

ト太鼓入りの鳴物にて、紫伊太郎の手を取り、おくら附いて廊下口へはひる。引違へて廊下口より鳥人新造のこしら〽上草履にて出て來り、

鳥人　紫さんの今のお客は、しつこいらしい厭なお客でありんすね。

晉人　大層木の匂ひがするから何商賣かと思つたら、大工さんでありんすよ。

鳥人　座敷のお客は寢てゐなんすか。

晉人　醉つたと言つて先刻から、よく寢入つておいでなんす。

鳥人　今夜雲井さんのお座敷で、淸元の淨瑠璃があるといふ事でありんすよ。

晉人　そりやア樂しみでありんすね。

ト知らせにつき、下手伊豫簾を卷き上げる。實に淸元連中羽織袴にて居並び兩吟の淨瑠璃になる。

〽東雲の入相鐘にきぬ〳〵の、別れ惜みし深川の、濱も假の吉原に、船の登りの佃より、晉色やさしきすがゝきや、

ト此内鳥人屛風の內を覗く事などあつて、晉人とひそひそと話をする思入。

〽宵は賑はふ店先に、二階はしんと汐風に、しめる久喜の奧二階、かしくは部屋へ歸り來て、

ト下手廊下口よりかしく部室着遊女のこしら〽上草履にて出て來り、

かし　雅樂さんは寢てゐなんすかえ。

晉人　御酒をたんと上らぬゆゑ、醉倒れなんしたから其儘にして置きんした。

かし　ほんとに寢なんしたらよからうに、風でも引いたらどうしなますか、一寸屛風を取つて與んなんし。

兩人　アイ〳〵。

〽夏とは言へど風寒く、たてし屛風の蝶番、莊子が夢の花も散り、けふは若葉の木下闇、灯影小暗き緣のはし。

ト此內晉人屛風を疊んで後ろへ置く。內に梅田雅樂之

助好みの鬘野暮なゐこしらへにて座布團の上に莨の函を枕にして轉寢をしてゐる。かしく傍へ來て寢てゐる顔をぢつと見やり、淨瑠璃の切より合方になり、

かし　モシ雅樂さん、何かうなされなんすやうだが、早く目をお覺しなんし。

ト雅樂之助搖り起す。薄き風の音になり、雅樂之助びつくりして起き上り、あたりを見廻し胸を撫でゝホッと思入。

何をそんなにびつくりしなます。

雅樂　爰は御濱でなかつたか。

かし　ナニ御濱とはえ。

雅樂　御濱御成の夢を見たのぢや。

かし　ナニ、御成の夢を見なんしたとか。

雅樂　今日も一日劒術の稽古をなして夕方より、休息なしてをつたところへ朋友が來て誘はれ、開帳へ來た歸りがけ、連が馴染に同道せしが、相變らず繁昌につい浮れて醉倒れ、其儘爰へ轉寢の夢に見たのは御濱御成、符合せぬのは御臺樣が女中衆迄お供であつたが、女子が上と同船はついに是まで聞かざりしが、爰らが夢の證據であらう。(トぢつと思入あつて) 唯正夢にありありと、イヤナニついとろ〳〵とした所を、搖り起されてびつくりしたが、是も稽古の疲れと見える。

かし　稽古の疲れと言ひなんすが、何處の稽古の疲れやら、知れたものではありんせん。

鳥人　コリヤ花魁の言ひなんす通り、大方昨夜何れへか、お出なんして可愛がられ、

香人　そのお疲れでありんせう。

雅樂　其方達までが同じやうに、そんな浮いた事ではない。素より野暮な產れゆゑ、唯の一度外へなど遊びに行つた事はないが、朋友共に勸められ、當家へ二三度來たばかり、それに師匠が堅い氣質に、容易な事では拔けられず、漸くの事で今日來たのぢや。

かし　私も野暮な產れゆゑ、粹な客衆を取らうより、お前のやうな野暮なお方を、取るのも末々此身の力に。とサア此方で思ふ半分も、主は思うて下さんせぬゆゑ、それが病の因となり、此春からの永の煩ひ、もう再びお客樣にお目もじは出來まいかと心細う思うてゐたも、神や佛の御利益と、御贔屓樣のお蔭にて、元の體になりし嬉しさ、有難涙に暮れまする。(ト一寸辭儀をなし、) どうぞ此後外の店へ行かずにゐて下さんせ。

雅樂　外へ揚つた事のないは、様子の分らぬ手前ゆゑ、左様な事を言はれると、くわつ／＼と逆上あがり、穴へでもはひりたくなるわえ。

かし　その野暮らしいお詞に、思ひ染めしは此三月。

ト是よりくどきになり、

〽しかも櫻の咲き滿ちて、雲か霞かと夕映えの、日影まばゆき道中に、顔見合せて恥しく、〽芽出し紅葉に誰が色か、うら山吹と信半の、見世へかけしが縁のはし。〽初會馴染の嬉しさも、今は苦勞をます鏡、〽顔のやつれも誰ゆゑぞ。

ト かしく雅樂之介を捉へて口説の振よろしく、此内廊下口へ以前の村田小八の僞名櫻井武雄着流しにて出て來り、此體を見て腹の立つ思入あつて下手へはひる。

これほど私が思ふのに、文を上げてもお出はなく、あんまりつれない事でありんす。

雅樂　流石は廓の育ちとて、お主達まで其のやうな事を言ふのが手管とやら、實に感心致したわえ。

鳥人　そんなに主に褒められんしては、何ぞ奢られねばなりんすまい。

香人　成田さんはお酒より甘味の方がようありんす。

かし　ほんに先刻佐賀町の紺屋から取寄せた、月の雫が其處にあるからお上げなんし。

香人　當時賣出しの紺屋から、月の雫をお取りなんしたかえ、それは何處にありんす。

かし　ソレ其處にある持遊びの延喜棚の抽出に。

香人　さうざますかえ。

〽松にかゝりし藤浪を、たとへて言はゞ新造に、ほかりの色の花房も、夏まだ若く葉隱れに、薄むらさきの二季草。

ト此内簞笥の上にある誂へ持遊びの延喜棚を持つて來て、下の抽出を拔き、月の雫を出し菓子盆へ入れる。雅樂之助は延喜棚へ目をつけ、

雅樂　これは持遊びとは思はれぬ、なか／＼器用によく出來てる。

鳥人　それは仲見世で名の高い武藏屋でありんす。

雅樂　道理こそよい細工だ。（ト取上げて上を明けて見て、）ヤ、コリヤ中に戒名がある、見れば男の戒名だが親は思ふ人の戒名なるか。

かし　イエ／＼さうではありんせん、それは私の父さんの戒名でありんす。

雅樂　扨は其許の戒名とか。

かし　表向き御檀那を欺く事がなりんせんから、持遊びの延喜棚へ、戒名を入れて置き、人目を忍んで朝夕に。（トちつと思入あつて。）拜んでゐるのでござんすわいなア。

雅樂　それは近頃奇特な事ぢや。（ト雅樂之介戒名をとくと見て。）「天保十一庚子年九月十一日、項雲院靈岳劍雪居士。」月は違へど今宵は十日、丁度通夜に當るの。

かし　アイ。

トかしくホロリと思入。

〽あいとばかりに差俯向き、雨の牡丹の風情にて、まぶた重げに袖濡らす、葉末の雫亡き人に、翌日の忌日の手向水。

ト此内かしく愁ひの思入にて俯向き涙を袖にて隱す思入。雅樂之介戒名とかしくとへ思入あつて、扨はといふこなしにて、

雅樂　扨は今のは正夢なりしか。

かし　エ。（ト思入雅樂之助氣をかへ。）

雅樂　是も心氣の疲れでもあらう。（ト此時奥にて手を叩く。）

かし　生憎今夜は客衆が落合ひ、座敷が足らぬ程なれば、二人は是から石町さんを氣をつけてお呉んなんし。

音人　アイ〳〵そんなら彼方へ行きんすから、用があつたらお呼びなんし。

ト又奥にて手を叩く。

鳥人　アレ又奥で手が鳴りんすよ。

音人　エ、忙しなうざますねえ。

〽卯の花くだし降りつゞく、曇りし空も吹き霽れて、かはる景色の夏木立、茂る若葉ぞ。

ト兩人よろしく思入あつて下手へはひる。三重にて伊豫簾を下し、淸元連中を消して、

雅樂　丁度幸ひ此内に。

ト誂への合方になり、かしくを上手へ住はせ、雅樂之介は下手へ來り形を改め、

四邊に憚る人なければ、以前をお尋ね申しまするが、若し駿州安在に御住居なされし内宮樣の御孃樣ではござりませぬか。

かし　エ、どうしてそれを。（トびつくりなす。）

雅樂　其驚きは御尤、私し父はあなたの御親父内宮樣のお蔭にて、一命を助かりましたる梅田善兵衛が悴、雅樂之介にござりまする。

かし　エ、。

ト　かしくどうと下にゐて、

子供の折ゆゑ顏は知らぬが、そんなら梅田善兵衞殿の、お前は悴でござんしたか。

雅樂　絶えて久しきお嬢様。以前に變るお身の上はおいとしうござりますが、先づは御無事で何より悦ばしうござりまする。

かし　さうして爰にゐる事を知つての事か。但し又、知らずに遊びに來なさんしたか。

雅樂　先頃圖らず朋友が酒宴の席での談話に、今深川で評判の久喜萬字のかしくといふ、標紋勝れし花魁は、不仕合にて駿府へ行きし、元は公儀へ勤めし者のなれの果と噂せしを、聞くにつけて胸に應へ、若しやそれが恩人の嬢様にてはあらざるかと、遊里などへは唯の一度參つた事はござらぬが、いよ／＼それに相違なくば、苦界の勤めをお助け申し、親善兵衞が一命を助けられたる御恩送りを致さんと、友を便りに當春より、樣子を探りに參りし拙者、圖らず唯今御戒名にてお名乘り申せし我が本懷。是まで枕交はさぬを、不審に思召しませうが、此譯ゆゑでござりまする。又私も其頃は十二歳の前髪で、あなた樣はお乳吞ゆゑ御存じないは御尤、亡き親共の導きか、圖らずお目にかゝりましたは、盡きせぬ御縁でござりまする。

かし　思掛けないお方に逢ひ、名乘り合ふのも面目ない、かうして今は賤しき勤め、誰を便りにするものなく、如何なる宿世の因果にて、かういふ憂目を見る事かと、泣かぬ日とてはござんせぬ。

雅樂　御尤なる其仰せ、我が父臨終の際に臨み、私を枕邊に招き、我れ朋友と果し合致せし時、既に一命失はんとせしを、内宮新太郎樣のお蔭にて、事なう其場を助かりしは、全くあなたのお蔭ゆゑ、我れ亡き跡は其方が必ず御恩を返し吳れと、申すが此世の別れにて、遂に其場で臨終致しましたが、つひに是まで一日だに思はぬ事はござりませぬが、嘸御無念にござりましたらう。

かし　其後母の語るを聞くに、父を討つたる同役の村田小入といふ人は、心良からぬ生れにて、兎角に悪しき事を企て、御上の御爲にならざるを、父上再三御異見ありしを却つて、それを遺恨に思ひ、御成の時に船中にて、爭ひせしを上樣が、御存じないとの有難い御慈悲の仰せに輕くは濟めど、御立ちの後御詮議にて其の遺恨に村田殿が父上を殺害なし、再び上の御調べ受けしも、相手が死

人に負になり、江戸の住居も出來難く、駿府へ逼塞する悲しさ、思へば悔しうござりまする。

雅樂　そのお恨みは御親子ゆゑ御尤にござりまする。シテ此江戸へお出でなされ、かく賤しき勤めをなさるは、如何なる譯のあつての事か、それをお聞かせ下さりませ。

かし　話せば長い事ながら、父上お果なされしより、兎角に悪しき事のみ續き、する事なす事左り前に、殊更跡を引受けて、萬事の世話をして呉れる伯父が慾心深きゆゑ、よいやうな事をして、所持の金子も費ひ果し、見る影もない姿となりしも、父を討つたる村田ゆゑ、いつか恨みを晴らしたいと思へど女の力に及ばず、憂き年月を送る内、又母様は長年の御苦勞なされしたゝまりか、遂に重き病となり、果敢なくおなりなされし其取片附や何や彼や、多くのお金の入用に、江戸にをつたは三歳の時ゆゑ、世間で知らぬを幸ひに、以前を包み爰へ來て、今は苦界の勤めの身に、愁ひの中の幸ひは、多くの人の入込む廓、密かに敵を尋ねる内、此頃私の所へお出での櫻井武雄といふお客は、以前は公儀へ勤めし者と、聞いて樣子を探りしに、多分は村田小八といひし敵にてはあるまいかと思へど確と證據もなく、心を痛めてゐますわいな。

雅樂　シテ其外に是ぞといふお手掛りはござりませぬかな。

かし　サ、其頃母の物語りに、手利の上に斬つたる刀は、和泉守國貞の銘刀、其以前赤穗の義士堀部安兵衛が所持の刀で、一ト目見れば判るといへど、是も年月經ちし事、それを所持する事や分らず、外に手掛りござんせぬ。

雅樂　シテ唯今お話ありし櫻井と申す客には、お身をお任せなされましたか。

かし　イヱ初會の時に其以前、上へ仕へし者といふ故、言はず語らず此身を恥ぢ、あのゝものゝと言拔けて、身を任せねば意地になり、三日にあげず來なさんすが、早く二人が名乘り合ふたら、かういふ事にはなりますまいに。

雅樂　仰言る通り私も、其後江戸へ參りまして、鐵砲洲なる細川侯の藩中に身寄りござるを幸ひに、劍術修行致す内、承はれば御親父には不慮の御最期なされし上、御家も其儘退轉なされ、當時駿府の安在へ御逼塞と承はり、取るものも取敢へず、再び駿府へ參りし所、其お住居も跡方なく、何れで聞いても御在所分らず、是非なく歸邸致しましたが、圖らず今晩お名乘り申し、日頃の念の屆きし上は、今に苦界の御難儀を、お救ひ申して亡

き親の、御恩報じを致しますれば、必ず御案じなされま
するな。
かし　其安心の出來ぬのは、近々私の身請をして、表向妻にすると茶屋樂へ話をした様子、よい工風はござんすまいか。
雅樂　ナニ近々身受を致しますとな。（トちつとなり、）心は矢竹にはやれども、自由にならぬはあなたの身請、差當つて金の工面にほとんど當惑致しまする。
かし　ムヽ、スリヤ其お金の才覺に。
雅樂　困ると申すは私も劍道修行に出でし身の上、大した金を借りようと申しましても貸人なく、此才覺に困りまする。
トちつと思入。此時下手廊下口へ以前の櫻井武雄出て「安在へ逼塞」といふセリフの頃より立聞する。雅樂之介かしくは是へ心付き氣をかへて上下に入替り、
かし　そんなら茶屋樂へ相談して早く身請をして呉んなまし。
雅樂　もう大船に乘つた氣で、身請は心配するに及ばぬ。
かし　エヽ、嬉しうざます。（ト是を聞き櫻井ムツとせし思入にて、）
櫻井　イヤ其身請は相成らぬ。
雅樂　エヽ。
かし　さう言ひなんすは櫻井さん。（ト是にて櫻井內へはひり、）
櫻井　先達より茶屋へ言込み、かしくが身請の相談は、九分九厘整ひしぞ。
雅樂　見れば何れのお方やらお面さへも存せぬ貴殿、身が合娼の此席へ、案內もなくヅカ〳〵と、何用あつてお出ありしぞ。
櫻井　如何にも是へ案內なく、踏込んだのは外でもない、我が身請なすかしくが部屋ゆゑ。
雅樂　何と言はるゝ。（ト詰への合方になり、）
櫻井　近頃自慢を致すやうぢやが、我は以前公儀にて祿を頂戴致せし者だが、上の不首尾で、イヤナニ上へ再三願ひを出し、劍術修行の其爲に、永の暇を願ひし上、當時は別に勤めなき、一本立の櫻井武雄、今にも內證へ金子を渡し、身請致せば手前が妻、それ故是へ參つたのだ。
雅樂　成程身請をなされし上は、いかにも貴殿の妻女ゆゑ、誰に遠慮もござるまいが、いまだ身請の濟まざる內は、今宵手前が揚げたるかしく、其處へつか〳〵踏込まれし

は、テト粗相ではござらぬか。

櫻井　ム、貴賤の申すも尤だが、後とも言はず唯た今、身請をしたら言分あるまい。

雅樂　然は唯今かしくが身請を。

櫻井　金子取寄せ渡すであらう。

かし　イエ／＼私や梅田さんに身請をされる約束あれば、心に濟まぬお前の方へ、私や行く氣はありいせん。

櫻井　心に濟まうが濟むまいが、身請の金を並べたら、もう否應は言はさぬぞ。

かし　そんなら今宵身請の金を爰へ持つて來なさんしたかえ。

櫻井　爰へは持つて來ぬけれど、豫て師匠の耳へも入り、好いた女子があるならば、何時でも金を出してやるから、身請をなして女房にしてと、弟子を憐れむ師匠の情、人さへやれば直ぐにも來るのだ。

かし　そんなら私が厭といつても。

櫻井　金で面を張る心算か、それとも約束したといふ、梅田氏が今爰で、かしくの身請をさつしやるか。

雅樂　サア約束なせど今と言つては。

櫻井　それぢやア金は出來ねえか。

雅樂　サアそれは。

櫻井　但しは金を並べるか。

兩人　サア／＼／＼。

櫻井　金がなければそれまでだ、かしくは手前が身請致すぞ。

雅樂　ムウ。

かし　そんならお前が今爰で。

櫻井　ム、茶屋を呼んで金を渡さう、コリヤ信牛はゐねえか／＼。

ト手を叩く、下手より以前のおくら出て來り、

くら　櫻井樣お呼びなさいましたか。

櫻井　牛込まで御苦勞ながら主に行つて貰ひたい。

くら　ソリヤ何の御用でござりまする。

櫻井　用と言ふのは外でもない、是から師匠の所へ行つて、金を受取つて來て貰ひたい。

くら　參る事は參りますが、明朝でもよろしいではござりませぬか。

櫻井　イヤ翌の朝では間に合はん、是非とも今夜身請するのだ。

くら　それぢやと申して引過ぎゆゑ。

櫻井　エ、身請を急ぐのだ、行けといふに。

トキツ、ト言ふ。此時、下口へ久喜萬字の亭主藤吉羽織着流しにて、以前の紫を連れ出て來り、

藤吉　イエ此お身請はどちらへも御相談は出來ませぬ。

ト是にて兩人びつくりなし、

櫻井　誰かと思へば此家の主、此相談が出來ぬとは。（ト合方替つて下にゐて、）

藤吉　不思議な緣で私共へ一昨年から來て三年越し、唯の一度悪い耳を主人へ聞かした事もなく、お客を大事に朋輩の、しめしまでもして異れるので、二階の風儀も以前と替り、家の爲には大事の花魁、假令萬兩積まれましても手放す事は出來ませぬ、然し一旦泥水を吞んだ體でござりますから、間夫があるなら其方へやるまいものでもござりませぬが、此お二人には上げられませぬ。

櫻井　スリヤ爰へ金を積んでも。

雅樂　二人へ身請はさせんと申すか。

藤吉　上げられませぬは外でもない、我が物を我が改めてかしくの身請は、私が致しますでござりまする。

櫻井　ム、抱妓の遊女を身請とは、味に搦んで參つたな。

くら　エ、そんなら旦那が花魁のお身請をなさいますとか、是には何ぞ仔細のある事。

藤吉　イヤ別に仔細も何もないが、知つての通り子がなければ、今夜限り見世を退かせ、わしが娘にしますのさ。

トかしくびつくりなし不審のこなし。

又是にゐる紫を二代目かしくにして、立派に弘めさせますから、どうぞ仲間へ言つて下せえ。

紫　そんなら私を二代目に。

藤吉　お主も否やはあるまいな。

紫　エ、嬉しうござります。（ト櫻井心悪き思入にて、）

櫻井　兩手に花の口論を、散らす主が此場の納まり、八重にからんだ春の末、花の詠めも是迄、是から歸つておれも又、中萬字か甲子屋で、かしくに增る花を詠め、此面當をせねばならぬ。

くら　それではあなたは是限りでお歸りでござりますかえ。

櫻井　遊里でなくば落花微塵に致す所も花を持たせ、此儘綺麗に歸ると致さう。

くら　お歸りならばお送り申しませう。

櫻井　かしくが間夫の梅田氏。

雅樂　御緣があらば又其内。

櫻井　今夜の御禮は屹度致すぞ。（ト唄になり櫻井を先におくに附いて下手へはひる。）

雅樂　シテ主にはいよ〳〵かしくを。

藤吉　現在身請のお客を斷り、娘となすも是までに、家の爲になつたかしく、望みを叶へてやりたいゆゑ。

かし　それでは若しや先刻の話を。

藤吉　サアそれゆゑ身儘にしてやるのだ。（ト雅樂之介感心せし思入にて。）

雅樂　流石は久喜の。（ト膝を打つを道具替りの知らせ）主でござる。

ト皆々引張りよろしく、「あれ又憎や」の唄にて此道具廻る。

本舞臺一面の平舞臺。上の方貸藏で見切り、下の方納屋の見切。向ふは新堀の川向乙女橋より永代を斜に見たる書割。すべて乙女橋際南新堀夜の體。是へ誂への十日の月を出し、時の鐘題目太鼓の合方にて道具留る。と、上下より夜蕎麥賣開帳歸りの仕出し出て下手へはひる。ト釣鐘誂への合方になり、上手より以前の茂々之井舜藏少し酒に醉ひし思入にて出て來り、

舜藏　川上と此川下や月の友と、其角が句にもある通り……川邊の月は又一段、水に映りてよい詠めぢや、木場の衆に連れられて平清で飲み過し、思ひの外酩酊致した、駕に乘れと勸められたを、醉覺しに歩いて來たが、川風がよい心持ぢや。〽謠「春雨の音もしきりに更くる夜の、東寺の前を打過ぎ、九條表に打つて出で。

ト謠をうたひながら眞中へ來る。此内後より清六等四人の侍、頰冠り尻端折にて附いて來り、上下へ別れ窺ふ。舜藏ちらりと見て下座の謠になり、

〽羅生門を見渡せば、物凄じく雨落ちて、俄かに吹き來る風の音に、

ト此内上下より四人拔きつれて斬つてかゝる。爰へ上手よりホイ駕〳〵と聲して四つ手駕籠を擔ぎ出て來り此中へ擔ぎ込みびつくりして駕舁駕籠を上手へ下し逃げてはひる。是にて駕の垂を煽り上げ、内に以前の雅樂之介乘つてゐて、此樣子を見て感心せし思入。此内舜藏は矢張り四人を相手に本手の立廻り、誂への合方掠めて波の音。トゞ舜藏侍の刀を引取り峰打にする、是にて四人下手へ逃げてはひる。此立廻りの内雅樂之

介舜藏先生と心附き、駕籠より出て見てゐて、ト、四人の逃げ行く後を見送り、舜藏につたり笑ふ所へツカツカと出て下にゐて、

雅樂　先生にござりましたか。

舜藏　コレ。

ト舜藏押へる。此時月に雲かゝり暗くなる、舜藏刀を下手へ抛る。爰へ下手より蔦銀次郎着附尻端折草履にて出て來り、雅樂之介へ行當り、びつくりして飛退き、上手より以前の櫻井出て來り、舜藏と行會ひ、左右へ除け合ひ、蔦頭掻きのけて行くを櫻井引戻し、左右へ別れてキット見得。誂への騷ぎ唄へ稽古囃子を冠せし鳴物になり、是より有合ふ駕を使ひ、世話だんまりの立廻りあつて、ト、櫻井花道へ遁れ行き、つまづいて下にゐる。舞臺は是な見込むる木の頭。櫻井はホツと思入。此引張り個、波の音にてよろしく。

ひやうし幕

幕一杯に櫻井揚幕へはひる。後シャギリ。

二　幕　目

蜊河岸茂々之井宅の場
同茶席師弟別れの場

役名――梅田雅樂之介。茂々之井舜藏。同下男金六。門弟藤井龍之介。同富喜田丹藏。門弟大勢。岡田鏡之介。久喜萬字屋藏吉。茂々之井の妻おりか。同娘お由。同下女お松。同小間使おむら。

竹　本　連　中

本舞臺上寄に二間常足の二重。板羽目の蹴込み、正面唐紙、平舞臺の正面板羽目。下手一間の附屋體杉戸の出入り。上手の欄間に門弟の姓名を記したる黒塗の額を掛け、下手の板羽目に「今日朝五つ時より大試合之事」と記したる張紙。すべて蜊河岸茂々之井道場の體。二重の眞中に茂々之井舜藏羽織袴にて住ひ、上手に門弟藤脇總之介羽織袴にて順を認めたる帳面を調べ、下手に門弟富貴田丹藏同じく勝負を帳へ附け、平舞臺に門弟大勢面小手稽古着にて、四ケ所にて試合をなし、下手に門弟大勢控へゐる。此見得三味線入り白囃子竹刀の音にて幕明く。と、四

ト一ヶ所の試合立廻りあつて勝負を丹藏認める。

鐘之　今朝より數番の立合に、多くの御門人の勝負を御記憶なされまするのは、恐入つてござりまする。

丹藏　左やうに認めをつてさへ、中々覺え切れませぬのに、流石は先生、驚き入りまする。

龜之　次は梅田雅樂之助殿に稻垣傳兵衛殿。面を揃ひて立合なされ。

ト此の、下手大勢の門弟の內に混りゐたる、前幕の梅田雅樂之介稽古着胴小手、後ろ鉢巻竹刀を持ち前へ出て平伏する。

丹藏　雅樂之助は當大試合に勝利とならば、一ヶ所へ道場開くとも苦しからぬ趣前、今日は大事な場所、しかと立合はれよ。

雅樂　ハツ。

鐘之　唯今先生の仰せの如く、日頃よりお心掛の功績はれ、稽、兼ねぬ御勝利は恐し入つた事でござる。

龜之　一刀試合の後、兩刀試合を致されよ。

雅樂　ハツ。

ト辭儀をする。此內上手より稻垣傳兵衛後ろ鉢巻同じきこしらへにて、双方右の如く辭儀をなし、一刀試合にて立上る。是を三絃入り白囃子になり、一寸立廻つて、

傳兵　參つた。

ト是にて傳兵衛下る。爰へ入替つて門弟一二かゝり立廻つて同じく參つたと下る。此內龜之介一々留める。

龜之　次は二人掛り、雅樂之助殿は兩刀、並びに後は四人掛りの事。

皆々　ハツ。

ト上手より兩人眞中へ出て雅樂之介竹刀を一本差し、一刀にて双方構へる。是より鳴物になり、二人掛りの立廻りあつて、トゞ兩人突かれタヂ〳〵となる。是にて外四人一時に打つて掛るを兩刀にてあしらひ、雅樂之介危くなる事あつて、トゞ四人を打据ゑる。

龜之　是にて殘らず勝負相濟み、

丹藏　お目出たう、

皆々　存じまする。

鐘之　今日圖らずもお招きに與り、久々にて大試合を拝見なし、大いに樂しみな事でござりました。手前も先生の御丹精にて、先年中當道場に修行致してをりましたが、其頃の事を思ひ出しますと、何れも方にはなか〳〵御上

達な事でござりまする。

舜藏　雅樂之助は先頃より申出でし儀もあれば、今日の祝ひ旁々今に奥へ參られよ。

雅樂　ハツ、畏つてござりまする。

舜藏　點數の調べ判り次第、わが手許へ持參致しやれ。

丹藏　委細承知致しました。（ト此時下手の杉戶より前幕の下女お松出て來り）

お松　唯今木場の廣島樣のお手紙を御持參にて、萬字屋の主人がお見えましてござります。

舜藏　左樣か、奥へお通し申せ。

お松　畏りました。（ト引返してはひる。）

鏡之　左樣ならば私は、もうお暇致しまする。

舜藏　是より一層打寛ぎ、大試合の祝盃致せば、マアゆるゆるとして行くがよい。

鏡之　有難うはござりまするが、宅に稽古を致す者も定めし參つてをりませうから、何れ後日上りまするでござりまする。

龜之　久々にて祝盃を頂戴しながら、四方山のお話も致したければ、マアよいではござりませぬか。

鏡之　有難うはござりまするが、近日ゆる／＼上りまする。

龜之　それは殘念な事でござるな。（ト此内鏡之介平舞臺へ下り）

鏡之　左樣ならば先生、何れも方。

龜之　いづれ近日、

皆々　御意得まする。

舜藏　各々休息せられよ。

皆々　ハツ。（ト合方になり舜藏は奥へ、鏡之介は下手杉戶の内へはひる。後合方彈き流し、）

龜之　イヤ今日は朝から二人帳面を控へてゐるので、身動き致す事も出來ず、膝がメリ／＼致すやうぢや。

丹藏　それに先生の側ぢやから、常談一つ言ふ事出來ず、ほとんと當惑仕つた。

門一　然し順番附と點數掛りは勝敗の苦勞がなくて、そこに一つの德がござるて。

二　不斷と違ひ今日は年に一度の大試合、手習ひ師匠の席書同樣、各々一生懸命でござつた。

三　去年の試合と相變らず、又福田殿にやられたが、

四　實に貴殿の御上達には、

五　我々ほとんと、

皆々　閉口致した。

雅樂　イヤモ其仰せでは痛み入る、是も全く先生のお蔭、是が田舍にをつたなら、各々方と御一緒に、此大試合は申すに及ばず、隅田の雪三つ股の月、又は辰巳の假宅と諸所へ同伴出來まするは、お膝許へ來たるお蔭でござる。

總之　シテ田舍と仰言らるゝは、慥か駿府でござつたな。

雅樂　いかにも産れは駿河にて、幼少の折父母に別れ、其後肥後の熊本に、身内ござつて其れへ參り、劍術修行せしが、此兩國にゐるよりも、當時江戸で名の高き、茂々之井先生の門に入り、一心を貫かば上達も出來ん事と、長の暇を乞ひ受けて、三年後先生の內弟子となり修行せしが、今日までの御丹精は實に詞に盡されませぬ。

丹藏　勝利の點數調べずとも、貴殿の勝は知れたる事、こりや御出世のお祝ひに、御酒下されでもござらうてな。

門六　左樣々々、其御酒よりも迚もの事、假宅は如何でござるな。

七　承はれば此程より、久喜へ度々お出との事、女郎の出來は存ぜぬが、

八　我々共も御同伴を致したいものでござるが、

九　今日是より平淸か二軒茶屋にて聞し召し、

十　勝利のお祝ひ旁々に、女將軍の戰ひに、

一　押出したいものでござるが、

二　御同伴は、

皆々　如何でござるな。

雅樂　舊朋友に誘はれ、兩三度深川へ參りし事はござれども、元より廓は不案內、その上ならず望みもござれば。イヤナニ望んで參る譯でもなく、料理店ならお供致すが、遊里は御免下さりませ。

總之　そりやもう貴殿の御都合次第、料理店でも苦しうござらぬ。先づ近邊では京橋の松田でもよろしいが、又はうはずつて木挽町の醉月でもよろしうござる。

雅樂　それならいと易き事、必らず御同伴致しまする。

ト此時下手より前幕の下男金六、手を拭きながら出て來り、

金六　皆さア奥から御酒が出ました。早く此方へござらつせえまし。

丹藏　イヤ噂をすれば影とやら、こりや前表が當つたと見える。

總之　左樣なればお奥へまゐり、御祝儀の御酒下されを、

門一　頂戴致すで、

皆々　ござらうテ。

雅楽　是は金六殿。（ト立上るを道具替りの知らせ。）大きに御苦労でござつたな。

ト此模様賑かな合方にて道具廻る。

本舞臺六枚飾常足の二重、本庇本縁附、正面上手一間の床の間、次に三尺地袋戸棚。續いて少し後へ下げて一間二枚太鼓張りの襖。此下腰張の茶壁。下手廻り縁。上手の棲肱掛窓。平舞臺の上手裾通り四つ目垣。此向ふ眞福寺橋より隅の稲荷を見たる河岸の遠見。下手土塀の出入り。常磐木石燈籠つくばひよろしく、すべて茂々之井奥座敷の體。上手に以前の茂々之井舜藏、次に前幕の久喜萬字屋の亭主藤吉、羽織着流し、次に内室おりか着流しにて住ひ、後ろ棚の脇に前幕のお由、風爐釜を据ゑ茶を立てゝゐる。此模様琴の合方にて道具留る。

りか　折悪しく取込みをり、お介意ひ申しも致しませず、お氣の毒でござりまする。

藤吉　木場の鹿島様に親共より御懇意結びしお蔭にて、圖らず先生にお目通り叶ひ、私身にとりましては、冥加至極にござりまする。

舜藏　圖らず先夜はお近附になりました、毎度木場へ參つて、歸宅は夜に入り戻りますが、先月などは戻りかけ、乙女橋を通行の節、侍體の者四五人出で、我に手向ひ致せしが、其後兎角夜に入ると物騒と申す事、御商賣柄にはお困りでござらうの。

ト此内妻のおりかは藤吉の前へ菓子器を出す。

藤吉　市中の噂を承はるに、牛込邊の道場にて破門されし侍衆が、其日のたつきに困じ果て、道ならぬ振舞なす由、全くそれでござりますと、町人などは夜に入つて迂闊に外出が出來ませぬ。

ト此内娘お由茶を立て、おりか茶碗を取次ぎ、藤吉の前へ出す。

これは先生より。

舜藏　先づ〳〵其許より。

藤吉　左樣なら、お先へ頂戴致しまする。

舜藏　承はれば娘御を貰はれしと申す事ぢやが、結構な事でござるな。

藤吉　それにつきまして先生に密々に願ひ上げたきは、貰ひましたる娘が身の上。父なる者は其以前、由ある者にて勤役中、朋輩の遺恨を受け、御船藏にて手討にあひ、

いと不仕合なる其上に、末は家も斷絕なし、勤めを致す程の不幸、其討つたる刀は和泉守國貞の銘刀にて、其者江戸の道場にて、劍術修行致す由、御門下多き御當家ゆゑ、若しお心當りもござりましたら、不便な娘と思召され、御助力下さりまするやう、偏に願ひ置きまする。

舜藏　久喜萬字の御主人は商賣柄に似合はざる善根者と承はりしが、其娘御の志を感じ、よくも救ひやられしぞ、其事柄を承はる上は、チト此方にも心當りあれば、ともども御助力致すでござらう。

　ト奥より以前下女お松出て來り、

お松　御門弟衆は頂戴の御酒を上つてゞござりまするが、雅樂之介殿は貴様より御內意あれば、御沙汰を待つとて差控へてをられまするが、如何計らひませうな。

りか　御客來ゆゑお歸りまで、控へさせて置きやいの。

藤吉　イヤ御用とあれば私は、もうお暇致しまする。

舜藏　ほんの內輪の用事ゆゑ、先づゆる／＼となさるがよい。

藤吉　此上願ひ置きまするは、呉々も娘が身の上、日頃の望みを叶へやりたく、證據に致すは刀のみ、お含みの程願ひ上げまする。

舜藏　委細承知致してござる。

藤吉　左樣なれば御機嫌よろしう。

りか　初めてお出にお愛想もなく、

お由　又ゆる／＼と近日に、

藤吉　伺ひまするでござりまする。

　ト合方にておりかお松附いて藤吉奥へはひる。お由は藤吉の茶碗を取り後を立てる。是より床の淨瑠璃になる。

　へ春過ぎて夏まだ若き芽出し時、深き望みの雅樂之介、猛き心もしとやかに、常磐の松の色かへぬ、飛石傳ひ出で來り、庭前に控ゆれば、

　ト此文句の內お由茶を出し舜藏呑んでゐる。よき程に下手土塀の引戸をあけ、以前の雅樂之介袴なりにて出て來り、下手椽の脇に辭儀をする。

舜藏　遠慮に及ばぬ、近う參れ。

雅樂　ハツ。

　ト合方になり、雅樂之助よろしく進み寄り二重下手へ住ひ、

舜藏　是へ招きしは餘の儀にあらず、當春中長の間暇を呉れいと申出でしが、此大試合の當日まで、我が所存あ

つて、日延べせしが、何地へ赴く所存であるの。

雅樂　ハツ、餘の儀にもござりませぬが、三年後熊本より江戸表へ參りし限り、書状の便りを致すのみ、義理ある父母に一度は會ひたく存じをつたる所、當春ふと夢に見まして、それより一層逢ひたく存じ、歸國の願出致しましてござりまする

舜藏　然らば熊本の父方へ、其方參ると申すのだな。

雅樂　左樣にござりまする。

〽未然を察す茂々之非が、深き巧に座を進め、

舜藏　今日の大試合に充分の勝を得たる其方が太刀筋、先づあれならば何地へ參り立合をなすとも、恐らく敗を取る事なし、心置なく出立せよ。

雅樂　イエ手前が願ひは熊本の義理ある父母に面會致さば再び江戸へ立歸り、修行致す心得にござりまする。

舜藏　御身一命たにあるならば、再び江戸へも來られんが、若し存念果さゞれば、一命は覺つくまいな。

雅樂　エ、（トギツクリ思入）

舜藏　其方望ある事を、我れは疾より察したり、これ迄今日大試合まで大事を取つて留置きしが、先づ是にては大丈夫、雅樂之介、ナント見込みは違ふまいな。

〽星を指されし一言に、

ト舜藏キツト言ふ。雅樂之介ちつと思入あつて、

雅樂　かくお見込の上からは、今は何をか包みませう、實は先月深川の隠帳の折、朋友に誘はれまして、萬字屋へ參りし節に、圖らずも出逢ひましたは父の敵主。（ト言掛けるを）

舜藏　アイヤ、其仔細聞くに及ばぬ、唯今圖らず萬字屋より、イヤ如何なる望みあらうとも、武徳の道天下に明かにせば、決して恥づる所なし、充分に事をなせよ。

雅樂　スリヤそれ故に今日の、大試合までお許しなきは。

舜藏　わが茂々之非の名折とならば後世までの恥辱ゆゑ、今日迄留置きしが、愈々暇を遣はすぞよ。

〽底意を見拔く言の葉に、聞きゐる娘は心ならず、

ト此内娘は茶を立てゐて、よき所へ茶碗を引きに出て居所へ戻り、

お由　スリヤ雅樂之介は、今日限りお暇になりまするか。

舜藏　豫ての願ひ、今日こそ速かに聞き濟んだり。

お由　やう／＼足掛三年にて、高弟衆にも勝りしに、此儘國へ歸るとは、本意ない事でござんすな。

〽芽出し紅葉も卯の花の、雨にしをるゝ思ひなり。雅樂

之介は面を上げ、

ト　お由ちやと思入。此内雅樂之介俯向きゐて、床のメリヤスになり、

雅樂　委細は申上げずとも、我が胸中お案じありし先生の御眼力にて、速かにお暇下され、是より歸國致す上は、故主の爲に報いんと存じつきし一儀ござれば、再び見ゆる事ありや、又は此儘拜顏を得ますする事の出來ませぬか其處は判りかねますれば、先づ一生のお別れと、思召して下さりませ。

舜藏　ハテ潔よき其詞、今更愚痴を申すやうぢやが、牛込の道場では高弟櫻井武雄を始め四人迄、門弟を破門せしと承はる、それとこれとは裏うへに、惜しき汝を手放すは、如何にも殘念至極たり。

雅樂　その櫻井武雄と申すは、最早免許を受くべき腕前、先頃面會致しましたが、いと逞しき人物にて、事をなすべき侍にござりまする。

舜藏　是にて思ひ出せしは、先頃牛込の道場にて刀劍の會を催せし時、櫻井武雄が所持の刀、陳列せしを見し事ありしが、中身は慥かに和泉守國貞と鑑定せしが、なかなか彼も一方の敵を防ぐ侍ぢやが、破門となりしは惜しいものぢや。

ト　歎息なすを聞耳立て、

ト　是を聞き雅樂之介思入あつて、

雅樂　先生伺ひまするは其砌、御覽になりし櫻井が所持の刀は、慥に國貞にござりましたか。

舜藏　國貞は赤穗討入の節、堀部彌兵衞が用ゐし銘刀、なかなかよい切味ぢや。

雅樂　スリヤ、アノ、いよ〳〵。

ト　ぎつくり胸に合釘の、樣子見てとる此方には、

ト　舜藏始終雅樂之介へ思入あつて、

舜藏　其方國貞を承知であるかな。（ト雅樂之助ハツと思入あつて氣をかへ）

雅樂　イエ、先頃銀座の網屋にて見ました事がござりますので、一寸お聞き申しましたが、中身の寸はどの位でござりましたな。

舜藏　長さは二尺二寸、身は少し厚き方にて鎬より胸の工合、燒刄金色優れし業物、有名なる刀である。

雅樂　ヘエ左樣でござりまするか。

ト　扨は一つの手掛りと、胸に一物雅樂之介、心の刄研澄ます、折柄妻も一間を立出で、

ト是を聞き雅樂之介悦ばしきこなし、此前よき程にお出は茶道具を片附け、灰器を持つて茶立口へはひる。再び出て茶立口にて辭儀をなしはひる。舜藏奧へ向ひ手を打つ。奧より妻おりか出來り。

舜藏　二段目の棚の、袋入を持つて來てくりやれ。

りか　はツ。

〽一と間へ立つて入る後に、勇む心の武士が、心中はかる其所へ、

ト妻おりか奧へはひる。此内雅樂之助ちつと思入。直ぐ奧より内室袋入の刀を持ち出て來り、舜藏の前へ置く。是にて舜藏自身に鈕を解き中身を改めて、

舜藏　此一刀は我家に父の代より傳はりたる關の孫六兼光其方へ餞別に遣はすぞ。

雅樂　エヽ、スリヤ御餞別を下さりますとな。

舜藏　近う。

雅樂　ハツ。（ト進む。舜藏思入あつて、）

舜藏　コリヤ、兼光はよく切れるぞよ。

〽心ありげな言の葉に、はつとばかりに跪き、名殘りを惜しむ師弟の誼、胸にこたゆる思ひなり。

ト此内舜藏件の刀を出す。雅樂之介側へ行き受取らうとして互ひに顏見合せ、ちつと思入あつて、雅樂之介刀を持つて下手へ下り、

雅樂　有難く頂戴致しまする。

〽悦ぶ面を打見やり、不便いや増す思ひにて、

ト此内舜藏ぢつとなり、

舜藏　雅樂之介、其方やそれ程に悦ばしいか。

雅樂　盲龜の浮木を得し如く、一層力を増してござりまする。

舜藏　オヽ、左樣か。

〽實に尤と茂々之丞は、賞さんとして心付き、

ト感心せし思入あつて氣をかへ、

一層力を得しと申すが、相手によらば兼光では、容易く討つ事は叶はぬぞ。

〽始終を察し宣へば、雅樂之介は實にもと思ひ、

雅樂　シテ和泉守國貞に向ひましたら、孫六とは何方が勝るでござりませうな。

舜藏　先づ國貞には劣らぬ心算、然し譬に申す通り、莫耶が劒も持手によらん。

雅樂　御尤なる御仰せ、先づ例へて申さば、仰せありし兔許近き櫻井などの腕前に掛りましたら、如何なものでご

ざりませう。
舜藏　一心の外味方なし、心の劔の鈍らぬやう。
雅樂　磨き上げなば其時は、
舜藏　極意をもつて、ト討てといふ思入にて呑込ませる。
雅樂　ハッ、有難うござりまする。
〽海より深き師の恩は、渡りに船を得し心地、悦び限りなかりけり。傍に聞きゐる內室は、共に涙の雨催ひ、
ト雅樂之介嬉しきこなし。內室はぢつとなり、
りか　我夫御聞濟の上は、國許へ行かるゝとやら、シテ何時頃出立致さるゝぞ。
雅樂　一と先屋敷へ引取りまして、用事片附かば早速に、出立致したうござりまする。
りか　其儘國へ落着いて、再び江戸へは參らぬかいの。
雅樂　イエ國許の兩親に暇乞の致しますれば、早速江戸へ參る心得、それと申すも日頃より
〽言はんとせしが邊りを窺ひ、
目指す相手はお膝許、猶豫致さず歸國致しまする。
りか　亡父の恩を返さんと、思ふ其方の志、必ず神の加護もあらんが、無事息災にて又再び、望を遂げし物語を。
〽聞きたいものと言掛けて、後は詞もなかりけり、聞く雅樂之介はかくまでも、此身を思ひ下さるかと、平身たすこそ道理なり、やゝあつて容を改め。
ト此內內室おりかよろしくこなしあつて、雅樂之介有難涙に暮れ、ぢつとなつて氣をかへる。此時柱時計七つの時を打つ。是にて聞耳立て、
雅樂　出立前それ〳〵へ、暇乞もござりますれば、一と先屋敷へ引取りまする。
舜藏　今日は幸ひ大試合に、祝す杯酌み交し、目出たく屋敷へ戻られよ。
雅樂　ハア、。
舜藏　杯是へ。
りか　畏つてござりまする。
〽折柄次の一と間にて、けふ祝日の大一座、さんざめくやら謡ふやら、聲勇ましき賑はひに、銚子杯取揃へ、慇懃に差出し、
お由　仰せつけられましたるお杯、持參致しましてござります。
ト此內內室奥へはひる。此時文句へ冠せ鼓入り謡になり、時々謡の聲する。よき程に以前の娘お由先に遠山臺へ杯をのせしを持ち、茂々之井の前へ置く。後よ

り内室銀の銚子を持ち出て來り、兩人下手へ住ひ、茂々之井杯を取上げ、内室酌なして呑み干す。お由三方に雅樂之介の前へ出す。

雅樂　ハツ、有難く頂戴致しまする。

〽手に取上げは上げたれど、此祝盃も是限り、見ゆる事もならざるかと、胸に滿ち來る汐頭、しめりがちなるばかりなり、

　ト此内杯を受け、内室酌なして飲まうとして愁ひの思入あつて是を隱すこなし、雅樂之介飲干し、

御返杯致しまする。

三藏　オヽ。（ト杯を受け以前の通りあつて、）杯相濟む上からは。

雅樂　直ぐ此所より拙者めは。

お由　そんならどうでも此場より。

りか　オヽ、もう行きやるか。

雅樂　ハツ。

三藏　ムヽ、目出たく歸國致されよ。

〽實に有難き師の仰せ、頭に仰ぐ鎗劍の、道は直なる雅樂之介、勇む心の其内に、別れともなき隔ての外、思ひ殘して出でゝゆく、折柄小蔭を立出る二人、

　ト此内四人別れを惜しむ事よろしく、雅樂之介下手の緣より下へ下り、心の殘ることなしあつて、刀を抱へ、下手の土塀の口へ行き、二重の三人は本緣の角に立上り見送る。此内知らせなしに此道具靜かに廻る。

　本舞臺上手九尺木屋根、腰掛待合圓座を置き、柱に庭掃をかけ、是より後ろ水谷町の向ふ河岸を見たる中遠見、裾通り四つ目垣つくばゐ石燈籠常磐木の植木よろしく、此の内前の土塀上手になり道具留る。と、上手土塀の出這入り口より、雅樂之介出て來り文句の留りバタ／＼にて下手より稽あきの下男金六前幕の小間使おむら走り出て、左右より雅樂之介に縋り、

金六　モシ雅樂之介樣、もう行かつしやりますかえ。

むら　殘り惜しいこつたねえ。

〽右と左に縋りて、嘆きに沈むをさこそと察し、

　ト兩人雅樂之介へ縋り泣く。

雅樂　お前方にも長の間色々厄介になつてをつたが、今日はいよ／＼お暇願ひ、一度國へ赴いて、運に叶へば又江戸へ、歸つて來まいものでもないから、又其時逢ふであ

らう。
金六　お前樣さう言はつしやるが、三百里もある肥後の熊本、何時又江戶へ來さつしやるか知れたものではありましねえ。
むら　多くある門弟衆の內でも、可愛がつて吳れるのはお前樣ばかり、後の人はいぢめていかねえ、其可愛がつて吳れるお方が、行かつしやるとは悲しいこんだの。
金六　第一外の人達は人使ひが惡くつて、ヤレ金六、竹葉へ行つて鰻飯を誂へて來い、ヤレ金六、大根河岸の大黑屋へ行つてしやもを買つて來い、ソレ金六杉田へ行つて肴を誂へて來い、中橋へ行つて泥鰌汁を買つて來いのと足が棒のやうになるまで使ふので、實に耐つたものぢやアござりましねえ。
むら　オヽさうだとも〱、わしらにはヤレおむら、白魚屋敷へ行つて笹の目藥を買つて來い、水谷町の萬兵衞さんへ行つて膏藥を取つて來い、太刀伊勢屋へ行つて紙を買つて來いと、えらひッ使はれたよ。
金六　そんな人達は何處へも行かねえで、お前樣が行かつしやるとは、世の中は自由にならねえものだが、どうか行かねえ譯には行きましめえか。

雅樂　さう言うて吳れるは忝いが、死んだ親父が御恩返しをせねば、子として濟まざるゆゑ、今日の大試合を待兼ねて、出立せねばならぬゆゑ、殘り惜しいが別れねばならぬ。
金六　それではどうでも止まりませぬか。
むら　金六どん、
金六　おむらどん、是から二人は。
兩人　こつぱいだなう。
〽正直面に顯はれて、しやくり上げたる淚雨、小止みも何時か知れざりき。
ト此內兩人はやりともなき愁ひのこなし。雅樂之介ぢつとなり、
雅樂　ムヽ、スリヤそれ程までに我を思ひ吳れるとか。
金六　ハイ、御主人樣とお前樣は實にわしら二人は。
二人　有難いと思つてをりまする。（ト是を聞き雅樂之介思入あつて）
雅樂　亡父が受けしも主人の恩、かうでなければ。
ト思はず下手へ行きかける、是にて金六仰向けにひつくり返る。雅之介びつくりして起しながら、
イヤ是は粗相致した、許して吳りやれ。

〽折節此方を立出る二人。

ト上手土塀の内より、以前のおりかお由の親子出て来り、

お由　雅樂之介暫く。

雅樂　ハツ。（ト下に居る。）

りか　是へ。

雅樂　ハツ。

ト雅樂之介おりかの側へ來り下にゐる。

りか　些少なれども旅用の足に。（ト袱紗包みの金を出す。）

雅樂　何から何まで、有難うござりまする。

ト側へ行き平伏する。爰へ下手四つ目垣の間より、舜藏袴股立襷掛草履にて、たんぽ槍を構へ、不意に雅樂之介に突掛ける。雅樂之助隙さず刀の袋を左へ抛へ扇にて是をあしらひ、一寸立廻つて上下へ別れ、双方ちつと槍と扇子をつけた儘睨み合ひ、隙のなきを見すまし、

舜藏　ム、見事。（ト槍を引き。）コリヤ、我が鏡心明智流の後日に腕を見せられよ。

りか
お由　返す／＼も、

舜藏　堅固でゐやれ。

雅樂　ハツ。

ト是より二上りになり、

〽名殘り惜し氣に立上り、便りを待つの時鳥、啼音の思ひいとしうて、是が一世の見納めと、見返り見送る庭の面、猛き心の武士も、催す空の卯の花くだし、別れてこそは、出で丶行く。

ト此内雅樂之介袴の塵を拂ひ、茂々之井三人へ辭儀ななす。内室は件の金包を渡し、是にて雅樂之介ツカ／＼と下手へ行くを、金六小間使左右より縋り泣く。是にて下手へ行きかけ、ちつとなつて後へ戻り、肚で愁ひのこなしよろしくあつて、トヾ下手へ行く。此模樣三重風の音にて　　ひやうし　幕

三幕目

京橋松田見世の場
同表二階廣間の場

役名　梅田雅樂之介。蔦頭、分銅銀次。久喜萬字屋藤吉。大工赤身の伊太郎。茂々之井下男金六、

大和田浦六、由倉大六、習志野源彌、芝山仁太郎
榎戸の胴六。二合半の八十八。大道拔中はつたり
牛次。薦。下り藤の芳松。同、背繩の熊太。松田
の若い者、竹松。成田講の世話人四人。同講中大
勢。櫻井武雄。久喜萬字の娘、おかよ。實ハ内宮の
娘、おかよ。松田の女房、おきみ。同下女、お京。
同、お松。同、お西。

本舞臺眞中一間、松田と記せし紺暖簾をかけし入口。左右一面出格子。此下さゝら子の下見。前側一面本庇、二階の手摺の張物。入口上手の柱に「御料理、京橋松田」と記したる掛行燈。よき所に薄縁を敷いたる床几。すべて銀座一丁目松田店先の體。上手に三尺四方程の緣臺を置き、此上に野師はつたり牛次吉原冠り着流し、破れたる夏羽織にて箱の中へ最中を六つ程置き住ひ、平舞臺に榎戸の胴六、二合半の八十八の兩人羽織股引尻端折り、草鞋がけにて菅笠を持ち、野師の前に立掛りゐる。此見得「櫻元〻」の唄に丼鉢を叩く音にて幕あく。

牛次　モシ〳〵、身の上が當つた褒美に最中を買つて、若しそれが當つたら、買つたお錢を四層倍にして返して上げますから、もう一つお取りなさい。

胴六　何だえ、四層倍つけるえ、それ偉えねえ、どうだ八十八どん、身の上がよく當つたから、もう百買つてやるべえか。

八十　よいかえ、身の上のやうに速かに當りましッけえかの。

牛次　お前さんは後ろ厄ゆゑ當年の吉凶を試すため、二百ばかり買つて御覽なさい、運がよければ赤い紙のはひつたのに當り、二百を八銅にしてお返し申しますから。ソシ運定めぢや。やつて御覽じろ。

ト臺の上より胴六の袖を引張る。

胴六　飯は喰ひたし命は惜しゝ。だが、マア百買つて見べえか。

ト財布より百錢を出し臺の上へ置く。野師箱を出し最中を選らせる。此内見物に見えるやうに親指の腹へ赤い紙を附ける。此内胴六一つ取り、

サア是にしますべえ。

牛次　はゝア是でござるか、是が若し何もなければ、當年は氣を付けさつしやれ、又赤い紙がはひつてゐれば無事

息災の上に、四層倍にして、四銅お返し申しますぞ。

胴六　どうか赤紙のはひつた方で、好運の上褒美を取りたいものぢや。

ト此内半次指の腹を見せぬやうに最中を一つ壊し、指の腹を見せ、

半次　オ、又赤紙がござつた。是は幸運な事でござる。サ、約束通り四銅献じまするぞ。

胴六　ヤア、こんな旨え事はありましねえ。

八十　コリヤわしも運定めをやるべえ。（ト此度は四百天保にて胴六に渡す。）

胴六　これは有難い、今度は此四百そつくり張るべえ。

半次　コレ〳〵張るなど丶申す事は博奕に紛らはしく御上へ對して濟まぬ、ちつと氣をつけさつしやれ。

八十　わしも四百が所、吉凶をお張りなすつて呉れさつせえ。

半次　コレ〳〵、其張ると申す事はいかん。愼しまんければならんよ。（ト兩人四百宛出すを一つにして。）サ、銘々に心の内に信心して、一つ宛赤い紙のあるのをお選りなさい。

ト是にて兩人迷ふ事あつて、一つ宛取り上げる。

サ、よく信心して割りなさるがよい。

ト是にて兩人壊す。此内に何もなし。

ヤ、こりや兩方とも何もござらぬ。

胴六　ホイ失策つた、こりや運が傾いたか。

八十　ア、初めてやつて、飛んだ事がはだかつたわえ。

ト八十八がつかりする。此内半次臺の下より拇指へ赤い紙を附けて、兩人に知れぬやうに最中を一つ壊し、指の腹の赤い紙を見せ、

半次　ア、爰にござつた、惜しい事を致したの。

トゆう〳〵と八百の錢を臺の下へ仕舞ふ。兩人是を見やり口惜しきこなしにて、

胴六　エ、自棄だ、もう二百づ丶買ふべえ。

八十　度胸定めだ、出すべえ〳〵。

ト財布を出し錢を出さうとする。此前より、後ろ出格子の内にて、序幕の大工赤身の伊太郎着流し三尺腹掛にて、少し醉ひたるこなしにて見てゐて、此時暖簾口より出て來り、

伊太　すイ〳〵、お前達は好い加減にしねえのか、こんな者に掛つてゐると、今に殘らずふんだくられるぜ。

半次　モシ〳〵人聞の悪い事を言はつしやるな、ふんだく

ろとは何の事だ、何時人の物をふんだくりましたな。

伊太　莫迦言へ、何時も茲の角にゐたり太刀伊勢屋の向う角で、田舍者の錢を取るのは餓鬼の時分から知つてゐるのだ、可哀想に近在から金比羅樣へ出て來た者の金を胡麻化して吸上げるから、氣の毒で見てゐられねえのだ、オイよしねえ〳〵、胡麻化された錢は仕方がねえから、乞食にやつたと思つて呉れてやんねえ。

ト是にて野師の半次癪に障りしこなしにて本音な顯はし、

半次　ヤイ胡麻化すとは何のこつたえ、ちやんと此通り最中を割つて中の當りを見せるのぢやアねえか、よく商賣の邪魔をしやアがつたな、サア唯は濟まさねえぞ。

ト羽織を脱ぎ臺の上へあぐらをかく。

伊太　人をよく唐變木にしやアがつたな、中に何もねえ最中を並べて置きやアがつて、いくら明けたつて何があるものか、當りといふのは汝の指へ赤え紙を附けて置いて割る時に見せる事は、椋鳥の外は誰でも知つてゐるのだ此横着野郎め。

ト伊太郎は出し臺へ兩手をかけひつくり返す。是にて半次と最中の函一緒に落ちる。百姓兩人はびつくりする。

半次　荷を壞されては商賣が出來ねえ、サアどうして呉れるのだ。（ト往來へ寢込む。）

伊太　何を拔かしやアがるのだ。

ト矢張り「櫻え〻」の唄に、丼鉢の音にて兩人摑み合ふ。此ウチ暖簾口より序幕の鳶芳松金太、半纏股引腹掛草履、松田の若い者竹松袢纏三尺にて出て來り、捨ぜリフにて留める。

芳松　親方、腹も立たうが、マア料簡しておやんなせえ。

伊太　サア俺と一緒に自身番へ來い、屹と仕埒を附けて見せるのだ。

半次　篦棒め、汝等にこめられて堪るものか。（ト威張りながら半次コソ〳〵荷を片附ける。）

金太　コレサ、お前も默つてゐねえのか、是が自身番へでも行つて見ねえ、あんまり威張れた譯でもねえから、マア默つてゐなさるがい〻。

半次　相對で商賣してゐるに、横合から喙を出しやアがつて、人の邪魔をしやアがるから、打遣つて置かれねえのだ、サア俺が先へ行つてゐるから、汝後から來やアがれ、どうするか見やアがれ。

ト是迄に荷を纏め氣味わる〳〵出し臺を殘し、慌てゝ下手へ逃げてはひる。

伊太　先へ行つて待つてゐると言つて所も言はねえで、莫迦にしてゐやアがる、態ア見やアがれ。

胴六　是はハヤえら御厄介になりまして、

八十　大きに助かりましてござりまする。

芳松　あの最中も昔から爰か向ふの飯屋の角で、よく瞞してやつてゐるが、今日は正五九の十日で田舍の人が多いから、いくらも引掛る者があります。

竹松　親方、マア機嫌を直して、二階へ行つておやりなさいまし。

伊太　さうしてお前達は、ホゾをもう詰めたのか。（トいへども田舍者兩人はすまして草鞋を直してゐる。）オイ田舍の人、ホゾを詰めたのかよ。

芳松　親方、ホゾと言つても此人達には分るめえぜ。

伊太　違へねえ、さうだつた、オイ田舍の人、もう飯を喰つたのか。

胴六　まだ支度致しませぬから、向ふの飯屋へ寄つて支度する心算で爰を通り、最中へ差掛りましてござりまする。

伊太　そりやア可哀想に、丁度俺や一人だから、一緒にはひつて一杯やりねえ。

胴六　どう致しまして、松田などへ田舍者が上りましては勿體なうござります。

伊太　お前に當前などを出させやアしねえ、神田の大工で赤身の伊太郎と言つちやア、弱え者と見ると飛込んで、助けてやるのが俺の氣性、それで最中を毆つてやつたのだから、安心して一緒に來ねえ。

胴六　どうしべえ、御馳走になつてもよかんべえか。

八十　よもやぼん引でもあんめえから、一緒に連れられべえか。

伊太　面白え〳〵、ぼん引でもあるめえとは正直でいゝ、そんな事は大丈夫だ。

兩人　是は飛んだ事申しました。

伊太　飲んだ酒がすつかりさめてしまつた。

トやはり「櫻えゝ」の唄にて、伊太郎ひよろ〳〵しながら田舍者兩人を連れて店へはひる。此唄にて花道より序幕の大和田清六山倉大六習志野源彌芝山仁太郎、羽織着流し大小、中下駄にて出て來り、直ぐ舞臺へ來て、

清六　もう時分どきになつてまゐつたが、何處かで支度を

せんならんの。
大六　それはよいが、拂ひ方に差支はござらぬかな。
源彌　イヤ隨分そこらに差支を生じてをるのぢや。
仁太　眼前に食店のありながら、此籠城には辟易致すな。
清六　一服やつて寄計を巡らさうかな、オイ爰借りてもよいかな。
芳松　御遠慮なくお掛けなさいまし。
ト是にて四人床几へかけ、薦の者の火を借りて煙草を喫む。やはり右の合方にて花道より前幕久喜萬字の亭主藤吉、羽織着流し雪踏、序幕のかしくのおかよ堅氣の娘のこしらへ、雪踏日傘にて出て來り、花道にて、
藤吉　是から銀座通りは群集するから、頭の物を氣をつけたがよい。
かよ　大層な人でござりますが、田舍の人が多く見えますな。
藤吉　梅田様がお國よりお歸りといふ報せがあつたから、今日らはお目に掛るかも知れぬ、よう氣をつけて行くがよい。
かよ　少しは手掛りがござりましたか、金比羅様の御利益で、安否が聞きたうござります。

藤吉　さうぢやとも、何でも神信心より外はないわい。
ト此内舞臺へ來る。清六等四人は是を見やり顔見合せそれに違ひないといふ思入あつて、
仁太　オ、此方は久喜のかしく殿ではござらぬか。
かよ　エ、。（トギックリ思入あつて氣をかへ）イ、エ、左様ではござりませぬ。
仁太　先頃假宅へ參つた時、勤めをしてゐたかしく殿に、寸分違ひはない筈ぢやが。
ト是を藤吉かいとり、
藤吉　何方様か存じませぬが、是は私の貰ひ娘。何かお目違ひでござりませう。
清六　かうもよく似た者はない、一體分身と申す位、シテお住居は何方でござるな。
藤吉　へイ、宅は深川の、イエナニ深川へ假宅を、イエ假越致してをりましたが、唯今は此近邊へ住居を尋ねてをりまする。（ト汗を拭ひながら藤吉よろしく思入。）
清六　ハ、ア、これでは愈々。
四人　間違ひかな。（トみな〳〵不審の思入。）
藤吉　先を急ぎますから、失禮御免下さりませ。
清六　是は人違ひで失禮でござりました。（ト是にて藤吉

おかよ上手へ行き、)

藤吉　すんでの事に。イヤまだ虎の門まで餘程あるの。

ト藤吉おかよと連立ち上手へはひる。四人後を見送り

大六　櫻井が足を近く通つたかしくに瓜二つ、彼奴がゐたら嘸思ひ出すだらう。

仁太　どうもあの女郎に違ひないが、様子がすつかり變つてゐるので、何分胸に落ちぬわえ。

ト此内源彌松田の入口を見やり、

源彌　ヤ、下足の内に、櫻井の履物が見えるぞ。

大六　オ、櫻井ぢや、オイあの履物の客はどんな男ぢやの。

竹松　あのお客は三十近う、いゝ男のお武家様でございまする。

大六　オ、それでは慥かに櫻井ぢや、イヤ是は地獄で佛の譬、かしくを土産に押上り、知らせてやると致さうわえ。

源彌　是はいゝ思付、サ直ぐはひるがよい。

清六　實に天の、

四人　助けでござつた。

ト矢はり右の唄にて、若い者竹松案内して四人の者入口へはひり、

竹松　お四人さん。(ト聲して、若い者下足をつける。)

芳松　侍でもこちとらでも、文なしの時は同じ事で、よくよく彼奴もひつてんと見えるの。

ト替つた合方になり、入口より序幕の鳶頭分銅銀次着流し駒下駄にて出て來り、

銀次　ヤ、芳に金公、俺は四丁目まで行つて來るから、十日で店が忙しいから、よく氣をつけて呉れ。

芳松　今四人揚つた侍などは、人氣が悪さうでございますぜ。

銀次　オ、悪さうと言へば、今一緒になつた二階の侍は、此春成田の開帳でとつぷり暮れて乙女橋を通つた時に、往來の者へ喧嘩をふつかけた奴に違えねえ、酒の上が悪さうだから、あの客も氣を附けねえよ。

金太　今の四人と一緒になつちやア、此方ア思ひ遣られますね。

銀次　松田も日増に繁昌するが、長ッ尻と酒の悪い客は、出入の者には禁物だの。

芳松　おまけに今日は悪込みで、

金太　もう番附は、

芳松　餘程ございませうね。

銀次　今に彼是。(ト指を折るを道具替りの知らせ、)　三

百番だらうよ。

ト此時ワアツと鬨の聲を上げる。やはり幕あきの唄にて賑かに道具廻る。

本舞臺一面の平舞臺、上手一間の床の間。此しも縮心に腰張の茶壁。正面裾通り手摺附の廊下。向ふ銀座通りの屋根を見たる中遠見。下手一間の附屋體。腰こ。いつもの所二階の上り口。三方手摺附。壁に小判六十日の張札。すべて銀座松田二階の體。上手に以前の大工赤身の伊太郎。百姓胴六八十八の兩人酒肴を並べ酒盛をしてゐる。此間に衝立を置き、下手に序幕の櫻井武雄袴大小にて松田の下女お京を捉へ、少し醉つてゐるこなし。傍に以前の清六等四人の侍車座になり、酒肴を置きとも〳〵からかつてゐる。上手後ろの方に矢張り衝立にて仕切り、前幕の下男金六同じく酒を飲んでゐる。下手の後ろに序幕の成田講中四人酒盛をしながら藤八を打つてゐる此模樣を角力甚句にて道具留る。と、後ろの講中しきりと拳を打つ。櫻井等五人うるさいと云ふ思入あつて、

清六　ヤイ〳〵、ちつと靜かにせんか、騷々しくて話が出來んわ。

櫻井　コレ下女、ちつと尻を落附けて酌をして吳れてもよいではないか。

お京　お酌をしないとは申しませぬが、正五九の十日ゆゑ、金比羅樣で此通り混合つてをりますから、少しでも空きますと直ぐ此方へ參ります。

ト此時上手の伊太郎手を叩く。

へ――イ。唯今まゐります、ソレ御覽なさいましな、あの通りお手が鳴りますから、どうぞお放しなすつて下さいまし。

櫻井　イヽヤ放さぬ、何だ、あんな職人と田舍者の客を選ひ、用があるなら自身に誂へに行くがよい。

お京　それでもあなた、お客樣でござりますもの。（ト行かうとしても櫻井放さぬゆゑ）一寸お松どん、二百二十番へ行つて下さいよ――。

お松　アイ〳〵。

ト聲して下より下女お松襷がけ前垂にて出て來り、上手へ行かうとするを、仁太郎其袖を捉へ、

仁太　コレ、淋しくつていかねえ、手前も爰にをつて酌を

して呉れ。
お松　そこにお京どんがをるではござりませぬか、外のお客様の間が缺けますから、御常談なすつては困ります。
大六　ナニ間が缺けたつて介意やアしねえ、相手は町人、此方は侍、上と下で位が違ふぞ。
ト此内上手の大工伊太郎始終癪に障るこなしにて、下手を睨む。此後ろの衝立の蔭より金六立上り手を叩きながら、
金六　オイ／＼姐さん、酒の代りをつけて呉んなせえ。オイ／＼。（ト頻りと手を打つ。）
お京　ヘイ／＼畏りました。（ト階段の口へ思入あつて、）一寸、二百七十番へ御酒が替りますよ。（ト階下にてアーイと返事する。金六又手を打つて、）
金六　オイ／＼姐さん、早くして下さい。
櫻井　エヽ煩え、靜かにしろ、爰は野原ぢやねえ、松田の二階だぞ、下女も爰にをつて聾ではないわい、莫迦者め。
トキツと言ふ。是にて金六びつくりしてそつと衝立の蔭へはひる。
清六　折惡しく金比羅の緣日に當るので、近在から百姓共が參詣に來る輩が、爰へどか／＼揚つて來るので、是にはほとんど閉口した。
大六　左樣々々、銀座通りの砂埃で表二階は恐れるのに日向ッ臭い一座では弱ります。
源彌　肴が新しいと酒がよいから、外へ行かずに爰へ來るが此後十日だけは除かねばいかん。
仁太　田舍者や職人を見ながら、酒を飲むのはどつとせんから、二人とも爰にゐろ／＼。
ト此内大工伊太郎じり／＼しながら、
伊太　何處の唐變木か知らねえが、御大層な熱を吹きやアがつて、乙う侍風を吹かす客があるが、松田の二階でも買切りやアしめえし、人をつけ、ちやんちやら可笑しいごたくを吐きやアがらア。オイ姐さん／＼、誂えの物があるのだ、來て呉んねえ／＼。
ト田舍者職人は心遣ひのこなしにて、氣を揉みながら、
胴六　ア、モシ／＼、何がお腹が立つか知りましねえが、何事も酒の上の事、料簡してやらつせるがよい。
八十　わし共ならもう充分先程から呼ばれましたから、是で飯を呼ばれてお暇致しますべえ。
伊太　莫迦言ひねえ、こんな肴で飯が喰へるものか、俺アお前のやうなびく／＼可恐がる人は大嫌えだ。何事かあ

りやア俺らが背負つて立つから、いゝから默つて任して置きねえ。
ト鉢卷をして肌を脱ぎ腕を叩く。百姓下女心遣ひのこなし、是にて櫻井四人聞耳立て、
清六　コリヤ隣りの町人、靜かに致さんか、一座の客へ無禮であらうぞ。
ト是にて大工伊太郎居直り、少し下手へ向ひ、
伊太　モシ旦那、何が無禮でござりますえ。
清六　無禮ではあるまいか、何か我々五人の者へ差障りのある物の言ひやう、餘り申し募ると其分には置かんぞ。
ト刀を取つてキツとなる。是にてびつくりして飛びのく。下女二人中へはひり、
お京　ア、モシ旦那樣、マアお待ちなさいまし、間違ひでもござりますと、主人が迷惑致しまする。
清六　イヤ斯樣な奴は懲らしてやらんければ癖になるわえ。
お京
お松　それでは私共が難儀を致しますわいなア。
伊太　エ、打遣つて置け〳〵、二本差と火事が可恐くつては江戸の住居が出來るものかえ。かう見えても圖體の大きいのと、積りものをするんぢやア、何處の丁場でも引を取つた事のねえ兄哥だ、憚りながら腕には筋鐵がへえつてゐるぞ、笑かしやアがる人を見損なやアがつたか。
ト田舍者兩人震へながら伊太郎を宥め、早く階下へ行けといふこなし。伊太郎は氣味の惡きを隱し威張る。此時下手の講中又拳を打ち出す。上手の衝立の蔭より金六額を出し手を叩きながら、
オイ酒の替りを呉れさつせえと言ふに、何うしたえ。
ト手を打つ。下手にては拳を打つ。櫻井煩いといふ思入あつて、
櫻井　エ、喧しい、汝等までぶつた斬るぞ。
金六　エ、。
トびつくりして又衝立の蔭へはひる。下手にても拳を止める。下女金六へ心遣ひのこなしにて、
お京　あなた唯今參りますから、少々お待ちなすつて下さりませ、お酉どん〳〵。
ト呼ぶ、アイ〳〵と梯子の口より下女お酉襷がけにて出て來る。
二百七十番の御酒を早く出してお呉れよ。
お酉　階下が込むので法返しが附かないよ。
ト是にて梯子の口へはひる。お松は上手へ行き、

お松　誠にお氣の毒樣でございます、却つて御迷惑でございませうから、少々此方へお寄りなすつて下さいまし。

伊太　ナアニちつとも恐れる事はねえのだから、くツついてゐても介意やアしねえが、爰の家の迷惑になつては氣の毒だ、何處へでも行つてやらうよ。

お松　生憎階下も込みますから、どうぞもう少々其方の方へお寄りなすつて下さいまし。

お京　どうかあなた樣も、何分お取成を願ひます。

ト百姓へ頼み伊太郎を宥めながら少し上寄りへ酒肴を片附ける、此内階下より下女お酉燗徳利を持ち出て來り、金六の所へ置いてはひる。櫻井等五人は上手を見やり笑ひながら、

櫻井　ア、やう／＼の事で合長屋が少し先へ引越して、邊りが涼しくなつて參つた、各々チト寢轉んではどうでござるな。

清六　貴殿は餘程廻つてゐるが、身共等は新入ゆゑ、是より十二分に飲むつもり。

大六　手前等にはお介意ひなく、横におなりなさるがよい。

源彌　コリヤ、枕を一つ貸して呉れ。

お京　ハイ畏りました。（トモヂ／＼してゐる。）

源彌　エ、早く持つて來んかえ。

ト是にて下女兩人顏見合せ困つてゐる。此内櫻井は手枕にてゴロリとなる。此時階下にて、

呼び　お一人さん。

ト聲して賑かな合方になり、階段の口より以前の下女お酉案内して、前幕の梅田雅樂之介袴なり紺足袋、大小にて扇をつかひながら出て來り、

お酉　今日は金比羅樣で此通り一杯でございますから、お狹いのは御勘辨なすつて下さいまし。

雅樂　ア、よい／＼、一寸支度を致すばかりぢや、どんな隅でも苦しうないから、邪魔にならぬ所へ案内して呉れ。

お酉　お京どん、何處がよからうね。

お京　彼方へ願つてお呉れよ。

ト上手大工の伊太郎の次へ指圖する。是にてお酉案内して雅樂之介を上手へ伴ひ行く。此時横になりたる櫻井下女の足の所へ刀をヅツと出す。是にて下女踏むまいとするはずみ、思はず跨いで向うへ行く。櫻井その裾を捉へ寢た儘にて、

櫻井　ヤイ待て。

お酉　是は誠に粗相致しました。眞平御免なすつて下さい

まし。
櫻井　イヤ料簡ならん、假染にも武士たる者の刀を女子に跨がれては、此儘では料簡ならん。
トキツといふ。此時雅樂之介櫻井を見やりハツと思入女中はブル／＼震へながら心遣ひの思入。雅樂之介是を見兼ね素知らぬ振にて下手下にゐて、
雅樂　唯今手前を案内致す下女が粗相致せし由、手前もともどもお詫び申せば、どうぞ御勘辨下さりませ。
ト此内講中の客は後ろより見やり、伊太郎は上手に立上り、金六は下手へ出て、双方より此様子を見やり、雅樂之介へ心づき、悄りなし、
伊太　ヤ、あの人は久喜で見掛けたお侍だ。
金六　オヽ此方様は、
ト言掛けるを雅樂之介コレと制す。此内櫻井起上り心附いて、
櫻井　ム、成程、貴殿は深川の久喜萬字で出逢うた御仁か。
雅樂　思ひがけなく又爰で。
櫻井　圖らず面會致せしは。
雅樂　よく／＼盡きせぬ、
兩人　御縁でござるな。（ト兩人よろしく思入。）

清六　ム、然らば貴殿は此仁とお近附でござるかな。
櫻井　いかにも當春假宅で、わが娼妓のかしくより買論致した事がござつた。
清六　ア、扨は話に承はつた、彼の色男でござるかな。
櫻井　所がそれも大違ひ。二人共に身請も致さず、虻も取らず、蜂も取らず、其場は其儘別れたのだ。
雅樂　知らぬ御仁と存ぜしに、圖らず御目に懸る上は、下女が粗相もお許し下され。
櫻井　そりや勘辨も致さうが、シテ其許は何れの御藩だな。
雅樂　サア、それはな。
清六　何れの御藩か承はり、其上御挨拶致すでござらう。
金六　西國でござるか中國でござるか、但しは北國か。
大六　主人の姓名承はり、
源彌　仕儀に依りなば唯今の、
櫻井　無證は勘辨、
四人　致すでござらう。
雅樂　是は又改まつたる其仰せ、僅か下女が粗相より、成替つてお詫び致すに、それ程までお糺しなくとも、よからうやうに存じますが。
櫻井　貴殿は下女の粗相と言ふが、此方の相手は其方だ。

雅樂　何と仰せらるゝ。（ト合方キツパリとなり）
櫻井　よく聞かれよ、爰らにゐる職人とか、又江戸に馴れぬ田舍者とか、あれにゐる町人などなら蟲けら同然相手にならぬが、貴殿は立派な武士ではないか、何故此前を通る時挨拶を致さぬのだ、それで人の扱ひが出來ると思ふか、考へて見るがよい。
雅樂　是は又迷惑千萬。まだ其許の前へも行かぬに、何で御挨拶が出來ませうぞ。
清六　イヽヤそりや言拔だ、此仁の前へは行くまいが、我我の前へは參つたぞ。
源彌　左すれば無禮であるまいか、サア主人の名前を言はつせえ。
大六　サア何れの御藩だ。
四人　承はりたい。
トキツと言ふ。是にて金六と伊太郎忌々しいといふ思入ある、
雅樂　實は先頃深川にて、お出會ひ申せし其時より、我が不身持に江戸にをられず、據所なく國許へ、戻りし後は寄邊なき、浪人者にござりまする。
櫻井　ナニ浪人者でござる。こりや面白い。浪人でござれば猶料簡相成らぬ。
雅樂　そりや何故でござるよな。
櫻井　此方五人も浪士でござる。
雅樂　エ。
櫻井　互ひに浪士の身の上なれば、主人に憚る所はござらぬ、立合の上勝負を附けよう。
雅樂　是は又思ひも寄らぬ、素より武術も未熟の拙者、無禮をお詫び申すのみ、立合などは望みにござらぬ。
櫻井　然らば相手は貴殿故、無禮を致した其代り、此方でも銘々、無禮を致すがよろしいか。
雅樂　そりや手前が無禮致したと、お見込あればどのやうにも。
櫻井　言分はござらぬか。ム、然らば無禮を致すでござる。
ト櫻井片足を雅樂之介の胸の邊りへ突出す。是にてびつくりして、
雅樂　こりや武士たる者の面前へ。
櫻井　足を出したが何とした、無禮をしても介意はぬと、おのれの口から申した上は、よもや手出しはなるまいがな。
雅樂　ム、。

ト是にて金六伊太郎傍へかゝり立掛るを、雅樂之介コレと制し、櫻井の足を拂ひ双方キッと見得、此内皆々心遣ひのこなしにて、女中階段の口へ行き、

下女　誰ぞ來て下さいまし／＼。

トワヤ／＼言ふ。合方バタ／＼になり、梯子の口より松田女房お君前垂がけにて急ぎ出て來り、此樣子を見てびつくりなし、

お君　是は何の間違ひでござりましたか、手前方の行屆かぬのでござりませう。どうか御双方とも御料簡なすつて下さりませ。

櫻井　貴樣は何だ。

お君　ハイ、私は當家の家内でござりますが、折惡しく連合が他行致してをりますから、代りにお詫びに上りましてござりまする。

櫻井　最初は女の無禮だが、今の相手は此侍、決して案じるには及ばねえ。

お君　イエ／＼何方に致せ、間違ひがあつては濟みませぬどうぞ穩便にお願ひ申上げまする。

伊太　俺ア先刻から癪に障つてならねえのだ。旦那、何を愚圖々々してゐるのだ。どうか片を附けてお仕舞ひなせえな。

トやつきになるを田舍者止める。

お君　あなた方までさう脇から御立腹では困ります。どうぞお靜かになすつて下さりませ。

金六　モシ名を言つて惡けりや申しますめえが、此金六も附いてゐますぜ、若し危くなつたならば、主人の所へ駈付けて、先生樣にお願ひ申しますぜ。

ト言掛けるを雅樂之介心遣ひのこなしあつて、

雅樂　コリヤ／＼何を申す。以前ならば知らぬ事、當時は賴る所なき居所定めぬ浮浪人。何處にも知邊はあらざるぞ。

金六　それでも見す／＼先生樣の、

雅樂　まだ／＼申すか、控へてをれ。（ト是にて金六拳を握り。）

金六　ア、業の煮えるこんだな。（ト下手下にゐる。）

櫻井　イヤナニ各々、現在武士が足を出しても一言半句も申さぬは、高の知れたる豆腐侍、是が所謂田樂武士だ。

淸六　左樣でござる。當春江戸にをつた者が、再び國へ行つたとあれば、申さば勤番同樣な國侍も同じ事。

大六　江戸の味が忘られず、浪士の身として遙々と御膝許

へ再び來て、麥飯擧句で松田とは、ちつと奢りの沙汰であらう。

源彌　虎の門の御濠端、甘酒店の婆アを相手に、小鰭の鮨か久保町の、一膳飯が相應だらうよ。

仁太　勝手も知れぬ松田へ揚り、貴殿は眼が眩んだのか。イヤサ、武士の前とも氣が附かぬか。

櫻井　武士の口から手出しはせぬと、申したからは相違はあるまい。是でも異議はあるまいな。

ト雅樂之介が置いたる刀の柄を蹴飛ばす。皆々悔りして、

金六
伊太　コリヤどうも。

ト兩人立上るを伊太郎を田舍者止め、金六は雅樂之介抑へ、

雅樂　コリヤ他人の此方の志、親身も及ばぬ忝いが、怺へてゐるも師の教へ、決して武士の恥辱でないわえ。

トぢつと思入。

金六　何處まで勘辨強い事だが、わしや堪忍袋の緒が切れたに。

伊太　いけねえまでもやつて見るが、職人とは料簡が違ふな。

ト雅樂之介櫻井四人に向ひ、

雅樂　かくまで御立腹なされしを、唯今の挨拶にて御料簡下されば、身共は元より當家の仕合せ、有難うござりまする、是は御内儀、此方も却つて迷惑であつた、爰にをつてもお邪魔であらう、一寸支度を致す内、何處でもよい、案内して呉りやれ。

お君　御勘辨強いあなた樣で、私共まで助かりました、左樣なれば御案内致しますから、階下へお出で下さりませ。

雅樂　失禮御免下されい。（ト立上り、女房お君案内して下手へ行きかゝるを、）

櫻井　イヤ暫く待たつしやれ。

雅樂　何御用でござるな。

櫻井　勘辨するともしないとも、返答なき内ツカ〳〵と、何で此場を立つて行くのだ、ア、聞えた、こりや何ぢやな、身共を穢多か乞食同樣忌嫌つて立つたのぢやな。

雅樂　是は思ひも寄らぬ事、再三詫入る程の事、何で隔てを致さうぞ、こりや御手前が御酒機嫌で、何か間違ひでござらう、此方左樣な覺えござらぬ。

櫻井　イ、ヤ見下げて立つたに相違ない、さう見下げられ

ては料簡出來ぬ、どつちが見下げる腕前だか、此場に於
て勝負を致さう。

　ト是にて雅樂之介思入あつて、

雅樂　コリヤ何か遺恨があつて申さるゝか。

櫻井　いかにも、かしくの遺恨がある。

雅樂　シテ其仔細は。

櫻井　かしくの身請の事よりして、恥辱を受けし其返報、折がなあらば返さうと、思設けし此出會、遺恨を晴らさにや相成らぬ。

雅樂　扨はあれを根に持つて、そりや其許の心得違ひだ。

櫻井　何だと。（ト替つた合方になり。）

雅樂　素より無骨の某ゆゑ、遊里へ立入りし事なきを、開帳かけて朋友が、勸めに一二度誘はれ、揚る久喜の奥座敷、圖らず落合ふ相客に、身請の話の買論も、中へはひりし主人が詞に、娘にするとの一言に、其爭ひも解合つて、互ひに其場は別れし故、遺恨殘らう筈はござらぬ。

櫻井　イヽヤ左樣ではない。貴殿がかしくに熱くなり、足を近く來ると聞き、身共も武士の恥辱ゆゑ、遊里の意地に萬字屋へ、通ひ詰めたる其果が、遂に師匠に破門され今日かゝる浮浪の身の上。事の起りは其許ゆゑ、一度ならず二度までも恥辱を、

清六　浪人同士が落合つて、互ひに腕を磨いた上。

大六　切られて死なばそれまで故、イデ腕くらべを、

四人　致すでござらう。

雅樂　サアそれは。

櫻井　浪人しても魂は、錆びぬ鍛への直燒刄、覺えの腕前見せて呉れん、イザ此所で立合はつせえ、誠の武士の魂は、斯くの通りだ、是喰へ。

　トキツと思入あつて刀を拔き、雅樂之介の目の前へ突出す。雅樂之介思はずぢつと刀を見込み、扨はといふ思入あつて、指にて寸をとり、

雅樂　ヤ、コリヤ和泉守國貞の銘刀。（トぢつと見込む。）

櫻井　鑑定通り和泉守國貞、堀部安兵衞所持の一刀、然も今年で十七年前、公儀へ勤役致す砌、御船藏にて狼藉者を討果したるわが腕前、中身を見たら震へようがな。

雅樂　ヤヽ、スリヤ十七年前御船藏にて討果したは此一刀。

　トぢつと見やり、無念の思入。

櫻井　サア立合へ、それとも一命惜しいのか。

清六　立遲れが致したか。（ト雅樂之介を蹴る。是にて雅樂之介キツとなり。）

雅樂　村田小八、よくも恥辱を與へたな。

櫻井　ヤ、我が本名を存じをるは。

雅樂　過ぎし天保十一年、御成の戻りに遺恨より、内宮新太郎殿を討ちしは其方、そは我が父の恩人なり、又二つには御身を覗ふ息女の復讐、まつた是にて我が受けし武士の恥辱に捨置き難く、かた〴〵以つて此所で、イデ返報の致して呉れん。

櫻井　それ知られたら、もう是迄。

ト切つてかゝる。此途端雅樂之介一刀を引拔き双方見構へ、キツと見得。是を誂への合方になり、四人慌てて後ろ鉢卷下げ緒の襷拔身にて身構へなし、金六伊太郎は尻端折り鉢卷、あたりを片附け加勢をするこなし。是を田舍者兩人震へ〳〵心遣ひの思入。女房女中はうろ〳〵して、

お君　誰ぞ男を呼んでお呉れ〳〵。

ト階子の口へ逃げてはひる。後ろにゐたる講中の客も一統上り、氣味わる〳〵逃げようとする。此内双方睨み合つた儘見合つてゐる。バタ〳〵にて階下より幕あきの若い者印半纏六尺棒を持ち上つて來り、此體を見てびつくりなし、後へ下る。此内櫻井の方ヂリ〳〵と後へ下る。清六等四人心遣ひのこなしあつて、一人此中へ打つてかゝるを雅樂之介一刀に斬下げ、上下へ分れてキツと見得。是より竹笛入り誂への合方になり、雅樂之介に櫻井四人がゝりの立廻り、其内仁太郎又討たれて倒れながら。

仁太　參つた〳〵。

ト聲かける。相客は皆々上下へ逃げてはひる。大工の伊太郎と金六殘り、やつきとなつて三尺帶を解いて足がらを掬はうといふこなし。金六は立廻りの間へ衝立を邪魔に出す事よろしくあつて、トヾ雅樂之介は兩人の侍を切倒し、敵役一人後ろへ逃げてはひる。後櫻井と烈しき立廻りあつて、櫻井を二階の上り口へ押しゆく。爰にて一刀に斬下げる。是にて櫻井階子段へ落ちる。雅樂之介片足踏みかけるを道具替りの知らせ。金六と伊太郎拔身を持つて階下を見込み畫面の見得。は上手に飛上つて、

金六　偉えものだ〳〵。

伊太　こんな好い心持な事はねえ。

ト此模樣誂の合方にて此道具廻る。

本舞臺上寄りに常足六枚飾り、上手大臣柱より斜に幅廣の段階子。此下一面表の出格子を見たる張物。下手落間。此向う一間の入口。是に揚戸を下ろし、是より下手同じく出格子の内、すべて松田店先の體。二重に以前の櫻井肩先を斬られ糊紅になり、二階を見込み刀を差付けてゐる見得。門口の外鐵棒の音、人を制してゐる聲ワヤ／＼する。此模樣前の合方にて道具留る。と、二階より雅樂之介拔身にて悠々とおりて來り、邊りへ思入。櫻井は起上り斬つてかゝり、双方手利の立廻りあつて、トゞ一刀に櫻井を斬倒し、止めを刺さうとしてぢつと見やり、止めには及ばぬといふ思入。バタ／＼になり二階にて、

まだ一人ゐた／＼。

ト騷ぐ。バタ／＼にて二階より以前の侍一人拔身にておりて來り、是を金六伊太郎心張棒を持ち追ひかけ來る。是にて侍下手へ逃げ行くを雅樂之介一刀に斬倒す。是にてほつと思入。大工伊太郎上手へはひり、盃洗へ水を汲んで來り、

伊太　旦那、嘸お草臥れなすつたらう、マア息繼に水を一杯お上りなせえまし。

ト汗を拭きながら出す。

雅樂　イヤ忝いが、別に息も切れぬわえ。

伊太　エ、何ともねえエ、素晴しいものだねえ。（ト此内手足の血を拭きながら、）

雅樂　金六殿、刀の血を洗ひたうござれば、水を一杯お持ち下され。

金六　刀の血なら介意ひましねえ、此死骸の着物で拭いておやりなされませ。

雅樂　イヤ左樣な無禮は武士の法にござらぬ、どうぞ水を下され。

金六　ハ、ア義理固いものでございますな。

ト金六下手へはひり、直ぐ銅盥へ水を入れ持つて來り手先震へ水を滾しながら下へ置く。是にて雅樂之助手を洗ふ。伊太郎持合せの手拭を出し、

伊太　旦那、テ、、、手拭をお使ひなせえまし。

ト同じく震へて渡す。是にて雅樂之介刀と手とを悠々と洗ふ。此内門口の外にてワヤ／＼人聲して鐵棒の音する。此内よろしく手を拭ひ雅樂之助眞中へ住ひ、拔身を構へる。兩人見てびつくりなし、仰向に引くり返る。バタ／＼になり、入口の潜りより幕あきの蔦頭銀

次、尻端折りにて走り出て來り、刀を持つたる雅樂之介の手を捉へ、

銀次　梅田樣、御切腹なされずとも、マアお待ちなされませ。

雅樂　オ、銀次殿、其心遣ひは忝ないが、決して切腹などは致さぬ。是より速かに申開きを致すから、安心して下され。

銀次　ア、それでは御切腹ではございませぬか、私は惆り致しました。

ト此内雅樂之介刀を鞘へ納め、

雅樂　此大小は調べまで、金六殿預かつて置いて下されい。

金六　ハイ〳〵畏りました、慥かにお預り申しまする。

トバタ〳〵にて、上下より以前の松田の女房お君を先に、若い者、講中の者四人、田舎者二人燭臺を持つて出て來り、

お君　實に飛んだ事になりまして、申上げやうもございませぬ。

雅樂　手前は素より覺悟なれど、當家へ對して氣の毒にござる。

伊太　旦那の事については、何處までもわつち共二人が。

金六　出る所へ出て證人に立ちまするから、お案じなさいますな。

ト鐵棒の音バタ〳〵にて、入口より藤おきの芳松尻端折りにて出て來り、

芳松　二階にゐた講中の衆が斬られたといふ噂で、總出で押して來ましたので、通り町は大騷ぎ、何とか言つてやつて下せえ。

雅樂　左程群集致すとなれば御同道下されて、京橋の若松まで參るでござらう。

お君　若松でございますれば、一つ家も同樣ゆゑ、少しも遠慮はございませぬ。

銀次　私始め一統で、

伊太　お送り申して、

皆々　參りまする。

雅樂　然らば支度を。

ト立上るを道具替りの知らせ。

致して參らう。

ト袴を解く。皆々氣味の惡き思入。女房お君死骸を見てゾツとする。此模樣鐵棒の音、木遣りくづしにて道具廻る。

本舞臺元の店先の道具、揚戸を締切り、松田の高張二本入口に建て、爰に成田歸りの講中惣出にて長提灯を持ち、此内に竹の先へ小提灯を附けたるも混り其外竹ヶ又は大根河岸市場の印半纏、思ひ／＼の仕出し大勢ワヤ／＼言つてゐる。入口に幕あきの鳶の金太鐵棒にて制してゐる。此見得やはり木遣りくづし囃子にて道具留る。

金太　成田歸りと店の騒ぎが、ごつちやになつて大混雜、往來が通りきれねえから、通つて吳んねえ／＼。

講一　イ、ヤ通られねえ、講中の者が二階に居合せ、斬られたといふ噂。

講二　其安否を聞かねえ内は、仲間の誼で歸られねえ。

講三　一統店へ、

皆々　入れて吳んねえ。

ト　バタ／＼になり、潜り戸より銀次先に、芳松講中四人出て來る、

銀次　案じなさるのは尤だが、此通り無事だから、皆さん靜かにして下せえ。

客　オ、、此方の連中は無事だから、

四人　どうぞ安心して下さい。

講一　其奴アまあよかつた。さうして誰が斬られたのだ。

客一　斬つた侍は蜊河岸の茂々之井の門弟で、滅法界な手利であつた。

客二　何でもそれと初まると、一刀に斬下げてしまつた。

芳松　何でも此奴ア近い内松川か喜代竹あたりで、貞山か花晴の讀物になるのだ。

銀次　今京橋の若松まで行きなさるから、よく道を氣を付けて吳れ。

芳松　御出役のねえ内に、早く連れて、

金太 芳松　行きてえものだ。

ト　やはり右の合方バタ／＼になり、上手より幕あきの久喜萬字の亭主藤吉、娘おかよの兩人足早に出て來り皆々の中へ割つてはひり、

藤吉　モシ／＼頭、今松田で間違ひのござりましたは、何處のお侍か御存じはござりませぬか。

銀次　詳しい事は知りませぬが、舊茂々之井の門弟で大層な手利だと申しますが、今直ぐに京橋の待合まで行つて、御出役を待つ心算でござりますから、爰にゐて御覽なさい。

藤吉　有難うございます、ア、、どうかあのお方でなければよいがの。

ト入口の内にてワヤ／＼いふ。鳶の者入口を制す。

モウ出て來るぞ／＼。

ト鳶の者鐵棒にて警固して、入口より若い者松田の弓張を點け、雅樂之介無腰、金六後より雅樂之介の大小を抱へ、伊太郎田舎者兩人附添ひ出て來る、これを藤吉おかよ見てびつくりなし、

藤吉　オ、、梅田樣でございましたか。

かよ　どうしてかういふ事になりましたか。（ト兩人下にゐて愁ひの思入。）

雅樂　おかよ樣、お悦びなされませ、御親父を討つたる敵を、討果してございまする。

かよ　エ、、スリヤ豫ての望をお前樣が、有難うございまする。

藤吉　娘の行末お案じなく、御吟味お受けなされませ。

雅樂　出役出張なき内に、

銀次　お供致して參りませう。

トバタ／＼になり、上手より幕あきの野師はつたり半次逃げて出て來るを、後より手先追ひかけ來り、手早く繩をかける。

見物　ヤア、やらずの最中がふんじばられた

皆々　態ア見やアがれ。

ト ワヤ／＼云ふ。銀次是を制し、

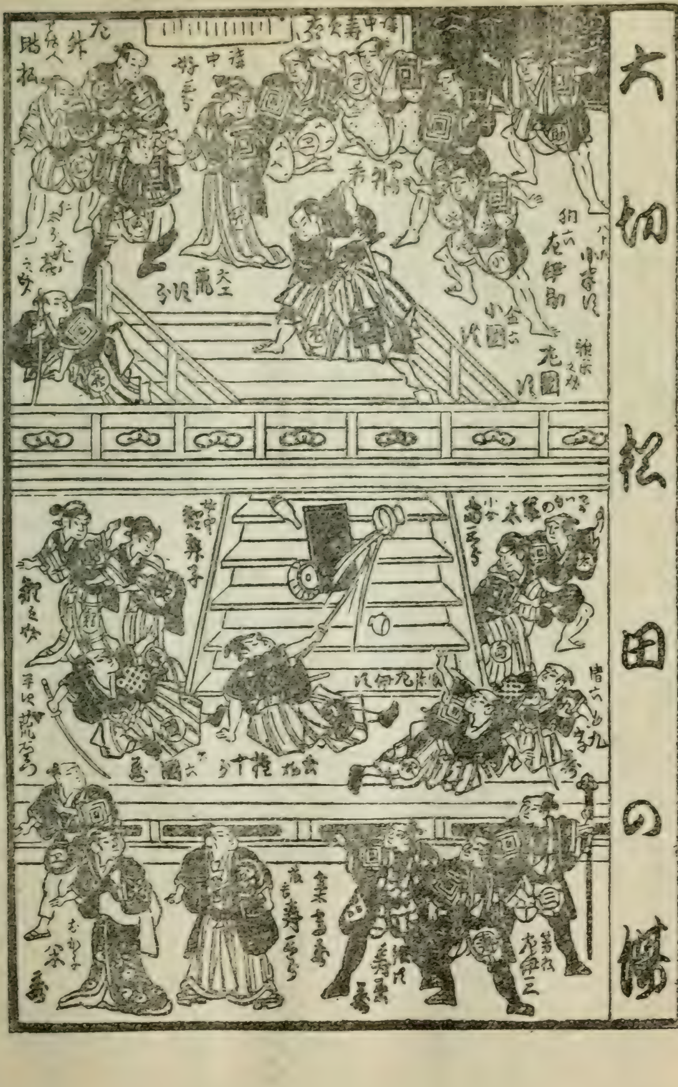
銀次　サア往來を明けて呉れ／＼。

ト鳶の者鐵棒を突く。是にて皆々上下へ別れ、雅樂之介を眞中に皆々引張りよろしく、

先づ今日は是限り。

ト目出たく打出し

松田の仇討　（終り）


大切松田の場

櫓紋に緣のある時候は丁度櫻時身替お俊の緣切に身にふりかゝる小三郎養父須之崎政五郎が義理ある娘の延わかを引裂く心の暗の夜に三圍堤の心中は後の噂に鳴鐘の證據に賊の汚名を受け佐倉へ引かるる佐島天學其頃丁度木挽町の芝居は扇屋熊谷にお囃子部屋の纏から立入る芳村金四郎が丸く納まる幸先に五半時の御奉書到來妙貞お桂淸之丞は夢か現か斷食堂で不動の利益に祐天が樣子をさぐる山番勝五郎お元が安達の門附に見れどめくらの電庵が藤村浦太に拷問受け名乘れば互ひの身の惡事入組捌きも名奉行遠山殿の裁判にて晴し月夜の新潟驛行形亭にて角太夫が捕物迄を書畫の綴込

遠山櫻天保日記

五冊



遠山櫻天保日記（五幕）

序幕

花川戸稽古所の場
隅田川三圍堤の場
清元連中

役名……浪士、生田角太夫。須之崎政五郎。淨雲寺の番僧、天學。尾花屋悴、小三郎。尾花屋番頭清六。尾花屋丁稚、辰太郎。經師屋、福松。大工伊太郎。屋根屋、松次郎。角太夫妻、おもと。五十嵐のおゑん。待乳山の小正。清元延わか。尾花屋下女、おいせ。稽古所の下女、おいと。八州の手先等。

本舞臺一面の平舞臺、上手三尺の延喜棚、この下けんどん、この次四尺下地袋、上に不動尊の幅、眞鍮の燈明皿、三寳、榊立飾りあり、この下手腰張りの茶壁、三絃掛け、續いて一間大坂格子の出這入り、上手一間附屋體、三尺の茶立口、腰張りの茶壁、下手一間庇附き腰障子の臺所口、いつもの所家根付きの出格子、軒口へ御神燈、表札に清元延若と記し、ずつと下手二階家の淨瑠璃臺、前側伊豫簾をおろし、すべて花川戸稽古所の體、よき所に朱塗の行燈を置き、こゝに五十嵐のおゑん、島田かつら着流しにて清元の三絃を彈き、前に本を載せし稽古箱、この向ふに尾花屋番頭清六、前垂着流しにて扇を持ち、「落人」を語つてゐる。この脇に待乳山の小正、やはり島田かつら、前垂、同じく三絃を彈き、稽古箱の向ふに經師屋の福松、大工の伊太郎、屋根屋の松次郎三人一座にて「梅の春」を稽古してゐる。この模樣流行唄、團扇の題目太鼓にて幕明く。

三人　〽筆草生ふる浪間より、若芽かるてふ春景色、浮いてかもめの一イ二ウ三イ四ウ五ツ六ウ七八ア。

えん　モシ〳〵、そんなに勘定を餘計にせずと、〽一イ二ウ三イ四ウいつた吾妻へ筑波根の、でござんす。

福松　つい言ひよいものだから、五ツ六ウ七八アと言つてしまひました。

清六　ト跡を語り直さうとすると、番頭清六胴間聲にて、
〽爰は戸塚の山中、石高道で足は痛みはせぬかや。
〽何のこれよりはまだ行先が思はれて、
ト詞の件を厭味に言ふ。經師屋三人は邪魔だといふ思入あつて、

三人　浮いたかもめの一イ二ウ三イ四ウ五ツ六ウ七八ア。

えん　アレサ、そんなに勘定してはいけませんよ。

清六　〽色で逢ひしも昨日けふ、堅い屋敷の御奉公。
ト小正うつかり彈いてゐて心附き、

小正　アレまだ詞があるのに、クドキへ飛んではいけませんよ。

清六　わしはこのクドキが好きだから、つい飛んでならぬ。（ト思入）マア彈いて下さい。〽色で逢ひしも昨日けふ。

小正　アレまだ三絃を彈きはしませんのに。

清六　モウ三絃などには構はぬから、こなたの方は勝手に彈いて下さい。

皆々　〽浮いてかもめの一イ二ウ三イ四ウ五ツ六ウ七八ア。
ト皆々にて一緒に語る。おえん小正兩人も「梅の春」を一緒に彈く。

皆々　何だか、さつぱり分からなくなつた。

えん　一心に稽古さへなされば分からなくなる筈はござんせぬが、何だかうは〳〵と氣が落着かぬからでござんす。
ト皆々は汗を拭きながら、

福松　おえんさんと小正さんが代稽古をして呉れるので、皆さんが稽古より顔ばかり見てゐるので、おち〳〵覺えることが出來ない。

えん　オヤ憚り樣。姉さんを見當に、經師屋の福松さんや皆さんが毎晩稽古に來なさんすに、二人にかずけられては迷惑します。

清六　わしはほんの稽古ぢや。毎晩見世の隙を見ては、かうして稽古に出て來ますが、婦人を當込むなどは一切ござらぬ。

伊太　所が番頭さんが第一番で、生憎師匠がゐないので、今夜は鬱ぎでござりませう。

小正　姉さんは明るい内に髮を洗ふのだといつて、お湯へ行きなさんした。まだお歸りなさんせぬから、今お島どんに提灯を持たして迎ひにやりましたから、モウ直き歸つて來なさんせう。

清六　イヤ左樣なことを言はれると、この番頭迷惑します。

稽古に男女の差別はござらぬ。

ト鹿爪らしく言ふ。

小正　たゞ困るのは、稽古をしてゐて皆さんが脇見ばかりで、ちつとも落着いてゐなさんせぬから。

清六　さういふ譯でもござらぬが、節を覺えようと思ふと、顔をつい見てならぬわえ。

松次　それにこつちで一心に語つてゐても、番頭さんが胴間聲でやられるので實に邪魔でたまらない。

清六　これは御挨拶だ。胴間聲とは失禮千萬。わしが胴間聲なら、こなた衆は調子ツ外れだ。

三人　ナニ調子ツ外れだ。

ト立掛るを、おえん小正の兩人留める。流行唄になり花道より須之崎政五郎絲織着流し派手なる拵へ、駒下駄にて出て來り、門口をあけこの中へはひり留めて、

政五　マア皆さん、靜かになされませ。

トこれにて皆々是非なく鎭まり、

清六　オ、親方、戻られましたか。こなたに留められては面目ござりませぬ。

政五　一體こりやアどうした間違ひでござります。

清六　イヤモウ改まつては言ひ難いが、實は稽古が鉢合せをして、ごつちやになつた所から、つい物言ひになりましたのぢや。

福松　番頭さんのことを胴間聲のと言つたので、つい聲から喧嘩になりました。

政五　聲の喧嘩とは意氣でよいが、よく〳〵聞けば色氣のないこと。そんなことで近所隣へ聞かれても見つともないから、お互に御勘辨なさいまし。

伊太　ナアニ、もと〳〵心安立から起つたこと故、この後とも。

松次　何も遺恨などには思ひませぬ。

政五　シテお若は何處へ參りました。

小正　先刻お湯へ行きなさんしたが、モウお歸りでござりませう。

政五　それでは皆さん仲を直し、お若が歸るまでお話しなすつて、笑つて稽古をなさいまし。

清六　決して心配には及びませぬから、用をお足しなさるがよい。

政五　モウ日が暮れたから、隣りの浚ひへ家元が來なさるだらう。こりやア今夜は稽古より、隣りの淨瑠璃を聞く方がお樂しみでござりませう。

えん　伯父さん、着物をお着換なさいな。

政五　それでは皆さん、ごゆるりとなさいまし。

ト流行唄にて政五郎奥へはひる。

福松　家元といへば、延壽太夫はまだ年は若えやうだが、なぜ延壽翁となつたのだらうな。

伊太　ナアニ天窓の鹽梅では、モウ翁を附けるのも尤もだ。

松次　今夜は延壽の脇が息子の榮壽太夫に、流れが××太夫が來るといふが。

えん　その顏なら三絃は差詰梅吉さんに、上調子は××さんでござんせう。

清六　コリヤ今夜は稽古より師匠の顏を詠めながら、淨瑠璃が聞き物でござりますナ、

三人　番頭さん、本音を吹き出しなされたナ。

ト此時知らせに附き、隣りの二階の伊豫簾を上げる。内に清元連中羽織袴にて居並びゐて淨瑠璃になる。

〽雨の降夜は一しほ床し、冴えては月に猶ゆかし。お俊は一人湯がへりに、浴衣を一寸抱へ帶、紅葉袋にうつろひて、しがらみならぬ横櫛に、ついたぼ上げの平元結。

トこの内小正急須へ茶を淹れ、皆々へ出し、おえんは三絃稽古箱を片隅へ寄せる。よき程に花道より下女お島ぶら提灯と糠袋を持ち先に立ち、跡より清元延若島田かつら着流し、湯上りの拵へ、吾妻下駄にて手拭を持ち、少し離れて角太夫妻おもと、丸髷羽織着流しにて出て來り、花道にて、

おと　モシ／＼そこへお出でのは、延若さんぢやアないかえ。

延若　オヤ阿母さんでござりますかえ。よくお出でなすつたね。

もと　御無沙汰をしたから、一寸お詫びながら來ましたわいなア。

〽夜のあらしの花川戸、馴れにしくゞり押開けて、

ト三人連立ち、舞臺へ來り、門口を開ける。

えん
小正　オヤ姉さん、お歸りなさいまし。

ト清元の合方になり、

延若　皆さんがお揃ひで、嘸お待遠でござりましたらう。

清六　ナアニ稽古はほんの附たり、實は師匠さへ歸ればようござります。

延若　丁度途で阿母さんに逢つたので、連立つて來ましたわいナ。

もと　こちらへも久しく御無沙汰いたしました。

えん　お久振りでお出でござりましたね。
小正　コリヤア淨瑠璃を聞きながら、北村の汁粉か花井の
福松　壽司でも奢りツくらで、阿母さんもお話しなさい。
　ト此内下女上手へ鏡臺うがひ茶碗を出し、小ぶりの燭臺へ蠟燭を點ける。
下女　お師匠さん、こゝへ出してようござりませうか。
延若　ア、そこへ出しておくれ。
下女　ハイ。
延若　稽古をなさらないと定つたら、皆さん眞平御免なさいまし。
〽昨日よりけふは思ひの增鏡、曇るとならば花の空、忍ぶ姿の頰冠り、彳む軒は目覺えの、慥にこゝぞと門の戸を、
　ト此内延若は鏡臺の前へ住ひ水化粧をする。番頭と經師屋連の四人は見惚れる。おえん小正兩人はこれを見て笑ふ。番頭此内涎を垂らすゆゑ、おえん袖を引くと、番頭慌てゝ紛らし文句へ冠せて、
清六　ヨウ〳〵、えらいと申します。
小正　モシ素人の家ではありませんから、靜かにおしなさいましよ。
　ト文句よき程に、花道より尾花屋の伜小三郞、羽織着流し雪踏にていそ〳〵出て來り、下手へ來て衣紋など直し、門口を明けながら、
小三　皆さんお揃ひでござりますな。
　ト内へはひる。これにて番頭悄りして奧へ逃げ込む。跡三人は惡い人が來たといふこなし、おえん小正兩人出迎へ、
えん　オヤ若旦那、よくお出でなさいました。
二人　サア〳〵、こちらへお上りなさいまし。
小三　皆さん、眞平御免下さりませ。
　トよき所へ住ひ、經師屋連三人は不滿のこなしにて、
福松　コレハ若旦那、每晩よく、
三人　御精が出ますノ。
　ト此内延若は身仕舞をなし、下女は鏡臺を片附ける。延若嬉しきこなしあつて、
延若　丁度今お湯から歸つた所、よい都合でござんしたね。
福松　こつちはちつともいゝ事はない。イエナニ、ほんとによい都合でござりました。
　ト三人顏見合せ、癪に障るこなしにて、厭にいふ。

もと　若旦那、いつも御機嫌よろしういらつしやいますな。
小三　オヽ小梅の阿母さん、よくお出でなさいました。サ皆さん、私にお構ひなく、どうぞ稽古をなさつて下さいまし。
伊太　稽古はもう廢しにします。腹が北山だから、馬道へでも行つて飯を詰めるとしませうよ。
松次　さうよ、おいらも一緒に附合ふとしよう。
延若　皆さん、ゆつくりする積りぢやアありませんか。
福松　エヽ又明晩上りませう。人をつけ面白くもねえ。ナアニヽ面白く後でゆつくりお話しなさいましよ。
　トこれにて經師屋連三人立上り、
伊太　若旦那、お先へ。
皆々　さやうなら。
　〽かはる心に傳兵衛は、急き立つ胸を押ししづめ、思ひ直してもたれより、
　ト三人燒餅のこなしにて、下手へはひる。
えん　稽古は附けたり、三人とも根よく毎晩話しに來て、大風の吹いた後のやうでござんす。
もと　今こゝにおいでなすつた、太つたお方はどうなさいましたえ。
延若　アモシ。（ト默つてゐろといふ思入あつて、）若旦那。
　ト一寸囁き、奥にゐるといふこなし。おえん小正兩人思入あつて、
えん　若旦那がお出でなすつたら、私どももうお暇いたします。
小三　何もそんなに、嫌はなくつてもようございます。
えん　ナアニお邪魔だらうと思つてさ。
小正　それもそれ、又お隣りのお浚ひへも顏を出して來ます。
　〽女心は疑ひの、深い中にも猜疑ひ、二人が仲に水さして、無理に引寄せ裏どへば、
　トおえん小正の兩人挨拶して下手へはひる。
もと　私も奥へ行つて親分に御挨拶して來まする。
　ト立掛る。此時奥にて、
政五　イヤお出でには及ばない。わしの方からそこへ行きます。
　ト合方になり、奥より以前の政五郎出て來り、
コリヤア若旦那、お出でなさいまし。おもとさんもよく來なさつた。實はこなたに逢ひたい所だつた。

もと　一寸上ります筈を、御存じの一人身ゆゑ、御無沙汰をいたしました。

政五　から內輪が落合つて、他人が皆歸るといふは、實に今夜は誂へたやうだ。

もと　何ぞ御用でもござりますかな。

政五　この四人で密々にちつと相談しにやアならない。

小三　スリヤ私もとも〴〵。

政五　へイ若旦那。

ト門口を明け四邊へ思入あつて、

實はこの延若と、緣を切つて下さいまし。

皆々　エヽ。

政五　サヽその驚きは御尤も、マア入譯を聞いて下さいまし。（ト清元の合方になり、）晝間あなたのお家から、極內々のお使ゆゑ、人目を避けて上りましたが、御兩親が仰言るには、實はこれまで延若と悴の仲を默つてゐたが、毎晩通ふ弟子のうちで、それからそれへ噂となり、どうもその儘捨置かれず、これが堅氣の娘なら、直ぐ相談も調ふが、親類內へ對しても、稽古の師匠を嫁には貰へず、悴が行つたら三つがなわで、二人が仲を切つて呉れと、事を分けたるお賴みも、考へて見りやアお家のお爲、又家傳りの淨瑠璃も、お俊傳兵衛の緣切りと、無理な事だが若旦那、どうぞ切れては下さるまいか。

へ押入の戸を引明くれば、以前忍びし園生の前、顏見合せて恟りなし、

ト此內政五郎はよろしく思入。小三郎延若はちつと俯向く。文句よき程に、奥より以前の番頭清六出て來り

清六　御兩親の御心配を察して當家へまゐりまして、奥で樣子を聞きましたが、こりやア所詮夫婦などになられぬことは、三世相に詳しく出てゐることゆゑ、お諦めものでござります。

もと　夫角太夫殿が身持が惡さに、五つの年に親方へ、養女にお願ひ申したる、その大恩のあるあなたのお詞、若旦那のお爲とあれば、どうでも切れずばなるまいわいな。

トいへども小三郎延若うつむきゐる。

政五　コリヤ御返事はありますまいが、モシ若旦那、わしも飯岡助五郎と兄弟分の須之崎政五郎、俠客心を持つてゐる男の端と見込まれて、この緣切りを持込まれ、一旦男が受合つて、今更得心ねえからとて、どうのめ〳〵と御兩親へ顏出しがなると思ひなさる、殊更相手はわつち

の娘、どんな異見も加へた上、この入譯を附けなけりやア、名前に對して政五郎は、腹でも切らにやアならねえ場合、こゝはとつくり分別して、どつちなりともきつぱりした返事を聞かして下さいまし。

トキツと言ひ、氣を替へ氣の毒だといふ思入。小三郎思切つたるこなしにて、

小三　よろしうございます。すつぱりと切れませう。

延若　エヽ。

小三　事を分けての今のお頼み、モウ言譯も出來ぬ仕儀。

延若　そんならどうでも、若旦那は。

小三　これを兎やかう言ふ時は、兩親のみか政五郎殿や、おもと殿まで迷惑ゆゑ。

延若　さういふことなら、私もとも〴〵、得心せねばなりませぬか。

政五　無理な事だが、コレ娘、若旦那とも〴〵に得心して上げて呉れ。

延若　アイ。

政五　若旦那、よろしうございますか。

延若　ヘイ。

トちつとなる、政五郎思入あつて、

政五　モウ定つたら若旦那、二人が仲は切れたといふ、證據を書いて下さりませ。

小三　サアそれは。

政五　どうぞお書きなすつて下さいまし。

ト奥より硯箱と紙を持來り突き出す。

小三　ハイ、認めますでござりまする。

〽世の中は何にたとへん飛鳥川、きのふの淵はけふの瀨と、かはり易さに人心、硯引寄せ傳兵衞は、墨さへ薄き縁ぞと、思ひあきらめ書く文の。

ト此内くどき模樣にて、延若泣くを小三郎なだめ、覺悟の思入。番頭清六は緣切を悅ぶこなし。小三郎墨をすり筆を取上げるを、延若書かせまいと止める。これを番頭中へはひり、書けと意地惡をする。小三郎餘儀なく、皆々に見せぬやうに外の事を書き、書損のこなしにて延若に渡す。これを受取つて一寸讀みうなづく。小三郎書直し切れ文を認め、兩人涙ながらに爪印を捺して出す。

政五　よく思切つて下さりました。その代り又此後は御兩親の樣子を見て、悪いやうにはしませぬから、決して心得違ひはなさいますな。

ト小三郎延若泣いてゐる。

清六　さうでござるとも〳〵。決して料簡違ひをしてはなりませぬ。若旦那はこれから先、必らず堅氣な所からお嫁が來るに違ひないから、師匠の方もいつまでも獨り身でもをられねば、かうずつと堅氣な商人の番頭のやうなよい口でもあつたらば、わしが世話をしてやりますからくよ〳〵思はぬがようござるぞや。

ト延若の傍へ顏を出す。

延若　エヽモ、知らぬわいナ。

ト顏を拂ふ。合方きつぱりとなり、下手より尾花屋丁稚辰太郎、前垂懸け、雪踏にて弓張提灯を持ち出て來り、門口を明け、

丁稚　御免なさいまし、若旦那のお迎ひに上りました。

政五　オ、辰どんか、こつちへはひりなさるがいゝ。

清六　サ、お迎ひが參りましたから、私もお供して御一緒にまゐりませう。

ト　これにて小三郎餘儀なく、

小三　そんならこれ限り、政五郎殿、

政五　必らずともに、後日の吉左右。

もと　たゞ何事も御時節を。

政五　お待ちなされて下さりませ。

〽更けて砧の音さへ床し、お俊は跡を見返り〳〵、

ト此內小三郎挨拶なし、力なく〳〵立上り、門口へ行かうとして心の殘る思入。番頭清六早く出ろと急き立てるゆゑ、餘儀なく下手へ行く。文句の切れに延若ツカツカと下手へ行き、

延若　アモシ、若旦那。

小三　オヽ。

〽消ゆる燈火暗きより、心の晴も屛風山、內に思ひや籠るらん。

ト小三郎ツカ〳〵と戻り、兩人待合はすといふ氣味合の思入。延若はおもと、小三郎は番頭丁稚が隔てる。兩人はこれを見送る。この模樣、時の鐘、段切にて道具廻る。

本舞臺一面四尺高足の二重、しゆろ伏せの蹴込み、眞中石段、この下九尺常足の上り場、二重の所々に櫻の立木、この間に一間葭簀張の明き茶屋。向ふ三圍の石の鳥居の笠木、小梅邊の夜の遠見、上り場の上押石位の九石三つ程あり、土手の裾通り所々に水

杭、平舞臺一面の波布。すべて三圍土手上り場の體。波の音、浮いた合方にて道具留る。

ト土手より尾花屋の下女おいせ、丸髷、鉢卷、片肌脱ぎ、片褄はしより竹の皮草履にて、背負葛籠を背負ひ、男の雪踏足駄など澤山繩へ通し、足早に出て來り、

いせ　夜は向ふ越が億劫だから、大廻りをして來たが、今夜のうちに新宿の伯母さんの所まで行きたいものだ。（トれんじやくを直し、）慾と二人連れはこはいものぢやナ。

ト下手へ行き掛る。此時上手にて、

清六　オ、イ／＼

いせ　オヤ、誰か跡から呼ぶやうだが、こゝらで私は呼ばれる人はない。

トバタ／＼になり、上手より以前の番頭清六走り出て來り、おいせに追付き、

清六　コレ、どこへそれを持つて行くのだ。

いせ　オ、よく追ひかけて來さしつた。

ト葛籠を下し、矢庭に清六を捻り倒し、馬乘りに胸倉を取りて押附け、

この悪性男め。よくものめ／＼追ひかけて來たな。コレおいらをうまく騙くらかして、到頭素裸にして仕舞ひ、延若さんの所へ通ひ、笑はれるのも知らずして、色で逢ひしも昨日けふとは、アリヤ一體何の態だ。餘り浮氣をしやアがるから、着物は愚か履物まで引攫つて來た。これから船橋を廻つて房州へ持つて歸る積りだ。サアどうだ、返答が出來るならいつて見ろ。サアどうだ／＼。

清六　コレサ、莫迦なこと言つたものだ。何ぼおれに入揚げたとて、さう根こそぎ持つて行かれて堪つたものではない。マア待つて呉れ。

いせ　おら厭だ。稽古所ばひりをしやアがつて、素裸にされた腹癒せだ。今おかまどんに斷つて來たゞから、入揚げた形代に房州まで脊負つて歸るのだ。

ト手を放し、葛籠を脊負ひにかゝるを、

清六　コレサ、さう燒餅を燒いては困る。實は若旦那の緣切りで、今夜師匠の所へ行つたのだ。そんな履き違ひをしてはいかん。（トよろしくなだめ、）コレおいせ、何でこなたを見捨てるものか。

いせ　ム、。それでは。その詞に違ひないかえ。

清六　何の嘘をいふものぞ。

いせ　そんなら國へ行くは廢めにするが、牛の御前の横町

の私の宿まで行つてお吳れ。
清六　他人の耳へ聞かせたくないから、こゝから脊負つて
歸らうではないか。
いせ　歸ることは歸るが、お前と二人でこの土手を道行を
したいからサ。
清六　それでは吾妻橋の方へ行つてもいゝぢやアないか。
いせ　イ、エ宿まで行つて、何かの話を。
清六　それでもあんまり遲くなる。
いせ　エ、失敗つたら私がすごすよ。
清六　イヤ此奴ア一番驚いた。
いせ　エ。
清六　ナアニ、それでも葛籠と三人で。
いせ　サ清六さん、これは脊負ふから、手を引いて下さん
せいなア。
トやはり出の合方になり、おいせ葛籠を脊負ひ、清六下駄の緒を提げて手を引かれ、嬉しきこなしにて兩人下手へはひる。此時遠見へ灯入りの八日月出る。合方かはつて上手より以前の下稚提灯を持ち先に立ち、後より小三郎物思ひのこなしにて出て來り、
丁稚　よい鹽梅に、月が出てまゐりました。

小三　晝間は樣で賑かだが、夜になつては淋しいの。
丁稚　これから直ぐ向井樣へお出でなさいますか。
小三　いま考へてゐる所ぢや。小梅樣を先にしようか、向
井樣を先にしようか、嘸お待兼であらうと思つて、案じ
られてならぬわえ。
丁稚　こゝまで參りましたから、向井樣を先になされませ。
小三　イヤ〳〵小梅樣も大切ぢや。かうして吳りやれ。わ
しは小梅へ行つて、それから上るから、そちは向井樣へ
先へ行つて、直ぐ上りますとお斷り申して吳りやれ。
丁稚　ヘイ、畏りましてござります。
ト行掛け思入あつて、
イエ〳〵一人では參りますまい。大旦那から堅く言附か
りましたから、御一緒にまゐります。
小三　コレサ、分らぬ奴ぢや。商賣の事で上らぬといふが
あるものか。安心して行つて吳りやれ。
丁稚　それでも何だか、心配でござります。
小三　ア、そんなら今夜延若の所で、相談のあつた事を聞
いて來たか。
丁稚　ヘイ、左樣でござります。
小三　一旦緣を切つたものに、男の讎に又行かれるものか。

そのやうな心配はせぬがよい。
丁稚　それでは、大丈夫でござりますか。
小三　何の心配に及ぶものか。
丁稚　それで安心いたしました。それではお斷り申して參りまする。
ト上手へ戻らうとするを、
小三　ア、コレ〳〵、こゝから土手を下りて、寺を拔けるが近いわえ。
丁稚　ハイ、左樣いたしませう。
ト合方にて提灯を持ち、下手の土手うしろへはひる。小三郎後を見送り、ほつと思入。バタ〳〵になり、上手より以前の延若、手拭を吹流しに冠り、駒下駄にて出て來り、小三郎に突當り顏見合せ。
延若　オ、若旦那。
小三　コレ。
トこれをきつかけに、本釣鐘を打込み、船の端唄になる。
〽紫の結び目かたき緣の糸、解けぬも色の深みどり、
ト此内兩人誰も來ぬかと、四邊へ心遣ひの思入あつて、
延若　よう待つてゐて下さんしたな。

小三　政五郎殿には濟まぬけれど、どうも思ひ切られぬ故書損じの體にして、こなたに渡した先刻の書附、よく反古にせず來て呉れた。
若延　何で反古に出來ませう。あなたと添はれぬ上からはどうせ生きてはゐぬ私、悦んで來ましたわいナ。
小三　スリヤ、それほどまでに私のことを。
〽待つに來ぬ夜は筆のさき、恨み重ねし命をも、
ト小三郎手を合せ拜む。延若勿體ないとその手を拂ひ四邊へ思入あつて、雙方縋り泣き、
延若　夜とはいへど花の頃、人目堤に障りのない內。
小三　無常を告げる淺草の、鐘もろともに消えて行く。
延若　散りて流れに浮む身は、
小三　不孝と人に笑はるれど、
延若　思ひ切られぬ互ひの惡緣、
小三　そんならお若、
延若　ほんに嬉しうござんすわいなア。
〽硯の海にはまる程、深い淺いは客と間夫、苦勞するのも男ゆゑ、
ト此內兩人袂へ石を拾ひ、小三郎跣足になり、延若の手を取り、石段を下り揚げ場の端にて互ひに顏見合

せ、はッと泣伏す。これにて思ひ切つて延若腰帯を解き、二人の足を一つに結び合はせ、

兩人　南無阿彌陀佛。

ト手を取交し飛込まうとして飛びかゝる。トゞ腰帯をほどき手を離し、延若駒下駄を岸へ殘して前の方へ、小三郎は沖の方へ離れて飛込む。水の音。水の花ぱつと立つ。跡はうたの合方になり、上手より浮雲寺の天學、坊主かつら法衣羽織着流し駒下駄にて出て來り、いそ〳〵として、

天學　毎晩寺を明けるので、今夜は所詮出られまいと思ふ矢先へ駒形から、通夜を賴みに來るといふは、願ふてもないよい首尾ゆゑ、隣りの所化に代りを賴み、これから向ふへ越すつもりだが、この手紙では、嘸待つてゐるであらう。

ト石段の所へ來り、向ふへ思入あつて、

モシ、竹居どの――。

ト一言呼び、はつと思入あつて手を叩き、又呼ばうとしてうろ〳〵してゐる。この後より生田角太夫、好みのかつら、宗十郎頭巾、羽織着流し、大小、雪踏にて窺ひ出て來り、

角太　御出家、向ふ越しで何れへござるナ。

天學　エ、。

ト悄りする。一つ鉦誂への合方になり、

角太　徒然のあまり夜櫻を詠めながらぶら〳〵と、月をよすがに隅田堤、朧に霞む花の下、通夜に替りを遣はして、向ふへ越すと言はるゝは、申さずとても先は遊廓。御出家、こりやお樂しみなことでござるナ。

天學　イエ中々持ちまして、左樣な譯ではござりませぬ。現在通夜に行くべきを、代を遣はし向ふを越し、自身に行かねばまとまり難き急用あつて參るもの。左樣な御疑念御無用に願ひたい。

角太　ハ、、、、。コリヤ左樣でござらう。然らば唯今仰せられたる迎ひの文を見せられよ。

天學　イエ、そのやうなものは。

角太　アノ、こゝな横着者めが。

トキツと思入。天學悄りなして震へる。

寺を拔け出し向ふへ越し、毎晩遊里へ通ふのは、夙より目串を附けてゐたのだ。サア文と一緒に懷中の、所持金殘らずこれへ出し、その身の罪を白狀いたせ。

天學　スリヤ、あなた樣は其筋のお掛り樣でござりました

か。
角太　ナアニ、おらア盗人だ。
天學　エヽ。
角太　サア、女郎買をする金を持つてゐるだらう。出せ。出してしまへ。
天學　扨はこの頃噂のある。
角太　どうしたと。
ト聞咎める。天學思ひ切つて、
天學　どろばうぢや〳〵。
ト逃げにかゝる。角太夫恟りして襟がみを取り引戻す。天學これを振拂ひ逃げにかゝる、立廻り。此内月に雲かゝる。この途端に天學上手よりする〳〵と辷り落ち揚り場の丸石の間へ落ち、横腹を打つて氣絶する。この途端丸石轉げ川へ落ち、ドンと水の音する。角太夫上手の上より見込み、ハツと思入。こゝへ上手より八州の手先○□△、尻はしをり脚絆草履、赤房の十手を持ち出て來り、角太夫の後より探り寄つて組附く。角太夫これを振拂ひ、一寸立廻つて、此内本鐵砲の音する。手先恟りしてためらふ。此間に角太夫掛茶屋の影へ忍ぶ。手先あたりへ心を配り、石段を下り尋ねる。

この時又月出る。これにて天學を尋ね當て、ツレと介抱する。天學漸く息吹きかへしホツと思入。
手○　ム、。此奴に違えねえ。調べて見よう。
ト三人上下に立掛り、
御用の筋があつて捕へるに、よくも手向ひしやアがつたナ。
天學　エヽ、そりや何事でござりますか。私は一向に存じませぬ。
手□　白ばツくれるな。今一發放したのは、豫て市中に噂のある強盗に違ひねえ。
手△　逃げようとして逃げそこなひ、こゝへ落ちて氣絶したのは、御用になる天の網だ。
手○　サ、懷中を改めさせう。
天學　イエ〳〵、何も懷中に持つてゐるものはござりませぬ。
手□　エ、默つて、出して見せやアがれ。
ト無理に懷中を改め、内より包金の廿五兩と文とを出す。
手△　オ、封金の一と包みに文がはひつてゐました。
手○　こりや女郎の文らしいナ。

手□　廿五兩包みが怪しいのに、坊主の癖にこの文はどうしたのだ。

天學　サアそれは。

手○　まだこの外に、今一發放した證據物があるだらう。

トこれにて手先□△兩人あたりを尋ねると、落ち散りある腰帶と駒下駄あるを取上げ、

手△　オヽ女の駒下駄と腰帶がある。アヽ汝は女を追落しをしやアがつたナ。

天學　何で愚僧が左樣なことを。

手○　言譯は出る所へ出て申上げろ。サ、一緒に來るがいい。

天學　エヽ。どうぞ御一緒に參ることは。

手○　申開きのつかぬうちは、返す事は出來ねえのだ。

天學　そこをどうぞ、御慈悲にて。

手○　エ、來やアがれ。

ト十手にて脊中を一つ打つ。

天學　アイタヽヽヽ。

三人　サア立テ。

ト無理に天學の帶を取つて引立て、一人は腰帶と駒下駄を持ち、三人警固して下手へはひる。この時掛茶屋の蔭より、角太夫短筒を持ち窺ひ出て跡を見送り、じつと思入あつて、

角太　業迦め。

ト刀を落し差しにするを木の頭、につたり思入。波の音、佃にてよろしく、　柝子幕

序幕返し　河原崎座樂屋の場

役名——芳村金四郎。六郷新三郎。望月太文治。稻荷の頭、坂東八兵衞。女形、瀨川粂吉。狂言方、奈川富士助。頭取、松本たい介。筑前屋の若衆、喜介。樂屋番、紋介。衣裳方、冬吉。囃子方。稻荷町、留場琴吹の稻松。見物娘、お花。おみよ。

本舞臺四間、常足の二重、正面小割を打ちし中窓、腰通り二重蹴込共板羽目、二重の下手、横長の圍爐裏、天井より鎖にて茶釜を釣し、欄間の眞中に囃子の連名の席札を張り、この下幅の狹き刀掛、刀澤山

掛けあり、上手三尺張壁の床の間、細物の軸。この上手三絃箱の棚、閒爐裏の傍に大鼓ほうじあり、平舞臺の上手、作者部屋の境の羽目、下手同じく板羽目、これに笛太鼓の撥を入れし函懸けあり。すべて木挽町芝居樂屋御囃子部屋の體、平舞臺の上手に笛吹六郷新三郎、着流し上草履を穿き、片手に笛、片手に太撥を一本持ち立身、下手に鳴物師望月太文治同じく拵へ、大太鼓の撥を持ち、兩人爭ひたるな唄うたひ三絃彈き鳴物師六人思ひ／＼の形り、稻荷町の頭坂東八兵衛、着流しの上へ肩衣だけ附け、共に留めてゐる。この見得、しやぎりにて幕明く。

望月　何が遺恨があつて中揚げに恥を搔かせなはつた。サアそれ聞かん內は、わし承知せんねえ。

六郷　何だ、この四國猿め、遺恨などはありやアねえが、自分達が不器用だから、しやぎりが笛と合はねえのだ。

望月　イヤ、よう遺恨があるのぢや。わしが四國者だから江戸ッ子が寄つて莫迦にしなはるのぢや。

ト立ちかゝる。この內しやぎりの留り、訥升、粂三郎、海老藏の呼び聲。この後止めの拍子木。あと流行唄の合方になり、皆々止る。

皆々　コレサ、芝居の中だから靜かにしなせえ。

八兵　さう騷いでは頭取さんへ濟まぬ。お囃子の頭がお見えなさらぬから、隣づからで、稻荷町の及ばずながら頭を勤める、わしが仲へはひりますから、どうぞ鎭まつて下さりませ。

六郷　箆棒め、狐憑きぢやアあるめえし、稻荷町などに口を利かれて、何で勘辨が出來るものかえ。

八兵　それはさうでござりませうが、わしも稻荷町の頭だから、勘辨出來ぬこともあるまい。

六郷　エ、邪魔た。引込んでゐやアがれ。

ト六郷新三郎太撥にて八兵衛の天窓を打つ。これにて八兵衛ひつくり返る。下手より呼帳を持つたる稻荷町三人出て來て介抱する。右の合方にて、下手より茶屋の若い衆、筑前屋と記したる莨盆高坏の菓子を持ち先に立つ。あとより芝居見物の娘お花おみよの兩人、派手なる拵へにて出て來り、

若衆　どうぞお客樣でござりますから、眞平御免なすつて下さいまし。

ト眞中へ來る。これにて又太撥にて横面を毆倒され、菓子の高坏を引くりかへす。慌てゝこれを拾ふ。

お花　大變な事になりまして、後へも先へも參ることが出來ませぬ。

みよ　その內幕が明きましたら、どうしたらようござりませう。

兩人　ハア――。

ト泣出す。やはり右の合方にて、下手より瀨川桝吉樂屋結びのかつら、羽織着流し女形にて上草履を穿き、駒下駄を手に持ち、女のこなしにてバタ〳〵にて出て來り、この中を通りかかれるこなし。

桝吉　御免なさいまし〳〵。

望月　サア、何でも頭の所へいんで、この仕埒をつけておくんなはれ。日頃から遠國者だと莫迦にされたが口惜しい。

桝吉　御免なさいよ〳〵。

ト通らうとしては氣味の惡きこなしにて、通りかかれてゐる。

六鄕　當り前よ、江戶つ子のちやき〳〵ばかり揃つてゐる囃子部屋へ、手前のやうな贅六が出やアがつたから、まごつかせてやる料簡だ。

望月　ソレ〳〵、それが卽ち遺恨ぢやないか。

六鄕　何だ、遺恨ぢやないか。そんな生溫いことを言やアがるのが績に觸つて堪らねえのだ。サア、江戶ッ子の腕を見やアがれ。

ト留めるを聞かずに打つて掛る。皆々取押へる。女形はまご〳〵する。見物娘兩人は手放しで泣く。このごた〳〵の內、六鄕過つて太鼓の撥にて女形の顏を毆り倒す。これにてわつといつて倒れる。皆々介抱して稻荷町の頭と桝吉やう〳〵顏を上げる。八兵衞大きな瘤出來る。女形は鼻のあたま眞赤になる、兩人悔りして、

八兵　ヤア、こんな大きな瘤が出來た、これでは觸れを讀みには出られぬわえ。

桝吉　ヤ、わたちや鼻のあたまが血になつた。舞臺へ出られん。コリヤどうしちやらよからうナ。ハアー。

ト鼻くゝたのやうになつて泣く。新三郎はせゝら笑ひ、

六鄕　大仰な事を言やアがるな。手前が舞臺へ出ねえと、見物は大悅びだ。

望月　假にも役者をそのやうなこと言うて、座元さんへ濟まぬぞよ。

六鄕　濟まざア芝居へ出ねえばかりだ。道樂で出てゐてや

るに、文句を言はれて堪るものか。

八兵　コレ、そんな惡口いひなすつて、もし河原崎の旦那に聞えたら、どうしなさる。

六郷　また出やアがるか。モウ一つ瘤をこせへてやるぞ。

ト立掛る。これにて望月太文治は又立掛り、こつちやになる。こゝへ上手より作者奈川富士助、衣裳方冬吉走り出て來り留める。これを聞かず打合ふ。立廻りよきほどに出て來り留める。この中へ留場壽の福松、派手なる拵へにて出て來り、

福松　皆さん、さうごた〳〵になつては土間にお出でのお客へ聞えて、何事か始つたかと御心配なされますから、どうか靜かになすつて下さいまし。

六郷　舞臺で喧嘩をしたらば知らず、樂屋内の間違ひを、留場の出る幕ぢやアねえ。そつちの方へ引込んでゐろ。

福松　イヽヤ、引込まれませぬ。樂屋内だらうが奈落だらうが、留場が來るのは當り前だ。

六郷　生意氣なことをいやアがるな。そんなことは椋鳥に向つて言へ、ただの囃子方とは譯が違うぞ。

福松　御家人衆といふことは百も承知してゐるから、その扱ひで留めたのだ。中へはひつたものを、引込めとは何の事た。

望月　エヽ。邪魔になるから引込んでゐい〳〵。

福松　イヽヤ、行かねえ。これきり指をくはへちやア、川通りはいふに及ばず、積場所の御連中へ後日に面が出せねえのだ。サア、どうとも勝手にして呉んねえ。

六郷　エヽ、この野郎から先へ毆つてやるがいゝ。

ト立掛る。この内頭取座にてたい助心配の思入にて、トヾ飛下り福松を下手へ引張つて來り、

頭取　コレサ、どうしたものだ。貴樣まで怒つてはいけねえぢやアねえか。

福松　ナニ怒りやアしませぬが、留めにはひつたものを、あんまり莫迦にしますからサ。

頭取　コレサ、それが怒つてゐるのではないか。

福松　ナアニ、頭取さんへ對して怒つて濟みますものか。

頭取　いゝから此方へ來いよ。

福松　それでもお前さん。

頭取　エヽ、來いといふことよ。

ト無理に引張つて下手へはひる。

六郷　飛んだ喧嘩の腰を折りやアがつた。サア、汝も表へ來い。この仕埒をつけてやらう。

ト望月太文治の手を取り引立てにかゝる。皆々留める。

ごつちやの立廻りよき程に、上手より芳村金四郎、着流し上草履にて唄の本を持ち出て來り、この中へはひり留るを聞かぬ故、片肌脱ぎで双方をなだめる。この腕に生首が文なくはへたるぼかしの彫物一杯ある。

金四　サア、おれが留めても料簡しねえか、料簡出來ざあ相手になつてやらう。

六郷　お前で料簡しねえとは言はねえが、芝居者が胡麻摺り半分にちやらッぽこで留めやアがるから、どこ迄もやる積りだ。

金四　一體こりやアどうしたのだ。

六郷　今のしやぎりの中揚げに、笛と合はねえ所から、此奴の言葉が癪に障り、つい大きな聲をしたのだ。

望月　江戸衆の中へ四國者が一人交つた所から、皮肉をされると僻みが出て、えらい言募りをしましたのだ。

金四　そんなつまらねえ喧嘩なら、この場は是非水に流して、おれに任して呉れねえか。

六郷　御囃子部屋へお互に、毎日遊びに來るこちとら、萬事はお前に預けよう。

金四　そりやア有難え、よくさう言つて呉れた。さうしてお前も料簡して呉れるか。

望月　かうして一つ部屋にはをれど、今日この頃まゐつたばかりの不器用者、まだ御贔屓も薄い私、お武家様と町人の身分違ひ、素より刃向ふ氣はござりませぬ。

金四　さうくだけが早いなら、おれも顏が立つて有難え。皆さん、大きにお喧しうござりました。

皆々　マアお目出たうござりました。

トこれにて双方鎮まり、二重へ腰をかける、この時居合したる狂言方、ツィと上手へはひり、拍子木を持ち出て來り、上手羽目の前にてすまして二度目の木を入れる。

若衆　ア、もう二度目の木がはひりました。御安心なすつて、お場所へいらつしやいまし。

娘兩人　やう〳〵落着きましたわいなア。

ト若衆附いて娘兩人いそ〳〵上手へはひる。こゝへ上手より芝居の頭取、羽織着流しにて出て來り、

頭取　私が出ると面倒だから、頭取座で氣を揉んでゐたが金四郎さんのお骨折りで事なく納まり、ホッとしました。

金四　どうぞ座頭の成田屋さんへ、よろしく仰有つて下さいまし。

頭取　親方の方はいゝが、河原崎の旦那が名代のやかましやだから、實はひや／＼してゐました。

ト合方になり、下手より楽屋番紋介、少し老けたる拵へにて出て來り、

紋介　若樣、お仲間がお迎ひにまゐりました。

ト言捨てゝ下手へ行くを、

金四　オイ、楽屋々々。

紋介　へイ。（ト立止まる。）

金四　いまお仲間の仲直りで、尾張町の北川へ寄つて歸るから、先へ歸れといつて呉んな。

紋介　へイ。（ト下手へはひる。）

囃子　それおやアこれから、

皆々　仲直りに。

金四　オイ彌市。

ト見習を呼ぶを、木の頭。

脇差と羽織を取つて呉んな。

トこれにて二度目の木頭を打ち、これを幕明きになりたる心にて、鳥追通り神楽になり、彌市刀掛けにある刀を二腰と羽織を取つて金四郎に渡す。この模樣よろしく、幕明きの拍子木にて。

幕

二幕目

愛宕下遠山邸の場
成田山斷食堂の場
山内護摩木山の場

竹本連中

役名——遠山金四郎。下總無宿生田角太夫。同佐島天學。圓通寮の徒弟、祐天。祐天小僧小吉。遠山の二男、淸之丞。平の百姓、甚五兵衛。山番、勝五郎。御坊主、座名和明壽。用人、川村傳吾。同、簑浦甚兵衛。堂番、作兵衛。門番、吉助。若徒、佐平。仲間、元助。醉月の若い者、八。須之崎政五郎。不動明王。遠山金四郎妻、お桂。遠山の後室、妙貞。腰元、お花。

本舞臺眞中二間の玄關、板庇、舞臺正面白地中形の襖、左右なまこ、、棧の杉戸、玄關の上下腰羽目のある白壁。下の方臺所へ行く心にて、少し前へ出して板

塀の見切よろしく、すべて旗本邸玄關先の體、式臺の所に用人川村傳吾、袴着流しにて書附を持ち立掛り、平舞臺下の方に蘇月の若い者、仕出し屋の拵へにて、御膳籠をおろし立掛りゐる。この見得合方、調べの鳴物にて幕明く。

傳吾　コレ〱若い衆、これで殘らず持つてまゐつたと申すか、栗のきんとんを別段に持つてまゐるやうに、一昨日主人に注文してやつた筈ぢやが、左樣なことは申さなんだか。

若衆　左樣なことは一向に申しませんが、いづれ主人が後程に上りますと申しましたから、その節お尋ね下さいまし。

傳吾　栗のきんとんと申しても、精進料理のきんとんではない。きんは金なり、とんは遁れるといふ字で、高い料理を締めても、きんとんの使ひ方で、高いといふ惡評をのがれるといふ進物ぢやから、左樣心得るがよい。

若衆　それではきんとんの口取ではなく、口ふさげでござりますナ。

傳吾　假名で申せば左樣なものぢや。亭主が來たら內々で其方からも傳へて吳りやれ。

若衆　イヤ慾張つた用人だ。

傳吾　何ぢやと。

若衆　イエよく私からも申傳へます。

傳吾　それが分つたら早く行きやれ。

若衆　ドレお臺所へ持込みませう。

ト件の御膳籠を擔ぎ、下手の板塀の影へはひる。玄關の奧より腰元お花着流し前垂掛けにて出て、

お花　モシ川村さん。うまいお誂へでござりますね。

ト前へ出る。これにて傳吾惘りして氣をかへ、

傳吾　それは賣茶の料理だから、精進でもうまい筈だ。

お花　栗のきんとんが餘りましたら、私にもそのうちを少少分けて下さいまし。

傳吾　イヤ、死んだ殿樣がお好きだから、別に御佛前へ供へようと誂へた栗のきんとん、身共の口へは入れぬ積りだ。

お花　お口へ入れないでも、袖の下からそつと袂へはひりませう。

傳吾　エヽ莫迦なことを言はつしやるな。

ト つい と奧へはひる。

お花　アレ呆けてゐるだけ面が憎い。もつと當付けてやら

うわいなア。
　ト同じく奥へはひる。合方きつばりとなり、花道より遠山清之丞、若衆かつら裃、大小、草履にて、若黨一人中間一人供をして出て、直ぐ舞臺へ來る。中間先きへ駈けぬけ、式臺の所へ來て、

中間　お歸りッ。
　トふれ込む。奥より以前の傳吾出て式臺下にゐて、

傳吾　これはお早いお歸りにござります。

清之　佛參の留守中に、まだ兄上の御安否は知れませぬか。

傳吾　その儀について、御隱居様も奥様も御心配、どうか御親類の御客來前に御當主様がお歸りあるやうにいたしたいとの仰せにござりますれど、唯今もつて御安否が知れませぬので、拙者めも當惑いたしてござります。

清之　歸邸をいたす途々も、心當りを尋ねさせしが、かいくれお在所知れぬといふは、さて／＼困つたものではある。

傳吾　お奥にてもお歸りをお待兼にござりますれば、お早くお奥へ入らせられませ。

清之　こりや母上や姉上とも篤と御相談をせねばならぬ。
　ト思案のこなしにて奥へはひる。跡を見送つて、

若徒　金四郎様のお在所を探す一條で、お供先から諸所方方と駈け廻つたが、どこへはひり込んでお出なさるか、悉皆知れぬのには困つたものだ。

傳吾　それはこなたも御苦勞であつた。これが女にでも熱くなつてお出なさるといふ譯なら、當りのつくといふ事もあるが、そんな噂も聞かぬゆゑ、心當りのないには困る。

中間　なんの事はない、金四郎様は狐憑きを見るやうに、何事へも心をつけて、不斷きよろ／＼遊ばすのが御道樂と見えるから、お稻荷様でも信心して伺つて見てはどうでござります。

傳吾　簑浦も今朝から在所を探しに出てをれば、軈て何とか知れるであらう。
　ト此時バタ／＼になり、向ふより門番吉助粗末なる袴形りにて走り出て來り、

吉助　モシ皆さん、殿様がお歸りになりました。
　ト慌しく言ふ。皆々これを聞き悦び、

傳吾　それは有難い。大慶々々。
　トこの聲を聞き、奥より以前のお花出て來り、

お花　モシ吉助殿。どこへお歸りになりました。

吉助　まだこゝへはお出にならぬが、今御門前まで町駕籠へ乘せて、蓑浦さんが附添つてお歸りになつた所、この儘ではひれぬから駕籠を下ろせと仰言るを、こゝで駕籠からお出し申して、又逃げられては大變と、蓑浦さんがこの儘でお玄關へ横着けがよいと爭つてゐて果しがつかず、先づ兎も角もお歸りをお奥へお知らせ申しませうと、御注進に參りました。

傳吾　それは蓑浦も困るだらう。行つて手を貸してやらずばなるまい。お花どんにはこの事をお奥へ早く知らせて下さい。

お花　ハイ〱よろしうござります。

ト お花は奥へはひろ。跡みな〱は慌てゝ花道へはひろ。これより床の淨瑠璃になり、

〽神無月、中の十日に心なき、人使ふなと夕暮前、家來が寄つて生酔の、主人を荷ふ屋敷内、

トこの止り、「出た〱」の合方になり、花道より遠山金四郎、袴、着流し、大小、雪踏、生酔のこなしにて、これを以前の傳吾と用人蓑浦甚兵衞、羽織、袴、大小の拵へにて、金四郎を肩にかけて出る。跡より以前の若黨、金四郎の羽織を持ち、中間附いて出て來り、みな〱花道に止り、

金四　コレいくら酔つても確かな身共だ。なんで手を取つて引張るのだ。

傳吾　イエ引張りはいたしません。お足許が危いから、お附添申す拙者の心得。

甚兵　確かと仰言るお口の下から、よろ〱およろけなさいますから劍呑でなりません。

金四　なんで身共がよろけるものか。さういふ貴樣がよいよいなのだ。

ト言ひながらひよろつく故、押へて、

兩人　ソレお危なうござります。

金四　エヽ大丈夫だ。構ふなといふに。

〽介抱してぞ誘ひ來る。

ト皆々舞臺へ來り、若黨に金四郎の雪踏を脱がせ、皆にて式臺の上へあげる。金四郎奥へ向ひ、

金四　コリヤ、誰も出迎はぬか。唯今お歸りだ。

ト爰へ奥より以前の清之丞出て來り下にゐて、

清之　兄上お歸りにござりますか。

金四　オヽ清之丞か、出迎へ太儀。

清之　父上の三回忌の今宵は逮夜に當りますゆゑ、母上に

も姉上にも、兄上のお歸りをお待兼でござります。

金四　その三回忌承知してをる。迎ひがなくとも、今日は乾度歸つて參るものを、在所を方々探したとは、無駄な手數をかけたものぢや。

傳吾　とあつて、悉皆お在所が知れませんでは御心配ゆゑ。

甚兵　御隱居樣にも奧樣にも餘程の御苦勞でござりました。

金四　もう歸つたから御安心なされいと、母上へ申上げて吳れ。身共は一寸休息して醉が醒めてからお目にかゝる。

ト肘枕にて寢ようとする故、

清之　アイヤ兄上、こゝは玄關でござります。

金四　玄關は身共知つてをるわえ。

清之　イエ、お奧へ行つてお休みなされませ。

金四　どこへ寢ようと身共の勝手だ。

清之　イエ御親類の方々が、程なくこれへ御入來なれば。

金四　これだから邸は嫌ひだ。どこでもよいから一と寢入り。

ト立上り、又ひよろ〱とするを清之丞留めて、

清之　サ、かうお越しなされませ。

金四　エ、身共の家だ、知つてをるわえ。

へ足もしどろに入りにける。

ト清之丞介抱して金四郎奧へはひろ。跡にみな〱思入あつて、

傳吾　どこへはひり込んでござつたか、よく在所が知れましたナ。

甚兵　奧樣の仰付で今朝から諸方を駈け廻り、在所を探すその內に、木挽町の芝居にお出の所を聞き、尾張町の北川へ行つて、やう〱お連れ申して來た。

傳吾　なんぼ芝居がお好きでも、さう芝居へばかりはひつていらつしやるのは、役者にでもお成りなさるお氣か。

若黨　不斷は下戶でお出でなさるに、どうしてあんなに召上つたか、ちつとも譯が分りませぬ。

中間　あんなに酒を上つては、私共は實に跣足でござります。

傳吾　朱に交れば赤くなると、そこが下世話にいふ通りぢや。

甚兵　イヤ、こりや大名にでもなるお氣であらう。

傳吾　とは又、何故だナ。

甚兵　ハテ、人に大酒と呼ばれる積りで。

傳吾　何を言はつしやる。

皆々　アハヽヽヽ。

中間　サ、お臺所へ行かうわえ。

傳吾　ア、コレ〳〵。お臺所へまゐるなら、醉月の料理番にナ。

中間　何ぞ御用でござりますか。

傳吾　栗のきんとんの事を。

ト言掛け、甚兵衞と顏見合せ、氣をかへ、

ム、よいわ。おれが直に申すといたさう。

ト甚兵衞は不審の思入。この模樣賑かな合方にて道具廻る。

本舞臺一面の平舞臺、正面一間の佛檀、内に燈明を照らし、前面へ小障子四枚建切あり、この下二枚引きの銀襖、左右張壁、上の方折廻し塗骨の障子屋體下の方薑心に杉戸の出はひりあり。舞臺一面に薄緣を敷詰め、すべて奧座敷佛間の體、正面の佛檀の前に常香盤、經机など飾りあり。こゝに以前の金四郎手枕にて寢てゐる。淸之丞介抱してゐる見得、床の送りにて道具留る。

〽居たりける、奧の佛間に金四郎、前後たわいもなかなかと、酒に打臥す高鼾、弟は母や兄嫁に、氣兼ながらに介抱す、次の杉戸をそつと明け、妻のお桂は醉醒めの、水調へて入り來り、

ト下手より奧方お桂丸まげかつら着流しにて、錫の水呑を持ち出て來り、思入あつて、

お桂　この御佛間へお連れ申し、父御樣の御靈前にて、お詫をおさせ申さんと、思ひの外に高鼾、困つたものでござります。

淸之　この通りゆゑ、母上のどうかお耳へ入らぬ内、お起し申して御大醉の醒めるやうにいたしませねば、今宵のお客が出來ませぬ。

お桂　それゆゑ是へ紫金錠とおひやを持つて參りました。どうぞこれにて今の間に醒めればよろしうございますが。（トこなしあつて、）申し貴方、お目をお覺しなされませ。おひやをお上り下さりませ。醉の醒めるお藥もこれへ持つて參りました。お目をお覺し下されませ。

〽搖り起されてやう〳〵と、目は覺れども酒の醉、醒める樣子は更になく、

ト金四郎起直り、こなしあつて、

金四　よい心持に寢たと思へば、搖り起して五月繩い奴ぢ

や。

清之　兄上、おひやを召上つて醉をお醒しなされませ。

金四　何ぢや。醉を醒せ。よい心持に醉つた酒を、無理に醒すには及ばぬ事ぢや。まだ醉醒の水には早い。もう一と寢入りいたして呑むから、枕元へ置いてくりやれ。

〔又手枕に寢ねかゝるを、

トよろしくこなし、お桂これを留めて、

お桂　ア、申し貴方が左樣に下寢なさつては、今日御年回のお逮夜とて、お客を招待いたしまして、誰がお愛想をいたしませう。それではお役が濟みますまいがナ。

トキツと言ふ。これより誂への合方になり、

父御のお跡を御相續の御當主が御不在では、御親類方へ對しましても濟まぬ譯ゆゑ母上には、昨夜よりして御心配、やつとの思ひで甚兵衞が、あなたのお在所尋ね當てお連れ申して歸るとその儘、御佛前の見境もなく、お横におなりなされまして、なか〳〵との御睡眠、今にもこれへ御親類のお客が御入來なされましたら、母上樣を始めとして、私共がお客へ對し、面皮を缺かねばなりませぬ。サ、どうぞおひやを召上り、醉をお醒し下さりませ。お願ひでござります。サ、お藥もこれにござります。この御樣子を母上が御覽にならば、どのやうにか又御心配でござりませう。お客へ對し失禮ゆゑ、醉をお醒まし下さりませ。

〔進め立つれど馬耳東風、空吹く風と聞流し、

トこなしあつて、

金四　ヤア煩い、左樣に起さいでもよいと申すに。イヨウこれは佛前ぢやナ。これはどうも恐入つた。眞平々々御免下さい。コリヤ〳〵、左樣に客あしらひ〳〵と申すがそれは母上や其方の方でやつて貰ひたいのぢや。その代り男子たるものは、イデ鎌倉とでも申す時は、先祖の恥辱にならざるやう。

トキツと思入あつて、氣をかへ、

粉骨碎身せねばならぬ。それぢやに依つて、かやうな小事は眞平御免を蒙りたいのぢや。

〔橫にならんと臥しかゝるを、弟は耐へず引起し、

ト清之丞傍へ寄つて、金四郎の胸づくしを取り、

清之　アイヤ兄上。〔トキツと言ふ。〕

金四　エ、イ。何ぢや。

清之　お前樣はなア。

ト合方きつぱりとなり、

いかに御清の上ちやと申して、言ひたいがいのその不理窟、默つて聞いてはをられませぬ。亡き父上の御法事なら、お跡目相續なされますあなたが先立ちなされませいで、誰が先立ちいたしませう。お年を召した母上や姉に一切打任せ、お構ひなさらぬお心とは、餘りといへば無理我儘、それでは道が立ちますまいがナ。
金四　イヤ道が立つても立たいでも、左樣なことは一向存ぜぬ。許して呉れ〳〵。
（取る手を拂ひ打臥しける。
トよろしくこなしあつて、手枕にて寢てしまふこと。
清之丞キッとなつて、
清之　もう兄上とて、許されぬわえ。
ト立ちかゝる。この時上手の障子を明け、後室妙貞白髮の切髮、被布ごしらへにて出て、
妙貞　イヤ氣を揉むには及ばぬこと。わしも愛想が盡きたれば、もう構はずと捨てゝ置きや。
お桂　母上樣には、何も彼も。
清之　樣子をお聞きなされましたか。
妙貞　一間で聞いてゐたわいの。
（しづ〳〵出て佛檀の、下より取出す遺言狀、納めし箱を提へ持ち、枕邊近く進み寄り、
ト佛檀の下の襖を明け、誂への白木の箱を前出して持ち、金四郎の寢てゐる上手へ住ひ、
コリヤ金四郎、酒に性根を取亂し、くらんでゐる兩眼でもこれが見えぬ事はあるまい。よく起直つて拜見せよ。
（妻のお桂も氣をあせり、（ト思入あつて、）
お桂　ソレあなた。母上樣がお出でござります。お起きなされて下さりませ。
（無理に起され立つ腹も、母の姿に起直り、（トよろしくあつて、）
金四　これは母上御免下さい。何んでこれへ父上の遺言狀などをお出しなされました。
妙貞　そのくらんでゐる兩眼にも、遺言狀と記しある此箱書がまだ見ゆるか。
金四　兩眼共にこの通り、くらんでなどはをりませぬ。
妙貞　そちや幼年より入學して、素讀の稽古もいたしながら、論語讀みの論語知らず。人倫の道を忘れしか。
金四　コリヤ母上には改つて難しい事を仰せられますが、假令酩酊をいたしても、人倫の道ぐらゐは心得てをりまする。

妙貞　その存じてをるものが、父の教訓打忘れ、又御遺言の箇條に背向き、内を外なる身持放埒、たま〳〵歸るわが屋敷も、亡父の忌日の逮夜なるに、大醉いたし佛前へ、なが〳〵と寢て言ひたいがい。それで親子の道が立つか。

金四　寢ては惡うござりますか。

妙貞　ナンノこゝな不孝者めが。

　トこれより筐の入りし合方になり、

おのれの亡父左衞門殿には、文化の初め魯西亞の使節長崎表へ來りし時、應接の役仰せつけられ、首尾よくお役を勤めおほせ、同じく四年に至りては、長崎奉行に轉役して、その後御勘定奉行にまで御登用にて、上向きの通りもよろしく御精勤、二人の忰も父同樣、立身出世をさせんものと、幼き時より教育には、別して心を用ひられ、聖堂に於て學問させ、仁義忠孝五常の道、納めをるべき筈なるに、一昨年左衞門殿世に亡きものゝ數に入り、歸らぬ旅へ赴かれ、跡目願ひも其方にて、日あらず叶ひこの上は、遖れ父の子程ある、器量者よと世の人に、褒められてこそ忠孝の、道を教へし甲斐あるに、母ばかりと侮つて、町家へ出ては下賤に交はり、あらうことかあるまいことか、兩の腕に刺靑まで、ほりしは何たる料簡ぞ。

見下げ果てたるこなたはのう。

　ト此内妙貞件の遺言狀の箱にて金四郎を打つ。金四郎その手を押へ、本心になりしこなしにて、

金四　スリヤかくまでに母上には、放蕩無賴と思召しますか。

妙貞　親類の者までが、家督は出來ぬと言張りしを、見所ありとこの母が、言うた詞も今日限り、實に愛想が盡き果てました。

金四　ム、それ故かゝる御折檻とな。

妙貞　いかにも。

金四　然らば唯今某が所存を申上げますれば、先づ〳〵お下にお出下され。

〽打つて變りし五體の構へ、泰然として座に着けば、人人これはと打驚く。こなたは威儀を改めて、

　ト此内みな〳〵不審の思入。金四郎妙貞を上座へ直し
　キッとなる。これより床のメリヤスになり、

唯今あなたの仰せの如く、父上の御丹精にて、和漢の書籍は申すに及ばず、弓馬槍劍文武の道、殘る方なく御教諭下され、御遺言の折柄も、奢りを愼しみ道を守り、忠義の道を忘るゝなと、有難き御教諭し、皆悉く理に當れ

ど、凡て天下の役人たるもの、下民の情に乏しくして、その政道の行屆かぬは、公儀へ對して不忠ゆゑ。また無役を幸ひに、下民の情に通じ置かんと、刺青せしも下々へ、心を許さす所存にて、柳巷花街を始めとして、盛り場又は芝居へ入込み、庶人の境界會得せしが、決して放蕩懶惰に流れ、亂暴などはいたしませぬ。

妙貞　イヤ／＼左樣に口賢く、詞を飾り言譯なすとも、それを誠と思はうや。この屋敷から程近き、河原崎座の樂屋にて、囃子方とやらの詰所へ入込み、日々遊びをりしことまで、よう聞込んで存じをるぞよ。

金四　イヤその芝居者は町人より一段低き者のやうに、世間では思ひますれど、既に唯今仰せある、河原崎の座附と唱へる囃子方のその内に、岡安喜代七杵屋粂吉と申す兩人は、矢張り身分のあるものにて、日々出勤の折柄に腰の物を帶し來り、詰所へ置いて勤役いたせば、當時その囃子部屋には刀懸けの設けをなし、身柄のもの丶詰所なるゆゑ、御囃子部屋とこれを稱へ、その外頭取作者部屋と、詰所々々に席を正し、諸方より入込むゆゑ、事情を知るには專一と、樣子探りにまゐりをりしが、待たぬ月日の經ちやすく、早や今日はわが父の三回忌に相當いたせば、この遊蕩を限りとなし、足踏みいたさぬ決心ゆゑ、必らず御案じ下さりますな。

〽酒興と見えし生醉の、樣子は更に亡き父の、佛へ對す身の誓ひ、妻も弟も打悦び、

トよろしくこなしあつて、

お桂　それでは今迄遊び場所へお立入りなされましたも、さういふ深いお心にて、

清之　まこと本心御放埒の御所行にてはなかりしか。

妙貞　それに相違のない事なら、母も嬉しく思ひまする。

金四　コリヤ淨めをこれへ。

お桂　ハツ。

〽妻が心得取寄せる、手水盥へ酔醒の、水も淨めの身だしなみ、持佛の障子引明くれば、流石由ある家柄の、祖先を祭る靈前も、光り輝く供へ物、燻らす香の煙さへ、直な心に立騰り、禮拜なしてゐる折柄、

ト此内お桂手を鳴らして腰元お花を呼び、黒塗の手水盥を取り寄せる。金四郎有合ふ水にてうがひなすることよろしく、妙貞は正面の佛檀の障子を明ける。内に立派の位牌その他佛具よろしく飾りあり。清之丞は香を供へることあつて、ト皆々佛前にて回向なすること

なし。お花は手水盥を持つて奥へはひる。この留り、賑かなり鳴物、バタ〳〵になり、下手の杉戸を明け、鶴名和明壽、坊主かつら黒縮緬の羽織着流しにて扇を開き、踊りながら出て來り、

明壽　御恐悦々々〳〵〳〵。

ト頻りに踊り廻ることあつて、

ハツ〳〵御恐悦にござります。

妙貞　オヽ、珍らしや明壽殿。

金四　シテ恐悦と、

皆々　いはるゝは。

明壽　ハツ、今日お城へ上つてをると、御當家の若殿金四郎樣が明日お召出しに相成る由を承つて、さてはと存じ、取るものも取りあへず、お退けの時刻を待兼ねて、お知らせ申しに上りました。ハツ〳〵御恐悦にござります。

ト扇を開きあふぎ立て、手拭を出して汗を拭ひゐる。皆々不審の思入。この時下手の杉戸を明け、以前の袋浦甚兵衛御切紙を持ち出て來り下手にゐて、

甚兵　ハツ、御支配より御奉書到來にござりまする。

金四　ナニ、御奉書到來とナ。

甚兵　ハツ。

ト前へ持ち行く。金四郎受取り押頂き、開き見て、

金四　「御用之儀有之候間、帛紗小袖麻裃着用、明十一日五半時御城へ罷出らるべく候。」（ト讀む。）

妙貞　五半時の御呼出は、申さずとても悦び事。

お桂　折も折とて御逮夜に、

清之　思ひ寄らざる御登庸、

明壽　いよ〳〵もつて御恐悦、

お桂　御目出たう。

皆々　存じまする。

金四　母上。

ト御切紙を出すを木の頭。

お悦び下さりませ。

ト下座の賑かなる舞の鳴物にて、明壽は立上り、扇を持つて踊る。この模様みな〳〵こなしよろしく、

拍子幕

ト幕引附けると道具かけ廻しにて直ぐに引返す。

本舞臺一面の平舞臺、眞中三間斷食堂の心にて、正面左右折廻しの屋體。この上の方石垣の張物、よき

所に水行場へ行く石段の下り口、誂への切穴あり。屋體の下の方同じく石垣の張物にて見切り、正面の欄間へ一面に注連を張り、この下眞中一間の出入口板戸二枚建切りあり。よき所に經机、これへ手本の經卷を載せ、この傍に三つ脚の燈臺を灯し、荒莚など敷いてあり。こゝに堂番の作兵衞爺布子着流しにて、薄縁を一枚持ち立かゝり、山颪しにて幕明く。

ト作兵衞件の薄縁を上手に敷き、眞中の板戸を明けうしろへ向ひ、

作兵　サア奥州のお方、敷物を敷いたから、ずつと此方へはひらつしやい。

ト呼ぶ。これにて正面の口より、百姓甚五兵衞老けたろかづら、半纏着流し、脚絆素足にて入り來り、

甚五　これはいかいお世話でござる。ハアそれではこれが成田山の斷食堂でござるかナ。

作兵　ハイ、これが成田の斷食堂でござる。煙草の火でも上げたうござるが、斷食堂では口へ入れる物は一切禁物でござるから、煙草は我慢して呉れさつしやい。

甚五　イヤ〳〵構つて呉れさつしやるな。甥が斷食をしてゐることを思へは、こゝにゐる間煙草位を喫まずにゐるは安いこつちや。さうして祐天はどこにゐますナ。

作兵　今水行してゐますから、こゝへ呼んで逢はせて上げます。

ト上手の坂の下へ思入あつて、

オイ祐天どのや、こなたを尋ねて國許からござらつしやつた人があるから、行場の都合で上つてござれ。いゝかいゝか。

トこちらへ來り、

今こゝへ來ようから、ゆつくり逢つて行かつしやい。

甚五　これは夜中にめえりやして、いかい御厄介になりました。

作兵　用が濟んだら、斷食の邪魔にならぬやうにしてやつて下さい。

甚五　ハイ〳〵。それは承知しやした。

作兵　ヤレ〳〵、今夜はひゆう〳〵風で、からッぱしやぎに寒い晩だ。

トうしろの入口へ出て行く。これより床の淨瑠璃になり、

へ出て行く跡には伯父の甚五兵衞、車の音に水行の、浴びる水音氣遣ひて、

ト上手へ行き、切穴の下を見下ろし、

甚五　アレ〳〵、天窓の天邊からざぶ〳〵水を浴びて居をる。唯さへ十月の空ッ風で寒くつてならぬのに、なんぼ信心だとはいひながら、けふで三七廿一日斷食をして水を浴び、それで經文が覺えられぬとは、さて〳〵困つた奴ぢやなア。

へ梢をおろす夜嵐に、散るや木の葉のばら〳〵と、身に沁む風の寒さゝへ、單衣の衣に足踏みしめ、けふの滿願に祐天は、たよ〳〵登り座に着けば、伯父甚五兵衞はそれと見て、いかゞあらんと差控へ、聲をも立てず窺へば一心不亂に祐天は、經卷取つて押開き、

ト此内上手の切穴より祐天(十六歲)、水入りの毬栗がづら、鼠の着附丸絎にて、濡れた手拭を持ち、ひよろひよろしながら上り來て、甚五兵衞のゐるに構はず、荒莚の上へ住ひ、經机を控へる。甚五兵衞この體を見て下手へ差控へ窺ひゐる。祐天机の上の經卷を開き、

祐天　無上甚深微妙法。百千萬劫難遭遇。我今見聞眞實義。佛說阿彌陀經。如是我聞。一字佛住。舍衞國。祇樹給孤獨園與大比丘。祇樹給孤獨園與大比丘。祇樹給孤獨園與大比丘。

へ一つ所を繰返し、讀めども跡を打忘れ、讀み得ぬ體ぞ不便なり、あまりのことゝ甚五兵衞、呆れ果てゝぞ聲をかけ、

ト甚五兵衞前へ出て、

甚五　コレ〳〵祐天、祐天、コレ祐天。(ト脊中を叩く。)

へ打叩かれて心づき、

祐天　ヤ、お前は伯父樣でござりましたか。

甚五　オ、伯父だ。甚五兵衞だ。よくそれでもおらの顏を見忘れねえで居をつたなア。

ト誂への合方になり、

今度はる〳〵國許から、江戸の芝へ出て來たは、圓通寮樣から貴樣のことを委しく書いて送つた手紙に、所詮仕込んでも、出家には覺えが惡くて駄目だから、連れに來いとの斷り手紙。それだから言はぬことかと、叱言たらたら旅立して、四日後に江戸へ着き、增上寺へ行つて聞いて見れば、貴樣はこの頃成田へ來て斷食をして經を覺え、師の坊樣へ勸當の詫びをする氣でゐるとのこと。駄目なこんだと言ひながらも、どんな樣子かと來て見れば、話の通りに違ひねえが、おらでせえもハア不斷から耳慣れてゐる阿彌陀經が、つかへてすら〳〵讀めぬやうぢゃ

ア、圓通寺樣が見限つて、勘當したも尤もだ。出家になるのは駄目だから、斷食なんざア止めにして、おらと一緒に國へ歸り、岩城の在の新妻村で、元の百姓になるがえゝ。この寒いのに水を浴び、腹減らして苦しむだけ、苦しみ損といふものだ。

祐天　サアそれはさうでもございませうが、今日が丁度滿願の廿一日目になりますから、假令この儘死ぬまでも、やるまで行りたうございます。

甚五　ハテサ、それがよくねえ料簡だ。これが人並の人間なら、信心をしたその蔭で、いゝ出家にもなれるか知らぬが、覺えのよくねえ生れつき、いくら不動樣を頼んだとて、なんで出家になられるものか。所詮駄目だから、國へ歸つて元の百姓になるがえゝ。何になつてもまだ年若、やつと十五か十六だ。望をかへるは今の内だ。

〽爲を思つてすゝむれど、祐天動ずる心なく、默然として詞なし。

トよろしくこなし。甚五兵衞は氣の揉める思入にて、

コレ祐天、なんで返事をしねえのだ。これ程いふのに聞分なく、經も讀めねえ坊主になり、一生人に笑はれてえか。そんなことぢやア末始終、願人坊主が關の山で、いい出家には所詮なれねえ。エ、コレ、飲まず食はずでゐる故で、身體は骨と皮ばかり、一人の甥だと思ふから、こんなに伯父が氣揉むのに、汝ア理窟がハア分んねえか。

〽いへどもぢつと差俯向き、答なければやら腹立。

エ、、おらにばつかり口イ利かせ、默り坊で居をるたア、人を莫迦にしたづくに、、、うめが。

〽やら腹立てしその所へ、氣の毒がりて堂番が、甚五兵衞を押止め、

ト此内甚五兵衞立腹して祐天を打つ。こゝへ以前の堂番作兵衞出て來り、

作兵　イヤ伯父御さんの立腹も無理のない所だが、祐天さんの斷食も、今宵が丁度滿願ゆゑ、十のものなら九分九厘で、今止めにする譯にも行くまい。明日の朝まで猶豫をして、待つてやつてはどうでござる。

甚五　世話になつたこなさんが、仲へはひつて異れさつしやるを、聞かぬ譯にも行かぬから、それぢやア明日まで待ちますが、こんな強情な莫迦坊主は、どうにもかうにも手に負ひねえ。

作兵　ハテその強情も明日の朝は、わしもとも〴〵異見をして、諦めさせるとしようから、今夜は一旦歸らつしや

れ。

甚五　莫迦坊主ゆゑ、こなたにも厄介掛けて濟みましねえ。これが世に謂ふ白癡の一心だ。

（憎まれ口も身のためと、跡を案じて出てゝ行く。

ト兩人連れ立ち、正面の入口へはひる。

へ祐天後を見送りて、浮む涙を打拂ひ、

祐天　はる／＼岩城の在から逢ひにござつた伯父樣の異見を聞かいで濟まぬが、假令この儘死にましても、この願望を貫くまでは、どうぞ堪忍して下され。この願望成就の上は、乾度どのやうにもお詫をいたします。いたします程に、どうぞ惡う思うて下さりますな。先刻のお經の讀みさし、さうぢや。

へわが身の詫をかこち言、氣を取直し座について、經卷とつて押頂き、讀めども忘れ讀めざれば、

祐天　ア、腑甲斐ない。この後は何と敎へて貰ひしか、どう考へても思ひ出されぬ。これが讀めねば不動樣、命を取つて下さいまし。ア、口惜しいわえ／＼。

へ胸掻きむしり身をもだえ、涙に暮れて經机、眠るともなく伏し疲れ、更に正體なかりける。

ト祐天よろしくあつて、トゞ机にもたれ打伏したる儘に眠る。これより下手黑御簾の内にて、大薩摩の唄になり。

唄へ夫靈驗あらたなる大聖不動明王と庶人信仰奉る、金台南部の御神へ祈誓をかけし祐天の、滿願成就の時到り、活きるが如き尊像のそれかあらぬか夢の間に、ありあり出現し給ひしは、尊くも又有難き。

トこの留りドロ／＼になり、道具居所にてかはる。

本舞臺うしろ九尺の間常足ほどの護摩壇、左右朱塗り極彩色の本堂の書割にかはり、平舞臺は矢張り斷食堂の儘にて、祐天机にかゝり居眠りゐる。護摩壇の上に不動の靈像、畫面の形にて座し、煙の仕掛け、音樂の鳴物にて道具納まる。

唄へ明王微妙の梵聲にて、

不動　いかに祐天よく承れ。汝一心に我れを念じ、心の曇りを磨かんとすれども、前世の罪障深くして、學ぶこと叶ふまじ。然れども、かくまでに我れに誓つてその道を貫かんとする志こそ殊勝なれ。依つて五臟の鈍血を吐かせ、あらたに非凡の智識を授けんが、わが携へし劍の外、いま一振りの短劍あり。いづれを呑むや返答せよ。

唄〽御膽肝を貫きて、祐天すつくと起き直り、

トよろしくあつて、

祐天　チエ、有難うございます。素より命は捧げし祐天、願ひが成就いたしますか、又は一命捨てますか、二つに一つのお願ひゆゑ、長い方を呑みまする。

不動　ム、、然らば眞言唱へよや。

祐天　ハツ。なうまくさまんだばさらだせんだまかろしやな。

不動　そはたやうんたらたかんまん。

唄〽唱ふる眞言祐天が近寄る胸元取り給ひ、利劍をもつて心臟の鈍血拂はせ給ひしは、尊かりける。

ト唄のあげ、兩人書面の見得にて、この道具廻る。

本舞臺うしろ山の遠見、これへ十日の月を切拔き、所々に杉の立木。下手よき所に「杉仲本奉納須之崎政五郎」と記したる建札あり。眞中の杉の影に寢てゐる人あり。すべて成田の山內護摩木山の體。山颪しにて道具止る。

ト下手より山番の勝五郎、着流し尻端折り雜股引草履にて、山の印のつきし弓張提灯と六尺棒を持ち出て來り、

勝五　火の廻り〳〵。

トうしろへ思入あつて、

ヤ、どこだか知らぬが、うん〳〵と人のうなされる聲がするが。オ、此奴だ〳〵。こりやどう見ても人間だ。よくうまく化やアがつた。ヤイ古狸め、起きやアがれ〳〵。

ト六尺棒にて突く。この時ドロ〳〵のやうに風の音をかすめ、杉の木影より祐天小僧小吉、好みのかつら着流し三尺帶草履にて、口の端を四つ折の半紙にて押へながら起上り前へ出る。勝五郎悧り飛退き、氣味惡きこなしにて、

汝は狸か、とゞ泥棒か。

ト震へてゐる。小吉思入あつて四邊を見廻し、

小吉　何をしやアがるのだ。

勝五　こつちが悧りしたぞ。一體われは何處からはひつてこの山內に寢てゐるのだ。

小吉　エ、。

ト心づいて氣をかへ。

ナアニ、はひるともなしにはひつて來ましたが、實は昨夜夜明かしで、現責めのやうな氣持がして、お山の木の

根へぶつ倒れ、到頭寢込んでしまひました。

勝五　講中の衆の夜詣りの外は、出入をさせぬこの山內、さういふ事なら見脫してやるから、早く構へ外へ出るがいゝ。

小吉　ヘイ、今直ぐに行きますから、もう御心配には及びませぬ。

勝五　よいか、乾度行くがいゝぞ。實は狸と思つて睾丸を縮こませた。火の廻り〳〵。

ト呼びながら上手へはひる。後に小吉ホッと思入。この時人音するゆゑ、小吉こなしあつて眞中の杉の木蔭へ隱れる。こゝへ生田角太夫、好みのかつら、着流し、尻端折り、頰冠りにて出る。これと同時に下手の杉の間より、序幕の佐島天學、短き齒のかつら、同じく着流し尻端折りにて頰冠りなして窺ひ出て、双方うなづき合ひホッと思入。これにて以前の小吉うしろより出て、

小吉　こう、お前達は何者だ。（ト聲をかける。）

兩人　さういふ手前は。

ト三人氣味合ひのこなしあつて、

小吉　おらア此處らのごろつきよ。

兩人　エヽ。

小吉　といつた所がまだ新出し。氣のはるやうなものぢやアねえが、この夜々中護摩本山へうろついて來たこんた衆も、どうせ眞面目な人間とも思はれねえから呼んだのだ。

角太　堅氣でねえから種を明かすが、實はおら達は牢破りだ。

小吉　エヽ。

角太　立話しも出來ねえから、マアこゝへ掛けるがいゝ。

小吉　さうして何所の牢を破りなさつたのだ。

ト三人有合ふ木の根へ腰を掛ける。合方になり、

角太　佐倉の牢へ打込まれ、碌に日の目も見ねえでゐたが、いつまで經つても果しがなく、夙から仕組んだ茶碗の缺で、土臺の角を引切つて、やう〳〵外へ拔け出したが、人目の多い佐倉の城下、據所なく山越えに、この護摩木山へ出て來たのだ。眞言祕密の法よりも固く祕したる身の素性を名告れば、生田角太夫といふ金箔附の盜人だ。

天學　その牢拔けの加擔人に、互ひに包む舊惡も、言はず語らず逃げのびたが、以前はこれでも寺の役僧、坊主の身として吉原へ通つてゐたが運もよく、女犯の罪は脫れ

ても、身に降りかゝる災難は、遁れぬ惡魔の向島、土手で附けられその後に、金が仇でくらひ込み、佐倉の牢へ曳かれて來た、佐島天學といふものだ。

小吉　そんならこなたもこの佐倉へ、江戸から曳かれて來た人か。

角太　合牢をしてゐながらも、そんな話は聞かなんだが、あの時土手で附けたのは、兄弟分のこんたであつたか。

天學　それぢやアおれの懷の、金に目をつけ覘つたのは。

角太　名告つて見りやアおれだつた。

天學　さうと知つたら返報を。

角太　エ、。

天學　ナア二、この遠方の佐倉へ來て、合牢するとは不思議な緣だ。

ト遺恨をふくむこなしよろしく、

小吉　牢破りをする二人が度胸、おれも一番あやかりてえが、兄弟分にして與んねえナ。

天學　味方の殖えるは何よりだが、今夜は何でこゝらへ來たのだ。

小吉　實はこの頃取られ通しで、この近所は借だらけ、所へ昨夜夜明しで、まんぢりともしねえから、こゝの番小屋へ寢込みに來たが、番人がやかましいので、木の根でとろりとやる内に、夢に見たのは祐天が、劍を呑んで智識になつた、額の畫面をその儘に、あり〳〵と見て眼が覺めたが、幅ッてえことを言ふやうだが、この界隈で人に知られ、祐天小僧と綽名に呼ばれた見る影もねえ小野郎だから、弟分になつた上で、いゝ度胸にあやかりてえのだ。

天學　イヤ不動が持つた縛の繩には恐れるのが當前だに、その金縛りの難も恐れず、兄弟分にならうといふのは、實にいゝ膽玉だ。

角太　それぢやアこれから三人で、前祝ひに一杯やらうか。

天學　飲りてえことは飲りてえが、人目を憚るお尋ね者だ。

小吉　おらアまだ綺麗なからだ、趣向するから一緒に來ねえ。

角太　ム、。そんならこれから別れ〳〵に、

天學
小吉　坂下へ行つて出つくはさう。

ト銘々に身支度をしてゐる。こゝへ上手より以前の勝五郎、火の廻りの歸りの心にて出て來り、三人を見て

勝五　ヤ、二人殖えをつたナ。

トこれにて角太夫天學悄りして、

兩人 ソレ、ヤッつけて仕舞へ。
小吉 合點だ。
ト下手にある建札を拔取り、勝五郎の足を拂ふ。勝五郎ドウとなつて、
勝五 アレ人殺し／＼。
ト聲を立てる。
小吉 エ、八釜しいやい。
ト打据ゑる。これにて勝五郎氣絶して倒れる。この聲を聞き、上手より序幕の須之崎政五郎、着流し一本差にて成田講の印の小田原提灯を持ち出て來り、角太夫の前へ差出す。角太夫これを打落す。この時うしろの遠見の月隱れて、四人世話だんまりの立廻りよろしくあつて、この立廻りのうち政五郎腰提げの煙草入を落す。これを柳に四人立廻り、トヾ小吉煙草入を取つて花道へ逃れ行く。
政五 ウヌ、待ちやアがれ。
ト聲をかけ追かけ行かうとするを、角太夫態と支へてキツとなるを木の頭。天學は花道を見やり、につたりこなし。小吉は逸散に花道揚幕へ逃げてはひる。あと三人引張りよろしく、山颪し合方にて、

拍子幕

三 幕 目

花川戸須之崎内の場
山の宿尾花屋の場
牛込自身番調べの場

竹本連中

役名――按摩電庵、實ハ生田角太夫。藤村浦太、實ハ佐島天學。祐天小僧小吉。手先、若葛の目吉。尾花屋番頭、清六。山番、勝五郎。銚子の浪六。小金の馬吉。加役手先、荷松。同、善太。かつら屋、敬介。小道具方、與二郎。大工、松五郎。町役人、太兵衛。同、吉藏。咲島千介。尾花屋丁稚辰太郎。須之崎政五郎。義太夫門附、紋勝實ハ角太夫女房おもと。五十嵐のおえん。長屋女房おかん。

本舞臺、序幕の稽古所を須之崎の出張所に直したる心にて、上手の延喜棚を中敷居の前より戸棚に改め、延喜棚の續き地袋附きの神棚、門口の御神燈を

金網の角行燈に改め、三絃掛けの所腰張の茶壁。ここに子分銚子の浪六、小金の馬吉の兩人着流しにて、明け荷より柳行李風呂敷包みなど出してゐる。この模樣下方の入りし長唄にて幕明く。

浪六　滅法よくかゝつてあるので、ほどくのに大骨折だつた。

馬吉　田舍を出てから江戸橋の木更津河岸へ來るまで、荒ツぽい扱ひをされるから、この位にしにやアなるめえ。

浪六　房州にゐるよりも、江戸へ來て居馴れて見ると、こつちの方が居心がいゝノ。

馬吉　そりやア諸國から出て來るが、國へ歸らず居て附きに江戸で暮しをつけるを見ると、いゝ所に違えねえ。

浪六　親分などもいつそのこと此方へ越したらよからうに、房州と二軒ぢやア餘計に入用がかゝるだらう。

馬吉　飯岡の親分が遠方へ出られねえとて、兄弟分の自家の親分に江戸へ出張をこせえさせ、行つたり來たりしてゐるのだ。

浪六　自家の親分も飯岡の助五郎親分の代りを兼ね、けふは花會助日は寄合と、たま／＼江戸へ出て來ても、少しも暇のないといふは、堅氣から見りやア妙な稼業だ。

ト流行唄になり、下手より序幕の五十嵐のおえん、前垂着流しにて出て來り、門口を明け、

えん　オヤ大層働いてお出でだね。

浪六　上總から荷が來たので、今ほどいた所サ。

えん　親方がお着きださうだから、一寸お目にかゝりに來ましたよ。

馬吉　今日は八つ時分着きなすつたので、今奧で調べ物をしてゐなさいます。

えん　久し振りでお出でなすつて、嘸お忙しいことでござんせう。

ト流行唄にて、奧より前幕の政五郎着流しにて出て來り、

政五　おえんさん、よく尋ねて來て呉んなすつた。

えん　久し振りで江戸へお出でなさいましたね。

政五　丁度足掛け三年振り、お若がゐれば稽古所で、世間の人も氣が附かないが、あんな事をしやアがつたので、これが須之崎政五郎の江戸の出張でござりますと、濟してゐるのも面目なく、つい出て來るのが臆劫で、來ずにはゐたが用が出來、成田へ廻つて連れと一緒に先刻家へ着いたばかりサ。

えん　姉さんがお出なさらないから、稽古がないので御無沙汰勝ち、ついお遠々しくなりました。

浪六　それでもおえんさんは相變らず、男世帶で困るだらうと、菜の物は大抵毎日仕送つてお呉んなさいます。

政五　よく親切にして呉んなさる。それにつけてもあのお若。

　ト思入あつて氣をかへ、

同じ人でも、變りのあるものだ。

馬吉　親分が江戸にゐるうちは人出入りが多いから、ちよいちよい手傳つて上げてお呉んなさい。

えん　そりやア小用は足しますが、姉さんがお出の時と違ひ。男ばかりの所へ來たら、本宅のおかみさんが勘違ひでもなさると困りますよ。

政五　そりやア若い人のいふことだ。おら達は何んでちんちんがあるものか。

えん　さう仰言るが、こればかりは親方、當になりませんよ。

政五　違えねえ。それはさうと、尾花屋からまだ刀を屆けねえか。

馬吉　先刻さう言つてやりましたから、今に持つて來ませう。

政五　さうか。何だか薄暗くなつて來た。灯を點けねえナ。

　ト端唄の合方になり、燈明と門口の網行燈へ子分灯をつける。おえん行燈へ灯をつけ、よき所へ置く。花道より前幕の袖天小僧小吉、やつし形菅笠を冠り、尻端折り、脚絆、藁草履、糸立を引かけ、小包を脊負ひ、旅人の拵へにて出て來り、

小吉　ヘイ、御免下さりませ。

浪六　お出でなさい、どなたでござります。

小吉　下總から參りました小三郎と申す者でござります。

浪六　さうして家名は、何といひますえ。

小吉　イエ、それは申しませぬでも、小三郎と仰言れば分りますでござります。

　ト浪六身形りを見て、少し下目に見やり、

浪六　どうせえ心安い樣子だが、たゞ小三郎では分らねえ、所から、家名をしつかり言ひねえ。

小吉　イエナニ、小三郎と仰言れば親分は御存じでござります。

浪六　イヤ親分が分つても、おれが分らねえのだ。

　ト大きな聲する。

政五　コレ物を聞きなさるのに、靜かに言はねえか。
浪六　それでも、あんまり大風だから。
政五　ハテ、手前の方が惡いのだ。
　ト子分を制し、
モシ私は須之崎の政五郎でござりますが、御用があるなら此方へおはひりなさいまし。
　ト此内小吉門口にて菅笠を取り、
小吉　親分、眞平御免下さいまし。
　ト内へはひる。政五郎おえん圖らず三人顏見合せ、
政五　ヤ、お前さんは小三郎さんぢやありませんか。
小吉　エ、、久し振りでお目にかゝりました。
　ト政五郎これにてムッとして、氣をかへ、
政五　向島で身を投げたことは、その頃後で分つたが、
　ト指折り數へ、
丁度今年で三年後、しかも三月八日だつたが、月は違へど今日も八日、丁度今年が三回忌。ハ、ア、こりやアてつきり幽靈だね。
えん　アレエ。（ト上手へ飛び退く。）
政五　幽靈でなくツちやア、のめ〳〵こゝへ來られぬ筈だ。お若と一緒に三回忌の、施餓鬼は湯島の靈雲寺へ願つてやるから迷はずに、早く冥土へ歸りなさるがいゝ。
小吉　さう仰有るのは御尤も、高い閾ものめ〳〵と、上りましたは餘の儀でなく、お目に掛けたい品があつて、それで參りましてござります。
政五　どういふ品か知らないが、表向きには口を利くことも出來ない小三郎さん。見せなさる物があるなら、人傳に寄越しなさるがいゝ。
小吉　人傳にしたら、自身番か町奉行所から差紙で、餘計な手數がかゝりませうから、それで直に持つて參りました。
政五　おつなことをいひなさるが、差紙をもつて呼出す品とは。
　ト小吉小包の内より前幕の煙草入を出し、
小吉　こりやア親方のでござりませうね。
政五　どうして是を、
小吉　拾つたのサ。
　ト氣をかへて言ふ。
政五　エ、。
　ト思はず兩人顏見合せ、氣味合の思入。誂への合方になり。

小吉　三年後の縁切に、こなたの詞を反古にして、お若と二人三國から、どんぶりやつたが死損ひ、柳畑で引上げられ、こつちの命は助かつたが、相手をなくしてのめのめと、家へ歸つて來られもせず、知邊をたよつて下總へ行つた所が譬にいふ、惡い事には染み易く、成田近所をごろつく内、脊中に彫つた不動から、胸に利劍の押強く、甘いといはれた若旦那も、曲つた道に智慧がつき、劍を吞んだ祐天に、似やアしねえが反對に惡血が增した所から、祐天小僧と綽名に呼ばれ、ごろつき歩くその内に、締りも嚴しき護摩木山で、拾つた品は覺えのある、お前が提げてゐた煙草入、それから質にやつて置いたが、所謂故郷忘じ難く、產れ變つた料簡で、閾の高えこつちの内へ、賣りに來たからモシ親方、どうぞ器用に買つて下せえ。

　トこれにておえん子分不審の思入あつて、

えん　わづか足掛三年で、打つて變つた若旦那、姉さんの悔みも言はず、どうしてこんなにおなんなすつたね。

小吉　野暮なことをいひなさんな。來られた義理でねえ家へ、縉賣同樣のんこのしやあで、落し物を賣りに來るほど、千枚張の面の皮。これからだん〳〵お前の所へも、無心に廻る料簡だぜ。

えん　エ、モ、決してお出でには及びませんよ。

政五　この煙草入を落したは、丁度お山の夜詣りで、しかも十月十日の晩、葉越しの月の薄晴かり、顏は知れねど突當り、喧嘩仕掛か爭ふ内、思はず落した煙草入。その時直に新勝寺へ、屆を出して歸つたが、買ふといふのは妙なもの。マアその譯から聞きたいのだ。

小吉　そりやアお山の夜詣りに落したといやア仔細はないが、そりやアお前が言拔けだ。あの晩丁度成田の賭場で笹川と飯岡の子分が喧嘩を止めもせず、山越しをして逃げなすつた、その時落した煙草入。親分輩にこの事を、明した日にやアお前の恥、口塞げだから買つて置きねえ。

政五　拾つた物を屆けて吳れりやア、禮をするのが當前、品によつたら買ひもしようが、山拔けをして逃げたなどと、言掛けされちやア買はれねえ。

小吉　買はなけりやア賣らねえばかりだ。今言つた表向き夜は締りも嚴重な護摩木山で拾つたと屆けて出りやア掛合ひだぜ。

政五　掛合ひは承知だから、出る所へ出なさるがいゝ。

小吉　其奴ア面白い。それぢやアこれから訴へるから、差

紙の來るのを待つてゐねえよ。

ト立掛る。子分この内心遣ひのこなしあつて、キッとなるを、政五郎コレと制す。この時奥より前幕の山番勝五郎着流しにて出て來り。

勝五　モシお若いの。その煙草入を持つて何處へ屆けなさるの。

小吉　何處へ屆けようとおれの勝手だ。餘計な口を利きやアがるな。

勝五　イヽヤ利きます。エヽ利きますとも、默つてはゐられない。モシわしをよもや忘れやアしまいな。

小吉　どこの馬の骨だかちつとも知らねえ。

勝五　なんだ知らぬ。知らざアわしが言つて聞かせる。コレ三年後成田のお山で、森の根ッこに寢てゐたのを、起してやつたはおれだぞよ。

小吉　エヽ。

ト恟りなす。合方きつぱりとなり、

勝五　今奥で聞いてゐりやア、締り嚴しきお山の内だと、理窟をつけて言ひなすつたが、さういふ此方はあの晩に誰に斷つてお山へはひつた。

小吉　エヽ。

勝五　親分よりも野宿をした、こなたの詮議をせねばならぬ。何でお山へはひつたか、それからこゝで言はつしやれ。

小吉　サアそれは。

勝五　よもや言譯は、出來まいがナ。

トキッといふ。この内政五郎戸棚より金包みを出し、手許へ置くことよろしく、

政五　モシ小三郎さん、だん／＼叩きやア埃の出る譬の通りに何にも言はず、屆けて與れた煙草入を、値よくわしが買ひませう。それならこなたの詞も立ち、指をくはへることもあるまい。

ト紙に包みし金を出し、

サ、これで默つてお歸りなさいまし。

ト小吉受取り開けて見やり、

小吉　ヤ、こりや切餅。

政五　少なからうが、それを旅用に早く成田へお歸りなせえ。異見はしないが、親御さんが一粒ものゝ大事な息子どんなに案じてゐるか知れない。祐天といふ綽名を取つたら、とつくり胸に手を置いて、惡い心の血を吐出し、親に安心させた方が、マアよからうと思ひますぜ。

トぐつと思入。

小吉　わづか五兩か十兩と、思つた所を切餅で、膽を拔かれたその揚句に、身に沁みわたる異見の二字、顏役輩の多い淺草、恥をかゝねえその內に、先づ下總へ歸つた上で、やがて後日に親分にも、よい耳を聞かせませうよ。

政五　よくいつてお呉んなすつた。乾度よい耳を聞かして下さい。

トこの內包金を財布へ入れ、脚絆を脫ぎゐる。

勝五　これが二兩か三兩と、思ひの外に大したお惠み。實に禮りいたしました。

濵六　どういふ緣か知らねえが、煙草入を屆けたばかりで切餅一つはいゝ相場。

馬吉　その代り後日にはいゝ耳を聞かせろと、異見の交つた一言に、ちつとは胸に應へた樣子。

えん　これといふのもその以前。イエナニ以前は由あるお人ゆゑ、堅氣にしたいとお思ひだからサ。

トこの內小吉、脚絆、糸立、菅笠をまとめ、

小吉　親方、皆さん、大きにお世話になりました。

ト下手へ來り、

オイ、こりやアおれの雜物だが、灯が點いたからもう要らぬえ。後で掃溜へ打ちやつて呉んねえ。

濵六　エヽ、コウ飛んだ置土產だぜ。

トこの內小吉門口へ出る。

政五　モシ小三郎さん、下總は何處にゐなさるえ。

小吉　雷流でごろつきだから、こゝと定つてはゐませんよ。

政五　ム、さうかえ。それぢやア乾度後日のことを。

小吉　エヽ、惡い耳は聞かせません。

ト下手へ行き、ちつと思入あつて、

無理合點の言掛りも、綺麗に捌いて呉れるとは、おれより上手の政五郎。後日に顏を立てにやアならねえ。

ト端唄になり、頰冠りをなし花道へはひる。

勝五　イヤ圖々しい奴でござるが、それを憎まず親方が、大した金で強異見、出來ないことでございますナ。

えん　今日まで死んだと思つてお出での御兩親へ知らして上げて、安心さしてお上げなさいな。

政五　今うつかりは知らせられない。眞人間にした上で、立派に知らせるそれまでは、內々にして置いて下さい。オヽ皆なも嘸草臥れたらう。勝五郎さんも湯へはひりながら、並木へでも行つて素見して來なさるがいゝ。

勝五　田舎へ歸る時の土產物を仕入れたいと思ひますから、一遍り廻つてまゐります。

えん　馴れないお方がお一人では、かぶせ物が險呑ゆゑ、お前さん達も行つてお上げなさい。

浪六　エヽ、素見しながら一緒に行きませう。

馬吉　序でにこの厄介物を吾妻橋まで持つて行かう。

ト小吉の糸立と脚絆、菅笠を一つにまとめ、

えん　わたしもそこまで一緒に行きませう。親分、また明日お尋ね申します。

ト流行唄になり、山番勝五郎、浪六、馬吉、おえん連れ立ちて、下手へはひる。

政五　灯が點いたに晝間から、到頭人が來通しで、まだ拜みもしないでゐた。何だか今日はがつかりした。

トこれより床の淨瑠璃になる。

〽澄みわたる、鐘の響も程近き、淺草寺の秋の暮、杖を力に世を送る、片手業なる占かたも、人に吉凶敎へ草、露を踏み分けたどり來て、

トこの内政五郎、下手の臺所へはひり、うがひせしこなしにて、手を拭ひながら出て來り、神棚へ向ひ拜みをなす。文句よき程に、花道揚幕の内にて按摩の笛を吹く。花道より電庵、坊主かつら羽織着流し中下駄、篤實なる按摩の拵へにて、筮竹の包みと見たる小包みを懷中なし、杖をつき出て來り、文句へ冠せて、

電庵　お闇判斷。

ト呼び、又笛を吹きながら舞臺へ來る。政五郎聞耳を立て、

政五　オヽ、肩が張つてゐるところへ、按摩が來るとは誂へたやうだ。

ト門口を開け、

オイ、按摩さん／＼。

電庵　ハイ／＼、どちらでございます。

政五　こつちだ／＼。

〽聲をしるべに探り寄り、

トこれにて門口へ來り、政五郎手をとり内へ入れ、よき所に住はせ、

電庵　へイ、判斷でございますか、御療治でございますかナ。

政五　ナアニ、おらア肩が張つてならねえから、上だけ揉んで貰へてえのだ。

電庵　ハア御療治でございますか、左樣なら御免蒙りまし

て、羽織を脱ぎますでござります。
政五　按摩さんは、大層綺麗だの。
電庵　恐入ります。どうも餘り穢いとよい所でお呼びなさらないのと、少々ばかり占ひをいたしますから、せめて羽織位は着て歩きませぬと、よいお得意が出來ませぬ。
　トこの内電庵羽織をたゝみ、政五郎のうしろへ廻る。
政五　始終こゝらを廻りなさるかえ。
電庵　イエ滅多にはまゐりませぬ。大抵兩國から柳橋邊を廻つて、それからこちらへ參りますが、あまり遲くなりますので、兩國限りで歸ります。それに先月、御贔屓になる旦那から、わざ〳〵迎ひを下さいまして、一月ほど新潟へ行つてまゐりました。
政五　ア、それはいゝことをなすつた。あつちは藝者などは綺麗だといふから、嘸面白い思ひをしなすつたらうノ。
電庵　總揚の座敷を見ましたが、大太鼓小太鼓つゞみ三絃で、越後獅子やおけさ節、實に見事なものでござりました。
政五　ア、總揚を見なすつたか。ハア按摩さんは目が見えるかノ
電庵　イエ、これは申違ひをいたしました。總揚を見たのではござりません、總揚を嗅ぎましたり聽きましたりしたのでござりますが、ふん〳〵〳〵と女子の匂ひがいたしまして、實に目が欲しうござりましたよ。
政五　越後は名代の女所、話を聞いても羨しいノ。
電庵　旦那、私は新潟へ、もう一遍まゐりたうござります。
政五　イヤお前も餘程女好きの方だノ。ハ、、、、、。
　へ肩の凝りより氣もほぐれ、世間話のその中へ、いそいそと來る尾花屋の、丁稚は門に音づれて、
　トこの内花道より、序幕の丁稚辰太郎、八つ口の裂けたる着附を見えぬやうに押へ、脇差の包みを持ち出で來り、門口をあけ、
丁稚　御免下さりませ。尾花屋から參りました。
政五　オ、辰どんか。サ、こつちへ上りなさるがいゝ。
丁稚　眞平御免下さりませ。
　へ小腰かゞめて内に入り、
　トよき所へ住ひ、包みより道中差を出し、
先程はお使りでござりましたが、御注文の研ぎが大きに遲くなりましてござります。
政五　そりやア大きにお世話だつた。久し振りで出て來たから、一寸お尋ね申すのだが、娘の一件から行きにくい

のこ、大きに御無沙汰をしましたよ。

丁稚　私もあれからは、誠に居辛うござります。

〽仔細ありげに答ふれば、政五郎は聞耳立て、

ト丁稚は憂ひの思入。政五郎不審のこなしあつて、

政五　居辛いといひなさるのは、ソリヤ一體どういふ譯だえ。

丁稚　家出なさつたあの晩に、お供したのは私ゆゑ、なぜ途で別れたと、御主人よりも番頭さんが、

〽鳥の啼かぬ日はあれど、呵られぬ日とてはなく、手は下ろさねどお主を殺し、よくのめ〳〵と内にゐると今日も今日とて暖簾掛けにてこのやうに、ずた〳〵に折檻さるゝその辛さ。いつそ死なうと思ひまする。

ト辰太郎よろしく思入。

政五　ア、コレ、常談にもそんなことをいふ奴があるものか。そりやア番頭さんが無理といふものだ。お前が供をしようと言つても、歸れといやア仕方がねえ。その若旦那のことに就いては、遠からず分らうから、決して短氣なことをせずと辛抱してゐなさるがいゝぜ。

丁稚　ハイ。

政五　これに來年は十五だから、直きに年拔だ。よく勤めなくつてはいけねえぜ。

〽親身も及ばぬ諭し言、何と返事も泣く目を拭ひ、

丁稚　實は今晩この刀をこちらへ納めて戻りがけ、吾妻橋から身を投げようと覺悟いたしてまゐりました

政五　莫迦なことを言つたものだ。若旦那の二の舞を、お前にやられて堪るものかナ。

丁稚　イエモウ、あなたの御異見で、決して死にはいたしませぬ。

政五　それでは乾度忘れずに早く店へ歸るがいゝぜ。

丁稚　左樣なれば私はこれでお暇いたしまする。

〽さすが怜悧の辰太郎、守る詞も正直の道は一筋戻り道聞きゐる電庵心を察し、

ト辰太郎涙を拂ひ、挨拶して花道へはひる。この内電庵按みながら、

電庵　いまの小僧さん、あれはどちらのお家でござります。

政五　あれは近年芝から山の宿へ越して來た、尾花屋といふ刀屋だが、番頭に悪い奴があつて、下の者をいぢめてならねえのサ。

電庵　身を投げようとまで思込むのは、よく〳〵のことでございますナ。

政五　裕福な家だから、息子を始め番頭まで碌でなしがあつて困るのだ。
電庵　ヘエ、物持でございますか。
政五　まづ山の宿でも當時の所で、金のあるのではあそこだらう。
電庵　ヘエ、山の宿はどの邊でございますナ。
ト政五郎の肩のところへ顔を出す。
政五　そんなに聞いて、金でも預ける積りか。
トこれにて心付き、氣をかへ、
電庵　イエどういたしまして、實はお得意にしようと思ひまして、慾張つてお聞き申しました。
政五　イヤ、お前も餘程抜目はねえノ。
電庵　イエモウ、目は抜けたも同様でございます。ハヽ、ハヽ。
〽紛らす詞も胸の内、思案をせしが心付き、
ト汗を拭はうとして袂を探し、
アヽしまつた、手拭を忘れて來た。
政五　オヽ、手拭ならこゝにある。これを使ひなさるがいい。
ト有合ふ手拭を取らうとして、座蒲團の下に端がはひりゐて端を裂く。
アヽしまつた。少し端が裂けたが、別に障りにならねえ。マア使ひなせえ。
電庵　これはどうも有難うございます。
トさぐりながら、
イヨウ、大分お新しいやうでございますナ。
政五　そりやアこの春三社様の祭で、町内の揃ひの手拭だ。
電庵　ヘエ、それは盲目には勿體なうございますナ。
ト穢ない汗を拭き、肌を脱ぎ襦袢になり療治にかゝる。しんみりとしたる合方になり、花道より序幕のおもと、そぼろなる世話女房、手拭を吉原被りになし、義太夫のメリヤスを流しながら出て來り、門口に立つ
もと　〽不便やお袖はとぼ／＼と、親の大事を聞く辛さ。娘お君に手を曳かれ、親は子を持つ子は親を。
ト門口にて語る。内には電庵揉みながら、文句へ寄せて、
電庵　ハヽア、安達が原の袖萩の所でございますナ。
政五　門附にしては中々旨いものだ。
電庵　盲目がゐるのに袖萩とは、チト面當でございますナ。
政五　違えねえ。

ト この內聞いてゐて。

政五 なにしろ錢を遣らう。按摩さん、少し待つて與んねえ。

電庵 ハイ〳〵。

もと へ走らんとすれば雪道に、力なく〳〵たどり來て、

ト 門口の文句の止り、政五郎錢入より錢入を出し、門口をあける。この途端に兩人思はず顏を見合せ、おもとはハツと脇を向くる、

政五 ヤ、お前はおもとさんぢやアねえか。

へ問はれておもとは是非なくも、

ト これにてもぢ〳〵し、思ひ切つて顏を上げ、

もと ハイ左樣でござります。

政五 なんだな、ちつとも知らなかつた、サア此方へはひりなさるがいゝ。

もど 誠にお恥しうござりますから、モウこれでお暇いたしまする。

政五 そりやアいけねえ。マア話も聞きたいから、此方へはひりなさるがいゝ。

もと 左樣なら、御免なされて下さりませ。

へ高い閾と身の憂さに、やう〳〵內に入り、

ト なづ〳〵下手へ住ひ、

政五 オイ按摩さん、一服やつて少し待つてゐて與んねえ。火鉢は直ぐそこにあるよ。

電庵 ハイ〳〵。ごゆつくりと御用をお足しなされませ。

ト これにて眞向きに住ひ、

もと 親分お房州の御本宅へお歸りと承り、お顏を知らぬ子分衆ゆゑ、毎晩のやうにお門へ立ち、御贔屓になりまするが、あなたがお宅でござりましては面目なうござりまする。

政五 ナンノそんなこと構ふものか。シテ門附に出なさるとは、いまだに連合の居所が知れないかえ。

もと お若が變死いたしましても、知らせてやります事も出來ず、その內だん〳〵たつきに迫り、今でも路頭に迷つてをります。

へ涙ながらの言の葉に、政五郎は心を察し、

ト 憂ひの思入。電庵これを聞きハツと心附き、上手へ横向きになり、煙草を吸ひながら顏を背ける。

政五 それは何しろ氣の毒だが、シテ當時はどこにゐなさるえ。

もと 小梅の家をたゝんでしまひ、唯今では押上の最經寺

のうしろの方に、一人で暮してをりまする

政五　そりやアちつとも知らなかつた。それではお前の稼ぎばかりだね。

もと　ハイ、角太夫が不始末から、いまだにたゝまる借財に、その言譯も申し盡し、實に申す藝が身を助けるほどの不仕合。

へ細き三すぢの世渡りも、身はやゝ破れしこの姿、夫を惡く申しては、妻の身として濟みませねど、かういふ姿になりましたも、天の御罰でござりまする。

へ悔し涙の繰り言も、女子の身には道理なり。神ならぬ身の角太夫、思ひがけなき女房が詞は胸に打つ釘と、手に汗握るばかりなり。

トこの内おもとよろしく思入。電庵これを聞き悧りなし、脇を向きホッと思入。

政五　お若といひ連合といひ、二人が二人さうなるも、みんな前世の因縁と、諦めるより外はない。なにしろ門附などせずと、丁度幸ひ自家へ來て留守居をして貰ひたい。さうすりやアおいらも安心。こりやア兩得といふものだ。

もと　思召しは有難うござりますが、お若を養女に願ひまして、あゝいふ不始末をいたしましたのに、また〳〵御厄介になりますのは、押しが強うござりまする。

政五　そりやアつまらない遠慮だ。いゝから早速來なさるがいゝ。

もと　左樣なればお詞に甘へ、お願ひ申しに上ります。

政五　用が片附いたら、明日にも田舍へ行かにやアならねえから、一日も早えがいゝ。

もと　他人樣さへこのやうに、

へなぜに夫はそでないかと、恨み嘆くを政五郎、

ト悔しき思入。電庵だん〳〵ちゞこまる。

政五　そりやア尤だが、愚癡になるからいひなさんな。

ト二朱紙に包み、

こりやア少しばかりだが、安達の語り賃だ。持つて行きな。

もと　どういたしましてこのやうに。

政五　ハテ、いゝから持つて行きねえといふに。

もと　それは有難うござりまする。

政五　按摩さん、大きに待遠だつた。サアやつて呉んねえ。

電庵　ヘイ。

ト返事だけして、やはり俯向いてゐる。

もと　親分樣、いづれ改めて上りまする。

政五　なるたけ早く來るがいゝ。オイ按摩さん、やつても
いゝよ。
電庵　ヘイ。
ヘ顏をそむけて電庵は、揉みにかゝれば、
トこれにて餘儀なく横向にて揉みにかゝる。おもとこの内門口へ行き、禮を言はうとして上手を見やり、思はず按摩を見る。この時電庵も思はず目を明き、おもとを見やり、ハッと思入あつて横を向く、おもとはよもやといふこなしにて、氣をかへ、
もと　左樣なれば、いづれ上りまするでござりまする。
ト下手へ行きながら不審の思入あつて、氣をかへ、流しのメリヤスを彈きながら花道へはひる。
ヘ電庵安堵の思ひなし、
トホッとこなし、床のメリヤスになり、
電庵　くはしい譯は存じませぬが、餘程不仕合なお方と見えますナ。
政五　あれは生田角太夫といふ立派な武家の女房ださうだが、亭主が身持が惡いばつかり、屋敷は永のお暇で、もぐりの公事師をやつてゐる内、金は殘らず使つてしまひ子供に構はぬ所から、今のかみさんが泣込んで頼むといふので、その子供をおれの所で育てたが、年頃になるとその娘もそでねえことをしやアがつて、世間の人の笑ひ草、到頭終ひはおれまでが面皮をかくことになつたのよ
電庵　ヘエー、その娘御はどうなさいました。
政五　實は色男と三國で心中をしやアがつた。
電庵　そりやア飛んだことでござりましたナ。さうして死骸は知れませぬかナ。
小五　死骸はどうも分らないが、その事について今年の春、町奉行に出た遠山樣の組子の衆の耳になり、眼を着けてゐるといふから、何か事が起るかも知れねえ。
電庵　へエ、遠山樣が眼を着けましたか。當時名代の名奉行、下々の事は何一つ知らない事はないと申しますから今に仔細が分るでござりませうナ。
ヘ世間話も身に當る、捨てゝ置かれぬ一大事。
トこの内電庵氣味の惡きこなしあつて、上を揉みなはり、
ハイ、お横になりなさいまし。
政五　イヤ下はやらないから、そウこれでいゝ。上下をやるより長かつたから、二人前療治代はやるよ。
電庵　どういたしまして、長いと申しましても、唯今のお

かみさんの内は煙草を喫んでをりました。どうかこれを御縁に、度々お願ひ申します。

〽さぐりながらに立上るを、

ト 下手へ行きかゝるを、

政五 オイ〳〵、錢を持つて行かねえか。

電庵 ほんに肝腎のものを忘れました。

政五 慾のねえ按摩さんだノ。

〽手渡しなすを探り見て、

ト 天保錢を三枚出して手渡しにする。

電庵 ハヽア、これは天保錢でござりますナ。天保六年に出ましてから、下々へ出て來ましたは、やう〳〵此頃でござりますから、まだお珍しうござりますナ。

ト さぐり見て、

何しろこのやうに澤山は要りませぬ。

ト 返さうとするを、

政五 待たしたから、まあ取つて置きねえ。

電庵 それはどうも有難うございます。

ト 財布へ仕舞ひ、小包を持つて門口へ出て、

まだお禮を忘れました。お手拭を有難うござります。

〽暇乞して電庵は、夜風に凍る道のべを行かんとなして、

ト 禮をいひ、門口を出て花道へ行きかゝり、ちつと思入あつて腰を伸し、杖を持つたまゝ兩手を上げ伸びをする。これをさんげ〳〵になり、按摩のこなしになり笛を吹きながら揚幕へはひる。政五郎は以前の刀を取上げ見やり、

政五 仕上げをしたら器量が上つた。この勘定を屆けながら、久し振りで尾花屋へ無沙汰の詫びに行かざアなるめえ。

ト この時寄席の打出しを打つ。

オヽ、モウはねたか。それぢやア今夜も。

ト 刀の小じりを突くを道具替りのしらせ。

四つだと見える。

ト この模様、端唄へ打出しの鳴物を冠せ、この道具まはる。

本舞臺一面の平舞臺、上手九尺中途の土藏。これに足場を掛け、所々に雨除けの苫を掛け、この下忍び返し附の板塀、眞中小庇附の三尺非常口。内より見越しの松。すべて山の宿河岸、尾花屋裏手の體。新内の合方にて道具留る。

ト花道より以前の按摩電庵、笛を吹きながら出て來り
花道にて舞臺へ思入あつて、

電庵　お鬮判斷。

ト舞臺へ來る。少し離れて跡より以前のおもと、頰冠りに三絃を抱へ、窺ひ〳〵附いて來る。電庵は舞臺への
み心を配りゐる。おもとは下手の天水桶の蔭へ忍ぶ。この內電庵土藏の邊より板塀へ心を着け、伺ひゐてうなづき、風呂敷包みを腰へつけ、杖の頭を拔き取る。この先平身の鎗にて、板塀へ寄添ひ、押ぶちの間へ挾みこちる。これにて押ぶち下より離れる。おもとすかし見やり悔りなし、涙を拭ひながら口惜しき思入。ト堪りかね、ツカ〳〵ト行つて袖に縋り、

もと　コレこちの人。お前は呆れた人ぢやナ。

ト　これにて電庵手早く杖をはめ、

電庵　ハイ。どなたでござりますか。なにか人違ひではござりませぬか。

もと　エ、。

ト　これにておもと違つたかといふ思入あつて、

ナニ、人違ひとは。

トよく見廻す。

電庵　とつくり御覽なさりませ。必らずお間違ひでござりませう。私はあなたのお顏は存じませぬ。

ト電庵笛を吹きながら上手へ行かうとするを、おもと不審のこなしにてなど〳〵しながら、よく〳〵電庵を見て、

もと　エ、白々しいその言拔け、確かにお前は角太夫殿。コレお前の女房でござんす。なんでそのやうな心にならしやんした。サア私と一緒に來なさんせいなア。

ト　おもと電庵の袖を引けども、電庵杖にもたれ知らぬ振りをして立身、

エ、そのやうに白を切らすと、サアこれから訴へ出ねばならぬ。

ト　これにて電庵ギヨツとする。

サア、來ずば私も一生懸命、召連れ訴へ出ねばならぬ。

ト　おもと電庵の手を取り、下手へ行かうとする。電庵その手を拂ひ、懷の手拭を手早くおもとの咽喉へかけ締め殺す。これにておもともがく。この時兩眼開きキツと見得。本釣鐘、誂への合方になり、電庵手拭の手を放す。これにておもとバツタリ倒れる。電庵その儘足場の下へ、おもとの死骸を引摺り込み、杖にて足場の

上の笘を一枚引取り、死骸へかけ、板塀の剝がしたる所へ行き、忍込まうとして内の物音に恟りなし躊躇ふ。この時内より序幕の番頭清六、寢卷の形りにて風呂敷を抱へ、剝がしたる板塀の穴より這出す。電庵また恟りなし、樣子を窺ふ。この時うしろの張物へ灯入りの八日月出る。この間に、番頭清六やう〳〵這出てホッと思入。

清六　庭口の鍵を見失ひ、どうして出ようと思つたら、犬でも出たか、塀の板が剝がしてあるとは天の助け。あのおせいめがわん〳〵で、内では着物を着替へられぬ。

ト足場の下へ來り、往來へ風呂敷をひろげ、中より羽織着附駒下駄を出し、よろしく着替へ、月明りに容を見やり。

これでは何處へ出しても旦那風だや。

ト紙入より文を出し、

久喜萬字の若紫が自筆で寄越した迎ひの文、月明りではつきり讀めぬが、「是非お出でおん待ち申上まゐらせ。」こゝだけは先刻藏の二階で五六度くり返したから、もう闇でもそらで讀めるところだや。エヽ「かへす〴〵もお約束の事を。」（ト讀みかけ。）いゝッてことよ。承知してゐるよ。それにこなたの身の上を誰にも話しはしないから。決して心配せぬがよい。第一話すと人に取られてしまふから。ノウ花魁、さうぢやアないか。

ト獨り呑込み、風呂敷へ寢卷を包み、

この包みは行がけに竹門の髪屋へ預けて出掛けようわえ

ト衣紋を直し、しきりと容をつくり、上手へ行きかけ、

イヤ待て。昨日屋敷の掛をくすねたのと芝口の店から來た金とで、花魁の無心通り金の數は揃ふ筈だが、恥をかいてはならぬ。一寸改めて行かう。

トこの時月に雲かゝる。

ア、しまつた。暗くなつた。しかし小判だから數はわかる。

ト手探りにて紙入より紙包みを出し、明けようとしてパッタリ落す。恟りして取上げようとする。これを窺ひゐたる電庵、杖の先の鎌へ引掛け手許へ引取る。この時足場の上の笘をめくり、以前の祐天小僧小吉見下ろしゐる。番頭清六しきりと尋ぬれども知れぬ思入。

こんな不思議なことはないが、もう夜更けだから人も通るまい。灯の算段して來よう。

ト心遣ひのこなしにて、以前の塀の破れよりもぐり込

み、内へはひる。電庵につたり思入あつて、小判を財布へ入れる。

小吉　オイ兄イ、いゝ手際だの。

電庵　誰だえ。（トギックリ思入。）

小吉　祐天だよ。

電庵　ム、、さうか。

トこの内小吉足場より飛び下り、

小吉　成田の山で別れた限り、丁度三年目だぜ。

電庵　モウさうなるかナ。よく今夜知れたノ。

小吉　そりやア知れなくつてよ。不動様が附いてゐらア。

電庵　違えねえ。さうしてもう仕事をしたのか。

小吉　ナアニ、こゝはおらの家だが、忍び込んで阿母に逢つて、以前の詫びをしようと思つてゐるのだ。

電庵　何だ。忍び込んで詫をする。そんな奴があるものか、さういふ料簡になると盗人は直ぐ迯ひ込むから、ふんづかまらねえ用心しねえよ。

小吉　さうしてお前は、始終江戸にゐるのか。

電庵　ナアに定りはねえが、今夜きざな事を聞いたから、遠走りをしようと思つて、いま路用を稼ぎ中だ。

小吉　きざな事とは、どんな事だえ。

電庵　おら達の身の上を、名奉行の噂の高い遠山の手で尋ねてゐると、チラリと小耳に挟んだから、こゝで逢つたのは丁度幸ひ。うつかりしてはゐられねえぜ。

トこの時塀の穴より、番頭清六紙雪洞を袖にてかくし又這出す。電庵小吉両人囁き、窺ふ。清六前へ出て灯をかくしながら落した金を尋ねる。この灯を小吉叩き落し、電庵清六を引倒し、寝巻の細帯にて縛り、手拭にて猿轡をかけ、足場の根方へ縛り、寝巻の袂の風呂敷にて目と耳へかけ縛る。清六震へゐる。

小吉　この野郎はおいらの所の番頭だが、見られちやア面倒だから、かう結へりやあ聞えねえ。さうしてお前どこへ出掛ける積りだ。

電庵　この秋新潟へ行つてゐて、滅法面白い思ひをしたから、もう一遍越後へ行く積りだが、待つてゐるから後から來ねえ。

小吉　ム、其奴ア面白え。それでは路用を拵えるのに、おれが案内して一緒にはひらう。

電庵　イヤ自分の家といふものは、却つていけねえものだから、こゝに構はず路用をやるから、早く江戸を立つてしめえ。

小吉　金は今夜へえつたから、おらア路用は要らねえが、お前一人でいゝか。
電庵　おれには心配はいらねえ。
小吉　おらア先へ行かう。
電庵　手前直ぐ越後へ行くか。
小吉　一番下總へ行つて、これから行く積りだ。
電庵　ア、下總へ情婦が出來たナ。
小吉　兄貴、さう當てちやア困るぜ。
電庵　早く行つて逢つてやんねえ。
小吉　それぢやア又逢ふぜ。
ト下手へ行掛け、わが宅へ心の殘るこなしあつて、一寸佇む。
電庵　オイ、何を考へてゐるのだ。
小吉　ナアニ、今向ふを見透かしてゐたのだ。
ト新内になり、小吉揚幕へはひる。電庵後を見送りゐる。この時月また出る。折惡いといふ思入あつて、塀へからだを寄せ、月影の暗き所にて杖の先を拔き、又剝がしに掛る。こゝへ上手より加役手先若蔦の目吉、頰冠り、着流し、三尺、駒下駄、遊び人の拵へにて出て來り、足場の下に窺ひゐて、よき程にツカ〳〵と行つて、
目吉　御用だ。
ト電庵に組附く。これにて電庵さてはと振拂ひ下手へ行くを、橋掛りより、同じく手先兩人出て來る。これにて電庵たぢ〳〵と後へ下り、上手より目吉、下手より兩人の手先じり〳〵詰寄せる。電庵は眞中板塀の月影のなき所へひつたりと寄添ひ、三方より見込む。上下にては月夜より暗き所を見離さこなしにて窺ふ。電庵上手へ行かうとする。三人上手へ目をつける。下へ行けば下へ目をつける。月夜のだんまりよろしく、この内袱紗包みの短筒を出し、空に向け一發放す。上下にて愕りする。この内あとの一發の彈込めをなし、上寄りにて下手へ向ひ、ドンと二發目を放す。手先三人俯伏になる。これにて電庵下手へすりぬけようといふ思入。この時番頭清六の縛られし帶ほどけ、風呂敷を冠りしまゝ震へながら逃げ出すゆゑ、手先手早くこれを捕へる。この間に電庵花道へ逃れ行くを、目吉追ひかけ行き組附く。番頭清六は手先に襟がみを捕へられる、双方見合つて木の頭、手先番頭の風呂敷を取る。この見得よろしく

拍子幕

幕引きつけると、賑かな合方になり、日吉電庵を縛らうとするを、電庵日吉を引くりかへして逃げにかゝる。ごつちやの摑み合にて、立廻りながら揚幕へはひる。留めの木を直し、尻明けになる。

本舞臺一面の平舞臺、正面中窓、下板羽目。上手折廻し板羽目。下手一間の常足の二重、正面障子、左右粗き簾をかけ、この前三尺の式臺。左右こまよせ、いつもの所小割を打ちし肱掛け窓の見切。下手大臣の際に箱、天水桶、手桶三つ積みあり。すべて牛込自身番の體、上手板羽目に鎖をかけ、この下に前幕の番頭清六、手鎖にて鎖を腰繩へつなぎ、俯向いてゐる。下手に町役人兩人圍爐裏の側に住ひ、式臺に前幕の目吉、手先○△書附を調べ、平舞臺に芝居の小道具方與三郎、大工の松五郎、長屋女房おかん、芝居の鬘屋敬介、四人引合にて立掛りゐる。この見得、合方へ大拍子雁笛にて幕明く。

手○　オイおかみさん、お前は何の引合だ。

かん　私は末新道の洗濯屋でござりますが、尾花屋の番頭さんに質屋の通ひを貸しましたでその引合でござります。

目吉　竹門の鬘屋の勝五郎といふのは來てゐるかノ。

敬介　ヘイ、今日は代で出ましたが、家主は直き後からまゐります。

目吉　お前の所では、清六に金を騙られたことがあるか。

敬介　イエ金は金でござりますが、金錢ではござりませぬ。自分の買つてをります女郎が火傷をいたしました時、それを隱すために附け毛をこさへてやりました。その臺金の勘定を踏まれたのでござります。

目吉　ア、毛の植つてゐる臺金といふ金のことか。

敬介　鬘につかふ銅のことでござります。

目吉　いゝ年をしやアがつて、女にのろい野郎だナ。

清六　ハツクシヨ。

町役　こなたは昨夜始終もぢ／＼してゐたが、ちつとは寢なすつたか。

清六　どういたしまして、初めてかういふ所へまゐりましたので、いまだに震へが止りませぬが、實に戀は仇でござります。

松五　私は尾花屋の大工でござりますが、番頭さんが遊びに行く時、着替の着物を預かつたので、それで引合に附

きましてござります。少々で拔けますなら、何分お頼み申します。

日吉　どうせ一緒に片着けてやるから、少し待つてゐなさるがいゝ。

ト書附へ認めながら、

お前は葺屋町の芝居へ出る、小道具方の與兵衛といふものか。

與二　へイ、與兵衛の代でござりまする。番頭さんが吉原へ行く時、茶番につかふから芝居遣ひの莨入を貸して呉れと、それを貸しました時、相方の女郎に卷上げられて其れ限り返さず、それが引合に附きましてございます。

ト番頭清六は表にていふ事を、一々聞いてゐて面目なきこなし。

日吉　まだお掛りがお出にならねえから、お調べの筋は分らねえが、どうせあの四人も送りになるに違えねえから、お前達も懇意な仲だらう、つるでも拵へてやるがいゝ。

松五　淺草から矢來下までは餘程の道でござりますから、成丈拔けますやうに。

敬介　一統よりお願ひ申します。さうして四人でどの位なら拔けませうね。

手△　オイ／＼、今御出役になるから、こゝでそんな事をいつてはいけねえ。こつちへ來ねえ／＼。

トこれにて日吉は圍爐裏の側へ來る。手先△は平舞臺へ來り、皆々と立身にて下手に後ろ向きになり。

松五　どうでござりませう。一人前一包づゝで、四人貳兩では拔けますまいか。

手△　そりやアいけねえ。あの位な四人ぢやア、二包みがものは大丈夫ある。

與二　遠方をたび／＼來ては、却つて物費りも多いから、一包み半づゝで願つて下さいましナ。

四人　どうぞそれでよろしく願ひます。

ト手先〇式臺の上より下手へ思入あつて、

手〇　オイ／＼善太、宮地の芝居者と違つて木挽町の芝居の者だから、一包半づゝで拔いてやんねえ。

手△　ム、、さうしてやらうか。それぢやア一包み半づゝで承知して置かうよ。

四人　それはどうも、有難うござります。

ト合方になり、二人前一分貳朱づゝまとめ、手先に渡す。

手△　お前達は、もう歸つてもいゝ。

四人　それは有難うござります。

ト引合人みな〳〵下手へはひる。この内花道より藤村浦太、羽織、着流し、大小、緒足袋、雪踏、加役同心の拵へ、後より御用箱を脊負ひし供附添ひて出て來り舞臺へ來る。手先△式臺へ行き、思入あつて、

手△　御出役だ。

トこれにて目吉手先○出迎ふ。藤村浦太式臺よりずつと通り、眞中へ住ひ、下手屋體の奥より番太郎の親父煙草盆茶を持ち出て來り、出す。手先みな〳〵平舞臺下手へ住ひ、

手先　御苦勞樣でござります。

トこの内藤村は御用箱を明け、書物を出し、

藤村　こゝへ泊つたのは、尾花屋の召使の者か。

目吉　左樣でござります。

藤村　それから調べるから、あとの手配りをして置いてくれ。

目吉　ヘイ。

トこれにて手先△下手へ行き、番太郎に言付ける。これにて番太郎下手へはひる。目吉は上手へ行き、番頭清六の手錠をとり小手を弛め、繩をかけしまふ藤村の前へ連れて來り、この左右へ手先並ぶ。番頭清六は震へながら辭儀をする。町役人は入口の二重へ行き住ひ、

藤村　其方は淺草山の宿、尾花屋の召使か。

清六　左樣にござります。

藤村　生國名前を申し上げろ。

清六　大坂産れで清六と申します。

藤村　其方昨夜主人宅の裏手に於て、わが手の者に御用になつたが、この書上げでは、裏の板塀を破つて拔け出した時、小判を三四枚所持してゐたとあるが、それに相違ないか。

清六　ヘイ〳〵。（トおど〳〵してゐる）

藤村　コリヤ、有體に申し上げろ。

清六　ヘイ〳〵、その小判は三四枚ではござりませぬ。廿枚持つて出ましてござりまする。

藤村　ナンダ、廿枚持つて出た。小判を左樣に持つて出るとは、コリヤ容易ならぬことだぞ。サ、委しく申し上げい。

トキツと言ふ。清六震へ、

清六　ヘイ〳〵、申し上げますとも〳〵。最初同家に勤めをります、房州産れのおいせと申す下女と馴染めましたる

所、先月吉原へ掛取にまゐつた時、久喜萬字でふと見ましたは、以前知つてをります稽古の師匠で、今は若紫となつてをりますので、前申す下女の者や出入の者より金子を借り、遂にそれでも足りませぬで、主人の掛先まで使込みましてござりますが、モウこれぎり申上げる事はござりませぬ。

ト べら／＼白状する。藤村は清六が若紫といふ時、よろしく思入。

目吉　それ限りおやアあるめえ。何か外にまたあるだらう。

清六　イエ、もう子飼ひから尾花屋ばかりで、何處へも參りませぬ私、主人をお調べ下さりましても分りますでござりまする。

手〇　何かまだあるだらう、隱さずと申上げろ。

ト 十手の先にて膝を突く。番頭恟りして飛上り、

清六　イエ、どういたしまして、女子にはまりまして掛先を使ひましたより外に、盜みなどはいたしませぬ。

ト 泣きながら言ふ。この內橋懸りより、三階、中二階思ひ／＼の仕出し、一人二人づゝ出て來り、六人ほど見切の窓より立聞きゐる。

藤村　それから書上げの內にある、壹兩貳分で帶地を大丸で買つたといふのは、こりやア何だ。

清六　へイ／＼、それも掛先の內より、下女のおいせに買つてやりましたが、それは壹兩貳分ではござりませぬ。貳兩貳分でござりまする。

ト この時仕出し窓の外に聞いてゐて、

仕〇　ヤア、女の惚氣をいつてやアがらア。

〇　コリヤ／＼、立つてはいかん／＼。

△　サア／＼、行つた／＼。

ト これにて仕出しいそ／＼と下手へ行き、裏向きに蹲み噂話をする。こゝへ下手より以前の番太郎歸り來り、二重へ住ひ、

藤村　目吉、當人が金高を餘計に申す位では、もうこれだけでよい。

目吉　へイ、見込より餘計になつてをりますナ。

藤村　追つて呼出すから、後を早くいたせ。

目吉　へイ。サ、今日はお調べはこれだけだ。

清六　へイ／＼。

ト これにて目吉清六を上手の元の羽目の所へ連れ來り、手先〇△に二繩をかけ、手先へ附いて舞臺へ下り、番太郎繩取にて出る。この時合方キッパリとなり、橋懸

りより単衣の按摩電庵、吉原冠りにて本縄にかゝり、手先□の左右へ手をかけ、他の番太郎縄取にて、電庵杖がなくて歩きにくいといふ思入にて出て来り、式臺の所へくる。日吉電庵の縄を受取り、手先○書附を出し、入り来る手先に言付く。これにて清六を預かり、手先○へ縄取にて、清六花道へ行く。仕出し皆々下手へ附いて来り、花道を見送り、

仕△ あんな大きな圖體で、女ゆゑに主人の金を使ひ込んで縛られやアがつたのだ。

皆々 態ア見やがれ。

トこれを聞き、清六面目なきこなしにて、

清六 どうか手拭を冠ることは願はれますまいか。

手□ オヽ、冠してやらう。

ト穢い手拭を清六の懐より出し、すつとこ冠りにしてやる。

仕◎ どうだえ、あれで肥桶を擔がしたらよからうナ。

仕△ さうさ、餘程いゝ。

皆々 似合ふだらう。

○ オイ〳〵、立つてはいかん〳〵。

ト小言をいふ。仕出し皆々下手へ行く。

清六 アヽ、情ないことだなア。

ト合方にて、手先附いて揚縁へはひる。見物この後を付けて捨ぜりふにて揚縁へはひる。この内藤村は御用箱より書附を出しゐる。電庵は自身番へ上げ、手錠をとり小手を弛め、日吉介錯して掛りの前へ連れて来り住はせる。

日吉 ソレ、お掛りが御出役になつてゐるぞ。

電庵 ヘイ〳〵。（トとぼ〳〵して辭儀をする。）

藤村 其方、名は何と申す。

電庵 ヘイ、按摩を渡世にいたします、電庵と申す者でございます。

ト面を上げる。藤村電庵の顔をぢつと見て、不審の思入。

藤村 其方は幼少より盲目か、又は中年よりして見えぬのか。

電庵 ハイ、三つの時疱瘡で見えなくなりましてございます。

トこれを聞き、ちツと思入し

藤村 ハヽ左様か。昨夜、淺草山の宿尾花屋の裏手なる板塀を破つて、忍入りし事を落なく申せ。

電庵　イエ、どういたしまして、山の宿へ參りましたは本當でございますが、板塀を破るなどとは、以ての外でございます。

日吉　默れ。汝は盲目だから知るめえが、あの時は雲が霽れて月明りに、破つた事はおれが見て知つてゐるぞ。白ばつくれるなえ。

ト電庵これを聞き涙を拭ひ、

電庵　それはあなたお情なうございます。私は全體疳が惡うございますから、往來の眞中を通る積りで、折々端の方を歩きますので、あの時も板に突當つて杖を折りました。ア、仕舞つたと探してをります後から、御用だとお聲が掛りましたので、イヤモウ悔りいたしまして、一生懸命逃げ出す所を縛られましてございまするが、いまだにさつぱり譯が分らず、唯だおど〳〵いたして、實に夢のやうでございます。

ト泣いてゐる。この内邪魔にならぬやうに、又仕出し表へ出て來り立聞きする。小言ないふと、又下手へ行つては元の所へ來る。

日吉　ナンダ、杖を折つた。折つたといふなら見せてやらう。

ト下手より、前幕の天窓のなき杖を持ち來り、刀の鞘とも思ふ所に、ちやんと合せ目が出來てゐるか、これでも折れたのか。

ト電庵杖を探り見て悔りなし、

庵電　ヤ、コリヤ鋸目がはひつてをりますナ。ハ、ア、さては朋輩の按摩に遺恨をつくつたものに違ひない。ア、悔しいことぢやナ。

日吉　べらぼうめ。何でかう几帳面に鋸目を入れる奴があるものか。何かこの中へ仕込んで置いたのだらう。

電庵　どういたしまして。そのやうな事は覺えございませぬか、どうぞ天窓のお調べを願ひます。

手○　昨夜あの近所を尋ねたが、どうも在所が知れねえが、手前どつかへこかしやアしねえか。

電庵　何であなた、折れた先など隱す埋合がございませぬ。

藤村　然らばそれは後へ廻し、そちが財布に小判が十枚はひつてをつたは何の金子だ。

電庵　へエ、、どういふ譯でございますか。御闕判斷と療治をいたす私、昨晩は三百文取りましたきり、外には一錢も取りませぬ。（トちつと りへてゐて）お掛り樣、よくお考へ下さりませ。全體私に、その小判がありやう

害がないではござりませぬか。アノ、お待ち下さりませ。あの時不意を喰ひましたから、まご／＼してをります内、一緒に縛られた者がござりましたが、その者に胸倉をとられますと、何だか懐へ重い物を押込まれましたが、大方それでゞもござりませうか。

藤村　それでは其方は、三百文より持つてをらぬといふのだナ。

電庵　ハイ、その三百文も花川戸の以前清元の稽古所をしたお家で貰ひましてござりますから、それをお尋ね下さりませ。

藤村　ムヽ、然らば其方を捕へんとせし時、鐵砲を打つて逃げんとしたるは、これはどうしたのだ。

電庵　ヘイ、それは愕りいたしまして、私も飛上りましたが、どこから打ちましたものやら當が分りませぬが、何しろあんなに驚いたことはござりませなんだ。

　トこの内日吉前幕の短筒を出し、

日吉　電庵、どこまでも手前はづう／＼しいか知れねえぜ。汝が逃げようとした時に放した鐵砲は、現在これで打つたらうナ。

　ト鐵砲の先にて電庵の膝を突く。

電庵　アイタヽヽヽヽ、そのやうに非道いことをなさらなくつてもよろしうござります。

　ト泣きながら鐵砲を探りて、

杖一本で歩きます者が、何でこのやうな重い物を持つて歩かれるものではござりませぬ。

日吉　イヽヤ、そりやアいけねえ。手前は御國判斷をするといつて、筮竹や算木と見せかけ、この短筒を持つて歩くことは、夙に種が上つてゐるのだ。モウいゝ加減に申上げてしまへ。

　ト縄の先にて脊中を打つ。

電庵　ア、モシ、それは御無理でござります／＼。盲目が覘ひをつけるものを持つ筈がござりませぬ。ア、情けない御詮議でござります。ア、目が欲しい／＼。チエ、口惜しうござります。

　ト身を震はして泣く。この内段々表へ人立ちする。この内に町方同心咲島千介、羽織着流し、大小、雪駄にて供附添ひ、立人の中に混つて聞いてゐる。町役人役これに心附き、式臺にて挨拶して上れといふ。咲島はここでよいといひながら立聞してゐる。

藤村　ムヽ、何でも存ぜぬと申すばかりだナ。ムヽ、然ら

ばそれにして、コリヤ電庵、汝は人殺しをいたしたナ。
電庵　エ、。
　ト驚き、
ナ、何事の仰せでござりますナ。
　ト少し乘り出す。
藤村　唯今調べたる板塀のつゞき、足場をかけし土藏の腰
に頸を締めたる女の死骸あり、これは汝が仕業であらう
ナ。
　トキツといふ、電庵すこし利かぬ氣になり、
電庵　コリヤモウ一生懸命に申上げなくつてはならぬ。モ
シお掛り樣。人殺をしたなどとは、その譯を承はりませ
う。サ、何のお見とめでござりますナ。
　トキツとなる。
藤村　ム、、聞きたくばいつてやるが、その死骸の頸を締
めたは、その夜汝が所持してをつた、花川戸の祭の手拭。
　トこれにて電庵初めてギックリする。
又その手拭は、花川戸の政五郎宅に於て、同人より貰ひ
し品、その時に政五郎が端の切れてゐるを斷つたる時、
結構でござると持歸りし手拭は、即ち頸を締めたる手拭。
藤村　エ、。

藤村　サア、どうだ。言譯あるか。モウいゝ加減に白狀い
たせ。
　トこれにて電庵グッと詰り、ぢつとなつて、
電庵　それは一向に覺えござりませぬ。
　トこれにて目を手先○へ思入。手先○進み出て、物柔
かに、
手○　オイ／＼、そりやアいかねえ。これ程確かな證據が
上つて、お見留がついてゐるからは、隱さずと申上げて、
それから御慈悲を願つた方が、却つてお前の爲だらうぜ。
　ト電庵俯向いてゐる。
いつまで強情を張つてゐても、痛え思ひをするだけ無駄
だ。オイ電庵、いつまで考へてゐるのだ。
　ト電庵やう／＼顏を上げ、
電庵　あなた、情ないぢやアありませぬか。それでは知ら
ぬ事までいへと仰言るのでございますか。
手○　無え事をいへと仰言る譯はねえが、痛え思ひをして
も又しなくつても、何方しても言ふ位なら、痛い思ひを
するだけ無駄ぢやアねえか。それよりは申上げてしまつ
たら、それから御慈悲を願つてやらうぢやねえか。
　トいへども、電庵挨拶せぬゆゑ、

藤村　コリヤ電庵、何を申しても左樣に默してをるのは、上を恐れて申さぬのか。又嘲弄いたして申さぬのか。コリヤ、どうぢや。何とか申さぬか。コレ、これでも痛くはないか。エヽ、しぶとい奴めだ。日吉。

日吉　ヘイ。

ト不意に電庵の襟がみを取つて引倒し、起上らうとするを藤村瀟扇にて一つ打つ。これにて俯伏せになる。目吉差圖して、手先○△電庵を海老に縛り、左右に立掛る。

日吉　盲目の癖に太々しい奴だ。乾度言はねえナ。言はなけりやア體で聞いてやるのだ。

ト十手にて電庵の脊中を一つ打つ。

電庵　ヘイ、申上げます／＼。

日吉　乾度申上げるか。

電庵　ハイ、これでは口が利けませぬから、どうぞお許しなすつて下さいまし／＼。

ト海老の儘顫ふ。藤村差圖して繩を腰だけ殘し、他は解く、これにて手先△水を茶碗にて飲ませ、電庵ホッと思入あつて、兩手をつき、俯向いて息をついてゐる。

藤村　サ、電庵、申上げてしまへ。

トキッといふ。これにて電庵いう／＼と顔を上げながら兩眼を開き、

電庵　ヤイ天學、よくもしやあ／＼として責めやアがつたナ。

藤村　ヤ、潰れてゐると思つたら、僞盲目でゐやアがつたか。

電庵　知れた事だ。（トあたりへ向ひ。）オイ、此奴ア大張り盜人だぜ。（ト大きく言ふ）

皆々　エヽ。（ト悃りする。藤村これを打消し）

藤村　ヤア、驗を作る僞盲目め。まだ虚言を吐かしやアがるか。

電庵　イヤ、こればかりやア嘘ぢやアねえ。おれと一緒に下總で、此奴ア牢を破つた奴だ。

ト大きく言ふ。門口にゐる同心咲嶋千介、ソレと差圖して、仕出しの内より四人手先に掛り、ツカ／＼と踏込み、藤村へ組附く。電庵腰繩のまゝ心遣ひのこなし、藤村は町方手先と爭ひ、ごつちやの立廻り。この内電庵見切の窓を壞し、花道へ逃げてはひる。日吉あと追掛けてはひる。舞臺はみな／＼藤村へ折りかけ繩をかける。藤村無念の思入。この見得、合方鐵砲の音にてよろしく、

四幕目大切

北町奉行白洲の場
新潟驛行形亭の場

拍子幕

役名——町奉行、遠山左衛門尉。奥州屋善兵衛實ハ生田角太夫。藤村浦太實ハ佐島天學。祐天小僧小吉いわし屋房吉實ハ遠山淸之丞。松田屋八右衛門。樫木屋勘兵衛。木屋才兵衛。吉濱屋伊兵衛。目安方町方與力。同じく同心。若蔦の日吉。尾花屋丁稚辰太郎。久喜萬字の若紫。同やり手、おくら。角太夫妻、おもと。新潟の藝子、雪江。ふゆ。しほ。ゐつ。舞妓、のし。きた子。かん子。かしわ。行形亭の下女、おやま。おかつ。

本舞臺五間高足の二重、本庇本緣附、二重と本緣の間、幅の狹き疊緣側、正面目透き障子、上下本緣折廻し、前側同じく目透き障子の附屋體。平舞臺上下に莚を一枚づゝ敷き、すべて町奉行所白洲の體。本舞臺本緣の下に、同心○△羽織、袴、股立、一本差、黑足袋、草履にて控へゐる。この見得、時の太鼓にて幕明く。

ト上手緣側より、同心◎□羽織袴一本差にて出て來り、本緣の上下へ向ひ合ひにて住ひ、給仕侍着附袴にて硯箱を三つ持ち出て來り、正面へ一つ上手へ二つ置いてはひる。この時眞中の障子を明け、目安方一人與力一人繼裃一本差しにて書き物を持ち出て來り、上手へ横向きに住ひ、續いて二幕目の遠山左衛門繼裃一本差し白絹の手筒にて、書き物を入れし袋を持ち、後より給仕羽織袴にて刀を持ち附添ひ出て來り、眞中に住ひ、刀持うしろへ控へる。目安方書面を見やり、上下の同心に向ひ思入。本緣の同心へ思入あつて、

與力　元淨雲寺所化にて、當時無宿藤村浦太事、天學。

ト上手へはひり、直ぐ前幕の藤村浦太、好みの拵へ、小手を弛めし腰繩にて、同心繩を取り出て來り、眞中より下寄りの莚の上へ住ひ、遠山書面を見て、

遠山　其方、生國並びに姓名を申上げい。

藤村　ハッ、下總國埴生郡鏑木の產れにて、初め出家の砌は天學と申し、後に藤村浦太と僞名いたしてございます

る。

遠山　年齢は幾つぢや。

藤村　當年四十歳に相成ります。

遠山　先頃吟味所に於て調べたるが、今一應最初よりの手續きを申上げい。

藤村　ハッ、幼年の砌江戸に參り、本所猿島のみどり新田、淨雲寺の徒弟と相成り、役僧まで登庸いたし、その身自儘なる所より、或夜遊興に通はんとして、向島三圍堤へ至りし所、後より附け來る賊に出會ひ、迯れんとして土手より落ち、氣絶いたしをつたる所、八州の廻りに介抱受け、心附きたる傍に、女子の駒下駄腰帯ありしに、思ひきや賊の疑受け、折悪しく懐中に、寺院の金子廿五兩所持いたしをつたるゆゑ、右履物の婦人より、金を奪ひて川中へ、突入れしとの疑惑にて、言譯なさば拷問受け。

　ト無念の思入。奉行これに目をつける。

つひに申譯の立ち難く、それより再度の手酷き調べに、根もなき事を申掛けられ、在所埴生郡へ曳かれ、その上ならず佐倉に於て入牢いたしてござります。

遠山　佐倉の牢内に入牢中、破獄いたせし手續きはどうぢや。

藤村　その砌相牢いたしましたは、同國の生田角太夫と申す浪人。これと交りを深くいたし、畏れ多きことながら破牢を企てましてござります。

遠山　その破牢を企てしは、何か見込あつていたしたらうが、それは如何ぢや。

藤村　見込と申すは外ならず、無實の罪にてかくまでに、牢舎の苦痛をいたすとは。

　ト言ひかけ、氣をかへ、

これは思はずわが愚痴にかへり、恐入つてござります。

　ト辭儀をなし、

犯せる罪も顯れ、出獄の期を待兼ねまして、破牢いたせしその上に、同國飯岡なる助五郎と申す者をたより、子分に頼まんとまゐりし折、圍爐裏の端へ坐したるを、殊の外立腹なし、案に相違の無禮の挨拶。すご〳〵戻るその無念さ、いまだに恨みは晴れませぬ。

遠山　その破牢後三ケ年の間、下總結城にひそみ、學問修行いたしたとあるは、チト合點行かざる事ぢやが何のために學問せしぞ。

藤村　學問修行は餘の儀にあらず、最初出會ひたるは、相

牢いたせし生田角太夫にして、其奴に命を奪はれんとしたる時、既に一命失ひたる一件と、いま一條は、唯今申す飯岡の助五郎が、わが頼みを聞かざる、この二つの遺恨より、種々考へましたる所、ふと心附きましたるは、一應や再應にてこの恨みは返されず、右角太夫牢破りの時、並びに、彼と相牢中、種々聞込みたる惡事の數々、次に飯岡の助五郎、天下御法度の博奕をもつて渡世いたす。この二つを表向きに責めるには、天下の役人となるより外なしと、その道の學問修行いたしたるに、運よくも江戸表に御手先同心の讓り株あるを聞き出し、貪欲を求めて出勤なし、火付盜賊の調べいたせし折柄、圖らざりき、公儀の御手が廻り、かく捕縛になりましてござります。

遠山　角太夫並びに飯岡助五郎が遺恨を返さんその爲に、かゝる手續きに及びたると申すか。

藤村　ハッ。外に所存とてはござりませぬ。

遠山　しかと左樣か。

藤村　ハッ。

遠山　其方助五郎が子分にならんとせし時、彼の長脇差と稱ふる者へ頼む手續きを心得まゐつたか。

藤村　イヱ、別に手續きと申しては心得をりませぬが。

遠山　イヤ、それを心得ざれば、助五郎とて、よも子分にはいたすまじ。

藤村　そりや何故でござりますナ。

遠山　其方唯今手續きの內に、助五郎が宅へまゐりし砌、圍爐裏の端へ坐したるを、無禮の挨拶いたせし由、その爐の端に上下の差別あり、其方必らず上座へ住ひしならん、さすれば聞き濟む事も承知せず、却つて立腹いたせしは、こりや尤もの事なるぞ。

　ト思入あつて、氣をかへ、

それを根に持ち恨みを晴らさば、長脇差の法を知らぬと、却つて嘲り受けるは必定。迂濶に人は恨めぬものぢやぞ。

　トにつたり思入。

藤村　ム、、スリヤ彼等に左樣なる法のござりますものかナ。

遠山　其方はまだ彼等が群の交りを存せぬゆゑ、恨むは一應尤もぢやが、却つてそれらは恥辱となるぞよ。

藤村　初めて伺ひましたるが、私は承知いたさぬも尤も、御職權と申したから、下民の情に明るきお詞、恐れ入り


山の宿

ましてござります。助五郎につきましては、唯今恨みは晴れてござる。

ト投首なし、ぢつと思入。

遠山 いま一廉遺恨に思ふ浪士生田角太夫に、所持金奪はれんとせし砌、一命危かりしと申すが、夜中と申し、初めて逢ひしに、如何いたして名前を知りしぞ。

藤村 破牢後、成田の護摩木山にて四方山の物語に、向島の一件を口走り、初めて遺恨あるものと承知いたしてござります。

遠山 然らば破牢いたしてより、正道を以て學問いたすに、三ケ年の諸入用は、何をもつて賄ひたるぞ。

藤村 その砌、下總へ角太夫が娘來りしゆゑ、幼き時に別れし儘、顏を知らぬを幸ひに、人買に渡し金子に替へ、兩人これを半分けにし、手前は學費に用ひましてござります。

遠山 幼き時に別れし者を、角太夫が實子と知つたるその譯は。

藤村 當人が身の上話に、正しく實子と申すことを承知いたしましたるは、その場に私居り合せ、見聞きいたしてござります。

ト此の内遠山書面を一枚選び出し、下手の同心に渡す。

同心 同心下手へ向ひ、

吉原江戸町壹丁目、家持藤吉抱へ遊女、若紫、

ト呼込む。下手より序幕延若の若紫、花魁道中の拵へにて、草履を穿き、やり手おくら、品のよき紋附の着附、草履にて若紫の手を取り出て來り、下手にて草履を脱ぎ、下にゐようとするを、平舞臺の同心思入あつて、

同心 あれへ參れ。

トこれにて若紫はすまして、やり手は頭を下げ、上手へ行き、莚の上へ住ふ。若紫、藤村と顏見合せ、

藤村 ヤ、こなたは。

若紫 ほんにお前は。

同心 控へてをれ。

トこれにて兩人ぢつとなる。

遠山 コリヤ若紫、其方下總に於て人買に賣られたるは、實父角太夫並びにこの者であるか、どうぢや。

若紫 アイ、さうざんす。

ト思はず奉行を見上げ、ハツと思入。やり手もそつと見上げ、恟りして若紫と顏見合はせ、氣味合の思入。

くら　モシ花魁、可恐いことはござんせんから、正直に仰言いましよ。

若紫　アイ。（ト二重へ向ひ、）あなたえ、三年後、私はまだ素人でをつた時、向島で心中をいたしましたが、どうしても死にきれず、そこへ丁度通り合した下總の船に助けられ、家へも歸られませぬから、その方と一緒に下總の知邊をたよつてまゐつてゐる内、このお方の友達が、私を騙して船橋へ、勤めにやられし親判の、その受人はこのお人。（ト藤村をぢつと見やり、）よくもわちきを騙しなんしたね。いつそ口惜しうざます

ト藤村を見て無念の思入。

遠山　その親判と申すは、其方が實父角太夫なるが、それは存ぜなんだか。

若紫　イヽエ、一向に知りんせん。稚い時置去りにされた限り、顔を知らぬを幸ひに、親判になつて賣らんしたらう。

藤村　その判方にはならぬけれど、賣つたる金子を半使へば、實にこなたに顔向けならず。今囚人の身の上ゆゑ、何事も諦らめ下され、さるにしても、不審なるは三年後投身の砌、もしや腰帯と履物を殘せし覺えはござらぬかな。

若紫　おくらどん、投身とは何さますえ。

くら　左様さね、油皿へ入れるのではありますまいね。

藤村　イヤ、投身と申せしは、身を投げることにて、その身を投げる時に、もし腰帯と履物を殘しはせぬかと尋ねるのぢや。

若紫　アイ、その二品は、三圍下の揚場へ殘しんした。

トこれを聞き、藤村ます〳〵怒りの思入あつて、

藤村　ムヽ、スリヤ二品を殘されしか。よく〳〵宿世の因縁あり。遺恨ある角太夫の實子が殘せし二品より、八州の手にかゝり、入牢なしたるその上に、事成らずしてこの縄目、思へば無念口惜しい。

ト口惜しき思入あつて、氣をかへ、

これも則ち宗祖の御罸、ムヽ。

ト頭をうなだれる。遠山この様子を篤と見聞きするこなしよろしく、

若紫　一緒に死んだ小三郎さんへ、いまだに寝覺が悪いのに、現在親に勾引され、あの時いつそ死んだらば、この嘆きも聞くまいに、助りんしたが不運でありんす。

遠山　その小三郎といへるは、其後僞名なし、小吉と申し

て存命にて、今日駈込み訴訟いたしたり。これへ。

同心　元淺草山の宿町、家持小左衞門倅、當時無宿小吉事小三郎。

ト呼込む。ト下手より前幕の小吉出て來り、下にゐる。これを藤村、若紫見やり、恟りなして双方俯向く。

遠山　先刻駈込み訴訟いたしたるは其方か。

小吉　へイ、私は芝日蔭町、尾花屋と申す刀屋の倅、小三郎と申す者、三年後山の宿の隱居所を脱出しまして、引合人若紫と心中をいたしました所、命助かり、下總でこれなる天學と因を結び、厚い世話になりました。恩返しの爲、私が身替りに駈込みましたが、どうぞ御慈悲にこの者の罪は、私へお被せ下さりませ。

遠山　シテ其方はこれまでに、處刑を受けし事があるか。

小吉　イエ、別にお咎めは受けませぬが、料簡違ひな心中をする位、第一親へ不孝者、その上下總で飯岡の親分の所でごろつき歩き、その揚句が山の宿の實家へ來て、締りのある庭口から忍込まうと存じました。惡事のかずかず自訴いたせば、この場に於て私へ繩をお掛けなされて下さりませ。

トこの内藤村は、默つてゐるといふこなし。

遠山　その直訴せしは感心ぢやが、唯今申す手續では、上の御法を犯せしこと、一廉もあらざるぞ。

小吉　へエ、左樣でござりまするか。

トよく／＼考へ、思入あつて、

へイ、忘れました／＼。まだその外に、花川戸の政五郎と申す、この若紫の養父の所へ、拾つた莨入を種にして、強請に行つて金を借りましたのと、オ、さうだ、成田の山番を高札で打殺しましたは、へイ／＼私でござります。

トこの内藤村心遣ひのこなし。小吉はしきりにわが惡事を言立てる。

遠山　コリヤ、控へい。（トキツと言ひ、）スリヤ山番を殺せしとか。

ト態と驚きし體。

さすれば其方は重罪人ぢやぞ。

小吉　へイ／＼、左樣でござりますとも／＼。これなら天學が罪も一緒に着られませうナ。

ト奉行書面を調べゐる。パタ／＼になり、下手より前幕の丁稚辰太郎、前垂を帶の間へ挟み、跣足にて出て來り、

丁稚　お願ひ申します／＼。

同心　コリヤ控へをれ。
　ト これにて丁稚など〳〵下にゐる。
其方は何ぢや。

丁稚　ハイ、駈込み願ひをいたしました、主人小三郎樣の悪事は、皆私より起りしことにござりますれば、これを申上げに出ましてござりまする。

小吉　ヤイ〳〵、莫迦言へ〳〵。折角うまく兄の替りに、ナアニ、今すつかり申上げたに、つまらねえ事をいやアがるな。引込め〳〵。

丁稚　イエ〳〵、あなたの罪は私より。（ト白洲へ向ひ）私が若旦那のお供をいたして、向島へ參つた時に一人殘し、先へ戻りしばつかりに、かういふお人になりましたは、この角太郎より起りしこと、主人の科は私へ、お着せなされて下さりませ。

小吉　コレサ、手前がそんな事をいつては、おれが兄貴へ義理が立たねえ。

丁稚　イエ〳〵、どうでも私が御主へ忠義を立てませねば

小吉　マアいゝツてことよ。
　ト 兩人爭ふを、二重の同心キッとなり、

同心　コリヤ、靜かにせんか。

　ト これにて餘儀なく俯向く。

遠山　兩人の爭ひ、尤もなることぢやが、囚人天學の調べ濟まざる内は、何樣申すとも取上げには相成らぬぞ。コリヤ天學、これまでの手續きにては、角太夫助五郎の兩人に、恨みを返さん所存より、この一件に巧りしが、いよ〳〵それに相違ないか。

藤村　その外に、わが所存はござりませぬ。

遠山　しかと左樣か。

藤村　ハツ。

遠山　天學、汝左樣な望みではあるまいな。
　ト これにて天學不審の思入あつて、

藤村　何と仰せられまする。

遠山　當職の見込にては、右二廉にあらずして、いま一廉認めをるぞ。

藤村　エ。

遠山　其方が望みは、上役人に遺恨があらうが。

藤村　エ、。（ト吃驚りする。）

遠山　これまで手續を述べる内、生田角太夫飯崗助五郎がことを申す内は、左程恨みの樣子なく、二階下にて、八州の手に遣ひ入牢せし物語は、最も忿怒の相を現はしたり。

この一廉より考ふれば、上役人に恨あつて、その職に陞らんとまで苦心なし、恨を返さん汝が所存。

藤村 ム、。

遠山 サ、當白洲に於て調ぶるは、この一廉に止まると當職は認めたが、それとも他に異存があるか。

藤村 サアそれは。

遠山 全く上へ敵たふ心か。

藤村 サア、

兩人 サア〳〵〳〵。

遠山 天學、何と左様であらうがナ。(トキツと言ふ。)

藤村 ハツハア――。

ト辭儀なする。

的中いたせし御見込、今は包むに由なきこと、これにて申上げまする。初め三圍下にて、證據物の二品より、囚人となりましたるその恨み忘れ難く、道ならぬと存じながら、畏れ多くも上の御目をくゞり、加役同心とまで登用なし、前恨みある役人共を一刀に斬捨て、而して後に潔よく、刑罰受けんと決定せしが、一時恨ある角太夫が盲目となりしを調べ、此奴も拷問して與れんと、思ひの外なる僞盲目、遂にこれより露顯なし、天網逃れ難くして、かく縛されしは是非なき次第、名奉行と噂高き遠山公の御面前にて一通り申上ぐれば、これにて殘る恨みなし。御法通りの御仕置を仰付け下さりませ。

ト覺悟の思入。みな〳〵恂りする。

小吉 御役人に遺恨があつて企んだ事とは夢にも知らず、いくらやきもき思つても、上へ刃向ふ科人では、所詮身替りには立たれますまい。兄貴、おらアすつかり力が落ちた。

トがつかりする。

遠山 牢拔けの刑は、本罪相當より一等の重罪。又勾引に組せし者は重追放に行へば、これまでの所にて天學は輕からざる大罪人。

トキツと言ひ、詞を和らげ、

然し罪の疑はしきは、その輕きを論ずる、二品の證據物及び懷中の所持金より言開き立ち難く、囚人に落入りしが、是れその掛りの手落にして、その二品は、現在これなる引合人若紫事、前名延若、投身の砌り取捨て置きしが確かな證據。

トこれよりキツとなり、

全く逃れざる科と申すは、出家の身として遊里へ通ひし

は、これ則ち女犯なり、さすれば日本橋に於て三日晒しの上、本寺觸頭へ引渡すだけは逃れざる所。

ト又調を和らげ、

その他は追て調べの上、上の御慈悲をもつて取計らへば、寛大の御沙汰相待ちをれよ。

ト慇ろによろしく思入。

藤村　ハツ。その御一言にて、大學身に取り、假令一命召さるゝとも、心殘りはござりませぬ。

遠山　決して一命などに關らんや。上役人たる者が不行屆を責めんとして、牢拔けの後學問なし、其筋の役人とまでになる志。余も感心いたせしぞ。

藤村　恐れ入つたる御仰せ、有難く、涙に暮れまする。

遠山　追つて沙汰に及ぶ。退れ。

トいひ放し、外の書物を調べる。

小吉　それではこれで別れるのか。

藤村　こなたの義心は忘れはせぬ。縁があつたら再びこの世で。

小吉　どうか逢ひてえものだナ。

ト兩人顏見合せ、ぢつとなる。若紫丁稚はぢつと俯向く。やり手おくらは居眠りをしてゐる。

同心　立て。

トこれにて藤村浦太郎辭儀をなし、同心繩取にて上手へはひる。

小吉　申上げます。唯今自訴いたしました成田の山番を殺しました私、お繩をお懸けなされて下さりませ。

遠山　その事に就き、須之崎政五郎を呼出し、篤と調べ置きしが、その打殺せしと申す山番は、ほんの一時の氣絶にして、政五郎同道にて、當白洲へ出たる上、其方が騙りたると申す貨入は、その實政五郎が落せし品を態々屆け與れたる故、謝禮をせしと申す訴へ。御法にかける所置なければ、別に罰する所なし。

ト少し進み出て、

コリヤ辰太郎、其方主人の罪を身に引受け、自訴したるは神妙なり。然し彼に於て咎なし。よう安心せえよ。

丁稚　ヘエ、有難うござりまする。

小吉　かくもお調べが屆いてゐるとは、上へ嘘はつけねえなア。

トホッとこなし。この時若紫奉行をぢつと見上げ、

詞くだけて、

若紫　モシ金さん。大層出世をしなさいましたねえ。おく

らどん、見なんし。ソシ、おくらどん。
　トおくらの脊中を叩く。これにてやり手目を醒まし、
くら　ハイ、何ぞ御用でござりますかえ。
若紫　遠山さんの御出世は、大したものでありんすね。
くら　今迄御遠慮申してゐましたが、實にお見逢ひ申しました。
　トこれにて奉行世話にくだけ、
遠山　若紫、くら、また苦界を脱れんか。
兩人　ハイ。
遠山　コリヤ、予は三奉行の一人と相成つたぞ。モウよい加減に堅氣にならんか。
若紫　ハイ。
　ト面目なきこなしにて、兩人俯向く。
遠山　然しくらは老婆のこと、曲輪で生涯送らんか、唯だ遊興を勸むる場所ではないぞ、火附強盜駈落者などに心を留むるが上へ奉公、早き譬か當天保十二年、公儀評定所に於て、芝居は無益の遊興場、取拂はんと評議ありしを、某これを拒み、芝居は無學者の學問所にして、勸善懲惡を敎へるに最も必要の物なれば、これを取拂ふは不爲なりと、即ち替地へ轉座させんと治定せり、遊廓とても先づその如く、必らずなくてならざるもの、唯だ心得違ひをいたすまいぞよ。
くら　オヤ〳〵、さうお聞き申すと、遊女屋も無駄なものではござりませんね。
若紫　かうして見ると浮々と苦界の勤めも出來ませんが、お母さんはどうしてゐるか、心細うざますナ。
小吉　言ふめえと思つたが、實はこの間お母アは、現在連添ふ角太夫に締殺されてしまつたよ。
若紫　エ、そんならあのお母さんが、エヽ。
　ト悄り思入。
遠山　無本意なき事であらう。その不便を察しやり、其方に遣はす物がある。
　ト書附を下手の同心に渡す。
同心　本所押上村甚右衞門支配、もと。
　ト呼込む。下手より前幕のおもと、着流し跣足にて出て來り、下手へ平伏する。皆々顏見合せ、
三人　ヤ、こなたは。
遠山　若紫に預くれば、親と思うてこの後は、必らず孝心いたすがよいぞ。
もと　夢のやうなるこの出會、山の宿で角太夫殿に咽喉を

締められ氣絶せしを、お町方のお手先衆に介抱受けて今日まで、お上のお世話になつてゐたが、死んだと思ふ娘に逢ふとは、皆御奉行樣のお情ゆゑ。

皆々　エヽ有難うございまする。

ト有難涙に泣く。

遠山　小吉の調べ相濟む上は、町役人に引渡せば、その旨存ぜえ。

小吉　ハツ。

遠山　これにて一件落着せり。

目安　一統立ちませい。

ト奉行立上るをきつかけに、時の太鼓の頭を打込む。これにて二重の出役みな〳〵奥へはひる。平舞臺の皆皆裏向きになり、手を合せる。この引張りよろしく、時の太鼓にて、知らせなしに道具廻る。

本舞臺一面の平舞臺。正面の欄間へ行形亭と認めたる文人の大額。裾通り緣側。向ふ新潟の海岸より同家の庭内を見たる灯入りの中遠見。上手一間の附屋體。これに九尺の床の間、横手地袋違ひ棚、下手同じく附屋體。銀地へ文晁の鶴の繪の襖、總體長押附き腰張の茶壁、すべて新潟料理行形亭廣間の體。上手に材木屋八右衞門、勸兵衞、才兵衞の三人、お織着流しにて立掛り繪圖してゐる。下手に同家の下女おやま、おかつ兩人、若い者〇△、燭臺火鉢座蒲團など並びゐる。この道具總體灯入りにて、太鼓入り新潟甚句にて道具止る。

八右　今夜は大層混合だが、よくこの廣間を除けて置いて呉れたノ。

やま　昨日からねえお申込だすけ、今晩の大一座は向ひ〇座敷へお入れ申したすけの。

才兵　大層陽氣に騷いでゐるが、あれはどこの連中だの。

若〇　あれはねえ、新潟の踊の師匠で、市川お蝶さんが呼びなはれてねえ、お客はんは江戸の役者はんざます。

勸兵　隙見をしたら、新潟甚句を役者も一緒に踊つてゐたが、あれを江戸土産にする積りだらう。

かつ　これにねえ、新潟の藝者衆はみんな着物を京都の西陣へ注文しなはるだすけ、お座敷へ出てもねえ、何遍も着換へますけ。

若△　雪の肌といふ越後種で、土地の名物を踊りますけ、旦那樣ら、えらう慰みになりますけ。

八吉　おいらの連中も江戸だから、今見物に行つた奥州屋さんが歸つて來たら、所望して、新潟名物を見せて貰はう。
才兵　オ、灯が點いたので、向ふからもう皆んなが歸つて來た〳〵。
ト太鼓入り新潟甚句になり、花道より前幕の角太夫の奥州屋善兵衛、醤のかつら、半年經過、羽織着流し商人の拵へ、いわしや房吉、吉濱屋伊兵衛、同じ行商人の形り、後より藝子雪江おつれおかく小由、その外藝者舞妓大勢、派手なる出の形りにて附添ひ出て來り、直ぐ舞臺へ來る。皆々出迎ひ、
皆々　えらうごゆるりざいまんたねえ。
善兵　濱見物から日和山へ行つたので、到頭灯が點きました。
雪江　イ、エ、さうえねえ。だつぽん小路へ寄りなはると仰言つたのでねえ、やう〳〵一緒に戻りましたすけ。
小由　若旦那アねえ。餘程氣が多いだすけ、おれ等が煮えたゞねえ。
房吉　八百八後家の謂れは聞いたが、だつぽん小路へ行かうとは言ひませぬ。
伊兵　しかし越後の女と來ては、餘り行きかねない連中だ。
ト此の内よろしく皆々住ひ、この間へ藝者舞妓交り、この内酒肴を出し酒盛になり、
房吉　奥州屋さんは米の方だから、行形屋へばかりお急ぎだ、わしは商賣の干鰯の方で濱へ廻つたので遲くなりました。
伊兵　新潟の海岸も流石名代の港だけ、諸國からの入船は實に夥しいものでござります。
善兵　先づ北國ではこの位繁昌な港はないのに、名物に八百八後家があつて、少し下つて菰冠り、音曲では甚句におけさ。實にわき土地にはありませぬ。
つれ　今ねえ江戸の流行ものはねえ、町奉行はんの遠山はんと新潟の踊だすと、お客はんの評判を聞きましたすけ。
伊兵　妙な事が流行るものだが、何んで町奉行が流行るのだらう。
かく　さうして私も、丁度半年後、江戸のお奉行はん所で、天學たらいふ科人がお裁きのあつた時にねえ、皆んな人が助かつたと言ひ、えらい評判だすけ。
雪江　その頃にねえ、矢張りあのねえ、江戸で繩拔の泥棒があつてねえ、あのもう半年も經つてゐるだすけに、未

だ知れんとはねえ、不思議の事だというてなはるすけ。

善兵　半年も經つてゐるのに、いまだにそれが知れぬとは大方唐へでも逃げたのだらう。

房吉　逃げたといへば、この一座のお若が見えぬが、逃げたのぢやアないか。

かく　お若さんはねえ、屹度先へ去にましたすけ、一寸呼ばつて見ませう。

皆々　お若はん／＼。

トこの時下手にて、

お若　アイ／＼。

ト下手より藝者お若、出の形りにて出て來り、

これはお前さんの方がお早うござりました。おれは庭の方から先へ廻らうと思うて、橋の側で滑つて轉び、矢張り後になりましたわいナ。

伊兵　先駈けをしようとして、却つてこゝへ遲れて來るとは、此奴ア一番大笑ひだ。

房吉　支度がよくば早速に、江戸の土産に始めて貰ひたいものだ。

伊兵　此方は聞し召ながら、それを見物したいから、女の子に一切任せます。

雪江　旦那衆はんの御所望でてがんね、踊りの支度をしなさんせ。

皆々　アイ／＼。

かく　ハイ、畏りました。モシお駒はん。

お駒　ハイヨ――。

かく　鳴物持て來てねえ。踊りの支度をして下さんせ。

お駒　ハイヨ――。

かく　姉さまア。サア踊るのでござんす。

トこれより誂へ新潟盆踊の鳴物になり、女形みな／＼裏向にて身支度をする。善兵衛始め客は、下女酌なして酒盛をする。若い者は燭臺をよき所へ直る。この内藝子舞子眞中へ居並ぶ。これを下座の文句になり、女形みな／＼總踊りになる。これを客見物してゐて堪らなくなり、段々立上り、一緒になつて不器用に踊ることよろしく下女は蠟燭の芯を切る。若衆の膳部を片附ける。この踊りの内へ前幕の手先目吉も不意に混つて踊つてゐて、女形正面の緣側より一人々々陰へはひる、トゝ仲間の商人目吉などにて踊りながら取卷き振あつて、トゝ奥州屋善兵衛不審の思入あつて、

善兵　ヤ、いつの間にやら藝子達は。

房吉　オヽ、遠ざけたるは其方を、御下知に依つて、

皆々　取巻くのだ。

善兵　ムヽ、何故あつて善兵衛をッ

房吉　いゝ加減に白ばッくれろ。半年後に牛込で繩抜けをした角太夫。皆んなで跡を追つて來たのだ。

房吉　われは町奉行、遠山の身内なり、おのれの擧動を探らんため商人となつて窺ひしが、この者共は掛りの組子。

伴兵　御町加賀と合體なし、かく取巻く上からは、

皆々　神妙に御用になれ。

　トこれにて善兵衛覺悟の體にて、

善兵　チエヽ、せめて佐渡まで落ちようと思つた所を、御下知になつたるモウこの上は。

　ト前へすり抜けようとしてうしろへ潜り抜け、正面の緣側より奧へ逃げてはひる。あと皆々追掛けはひる。知らせなしにこの道具廻る。

　本舞臺一面の平舞臺。向ふ新潟の港を見たる海岸裾通り、碇泊の親船數艘の中遠見、十二日の灯入りの月、平舞臺、諸所に櫻松の庭木、灯入りの石燈籠、四つ目垣、上下建仁寺垣の見切、すべて行形亭庭先の體、前の賑かな唄、竹笛入りにて道具止まる。

　ト所々にて御用々々と聲する。よき程に善兵衛短刀を持ち出て來る。後より房吉初め三人、割羽織大小、手先十手を持ち追掛け出て來り、一寸立廻つてキッと見得、これより替つた鳴物になり、善兵衛手先を相手に捕物の立廻りよろしくあつて、トヾ房吉組附き、早繩を懸け、左右より引立てる。この見得頭取出て、

頭取　先づ今日はこれぎり。

　ト目出たく　打出し

遠山櫻天保日記（終り）

新曲 墨塗女



墨塗女（所作事、一幕）

能舞臺の場

役名――福德萬之丞。太郎冠者。花野。つくし。

本舞臺總て能舞臺の模樣よろしく。正面鏡板の前に出語り臺を置き、爰に常磐津連中居並び、木なしにて幕明く。

ト揚幕の內より福德萬之丞、着附、紅段熨斗目の長上下、一本ざしにて、跡より太郎冠者、上下半袴、腰帶にて附添出て來り。

萬之　是は遠國に一家を構へる、福德萬之丞と申す者でござる。永々在京いたす所に訴訟悉く叶ひ、此の樣な有難い事はござらぬ。先づ太郎冠者を呼出して、悅ばせうと存ずる。太郎冠者あるかヤアイ。

太郎　ハアー。

萬之　居たか。

太郎　御前に居ります。

萬之　汝を呼出す事、別の事でもない、永々在京いたす所に、訴訟悉く叶ひ、安堵の御教書をいたゞき、新地をも過分に拜領いたしたは、何と有難い事ではないか。

太郎　斯樣のお仕合せを、待受けまする所に、近來目出たう存じまする。

萬之　それに付き、又汝が悅ぶ事があるわやい。

太郎　それはいか樣の事でござるぞ。

萬之　國許迄の御暇を下された。

太郎　是れは重ね〴〵、思召すまゝのお仕合せでござる。

萬之　その通りぢや、扨それに付き、明日は國許へ下らうと思ふが、彼の人の方へ暇乞ひに往たものであらうか、但し又、沙汰なしに下らうか。

太郎　これは強々あなた樣に、戀焦れてござるのに、其の上お恨み深い御方なれば、是れは御出でなされた方がようござらう。

萬之　某もさう思ふ程に、それなればイザ行かう。

太郎　ようござりませう。

萬之　支度せい。

太郎　ハア、。

ト是れより、前弾なしに常磐津の淨瑠璃になる。

〽三吉野の花も盛りし暮の春、薫りも高き庭もせに、盡きに詠めの一と構へ、のぞく小枝のしほらしさ。

ト此の内兩人、上下を歩きながら。

萬之　全體彼を此方へ、呼んでもよけれど、又差合があると、ようないに依つて、あの方へ行き、ゆるりと暇乞ひして戻らう。

太郎　それがよろしうござります。

萬之　さりながら、恨みぶかい女子ぢやによつて、明日立つて行くと聞いたならば、無體を潰されう。

太郎　誠に、ことないお嘆きでござらう。

萬之　イヤ參る程に是れぢや、身共ずつと通らう程に、汝は勝手へ參つて、來た事をいうてくりやれ。

太郎　心得ました。

ト是にて萬之丞、上手かつら桶へかける、太郎は橋がかりへ向ひ。

物もう、案内申す。

〽音なふ聲にあなたより、みめうるはしき海棠の、花に雨もつ風情にて、しとやかに立出て、

ト此の内橋がゝりより、花野元祿風、文金島田、派手なる拵らへにて出て來り、合方に成り。

花野　聞慣れた聲で、表に物申とあるが、案内とは誰さまでござる。

太郎　イヤ、わたくしでござる。

花野　ヤ、太郎冠者か、よそ／＼しい、我御寮ならば案内に及ばうか、なぜに斯うお通りやらぬぞ。

太郎　左樣に存じてござれども、御客ばしござらうかと存じて、案内を乞ひました。扨頼うだ御人の、御出でなされてござる。

花野　何ぢや、頼うだお人の御出でなされた。

〽思ひ掛けなき言の葉に。

トはつと思つて、氣をかへ。

是れはいかな事、あの頼うだお人は、妾の方を見限らせたものを、何んとしてお出でなさるゝものぞ、是れは其方の、妾を悦ばするのであらう。

太郎　イヤ左にあらず、最早あれへお通りで、待つてでござる。

花野　アノ、ほんまにお出で遊ばせしとか。

太郎　何んの僞りを申上げようぞ。

花野　アノ、ほんまに。(トいそ／＼上手へ行かうとして、)たらさるゝとは思へども、左樣おしやるによつて、それなればあれへいて見よう。(ト眞中へ來て、萬之丞を見やり、)是れは誠にお出でなされた、やれ／＼おなつかしや。

(ほんに嬉しいお目もじに、夢かとばかり進みより。

トツカ／＼と、萬之丞の傍へ行かうとして心附き、少しすねたるこなしにて。

イヤ／＼、どちの風が吹いてお出でなされてござるぞ、定めて妾が方へではござるまい、門違ひでござりませう。

萬之　そのお恨みは御尤もぢやが、殊の外忙しうござつて久しく音信もせなんだによつて、太郎冠者さへ忙しうて、便りをも出しませなんだ。

花野　其の樣な事おつしやれど、たとひあなたこそ御用多にござれども、太郎冠者位ゐはお便りのありさうなもの妾を忘れさせられたものでござらう。

萬之　何にしに忘るゝものでござるぞ、眞實暇がなうて無沙汰いたいてござる。扨、今日參るも別なる事でもござらぬ、先づこなたも悅んで下されい、豫ての訴訟事も思ひの儘に叶ひ、安堵の御教書を戴き、新地を過分に拜領いたいてござる。

花野　それはまアお目出度い事、御訴訟事を案じ煩らうて居りましたが、思召しの儘に叶うて御加增までとらせられ、此の樣な嬉しい事はござりませぬ。それならば豫々御話しありし通り、此の地へ新規の家をしつらひ、妾と一ッに暮す事になりませうな。

萬之　え、(トぎつくり思入あつて、)さればナ。

花野　此の事はお出での度毎仰せられた、起請代りの嬉しいお詞、寢ても忘れはいたしませぬ。

萬之　サ、、それはさうぢやけれども、實はそもじの肝を潰す事がござる。

花野　それは心がゝりにござるが、いかやうな事でござるぞ、早う言うて聞かせられい。

萬之　サ、こたび國許への御暇迄を下されて、明日は下りまするによつて、その暇乞ひに參つてござる。

花野　ヤ、何んと仰せらるゝ、アノ明日は御國許へエ、。

ト悧りして、

いとし殿御と思ひたる。

(その馴れ染は去年の夏、夕立雲が媒ちに、軒端に入りし御方は、光る源氏の光氏か、その稻妻と夕立に、御入

りを松の緑のはし、ガラ〳〵ぴつしやり落雷に、氣も晴晴と世間晴れ、樂んでゐた甲斐もなや。

ト此の内水さしと、茶碗を持ち出し、茶を出すこなしにて、水さしの水を茶碗へつぎ、涙の代りに眼へつけて泣く思入。萬之丞は可愛想だといふこなしにて共に泣く。太郎冠者は花野の樣子を見て、主人に告げるを、主人は泣いてゐて聞入れぬ思入あつて納まる。

扨も〳〵妾はいつ迄も、此方に御いでなさろ事と存じて、樂しんで居つたに、斯樣に今なとお別れ申すと存じたならば、始めよりお目にかゝりますまいものを、ハア、、ハ、、。

〽又さめざめと泣きければ。

ト水をつけては泣く。萬之丞も愁ひの思入あつて、

萬之　其の嘆きは尤もぢや〳〵、さりながら又近い内には上る程に、其の時はゆるりと逢はう程に、まア〳〵泣きやるな、泣きやるな。

ト脊をさすり、よろしくなだめ。

オヽさうぢや、そもじの心慰めの爲、別れに舞うて進せよう。

ト扇を持つて前へ出て。

へやアまをやアまを澤山こウえて、都大路へ着きにけり、花を殘せし憂き思ひ、目にはちら〳〵ア、足許もしどろ、九十九夜さの戀深草に、羽根があらばふうわりふうわり、飛んで行きたや主のそば。

ト此の内よき程に太郎冠者を呼び、共に舞へといふを、太郎冠者は馬鹿々々しいと言ふこなしあつて、首を振るを無理に引出し、兩人よろしく振り。此の内花野はしきりと水をつけては泣いてゐる。

太郎　これはいかな事、先づこなたへめせませ。

ト萬之丞を橋がゝりへ連れて行き。

あの者は眞に泣くと、思召すか。

萬之　こゝなものはむざとした事をいふ、あれ程眞實嘆かるるものを、なぜに其の樣な事をいふぞ。

太郎　イヤ、あれは傍へ水を置いて、それを塗つて泣く眞似を致しまする。

萬之　又むざとした事をいふ、其の樣な事は言はぬものぢや。

花野　なか〳〵、どれへござるぞ。

ト是れにて、萬之丞あわてゝ花野の傍へ來る。

ソレ見させられい、たま〳〵お出でなされても、早妾を

うるさう思召して、表へ出させらるゝ、其のお心ぢやによつて、お國へお歸りにならば、妾の事なぞは、ふッつり忘れられうと、思へば悲しうて成りませぬ、ハア、、ハ、。（ト泣く。）

萬之　何しに今迄馴染申したものを、忘るゝものでござるぞ、國許へ行かば、早う文の便りを致しませう。

ト此の内太郎は齒がゆいといふ思入あつて、又萬之丞を下手へ連れて行き。

太郎　あれ程に水を附けて泣くを、お氣がつきませぬか。

萬之　扨もそちはむざとした事をいふ、あの樣に眞實に言うて泣くものを、又してもむざとした事を言ふか、すつこんで居ろ。

太郎　それぢやと申して、見る〳〵噓でござる。

萬之　えゝ、あれ程わしを思うて、泣いて居るではないか。

トきつと言ふ。

花野　もうし〳〵、頼うだお方、どちらへお出でなされたぞ、申し〳〵頼うだ人、頼うだ人。

ト是れにて萬之丞あわてゝ、こちらへ來り。

萬之　イヤ、どれへも參らぬ、又表で人が逢はうと申すによつて、一寸あれへ參つた。

花野　ソレ〳〵、そのお詞がわたしには。

〽恨みの海の底深き、汐路はるかの御國許。

さりとてはお心強い。

〽跡に殘りし憂き思ひ、察したまへや一人住。

涙の止度が。

〽ないじやくり。

ト此の内太郎は癪に障るこなしあつて、硯箱を持ち出して、硯より花野の傍にある茶碗へ墨を入れる。花野は知らずして茶碗の水を目へ附ける、是れにて眞黑に成る。

太郎　ハア、、、、、。

ト思はず笑うて心附き、口を押へ橋がゝりへ行き、脇を向いて素知らぬこなし。

萬之　イヤ、それ程に思ふならば、國許へ戻らば、早々太郎冠者を迎ひに上せようが、何んとでござらう。

花野　何んと仰せらるゝ、太郎冠者を迎ひに下さるとな。

萬之　なか〳〵。（ト思はず花野の顏に心づき顏を潰し、ヤア、是れは。

花野　え、是れはとは。

萬之　ム、、、、、アノこれは、えゝと……オ、それ、是

れを必ず迎ひによこすと申すのぢや。
（言ふ顔つくづく打ち詠め。
ト花野恨めしさうに、萬之丞をすまして見詰め。
花野　どうも變な御様子といひ、男心と秋の空、變り易きは世のならひ、お國許へお歸りあらば、アノ美しい奥様にお目に掛らせた事ならば、妾が事などは、夢にも見さらるゝ事ではあるまいと、身も世もあられぬやうに、悲しうてなりませぬ。
（猶さめ／″＼と泣きければ、主人は怒りのおももちにて。
ト此の内花野茶碗の墨を附けて泣伏す、萬之丞むつとして。
萬之　太郎冠者、來い／＼。
太郎　何事でござるな。
萬之　あれはどうしたのぢや。
太郎　ソレ見させませ、私の申すを聞かせられぬによつて、ソレナ。（ト墨を入れたといふこなしあつて。）斯ういたいて置きました。
萬之　ム、扨々憎いやつぢや。
トきつと成るを冠せて。

太郎　ア、モシ／＼、何事も仰せられな。（トよろしくなため、そしらぬ顔にて。）其の様な餘所事は取措いて、斯様にあなた様に別るゝを、戀にあこがれ悲しむを、此のまゝ見捨て行くは、最もどかしゝ、いつそ御見送り致す心で、打揃うて表を一ト廻り廻つては、如何でござるな。
ト萬之丞へ氣味合にて言ふ。花野すまして。
花野　名殘りは盡きぬ憂き別れ、それなれば御一所に。
萬之　ム、さうぢや。恥つらかゝして。
太郎　ア、申し。
（止めて止木の香包み、薫り床しき身だしなみ。
ト此の内萬之丞腹を立てるを、太郎止める。花野鬢を直し、衣紋をつくろひ、懐中より鏡を出して、顔を見ようとして、此の時初めて心附き、びつくりして茶碗の中を見て、扨はと思入あつて、
花野　ヤ、いつの間にやら此の中へ。
兩人　えゝ。
花野　えゝ、こりや太郎冠者が墨を入れやつたな。
太郎　何んの私が、左様な事を。
花野　イヤ我御寮の手に、墨が附いてゐるぞや。

太郎　えゝ。

花野　えゝ腹立ちや、腹立ちや。

〽こりや腹立ちやと立ちかゝるを、花に嵐の一と吹は、散つてめぐろや墨ぬりの、墨に縁の香も高き、引く御ひいきの曳綱は、けつして外へはやるまいぞ、やるまいぞ、目出たかりける。

ト此の内花野立腹のこなしにて、太郎冠者に墨を塗らうとする、是れを萬之丞止める、爰へつくし盃臺を持ち出て来る。此のとたん花野間違へて、つくしに墨をぬる、それより太郎冠者を追ひ行く所へ、萬之丞出ッくはし墨をぬる振りあつて、トゞ、皆々追廻すをかしみの振にて、

よろしく幕

墨塗女（終り）

明治廿七年九月



時に明治元年九月より當る廿七年迄一日に見渡す若松城老女岩瀬が決心に續く阿國や雪江が血判出陣祝す良助が再び出逢ふ戰場に女隊三代次が胸板へドンと一發當つたる音に驚く馬丁金太ぞつと身の毛も立退城下下女のお竹を品玉に遣ふ手玉の藥種店苦い藥も甘口な

大日本大勝利之吉報基演劇開戰之榮

衒りの種の熊の膽にうつかり乘つた四郎兵衛が證人に立六兵衛は以前知つた中茲に逃れぬ場合から打出日清戰爭の夢は破れて道具惡妻のお銀に別れ行様子を探る近藤勇介朝鮮行きの出立に磨くこゝろを研出しの新調

御誂　御定紋　菊桐

會津產明治組重

御註文の
通し狂言


明治廿七年九月

會津産明治組重

（全七幕の内日清戰爭の件二幕）

旅順口海軍戰の場
入船町貸長家の場

序　幕

役名　――士官、浪崎進。支那人、道昌惠、世話役、勝五郞。差配人、大ツ腹の長兵衞。もぐり車夫、五郞助。郵便配達、喜太郞。日本水兵四人。道昌惠女房、おぎん實ハ金太郞妹。勝五郞妹、おせん。長家の嬶、アおすゞ。同おかね。道昌惠倅双種。

本舞臺眞中より上寄りに、支那の山を見たる遠見、是より舞臺端まで、一面海原の波布を敷詰め、眞中の沖中に說へ、切出しの清艦、帆柱の頂上に支那雨龍の國旗を掲げ、煙出しより石炭の黑煙上りゐる。總て支那旅順口沖の體。大波の音にて幕明く。

ト浪の音打上げ、床の淨瑠璃に成る。

ヘ吹荒れし其の海上は日の本より、西に當りし異國の、要害の地の沖合に、煙りを上げし清艦は、戰場近く進み寄り、折柄敵の動靜を伺ふこなたの波間より、

ト此の文句よき時に、上下の合方、浪の音に成り、下手より白ペンキ塗りのバッテーラへ日本水夫四人、櫂を漕ぎ、梶取一人、艫にて梶を取り、船の眞中に士官浪崎進、日本海軍の服、短きサーベルを帶し、赤、白黑の小旗を三本かためて持ち、片手に望遠鏡を持ち、立身にて出て來る。バッテーラは舞臺眞中まで來り、靜かに成る。浪崎は向ふの清艦を、しきりと望遠鏡にて眺める事あつて。

浪崎　アレ／＼、見よや向ふの支那艦隊は、彼國有名の鎭遠號なり、今鴨綠江の岸へ陸兵運送と認定いたす、何の數十隻來るとも恐れんや。ソレ、我が本艦漕進め――。

ト誰合をかける、是れをきつかけに、四人きつと成りて櫂を漕ぐ、是れにて船は上手へ這入る。是と同時に一發放す。

ヘ覗ひ違はぬ砲聲に、船の眞中打ち貫き、忽ちのぼる黑煙り、虛空はるかに雨龍の、國の御旗も飛び去りて。

ト文句の止り一發打つ。是れにて清艦の眞中仕掛にて

崩れ、花火のパチ〳〵といふ音して、罐中より幾火なし、黑烟りの内折々火の手上り、トゞだん〳〵沈沒する、此の内小筒の音頻りとして、海中へ沈み帆柱ばかり殘る、此の内風の音烈しく、帆柱の頂上にある支那の國旗切れて合引にて飛び、ぐる〳〵廻りながら日覆へ引いて取る、此の内帆柱だん〳〵海中へ這入る。

〽目覺しかりける。

ト三重カケリにて、此の道具居所にて替る。

本舞臺一面の平舞臺正面鼠の破壁、是れへ竪長、三尺の窓、是れに青いペンキ塗りのすだれをかけ、上手一間の附屋體、此の張壁雨染みのある唐紙形、下手同じく一間の附屋體、前側西洋形青ペンキ塗りの窓、蝶番ひの放れし二枚開き、此の横手破れし芭蕉布の長のれん、いつもの所同じくペンキ塗腰板のあるガラスの引戸、此の外支那人の明き家の前側、是れへ紅唐紙へ「老少平安」と記し、此の札と並びて、かし家の札を張り、總て入舟町貸長家の體。眞中の壁に麁末なる觀音の軸、此の前はげたる春慶塗りのテーブル、其の上に線香立あり、平舞臺眞中にもテーブル一つ置く。上手の二重に支那人の悴、双種、やつし形りにて赤ゲットを着て寢て居る。此の模樣床の三重にて道具納まる。

〽破れ果し棟は通りし南京長家、コータもはげし軒先に、雨の古家古ゲット、破る晝寢に驚きて、双種は立つて目をしばたゝき。

ト此の内子役寢返りをして、二重よりころがり落ち、悄りして靜かに起上り、あたりをきよろ〳〵見廻して

双種　ハア――。（ト泣く）

〽聲を張り上げ泣きければ、勝手に居たる母親は、野菜たづさへ出て來り、

ト此の内奥より、おぎん丸髷世話女房、南京のラシャメンにて、爼板と白瓜茄子を入れし籠を抱へ出て來たり、テーブルの上へ置き、文句の止り合方になり。

ぎん　何をそのやうに泣くのだえ。

双種　おいら夢を見たよ。

ぎん　夢を見たとて其の樣に、泣く事があるものかいナ。

双種　それでも、こはいもの。

ぎん　何がその樣に、こはいのぢや。

双種　今南京の國の蒸汽船と、日本の蒸汽船と大砲を打ち

合ツて、南京の船が打たれると直ぐ、海へ沈んでしまつたが、これに乘つてゐた人が、やつぱり南京だから、おいらこはく成つて來た。

ヘそれと言はねど胸に釘、思ひあまれど樂知らぬ體。

ト是れを聞きおぎん、思入あつて氣を替へ。

ぎん　なんのその樣な夢を見たとて、こはい事があるものかね。

双種　それでもおとつさんに、似た人が乘つてゐて、皆んな死んでしまつたから、おいらア悲しくなつたのよ。

ぎん　其の樣な事氣にせずと、表へ行つて遊んで來や。

双種　おいらア表へ行くのはいやだ、みんながチヤン／＼坊主、チヤン／＼坊主とはやすから、モウどつこへも出ねえ積りよ。

ぎん　ほんにさうであつたか。（ト思入あつて）現在產んだ子ながらも、表向いて出られぬとは、情ない事ぢやなア。

ヘ我子ながらも明かし兼ね、肌寒夜半の心地して、憂き事流す井戸端の、戻りに入り來る人々が。

ト此の內子役をとらへ、二重にある玩具を持つて遊べといふ思入。文句の止り、さんげ／＼の合方、天窓へのせる飴屋の太鼓に成り、下手より長家のかゝアお鈴、お米、やつし形り洗濯盥を抱へ、あとより勝五郎 妹お仙、前垂着流しにて、岡持をさげ出て來り。

三人　おぎんさん、お內かえ。

ぎん　ハイをりますわいナア。

お鈴　今洗濯に來ましたから、一寸寄つて行きますよ。

ぎん　まア、こつちへお掛けなさい。

トこはれかゝりし椅子を出す。

お米　眞平ごめんなさいよ、おせんさんもおはひり。

ト是れにて三人椅子へかけ。

お鈴　その後はどんな樣子だか、只世間では朝鮮に戰が始まつて、支那へ押して行くのだと、戰は朝鮮にあるといふし、押して行くのは支那だといふし、どつちだかさつぱり譯がわからないのさ。

お米　それから大家さまに聞いて見ると、なんだか大層知つた樣な樣子で、ウムナアニ、今度の戰爭は上野の山王山へ、彰義隊が詰めて居るが、あれは官軍だ一とあふりあふれば、それで終ひになると、かういふのさ。

お鈴　それから二人もちつとも分らないから、いゝえ、その上野の話ぢやアありません、此の頃ある、日清の戰爭

の事でございますと言つたら、あゝ熊本の籠城が連絡すれば、日本は安心だといふのさ。

　トしき・と圖に乘つて話すを、お仙聞いてゐて、心づかひの思入あつて。

お仙　あゝもし〳〵、それは違つて居るわいナ、それは御維新から西南の話しで、私が聞いたのは、今度の支那と日本の戰の話、さう一所になると、わからなくなつてしまひますよ。

お鈴　いゝやね、どうせ混雜の中だから、支那でも日本でも四ツ谷でも、麹町でも大した違はないではないか。

お仙　いゝえそれは大違ひでござんす、かうして三人でお待ち申すのも、人形町の南京さんが、だん〳〵と出立するのに、此のお隣りも行つてしまひ、嘸お前さんがお案じだらうと、そのお見舞に來たわいナア。

お鈴　オヽほんにさうでござんす、やう〳〵本道へ出た樣だ、それでね、此の先どうなるか、新聞は讀めないから讀みやアしないし、別段大家さまから御布告も來ないから只噂で案じてばかり居るのさ。

お乘　昔ならお觸が來るからいゝが、當時は新聞を讀めのかんこうを見ろのと、天保時代では仕方がないね。

お仙　モシかんこうではござんせぬ、官報というたではござんせぬか。

お乘　その官報にしろ勸考にしろ、何んだかチツトもわからないわね。

お鈴　なんにしろ心配な事だから、勸考しろといふのだらうが、嘸官報してお出でだらうね。

ぎん　有難うございますが、內でも每日心配して、此の邊に居る國の衆や、永田町の公使館へいつて、聞合しても居りますが、樣子のわからぬそれのみか、なんだか肩身が狹くなり、外へも出にくうでござります。

双種　おつかさん、腹がへつて來たよ。

ぎん　あゝこれ、今お米が來ると、直ぐ炊いてやるわいナ、

双種　それでも腹がへつて、いけねえものを。

お鈴　オヽしやべつてばかり居て忘れて居た、今お前にお芋を上げようと思つて、三角が安いから、お仙さんに買つて來て貰つたのだよ。サアそれを出しておくれ。

お仙　アイ〳〵。

　ヘ親はなきよりまめ〳〵しく、手提げの內より取り出し、折敷に取りて差出せば、見る女房はあられぬ思ひ。

　ト此の內お仙岡持より、ふかし芋を出して、有合ふ盆

に任せて双種にやる、双種児れを悦んで喰ふ、女房ち

つと思入あつて。

ぎん　支那の國では罪もなき、日本人を見る度毎、むごい

事をするといふに、かうして此の子に喰べものまで。

へあと言ひさして胸迫り、せき來る涙打拂ひ、

實に御懇切な事だやナア。

へ嬉し涙にくれければ、女房達は目をしばたゝき。

お鈴　なアにおぎんさんお案じでないよ、新聞屋なんぞが

言ふ事は、何にも當になりやアしませんよ。

お粂　決して戰などはありやアしないのを、新聞を賣らう

と思つて、あると言つて言ひふらすのだよ。

お鈴　ひとをつけ、戰のいの字もありやアしないのだよ。

お粂　ほんとに大仰ッたら、騷ぎ過ぎらアね。

お仙　あゝもし〳〵、そんな事を大きな聲で言ひなさんす

と、世間の人に笑はれるわいナ。

お粂　えゝおつウ新聞屋の肩をもつてよ、お前の身内に配

達でもあるのだらう。

へ口さがなくもやりこめれば、呆れて答あらざる所へ、

勝五郎は尋ね來て。

ト此の内兩人ムキになつて言ふを、おぎん心づかひの

思入。お仙は一人で笑ふ。文句よきほどに、下手よ

り、大藏組の世話役勝五郎、羽織、着附、平ぐけ、祝ばし

より、股引、靴にて出て來たり、門口より覗き込み

勝五　オイ仙公爰に居たのか、おれは今銀座の店へ行くか

ら、家へ歸つて居てくんねえ。

お鈴　オヤ勝さん、まアおはひんなさいな、さぞおいそが

しうございませうねえ。

勝五　え、お蔭で仕合せと、忙がしい方でございます。

ぎん　是れは勝五郎さん、まアこちらへお這入りなさいナ。

勝五　えゝ這入る事は這入るが、主人は内かね。

ぎん　今朝程から諸方を廻つて、只今留守でございます。

勝五　そんなら眞平御免なさいまし。

へ内へ這入るを人々は、不審顔して。

ト是れにて勝五郎、靴のまゝ這入り椅子へかける。お

鈴不審の思入あつて。

お鈴　モシ勝さん爰の主人がゐないなら、這入るとお言ひ

なのは、何んだかこりやア變だねえ。

お粂　お前亭主の居ない所へ入るとは、そりやア罪になる

よ。

勝五　えゝ餘計な事を言ひなさんな、亭主が居ねえから爰

へ這入るといふのは、チヤン／＼坊主だから、積に障るのだ。（トおせん、おぎんに氣をかれ、勝五郎の袖を引くな）なアに、ちつとも驚く事はねえ。おぎんさんおめえの兄貴はたをしものだぜ。

ト替つた合方になり。

おぎやアと產れると水道の水で、產湯を使つた江戸ッ子のチヤキ／＼が、えつちらおつちら會津まで行つて、屋敷奉公したのはいゝが、御維新の時戰爭で、卑怯未練に國を逃げ出し、たつた一人の妹を南京のラシヤメンにするとは、なんたる事かそれに引換へ話を聞きやア、會津様のお國の人は、女子供に至るまで、みんな戰に出たといふ事、エ、コウほんとうに江戸ッ子の面よごしだぜ、おれがその頃餓鬼でなけりやア、打つちやつて置かねえのだが。人をツケあきれ返つて物が言へねえ、實におめえは、（トむつとなり）氣の毒だなア。

〽誰に遠慮も打明けて、言ふは勢の頼もしく、聞くおぎんはその尾につき。

ト勝五郎よろしく思入。

ぎん　それを言はれると穴へでも、這入りたくなりますがそれも私の不仕合せ、御維新の時兄さんに、會津の御國へ置去られ、路頭に迷ひはる／＼と、江戸へ出て來て尋ねる內、やう／＼此の頃兄さんの、居所を見附けて逢ひましたら、ちつとは年のせゐかして、目が覺めたやうでござんすわいナ。

勝五　此の後逢つたらおいらが言つたと、決して人の事ちやアねえから、よくさう言つて下せえ。

ぎん　御懇意にしたお前の御深切、言はいでなんとしませうぞいナア。

勝五　是れから銀座の店へ行くから、又チヤン公の居ねえ時に、妹がおれが尋ねてやるよ。

お鈴　私しどもの鑑定では、亭主の留守と聞いたから、おつウ氣を廻したら、飛んだお門違ひの話しで。

お兼　こりやア勝さんの深切から、爲になる話しでござんすが、さう聞くとお銀さんは、本當に不仕合せだねえ。

勝五　又わつちが逢つたら、異見を言つてやります。オイせん公、それでは家へ行つて居てくんねえ。

お仙　アイ、直ぐ歸るわいナ。

勝五　大きにおやかましうございました。

お鈴　私しどもゝ洗濯を、空地へ干したら、

兩人　話しに來ますよ。

ト是れにて皆々門口へ出る。勝五郎心づき。

勝五　オイ、鹽を少しくんねえ。

お仙　アイ（ト お銀に向ひ）鹽を少しおくれ。

ぎん　アイ〳〵。（ト有合ふ鹽壺を出す。お仙受取る）

勝五　ヲイ、體へ振つてくんねえ。

お仙　エ。（ト思入あつて）お葬式ぢやアあるまいし。

勝五　いゝツて事よ、是れから大歳組へ行くのに、爰の敷居をまたいぢやア、出がけに延喜が悪いからよ。

お仙　えゝモウ、靜かにお言ひなねえ。

へ影をおうて人目を憚り、鹽打ちかくれば勝五郎、

ト お仙内へ見えぬ様に、鹽を勝五郎にかける。

勝五　あゝ是でさば〳〵した。

へ暇乞ひして人々は、後を約して出て行く。

ト勝五郎袖をふるひながら向ふへ這入る。女達は暇乞ひして疊を抱へ、お仙と共々下手へ這入る。

へ跡にお銀は門の口、恨めしげに見送りて、身の不仕合せを思ひやり、椅子にもたれてかこち言。

ぎん　御維新に奥州から、まだ十代で只一人、はる〳〵江戸へ出て來たも、たつた一人の兄さんを、尋ねようばつかりに、諸所をさまよふ其の内に、どこを當度もあらざれば非人同様門に立ち、彈く三絃の心憂く、憂き年月を送る内、追々開ける世の中に、進められて此の家へ來り、子まで設けし中なるに、思ひがけない今度の騒争、それ故にこそかくまでに、世間の人に見下げられ、

へ穢多か、非人かなんぞのやうに、人交りの出來ぬのは、何んたる事の因果ぞいなア。

ト此の内無念の思入あつて、氣を取直し。

どれ觀音様へ御供物上げ、どうぞ事なう納まるやう、お願ひ申しませうわいナア。

へ涙拂ひて立上り、貧女が燈の捧げ物、煙りも細き線香の、薫りもぬけてやつれたる、國の安危に思案顔、爪づく路地に佇みて。

ト此の内件の青物を供物臺へ載せ、正面の觀音へ備へ線香を上げようとしてなき故、錦の隅に殘りある折をさがし出し、是れを上げる。此の内双稲は竹切にて、窓の所にて遊んで居る。文句よき程に向ふより、支那人道昌憲、やつれし鬘、汚れたる服、同じく靴にて腕組をなし、思案しながら出て來り、花道にて跡先を見廻し、氣味の悪きこなしにて。

道昌　お巡りさんの保護があるから、安心とは言ふものゝ、

何んだか肩身が狹いので、表を歩くにも心配あります。
〽おもやつれたる姿にて、我家の門へ歩み寄り。
ト考へながら舞臺へ來り。
今歸りました。
〽言ふに女房は出迎ひて。
ト蝶番ひの放れし門口を、やう〳〵に明け内へ這入り、椅子へかける。
ぎん　おゝ、よう無事で歸つて來て下さんした、さうして様子はどうでござんしたか、お案じ申してゐたわいナア。
道昌　様子よつほど惡い、私困りました。
ぎん　えゝ。（ト床のメリヤス、ミシンの音になり）
道昌　方々國の者聞合せました、ミイナ皆歸るよろしいと言ひます、私日本へ來て十五年、此の悴まで出來ました。
〽思ひもよらぬ戰爭に、跡に見なして歸るとも、今は國にも身内はなく。
親方あるばかり、何もありません、今行つてもなか〳〵構つてくれません、日本の方親切でよろしい、それを行かねばならぬとは。
〽何故戰を初めたか、國がたいさん大きいとて、愛國心のあらざれば、戰をする負けます、先年南支那佛蘭西に取られました、又北支那も露西亞に取られ、又東を日本に取られますと地球の内の大國ちゞまつてしまひます、それもかまはず戰ひしますと。
〽可愛いそなたや此の子まで、嘆きをかけて別れるかと、右と左へいだきしめ、只すい〳〵と泣くばかり。
トおぎんと、双種を引寄せ泣く。
ぎん　身の不仕合せに路頭に迷ひ、どう仕ようかと思うた所、大家様の御親切で、子まで設けし中なれど、今度の戰に是非なくも、どうでも別れねばならぬとは。
〽李鴻章とは名に聞けど、足らぬ智惠よと戰うて、恥辱を取るも知らずして、戰をせねばよからうに、かういふ嘆きをさするのも、身の程知らぬ南京の。（ト言ひかけ心付き思入あつて）
サ、お前の前では言ひ憎いが、私どもの思ひでも、戰に勝てはせぬわいナア。
〽愚痴と恨みにかきくどき、悔し涙にくれにける。
道昌　只わたくし困るのは、上海まで行きますにも五十圓は入ります、此の頃不仕合せ續きまして、ちつとも金ありません、是れに困ります。

ぎん　サ、それが心配でならぬから、兄さんの所へ手紙を出して、けふは來やうか明日は來やうかと、毎日待つて居るけれど、未だになしもつぶてもなく、又昨日端書を出し、樣子を待つて居ますわいナア。

道昌　あゝそれは恭い、よく賴んでくれた、悅ばしい悅ばしい。

ぎん　あゝもし／＼、また出來るか出來ぬか、返事の來ぬ内は、安心出來ぬわいナア。

道昌　安心出來ませんでも、それ力になります、よろしい。よろしい。（ト悅ぶこなしあつて、）あゝ、たいさん、腹へりました、米飯たべませう。

　トテーブルの上を片附け、椅子へかけ直す、おぎんちつとなり。

ぎん　サ、先刻米屋へいうたけれど、現金でなければやられぬと、斷わられたによつてなア。

道昌　ハア、米飯ありませんか。

　トおぎんせつなき思入あつて、ちつとなつて。

ぎん　アイなア。

　トうつむく、道昌惠是れを察し、服のかくしをさがしトヾ丸を拵へ手を振りながら、

道昌　モウ錢ない。

　〽ハッとばかりに聲張上げ、途方に暮れて泣き沈む、双種は其の性さかしくも。

　ト兩人どう仕ようといふ思入。双種以前の芋を皿いまま持ち出て。

双種　おとつさん、此の芋喰ひねえな。

道昌　おゝ、わたくしたいさん悅ばしい、能く心付きました。

ぎん　ても、感心なものぢやなア。

　〽忍び難なく戰場に、敗軍なせし思ひにて、暫し遠くその所へ、矢よりも早き配達夫、此の家の門へおとづれて、

　ト此の内道昌惠、件のふかし芋を頂き悅んで喰ふ。能き程に向ふより、郵便配達出て來たり、舞臺へ來て門口の札を見やり。

配達　郵便。

　〽跡をも見ずに急ぎ行く、お銀は嬉しく一通を、渡せはいそ／＼悅びて。

　ト配達夫手紙を置いて下手へ這入る。おぎん道昌惠に渡し。

ぎん　待兼ねた兄さんの返事、早う讀んで見なさんせいなア。

道具　忝い〳〵。（ト床のメリヤスに成り。）「此の間の返事、度々催促だからいや〳〵出し候、ヤイ妹よく物を考へて見ろ、手めえの心術で、チヤン〳〵の所へ行きやアがつて、今日本と戰が初まつたつて、人を馬鹿にしやアがるな、ペラン。」（ト始終讀みにくさうに、讀みながら。）「しやアがるな、ペラン。」（トおぎんに）是れわかりません、何んの事あります。

ト手紙を出す、おぎん氣の毒にて讀みかねるこなしあつて、是非なく、

ぎん　「しやアがるな、ペラン」ではござんせぬ、前から讀下すと、「人を馬鹿にしやアがるな、ぺらんめえ」でござんすわいなア。

道具　それ、なんの事あります。

ぎん　サ、それはなア。（ト術なきこなしにて、）まア跡を讀んで見なさんせいなア。

道具　「ペランめえ、たとひ石が舍利になるとも、南京のなの字には、百も貸せねえ。」（ト手紙に向ひ、）あゝ貸せませんか。（トがつかりして、又讀み。）「手めえ達は、のめつてもくたばつても構やアねえ、是れよく聞けよ、幾年たつても日本は甘いと思やアがつて、のめ〳〵戰を初めたらうが、モウ軍艦も上等が出來れば、軍人ときたら兵隊まで強勇揃ひで、それで足りざア跡にいくらも控へて居るのだ、しとをツケ」（トおぎんに向ひ。）人をつけるとは、兵隊さんに人を附けるありますか。

ぎん　いえ、人を附けるのではありません、それは惡態でいふのでござんすわいなア。

道具　あゝ人を附けるのではありませんか。（ト又手紙を見て。）「しとをつけ、百でも出來ねえと、よくチヤンチヤンにさう言ふがいゝ、ペランめえ〳〵」あゝ又わからぬ。

ぎん　それも惡態といふのでござんす。

道具　ハア。（ト又手紙を見て。）「手めえに貸す錢があるなら、陸海軍へ獻金すらア。」（ト本意なげに）あゝ是れではなか〳〵貸しません、（ト手紙を見て。）「もしそれでぐづ〳〵言やアがつたら、胴中へ穴を明けて、奈良の大佛の煙草入の根附にして、手めえはこつちへけえッて來い。おぎんどの、金太郎。」

（讀終りて兩人は、顏見合せてあつけにとられ、

ト再び手紙を取り、半ばから讀出し、

「貸す錢があるなら、陸海軍へ献金すらア。」（ト讀んで）

此の所よくわかりました、是れはいけません。

ぎん　罪も穢いもないものでも、双向ふ國の産れ故、

道昌　かうも人に嫌はれますか、

ぎん　現在實の兄までに、

道昌　あゝ力ない、

ぎん　事ぢやなア。

〽今は諸方泣く涙、打ちしをれてぞ居たりける、折柄表へいッきせき、始終を案じ入り來る長兵衞。

ト道昌惠、おぎん愁ひの思入、よき程に下手より差配人長兵衞、羽織、着流し、駒下駄にて出て來り、文句の止り合方になり。

長兵　やア皆な内か、いゝ事を聞いて來た、悦ぶがいゝ、悦ぶがいゝ。

道昌　あなた、お出でなさいまし。

ぎん　シテいゝ事とは、何事でござります。

長兵　サアなんと有難い事ではないか、新聞でも承知だらうが、現在敵の支那人を、お巡りが保護して下さるといふ、有難い御達しが出たから、悦ばせようと飛んで來たのぢや。

ぎん　えゝ、そんならこちらに別條なく、居られるのでござりますか、えゝ有難うござります。

長兵　所でかういふ世の中だから、今迄通り澄まして居られぬ、まづ年齢姓名はいふに及ばず、何んの營業でござるといふのを、委しく願つて出れば、お上から頭を下げて下され、それさへあれば何年でも、無事に日本に居られるのだ、どうだえ、敵となつた支那人でも、こなた衆に科はないと、登錄書まで下げて下され、政府の保護に預かるとは、文明國の有難さ、なんと日本政府は、大きな料簡ぢやアないか。此の大ッ腹の長兵衞も、實に今度は驚いたよ。

〽皇居の方を伏し拜み、椅子ごとこなたへすりいだし。

トぞく〳〵悦び。

サ、善は急げだ、名前と營業を記しなさるがいゝ。

道昌　ハイ、ハイ。

長兵　ハイぢやアねえ、早くするがいゝ。

道昌　ハイ。（トもぢ〳〵してゐる。）

長兵　何決して心配する事はない、サ、書附をこせえるがいゝ、おれが警察署へ持つて行つてやる、實にこなたは

仕合せた、かうして隣りまで引越してしまつたに辛抱して居たのが大當りだつた、第一おれも仕合せた、（ト道昌惠に。）何をぐづ〳〵して居るのだ、早く書かいゝぢやアねえか。

トせき立てろ、おぎんも心づかひの思入、道昌惠うつむき居て、此の時顏を上げ。

道昌　澤山有難いが、登錄願ひ出來ません。

長兵　え、何が願へねえといふのだ。

道昌　登錄書へ出す營業ありません。

長兵　何ねえ事があるものか、チーハをやるぢやアねえか。

ト言ひかけて、心付き。

ア、しまつた。チーハは內證の事だつけ。（ト一寸考へ）おゝある〳〵、帶地を賣つたらいゝぢやアねえか。

道昌　サ、その帶地も近頃は、澤山類がふえて、わたし共のはちつとも買人がありません。

長兵　昔から南京繻子は、あんなに廣まつてゐるのに、賣れない事はなからうにな。

道昌　いえさうでなくても敵國の品だといふて、ちつとも賣れませんから、日本に居ても喰べる事出來ません。

〽打ち萎るれば、長兵衞か。

ト長兵衞ちつと考へ。

長兵　おれも大ッぱらの長兵衞と、人の難儀を身に引受け、救つてやるので京橋區で、人の中でも立てられるが、無商賣ぢやア肝腎の、登錄が下らねえから、救つてやるわけにもゆかず、こんな困つた事はねえ。

道昌　此の上願ひありますは、是は國へ連れて行きますが、妻の身の上兄貴よろしくないありますから、ようく頼みます。

ぎん　えゝ、そんならどうでも此の子を連れ、お前は國へ行きなさんすか。

道昌　行き度くありませんが、仕方ありません。

〽途方に暮るゝ灯ともし前、目鏡なければ詮別に、門の張札やう〳〵に、尋ぬる老の車曳、もしや爰かとためらへば。

ト此の內長兵衞當惑の思入、向ふより五郎助、更けたる髷のかつら、やつし形、黃絣わらぢがけの拵へにて一人乘の人力車を曳き、トボ〳〵出て來り、舞臺へ來て門札を見て、考へてゐる。おぎん心づき下手へ行き。

ぎん　どこをさがしなさんすえ。

五郎　ハイ、南京さんの荷物を、曳きにまゐりました。

道昌　あゝ、わたし頼んで置きました、爰の内あります。
五郎　お頼みになりました若い衆が、來る筈でござりましたが、南京さんと聞いて、誰も來てがありませんので、わたしが頼まれて參りましたが、早くは曳けませんからそのつもりでお頼み申します。
道昌　積む物少々ありますが、私し一緒に乘れませぬか。
五郎　一人乘りでも急には曳けませぬから、荷と一所では無駄でありますから、旦那は歩いて行つて下さりませ。
長兵　心許ない車屋さんだが、よくそれで車が曳けるの。
五郎　いえ、誰も行人のない所から、頼まれて來ましたが、實は、わたしは飴湯を賣つてゐる者でござります。
長兵　あゝそれでは支那人と聞いては、車を曳くのもいやがるのか、成程こいつア日本は、大和魂に違えねえなア。
ト此の内道昌惡、觀音の軸と其の外の物をまとめ、支那鞄のこはれかゝりしへ詰め、荒繩にて結へる、其の外赤毛布の包み一個と、門口の方へ持つて行く。
ぎん　どうぞ是れを積んで下さい。
五郎　へい／＼
トやう／＼に、二個を車へ載せ、繩をかける。
長兵　たつたそれぎりか、さうして鍋釜などは、おめえの所有物にするのか。
ぎん　いゝえ、此の間から遊んでゐるので、實の所は一ツ殘つ（ト言ひかけ、俯向く）
長兵　そんな事ぢや大變だが、是れから支那へ、行くのにおめえの身じんまくはいゝのか。
道昌　横濱まで引上げます、實はその汽車賃も。
長兵　えゝ、ねえのかえ。
道昌　ハイ。
長兵　そいつアいけねえ、待ちねえな。（ト紙入より一圓出し）サア壹圓餞別だ、おぎんさんの事は安心して、是れで一まづ引揚げなさい。
道昌　ハア有難うございます、有難うございます。（ト思入あつて。）こんな情のある國と。
（何んたる事にて戰ふかと、爰を思ひしばり男泣き。）
サア双種、おとつチヤンと横濱へ行きますのだ。
（手を持添へば、振拂ひ。）
ト双種かぶりをふり。
双種　おいらア南京の國へ、行くのはいやだ。
道昌　それでも行かないと、おつかさん困ります、おとつさんと、一緒に行くよろしい。

双種　日本の内ならいゝが、もし南京へ行く時は、へ入船町のお友達に、あの南京は逃げて行くと、はやされるのが悲しいもの。おいらの此の毛を剃落し、散切天窓になつたら、弱い奴だと言はれもせず、爰に殘つて居られよう。へそれ故置いて下されと、母にまつはりかき口說けば。

ト此の内双種よろしくあつて。

道昌　支那で恐れます大將軍は、丁度今年は東の方、その日本に刃向つても、わたくし國利益ありません。

長兵　これを知りつゝなんで又、勝てぬ戰をしたものか。

ぎん　思へば是れが見し夢は、その前表の負戰、

道昌　兵糧責の私しは、今目前の此の有樣、

長兵　軍用金の不足も當れば、

ぎん　親子の別れも、國の煩ひ、

道昌　差配人樣、

長兵　おゝ、

道昌　妻、

ぎん　あい、

道昌　私し困ります。

へ寄る邊定めぬ浮草の、あたり憚る樣子もなく、聲張上げて三人は、泣くより外はなかりける、長兵衛不愍いそまして、

ト道昌惠夫婦三人よろしく、愁ひの思入、長兵衛是れを察しやり。

長兵　飛んだ國性爺の和藤内だが、父は唐土母は日本、其の合の子は幾分か、受けつぐ日本の大和魂、爰らは一番大ッ腹の、此の長兵衛が引受けて、跡の始末はしてやるから。心殘さず置いて行きねえ、其のかはり國へ行つたら、日本人は町人でも、此の位の義はあると、大和魂を話して下せえ。

道昌　ハイ、此の御恩決して忘れません。（ト平舞臺へ手を突き辭儀をして、門口へ行く。五郎助に、轅へ腰をかけ、居眠りをして居る。）オイ車屋さん、車屋さん。

ト大きな聲をする。五郎助是にて吃りして、目を覺まし。

五郎　ハイ〳〵、お待遠さまでござります。

ト鉢卷をして、やう〳〵に轅棒を上げる。

道昌　それでは、左樣なら。

ト門口へ出るを、おぎん引きとめ。

ぎん　もし、お前おなかは。

道昌　澤山、腹よろしい。

へ行かんとなせど恩愛に、曳けぬ車の後や先、行きつ戻りつとつおいつ、秋の苅穂に置く露の、いなをふせ鳥しめからむ、思ひは盡きぬ異國へ、別れてここそは。

ト此の内道昌憲門口へ出かゝり、ちつと思ひ入。おぎんと、双種すがり泣く。五郎助は轅を曳き出さうとして、車動かず、しきりと足をふん張りゐる。こなたは泣き〳〵門口へ出て、車の後ろへ取りつく。此の内道昌憲の裾へ、おぎんと双種取りつき泣く。長兵衛心づかひのこなしにて、車屋に早く行けといふ思入すれど車先きへ進まず。道昌憲は振返り振返り、車を押しながら花道へ行く。舞臺は是れを見送る。長兵衛隔てる。双方よろしく、トド、思ひ切つて車を押して、向ふへ這入る。是れを本釣鐘、三重にて。

幕

ト幕引き附けると、人寄せの鳴物にてツナギ、直ぐ引返す。

二幕目

相模敎心寺山の場
濱離宮汐先橋の場
新橋ステーションの場

役名――支那人拜正漢。小町の金太。世話役勝五郎。寺男十兵衛實は進藤勇介。差配人大ッ腹の長兵衛。人足會津の六兵衛。大藏組の人足大勢。見送人大勢。警部人見明。會津屋四郎兵衛。

本舞臺正面の奥より廻し一ぱいに舞臺前まで、なぞへにしゆろ伏せの山の半腹、向ふ一面藪疊、山の懸體塔婆、石塔澤山、此の間松柳の立木、能き所に石塔を横にしたる、新佛の盛土、白張の高張提灯、やはり半腹の上手一間の物置小屋、雨戸一枚明放し、内に古塔婆、樒の枯葉など積みあり、總て相摸在敎心寺山惣卵塔婆の體。木魚入りの合方にて幕明く。

トやはり右の合方にて、向ふより久六、寺男十兵衛と變名して、ぱつと鬘、袖なし半纏、やつし形り、三尺半股引、藁草履にて、鍬と竹箒をかつぎ出て來り、花道にて。

十兵　やう〳〵本堂の前が片附いたと思つたら、モウ卵塔婆が草だらけだ、警察署がやかましいから、寺男はちつとも樂は出來ぬ。（ト舞臺へ來り、坂へ上りながら、新佛の墓の廻りをはきながら。）驛から來た近江屋の新佛は、明日は三十五日ぢやな、大方參詣があるだらう、レコには慥にありつくわえ。（ト悦びながら無緣塔を見やり。）三界萬靈無緣塔は、何年立つても寺男の、掃除代は無緣法界、是れだけはいつも入れ佛事だ、ハヽヽヽヽ。

ト邊りをはきながらだん〳〵山の上へ登り、頂上へ這入る、替つた合方になり向ふより、支那人拜正漢坊主かつら、鼠の着附、香染の袈裟麁末なる拵らへ、白の脚絆わらぢにて、網代笠を冠り、胸に鼠の布にて包みし箱をかけ、是れへつんぼと記し、伏鉦を叩きながら出て來り、花道にて、跡先へ思入あつて、舞臺へ來りだん〳〵中腹へ上り、無緣の墓へ向ひ、裏向にて、口の内にて經文を唱へ伏鉦を叩き居る。能き程に本釣鐘を打ち込み、誂への合方に成り正面を向き、首にかけし箱の内より、畫圖と足附の小さき測量目鏡を出し、向ふを見て指にて距離をはかり、石筆にて畫圖を書入れをする。能き程に物置の内より、人見明、洋服サーベル警部の拵へ、山の上藪疊の蔭より、以前の寺男鍬をかつぎ、双方半身出して伺ふ。拜正漢は測量目鏡にてだんだん上手を見廻し、思はず物置の人見を見て恟りなし、目を放し素知らぬ振にて下手へ行く、途端に寺男と顏見合せ、ハツトせし思入、是れにて三方一時に氣味合の思入。拜正漢は少しも騷がず、悠々と件の品を箱へ納め、珠數を爪ぐり鉦を叩きながら、小音にて經文を唱へる、上下の兩人顏見合せうなづき、つかつかと出て。

人見　コレ〳〵、お前が今出してをつた物は何ぢやな。

ト言へども拜正漢、聞えぬ振にて、鉦を叩いてゐる。

十兵　こりや僕も見てをつたが、只今海岸を見てゐた目鏡の事ぢや。

ト脊中を突く、是れにて拜正漢心附きし體にて正面をむき耳と胸の札をさし手をふる。

人見　こりやとぼけるな。其方が此の山で測量してをる事は、疾うに目が附いてをるぞ。

十兵　日々爰へ參る事も、下男と成つて存じをるのだ、サ、その箱の内を改めさせろ。

ト拜正漢やはり聞えぬ思入にて、小音にて念佛を唱へ

ながら、鉦を叩き下手へ下りて行くを、人見ソレと思入、十兵衛つか／＼と行つて腰をとらへる、拜正漢モウ是れ迄といふ思入あつて、探もぎつて下手へ行くを人見後ろより捕へ、箱へ手をかけきつと見得、ラッパの音へ風の音を薄くあしらひ、卵塔の廻りを廻る、山の上下を逃げ廻り捕物の立廻り、トヾ三人組打に成り、坂の半腹よりころげながら落ちる、此のとたん石塔拜正漢の足の甲へ倒れる。

拜正　あゝ痛いあります、痛いあります。

人見　ソレ、見込の支那人ぢや。

十兵　承知しました。

ト兩人折重つて早縄をかける、人見は箱を取り上げ中を見やり。

人見　望遠鏡に測量機械、又此の邊の畫圖面迄。

ト憤りせし思入、拜正漢是れを聞き立ち上るを、十兵衛脊中を突く、是れにてひよろ／＼と下手へ行き、しやんとなるを道具替りの知らせ。

拜正　ム、――。

ト無念の思入、十兵衛縄目と脊中を一所に摑み、人見右の品々をまとめ、花道へ附添ひ這入る。此の模様寺

鐘ラッパにて、道具廻る。

本舞臺前へ出して常足の二重、石垣の蹴込み、上手丸物擬寶珠附の橋、汐見橋と記したる杭札を打ち向ふ濱離宮の森より、見附を見たる中遠見の切出し十八日の月を出し、下手柳の立木、石垣川岸の見切、橋の下より舞臺前へ水布を敷詰め、花道の附際二重へ上る足掛り、總て芝口汐見橋夜の體。波の音調目太鼓にて道具止る。

ト鳴物打上げ、下座の獨吟になる。

〽露時雨思ひあまりて袖ぬらす、しめり勝ちなる暮の秋、いつしか月も西へ落ち、身はあへなさの薄き縁。

ト能き程に本釣鐘を打ち込み、向ふより金太郎、四十以上の散髪かづら、着流しやつしなり、小倉の帶、草履にて出て來り、花道にて。

金太　兩國から大川端へ出て、考へ／＼うか／＼來たら、汐留から左へきれ、とう／＼お濱へ出てしまつた、お巡りさんの影も見えず、こりや死ねとの知らせであらう。

〽海邊へつゞく川岸を、引くや汐路にたどり來て。

ト此の内花道にて邊りへ思入あつて、舞臺へ來り、石

を拾ひ袂へ入れながら、
凡夫盛りに神祟りなしと、何んでもいゝ目が出る所から、遊び歩いた其の揚句が、力と思ふたお竹に死なれ、現在實の妹は、チヤン／＼坊主のラシヤメンで、日清事件で路頭に迷ひ、今ぢやア乞食同樣に、する事なす事いすかのはし、是れでは死ぬより外はないわい。
〈樹々は錦を飾れども、恥づる心の水鏡。
ト腕組をして橋の上へ行き、兩の袂の重みをはかり、欄干へ片足をかけ、ぢつと思入あつて、飛び込まうとして思案なして下手へ戻り、考へ居て又橋の上へ行き、
思ひ切つて。
南無阿彌陀佛。
〈曇りし空も又晴れて、
ト獨吟の上げやうの節にて、飛び込まうとして、たぢたぢとして、ほつとしてぢつと考へ、
こいつアうツかり死なれぬわい。
〈今迄ありし雨雲も、吹き晴れて行く森影に、人目厭ひしほゝ冠り、虫の音さへもかれ／＼に。
ト此の内金太郎袂の石を出して捨て、向ふへ思入あつて下手柳の影へかくれる。文句能き程に向ふよりそば屋の四郎兵衛、四十以上の散髮かづら、やつし形平ぐけ、駒下駄にて思案ながら出て來り、花道にて。
四郎　金杉橋は人通りが多いので、どこに仕ようか爰に仕ようかと、先づ爰迄は思つて來たが、此の川なら障りはあるまい。
〈泣く音も哀れ十日菊、床しき薫り忘れかね。
ト舞臺へ來り、地上へすわり兩手をつき。
モシ會津の殿樣、どうぞ御免なすつて下さりませ、只今申譯に四郎兵衛が、身を投げて死にますから、是れをお詫と思召して下さりませ。
〈思ひ殘して。
ト獨吟の上げにて、ツカ／＼と橋の上へ行き、飛び込まうとする。此の時下手より、金太郎走り出て、四郎兵衛を抱き止め、往來まで引戻し、
金太　モシ、マアお待ちなせえ、お待ちなせえ。
四郎　いえ／＼、どうぞ放して下さりませ。
金太　いゝや放さねえ、まアお待ちなせえ。
四郎　いえ／＼どうぞ死なして。
金太　えゝ待ちねえといふに。（ト無理に下に居らせ。）や、お前さんは、そばやの亭主ぢやございませんか。

四郎　むゝさういふお前さんは、どなたでござります。

金太　サア久しいあと石町で、お前さんがそばやをしてゐた時、貳拾間寄つたので、藥種問屋の旦那にまで、迷惑かけた小町の金太、あの時の腹いせと、存分爰でして貰はにやア、わつちが心が濟ませぬよ。

ト是れにて四郎兵衛、月影によくすかし見て。

四郎　おゝ成程こなたはあの時の、金太といふお人であつたか、さうして今頃どうして此所へ。

金太　へい、お前さんより一ト足先へ、此所へ身を投げに參りました。

四郎　えゝ。（ト愕りする、合方になり）

金太　子供の時は白糸も、染り易いは惡い道、桑折樣の馬丁で、戰地の御供をする時分は、會津樣の御家來は、女子供に至るまで、殿樣の御恩を忘れず、命を捨るも厭はずに、忠義を顯はす健氣さを、わつち共まで見習つて、たとへ馬丁風情でも、萬分が一の御恩返しを、仕樣と思つて働らく內、假病院で看護婦が、一發やられた響きから、臆病風に誘はれたも、女心に引かされて、遂には色と慾とに迷ひ、うつかり踏込む脇道に、心の駒の迷ひ初め、產れた當地の江戸へ歸り、女を玉に遊んで暮し、樂を仕ようと思ひの外、十二の時コレラで死なれ、それからすつかり發狂はせに、路頭に迷つて居ましたが、浮む世界に氣が附いて、今夜死ぬ氣に成りましたのさ。

四郎　いや思ひがけないさんげ話し、實はわたしも我身に氣がつき、今夜死ぬ氣で出て來ました。

金太　へえ、お前さんもやつぱり死ぬ氣で、

ト合方きつぱりと成る。

四郎　若い時に上方から、會津の御出入町人へ、養子に入つて相續なし、屋敷出入りを始めると、直ぐ御維新の戰爭に、軍用品の御用が出ると、足元を見て高値で納め、入札だと出入仲間で通しを引いて落札させ、とつたか見たかで儲うけた上、いよ／＼會津は降參だと、聞いてひとしく後足で、砂をかけて江戸へ逃げ出し、懇意な者が借金で、仕舞かゝつた藥種屋の店を、二足三文に踏たふし、景氣直しの店開きも、運に叶つて繁昌したが、お前が寄りに來た頃から、だん／＼店も裏へかゝり、終には元の仕込も出來ず、かさむ物は借金ばかり、トヾの詰り執達吏差し向けられて、諸式は元より衣類まで、封印附られ公賣所から、往來中へ持出す諸道具、實に近所の手前もあり、面目なうて居られぬから、一時影をかくす

爲め、安宿の二階に居たが、何をせうにも金はなし、我身で我身に愛想が盡き、扨から成つて考へると、まづ第一に會津様の、御恩を忘れて不人情に、戰地を逃げた其の罰で、心が附けば一日でも、此の世に居るのが面目なく、死ぬ氣で此所へ來ましたのさ。

金太　さういふ譯でございますなら、猶更わつちも心掛り今言つた腹いせを、存分して死んで下せえ。

四郎　いやあの時の衒りの金は、若松屋さんが氣の毒だと、いゝといふのを無理に下され、それで内濟になつたから。決つしてこなたを恨みは仕ませぬ。

金太　それぢやア恨みなさらねえとか。

四郎　何んの恨みに思ひませう。

金太　それ聞いて安心しました。迚もの事に二人りながら、此所で死なずに濟むといふ、相談にはのりませぬかえ。

四郎　してその相談とは。

ト是れより替つた合方、蟲の音になり。

金太　かうお互ひに身投げが落合ひ、明して見りやア二人とも、御維新の戰爭に、卑怯に會津を逃げた同士、然し爰が理窟の附けやう、あの時殿様へ忠義を立て、お武家の中へ交くつて、鐵砲玉や兵糧を、運んだ揚句に命を捨ても、高が日本の内の小ぜり合ひ、扨あの時は濟なかつたが、それからだん／＼生延びて、明治の世界に進んで來て、ツイに講釋でも聞いた事のねえ、支那を相手の大戰爭、今度ばかりやア日本中、子供までが氣を揃へ、負めえといふ大和魂、かういふ場合に成つて來たのに、ぼんやり身を投げ死ぬ位ゐ、つまらねえ事はありやア仕ねえ、トサア斯う言ふわつちも、死ぬとこだつたが橋の欄干へ、片足踏かけふつと浮んだ開明の、心は天の助けと氣がつき、無駄に此所で死ぬよりも、モウ徵兵の間に合はずとも、萬分の一でも日本の、皇國の爲に成る事を仕たれば、會津で討死した忠義な人にも笑はれめえと、自分勝手の理窟を附け、一トまづ死ぬのを止りましたが死なずに國の爲に成るのが、よいと思つてくんなさるなら、身投げ仲間の二人りで、文珠の智惠には足りねえが、よく相談を仕やうぢやアねえか。（トよろしく思入にて言ふ。）

四郎　實意を盡したこなたの料簡、何んにも言はずに其の意見に荷擔したい所だが、御維新の時臆病から、戰地を逃げた位だから、外國などの戰サ場へ、出ても役には立ちますまい。

金太　なあに決して戰に出るばかりか、國の爲にやアありません、商人は外國へ商ひをして金をため、又職人は勉強して、何でも日本で間に合せりやア、世界で負ねえ國に成つて、刃向ふ國はねえといふから、たとへわつち共の痩腕でも、其の氣でやりやアいつか一度、蟻が塔を積む試しもあれば、やる所迄やらにやアいかねえ。

四郎　ム、、それでは死ぬ氣で働いたら、他國に負ないたしに成らうか。

金太　成るとも成るとも、身を投げようといふ料簡の、わつちらなどには分らねえが、是れには立派な保證人が、ありますのだ。

ト是れにて四郎兵衛、思入あつて、

四郎　そんなら是れから生れ替つて、一番奮發しませうか、こなたがさういふ氣になつたら、心を改め以前にまさり。

四郎　會津の戰サと二人前、恥をすゝぎに力を盡し。

金太　兄弟分の勝五郎が、大鳥組の世話役で、今度あつちへ行くとあれば、

四郎　ちやう度願つて朝鮮でも、又は藝州廣島でも、

金太　上の爲なら命かぎり、

金太　チヤン〳〵坊主の降參まで、

金太　命をきりに。

兩人　働かうか。（ト兩人きつと思入あつて、）

金太　待てよ、かう立派に口はきくが、藥種屋で騙りを仕たあの一件を、無沙汰では威張つて世間へ出られぬ體、こいつア一番弱つたなア。

ト腕組をなし投げ首をする、此の時下手立樹の影より、以前の寺男の十兵衛實は近藤勇助、洋服サーベル、官吏の拵らへにて窺ひ出て、

勇助　金太郎よく改心致したな。

ト前へ出る、兩人恟りして飛退き、夜目にすかし見て、

金太　どなた樣でござりますか、どうもお見それ申しました。

勇助　あゝ知れんだらう、僕は御維新の際、若松の城内に、仲間をしてをつた久六ぢやわえ。

金太　へえ成程、お前樣は久六さん、どうして斯助から、こんなに出世をなされましたな。

勇助　元より上の御用にて、奧州路を探索の爲、仲間に這入りをり、御維新より横須賀に在勤いたした、近藤勇助と申す官吏、今日急の御用にて、上京致し居つたのぢ

や。
四郎　それではあなたが姿をやつして、それだもの、惡い事は出來ないな。
勇助　貴樣が病院から竹と逃げる時は、僕もあれに一所に居つて、委細よう知つちよるぞ。
金太　えゝ。(ト惆りする。)
勇助　まア左樣な事は仔細ないが、只今申した藥種屋の、衒りも主人が大の慈善家に、科人の訴へせず、事穩便に濟したれば、上のとがめは決してないから、改心なさば心おきなく、是れより心を盡されよ。
金太　へえ、それでは內濟にしてくれましたか、是も偏に主人のお影、禮に參るでござります。
ト此の時上手より、新聞の賣子號外を澤山持ち、鈴を振りながら走り出て、
新聞　只今出ました號外々々、日本陸海軍大勝利、チャンチャン、大まけ、大メチャ〳〵、號外々々。
ト呼ながら向ふへ這入る。皆々向ふを見やり悦んで。
勇助　二人りが改心致した矢先、
金太　日本勝利の號外は、
四郎　時にとつてのよい辻占、

勇助　こりや兩人。
兩人　へい。(ト下に居るを、道具替りの知らせ。)
勇助　奮發いたせ。
兩人　へい〳〵。
ト勇み立つ、此の模樣、賑やかな合方、題目の太鼓にて、此の道具ぶん廻す。
本舞臺一面の平舞臺、向ふ新橋ステーションの入口の出遠見、上手はすに芝口鐵道前町家の片遠見、下手鐵道局構內貨物庫の張物、惣體灯入り、平舞臺所所に、大藏組と神田市場の高張提灯を澤山建て、總て新橋ステーション夜の景色の體。爰に前幕の世話役勝五郎、羽折の下印半纒、腹がけ股引形、靴はき出前持六兵衛、更けたる袋付のかづら、半纒股引わらぢがけ形り、此の外人足大勢、思ひ〳〵の勇ましき拵らへにて、西瓜を喰つてゐる、下手見送人の内神田市場の若虎、襷鉢卷にて、裁庖丁にて、盤臺の上にて西瓜をたつてゐる、上下大藏組勝五郎と、市場と記せし長提灯を並らべ、立かゝりゐる。此の見得席亭の鳴物、馬車のラッパの音にて、賑やかに道

具納ろ。
見一　世話役、皆んなの勢ひは、
同二　大したもので、
皆々　ござりますねえ。
勝五　是れは皆さん、お忙がしい所を見送つて下さいまして、大きに、
人足　ありがたうございます。
見一　世話役、日本の軍人は、大勝利といふのは極りきつた話しだが。
見二　それに續いて鳶方井戸掘、大工石屋に家根屋に左官。
同三　其の外數多の諸職人が、大奮發で働らくので。
同四　朝鮮人も膽をつぶし、かうぎな手際といふさうだから。
同五　お前が行きやア如才はねえが、先へ行つたら人足に、
同六　負けねえように大藏組の、一番手際を、
皆々　見せてくんねえ。
勝五　皆んなよく言つてくんなすつた、わしも日本の內とは違ふから、土地の勝手を知つたやつを、多くの內から選み出し、腕こきばかりを揃へ、上の差圖があり次第、奉天府から北京迄も、押込んで行く料簡だ、もう斯うなりやア軍人同樣、一ト足でも跡へは引かず、日本男子の勇氣を見せ、決つして引けは取らねえから、勝利の號外を待つてゐてくんねえ。
六兵　わしらなどは若い時から、會津の戰地を踏んだものだが、總身へ智惠が廻りかね、久しく蕎麥屋のかつぎでゐたが、今度こそは日頃の願ひ、あつちへ行つて一ト働らき、チヤン／＼坊主の髮の毛を、引ツこ拔いて國へ送り、會津塗のうるし筆に、つかはせる料簡だ
人足　おいらは又陸海軍の、跡へ廻つて南京の、
同二　首を拾つて持つて歸り、お玉杓子の化物だと、
同三　公園の奧山で、南京繻子の幟を立て、
同四　見世物にする料簡だから、歸つて來るのを、
同皆　待つてゐてくんねえ。
見一　西の瓜に支那を開かせ、南京の首の西瓜を切つて、お前達に喰はせるのは、
同二　出立を祝つて、
同皆々　能い心持だな
ト賑やかな合方、ラッパの音、ばた／＼になり向ふより、以前の金太郎、四郎兵衞いつさんに出て來たり。
金太　おゝ勝兄いか、うまい所へ間に合つた。

四郎　もう直ぐ乘りなされますかな。
勝五　なアに、まだ十五六分間があるが、二人り共息を切つて、何か用でもあつて來たのか。
金太　外ぢやアねえが、二人り共、此の御時節に兵營から、豫備に呼ばれる的もなく、獻金仕たくも錢はなし、幸ひ今夜勝兄いが、出立すると聞いたから、宙を飛んでかけて來たのだ。
四郎　獻金代りに根かぎり、體で御上の奉公を仕ますから、金太郎さんを御懇意と、聞いてともへ參りましたが、
金太　どうぞ二人りを是れから直ぐに、
兩人　連れて行つて下さらねえか。
勝五　平常の氣前に引替て、日當を獻金のかはりにするとは感心だ、是れが大和魂の證據といふのだ、連れて行かなくてどうするものだ。
四郎　そんなら連れて行つて、下さりますか。
兩人　こんな有難い事はねえ。
ト、やはり右の鳴物、ばたへに成り向ふより、前幕の差配人長兵衞、鉢卷尻はしより、弓張提灯をかざし、走り出て來たり。

長兵　やア間に合つたか間に合つたか、勝さんの出立と、あした豫備軍の募集のあるのと、一ッ所に成つて大混雜、まづおめえに逢つて悅ばしい、日本の評判は各國共に、いゝといふからおいらも大きに安心だ、まア目出度行つて來るがいゝ。
勝五　そりやア態々有難うございました、所でお前さんの御存じの、此の二人りも今急に、行くやうになりました。
長兵　おゝ金太に四郎兵衞さんか、丁度いゝ、あの南京は出立したが、おめえの妹はおれが預り御先途を、見屆けてやるから安心して行くがいゝ、又四郎兵衞さんも大奮發だ、から皆んなを見ると、おれも勇氣がりんへとして來て、體がひよいへと持上がるやうだ、あゝ平民でさへ此の勢ひ、軍人は威勢がよからうな。
金太　長兵衞さん、一緒に行つては、
皆々　どうでござりますえ。
長兵　あゝ行きてえな、チャンへの音をかういふあんはいに、引ッこぬいて、毛でいはえては又つなぎ、珠數玉のやうにつなぎ附けて、芋洗ひの辨慶の所へ、遣ひ物に仕てえもんだなア。
ト此の時ステーションの內にて、ガランガランと音す

る、勝五郎時計を見やり。

勝五　オヽもう五分前だ、サ乘込まうぜ。

金太　そんなら是れで見送りの、

四郎　長兵衛さんから皆さん方、

勝五　大きに。

皆々　有難うございます。

ト辭儀をする、此所へ六兵衛西瓜を一ツはふり出し、胴中へ竹槍を突通して、そのまゝ建てる、此の西瓜のへたに赤い紙と、毛が付きゐて支那人の天窓と見える。

金太　こいつア南京の、

皆々　首のやうだ。

長兵　日本帝國萬歲。

皆々　天皇陛下萬歲。

ト一同帽子を取つて、提灯をさし上げる。

一同　やアイ……。

トきやりに成り、是れでガラン／＼の音、賑やかな合方を冠せ、皆々上手へ行く引ツ張の見得。頭取出て。

頭取　先ず今日は是れぎり。

ト目出度　打出し

會津產明治組重（終り）

解說

三世河竹新七に就いて

河竹繁俊

默阿彌の高弟として許されるものが三人あつたと言つていゝ。一人は大阪の人となり明治十九年に六十二歳で歿した河竹能進であり、他の二人は東京に於て師名の相續を許された三世河竹新七と竹柴其水とである。能進は默阿彌の最も早くに名乘つた狂言作者名である所の、勝諺藏を稱してゐたもので、三人の中では、最も先輩であつた。

三世河竹新七は幼名を菊川金太郎と呼び、天保十三年神田に生れた。猿若町の芝居茶屋に奉公してゐたが、性來芝居が好きで、石塚豐芥子の紹介によつて、當時(二世)河竹新七と稱してゐた默阿彌の弟子となり、竹柴金作なる作者名を與へられた。故三木竹二氏の傳ふる所によると、安政二年に『五十三次天一坊』(默阿彌作)を見て、世にはこれほど面白い芝居を書く人もあるものかと感激したあまり入門したのだといふ。明治五年市村座に於て立作者の地位に進み、各座に出勤してゐたが、明治十七年新富座に於て三世河竹新七を襲名したのであつた。其後も市村座、歌舞伎座等の立作者を勤めてゐたが、明治三十四年の一月十日六十歳にして歿した。

性機智に富み、趣向の才を有し、幼少から落し噺が巧みで、踊りの當て振りに妙を得てゐたといふ。生涯の著作には講談、人情噺等を脚色したものが多く、概して輕く、サラサラとした作風で、東京に於ては默阿彌風を最もよく繼承した作者であつたといつていゝ。時代物、世話物、淨瑠璃等にわたり八十餘種の作を遺してゐる。年代順に擧げて見ると大體左の如くになる。

夏雨濡神輿(女團七)。明治六年七月市村座初演。
忠臣藏年中行事(忠臣講釋)。同十年五月春木座。
政談戀睦倉(大岡政談、睦倉十四郎)。同年十月同座。
櫓太鼓成田仇討(瀧見山大八)。同年九月同座。
六歌仙狂畫墨塗(滑稽上ルリ)。同年同月同座。
門松寶双六(尼子十勇士)。同十一年一月同座。
廿四時海上新話(鳥追お松)。同年五月同座。
◎通俗西遊記(孫悟空)。同年九月市村座。
紀文大盡廓入船(紀文)。同年十一月同座。
佐野系圖由緒調(佐野善左衛門)。同十二年二月同座。
鹿兒島銘々傳記　同年四月同座。
萬石取茶入墨附(越前福井騷動)。同十三年四月同座。
風便佃新聞(理作流罪)。同年六月歌舞伎新報所載。

蟒蛇虜妖術奇談（鍋島騒動）。明治十三年十月市村座。
北條美談時代鑑　同十四年二月春木座。
弓張月源家鏑箭（島の爲朝）。同年三月市村座。
御殿山曙木草紙（坂下事件）。同年五月同座。
盛糸好比翼新形（新比翼塚）。同年六月同座。
關ケ原東西軍記（關ケ原軍記）。同年九月同座。
女夫浪江島奇話（生島新五郎）。同十六年一月春木座。
術供養梵字文覺（遠藤武者）。同年五月市村座。
黒川噂高樓（八犬傳毛野）。同年六月春木座。
濱千鳥眞砂白浪（石川五右衛門）。同年十一月市村座。
雲雀山駒浪松樹（中將姫）。同十七年二月春木座。
音鈴川大岡政談（鈴川源十郎）。同年四月同座。
鎭西八郎英傑譚（琉球の爲朝）。同年四月市村座。
上州織侠客大縞（國定忠治）。同年七月同座。
高野山刈萱實記（苅萱傳記）。同年九月春木座。
種瓢眞書大閤記（大閤記）。同年十月市村座。
新舞臺越後立讀（越後騒動）。同年十一月猿若座。
花見時眞書太閤記（太閤記）。同十八年五月市村座。
三世相縁本阿彌（相撲長右衛門）。同十九年二月同座。
浮世又平名畫譽（繪師又平傳）。同年十一月同座。
○龍釣瓶花街醉醒（佐野次郎左衛門）。同廿一年五月千歳座
武藏鐙譽大久保（川勝の件）。同二十年十一月市村座。

唐人髷今國姓爺（和藤内）。同廿二年二月歌舞伎新報所載
千宗易悟道策前（千利休）。同年五月同誌所載。
蔦模様血染御書（大川友右衛門）。同年十一月千歳座。
前太平記擬玉殿（將門合戰）。同二十三年四月市村座。
聖世德大赦恩典（青木彌太郎）。同年同月同座。
黄金花隆覺朝臭（朝夷巡島記）。同二十四年四月同座。
金平洪問答（長兵衛喧嘩）。同二十四年六月歌舞伎座
伏見街地震夜話（蛇の目鮨清藏）。同年十月市村座。
◎復讐談高田馬場（中山安兵衛）。同年十一月歌舞伎座。
新曲吉野琴（紀貫之）。同廿五年一月歌舞伎新報所載
◎鹽原多助一代記（鹽原多助）。同年二月歌舞伎座。
怪異談牡丹燈籠（牡丹燈籠）。同年七月同座。
菊　慈　童（長唄所作）。同年同月同座。
仕立卸薩摩上布（菊野殺し）。同年九月同座。
賤嶽眞書太閤記（七本鎗）。同年十一月市村座。
安政三組盃（都築藤太郎）。同二十六年一月歌舞伎座
榛名梅香團扇繪（安中草三）。同年七月同座。
新門辰巳小金井（慶應水滸傳）。同二十七年七月市村座。
鈴音眞似操（ダアク人形所作）。同年同月同座。
粟田口鑑定折紙（粟田口）。同二十八年一月新富座。
紫紐僞神道（神道德次郎）。同年九月歌舞伎新報所載
○指物師名次長次（名人長次）。同年十月新富座。

神代杉常盤奇聞（天狗松若）。同二十九年七月市村座。
池端堀根意趣斬（高岡幸十郎）。同年八月歌舞伎新報所載
捨小舟萬大法運（捨小舟）。同三十一年一月歌舞伎座。
○羽衣（所作事）。同年同月同座。
赤格子血汐若越（三都勇劔傳）。同年二月明治座。
江戸育御祭佐七（御祭佐七）。同年五月歌舞伎座。
鏡池操月影（江島屋騒動）。同三十二年十二月同座。
成田道初音籔原（籔原検校）。同三十三年一月同座。
○闇梅百物語（所作事）。同年四月同座。
和様論難波戯記（喰はんか船）。同年三月明治座。
屋舎露玉菊（玉菊燈籠）。同年七月春木座。
清正誠忠録（加藤[illegible]饅頭）。同三十七年三月明治座。
葉武士（ハムレツト）。同三十六年起稿せしも上場せず。
龍女（玉取り）。同四十三年十月國華座。
新清水花御所染（女清玄）。同十九年四月市村座。
娘鉢の木（お秋の傳）。同十一年三月同座。
恵方成田暦萬吉（不動萬吉）。同三十年二月同座。
伽話舌切雀。同三十一年七月歌舞伎座。
粂仙人。同二十九年七月市村座。
殺生石（玉藻前、能和尚問答）。同三十五年九月同座。

右のうち、○印を附したのは、本巻『三世河竹新七集』に輯收したものである。輯録順序に從つて、左にその簡單なる解題を述べよう。

籠釣瓶花街醉醒

此作の初演は明治二十一年五月、千歳座（明治座の前身）に於てゞ、その時の主なる役割は次のやうであつた。
先代市川左團次（佐野次郎兵衛、高松安之進、佐野次郎左衛門）、中村福助事現中村歌右衛門（兵庫屋の八つ橋）、市川權十郎（都築武助）、澤村源之助（立花屋女房おきつ、勘兵衛娘おしづ）、先代市川團右衛門（庄屋德右衛門）、市川小團次　次郎兵衛女房おせい、下男治六、繁山榮之丞）、中村壽三郎（佐野勘兵衛）、市川升若（高松の妻おとし、兵庫屋の九重）、片岡市藏（腹太彌七、釣鐘權八）、荻野八重桐（番頭新造七重咲）、坂東彦十郎（旅僧空月、あき盲文次、立花屋長兵衛）等。
講談に材料を仰いだものであるが、新七の作中では出色のものと稱せられてもゐるし、舞臺に於ける効果も著しく、今日に至つても尚屢々上演されてゐる。最も好評であつたのは、左團次の次郎左衛門で、大菊石の顔のこしらえも、全く在來の型を破つたものと稱された。

復讐談高田馬場

忠臣義士銘々傳の中でも人氣男である、堀部（中山）安兵衛

の高田馬場に於ける仇討を、一幕三場の中幕にまとめたもの。初演は明治二十四年十一月の歌舞伎座で、『太閤軍記朝鮮巻』の中幕として演ぜられた。主なる役割は次の如くであつた。

市川権十郎（浪人中山安兵衛）、市川八百蔵事現市川中車（堀部彌兵衛）、市川濱之助事故市川段四郎（荒川無敵齋）、先代坂東秀調（堀部の妻お秋）、市川女寅事故市川門之助（堀部娘お妙）、市川新蔵（中山若徒惣平）等。

此作は手頃な、分かりのよい中幕物である所から、舞臺上に屢々複演されてゐる。

鹽原多助一代記（しほはらたすけいちだいき）

三遊亭圓朝の噺を最も多く脚色したのは、新七だといつてよからう。而してこの『鹽原多助』と『牡丹燈籠』とはその双璧だと言つていゝ。

初演は明治二十五年一月の歌舞伎座であつた。主なる役割を見ると左の如くである、

五世尾上菊五郎（鹽原多助、道連小平）、市川八百蔵事現市川中車（浪人鹽原角右衛門、原丹次）、先代坂東秀調（角右衛門女房おせい、後家おかめ）、尾上松助（百姓鹽原角右衛門、吊紗珍貫ハ又藷おかく）、先代尾上菊四郎（岸田右門、同心安井岡助、龍立仁助）、尾上菊之助（原丹三郎）、尾上榮三郎事現尾上梅幸（鹽原娘おえい、前野屋娘お花）、坂東彦十郎（分家太左衛門）、等。

此の興行は大好評で大當りを取り、二十五日の豫定の外三十三日間打通したといふ。五代目菊五郎の多助が馬の別れに見物の涙を絞らせ、上州訛りの田舎言葉を圓朝もどきに巧みにあやつッたなど、其他各優とも評判がよかつた。當代六世菊五郎丈も屢々多助に扮してゐる。

指物師名人長次（さしものしめいじんちやうじ）

此作は「語り」の中に明白に説明せられてゐるが如くに、やはり圓朝が「作せしまゝでまだ辯ぜぬ人情噺」を脚色したものである。幕末の餘白に一寸記してもおいたが、モーパッサンの小説から圓朝が飜作したまゝになつてゐたものを劇化したのであつた。鹽原多助或は牡丹燈籠から見ると、原作が既に一籌を輸して居るらしいが、脚色されたものも、前二者に及ばざること遠いと思ふ。

初演は明治二十八年十月の新富座で、其の時の主なる役割は次の如くであつた。

五世尾上菊五郎（指物師長次）、中村福助事現中村歌右衛門（坂倉屋の娘おしま）、尾上菊之助（指物師恒太郎）、尾上榮三郎事現尾上梅幸（指物師娘おきさ）、片岡市蔵（指物師清兵衛）、尾上菊三郎（坂倉屋の下女おいと）、中村歌

太郎（茂二作女房およし）、尾上梅助（箱清の弟子久次）、尾上松助（坂倉屋助七、長次弟分兼松）、坂東家橘（坂倉屋助蔵）、尾上羅十郎（美濃屋茂二作）等。

羽衣。百物語。西遊記

此の三種は新七の筆になる所作事、淨瑠璃の作中最も代表的なものであり、又最も廣く行はれてゐるものである。『羽衣』は常磐津、長唄囃子連中による所作事で、新古演劇十種の內として新作されたもの。初演は明治三十一年一月の歌舞伎座であつて、五世尾上菊五郎（天津乙女）、尾上松助（漁夫三保次）、片岡市藏（漁夫磯松）等によつて演ぜられた。

『闇梅百物語』は明治三十三年一月歌舞伎座に初めて演ぜられたもので、最後に附せられた『小坂部姬』の件は新古演劇十種の一として銘記されたもの。常磐津、淸元の淨瑠璃である。上演當時の作者の談として傳へられる所によると、『――最初寺島（五世菊五郎）はダークの操りがしたいといふのでしたが、道具がひどく面倒なので見合せる事となり、今度は最初が一本足、例の多見藏などがやつた傘の化物です、次が雪女郞でこれは福助にやらせる積り、次が是も寺島の註文で骸骨の踊り、これを引拔いて讀賣になる趣向ですが、此讀賣は派手な拵へにして親子にやらせます。終りが小坂部姬です、是は十二單衣の化物で、尾上松緑などが勤めたのが錦繪にありまして、尾上家のものになつて居ります。宮本無三四が小坂部姬に欺されるといふ事は講釋でもやりますが、その無三四は今度は八百藏にさせます云々』とある。

此時の役割は五世尾上菊五郎（傘一本足の怪、洒落人の骸骨、讀賣菊八、小坂部姬の怪）、中村福助事現中村歌右衛門（雪女郞）、市川八百藏事市川中車（宮本無三四）、尾上丑之助事現六世菊五郎（讀賣の伜丑六、小骸骨）等であつた。

『通俗西遊記』は明治十一年九月市村座に初めて上演された竹本、淸元に長唄囃子連中を加へた淨瑠璃所作事であつた。此時の役割は市川權十郎（大聖孫悟空）、先代市川壽三郞（僧沙悟淨）、先代中村時藏（三藏法師）、先代關三十郎（猪八戒）、市川女寅（西梁國女王實は蜘の怪）等であつた。

竹柴其水に就いて

默阿彌第二の高弟を新七とすれば、竹柴其水がその第三の高弟であつたことは、前述の通りである。其水は、弘化四年十月、京橋本材木町六丁目の材木商の家に生れ、幼名を鏡之助と呼んだといふ。始め先代守田勘彌の手に附いて

守田座に出勤し、熨斗進三と稱したが、後默阿彌（當時二世河竹新七）の門に入り、明治六年四月からその作者名たる竹柴進三が番附に見え始める。立作者の地位に上つたのは明治十七年で、座は新富座であつた。同二十年に默阿彌の俳名其水を讓られ竹柴其水と稱した。其後明治座にあつて先代左團次の爲に盛んに新作を發表したが、明治四十年の頃引退し、大正十二年二月七日七十七歳を以て歿した。

其水は本名を岡田新藏と呼び、默阿彌歿後には新七等と共に師家の爲によく力を致した事によつて、斯道に知られてゐる。作風は末流の狂言作者としては最も進取的であつたと稱され、時代の流行に先んぜんとした傾向がある。新七が講談等に材を採つて脚色するに對して、其水は隨筆史傳等によつて創作せんとの意圖に於て勝つてゐたとも言へる。その主なる著作目錄は左の如くであつた。

千石船帆影白濱（仙石騷動）。明治二十一年六月新富座。
土佐半紙初荷船（土佐萬次郎）。同年九月同座。
那智瀧誓言文覺（文覺勸進帳）。同廿二年三月中村座。
富山城雪解清水（佐々成政）。同廿三年三月新富座。
◎神明惠和合取組（め組の喧嘩）。同年同月同座。
◎皐月晴上野朝風（上野戰爭）。同年五月同座。
◎一刀流成田掛額（松田の仇討）。同廿五年十一月市村座。
石橋山源氏旗揚（賴朝伏木隱れ。）同廿六年十一月明治座
◎遠山櫻天保日記（遠山左衞門之丞傳）。同年同月同座。
伊達競曉好義分（伊達騷動）。同廿七年一月同座。
東花園四郎坊主（市川團四郎の傳）。同年五月同座。
甲州流武田幕張（武田の落城）。同年五月同座。
纐纈鞘子絲色糸（纐纈神社由來）。同年同月同座。
◎會津産明治組重（會津戰爭より日清戰爭まで）。同年十月同座。
日本晴朝鮮奇話（毛谷村六助の奉公仕官）。同年同月同座。
身延詣甲斐碑轉（俠客甲斐碑轉）。同廿八年一月同座。
三羽烏山城名所（安田作兵衞）。同年三月同座。
新日本南港大漁　同年同月同座。
男一匹夜櫻（夢の市郎兵衞）。同年同月同座。
華迎會各國旗風（日清戰爭凱旋）。同年六月同座。
武神惠雨乙小町（雨乙小町）。同二十九年四月同座。
金紋光箱拳鎗持（鎗持勘助）。同三十年十月同座。
箱根詣工事指物（車善七由世遣）。同三十一年一月同座。
奨、勸、門、破　同年同月同座。
名高秋田義民傳（義民傳之助の名譽）。同年六月同座。
◎三人片輪　同三十一年十月同座。
三十年祭上野館　同年同月同座。
山田長政暹羅　同三十二年一月同座。
鎌坊六郎（布引瀧より龍宮まで）。同年同月同座。

名慕薩摩踊（薩摩棒打）。明治卅二年六月明治座。
夢物語蘆碑（増訂高野長英）。明治卅二年九月同座。
櫓太鼓出世取組（横綱谷風）。同三十三年一月同座。
忠孝義筑紫仇討（筑紫市兵衞）。同年三月同座。
花盛隅田賑（玄猪の賣出し）。同年四月同座。
鎌倉山蒲櫻再咲（範頼一代記）。同年九月同座。
伊豆産變應奇聞（佃島譚）。同年四月同座。
蒲冠者後日聞書（範頼切腹）。同三十四年一月同座。
祖先光輝鬢鉈切（侠客横須賀蒲平の傳）。同年同月同座。
福　之　神　同年同月同座。
染模樣五枚揃衣（五人男）。同年三月同座。
和田合戰成忠鎌（朝比奈切通譚）。同年三月同座。
水澤瀉噂着唐犬（唐犬權兵衞）。同年十月同座。
濱松城記錄聞書（半僧坊靈驗記）。同卅五年一月同座。
西東戀取組（力士小柳不知火仇討）。同年三月同座。
日本晴露領雪解（近藤重藏）。同年六月同座。
吉野山狐忠信（源九郎狐）。同年同月同座。
天保山眺望大鹽（大鹽平八郎）。同三十六年四月同座。
開帳淺草蓮（とんだりはねたり）。同年同月同座。
秋色櫻上野早咲　同三十七年五月同座。
僞鍍金蓮華組上（蓮華往生）。同年十一月同座。
染模樣御好織分（十二人男）。同四十年六月同座。

◎墨塗女　同年同月同座。
渡妻船島根一蝶（英一蝶）。同四十年作。
鼠宿殘猫塚（怪猫傳）。同年作。
西東楓色時（十八人男）。同四十一年九月歌舞伎座。
享和春兩國紀文（お妻八郎兵衞）。同四十三年一月明治座
三途川地獄新街　同四十年三月同座。
七字鐘身延雪夜（時代世話の日蓮記）。歌舞伎新報所載。
訂正御國入源九郎狐（三人生醉）。大正元年作。
相馬の旗揚　大正元年作。
千貫樋三島お仙　大正二年作。
新苅萱露母子草　同年作。
神田櫻ケ池（お玉ケ池の故事）。同三年七月作。
百組出世鳶（鳶の者出世鑑）。同四年三月市村座。
元祿薩摩侍（義士討入）。同年十月明治座。
鐘曳鎌倉權五郎　同年十一月新富座。
滑稽人魚劇　同五年八月作。

右の内◎印を附したのが、本巻に輯錄せる分である。次に輯錄順に簡單な解説をしておかう。

神明惠和合取組

一般には『め組の喧嘩』と呼ばれてゐる作で、初演は明治二十三年三月の新富座興行であつた。これは文化二年の

二月芝神明の境內にあつた角力と鳶の者との喧嘩を題材としたもの。同じ題材を劇化した芝居は、これより前にも二三あつたが、この作が最も實說に近く、又人名其他も略實際通りにしたものだと言つてよい。

初演當時の主なる配役は左の如くであつた。

五世尾上菊五郎（め組の辰五郎）、先代市川左團次（焚出し喜三郎、九龍山浪右衛門）、市川小團次（鳶の者善太郎）、先代尾上榮雀（喜三郎女房おいの）、坂東家橘（鳶柴井町の藤松）、坂東彥十郎（鳶源助町の金八）、尾上松助（鳶露月町の龜右衛門）、先代中村芝翫（力士四車大八）等。

いきとかいなせとかかきほひとかでは當時第一人者であつた菊五郎が、ピタリと役柄にはまつた鳶の者辰五郎に扮したので、非常な好評を博した。師默阿彌もまだ健在であつたから、二幕目の焚出し喜三郎の內と辰五郎の內とを助筆した故か、此の幕は一篇の眼目でもあり、特に好評でもあつた。

（言ふまでもなく、此の頃はまだ一座の主任狂言作者たる立作者が筋書を作り、一二有力な作者にも助筆せしめた時代である。默阿彌の作中には、腹案を授けて三世新七或は其水に執筆せしめた部分がある如く、新七又は其水の作に對しても、時として助筆してゐるのである。新七の「籠釣瓶」、「鹽原多助」、其水の「め組」、「上野戰爭」等の中にはそれが一幕或は二幕程づゝあるのである。周知のことではあるが序ながらこの事を附記しておく。）

三人片輪（さんにんかたわ）

狂言に取材した常磐津の淨瑠璃であつて、所作事としては、『墨塗女』と共に屢舞臺上に繰返される。初演は明治三十一年十月の明治座で、

先代市川壽美藏（船岡主馬）、先代市川左團次（ゐざり太郎助）、市川小團次（盲目半之丞）、澤村源之助（啞女まきの）、先代市川米藏（侍女松尾）、澤村訥升事現澤村宗十郎（侍女貫紫）、市川しやち丸（太郎冠者）といふ役割であつた。

皐月晴上野朝風（さつきばれうへののあさかぜ）

明治維新の上野戰爭を書いた歌舞伎劇中出色の作と言つてよいもの。明治二十三年五月新富座に書きおろされた。

其時の主なる役割は、

先代尾上菊五郎（天野八郎、金魚屋淸八實は天野八郎、越前屋佐兵衛）、先代市川左團次（長崎悅太郎、酒井宰輔、執當自王院、天野賢治郎）、先代中村芝翫（高木原源吉、大川端の長次郎實は高木原源吉）、市川小團次（後藤鐵次郎、非人ちようだら勝次）、澤村源之助（金魚屋の女房おわ

か、川宮の姉娘米子)、中村福助事現中村歌右衛門（上野の僧光仁)、坂東家橘（秋本唐之助、銀行副頭取境實)、尾上松助（天野半左衛門、金魚屋九郎兵衛)、屋上幸藏（早ぶさ晋吉、金魚屋徳松)、先代市川荒次郎（三助、會津領の晋吉）等。

物事に丹念綿密な其水のことであるから、上野戰爭に關する遺聞逸事を訊し、寫實的に書いた所に見るべきものがある。金魚屋の場だの、天野八郎宅の場などは好評を博した場面であつた。

松名高紅葉京橋（まつなだかもみぢのきやうばし）

此作後には『一刀流成田掛額』と改題されたが、明治二十五年十一月市村座初演の時は前記の如くであつた。初演當時の主なる配役は次の如くであつた。

先代市川左團次(梅田雅樂之助)、市川權十郎(櫻井武雄)、坂東家橘（水主同心宮新太郎、茂々之井舜藏)、先代市川壽美藏（鳶の頭分銅銀次)、市川小團次（下男金六)、市川壽三郎（久喜萬字屋藤吉)、先代市川荒次郎（大工赤身の伊太郎)、市川米藏（久喜萬字の娘おかよ)、市川升若（松田の女房おきみ）等。

此作も今日時々復演されるものであるが、其水の作風をよく代表してゐるやうに思ふ。銀座に松田といふ平民的で而も名の通つたよい料理屋が、二十年程前まであつた。そこにあつた仇討の實説を潤色したものであるが、その中に人目をおどろかすやうな將軍の御座船を作り、大道具による舞臺裝置で觀客の好奇心をそゝつた點などは注目すべきであらう。

遠山櫻天保日記（とほやまざくらてんぽうにつき）

大正十二年の震災で燒亡した明治座が開業式を行つたのは、明治二十六年十一月のことであつたが、その時の二番狂言として稿下されたのが、この『遠山櫻天保日記』即ち遠山政談であつた。旗本の道樂息子で後江戸町奉行となり、名奉行の譽れを取つた遠山左衛門丞の事蹟を取扱つたもので、其水の作中では、最も傑れた世話狂言であらうと思ふ。

この時の主なる役割を擧げて見ると、次の如くになる。

先代市川左團次（遠山金四郎、あんま富庵實ハ下總無宿生田角太夫)、市川團十郎（成田山不動明王)、市川權十郎（藤村浦太實ハ佐島天學)、市川小團次（圓通寮の祐天、祐天小僧小吉)、先代市川猿之助（須之崎政五郎)、市川荒次郎（尾花屋番頭滿六、百姓甚五兵衛)、市川升若（金四郎妻おけい、角太夫妻お元)、中村福助事現中村歌右衛門（藝妓おわか）等であつた。

遠山金四郎と生田角太夫といふ、異なつた二つの性格を

同時に演出する所に俳優としてアムビシヤスなものがある。これはこの作に於ける先代左團次の養父小團次が、村井長庵と久八とを演じ、正直淸兵衛と毒婦お瀧とを演じたやうなもので、歌舞伎劇のマンネリズムでもある。別に珍らしいことではないが、この作の初演に於ける先代左團次の二た役も成功したものであつた。後年に至つても屢舞臺上に繰返されるのも偶然ではない。

墨塗女

明治四十年三月、明治座に初めて上演された常磐津の新曲である。役割は、市川小團次（福德萬之丞）、市川團升（太郎冠者）、市川壽美藏（獨娘花野）、市川銑丸（侍女つくし）、であつた。滑稽淨瑠璃であつて、今日も尚舞臺の上に繰返される。

會津產明治組重

この作は、明治二十七年十月明治座に上演せられた通し狂言の名題で、會津戰爭と日淸戰爭とを書いた七幕ものなのである。本卷に收めたのは、その最後の二幕だけである。二十七、八年の日淸戰役を當て込んだものとはいひながら作者が實地の見聞を土臺にした寫實劇で、初演以來舞臺には殆ど出ないものであるが、其水篇には是非收めるやうにと、當時の舞臺を知つてゐる先輩の注意によつて、特にこの二タ幕だけを採つたのである。役割は次のやうになつてゐた。

先代市川左團次（支那人道昌惠、警部人見明）、市川八百藏（修行者實は支那人鄭正漢）、市川小團次（世話役勝五郎）、先代市川壽美藏（差配人大ツ腹の長兵衛）、先代坂東秀調（道昌惠女房おぎん）等であつた。

本來「入船町貸長家の場」のみでよいのであるが、頁數の關係上、背景となつてゐる日淸戰爭の部分まで添へたのである。當時の劇評によると、「支那人道昌惠は左團次丈平素の舞臺振りとは打て替り、ぼんやりと間のぬけたる顏にて出て來る工合、拵へも仕打も下等支那人を寫し得て妙なり、セリフも支那人の日本詞で、漸く逭日本に護送さるゝかとノロ〳〵調子で横議する所上出來なり、之れが際物で無くば大杯觴や慶安太平記同樣優の專賣物ともなつて、將來歡迎さるべきものを惜しい事なり、花道へ掛る時車の轅をつかまへて屈んではひる所は惣吾の筵の趣向と同一なり云々」とある。左團次の演出もよかつたであらうが、作者の寫實劇に於ける手腕も、預かつて大きに力あつたことを想はねばなるまい。

編輯校訂
責任
河竹繁俊
鈴木倪

日本戯曲全集・第三十二卷

河竹新七及竹柴其人集・第十三回配本

著作權者檢印

昭和四年七月廿五日印刷
昭和四年七月廿八日發行　（非賣品）

著作代表者　竹柴金作

發行者　和田利彦

印刷者　高見蜻[illegible]

製本者　高崎鐵五郎

東京市日本橋區通三丁目八番地

發行所　春陽堂

電話日本橋　五一・六四一　三七八八
振替東京　一六一七

（小石川區諏訪町・常磐印刷所）

